

小泉八雲全集

第十卷

東京
第一書房



小泉八雲先生記念碑（帝國圖書館前庭）

文學論

譯者

落合貞三郎
金子健二
土井林吉
大谷正信
稻垣巖
田部隆次

小泉八雲全集第十卷目次

文學論

文學論

西洋文學研究の難關

私は日本に於ける英文學の研究者、乃至殆ど何れの西洋文學にまれ研究せんとする日本の學生が、遭遇せねばならない最大困難に就いて、述べようと思ふ。從來この問題に關して、論じ得て妥當を得たものが無いやうに思はれる。外國教師がこれを說くに躊躇するのは無理もない——何故といへば、單に西洋の見地に立つて說明せんとすれば、理解されさうにもないし、また日本の立脚地から論ぜんとすれば、間違ひをしたり、飛んでもないことを言つたりするに定つてゐるからである。正當な說明は、日本人の敎授であつて、西洋の社會狀態に共鳴する位、西洋の社會狀態に通曉せる人にして、初めてなし得るだらう。が、このやうな日本人の敎授は、得難いだらうと思はれる。西洋の生活に共鳴すればする程、それと反比例に、學生に向つてその共鳴を傳へることが出來なくなるからだ。這般の困難たる、實に多大なもので、半ば了解するまでにも、私は多年を要した。今日それが

除去されるといふことは、全然不可能だ。が、假令不完全乍らも、それを記述すれば、幾分裨益する處があらう。間違ひや、脱線は覺悟の上で、一つ試みて見よう。この頃、一人の最も利發な學生と談話した折、彼が西洋の生活に於ける、最も普通な數個の事實を全然理解し得ないと告白したので、是非私は試みようといふ氣になつたのである。その事實と云ふのは、西洋の社會を反映せる西洋文學に於て、直接又は間接に、婦人の位置に關係した一切の事實である。

二三の事實を、出來るだけ極めて率直平易な言葉で述べて、劈頭直ちに論點を明かにして見よう。諸君は男女間の愛情の殆ど宗教的獻身とも申すべきものが、最高道德の地位を占めてゐる國を想像せねばならない。男の最高の義務は、父へ對してではなく、妻へ對しての義務だ。而して若し或る世間的羈絆が、夫婦の關係に障害を及ぼす場合は、その女のため一切の世間的羈絆を棄てて顧みない。妻は子供がある場合こそ、子供へ對しての任務が第一でもあらう。また左樣なくてはならぬ。が、子供のない場合は、夫が妻に取つての神であり、王である。その國では、夫婦が兩親を同じ家に住居させて置くのは、不自然又は異樣なことに思はれるだらう。これはすべて諸君は知つて居る。が、これは諸君に、更に理解し難い他の事實、殊に婦人といふ抽象的な觀念が、個人の行動の上に及ぼすと共に、

一般社會に及ぼす影響のことを説明しない。男子が婦人に對する熱愛は、決して單に夫が妻に對する熱愛のみを意味しない。それは實際こんな意味だ――卽ち一切の男子は、確信の上からも、また輿論の上からも、單に婦人であるといふ理由で、一切の婦人を尊重せねばならないといふことだ。それは、智力に於ても、體力に於ても、男が女を自分よりも優れたものと、考へて居るらしいと云ふのではない。女といふものは、男の助力を受けるのが當然であり、且つ受ける必要のある一種特有のものとして、考へねばならないといふのだ。危險に際しては、女が先づ救はれねばならない。娛樂の場合には、女は最上の座席を與へられねばならない。困難に臨んでは、共同の苦痛の女の方の負擔を、男が出來るだけ進んで引受けてやらねばならない。これは親切を見せたのを、難有がつて貰はうとの考へて、するのではない。危險に迫つた女を助けてやる男は、それがため、その女に對して、何等かの要求權があるものと思はれてゐない。その男は一個人の彼女へ對してでなく、女性全般へ對して義務を盡したまでだ。それて我々は、西洋諸國に於ては、支配權を除いて、一切の事に於て、第一の地位が婦人に與へられて居るといふ事と、而してそれが殆ど宗敎的に與へられて居るといふ一般的事實に到達したのである。

婦人は一個の宗敎であるのか。まあ、諸君が若し米國へ行くと、多分自身で判斷する機

會があるだらう。昔、高僧貴族にのみ拂はれたと全然同様の尊敬を以て、男が女を遇してゐるのを、米國では見受けるでせう。到る處で婦人は會釋を受けたり、最上の座席へ案内されたりしてゐる。何處でも優れたものとして遇せられてゐる。苟も人間に對してでも、偶像へ對してでも、畏敬、忠誠、あらゆる犧牲が捧げらるる場合には、何うも禮拜といふことを考へるやうになる。而してそれは禮拜なのだ。私が斯う云ふのを西洋人が聞くと、當人が哲學者ならばいざ知らず、幾分この說を和らげてもらひたく思ふだらう。が、私は諸君に事柄が最もよく飮み込めるやう、表現しようとしてゐるのだ。だから、英文學を修める學生が、理解せねばならない最要件は、西洋諸國に於ては、婦人は一種の儀式であり、宗教であるといふことだと、私は云ひたい。それとも、更に率直な言葉を諸君が好むならば、婦人は一個の神だと、私は云はう。

婦人といふ抽象的思想について述べることは、これだけにしておく。多分諸君はこれを特別奇異に思はないだらう。この考へは東洋思想に取つて、まるで縁遠いものでもないし、それから印度には女性汎神說の廣大な學派がある。勿論西洋の考へも唯だ浪曼的意義に於ては、女性汎神說であるが、東洋思想はそれを更に包容的なものにする役に立つのだ。聖母と造化神の思想は、さまざまの形式をなしてゐるのが、研究が出來るだらう。私が今述

べてゐるのは、哲學的概念に就いてよりも、寧ろ情操、感情に就いてである。
神聖といふ思想とか、情操とかが、抽象的の婦人に附隨してゐるならば、具體的の婦人、即ち個々の女に關しては如何。婦人は個人的に神と考へられてゐるか、と諸君は質問を發するであらう。それは神といふ言葉の定義次第だ。つぎの定義は論點を包括するだらうと思ふ。『神は人間よりも優れた實體で、人間を助けたり、害したりする力があつて、犧牲と祈禱で宥め得るものである』さて、この定義に從へば、西洋諸國に於ける、女に對する男の態度は、一種の禮拜と名づけても、頗る當を得てゐるだらう。上流社會に於て、それから、中流社會に於ても、婦人に對しては、非常に尊敬が强要されてゐる。男子は婦人の前では、低頭平身する。あらゆる犧牲を捧げて、歡心を得ようとする。婦人の好意と援助を仰ぎ求める。この犧牲が、抹香を焚くとか、寺院への寄進物とかいふ形式でなくても、それは何うでもよろしいのだ。また祈禱が教會で唱へるのと、種類を異にしてゐるといふことも、關係はない。そこには犧牲と禮拜が存して居るのだ。だから、世の中で成功を欲する男は、婦人の歡心を買ひうる腕前がなくてはならないといふ事ほど、有りふれた諺、知れ渡つた眞理はない。どんな社會へ入る靑年でも、皆これを心得て居る。これは靑年が第一に知るべき要訓の一つである。だから、西洋に於て女に對する男の態度は、神に對する

態度に酷似すると、私が云つたからとて、左様正鵠を失してゐないだらう。が、諸君は直ちに答へて斯う云ふだらう――若しそんなに婦人が尊敬を受けて居るならば、下等社會の男子が妻を打つたり、虐待したりするのは、何うしたものですかと。それは、伊太利や西班牙の水夫達が、祈願の叶はなかつた場合に、祈願をかけた聖徒や聖處女の像を打つたり、侮辱したりするのと、同じ譯だと、私は應答せねばならない。眞情から像を拜んでゐて、而かも腹が立つと、それに復仇してみたいといふのは、全然有りうることだ。兩方の感情は矛盾するものではない。上流社會では宗教であつても、下等社會では迷信に過ぎないこともあるし、また諸般の迷信に於ては、奇異に矛盾したことが、兩々相竝んで存することもある。實際西洋の勞働者や百姓は、自分の妻又は隣人の妻のことを考へるのに、上流の男子ほど、敬意を以てしない。しかし、諸君が彼等と話をしてみると、一種尊敬の念の存することが、わかるでせう。少くとも彼等の最も眞面目な氣分の折には、尊敬の念が存してゐる。

さて、私が云つたことには、少々誇張した處があるが、それは唯だ私が一つの眞理を現はさんがために、幾分か狹隘な方法を以てしたからだ。西洋全般に亘つて、婦人に關しては、假令階級と教養に隨つて差違あるにしても、全然宗教的情操のやうな、敬虔な情操が

存在して居るといふ考へを、私は諸君に與へたく切望してゐる。これは眞實だ。これを理會しないのは、取りも直さず、西洋文學を理會しないことになる。

それは何うして起こつたのか。幾多の原因によるので、餘程古くて何もわからない原因もある。此感情は希臘羅馬の文化のものでなく、古代北方民族の生活に附隨してゐたもので、彼等は後に世界に發展し、到る處に彼等の思想を植ゑたのである。最古のスカンディネーヴィヤ文學では、今日の英人が婦人を考へたり、待遇したりするのと、餘程同じやうに、北方の人が婦人を考へたり、待遇してゐるのを諸君は見るでせう。ニャール物語のやうな古い北方史譚で、婦人の力が何んなものであつたかを、諸君は知るでせう。が、かゝる感情の起原を充分に知るためには、文字に書かれた文學よりも更に遠く溯らねばならない。女は母、卽ち人間の創造者だから、女は半ば神聖だといふ思想があつたものらしい。それから北方民族の間では、女に超自然的な力があるものと認めてゐたことも、わかつてゐる。しかし、この北方的根柢の上へ、浪曼的且つ藝術的な、非常に複雜なる構造が建てられたのである。基督敎に於ける處女マリアの崇拜は、北方の信仰と調和した。中世騎士道の感情は、これを助けた。それから文藝復興期の藝術的復活が來て、古代希臘の神々の美と、女人神聖の希臘傳說とを新たに尊敬するに至つたので、これがまた婦人に對する古

代の感情に色彩を與へ、光輝を添へることになつた。また文學、詩歌、美術が、その後この感情を養育發展させた效果のことを考へて見なさい。西洋詩歌の何んなに多量が、戀愛の詩であり、西洋小說の何んなに大部分が、戀愛物語であるかを考へて御覽なさい。

無論、前述のことは、單に眞相を漠然と暗示しただけである。實際私の目的は、この感情の發達史を喋々して、諸君を煩はさうといふのでは決してない。ただこの感情が文學に於て、いかなる意義を有するかを、諸君に考へて戴きたいだけである。私は諸君に對して、この感情に共鳴するやう求めてゐるのではない。しかし、若し諸君が共鳴しうるならば、西洋の書物の中で、さもなくば、朦朧奇異に了はるべき幾多の事柄を、諸君は理解することとなるでせう。私は諸君が共鳴し得ると、期待しては居ない。が、この感情が言語及び文學に對する關係を諸君が理會するといふ事は、絕對的必要である。だから諸君はこの感情を一種の宗教として考へねばならないと、私は諸君に告げねばならぬ。それは世俗的、社交的、藝術的宗教で、何等國民的宗教と混同してはいけない。これは一種の民族感情、又は民族信仰だ。これは何等の官能的な考へから發したのではなく、ある極めて古い迷信的な考へから起つたのだ。大抵一切最高の感情、信仰、藝術は、これと等しく賤しい土地に、その萌芽を發したのである。

最高の藝術に就て

今回の短い講義に對して、上の題を設くるに當り、私は文藝と謂はないで、單に藝術といつた。その譯は、一切の藝術は、相互に關聯し、また最高の眞理の何かの形式に關聯してゐる爲めに、各自同樣の法則に從ひ、且つ同樣の原理を表現するものと、私は考へるからである。勿論特に文藝に關して述べる積りであるが、論じ得て的確ならんためには、先づ以て藝術全般に就て語らねばならない。

藝術は如何なる形式にまれ、人生を感情的に表現する意味のものだと、私は考へる。この表現は、音樂でも、繪畫でも、彫刻でも、詩でも、劇でも、又は小說でも出來る。人生を表現して眞相に徹するのが、小說の上乘なるものに於ても――假令その話の筋だけは、眞實でなくとも、或は甚だしきは、不可能なことがあつても――目的とする處である。しかし無論藝術の種類は、殆ど無數とまで云はれて居る。私が答へようとする問題は、卽ち

藝術の最高の形式は何ぞや、といふことである。

さまざまの藝術について、兎や角、喋々するまでもなく、知的生活は肉體的生活よりも、やや高尚なものを表はし、倫理的生活は更に高尚なものを表はすのだと、大抵假定し得るものと、私は考へる。簡言すれば、倫理的の美は、遙かに知的の美に勝るといふ、スペンサーの見地は、この問題の解答に對して、好個の指針たるべきである。もし道徳的の美が、美の最高形式ならば、然らば藝術の最高形式は、道徳的の美を表現するものでなくてはならない。

哲學的の見地から、かかる前提を否定する人があらうと、私は思はない。が、道徳的の美が、すべて他の美よりも、上位を占むべきであるし、また最高の藝術は、是非とも道徳的美を表現せねばならないと、述べただけでは、漠然且つ不滿足な印象を殘すことになる。如何にして、音樂、繪畫、彫刻、詩歌、小説は、道徳的美を表現しうるか。この問題に答へるのは、なかなか容易ではない。加之、或る道徳的目的のために書かれた書籍は、大祇いつも非藝術的で、思はしくないと、私は毎度諸君に告げてゐるではないか。

この困難の解決は、戀愛の經驗で、幾分暗示を得る處があるやうに思はれる。

極普通には、見逃してゐる事實だが、ある人を戀するといふことは、實際一個の道徳的

經驗である。その說は至極結構だが、惡るい人を愛したり、或は肉感と利己のために愛することが、何うして道德的經驗となり得るか、と諸君はいふかも知れない。私は答へて云はう。その感情の利己的方面は、少しも重きを置くに足らない。また愛を受ける方の人物が、善からうが、惡るからうが、又は可もなく不可もない人物であらうが、そのことも亦緊要ではないのだ。その經驗は、道德的方面に關しては、不道德な事態のために、何等影響を蒙る處はないといふのが、私の趣旨である。實際惡人を愛するのは、非常に不幸な、愚なことに相違ないけれども、それにも拘はらず、或る道德的經驗が得らるるのだ。それは健全な性質の人に取つて、無限の價値がある。詩人や哲學者で、それを語つてゐるのは寥々たるものだ。然しこの經驗に於て、最大唯一の要點はそれだ。それは何んなものかと云へば、自我放擲の衝動が、急激に起つてくることである。元來通例の人の場合では、いつも愛情に兩方面があつて、一方は利己的、他方の强いのが、自我を放擲する情である。換言すれば、ある人を眞に戀することの、最初の結果の一つは、その人のためには死んでも見よう、如何なる事でも辛抱しよう、何んな困難危險も、冒して見ようとの願が不意に起ることだ。テニスンの有名な詩句に、[譯者註一]「自我」といふ琴線が、急に消え失せることを述べてゐるのは、この間の消息だ。自己犧牲の衝動が、卽ち人を戀する場合の道德的經驗だ。

而してこの經驗は、必ずしもテニスンが述べた種類の愛情のみとは限らない。他の形式の愛情も、同樣の結果を生じ得る。强烈な信仰がさうだ。愛國心がさうだ。私がただ尋常の形式の愛情をのみ云つたのは、それが最も普遍的な經驗であり、而してそれが、愛する人の爲めに苦痛を忍び、損失を忍び、甚だしきは死をも厭はないといふ、自我を放擲した願望、卽ち道德的衝動を最もよく起し易いからである。

形態美は決して道德的靈感の最高源泉ではないけれども、單なる形態美も、かかる情緒を生ぜしめ得ることを、私は知つて居る。肉體美と道德的美の間には、可能的の關係が存して居るけれども、有漏の現世では、この關係は左程每々、實現されるものでは無いらしい。知的美は――吾々の驚嘆を促すことはあらうが――決して吾々の愛情を惹起しないと私は考へる。すべての中で最も高尙な道德的美こそ、實際無我的行爲の最上の源泉なのだ。が、それは主として超人的理想によつて、人心を感動するのであつて、人間、卽ち一個人の言行によつてすることは、極めて稀である。打明けて申せば、一個の人間に關しては、我々は高尙な形式の美を認めるよりも、劣等な方の美を遙かによく認め易い。

然し將來の藝術に關して、その有すべき價値を暗示させるものが、この事實のうちに存してゐる。ある形式の美は、人の愛情を鼓舞して、暫時無我的ならしめるものだと、假定

すれば、將來非常に高尙な種類の美が、かかる結果を生ずることを疑ふべき理由は無いと思はれる。藝術の最高形式は、戀愛の情が、氣高い心ある求婚者に起させるのと、同一の道德的結果を、觀賞者に起させるやうな藝術で、是非とも無くてはならぬと、私は云はざるを得ない。かかる藝術は、自我を擲つ甲斐あるほどの道德的美——そのために身を殺しても、美はしいほどの道德的觀念——を啓示するものであらう。かかる藝術は、或る高尙偉大なる目的の爲めには、生命、快樂、一切のものを放棄せんとする滿腔の熱望を、當然起すべきものだ。丁度無我の心が、强い愛情の眞の證據であるやうに、無我の心は、最高藝術の眞の證據たるべきものだ。玆に一つの藝術があつて、それが諸君に氣高い感じを懷かせ、欣然自己を擲つことを欲せしめ、銳意或る高尙な事業を企てしめるならば、それは最高でなくても、高尙な方の藝術に屬してゐるのだ。が、もし一個の藝術的作品が、彫刻、繪畫、詩、劇の孰れを問はず、吾々に親切な感情を起させないし、その作品を見なかつた以前よりも、吾々を更に氣高くて、道德的に一層善い人にしないならば、如何に巧妙に出來てゐても、その作品は、最高藝術の種類に屬しないものと、私は云はねばならない。

斯くいふのは、毫も希臘彫刻、伊太利繪畫のやうな藝術をけなす考へては無い——決してさうでは無い。偉大な彫刻繪畫の印象は、偉大な音樂の印象のやうに、吾々をして同胞

に對しては一層親切な、行動に於ては一層無私な[譯者註二]、憧憬に於ては一層崇高な感じを有たせるものである。藝術がかかる效果を奏しない場合は、多くは人の性質に缺陷があるからであつて、藝術がわるいのではない。が、在來の何れの藝術も、出來る限り最高のものだと、云はれ得るとは思はれない。最上至高のものは、私の考へでは、物質的理想でなく、倫理的理想を取扱つて、且つその效果は、純然たる道德的熱誠であるものたるべきことと思ふ。彫刻、繪畫、音樂――これらの藝術は、決して私が考へてゐる意味に於ける、最高藝術たることを企及し得ないと、私は思ふ。が、劇、詩、偉大な物語又は小說、換言せば、大文學こそは、最高藝術たることを企及し得るもので、いつか將來に於ては、多分さやうに試みることとなるだらう。

譯者註一　「ロックスリー・ホール」と題する詩の中にある左の句を指す。

「戀愛」は　人生」の竪琴をとり上げて、
いとも强く、あらゆる絃線を彈じぬ。
わけても、「自我」の絃線を彈じたれば、
妙なる音色に顫ひつゝ、そは消え失せにけり。

譯者註二　『一層無私な感じを有たせる』――無我境地へ人の心を引上げるか、否かが最高藝術の試金石

と說いてある處は漱石先生の「則天去私」の消息に似通つてゐる。また立派な藝術が人類愛の感化を及ぼす點から云へば、ヘルン先生の藝術を一貫して「同胞に對して一層親切な感じを有たせる」のでないものは無いことを、先生の讀者は感ずるであらう——西印度土人の境遇にせよ、日本の百姓、車夫、乞食の生活にせよ、あらゆる描寫のページに。

文體上より見たる浪漫的及び古典的文學

この諸講演を續けるに際して、諸君は私がたびたび、浪漫的及び古典的といふ言葉を——詩又は散文について、表現又は意義について——使用するのを、見受けるでせう。それて是等の形容詞が含んで居る性質の差異に關して、諸君が大體の見解を念頭に有し得るといふことは、幾分重要なことである。浪漫的制作とは如何なるものか——古典的制作とは如何なるものか。

是等の語について、委細の說明は、既に他の講演のうちで致したのであるし、またこの場合、詳細のことは必要でもなからう。いづれの近代の著作に關しても、古典的な作品と申せば、古代の古典的作家、卽ち希臘拉丁の大家から學び得たる、古い法則に基いて作つたものを意味するのだ、といふことを記憶すれば、十分に足りるだらう。だから、古典的制作といふことの、最も簡單な定義は斯うだらう——古代の法則、卽ち古代の修辭學に因

つて書いた散文、又は詩。而して、その逆に、浪曼的は修辭學に因らず、古代の法則に因らない一切の制作を意味すると、諸君は想像するかも知れない。が、これは唯だ一部分の眞を穿つて居るに過ぎない。何等の法則をも顧みないで作つたものは、滅多に立派な文學とは成り得ないだらう。而かも歐洲の浪曼的文學は、劇、詩、小說、それから小品文に於ても、殆ど一切に亙つて、實にその粹を包容してゐる。無論法則は遵奉されて居るのだ。テニスンは沙翁と全然同樣に浪曼的であつたのだと申せば、法則を缺ぐのが浪曼的の意味でないことを、諸君は悟るだらう。

文學上浪曼的といふことの、嚴密な定義を附する爲めには、英文學に於て、現今に至るまで、古典的と考へられてゐたものを、極めて嚴密に理解せねばなるまい。何故となれば、浪曼的作品は、一般に通用してゐる文學的慣習の墨守を脫して、正當なる新機軸を開いたものに外ならないからである。而して是等の慣習を十分に說明することは、非常に諸君に取つて、退屈な事になるでせう――修辭學上の諸形式や、それらの起原についての、餘程な講釋に涉るのである。浪曼的の立場に、つぎのやうな定義を下すのが、この論點を明かにするため、一層よい方法であらう。

もし形式が美しく、且つ正しくさへあれば、作家の欲するままに、文學的表現の如何な

る形式を選擇しても、正當であり、且つ藝術的である。

古典的の立場は、文學上の極端なる保守主義を代表してゐるので、つぎのやうな數語で述べうるだらう。

詩でも、散文でも、文學的表現について、人々は自分勝手の形式を選擇する、何等の權利をも有たない。吾々が規定する形式こそ、最上だといふことを、經驗が證明して居る。而して何事をいふにも、吾々の法則に從つて云はねばならない。若しそれらの法則に從はないならば、母國語と母國の文學に、損害を加へることとなる。而してかかる損害は、宥さるべきものではない。

英國に於て、また實際近世の歐洲を通じて、古典的情感の驍將達が演じた大失敗は、國語を一種の固定完成せる、全然發達したものと、考へたことであつた。若しある歐洲近代語が、實際完全であるならば、それとも、昔の希臘語ほどに殆ど完成してゐるならば、保守的な法則にも、幾分首肯すべき理窟はあるだらう。或る國語が、その完全の域に達すると、それからは外部の原因で、頽運に向つてくる。それで、こんな時に、衰頽阻止の手段を取るのも、尤もな次第である。が、まだ歐洲のすべての國語は、成長、發達、進化の過程に在るのだ。古典主義が勝利を占めると、是非とも、その成長を抑へるといふ結果にな

つたてあらう。古典主義者は浪曼主義者に向つて、『何か新しいことをやつて見ようと、試みてはいけない。既成のもの以上に、立派なものは出來ないのだから』と云つて居るものと、諸君は想像せねばならない。すると、浪曼主義者が、これに對して、『君は一切の進歩を止めようと欲して居る。僕はもつと立派に出來ることを知つてゐる。だから、自分流儀で、やつてみようと思ふ』と答へる。無論どこの國にも、いくら小さい國でも、歐洲でも、東洋でも、かかる文學的分派は必らず存して居る。過去の慣習を維持しようと熱中し、慣習に影響を及ぼすやうな、一切の變革を怖れてゐる保守派が、いつもあるだらう——慣習の美を認めて、それを愛し、且つどんな新しいものでも、全然それほど美しく、且つ役立つものはあるまいと、信じてゐるから。すると、青春の活氣に富んで、抑制は大嫌ひで、在來のものよりも、何かもつと立派なものを成しうるといふ、滿腔の自信を有つた浪曼的要素が、何處にもあるにきまつてゐる。妙なことには、苟も或る文學上の進歩が起るのは、ただこの相反する兩派間の爭ひからである。

　論歩を進めないうちに、『中庸の道を取れば、最も安全に行くを得べし』といふ非常に有名な拉丁の格言に反對のことを、少しばかり私に言はせて、貰ひたい。

　文學上判然異つた、二つの傾向を論ずるに當つて、學生の方針は、極端を避けて、あま

り保守に陥つたり、あまり自由に流れたりしないやうで、なくてはならないと、私がいふことゝ諸君は期待するかも知れない。が、私は斷然決してそんな勸告を與へはしない。私はこれと所見を異にして、上に引用した格言は、開闢以來の惡戲極まつた、最も有害な、愚劣も亦甚だしい格言の一つだと思ふ。而してこの世のあらゆる進步は、文學、科學、宗教、政治を問はず、ただ極端といふものゝ、援助を藉つてのみ得られたものだと確信する。が、「援助を藉つて」と、私がいふのを心にとめて下さい——だから、極端のみが目的を達するといふのではない。反抗がなくてはならぬが、保守主義も亦なくてはならない。私がこの格言を非難する譯は、單に斯うだ——卽ちそれは青年に對しては、餘程惡い勸告であるといふことだ。そんな勸告を青年に與へるのは、全力を發揮しないで、ただ半分の力量を出せ——換言せば、事業に對して、本氣になるなと、告げるやうなものだ。

經驗ある老人は、如何にして中庸の道を取るべきかを、用心とか、警戒からでなく、全く確信と知識に基いて知つてゐる。が、尋常一般の青年に取つては、自己に對して誠意で以て、中庸の道を取ることは、實際不可能だ。强い偏見、非常な愛惜、驚嘆、嫌厭を抑へることを、經驗のない青年に期待する譯に行かない。老人は大槪の問題を、さまざまの異つた方向から研究する、實地の機會を有つたのであるから、すべてそんなものを抑へるこ

とが出來る。それから又、老人は青年には出來ないほど忍耐を學んで居る。それて、苟も偉大な改革者となるものは、老年ではない。老人はあまりに用心深く、あまりに悧巧過ぎる。事物を怖がるほどに知識がなく、且つ考へる方よりは、感ずる方の深い青年の活力、勇氣、犧牲、熱情的確信によつて、改革は成されるのである。實際、偉大なる改革は、理窟ではなく、感情で以て成し遂げられるのだ。だから、青年學生に取つては、彼等の最善の感情を涵養することほど、第一の目的とすべきものはないと、私は云はねばならない。何となれば、彼等の前途に於て、冷かな推理よりも、感情が一層重要だからである。當人が最も深い興味を感ずる事柄について、その考へ方や、云ひ樣が、少々は不注意、過度、激烈であるのは、青年に取つて寧ろよい徵候である。だから、青年にして偏見もなく、强い意見もない者は、實際精神又は身體に於て、强健な人物ではないと、私は云はねばならない。あまり中庸に偏するのは、惡い徵候である。

さて、こゝに示した原則を、文學に適用してみよう。文學は敎育ある青年が、强烈な感じを有つべき問題である。青年は保守主義者、古典主義者たるべきか。自由主義者、浪曼主義者たるべきか。それはどちらにならうとも、毛頭かまはないと、私は答へねばならない。が、必らずどちらか一方の側に立たねばならない。而して、妥協の道を取るやうな、

本氣でないことをやつてはいけない。妥協的方針が、文學に對して何かを成就したことは、未だ嘗て無いし、また將來もあるまい。が、保守主義は多大の效を奏してゐる。而して自由主義は、もつと澤山の效を奏してゐる。而かも兩者は絕えず優越を相爭つたために、效を奏したのである。結局この爭鬪こそ、價値ある、眞正なる中庸の道を作るものだ。が、いかなる中庸の道も――といふのは、いくら兩派の長所を取り合せた流派でも――妥協的方針から出來てくることはあるまい。それは、比較的無爲の狀態を意味するに過ぎないから。

自分は浪曼的たるべきか、保守的たるべきか、といふ問題は、當人自らの感情で最もよく解答が出來る。この問題について、諸君はどう感ずるか。若し諸君が文學の浪曼的方面に對して、眞底から驚嘆の念を有し、眞底からその主義に信仰を持つて居るならば、その場合には、浪曼的であるのが、諸君の義務だ。若しこれに反して、諸君が古典的手法の、嚴正な美の方を、更に强く感じ、古典的法則が國民文學に有益なことを認めるならば――その場合には、出來得る限り古典的であるのが、諸君の義務だ。時日の進むうちには、廣い經驗がどちらの方向に於ても、諸君をもつと餘程寬大にするでせう。しかし最初には、どちらか一方の陣營に投ずる方が、遙かによろしい。而して諸君がどちらの味方を心から

しようと、それが文學に盡くす所以だといふ、十分の確信でやつてよいのだ。

蒸氣機關には、速力を抑へる仕掛けの部分があるのを、諸君は知つて居る——機械をあまり迅速に運轉させないためである。この調節機がなければ、蒸氣機關は忽ち粉碎して了うでせう。さて保守主義、古典主義は正しくこんなやうな役を務めて、あまり急速に變化の起らないやうにし、文學といふ機關が、支離滅裂にならないやうにしてゐる。これと同時に、單に古典主義だけでは、あまり效果を擧げ得ないであらう。前に述べた通り、古典派が長期に亙つて、優越を占めてゐるといふ事は、文學上の沈滯となるだらう。歐洲のあらゆる文學に於ても、保守主義の示した歴史は、この通りである。いつでも保守主義が最上の勢力を得てくると、文學は萎靡したり、貧弱になり始めたものだ。しかしまた一方に於て、浪曼的傾向が奔放に流れると、亦文學的頽廢に陷つてくる。初めには、浪曼的自由主義が、比較的狹隘な範圍内にのみ、發揮されてゐるけれども、やがて自由主義者の中で、比較的短氣で、不從順な輩は、以前には維持しようと思つてゐた法則まで、破つて了はうと希望する。もつと後になると、當分の間は、一切の法則を破棄する事が、風潮となり勝である。結局國民一般は、この結果に嫌惡を催し、强い反動が始まつてきて、再び古典派を最上の位に立たせる。この傾向は佛國の現代文學史で、よく示されてゐる。文學的自由

主義が極端に走つたために、反動が惹起されてゐる。英國でも亦、古典的反動が來たらんとする徴候がある。散文は衰へ、詩は殆ど沈默に入つてゐる。而して散文が衰へ、詩が多少沈默の場合には、從來の經驗によると、たしかに古典的反動が起りさうである。

が、永い間の浪曼的勝利の後に、古典主義が歸つてくるときには、その形態は元のものと、そつくり同一ではない。復歸してからの古典的精神は、先きの失敗に懲りて、大に得る處があるにきまつてゐる。寛宏な征服者——以前よりは、もつと自由な、もつと大膽な、もつと同情的な——となつて歸つてゐる。それから又、形式の選擇と、感情の容姿に、抑制を加へるにしても、以前と同一の抑制ではない。同樣にまた、浪曼派も失敗の度毎に、力を增してくる。古典派優勢期の後、浪曼派が復た權力を握ると、浪曼派も以前の失敗からして、學ぶ處少からざることを示し、以前ほどに過度でなく、攻擊的でなく、民族的經驗を冷視しなくなり易い。換言せば、文學の戰ひの一と替り目毎に、その結果、浪曼的精神を一層古典的にし、古典的精神を一層浪曼的にするものらしい。相反抗して以て、互に相學ぶ處があるのだ。

これまで述べたことは、特に歐洲文學に關してゐる。それから日本文學のことは、私は極めて暗いから、何等の詳說を試みる譯に行かない。しかし他の諸國に於ける過去の文學

史から得らるべき推論が是認する、二三の概論を私は試みうるでせう。日本文學に於て、眞の浪漫的運動があつたか、どうかを私は知りもしないが、かゝる運動は早晩將來に於て、起らねばならないし、而かもそれが一回ではなく、幾度も起るに相違ないと、私は確信する。その運動は、ただ文語でのみ書かねばならないといふ强制に對し、且つ多分詩作に關する一定の形式法則に對して、叛旗を飜すといふ形式を特に取ることと思はれる。屹度ある種類の反抗が起るにきまつてゐる――卽ち苟も文學上の大進步の起る曉には。それで、歐洲文學に對して私の同情が、どんな風になつて居るかを、明言して置くのが、此際當然である――私の同情は全然浪漫的だ。古典的傾向は止むを得ず必要なものと、私は考へるが、嚴密な意義に於ける、近代の古典的文學に對しては、何等の同情をも未だ嘗て感じ得たことが無い。隨つて將來の日本文學に於ける新局面に關しては、當然浪漫派の勝利を望まざるを得ない。幾多の古い法則が破壞されて、新しいのが澤山確立されることを耳にしたい。誰か偉い學者が、堂々と民衆の言葉で大著述をする噂をきゝたい。それから新しい形式の日本の詩で以て、眞正の敍事詩と、物語の大作を書いて見るといふ試みを傳聞したい。が、これだけ云つたのは、唯だ私の腹藏なき同情を吐露したまでである。日本文學に於て新機軸を試むべきか、試みざるべきかに關しては、頗る論ずべき餘地がある。誰でも

大改革を、一つやつて見るに先だつて、自己の力量を精測するがよからう。

例へば口語體で書くといふ問題を取つてみる――假りに大小說、大戲曲、または敎訓的な種類の、大著述を書くとする。文語の代りに、通俗語を用ふるのが、得策だといふことについて、自身に尋ぬべき第一の問題は、恁うあるべきことと思はれる――『僕は口語を使つた方が、普通の方法を踏襲するよりも、更にもつと偉い、もつとよい效果を擧げうるだらうか』若し大學敎育を受けた靑年が、この問を自身に發して、而かも正直に肯定的の答が、出來うるならば、その場合には、古い形式を放擲し、何か全然新しいものをやらうと企てるのが、その人の義務だらうと私は思ふ。が、他の方法よりは、この方法で一層の功を遂げうる確信がない以上は、新方向に努力することを、私は奬勵しない。何れの藝術に於ても、大改革をして見る唯一の根據は、確かに改良しうるといふこと――新しい强味を加へるといふ確信――である。何か新しいことを企てても、前より劣つた作品を製するに、終るだけでは、頗る重大な失態であらう。何となれば、かゝる失態は一般の自由主義運動、一般の健全なる改革の傾向を、逆戾りさせることとなるだらう。が、若し諸君がいつでも、舊習を打破して、價値偉大なる、新しいものを實現しうる、强い確信があれば、その時は、何等の結果をも恐れないで、法則を壞はすこそ、諸君の義務であらう。

歐洲で浪曼的勝利は、その度毎に、隨分大きい犧牲を拂つて、成就されたものである。文學にも、宗教のやうに、愛國心のやうに、教に殉じ國に殉ずる人々がなくてはならない。大改良を實現するためには、人々が喜んで個人的利益を棄てなくてはならぬ。近代歐洲に於て、古典派の側へは、いつも莫大の軍勢が、勢を揃へて竝んだので、例へば第一には、素敵な勢力を代表する大學がある。つぎには宗教的要素がある。何となれば宗教は、いつも歐洲では、必然保守主義であつたから。而して文學の問題については、この保守主義は、立派な理由が無いことはなかつた。それから第三には、貴族や、中流の中で上級の人々さへ、一般に他のさまざまの保守主義を擁護すると同樣に、文學上の保守主義をも、また擁護したのであつたといふことを、述べてもよいだらう。

而して英國のやうな國では、諸大學、敎會、及び社交界が、嘗て如何なる勢力を代表してゐたかといふ事を、諸君は殆ど想像が出來ないでせう。文體といふことのやうな、些事についてさへ、それらのものの意見に反抗するには、實際異常な勇氣を要したのであつた。日本に於ては、文學上の革新者が、これと相似合つた反對を蒙るだらうか、どうかは知らないが、私が斯々のことをすれば、好結果があるかもしれないと勸說したときに、それは習慣に反してゐると、告げられたことがあるから考へて見ると、まだ日本文學のある部門

には、餘程强い保守主義が、勢力を持つてゐるものと想はざるを得ない。習慣に反してゐるといふ事實だけで以て、一切斬新な試みをしないといふ、十分な理由にはなるまいと私は思ふ。一切のうちで、粹の粹、稀有のもの、最上のものは、大概いつも幾分か、習慣に反してゐる。が、ただ力量ある人、卽ち巨人のみが、習慣に違背すべきであるといふことは、尤もな譯である。是れ則ち私が、英人のやうな保守主義が、過去の文學に取つて、餘程の價値があつたと、信ずる次第である。英國の保守主義が、改革に向けて現はした反對は、頗る强大であつたから、最も異常なる人物のみ、敢然切り拔けようと試みたのであつた。法則に隨ひ難いとか、服從するのが退屈だとかいふことが、法則に背く口實にはならぬ。旣に述べた通り、靑年の確信が、靑年をして文學上保守主義者か、自由主義者か、兩者の一たらしむべきことと、私には考へられる――靑年は生來、古典的又は浪曼的の孰れかであるべきものだ。しかし斯く公言するのは、誰人も單に劣等な著作をなすために、法則を破るといふ程度まで、當人の文學的性癖に從つても、かまはないといふ意味ではない。例へば著作の顯然たる貧弱さが、當人が代表する派の不名譽とならないやうな、何等の著作をしない人でも、趣味、同情、感情で、浪曼的たることが出來る。

さて私は浪曼派及び古典派の作家が示せる、西洋の文體について、少々申したい。古典

派修辭學の法則によれば、文體を練るには、多少同型一樣にせねばならない。詩句の各部分は固より、文章の各部分の構造、均衡、位置について、法則が設定してあるので、それらの法則を十分に會得して守れば、誰も全然同樣に書くものと、假定されるでせう――だから甲の文體と、乙の文體の區別が、出來なくなるだらう。

若しすべての人の心が、全然相似てゐるし、すべての人が古典的法則を學んで居たならば、歐洲を通じて、文學史上さまざまの時期に於て、實際さうであつたでせう。英國の古典的時代には――十八世紀の大部分といつてもよからう――作家の名又は書名がわからぬ場合、甲の作と乙の作を區別し難いほどに、實際千篇一律式が行はれたのであつた。種々の人々によつて、何千頁といふ散文が書かれた――一個の卵や豆が、あらゆる他の卵や豆に似る如くに、各頁はあらゆる他の頁に似てゐた。詩に於てもさうであつた。當時史詩的聯句――卽ちポープ[譯者註一]が流行させた、每行十綴音の押韻詩――を用ゐた詩人の派のうちには、餘程鋭敏な批評家でなくては、文句を研究しただけでは、甲の作と乙の作の區別が出來ないのがある。

佛國では古典的同型の結果が、もつと顯著になつたと私は考へる。さほどの素養がなくても、諸君は佛國古典派詩人の作は、十二綴音の詩格――ポープの史詩的聯句のやうに、

退屈な、技巧的な詩句――を使用した點に於て、相酷似してゐることがわかるでせう。が、佛國の古典的時代の散文は、詩よりも遙かに同型である――而して英國の散文では到底出來ないほど、遙かに同型である。その譯は、英國の散文は佛國のほど完全でない。隨つてまた、定則の掟に制せられることも更に少いからである。が、五十名の異つた作家について、その銘々が書いた佛國の散文を、六頁づつ取つてみても、甲の文體と乙の文體を區別するのは、頗る六ケしいであらう。文體が個人的意味では存在してゐないといふ譯ではない。それは存してゐるが、差異が餘程精緻纖細だから、尋常の讀者には毫も差異が無いほどなのである。

だが、いくら古典的法則の最も嚴格な規律の下にある場合にも、所謂文體は、練達の批評家によつて、いつも見拔くことが出來る。これは單に銘々の心には、あらゆる他人の心中にあるものと異つた、一種のものがあつて、兩人で同一法則を、全然同樣に奉ずる譯にゆかないからだ。銘々の判斷力と感情は、あらゆる他人のとは、幾分變つた方向に動くだらう。古典的意義では、嚴密に申せば、文體はただ一般法則の遵守、卽ち嚴正精密といふ意味を有するだけだ。が、浪曼的の意味では、こんなことは文體に無關係だ。今日吾々が文體といふ語を理解して居る通りの、浪曼的の解釋に從へば、甲の書いたものと、乙の書

いたものとが、區別さるべき特殊の差異が、實際大切てあつた。而して現今ては、文學上の文體といふことは、個人的性格を意味して居る――各作家の著書の特徴なる、感情の個人的性質を意味するのである。浪曼的傾向は、かゝる差異、かゝる個人的特徴を强め、且つ擴大することであつて、古典的規律の傾向は、それを抑へることである――少くとも出來得る限り抑へる。この事實からして、諸君は浪曼主義の一つの意義を認めることと私は思ふ――吾々の最上の尊敬を博すべき、該主義の一特質である。浪曼主義は人格の發展を目的とするのだ。意識的にか、それとも無意識的にか、浪曼主義の各派の主眼は、一般の文學的表現力を發達させるよりも、寧ろ個人を發展させるといふのであつた。保守主義は出來うる限り、個人を抑へる。それて歐洲のすべての古典派は、個人を犧牲に供して、文學上優秀な概型を練磨し、又は維持して行かうと努めた。

だから問題は、文學に於ける性格といふ問題に歸着してくる。性格とはどんなものか。それは世の中の各男女をして、すべての他の男女と差異あらしめる、性質上の特徴である。個性は別々といふ意味だけてある。性格はもつと意味が深い――人間の性質に於ける、情的又は知的の一切の特徴が、性格に附屬してゐる。世間て最も低い階級ては、人々の習慣、思想、感情が、頗るよく相似てゐる。その實、個人的差異は存するけれど、さほど强くな

い。吾々はこれらの階級については、性格が左程發達してゐないのだといふ。上流に行くに從つて、差異がもつとはつきりと、目に見えてくる。知識階級では、意見の統一が不可能なほど、性格が發達する。ここでは銘々が、他の大多數の人と、異つた考へ方をし、行動をし、感じ方をする。もつと高尙な階級へ行つてみることも出來る。美術音樂は申すまでもなく、哲學科學を專門とする人々が、代表してゐるやうな、粹を拔いた思想家の階級に於ては、性格の差が餘程甚だしいから、甲と乙の敎授が同一問題について、全然同樣に考へることは、見出せないだらうし、彼等の間では、いかなる問題についても、意見の一致は、極めて難かしくなつてくる。

だから、性格は特に知的修養と、情的感受性の高尙な階級のものだといふ、結論に吾々は到達する。性格が文學に重要なことを、私が極言するまでもない。古典主義はいつも無性格を擁護した。浪曼主義はいつも性格の最高表現であつた。これ則ち私が、浪曼的傳統に對して、私獨自の選擇と共鳴を表はすことが、頗る正當だと考へる所以である。實際あらゆる文學に於て、良い方へ向つてのあらゆる大改革を產んだのは、此傳統であつた。これは性格の派であつた。そして、性格の最高狀態は天才を意味するのだ。歐洲文學の竹帛に、光榮ある名を留めた總ての中て、最大多數は浪曼主義者の名であるのを、諸君は見出

すであらう。古典主義を代表した、少數の偉大なる、英佛獨の人々の名があることを、私は否定しないけれども、これらの文學史上、最高の地位を占めてゐるのは、浪曼的の名ばかりだ。私は例を示さんがために、五十人の名前を擧げても見ようが、それに及ばないでせう。ただ私は十九世紀が、英文學で何を代表してゐるかを、諸君に注意致したい。眞正の語義で所謂、古典派に屬する重要な詩人は、十九世紀に一人もない。劈頭第一の大詩人團は、皆んな浪曼的だ――ウァーヅウォース、コールリッヂ、それからサウジイ。バイロン（たまには形式が古典的でも、感情と表現は全然浪曼的）シェリー、それからキーツ、テニスン、スヰンバアン、ロゼッティ、ブラウニング。――マシウ・アーノルドさへ、古典的訓練があつても、浪曼的傾向に歸した。また十八世紀――これこそ古典主義の時代――へ歸つてみると、實際、詩では古典派の二大人物、ドライデンとポープが居るが、この二人がグレー、カウパー、バーンズ、又は或る點ではブレークと、正當に比肩しうるかを私は甚だ疑はざるを得ない。そして、古典派の何人が實際發揮したよりも、更に大なる詩的影響が、該世紀の末に、スコット、ウァーヅウォース、及びコールリッヂによつて行はれた。十九世紀の初期の作家のうちでも、古典的同情を有つた唯一の詩人、バイロンだけは、その作が記憶から消え去りさうだ。そして、苟もその作中で殘りさうなのは、正しく

何等の古典的因襲に對しても、同情の最も少く現はれてゐる部分である。

とはいふものゝ、たとへ浪曼的精神が、沙翁このかた英文學史上、殆どすべての驚嘆すべき作を産出し、また浪曼的精神の最高表現は、則ち最高の天才を示すのだから、吾々の滿腔の同情をそれに寄すべき、あらん限りの理由が存するやうであつても、それには確かに危險も伴つてゐる。偉大なる天才には、何等の掟がなくてよろしい。それは活動を妨げることになる。天才は破壞する代りに、一層よいものを與へるから、法則を破つても言譯が立つ。が、銘々悉く天才とは限らない。多分百萬人の中、六人といふ比例になつてゐる。それて、天才を有たないどころか、何等の目立つた技倆も有たない、有象無象の作家が、何か可なりな作でも出して、無鐵砲を償ひも出來ぬ癖に、天才が法則に背くのを眞似ると、餘程の禍をなすことがある。實は、歐洲幾多の青年は、單に浪曼主義が彼等に取つて、最も容易な進路を示してゐるから、浪曼的たらんと欲してゐるのだ。古典的法則に隨つて、何かを成すにしても、可なり文學上の鍛錬と忍耐が必要だ。而かも、これらの輩は、偉大なる浪曼主義者が、多くは法則の破壞者であつても、獨自の新しい法則を作りうる人々であつたことを忘れてゐる。かく申すのは、現今歐洲で、佛國でも英國でも、浪曼的傾向は、理由もなく、また好結果もないのに、一切の法則を擲つこととなつてゐるといふのである。

かうしようとする人々は、浪曼主義を放恣と誤解してゐるので、一般に文學を墮了せしめるに過ぎない。さうなつた場合、古典的反動を助けるのが、立派な文學の、あらゆる愛好者に取つて、殆ど明白な義務であるだらう——放恣による文學的頽廢に對しては、古典的反動が唯一の可能的療法であるからである。それからまた、あまりに甚だしい古典的規律が、感情の文學的發露を、化石させたり、沈滯させたりした時は——十八世紀の中葉に起つたやうに——浪曼的反動が唯一の可能的療法である。だから諸君は、同一の人が一生涯の或る時期に於ては、古典主義を賛成し、他の時期に於ては、浪曼主義を賛成しても、前後矛盾しない場合のあることがわかるであらう。諸君はそれらの言葉が、大體どんな意味であるかを、今後は明かに了解するであらう。そして、諸君自身の國の文學に取つては、どんな意義を有するかといふことに關しては、私よりも諸君こそ、判斷を下すに遙かによく適してゐる。

譯者註一　アレグザーンダ・ポープ（一六八八—一七四四年）英國十八世紀上半期の代表的詩人。茲に述べてある通りの、所謂擬古詩風の主潮を作つた人。詩格端正であるが、技巧的で情熱に乏しい。

譯者註二　「文體即人格」については、『人は文なり』といふ佛國のバッフォンの句が有名である。

譯者註三　ウアーヅウオース（一七七〇―一八五〇年）英國十九世紀前半期の自然詩人。コールリッヂ（一七七二―一八三四年）詩人且つ哲學者。サウゼー（一七七四―一八四三年）詩人、以上三人は北方湖國地方に棲居した爲め、湖畔詩人と稱せられる。ウアーヅウオースとコールリッヂが青年時代の合著、處女詩集「抒情詩集」は、英國に於ける浪曼的復興の春鶯囀であつた。

バイロン　一七八八―一八二四年）、シェリー（一七九二―一八二一年）、キーツ（一七九五―一八二一年）。以上三人は抒情熱の詩人。平和な湖畔詩人とは反對に、いづれも波瀾多い生涯と、不幸な或は悲壯な末路であつた。前兩者は英國に容れられないで、大陸に放浪し、バイロンは希臘獨立軍に投じて、熱病に斃れ、シェリは伊太利の海岸に難破して溺死した。キーツは健康のため英國を去つたが、遂も身を破れて、羅馬の露と消えた。

文學と輿論

文學と政治の間に存しうる關係を說いた、一つの小さな講義を致さうといふのは、可なり久しい間、私の目的であつた――兩者はこれほど互に反對なものは、ないやうな觀を呈しながらも、極めて密接な關係のある事柄である。諸君が御存じの通り、私は每度、諸君のうちの或る人達が、未來の日本文學、來らんとする時代の文學を作る人々の中へ、加はるやうにとの希望を述べてゐる。そして、それと聯關して、私の考では、日本文學（それから、文學と申すのは、特に小說と詩をいふのだ）を創造することは、政治上の必要だと云はざるを得ない。『政治上の必要』といふ言葉は、あまり强さが過ぎるならば國民的要求と申しませう。が、私がこの講義の終りまで達しないうちに、私が『政治上の必要』といふ言葉を、嚴密に正確な意味で使つたのだと、諸君は認めるだらうと思ふ。

私の意味を判然說明するためには、先づ國民的政治に於ける輿論の意義について、諸君

の一考を求めねばならない。輿論は一個の勢力であつて、政治家はそれを相手にすることになるし、またいつも相手にせねばならないものだと、諸君が認めるてせうが、恐らく今日の日本て、輿論が政策を決定するのに最大の重きをなすとは、諸君に思はれないかも知れない。然し社會狀態が餘程異り、且つ中流階級が國家の金權を代表する西洋諸國ては、輿論が殆ど萬能となることが出來る。英國に於ける最大の勢力は輿論――卽ち、何でも重要問題に關して、一般國民的意見、或は寧ろ感情――だといふことは、殆ど私が諸君に告げるまでもない。往々その意見が正鵠を得ないこともあるが、正邪はこの場合、問題にならない。輿論が戰爭に對して、贊否を決定する力だ。輿論が改革に對して、贊否を決定する力だ。輿論が英國の外交政略に、大影響を與へる力だ。佛國でも輿論に關して、これと同樣だと云つてもよろしい。それから、獨逸は露國に次いで、歐洲列强中最も帝國主義で、且つ世界て空前の恐しい武力を蓄へてゐるけれども、輿論は矢張り政治上の一大勢力である。が、就中米國は輿論卽ち政治といふ例を示してゐる。實際米國ては、國民の考が、内外を問はず、殆ど一切の重要問題を決定すると、いつてよろしい。

さて、西洋てかゝる意見の力は、その性質上、知識に餘程基いてゐる。ある問題に關して、國民が正しい知識を有して居れば、一般國民はそれについて、正しい考を有し易い。

それについて無智であれば、勿論間違つた考を有し易い。が、これだけでなく、吾々が知らぬことは、いつも不安、邪推、恐怖の原因となるものだ。國民がある問題について、無智又は他の原因によつて、猜疑の考や感じを有つときは、該問題に關しての國民の行動は、不正であるに大抵きまつてゐる。個人と同じく、國民にも偏見、迷信、奸策、惡德がある。すべて是等は勿論、無智又は利己心の結果だ。或は兩者相合しての結果だ。が、利己心そのものも、無智なかりせば、存在しないだらうから、すべてこの世の惡弊は、無智の結果だと略言した方が、多分寧ろよいだらう。諸君はまた近代史を讀んで、國民が聰明で、且つ教育があれば、ある程、卽ち無智でなければ、ないほど、その外交政策が、幾分正義に近い特色を帶び易いことに氣が付いたであらう。

さて、現今遠く隔つた外國の問題について、どんな風にして、國民的感情が作られるか。恐らくは諸君のうち或る人々は、新聞紙によつて作られると答へるでせう――そして、その說は幾分の眞理を有するでせう。が、ただ少許の眞理に過ぎない。何となれば、新聞紙は概して時事問題以外を扱はないし、且つ記者自身が外國の珍らしい事柄につき、偶然有してゐる知識からのみ、書くことが出來るからである。新聞はかゝる事について、精確な知識を弘めるよりは、寧ろ偏見を作るのに與かつて力があるし、且つその影響は常に一時

的に過ぎないと、私は云はざるを得ない。他の國民と他の文明についての意見を作る眞の力は、文學——小說と詩——である。歐洲の或る一國民が、他國民に關して知つてゐることは、眞面目な統計書、莊重な歷史、又は學術的旅行記からでなく、主としてその國民の文學——國民の感情生活の表現たる文學——から得たのである。

西洋諸國の輿論は、偉大なる思想家の敎訓、卽ち少數の學者によつて、作られると考へてはいけない。私の所謂輿論は、決して知的勢力ではない。また知的勢力となることは、多分出來まい。主として感情的なもので、道德的勢力となり得るが、それ以上にはなれない。それでも、英國の內閣大臣さへも、常にそれを尊敬せねばならないし、また實際隨分屢〻それに服從せねばならない。そして、それは私が申した通り、文學——哲學や科學の文學でなくて、想像と感情の文學——によつて主もに作られる。純粹の科學や哲學の書籍は、ただ數千人が讀み得るのみであるが、情に觸れ、情によつて判斷力を動かす處の、小說や詩を讀むものは、幾百萬もある。

諸外國に關する英國の輿論は、大部分かゝる文學によつて作られたものだと、私は云はねばならない。が、私は一個の顯著なる例——露國に關する場合——を擧げるだけの時間を有して居る。私が子供の折、露兵は頗る奮闘者だといふ事の外、露國に就いて何等價値

ある知識を、一般社會は全然有してゐなかつた。尤も、戰鬪の手並は、英人が餘程嘆賞したものゝ、野蠻人にだつてあるし、且つ露國軍隊と戰つた英人の經驗は、もつと高尚な種類の嘆賞を拂ふべき理由を與へなかつた。實際、十九世紀の中頃まで、露國人は英國では、殆ど眞人間とは考へられてゐなかつた。少しばかり露國の風習や政治について、知られて居た事は、敵意を矯正するどころか、まるで反對な種類のものであつた。軍法の慘酷、西比利獄舍の怖ろしさ――こんなことが毎々話された。そして、諸君はテニスンの初期の詩、『皇女(ザ・プリンセス)』の本文の中にさへ、露國に關して餘程氣味の惡るいやうな文句を見出すでせう。

やがて事態一變することとなつた。程なく露國大家の佛譯、獨譯、英譯が現はれ出した。英語に直譯された、この種の最初の名著は、トルストイの『哥薩克兵』であつたと、私は信ずる。譯者は露都駐剳米國公使、スカイラー氏であつた。佛國の文豪メリメーは、既にゴーゴルやプーシキンの傑作を幾許か譯してゐた。是等の書が異常なる興味を惹き始めた。が、更に甚だしい興味は、其後ツルゲニイエフ、ドストイエフスキーなどの大小說の飜譯によつて、喚起された。ツルゲニイエフは特に歐洲のあらゆる教養ある社會で、持て囃された。彼は生ける露國を、有りの儘に寫出した――下等社會の心を寫出した。而して、下等社會の心のみでなく、大帝國に於ける、あらゆる階級の感情と風俗を寫出した。彼の著

書は忽然、世界的書籍、十九世紀の經典となつて、これを讀む事は、文學の修養に缺ぐ可からざることと考へられた。彼の後に、露國小說の他の諸傑作が、殆どあらゆる歐洲語に譯せられた。それだけでは無く、急に目醒めた露國の偉大なる理智力は、實地的科學の最も深遠なる部門に於て、重きをなすに至つた。化學に於て、原子量について、近代の最も深遠なる發見は、露國人の發見であつた。北亞細亞に關して成遂げられた、最も顯著なる地文學の著述は、クロパトキン公のであつた。此人は未だ存命中で、驚くべき書物や回想錄を著はしてゐる。私は數百の中、ただ二つの例を擧げてゐるのみだ。醫學、言語學、その他幾多の科學的方面に於て、露國人の著書、思想の影響は、今や普く認められてゐる。尤も、いくら科學者達が、露國人の智力を尊敬せねばならないと知つたにせよ、一國民が外國に理解さるゝに至るのは、智力によつてではない。露國を理解させた大事業は、主もに露國の小說家、物語の作者によつて成遂げられた。スカンディネーヴィヤの少數作家のものを除けば、西洋文學に於て比肩すべきもののないほど素朴で筆勢に力ある、それらの驚嘆すべき書物を讀んでからは、西歐の諸大國民は最早、露國人を緣故のない人民と考へ得なくなつた。これらの書物が、人間の心は、露國でも丁度、英國や佛國や獨逸に於けると同樣に、感じ、愛し、惱むといふことを證明した。然しまた、露國の下等社會、一般民

衆の獨特な、偉い美德――彼等の無限なる忍耐、勇氣、忠義、大なる信仰――についても教へる處があつた。何となれば、たとへ是等の生活の描寫は、美しいと稱し得ないにせよ、人情の美を餘程その裡に酌み取ることが、出來るからである。ツルゲニイエフや、その一派の小説家の陰鬱は、對照のため、却つて光明を更に美しくならしめる。それで、どんな結果になつたか。露國人に對して、西歐の(譯者註一)感情が全然變つた。私は露國政府に關して、西歐の意見が幾分でも變つたと申すのではない。政治的には、露國は依然歐洲の惡夢となつてゐる。然し露國の人民は、どんなものかといふことは、露國文學によつて解つた。よく解つた。そして、從來露國人全體について、常に輿論を色どつてゐた憎惡、嫌厭の代はりに、親切と人道的同情が、一般の感情となつてきた。

今や諸君は、私の趣意、私の論じ到らんとすることが、頗る明白にわかるでせう。露西亞國民は强大てはあるが、日本人民に數千年間見なかつたやうな、大瑕疵、大缺陷を有してゐる。文明が儀容と風紀、教育と産業を意味する以上は、數百年も以前の日本人は、國民としては、今日の露西亞人よりも、更に遠い未來の露西亞人よりも、遙かに文明に進んでゐたと、私は斷言せざるを得ない。然るに、日本に關しては、どんなことが西洋諸國にわかつて居るか。殆ど皆無だ。日本を見物し、いくらか日本のことを知つてゐる數百の金

満家の連中が、現在無いといふのではない。かゝる旅行者によつて、日本に關する數千の書物がかゝれてゐるが、是等の旅行者や著者が、代表する處は極めて僅かなもので、實際彼等は何等國民的意見を代表して居ない。大部分の西洋人――その一般民衆――は、丁度十九世紀の初めに、露國のことが餘り解つてゐなかつたと均しく、今日の日本の事情を、あまり知つてゐない。日本は克く戰ひ、鐵道があり、軍艦があることが、わかつてゐる。そして、それが一般人心に印象をなしてゐる殆ど全部である。歐洲の知識階級は、もつと澤山知つて居るが、私が申した如く、是等の人々は輿論は作らない。輿論は主もに感情問題であつて、思想問題ではないのだ。國民的感情へは、頭腦を經て達することは出來ない。心臟から達せねばならぬ。そして、それが出來るのは、唯だ一種の人々だけである――日本の文學者が、その人々である。大臣だの、外交官だの、學會代表員だの――こんな人達では、誰も出來ない。然し偉大なる小說家、偉大なる詩人は、唯だ一人で立派に成し得るだらう。血を異にし、言葉を異にする人では、どんな手段に因つても出來ない。日本人が考へ、日本人が書いて、全然外國の思想感情の影響を被らない、日本文學に由つてのみ出來る。

例證のため、この眞理を少々更に平易に述べて見よう。現今日本に關する外人の著書の

數は、數千に達する。毎年少くとも、この問題について、一打の新刊書が現はれる。それでも西洋の讀書社會は、日本の事情を何も知らない。また是等の書物が、すべての東洋國民に對して、西洋人が感ずる、頗る强い偏見——一つには本來の人種的感情と、又一つには宗敎的感情の結果なる偏見——を緩和することになつたとも云へまい。嘗てハックスリーは、宗敎的偏見の力は、誰でもそれと戰を試みないうちは、想像が出來ないと云つた。他國民の宗敎に關する、西洋人の偏見と戰を試みる人は、罵られ得る場合には罵られ、得ない場合には、度外視さるゝか、または有らん限りの手段に由つて、反對せられるが一般である。東方聖典飜譯の、牛津の偉大なる計畫さへ、各方面で頗る强い非難を受けた。そして、飜譯者は東方の宗敎を、實際以上に、高尙に見えさせてゐると云つて、今猶非難されて居る。私はこの事實をただ偏見の一つの形式の例として擧げるが、他の例が何百もある。現今これらの偏見に、反抗を試みる人があつても、公平に傾聽さるゝ機會はない。然し一般の考では、日本の文明、倫理、産業、或は信仰について、何かよいことを云へば、利己的動機——お世辭か、恐怖か、私益の理由——で云つたので、不親切な、虛僞の、馬鹿げたことを云へば、大膽で、公明な、獨立的の、賢い人が云つたのだとなつてゐる。そして、これは何故かと云へば、善惡ともに、ただ外國人が云つてゐるからである。苟も外

國人が今、日本人の生活、思想、性質について云ふことは、よからぬ方へは餘程の影響あるにしても、よい方へは影響が甚だ乏しいであらう。これは止むを得ないことだ。加之、最も鑑賞的で、また寛大な方面の、外國人の著述は、西洋の一般讀者に達しうるやうな種類のものでなかつたことも、記憶せねばならぬ。それは唯少數の知識階級に達するのみだらう。單なる旅行記や、論文や、西洋の感情と何等共通の點のない文學の反譯に由つて、大國民の心を感動させることは出來ない。もつと人情の籠つた文學、即ち小說、詩、物語によつてのみ出來る。もし唯外國人が、露西亞のことを書いたならば、英人は依然として、露國の上流社會を野蠻人と考へ、大國民そのものをも、同胞人類の關係あるものとは、殆ど考へないだらう。一切の偏見は無智に基く。無智は高尙な感情に訴へると、最もよく一掃される。そして、高尙な感情は純文學によつて、最もよく鼓吹されるのである。

『西洋の文盲どもの、偏見や愚鈍を頓着しなくてもよいではないか』と問ひたくなる人が、諸君のうちに、一人やそこらでは、あるまいと思ふ。さて、現今是等の比較的無智愚鈍の民衆が、國家の政策と大いに關係があるといふことを、私は既に述べた。西洋の政府の對外策を定めるのは、智者の意見よりは、寧ろ無智者の意見である。それだけでも、尤もな理由であるだらう。然し私は今一步を進めて、私が主張してゐるやうな、現代日本文

學が存しないのは、間接には通商上の理由からも、亦遺憾とすべきものと、私は考へると云ひたい。通商貿易は全然道徳的業務でないといふことは、いかにも尤もだ。絶對道徳に由らないて、恐らくは相對道徳に由つて營まれてゐる。畢竟、商賣は道徳的なものではない。一種の競爭だ。そして、すべての競爭は戰爭の性質を帶びてゐる。が、この必要にして、避け難き戰爭に於ては、敵と味方が相互に有する感情が、至大の關係を持つて居る。商賣に於てさへ、同情卽ち、正邪苦樂に關する最も單純な感情の理解が、至大の關係を有する。何となれば、根柢に於ては、一切人間の利害は、それらの感情に基いてゐるからである。海外で同情を起しうるやうな日本文學は、取引の狀態を改良し、通商上の機會を擴張するのに、著しい效を奏するだらうと、私は確信する。商賣取引の大部分は冒險である。さて、人は先方のすべての狀態に精通しないで、冒險をせねばならぬ場合には、多少互に敵對の地位に立つてゐる。結局、人はその理解しないものを恐れる。そして、この理解を賦與するのに、熱心な文學者の努力によるほど、迅速なる方法はない。この序に申しませうが、私はこの頃、日本の事情を問合せた、外國商人どもの手紙を見ると、彼等は月世界の事よりも、もつと日本のことに暗いのがわかつた。二三の——否、一冊でも、大著述は、十年間も經てば、日本の眞相と美點に關して、全商業界、全民衆の蒙を啓くこととなるだ

らう。

さて、私が頗る粗雜簡單に、これらの感想を諸君に述べたのは、是等の感想がこの問題に關せる、周到なる議論を現はしてゐると、考へるからでなく、ただ幾分かこの問題について、諸君の熟慮を促すものを含むと信ずるからだ。著述をしても、戰に勝つのと全然同樣、國家へ奉仕が出來る。それで、過日英國の一青年作家[譯者註二]が病に罹つた際、そのために澤山の人々から同情を寄せて來るし、國王や皇帝などから見舞を賜つたので、世界中の電報が多忙を極めたのは、この事實が證明されたのだ。この青年は何をしたか。短篇小說と小さい歌を少許書いて、それがすべての英人に、相互の心を以前よりも一層よく理解させ、また他國民に英人を一層よく理解させたのに外ならない。かゝる人は國に取つて、實際、王よりも猶貴い。諸君がこのことを記憶するならば、私がなした講義が、將來いつか良果を結ぶだらうと信ずる。

譯者註一　トルストイ、ツルゲニイニフ、ドストイエフスキー等の文學によつて、「露國人に對する西歐國民の感情が一變した」といふ邊の文句は、移して以てヘルン先生の著書が歐米に於て日本のために貢獻多大であつたことに適用し得るだらう。

譯者註二　キプリングを指す。

異常なる散文の研究

一

簡素なる力強い藝術——北方人種(ノースメン)の作家

散文の諸流を論ずるに當つて、私は研究を特に英文學のものに限らない積りだ。その譯は、英國以外の文學のうちに、偉大なる散文藝術の、もつと立派な例が往々あるからだ——しかも其例の中には特に、日本の古代作家の傑作に似たのがあるから、一層よく日本學生に感興を與へるだらう。英文學には、古代日本の物語にある、あの簡素に伴ふに、生氣躍如を以てした例を見るのは容易でないが、北方人種(ノースメン)の著作には、屢〻これを見受ける。そして、その最も優れた部分を、緣故淺からぬ英語に移しても、原文の異常なる妙趣を失はない。

さて、技巧的散文を書くのに、兩法があつて（無論種〻の方法があるけれども、皆二つの項目のもとに、纏められる）共に作家の性格に由ることが多い。一種の作は、その價値は全く、觀察によく熟した、活氣ある、强い官能に基いてゐる。視ることが鋭敏で、聽くことが鋭敏な人。耳目を迅捷且つ愼重に用ふることの鍛錬を經た人。正確の價値と、誇張の危險（誇張は畢竟、觀察と思考の不確實に過ぎない）を、經驗で敎へられた人——かゝる人が苟も筆を揮ふことが出來ると、面白い風に書き易いものだ。適勁簡素な散文の一番よい例は、生涯の大部分を、戰鬪と狩獵に過した古代北方人種の書いたものである。ここには、私が上に示した訓練の結果が顯はれてゐる。一つの失策が、自身と子供達の生命を、一日のいつ何時、失ふことになるか、わからないと心得て居る人は、正確なる觀察家になり易い。また優秀な官能と、立派な判斷力の所有者となり易い。何となれば、近眼者とか、聾者とか、遲鈍なものは、北方人種の作家が居つたやうな社會では、殆ど生存し得なかつたからである。そして、私の力で判斷しうる限ては、古代日本の作家中、ある人々は、その作に於て、これと同樣の知覺力と、識別力の證據を示してゐると思はれる。今日歐洲の作家にも、その力が全く同樣の能力に基いた、生ける實例がある。尤も、現代のこの種の作家は、吾々が研究せんとする作家に比すると、左ほど簡素でない。現今の專門學校や、

大學で教育を受けた爲め、彼等の作には、古代文學には見られぬ、一種の色彩が加つてゐる。が、一二の作家――現代の北方人種、即ち少くともスカンディナヴィヤ人――は、極めて異常に古代北方作家の粹を保存してゐる。恐らくは最も良いのはビョルンステルン・ビョルンソンだと、私は考へる。他日また此人に就いて語る折があるでせう。

技巧的散文を書く他の方法は、もつと特に主觀的で、主として美に關する作家の内觀――感情的に感ずる力と、精選した言葉で、その感情を表白する力に由る。この方面の散文については、今解說するに及ばない。後日論ずる事にしよう。よく發達した表面的官能を有つとか、敏捷な知覺力や識別力には、少しも頼らないと、いふだけに止めて置かう。實際、この方面の最大作家の或る人々は、肉體的には不完全な人、即ち弱い病身者であつた。

さて、古代北方人種の物語文體の一例を擧げよう。この物語は十三世紀初期の昔に溯るので、氷洲海岸の小島であつた戰鬪の話である。當時そこへ派遣されたグドマンドといふ基督敎の僧正に關して、紛紜があつた。殺さうと決心したものがあれば、味方をしようと決心したものもあつた――そして、後者の中に、アイヨルフとアロンの、豪膽な二人の同志があつた。僧正の徒黨は、痛手を蒙り、この兩人の外殆ど皆殺されたといふ點から、話の概要が始まる。弱い方のアロンは、場所に踏止まつて、死ぬるまで戰はうと欲した。ア

イヨルフは、さうさせまいと決心して、アロンを救ふために計略を施した。全體の話は、スタールンガ古話に載つてゐる。私は諸君が興味を感ずることと思ふ。日本の古代史譚中の、ある事蹟に非常に彷彿してゐるやうに思はれるから。

アイヨルフは、アロンとスターラが會した處へ行つて見ると、アロンは武器を持つたまゝ坐つて、ぐるりには死傷者が横はつてゐた。アイヨルフは從弟に向つて、動くことが出來るかと問ふ。アロンは、出來ると答へて、立ち上がる。それで、二人は暫く濱に沿つて、一緒に進んで、隱れた灣へ達する――そこに小舟を水に浮べ、五六人が橈を取つて、舳を沖に向けて、用意してあつた。これは急用に備へたアイヨルフの取計ひであつた。さて、アイヨルフは、その舟は兩人のために備へてあるのだと、アロンに告げて、當分僧正のため、盡しうる見込はないと述べ立てた。

『しかし、僕は好機の來るを待つて居るのだから』とアイヨルフがいふ。

『これは僕には合點のゆかぬ企だ』とアロンがいふ。

『この危機に際して、吾々がグドマンド僧正を、ふり捨てようとは思はなかつたから。何かこれには、譯があるのだ。君が先づ舟に乘らぬ以上、僕は斷じて乘らぬ』

『從弟殿、さうは僕致さぬ』とアイヨルフがいふ。『こゝは淺瀬で、舟を押し出すのを、漕手に橈を手放しして、させたくない。また君のやうに、傷を抱へてゐて、徘徊するのは、君の身に重荷

のだ。君は舟に乘り玉へ』

『では、君の武器を舟へ入れ玉へ』とアロンがいふ。『それなら、君を信じよう』

アロンが今、乘船する。すると、アイヨルフはアロンの求め通りにした。遙か沖まで淺瀬がつゞいてゐたから、アイヨルフは舟の後押をし乍ら、徒渉した。適當な時機が來ると見て、アイヨルフは舟の艫から戰斧を取上げ、全力をこめて舟を衝き出した。

『左樣なら、アロン』とアイヨルフがいふ。『神の　思召があつたら、また逢はう』

アロンは負傷のため、身體の自由を失ひ、出血のために弱つてゐたので、その通りにならねばならなかつた。それでアロンには、悲しい別れであつた。二人は最早逢はなかつたから。

さてアイヨルフは、船頭達に向つて、しつかり漕ぐやう、また當日のみか、出來るならば、長い間、アロンをグリムセーへ、また歸らせないやうにと、告げた。

船頭達はアロンを舟にのせて、漕いで行く。が、アイヨルフはまた濱へ轉じて、農夫グナツプ所有の、大きな渡舟が入つてゐる艇庫へ行つた。すると同時に、スターラ派の徒黨が、中庭で亂暴を働いてから、引上げて急いでくるのが見える。アイヨルフは運命の續く限り　防戰しようと決心して、艇庫に立籠つて、二枚開きの戸があつたので、重い石を當てておく。

シグルワツト一味のもので、身分のよい、ブランドが、チラツと人影の動くのを見て、アイヨルフ、カルソンをそこで發見したやうに思ふから、皆で追ひかけねばならぬと、仲間のものに云つた。

スターラはその場に居なかつた。總勢九人乃至十人であつた。それで彼等の艇庫へ來ると、ブランドが、そこに居るのは誰かと尋ねる。そしてアイヨルフが、自分だと答へる。

『では、君は出てきて、スターラの面前へ來たまへ』と、ブランドがいふ。

『君は恩典を約束しますか』と、アイヨルフが問ふ。

『あまり恩典はあるまい』と、ブランドが答へる。

『では、君の方から來たまへ』と、アイヨルフがいふ。

『僕は守る方だ。しかし權衡がとれてゐないやうだ』

アイヨルフは鎖子鎧と大斧を有つただけであつた。

さて、彼等は攻めかける。アイヨルフは天晴れ勇ましく防戰して、彼等の槍の柄を眞二つに切つた――双方とも激しい打撃を蒙つた。そして、その仕合で、アイヨルフは斧の柄を損じたから、一本の槍を取上げて、また更に一本の槍を取上げたが、二本とも攻撃の爲め、毀はれた。そして、勝負の際、腕の下を突かれたのが、身に應へた。槍の柄を折つて、槍尖を疵の奧へ殘したまゝにしたのだといふ説もある。最早防禦は駄目と知つたので、突撃して出でて、彼等の知らぬ　に迴り拔けた。これは案外であつたけれども、彼等は狼狽しなかつた。そして、マーといふ名の男が、彼に切りかかつて、踝を斬りつけたから、彼の片足は役に立たないのをそのまゝ、濱邊を轉がつて下ると、海は滿潮であつた。こんな窮境にあつても、アイヨルフは奮然泳ぎ出した。泳ぐこと岸から十二尋、

一個の岩礁へ達してから、そこへ跪いた。それから大の字なりに倒れた。それから祈をするかのやうに、東方に向つて、兩手を伸ばした。

さて彼等は舟を卸して、追ひかけて行つた。岩へ達すると、一人のものが彼に槍尖を刺した。今一人も刺した。しかし、孰れの疵からも血が出でなかつた。それで、彼等は上陸して、スターラに逢つて、一切の顚末を明かに告げることにした。スターラと、今一人のものも、これは天晴れの防戰であつたと考へた。彼はこの報告に接して、欣んだ風に見えた。

さて、諸君はこの頗る人情的な記錄について、何か特異なことを認めるか。私は諸君がこの力を感賞するに相違ないと思ふ。が、その力の用ひ様が、どんなに現代の手法と異つてゐるかを、諸君は氣が付いたか、どうかと私は疑ふ。

先づ第一に、殆ど何等の形容詞がないことに留意なさい。總計で九つか十だ――假りに十として置かう。諸君が寫した拔萃には、約三百語一頁のが二頁半ある。卽ち、約七百五十語あつて、而かも全部を通じて、唯十個の形容詞あるのみだ――卽ち每百語に對して、形容詞が一個何分の一の割合になる。近代英國の書籍を數千また數千と調べなくては、これが匹儔を見出せまいと思ふ。それから、使つてある語に、省いてよいのは一つも無い。

省けば必ず幾分か效果を損じてくる。これは優雅でないかも知れないが、確かに力の節約であつて、力の節約は、あらゆる優雅の根柢だ。

つぎには、一つも說明がないことに注意なさい――微塵ほども說明がない。家、岩、舟が擧げてある。また戰鬪が極めて巧みに語つてある。が、何も說明が施してない。それても、一切のものが、どんなによく見えることでせう――寒い北海の灣頭に、舟が沈んでゐる光景。負傷した從弟を助けて、舟に載せてやる勇士。それから、艇庫での衆寡相敵せざる奮鬪。その間實際、橈の毀はれる音がする。顏の描寫は無いが、奮戰のあらゆる出來事の場合、その勇士の顏が、乾度諸君に見えると思ふ。壯大な文章に、說明は要らないことを發見したのは、北方人種が最初では、無かつたかも知れない。詩では說明を好み、散文てはそれを避けた。しかし、こんな風に說明を省くのは、――動作と事件だけで以て、光景を自然と浮ばせるのは――少からざる技倆が要る。一讀すると、小學生の作文のやうに、單純に見えても、世にこれほど難事は無い。

第三には、何の感情も、最屓も、同情も現はしてないことを注意なさい。尤もアイヨルフが、『天晴れ勇ましい防戰』をしたと、書いた處が一個所あるが、北方人種は決して敵の惡口を言はなかつた。そして、最大の怨敵でも、若し能く戰へば、同情の點からでなく、

眞理の問題として尊敬を拂つた。確に物語の結末で見ると、『天晴れ』と、『勇ましい』との形容詞は、決して何等の同情を含んでゐない。その證據には、アィヨルフを殺した人人の主君は、アィヨルフの元氣な奮闘振りを聞いて、愉快を感じて居る。この點を篤と注意なさい。かゝる人々は、卑怯者を殺しては、少しも面白くないのだ。立派な戰をして、立派な闘士を殺してこそ名譽だと考へた。主君が欣んだのは、部下が十分殺し甲斐のある人を殺したからである。だから、旣に申した如く、この話全體のうちに、個人的感情は微塵ほどもない。しかも讀者の胸中へ、非常な感情を起させるてはありませんか。それから、物語には全く感情を抑へて、それで以て、讀者の心に感情を起させるといふは、如何にも驚嘆すべき藝術ではありませんか。これこそ寫實主義の極致である——寫實主義のことは、最近數年間餘程耳にした處でせう。私は十九世紀の作家で、これと同一の寫實的の力を有したものを、唯一人知つて居るだけだ——故人となつた佛國の短篇作者、ド・モウパッサンだ。彼の頭腦が衰へ、發狂のため彼の目覺ましい才能が壞はれなかつた時代には、彼も亦感情的な語や、暗示を一つも用ゐないで、最も力强い感情を起させることが出來た。他日私は彼の筆力の短い一例を、英語で示して見よう。

さて、諸君がこれらの三つのこと——形容詞の稀少、說明の缺如、及び感情の抑制——

を熟思すれば、諸君はこれがいかにも驚くべき一篇の文章であつたといふことが、わかると思ふ。が、これは百もある中からの一例に過ぎない。そして、近代に於てハンス。アンデルセンの讀者に、非常な驚異と歡喜を與へたものと、幾分かその極意極傳が相似通つてゐる。この深い哲學的意義の籠つた、お伽噺と不思議物語の名人は、御存じの通り、北方人種であつた――血統上からも、十三世紀にアイヨルフの話を書くことの出來た、これらの人々の後裔であつた。私は古代氷洲のヌヤールル古話から、同種の小話を今一つ示さうと思ふ。諸君はその中に、すべて同一の特質を見出すでせう。この話――復讐の恐ろしい古俗の一事件――は、殆ど日本のものとも思はれるだらう。昔の日本の男子間に於ける如く、北方人種の中では、兄弟の一人が殺されると、他の一人が仇を討たねばならなかつた。父は子のために、復讐をしてやらねばならなかつた。誰でも殺されると、血緣の者がその仇を討つて吳れた。男が討つてくれる者がないと、進んで出てて、討つ力をも具へた勇婦が、往々現はれた。それで、敵討の戰爭には、雙方とも少年男女によつてさへ、幾多の勇壯なことが行はれた。この話の場合には、犧牲者は一少年とその祖父母である。この人達は、木造の家に閉込められて、敵が圍んで、火を放つた。その家には、澤山の人が入つてゐて、悉く無慙に殺されんとしてゐる――これは二つの族黨の闘爭で、澤山の仇を討つ譯だから。

か、忽然勝つた方の隊長が、内に居る老人は、自分の先生であつたことを憶ひ起す。（日本にも殆ど是と同様な事件が、城攻めの話にあると思ふ）さて、これから後のことは、古代北方の物語作者に語らせよう。

　そこで、フロシイは戸の處へ行つて、ヌヤールに向つて叫んで、彼とベルグソルドとに、言葉を交はしたいと云つた。

　ヌヤールがさうすると、フロシイが云つた。『ヌヤール先生、先生は許して出させて上げます。室内で燒死をなさるのは不相當でありますから』

『私は出て行かない』と、ヌヤールが云つた。『私は老人で、子供のため復讐する役にも、あまり立たないから。が、恥辱の中に生き長らへるのは嫌だ』

　そこでフロシイはベルグソルドに云つた。『奥様、あなたはお出なさい。どんなことがあつても、あなたを室内で燒死させたくありませんから』

『私は若くて、ヌヤールへ嫁ぎました』と、ベルグソルドが云つた。『そして、運命を共にするといふ、誓を立てたのです』

　これから、彼等兩人は家の中へ退いた。

『さて、どんな相談にしませう』と、ベルグソルドが云つた。

『私共は寝床に就かう』と、ヌャールがいふ。『そして、横臥しよう。私は長いこと、休まうと願つてゐた』

それからベルグソルドは、クーリの子、ソルドといふ子供に云つた。『そなたは外へ出させます。こゝで焼死をしてはいけませぬ』

『祖母様、あなたは斯う私に約束なさいました』と、子供がいふ。『私があなたと共に居たく思ふ限りは、私共は決して別れはせぬとのことでした。しかし、あなたの後で生き残るよりか、あなたや、ヌャール祖父さんと御一緒に死んだ方が、餘程よささうに思はれます』

女は子供を自分の寝臺に運んだ。すると、ヌャールは家令に云つた。

『私共が臥ころんだ場所を、今よく見ておいてくれ。煙や火で痛くても、私は一寸もこゝから動かぬ積りだ。それで、私共の骨を捜す場所の見當がつくだらうから』

家令はさう致しませうと答へた。

牛が一頭屠られたことがあつたので、その皮がそこにあつた。ヌャールはそれを彼等の上へ擴げるやう、家令に命じた。家令はその通りにした。

それで兩人共、寝臺に臥し、子供を中間へ置いた。それから兩人は自分達と、子供の身の上へ、十字架の徽號を描いて、そして、彼等の靈魂を神の御手に委ねる祈をした。そして、それが人々の耳に聞えた、彼等の最後の言葉であつた。

全文の中、四つばかりの形容詞がある。而して、前例に於ける如く、一つの說明も、一つの同情もない。――何等の感情がない。多分これは全然事實だ。家令は脫することを許されて、その後、老人達と子供が家の中で言つたことを、忠實に傳へることが出來たのだ。青年どもは、怖ろしい嘲罵に滿ちた、別なことども――全然現代とは異つた精神を示した事ども――を云つた。彼等は燒死するか、或は機會あらば、切り開いて出ようと、立ち向つた。一人の子は、父が寢臺に臥してゐるのを見て、諷刺的に云つた。『お父さんは早く就寢なさる。それは當り前だ。老人なのだから』この怖ろしい冗談で見ると、その青年は、父が寧ろ戰死するのを欲したであらう。が、老人達は子供を死支度させるのに、なかなか多忙であつたのだ。これは戰慄すべき話――殘忍兇暴な話――であるが、犧牲者の非常に高尙な人格が現はれてゐる。そして、讀者は、この最も簡單な事實談のために、我知らず感動させられるのだ。

さて、恐らくは諸君はこの簡素な文體は、物語の題材其ものが、怖ろしいとか、心膽を寒からしめるとか、異常な性質である場合にのみ、かゝる效果を生じうると考へるでせう。私はさうではないと、確信する。其譯は、ビヨルンソンの『シンノヴエ・ソルバッケン』のやうな現代小說にも、全然同一の文體があるし、アンデルセンの『醜い小家鴨』や『小

さい人魚」のやうな、お伽噺にもあるからだ。是等の極めて簡單な題目も、苟も觀る眼と、考へる心を持つた人に取つては、驚異と美に滿ちてゐる。そして、かゝる眼と、かゝる心に對しては、簡素な文體で十分に足つてゐる。アンデルセンの話題は、折々どんなに些細なことでせう――子供の玩具、野に生ずる草、日本で農家の庭へ雪達磨を作るやうな風に、子供が作る雪人形、窓の下の薔薇の叢林、こんな場合に、興味は題材に由つてゐるといふのは、實に馬鹿げたことでせう。「小さい錫の兵士」のやうな話では、吾々は實際殆ど、古話に於けるアィョルフの話のやうに感動される――それは單に古話の作者と、近代の物語作者が、頗る同樣な書き方をし、考へ方をしたからである。また今一つの更に複雜な性質の話題で、「支那皇帝の鶯と、日本皇帝の鶯」を取つて御覽なさい。この場合、美しい物語の表面に現はれてゐるよりは、更に一層の深意が含まれてゐる。全體の思想は、吾々の人生の歷史――藝術家の生活と、藝術家が正當なる認識を得難い事、それから藝術家を無視する詐欺師の勢力――を示したものだ。實に深遠なる話だ。そして涙なくしては、殆ど讀み得ない處が數頁もある。知的にも、情的にも、吾々を非常な程度に感動させる。が、文體は矢張り古話の文體だ。無論アンデルセンは、氷洲の作者よりは、少々澤山の形容詞を用ゐてゐることは認めねばならない。しかし精査して見ると、避けうる場合には、形容

詞の使つて無いことが、わかるでせう。さて、私が述べた今一つの文體——現代の技巧的文體——は、殆ど詩に於ける如く、形容詞を潤澤に用ゐる。私はそれを惡くいふ考へはないが、その文體を使ふ殆ど如何なる作家も、それを使はなかつた北方人種の作者ほどに、强烈なる印象を與へてゐない。

　簡素な文體には、幾分か民族の精華がある。要するに、苟くも偉大なる文體は、民族の特性に根ざしたものに相違ない。私が述べつゝあつた文體は、北方人種の民族性の粹を示してゐる。全くの序でに、茲に述べてもよからうが、つい近頃文學を起した、今一つの北方人種——私のいふのは露西亞文學——も、幾分か同樣に、平易な文體の簡素な力を示してゐる。現代露國大家の、概して僅かな語で、效果を擧げる工夫が、古代北方人種の作者に似て居る。しかし今回の講演に於ける私の目的は、主として諸君に向つて、日本の古い文學的手法と、是等の古代北方の文學的手法との間に、稍ゝ類似點があるのを暗示することであつた。北方の簡素な藝術が、昔の古典的研究に基いた、もつと複雜な形式の文學よりも、日本人の天才に取つて、一層よく適合するやうに私は思ふ。

譯者註一　北方人種（ノースメン）は、中世紀頃、那威、瑞典、丁抹に住み、海上冒險の活動をなした諸

悍なる民族。

譯者註二　古話（サガ）は、古代スカンヂネーヴィア民族の散文敍事詩で、神話傳說を述べたもの。初めは口傳へであつたが、十二世紀頃から文體をなした。

二

サー・トマス・ブラウン

散文の文體に關する第一の講義で、古代北方人種の作者から取つた文例の、非常なる簡素を諸君は想起するでせう。そして、諸君はその飾らない、固有の簡素の、恒久的な筆力を認めたでせう。今日私は北方人種作者の文體に對して、最大の對照と反對を呈する一文體に就いて、諸君に話さうと思ふ――非常な古典的敎養、博學、博覽の此上もない力を現はした文體――唯だ學者にして始めて味ひ得べき文體で、到底世間一般の人氣には投じ得ないが、而かも一種の驚嘆すべき長所がある。私は諸君にその模倣を慫慂する積りで、文例を提示するのではない。が、諸君は當然幾分その立派な性質を味ひ得、且つその英文學

史に於ける重要さを理解することが出來なくてはならぬ。私が云ふのは、サー・トマス・ブラウンの文體である。

私はこの文體が、英文學に非常な影響を及ぼしたと云つた。先きへ進まない內に、この影響の事を說明しよう。サー・トマス・ブラウンは、一個獨創の古典的文體を作つた英國最初の大作家であつた。古典的文體と私がいふのは、希臘拉丁の古典作家の深遠なる硏究に基いて、且つ古代語から出てきた、綴の多い語を、巧みに使つて、大いに色彩を加へたり、音調を好くした文體の事である。以前にも獨創の文體はあつた。サー・トマス・マロリーは文體の上に、美しい改革を施した。ライリーも亦、新體を作つた――西班牙の作家を模倣して、ひどく飾つた、ひどく複雜な、風變りの、不自然な、倦きの來るやうな文體――有名なユーフュイズムといふ文體。ユーフュイズムのことは、他日語ることにしよう。これも亦短期の間、大勢力であつた。が、サー・トマス・マロリーの面白い散文詩も、それから、ライリーの法外な人工的文體も、サー・トマス・ブラウンの文體とは何等共通な點を有しない。ブラウンは拉丁希臘の傑作家の外、誰人をも模倣しなかつた。而かもその模倣に一風があつて、英人で誰も企及し得なかつた。加之、彼は卑屈な眞似をしたのでなく、いつも極めて獨創的であるやう、工風をした。そして、彼は古代作家の美を模倣した

爲めよりは、更に一層眞の散文詩人であつたことの爲めに、二百年よりは、もつと可なり長い間、英國の散文に影響を與へ得たのであつた。實際彼の影響は猶ほ續いて居るし、またもし百年前のやうに、今日では著しく文體を左右しないとするならば、それは唯だブラウンが辿つて行つたのと、同じ方面で何か成さうとするには、餘程立派な學者でなくてはならないからで、且つ今日の英國の優れた學者は、あまり隨筆や、詩の方面に筆を執らないからであると、云つてもよいと私は考へる。劈頭第一にサー・トマス・ブラウンの强い感化を蒙つた、非常に優秀な人物は、サミユーエル・デヨンスンであつた。諸君はヂヨンスンが十八世紀の文學に最も有力な感化を與へ、それから隨分十九世紀初期の文學をさへ感化したといふことを知つてゐるが、ヂヨンスンはブラウンの弟子であつて、而かも弟子としては可なり拙い弟子であつた。ブラウンほどの偉大な學者でもなかつたし、廣い了簡、卽ち自由で雅量ある寬恕が出來得るのでもなかつた。且つブラウンの特徵であつた、美感詩趣を有しなかつた。偏奇を誇張し、纖麗の珍を逸して、空しくブラウンの惡い眞似をしたに過ぎなかつた。が、ブラウンと十八世紀とに文學的連鎖のあることは、極めて容易に立證される。そして、ブラウンが間接に、十八世紀の文學的散文を形成する助となつたことは確かである。だから、諸君はブラウンが、英文學史上、非常に巨擘であるに相違ない、

といふことがわかるでせう。

彼は一六〇五年に生れて、一六八二年に歿した。だから、十七世紀に屬して、而かも長い一生涯は、殆ど世紀の初から、終りの數年以内へまで亙つてゐる。彼のことは、左程澤山わかつてゐない。牛津で教育を受け、そして醫學を研究した。それから、子守歌でお月樣の中の男が、そこへ行く道を尋ねた町といふので有名な、英國の田舍町のノリッヂで開業した。職業の閑暇に、長い間を隔てて、著はしたのが、三つの小册で、それぞれ『醫家の宗教』、『俗謬篇』、『甕葬論』と題してある。人生と宗教に對する人文主義の論文なる第一の書も、坊間の誤謬を論じた第二の書も、この場合あまり吾々に用は無い。それらは第三の書のやうには、彼の文體を現はさない。この『甕葬論』は骨壺に入れて葬ること、卽ち古代の人民が、死人の灰を陶器又は金屬の壺に入れて、葬つたり、保存したりする習慣についての論文である。私が二三の拔萃をしようとするのは、この書からだ。ブラウンの存命中、彼は最も驚くべき學者で、また人好きのする人として認められてゐたが、彼の文學上の著作の、一層立派な美點を感賞し得たものは、僅かに數人に過ぎなかつた。が、人に好かれる人品であつたから、社交上の成效を得るのは、何の譯もなかつた。可なりの富を作り得るし、チャールズ二世によつて、勳爵士に叙せられもした。死後その藏書手稿は

競賣になつたが、幸にも後に大英博物館に買はれた。彼の著作全部は、二三の遺稿の隨筆を併せて、ボーン叢書の中で、三卷になつてゐる。然し著書の一部の、もつとよい出版が最近出來た。また他の部分も出版中だ。多分今後五十年の內には、ブラウンは再び大いに研究されることがあるだらう。

甕葬についての書は、實際、學生にサー・トマス・ブラウンを最もよく理解さして呉れる。他の何れの書も、そんなによく彼の博學と、詩趣を見はすものはない。實際、學問の更に進歩した今日でさへ、サー・トマス・ブラウンの博學は、最も博學な人々をも驚かせる。世に聞えた殆ど有らゆる古典作者からも、また尋常の學者には滅多にわからない、澤山の作者からも彼は引用する。獨逸、伊太利、西班牙、丁抹の作家からも、それからまた、幾多中世紀の哲學者や、教會の先輩學者からも引用する。凡そ上は古代から十七世紀の中頃に至るまで、科學に關して書かれたもの一切――植物學、解剖學、醫學、錬金術、占星術――を讀んでゐたやうに見える。そして、彼が擧げてゐる典據の目錄だけでも、驚くべきものである。が、十七世紀に、西洋のすべての書籍を讀んだ人が居たといふことよりも、その貪讀家が讀んだものを記憶し、消化し、組織を立て、そして、その中で到る處に、他人が氣の付かなかつた美點を發見したといふことが、遙かに驚くべき事實である。尤も、

博學そのものが、特に面白いことは無い。そして、衒學、卽ち必要もないのに、學問を見せ付けるといふ非難は、一度ならずブラウンを相手取つて、持出されたかも知れない。今日では英語の著述をするのに、希臘拉丁の著者から引用するのは、立派な學者の面目上、少々俗だと考へられてゐるのだ。自分の知識を見せびらかさうと、してゐるのだと云つて、すぐに非難を受ける。然し今日でも、且つ一般さうなつてゐるのに、一人の大批評家も、ブラウンを責むるに、衒學を以てするものはあるまい。彼は古典的題目について書く折にのみ、廣く古典作者を引用する。而かも、ある人名か、事實を引用すると、必ず人を驚かすやうな、案外の興趣を生じない場合はない。加之、拉丁とか希臘の原文は滅多に擧げないで、その思想を英語で現はしてゐる。後日私は彼の文體の長所と共に、本質的缺點をも諸君に示して見ようが、今は先づ二三の拔萃を硏究することにしよう。

甕葬の小冊には、第一章には主もに古代諸國民——實際、世界中の國民のと云つてもよからう——の葬式の習慣が書いてある。さまざまの習慣に對して、哲理上又は宗教上の理由も添へてゐる。而かも、該書では、これが一切、二十頁ほどで書いてある。だから、サー・トマス・ブラウンは冗長でないことが、わかるでせう。その反對に、彼は種々の事實を一つの堅實な組織にするやうに、非常に強く壓し合はせる。この章から少許の文章を取

つて見よう。

水が萬物の本であるといふ、セレーズの說を奉じた人々は、腐朽といふ原理に服して、濕つた溶解に歸するのが、最も當を得てゐると考へた。他の人々は、ヘラクリタスの說に從つて、組織體に於ける最上原理に基くのだからと云つて、火に歸するのが最も自然だと考へた。それで、大きく薪を積重ねて、一層層に火の方へ浮騰し行くやうにした。斯やうにして、彼等も亦明かに蛆虫と墮了することを免れ、組織の永久分子を留めた。、、、が、火の大崇拜者たるカルデーアン人は、火神を瀆すものだといつて、死骸を燒くことを嫌つた。波斯の僧侶もこれに似た遠慮から、火葬を避けた。そして、骨のことだけを心配して、肉は鳥や犬の餌食に曝した。それから、現今印度に居る火教信者は、屍體は兀鷹に曝し、燃料の性質だからといふので、木製の棺架さへも、寛假しないで、非常な儀式嚴守に迷つてゐる。が、土葬を營んだ古代の日耳曼人は、彼等が仰いだ『地の神』を瀆す恐れを抱いたのであつたか、どうだか、吾々は根據ある推測を有しない。

埃及人が火を怖れたのは、神としてでなくて、無慙にも肉體を烏有に歸せしめて、あまりに殘す影も形も無くする、呑噬的原素としてであつた。だから、高價な香料を詰めて、木乃伊にしたり、乾燥した土中に埋めたり、或は美しく玻璃で圍つたりして、卓拔な保全法を圖つた。それで、ピサゴラスが、かゝる埃及人の疑懼にかぶれたので、ヌーマとピサゴラス派は、初め火葬法を避けたも

のらしい。薔をするとき、大氣と劍、卽ち生命と死を指したシヂャン人は、火葬どころか、一切の埋葬を嫌つて、大氣中に墓を作つた。また埃及邊の魚食民族は、好んで海を墓とした。かくして、人目に見えて腐敗するのを避け、且つ肉體の負債をも償還した。然るに、ホーマーの詩にある古代の英雄が、水又は溺死ほど、怖はく思つたものはない。靈魂の實質は、火であつて、水によつてのみ消えるといふ、古說に基いたものらしい。だから、ホーマーはエーヂャックス、オイリユースのやうな、この種の死の場合には、極力全滅をほのめかしてゐる。

こんな風に、各頁が事實と批評で、ギッシリ詰つてゐる。支那の葬俗——十七世紀の歐洲人には、あまり知られなかつた——さへ擧げてゐる。而かも、いろいろの事情の割合には、彼のそれに對する說は、可なり正鵠を得て居る。諸君は乾燥無味な問題が、こゝでは最も面白く取扱つてあることを認めるでせう。これは枯骨を活かす藝術だ。が、要點はその文體である——時代は一六五八年で、まだ十七世紀の初期といふことを記憶なさい。これらの波瀾重疊たる文章は、すべて浪のやうに規則正しく、且つ圓やかに起伏して、いかに品位があつて、朗らかで、立派に彫琢してあるかを御覽なさい。諸君はこの作者は學者——希臘拉丁の文章の長い音樂に、耳を馴らした學者——であることを感ずるでせう。そ

して、今は廢語となつたり、或は意味の變化した言葉が、使つてある場合にも、大概前後の文脈から、よく意味がわかる。例へば、『寛和』といふ語は、今では本文のやうな意味はないが、『溶解』の意に用ゐてある。それから、『終結する』といふ語は、今は最も普通には、文字通りに『終る』の意であるが、この昔の譯者は、『世を終る』の意に使つてゐる。が、諸君はこれを知るために、卷末の語彙を見るに及ばない。

こんな作者に對しては、今日の大家が心得てゐる、洗煉した散文のあらゆる手法を、吾吾は期待するかも知れない。そして、その手法は實際、精緻完備を極めて居る。餘程後世に、マコーレーの爲め有名になつた對句法を、ブラウンは用ゐて、全然同等の巧妙と、それから恐らくは一段の風致を示した。比喩法は確かに、全然マコーレーほどに、驚くべきものである。

パトロクラスの火葬壇は、百尺の場所を塞いだけれども、古くなつた舟の一村片で、ポンペーを火葬にした。そして、もしアイザックの脊負つた薪が、全燔祭に足りるならば、人は自分の火葬壇を持運び得る譯だ。

作者が數學のこと、庭園のこと、墓のこと、星のことを語つてゐても、その事實がいつ

も面白くなつてゐる。幽靈の問題について語り出すのを聽きなさい――いかにも事實の蒐集が珍らしく、對照は如何にも力がある。

[原著註一]ホーマーの詩にある人間の陰府では、死人が皆生きて居るやうであるが、人の生命の籠つた血を飲まないでは、十分に物を言つたり、預言をしたり、生きた人を知ることが出來ない。だから、神使マーキユリーに案内された、ペネロピーの情人輩の幽靈は、蝙蝠の如く鳴いた。またハーキユリースに隨いて行つた幽靈共は、鳥の群のやうな騷ぎを立てた。、、、亡魂は過去と未來が解つても、現在のことに暗い。アガメムノンはユリッシーズの行末を預言しても、自分の子が、どうなつたかを知らないで尋ねてゐる。ホーマーの詩では、亡者は刀を懼れて居るが、ヴァージルの詩では、シビラがイーニーアスに向つて、亡者の薄い衣には、武器の力も叶はないと云つてゐる。亡魂は肉體と共に、敵意を脱ぎ棄てる。それで、拉丁人の冥府では、シーザーとポンペーが和合してゐるが、ホーマーの詩では、エーヂヤックスは、ユリッシーズと會談を肯はない。それから、ディーフオバスは、ヴァージルの書いた、亡者では、ひどい疵で滅茶苦茶になつてゐるが、ホーマーの書いた、負傷した亡者の中では、完全無疵の幽靈になつてゐる。

が、これらの例は、ブラウンの粹を示してゐない。たゞ單に彼の尋常な文體を證するに

足るだけだ。引用で以て彼の粹を示すのは、セーンツベリー（譯者註二）教授が先般指摘したやうに、頗る難事である。ブラウンの華麗は、珍奇な文章に存してゐる。その文章が出てくる全ページは、どういふ譯か、爲めに光彩を發するのである。埃及の木乃伊を藥用に供することについての、驚嘆すべき節は、誰でも學生は知らねばならない——木乃伊の肉は、一七二一年までは、英國の醫術上、藥品になつてゐた。この文章の出てくる全節を、諸君に讀んで聞かせたいが、あまり時間を要するだらうから、結論を引くだけにしよう。

埃及人の發明の才は、更に慊らないで、肉體を芳香ある、堅實なものにする工夫をして、靈魂の歸つて來るのを待つやうにしたが、一切悉皆、風に食物を與へるやうな徒勞と、愚とであつた。カンビシーズ（譯者註三）や、多年の歲月が惜まず殘して呉れた埃及の木乃伊を、今や世人の貪慾が消費してゐる。木乃伊は商品となつてゐる。ミズレーイム（譯者註四）は瘡藥となり、フエアローは鎭痛膏として賣られてゐる。

若しサー・トマス・ブラウンが現代に生きて居たならば、ナイル河の蒸氣船で、木乃伊が石炭の代りに使用されることを、附け加へたかも知れない。——吾々の知つてゐる頃までもさうであつた。普通人民の身體は、大抵瀝青のやうな、廉價な樹脂質のものを使つて保存してあつた。だから、實際よく燃えるといふことを、汽船會社が發見するや否や、蒸

氣を起すために、何萬といふ數の木乃伊を焚いたのであつた。それから、その習慣を止める英國の法律が制定されるまでは、木乃伊の灰が肥料として賣られてゐたことを、諸君は聞いたてあらうと思ふ。この數ページに於ける、ブラウンの目的は、諸行無常、一切消散の世の中だから、葬式の華麗とか、婆婆に偉名を留めようとすることなどの愚かさを、指摘するだけである。そして、彼の例解は常に著しく躍如たるものである。人生無常の問題については、この書は素晴らしい文章に滿ちてゐて、多くは諳誦する價値がある。が、今少し陰氣臭くない問題へ――『サイラスの庭』第四章の美しい一節へ――移ることにしよう。

物を見えるやうにする光は、ある物を見えないやうにする。暗黒と地球の影がなかつたならば、宇宙の最も高尙な部分も、空しく見えないまゝであるだらう。空の星も、太陽と共に水平線の上に創造されて、眺める人のなかつた、宇宙創造の第四日目に於ける如くに、見えなかつたであらう。宗敎の最大神祕は、淡影で表現してある。だから、最も高尙な猶太式象徵に於ては、天使の群が惠みの御座に影をさしてゐる。生命そのものは唯だ死の陰影であつて、逝いた靈魂は唯だ生者の陰影に過ぎない。一切のものは、この名に歸する。太陽すら唯だ神の暗い類像であつて、光は神の陰影に過ぎない。

この引用をした小さい隨筆は、大概甕葬の書と一緒に綴ぢてあつて、『サイラスの庭』と題してあるが、頗る珍らしいものである。それは五點形に關した論說、卽ち更に平易な語を以てせば、五といふ數について、數學的、幾何學的、また神祕的な價値を論じたものだ。この醫者は、五個苑の集團に庭木を配置することの價値を說いて、問題を論じ始め、五といふ數が、宇宙に對する有らゆる關係に於ける意義を、進んで追究して行つてゐる。天上、地上、また地下の水中に於けるその數を論じてゐる。單に人間の手足に、五指五趾の區分があるのみならず、無數の動物の四肢や、花瓣にも、同樣の區分がある事を述べてゐる。是等の觀察では、彼は大發見に近寄つてゐたのである。諸君の知る通り、今日の植物學は、花の區分上、五つ苑、及び六つ苑の意味を認めるし、また現代の生理學は、馬や牝牛の蹄に於てさへ、太古に存在した五趾の痕跡があるといふ事實を明かに確定してゐる。もしこの醫師が、今少し後世に――假りにかの田舍醫者、エラズマス・ダーキン[譯者註五]の時代に――生存してゐたならば、チャールズ・ダーキンの幾多の發見を豫告し得たかも知れない。兎に角、この小漫筆は讀んで面白い。そして、彼は現代科學のある概則を豫知しなかつたにしても、それでも『一切のものは秩序のうちに起つた。その終るも亦さうであらう。そ

して、またそのやうに始まるだらう。天の都の秩序と、神祕的數理を制定した者の意に從つて、さうなのだ』といふ彼の宣言を示立することが出來た。

サー・トマス・ブラウンを、基督敎的意味の以外で、神祕家と呼ぶのは、誤りであらう。實際宗敎的の人であつたので、敎會が咎めると思はれた說を、敢て述べることはしなかつたらう。が、彼ほどに神祕主義の詩趣を感じた人は無い。卽ち實際自身に神祕主義の憧憬を有しないで、これほど立派にその憧憬を表現した人は無い。だから、彼の著書は神祕主義文學の部類に入れられて、神祕家が大いに感賞し、硏究する。彼の著書を讀むと、正統派基督敎に取つては、あまり寬宏に見えるが、もつと古い東方の宗敎の敎訓を、立派に說明するやうな暗示と思想に、喫驚せねばならぬことが往々ある。

若しサー・トマス・ブラウンに就いての是等の註釋が、その傑作中の或る書に對して、諸君の興味を起させる役に立てば、私は欣ぶでせう。が、諸君に取つての彼の價値は、主もに暗示を與へるといふ方面に存するだらうと思ふ。彼は文體の或る手法——對照法、壓縮法、拍子及び旋律の法——に於ける偉い師匠である。然し諸君が後者を彼に學びうるとは、私は思はない。諸君が學ぶことは、隱喩の對照の價値と、言葉の立派な節約の價値でせう。他のことは全然餘りに古典的で、諸君はその祕奧を曉り難い。實際、希臘拉丁の素

養あつて、始めて彼の文體の美點が、十分に曉り得られるのだ。が、すべての眞正の文體のやうに、そこには唯だ性格、人格——人品の魅力、精神の優美——を示してゐる部分が澤山ある。そして、それは諸君に悉くよくわかる。諸君が苟も彼の書を讀んで、その作家の人物に對して、異樣な回顧的愛情を感じないことはあるまいと思はれる。

さて諸君が英文學史上、彼の地位について、記憶すべき大切なことは、彼が英國の古典的散文の元祖であつたといふことである。彼はヂョンスン博士が感興を得た源泉であつた。彼はまた後世ギッボンが、頗る大規模に發揮した、英國散文に於ける莊嚴と、音調朗々といふ力を現はした最初の人であつた。彼はまたマコーレーの驚くべき文體の、頗る大部分を成してゐた、對照と對句の法を有效に用ゐた率先者であつた。それで今日でも、如何なる學生もブラウンを讀めば、必らず得る處がある。彼はベーコンや、其他可なり澤山の、もつと廣く知られてゐる人々よりも、遙かに優れてゐる。私はベーコンの論文を研究することが、文體の點に於て、少しでも學生に裨益する處があると考へない——それどころか寧ろ正反對だ。ベーコンの價値は、主として彼の思想に存してゐる。が、サー・トマス・ブラウンは、思想と文體とを二つ乍ら、極めて立派な恰好で與へて呉れる。

けれども、私は不贊成の一斷言を下さねばならない。我々が考究してゐたやうな文體—

―ギッボンとか、マコーレーの文體も除外せずに――には、すべて一個の缺陷がある。それはその力の及ぶ範圍が、必然狹隘であるといふことである。學者的文體では、出來得る限り最大範圍の讀者に訴へる譯に行かない。その上わるいことには、すべて斯る文體は、自然的よりは更に技巧的であるから、腐朽分解の要素を、幾分かその中に含んで居る。吾吾は今日ブラウンの書をよむには、――卽ち、彼の思想を解釋するに、餘程嚴密を欲する場合には――語彙が要る。諸君は彼の著書に、廣汎な語彙が用いてゐるのを見るでせう。ギッボンとか、マコーレーには、それがないだらうが、これは唯だ兩人が、未だ吾々と時代が近いからである。それにも關らず、前者の言葉は、美しいとは云ふものゝ、今では明かに古風になつてゐる。そして、後者の硏究は、現世紀のうちに、多分時代後れになるだらう。前の講義で文例を示した、あの簡素な北方の文體の場合に於ては、全然これと趣を異にしてゐる。その原語は死んでも、その文體は決して舊式にはならない。技巧的なものを一つも含まないから、頽廢の要素を少しも含まない。最も學問のある人も、それから最も文盲な人をも、同樣にうまく感動させることが出來る。そして、若し吾々がその全く簡素な文體と、サー・トマス・ブラウンの華やかな音樂及び色彩との間に、苟も取捨を決すべき場合あれば、私は毫も躊躇する處なく、簡素な文體が遙かに善いと、諸君に告げざる

を得ない。然しそれは古典的作家達が、正當に贏ち得た賞讃歎美を、彼等に與へることを拒むといふ理由にはならない。

三

ビヨルンソン

もつと驚歎すべき散文を研究するに先つて、私は日本に廣く傳播しゐて、且つ甚だ有害な誤想と思はれるものについて、諸君に語りたい。英文學の學生は、英語では唯だ英語の原書――他國語からの英譯書でなく――をのみ研究すべきだといふ量見違ひを指すのである。無論、此頃では、飜譯に信を措かないことに、幾分の理由があるのは、私も認める。唯だ金儲けのために、大急ぎで、まづい飜譯が作られる。そして、現代の飜譯の莫大な分量のものは、まるで駄作である。然し外國の著書であつて、長く英語の中へ取入れられ、且つ實際英人の共有財産となつて居るものの場合に於ては、甚だ趣を異にしてゐる――ただ思ひ當り次第、二三を舉げると、例へば、『亞剌比亞夜話』の譯、ゲーテの『ファウス

ト』の壯大なる散文譯、カーライルの手に成つた『ヰルヘルム・マイステル』の譯、子供が皆讀む『アンディーン』[譯者註六]の譯の如きである。伊太利、西班牙、露西亞の大家――佛國作家は申すまでもなく――の譯書も同樣である。實際、若し英人が唯だ英文學だけを研究してゐたならば、英文學は決して今日の發達を見る事は、出來なかつたであらう。それから、若し英人が外國文學を、唯だ原語でばかり研究してゐたならば、英文學は依然、微々たる進歩に止まつたであらう。英國の詩、小說、散文の上乘なるものが、外國の感化によつて、修飾されたり、改善されたりしたのは、學究的研究によつてでなく、數千の飜譯によつてであつた。私が嘗て諸君に言つた如く、文學の發達は、唯だ極めて僅かな程度に於てのみ、學者達の業である。大學者は滅多に、恒久的文學の作者でない。かゝる文學を作る人は、博學とは關係のない、生來の天才を備へた人でなくてはならぬ。而して、その大多數は、普通人以上の教育さへ受けて居ないのが常である。是等の人々に、異國思潮の刺戟を與へるには、それを彼等の自國語で提供してやらねばならない。さて、外國の影響が、主として飜譯によつて、作用を呈するのは、諸君に取つて甚だ奇妙に思はれるでせうが、殆ど有らゆる歐洲文學の歷史が、さういふ次第になつて居ることを、證明してゐる。そして、私は確信するが、若し日本で將來、廣大なる新文學が出來るとすれば、幾千の譯書によつて、

新鮮なる思想が廣く國民に同化されて、然る後始めてのことであらう。是等の理由からして、私は英文學の研究が、英語の原書、または英人の著書の研究だけに限らるべきであるといふのは、頗る不幸なる考へだと思ふ。

英國少年の智力は、如何にして作り上げられるか。諸君がそれに關して考へてみると、英文學は實際、彼に對する世界的諸影響のうちで、僅かに一部分、而かも一小部分しか示してゐないことを見出すでせう。子守歌の大部分は、實際、英國に發生したものであるが、その齡期を過ぎてから、お伽噺の時代が來る。その中で、英國に起源したお伽噺は、極めて僅かである。實際、私は『巨人殺しのヂャック』と『ヂャックと豆の莖』は、眞に英國のものだといふ點から云へば、全く例外的であると信ずる。『長靴の中の小猫』は、英國のものでなくて、佛國のものだ。『シンダレラ』は佛國のもの。『眠れる美人』は佛國のもの。『白猫』は佛國のもの。それから、『青鬚』も佛國のものだ。事實、英國のお伽噺の大部分は、唯だ二人だけ擧げると、ペロウ（譯者註七）や、ドルノイ夫人のやうな、佛國作者から譯したものである。少年がこの想像的食物を飽喫してから、そのつぎの讀書の課程は何であるか。一層深味のある、他のお伽噺である——半ば純粹の話で、半ば道德的教訓。そして、何處から是等の話は來るか。さて、是等のものは全然英國のものではない。他國語、主も

に獨逸語、瑞典語から譯したものである。この種のすべての著述中、最も重要なのは、ハンス・アンデルセンのである。子供といふ子供は、是非それを讀むことになつて居る。そして、それが今は餘程英國兒童生活の一部となつてゐるから、アンデルセンが生れなかつた頃は、子供達は何をしてゐたかと、怪まざるを得ない程である。此種類て獨逸の傑作は、グリムのものである。誰ても少しは、それを知つてゐる。これを讀んでからは、一般に冒險談、若しくは或る種の輕い物語を讀むことになる。無論、『ロビンソン・クルーソー』がある。これは英國のものだ。それから、『ガリヴァー旅行談』があるが、この二つを除けば、第一流の少年物語は、大概譯書であると私は信ずる。例へば、私の少年時代に、ヘンリー・(譯者註八)コンシエンスの物語類は、すべての少年に讀まれたが、それらは、和蘭語から譯したものだ。それから、少年が進んでサー・ウオーター・スコットの書を面白がる頃になつても、一層强い外國の文學的感化力が、少年の想像力に作用を及ぼすのである――例へば、大(譯者註九)アレクサンドル・デュマの魔力の如きである。『モント・クリストー』や、『三銃士』の驚くべき話は、青年必須の讀物となつた。そして、英國近代小説に對する、その影響は頗る偉大であつた。もつと進んでから、ヴィクトル・ユーゴーの異常なる小説を讀まねばならぬことになる。それて、英國の學生は、直接又は間接に、獨逸の大家や、佛蘭西

の大家の影響を蒙らない時代はない。チューマや、ユーゴーのことをいふと、それは近代の作家を擧げてゐるのだと、無論諸君は云ふのでせう。左様、彼等は現代作家とも云へる。然し吾々が是等の大家未だ現はれなかつた昔を顧みても、外國文學は現代英文學に影響を及ぼしたと全然同様に、イリーザベス時代の人々にも影響を及ぼしてゐる。十八世紀には、佛國の影響があつた。また他の外國の影響も働いてゐた。當時は、誰でも佛國の古典派作家のものを讀まねばならなかつた。然しそれすら單調無味ではなかつた。そのうちには、浪曼的時代の作者が、十九世紀の英國少年に與へたのと、同じやうなものを與へて呉れた物語作者もあつた。それから、十七世紀には、伊太利や西班牙のと混じて、佛國の影響も幾分あつた。イリーザベス時代には、教育があまり廣く普及して居なかつたが、當時の青年は、西班牙の小說や、物語を讀むのを常としたことや、百七十種も西班牙書が、當時譯せられたことを吾々は知つて居る。

想ふに諸君は、すべて斯ることからして、英文學の生命は實に飜譯に基くといふこと、且つ英國青年の精神は、決して純然たる英國の感化力に因て作られるのではないといふことを知るでせう。私が希臘語拉丁語の研究のことに一言も及んで居ないのを注意なさい。希臘語拉丁語は外國の感化力どころか、實際、消え失せた別世界からの感化力である。そ

れからまた、私はあれほど莫大な、宗教文學の力について、何事も言說しなかつた――ヒーブルー文學、卽ち聖書の文學で、母の膝元で子供が習う祈禱は、それに基いてゐる。事實、英文學は英國敎育の主要なる要素とはなつてゐないで、全く微小なる位置を占めてゐる。英人が單に英文學を知つただけならば、彼の知る處は實に僅かなものであらう。英文學の粹は英語で書いたものであらう。例へば沙翁がある。が、英文學の大部分は、確かに英國のものでない。そして、今日でもその年々の著作は、ますます佛國、伊太利、露國、瑞典、那威の思想によつて影響されつゝある――幾多東邦からの新影響を擧げないにしても。

さうだ。諸君が學び得る或る外國語を、唯だ或る一國民の思想を表はすための媒介でなく、世界中で最も立派な思想を諸君が獲る手段として考へねばならない。若し諸君が露語を解し得ないならば、何故に英譯又は佛譯の露國小說を讀まないか。恐らくは諸君は伊太利語又は西班牙語を讀み得ないだらうが、それがペトラールカ(譯者註十)や、アリオストーの詩、又はカルデロンの劇を知らぬ理由にはならぬ。諸君が葡萄牙語を知らないならば、カモーエンスの立派な英譯がある。東京でフヰンランド語を知つて居る者は、極少數と思はれるが、驚嘆すべき敍事詩の『カレヴアラ』は、今日英語、佛語、獨逸語で讀むことが出來る。印

度の偉大な叙事詩を知るために、梵語を學んで居らねばならぬ事は無い。『マハバラタ』と『ラマヤナ』の幾多歐洲語の譯がある――實際、梵語の傑作は、大抵英譯や佛譯がある。尤もこの方面では、獨逸人が恐らくは最大の業績を成した。亞剌比亞や、波斯の詩人のものも亦英語で讀むことが出來る。それから、誰人も幾分か知らねばならない東方の古典がある――ファーダウジー[譯者註十一]の『シャー・ナメー』、卽ち『列王傳』、サアディーの『ゴリスタン』、ハフィッツの『ディヴァン』のやうなものである。そして、英譯のものだけに就いて云つても、世界中の殆どあらゆる國民の、文字に書いた文學も、文字に書いてない文學も――最も野蠻な種族の歌謠や、俚諺までも――英語で讀むことが出來る。この種の英譯書には、一つの大缺點がある――大抵こんな飜譯は、拙劣な詩に譯してある。だから、散文體に賴つた佛譯の方が、槪してよろしい。然しある譯者は詩に譯する場合にも、どんなに偉い手腕を發揮したかを、諸君は明かに知つてゐる――例へば、フィッツゼラルドがさうだ。そして、バーマー[譯者註十二]の古代アラビヤ詩の譯書も、フィッツゼラルド[譯者註十三]に殆ど劣らぬほど、面白く且つ同情に富んでゐる。だが、私が諸君に肝銘させたく熱望することは斯うだ――英語は只單に一個の民族の作品について、幾分の知識を與へ得るのみならず、尙また全世界の知識の財寶を與へ得るといふことだ。英國に獨逸語を讀み得ないものは幾千人もあるが、

苟も教育ある人にして、英譯で獨逸詩人に接したことのない人や、ハイネの或る詩を引用し得ないものは無い。

さて、若し諸君が英語の研究は、英國作家の研究以上に、遙かに深い意義のあることを納得したならば、私がこの講演を、英國固有の散文に限らうと試みない理由がわかるでせう。私はどんな種類の歐洲の散文に於てでも、私が見出しうる唯だ最上の文例を、説明のために取つてみよう。その理由は、一切のことは、思想と形式に賴るので、而かも、散文の思想も形式も、(詩の場合は別であるが) 國語の境界で制限されるものでないからである。この連續講義のうち、前の二講に於て、私は二つの極めて異つた文體の例を示した——一つは古代北方人種の文體、卽ち古史文體を代表し、今一つはサー・トマス・ブラウンの細緻で、奇怪な、殆ど衒學的な、しかし美しさ匹儔のない散文。兩者は共に過去に屬し、且つ殆ど出來る限りの對照を呈してゐた。今度は近代、十九世紀に轉じて、また最も簡素な種類の散文と、最も裝飾的な種類のと、二つの顯著な例を取つて見よう。簡素な文體は、今度も北方人種であるだらう。何故と云へば、私が示した古史からの引例に、頗る著しく現はれた民族の天才は、今日再び該民族の十九世紀散文に發露してゐるからである。さて、それに就いて話すことにしよう。

諸君は北方人種の文學が、各世紀を通じて、變化を蒙らずに居たと思つてはならぬ――私は言葉のことを云ふのではなく（それは決して同一ではない）、手法のことを云つて居るのだ。さうではなく、那威人、瑞典人、丁抹人は英人、佛人、伊太利人、獨逸人と、非常に同種類の文學的經驗を受けた。彼等も亦浪曼的時期と、古典的時期を有した。彼等でさへ、特に丁抹人は、一時技巧的になつた。それから丁抹の文化は、十九世紀に入つてから隨分の後までも、その古典主義は餘程守舊的であつた。そして、當時那威と瑞典の敎育を、主もに影響したのは丁抹の文化であつたが、一八三二年に、昔の古史文學を現代に復活させ、斯くて類を前に見ないやうな、新文學を作る運命を有つた人が生まれて來た。それはビョルンスターン・ビョルンソンその人であつた。彼は普通の大學課程を經たが、左程學問は出來なかつた。いつも希臘語や、拉丁語や、數學よりも他のことについて、空想に耽つてゐた。そして、大學に於ける名譽を競はうとしないで、大學課程とは無關係の書籍を讀む爲めに、あらゆる餘暇を擲つた。昔の北方人種の文學が特に彼の興味を惹いたので、苟もそれに關したものは、手當り次第に讀んだ。試驗に及第するのが、なかなか困難であつた。それで、同窓の學生は、彼が世の中で何か偉いことを成し得るとは、決して想像しなかつたが、やがて、大學を出てから、この夢をみて居る青年が、俄かに莫大の、思

ひも寄らぬ知的勢力を發揮した。彼は新聞記者となつた。これはすべての職業の中で、文學者が試みるのは、最も不得策である。それにも係らず、彼は暫くも經たない内に、驚くべき小説を出して、それが全歐洲の注意を惹起し、大抵の歐洲語に譯された。この小説は、『シンニョーフエ・ソルバッケン』といふ、諾威の百姓生活の話であつた。ビョルンソン自ら百姓の子であつたから、この小説に描いた實況の生活をしたり、見たりしたのであつたが、その書の驚くべき點は、話、卽ち筋に存しないで、話振りの目覺ましい點であつた。宛然八九世紀の古史作者が書いたやうだ。成程、描いてある生活は近代であるが、それを話す手法は、學者がまたと再興は出來まいと思つてゐた、一千年昔の手法であつた。ビョルンソンはそれを再興させた。また、それが爲めに、殆ど歐洲の有らゆる文學に影響を與へた。佛國の寫實派大家の或る人々には、特に影響を及ぼしたことであらう。要するに彼は、苟も文學に興味を有する人には、何か考へさせる新しいものを提供したが、この初作は唯だ目覺ましい、續出の作品——詩や、物語や、歷史的又は政治的の——の端緒に過ぎなかつた。ビョルンソンは政界に打つて出て、政治家となり、國の譽となり、澤山偉いことをした。だか、彼の眞價は、現代北方文學とも呼ぶべき新文學の父であり、建設者である處に存する。現代北方作家を研究することは、日本の學生に取つて、非常の效益となる

べき譯だ。何となれば、この遒勁簡素の文體は、日本の散文に於ける最上の流儀と、極めてよく一致してゐるから。加之、これら諸家の著書は、學者風の人々によつて、英譯されたのであつた――明瞭純粹なる英語の作家であつて、原文の價値を保つことが出來た。これは英語に頗る近い――佛語より更に近く、獨逸語よりさへも更に近い――固有の北方の方言の場合には、出來易いのである。文體が簡素なれば、簡素なるほど、飜譯で損ずることが少いものである。

加之、諸君はこの人の作中に、一國民の社會と性格を描いて作り得らるゝ最も完全なる繪畵を見るでせう。その人物は諸君に興味を與へるに、きまつてゐる――英文學を學ぶ者は誰にも、興味を與へる筈だ。その譯は、英民族に於ける最上の要素、英文學に現はるゝ最も强い感情と、大抵の最も立派な感情が出て來たのは、この遠い北方からであるから。是等の話、卽ち實生活の描寫によつて見ると、民族が昔から餘り變つてゐないことがわかるでせう。尤も今日諸威の諸學校では、學生が英佛語を習つてゐる。近代の科學、近代の哲學は拮据勉勵されてゐる。詩人、戯曲家、科學者、藝術家が輩出して居て、殆どいづれの他國のそれらと比較して見ても、決して劣らない價値がある。ビヨルンソンや、イブセン（今日諾威の文士で、ビヨルンソンと相竝ぶべき、唯一の人）が、現に英文學や、一般

歐洲劇に感化を與へることが出來たのも事實であるが、一國民の性質に於ける特徴が斷定さるゝのは、都會に於てでも無く、また最も教養の高い階級に於てでも無い。それを學ぶためには、田舍へ行かねばならない。實際一國の本體と成り、力と成つてゐる百姓を知らねばならない。ビョルンソンは、これをよく知つてゐた。また彼の大學教育が禍をなして、斯る研究の文學的價値に對して、彼を盲目的ならしめるやうな事もなかつた。彼の小說中の逸品、また小說の大部分は、百姓の生活を扱つたものである。そして、彼はこの生活を歐洲文學に於て匹儔のない様に描いてゐる。ツルゲニエーフなどの露國作品が、その例外と云へば、云へるのみだ。ビョルンソンは、また中流社會や、僧侶や、それから、スペンサーの哲學と、カントの倫理を論ずるやうな、非常に教養のある大學の連中に於ける、諸威人の性格をも描寫してゐる。が、是等の性格の研究は、百姓に最もよく現はるゝやうな、眞正の北方人性格が、現はれてゐる程度に隨つてのみ、興味がある。それは頗る峻嚴な、强い、怖ろしい性格であるが、また愛すべく、且つ尊むべき者である。時としては、殘酷で、吾々の想像し得る極度に、畏怖すべき氣質であるが、確實、愛情、感情力の深度に於ては、頗る偉大なるものである。子供を打つやうな、怖ろしい親達や、時には惡鬼とも戰ひ、或はその擇べる少女の愛を求めんが爲めに、懸崖を攀ぢのぼるやうな、怖ろしい青年

は、まだ野蠻人であると、最初は思はれるだらう。然しその不思議さの打撃が消えた後には、彼等も結局、頗る人間的で、甚だ愛情に富んでゐるし、またその擧動が、我々よりも粗暴であるにしても、それは彼等は我々よりも一層強くて、苦痛を堪へ、且つ苦痛によつて益を得ることが、更によく出來るからである。さて、私が云つた如く、有らゆる種類の、北方人民の社會が、ビヨルンソンの小說に描いてあるが、最大傑作は『シンニヨーフエ・ソルバッケン』の話である。百姓生活の極めて簡單な話であつて、田舍の少年少女が、結婚するまでの生活を寫し、特にこの二人の內部生活――彼等の思想、煩悶、愛情――を扱つてゐる。敍述が眞を得てゐる以外に、何等の異常なことはない。この敍述が、頗る前述の古代北方作家が、成したやうに出來てゐる。

私は唯だ少しばかり引用しよう――諸君に與へた古史からの古い拔萃が、私の趣旨の存する處を示すために、役に立つに相違ないから。描寫の光景は、子供が初めて敎會へ伴れて行かれて、多年の後、結婚することになる少女を見そめる處である。

少女が長椅子の上に跪いて、手欄越しに顏を出してゐた。彼女は男の方よりは、もつと色が白かつた――彼女に並ぶべきものを、彼が決して見たことの無いほど、色が白かつた。少女の帽子には、

赤いリボンが着いてゐて、帽子の下に金髪があつた。そして、彼女は彼を眺めて微笑した――それで、長い間、たゞ彼女の皎齒以外何物も見えないほどであつた。片手に讃美歌の本を持ち、片手には疊んだハンケチを持つてゐた。すると今、讃美歌の本を、ハンケチで敲いて面白がつてゐた。彼が凝視すれば、する程彼女は笑を洩らした。それで今度は、彼も亦彼女の通りに、長椅子の上へ跪くことにした。すると、彼女は點頭した。彼が一寸眞面目な顏をして見せて、それから點頭した。彼女は微笑して、また今一度點頭した。彼は再び頷いて、それから今一度、それから猶ほ今一度頷いた。彼女は微笑したが、暫らくの間、もはや點頭しないで、彼が全く忘れてしまう頃になつて、また彼女が點頭した。

まだ世馴れない、二人の子供が、初めて逢つて、言葉を交はすほど、十分に近寄り難いとき振舞う有様を、これほど自然に迫つて寫したのは、未だ嘗て無い。彼等は互の容貌が氣に入つて、點頭と微笑によつて、語り合はうと試みた。いよいよ二人が、一緒に會する場合の會話――愛情に滿ちて、また無邪氣な虛榮心や、人を悅ばさうとする無邪氣な願望に滿ちた、子供の出放題の會話――を立派に描いた處がある。が、彼等が一緒に會するまでに、少年が他の一少年と鬪爭をすることが、また立派に語つてある。著者自身が、この鬪爭をやつたに相違ないといふ感じがする。その後、主人公は嫉妬心を有つた、力の强い

男と、實に怖ろしい闘爭をする――殆ど讀者をはつとさせるやうな闘爭。そして、これが恰も千年前に、古史作者が語つたやうに語られてゐる。あまり長いから、私は今それを引用しようとはせぬ。また一部分を拔いては、全部の趣を害せざるを得ない。だが、他日諸君がそれを讀むとき、北方作家がすべて他の作家を凌駕する性質――私の云ふのは、出來事の連續を敍する精確――を、どうか注意なさい。この性質に就いて、ケェア[譯者註十四]教授がつい此頃世人の注意を促した。古史の事を語るときに、私は是等作家の文體は、彼等の官能の完全――視力の敏捷、知覺力の精確――に基くと信ずると述べた。そして、ケェア教授のこの文體に關する講義に於て、述べて居る處は、それを確證するやうに思はれる。例へば、教授は述べていふには、『彼は王が彼の背後に來て、兩手を彼の眼に蔽ふのを感じた』といふやうな記事を、今日の文士は英語で書くかも知れない。北方作家は決してそんな記事を書かないだらう。それは事件の連鎖について不精確だからと、ケェア教授は述べて居る。北方作家ならば、『彼は背後から彼に觸れる或る人を感じた。そして、彼が頭を轉じて見ようとしない内に、彼の眼の上へ手が蔽はれた。そして、手の指環で、王だと知つた』と書いたであらう。これが當然精確な、事實の述べ方である。彼は初め背後に觸れられたと、感じた時に、王が觸れて居るのだとは、分るまいし、また手のほとりか、手の上の何かを

見て、誰の手だと確かめ得るまでは、王の手が眼の前に載せてあるのだと、知ることは出來まい。手指に王の指環を見て、彼は王に捉まれてゐると知つたのだ。實際の場合、一切これは一秒間に起るのだらう。それで、現代の作家は、一秒ほどの短時間内の出來事の連鎖を研究する習慣を有しないが、北方人種は、さうせねばならなかつた。若し自分の眼で、一秒の何分の一といふ時間の出來事でも、測定が出來ないと、彼はいつ自分の生命を失ふか分らない。さて、諸君は『シンニョーフエ・ソルバッケン』のこの闘爭の叙述に於て、事件の連續に關して、全く同樣に完全な精確を見るでせう。甲の男は酩酊してゐる。酩酊してゐるから、闘はうとする。乙は正氣で、闘ひたくないが、些事連發、闘爭の押賣りをされる。一切それが五分か、十分しか、時間がかからないだらう。今日の英國の小說家ならば、恐らくはその十分間を、二行の散文に縮めたであらう。が、ビョルンソンはその十分間に對して三頁を費してゐる。斯うして、どんな英國の作家も出來ない位に、その際の有らゆる興奮と熱情を以て、讀者を竦然たらしめる。と云つて、彼が冗長だと、考へてはいけない。實際彼は絕對に必要でないことは、決して述べない。しかし何が必要だといふことを、遙かに他の作家よりもよく知つてゐる。些細な事柄は、甚だ詳說し難い場合があるからと云つて、避けては居ない。若し諸君の中の誰でも、危險な種類の喧嘩の中へ驅ら

れることがあれば、屹度喧嘩するまでの瞬間の一切の小曲折が、多分そこに居た他人には氣が付かないにしても、自分の知覺に取つては極めて明かであつたことを記憶するでせう。すべて當人が大膽、又は大膽でないといふ事實とは全く離れて、危險は諸官能を鋭敏にする。すべて斯る場合には、平常より善く聞こえ、善く視える。ビョルンソンはこのことを知つてゐた。これが二人の田舍者の喧嘩に就いての彼の記述をして、現代小說で最も優れたものの一たらしめたのである。

さて、私はある一派の開祖として、ビョルンソンに對して、諸君に興味を有たせたい——彼の名を諸君に記憶させ、彼の驚くべき小說を讀むよう、諸君を唆りたいが、私は今これ以上は語るまい。或る未來の日本作家が、日本で成遂げるのを私が希望することを、彼は諸威で成遂げたのだと云へば、それで十分である。諸君は昔の古典と、現代に於ける北方文體の意義が分つた——卽ち、この講演を聽いた以上、該文體について概念を有たなくてはならない。さて、今度はこれとの對照に移らう。この鋭く切つて、硬く、短い北方文體と、現代浪曼的運動の散文とほど、强い反對を呈したものは無い。散文に於ける浪曼的運動は、英國ではその絕頂に達しなかつた。英語はその散文の形式に於ては、散文の最高力を發揮するだけ、完全の域に達してゐない。浪曼的散文が最も優れた完成を示したのは

佛國に於てであつた。文體の大家、多士濟々だから、選擇をするのが難かしい程である。が、所謂詩的散文を創意したのが、唯だ一人あつた――それはボードレール[譯者註十五]であつた。彼は諸君が知る通り、壯麗ではあるが、頗る恐ろしい『惡の華』――恐らくは『有毒な花』と云つた方が、一層よく書名の眞意を表はすだらう――といふ詩卷を著はした、奇異な大詩人であつた。彼はまたポー[譯者註十六]の短篇を佛語に譯した。そして、すべてに亙つて彼は絶妙な藝術家であつた。

四

ボードレール

ボードレールは、散文は詩と全然同様に、或はそれ以上にさへも、詩的に出來るものと信じた。その譯は、詩の單調を抜きにして、その節奏を保存し、また詩の節奏を捨てて、その旋律を取り得た散文は、大家の手腕によれば、詩よりも更に有力なものにもなるからといふのであつた。私はこれが果して眞であるかを知らない。私はそれが眞だと考へる方

であるが、敢て確乎たる意見を述べるほどに、この問題に關する或る點について、十分の學識を有するものと感じない。ボードレールは、それが可能だと考へて、一種の新しい散文を作らうと試みたと云へば、それで澤山である。そして、是等の試作を收めて、『散文で書いた小詩』と題した書は、驚くべき寶であるが、ボードレールは、その序文に何も激しい事を言つてゐない。唯だ彼は或る特殊の題材――夢や、空想や、塵寰の生活が沈思を紊さない孤獨裡で、人々が考へる思想――に對しては、詩的散文を用ひて、好結果を示し得るといふ確信を表はしたのみであつた。彼の散文の隨筆は、すべて空想、夢、幻想である。私はその一例を示さうと思ふ。そして、セーンツベリー教授が、精選して最上としたのを、擇ばうと思ふ。が、豫め諸君に申して置きたいが、英語ではボードレールの眞價が現はせない。私は諸君に對して、藝術的飜譯を試みようとはしない。唯だ詩的散文とは、どんなものかを、漠然と、諸君に示す助けとなるやうな飜譯を試みよう。私が英譯しようとする小品は、自由に譯すれば、『月の贈物』と題してある――『贈物』（文字通りでは、利益の意）といふ語が、ここでは神仙界の教母が、子供に與へる贈品の意に用ひてある。

氣まぐれ者の月が、お前が搖籃に眠つてゐるとき、窓から覗いて叫んだ。『あの子は好きだ』そ

して、そツと雲の梯子を下りて、音を立てずに窓硝子を通り抜けた。それから、母のやうに、しなやかに、やさしく、お前の上に自分の身を擴げ、お前の顔に自分の色を浴びせた。それで、お前の眼はいつも綠になつて、お前の頰は非常に蒼白になつてしまつた。お前の眼が、初めて左程風變りに大きくなつたのは、このお客さまを注視した際であつた。そして、非常にやさしくお前の咽喉を壓へたから、その後お前はいつも不斷、泣きたくなつて來た。

兎角する中に、嬉しさ溢れて、月は燐の空氣の如く、輝いた毒の如く、室一杯を滿たした。そして、すべてその生きた光が、考へたり、語つたりした。『お前は必らず永遠に私の接吻の感化を蒙むるでせう。お前は屹度私のやうに美しくなるでせう。お前は私が愛する一切のもの、また私を愛してくれる一切のものを、愛するに相違ないでせう――水。雲。靜かさ。夜。形が無くて、而かも多樣な海。お前が決して行かない土地。お前が決して知らない戀人。奇怪な花。精神錯亂を與へる芳香。ピアノの上に身を伸ばして、嗄れた可愛い聲で、女のやうに呻吟する猫。

それから、お前は私の戀人に愛せられ、私の御機嫌取りどもに媚びられるに相違ない。お前を綠色の眼の男達の女王にならせる。彼等の咽喉も、夜の抱擁の際私が壓へてやつたのだ――廣大な、どさくさした、綠色の、定形なくて、多樣な海水や、知らぬ土地や、知らぬ女や、ある分らない宗敎の目附役に似た兇惡な花や、意志を昏亂させる芳香や、彼等の狂氣の象徵である獰猛で逸樂的な獸などを愛する男達。

無論佛語では、比較にならぬ程、もつと音樂的で、もつと奇異である。これは詩ではないけれども、詩の性質を有することが、諸君にわかるでせう。詩と同じい反響や、母音の配合や、頭韵や、抑揚がある。頗る奇異であるし、また實に美しい。多分ボードレールの詩的散文は、從來この種の試みの中では、最も完全なものである。そして、これが澤山ある。が、非常な大藝術家だから、前に申した通り、彼はこの種の散文は、唯だ空想、夢、哲理的想像にのみ適することを知つた。そこで、その種の書物は、唯だ一つの文體で書かれねばならぬかに就いての疑問が起つてくる。

さて、これは變な疑問と諸君に思はれようが、私は頗る重要な問題と思ふ。佛蘭西人はそれを解決した。英人は解決して居ない。一切書物の性質によるのだ。もし諸種の材料から編纂された書物ならば、題材の差異に適應する爲め、さまざまの文體で書かれるのが、全く當然だと私には思はれる。然しこれは雜集、卽ち感想と事實の混合の書物でなくては出來ない。感想と事實の結合は、主もに旅行記では、可能である。旅行記では、單なる事實を叙する間は、詩的散文の調子を續けて行けないけれど、事實の感想に及んだ場合、文體を變更することが出來る。佛國の旅行記は、著者がかやうにするから、文學的の手際が、英國のよりも遙かに優れてゐる。その手際が如何にも自然だから、讀者は同一の書に二つ

の文體があることを看過し易い程である。私は詩的散文の妙味ある唯一の眞に傑出した英書を知つてゐる――それはキングレーク[著者註十七]の『イーオーセン』である。が、この場合では、全卷が同一の夢幻的調子で書いてある。著者は左ほどまでに、委細に亙らうと試みてゐない。美しい書ではあるが、同等の技倆ある佛國作家が屢〻示すやうな變通の才を現はしてゐない。此問題を述べてゐる際に、英國と佛國の手法の差を、二人の現代作家が東京を叙する場合に現はしてゐる一例を諸君に示さうといふ考へが、念頭に上つた。英國の作家は、キプリングである。彼は叙事と物語の作にかけては、確かに現存英國作家中、最も手腕を有つて居る。佛國作家中、最も偉大なる現存の散文作家は、ピエール[著者註十八]、ロティー(チュリアン・ヴィオー)で、佛國海軍士官で、且つ翰林院の一員である。私は諸君が極めて短見者流の惡評に因つて、彼に對して僻見に捉はれてゐなければよいと思ふ。それから日本に僅々數週間の滯在で得た、ある觀察のために作者を非難するといふ過失を、諸君がしないやうにありたい。彼は日本に唯だ數週間居つて、眼によつての外は、何も日本の事は知らないので、唯だ見たことを、その儘叙述し得たに過ぎないけれども、しかも彼の日本描寫は、他のどんな現存作家が成したものよりも、比較にならぬ程、もつと立派で、もつと眞を得てゐる。彼の批評や、推測はまるで間違つてゐるかも知れないが(實際往々間違つて

居る)、それは彼の描寫の美とは、實際何の關係もない。見たものを、全然その儘に寫す場合、彼は不思議な魔術家のやうである。現在生きてゐる人で、これと同じことを成しうる者は、外に誰も無い。が、彼の名聲はその日本に關した著書によるのでなくて、空前の美文を含んだ約二十卷の旅行記によることを、諸君は知つてゐるのでせう。だが、先づ英國の旅行家の手紙から數行を取つて見よう。極めて簡易な文句であるが、極めて力が強い。

東京は倫敦に等しい面積に亘つてゐるといふ人もあれば、長さ十哩、幅八哩位だといふ人もある。この問題を解決する方法は、澤山ある。石段をズット登つて、綠丘(譯者註十九)の上に或る茶園があつて、綺麗な娘が一段毎に微笑してゐた。この高臺から、私は市を見渡した。市は海の方から、眼の届く限り遙かに擴がつて居る――ギッシリ固まつた屋根が、灰色に一面渺茫と續いて、遠景には無數の工場の煙突が現はれてゐる。それから私は數哩彼方に行つて、一つの公園を見出した。これも亦高臺で、前のよりも綺麗な茶屋娘が、もつと澤山居た。そして、また眺めると、市は眼の及ぶ限り、別の方向に伸びてゐる。晴れた日の眼界を十八哩とすれば、東京は丁度幅三十六哩、長三十六哩となる。そして、もつと私の眼を逸した部分があるかも知れない。各方面到る處、繁華で鳴つてゐた。

これは活眼を具へた、實際的な人の作である――いつでも美しいものに對して、冷淡で

はないが、何よりも事實に興味があるのだ。さて、誰でもこの一節を讀むと、東京の大いさについて、數頁の敍述でも與へ得ない程の觀念を得るだらう。僅々半行の目立つた描寫があるが、それが頗る力がある。そして、屋根といふ語を單數で用ゐたのが、その描寫に特別な力を添へる。これは尋常の人を滿足させるに全く十分である。然し佛國作者は遙かに一層立派な藝術家である。彼も亦東京を屋根の野原と見立て寫してゐるが、彼は先づ綺麗な場所を選んで、そこから眺め、一日のうちで美しい時刻を選んで眺める。私は諸君のために、數個の文を譯して見よう。

上野――餘程大きな公園で、廣い通路は立派に砂利が敷いてある――壯麗な老樹と竹叢で、境界を成してゐる。

私は高臺で蓮の湖水を見おろす處で停つた。少し曇つた鏡のやうに、夕空一面の黄金色が映つてゐる。江戸はこの靜かな湖水の向うにある。かなたに秋の夕ぐれの赤味を帶びた霧の中に、半ば沒してゐるのだ。すべて一樣の、小さな灰色がかつた屋根が數限りもない――最も遠いのは、茫漠たる限界で殆ど判明しないけれども、それだけでは無いといふ印象を與へる――遠く限界の向うに、まだある、もつと澤山ある、といふ印象を與へる。低い小さな家の揃つた中に、屋根の隅々が反りを打つた、一段と大きな建物が目立つて見える。これは寺院である。若しこれが無かつたならば、

江戸を眺めて居るとも思はれようし、また殆ど何れのと云はずある大都會を眺めて居るとも思はれやう。實際東京が美しく見えるには、距離の加減と、ある特別な光線の具合が必要である。この瞬間の如きは、光景絶妙と云はざるを得ない。

市は極めて薄い色合で、ボンヤリした輪郭を呈して居る。實在しないで、唯だ蜃氣樓のやうな趣がある。すると、長い淡紅色の綿の帶が――この幻の都を、その柔かな波動の中へ引入れながら――徐々と、世界の上に解けて行くやうに見える。最早今は湖水と、それから、かの無數の、遠くに現はるゝ建物が載つた、向うの高い土地との間が、判別出來なくなる。これは眞に湖水なのか、それとも唯だ空に散らばつた光を映じてゐる、極めて平滑な地面であるか、或は單に一望水蒸氣が擴がつてゐるのかとさへ怪しまれる。然しまだその面に見える、數個の長い茜さす光によつて、これは實際、水であつて、蓮の株が、光を反照する面の此所彼所、黑點々たるさまは、殆ど十分によく分かる。

この速成の飜譯は、佛語原文の色彩妙味を示さないが、諸君はこれに由つてでも、描寫が――晩照夕霧の景趣――如何に精確で、立派なものであるかを知り得るに相違ない。大概の諸君は、これと同じ光景を眺めたであらうし、また夕陽のため水面が黄金に化した時、蓮の葉が實際どんなに黑く見えるかを認めたであらう。それから、淡紅色の綿の、長い雲

の帶のやうに、霧が込んで來るといふ叙述は、確かに眞且つ美である。これは日本の畫家が、これと同じ時刻に同じ場所から眺めた東京の景色を描くのと、同じ手法である。英人では、一切是等の纖細で、夢のやうな色彩を認めなかつたであらう。また認めたにしても、それを描いて見ようといふ勞を執らないだらう。實際これは頗る難事である。

さて、閑話休題、文體の變化といふ問題へ立返へらう。ロティーはこの術を心得てゐる。その他の多くの佛國作家も亦然りだ。然し英人で知つてゐる者は、極めて乏しい。私が言はんと欲してゐるのは、作家——卽ち大作家——は、異つた種類の作品に對しては、異つた文體を選擇することが出來ねばならない、といふことである。然し一つの文體さへ、旨く精通するのは、なかなか骨折だから、それを試みる作家は頗る僅少である。それにしても、文體は或る場合には、題材に作つて變化せねばならないといふことを、正しい公理として規定し得ると私は思ふ。また將來の大作家はさういふ鹽梅に、文體を變化させるだらうと思ふ。ロティーから一例を示した詩的散文は、特殊の作品——短い夢幻的の事柄には天晴れ適合する。こんな文體で澤山書いて行くのは、餘程骨が折れる。同一の事柄を詩で書くのと、全然同樣の勞作である。一つの題材に就いて、全卷こんな風に書くことは出來ないだらう。それから一方、簡素な赤裸々の文體は、特に物語に、また或る種の歷史

にも適合する。全然詩的でなくも裝飾的な、修辭的文體は、また特殊の價値がある。隨筆の形式の論理的議論と哲學的作品が、多分最も旨い鹽梅に表現さるゝのは、こんな文體である。他日これが一般に行はれるだらうと私は思ふが、一たびそれが風習となると、前途に危險——習慣が固まつて、因襲主義になるといふ危險——があるだらう。因襲主義は文體を殺して了ふ。私は思ふに、どんな文體を用うべきかに就いては、氣分、藝術的感情、絶對的誠實なる情緒及び思想が、如何なる法則よりも更によく作家を指導するものだと悟るのが、茲にほのめかした困難に對應する最良策であるだらう。諸君が若し或る模型の眞似をしようとすれば、悉くは間違に陷るだらう。一切の文學的模倣は、弱點を意味する。が、若し諸君が單に獨自の感情趣味に隨つて行つて、それに對して誠實であるやう務め、且つ出來るだけそれを發展させようとするならば——その場合にこそ、諸君の文體は、出來てきて、指示することなくても、自然と、結局題材に最も適合せる、獨特の形式と調子を取るに至るだらうと思はれる。

譯者註一　ユリッシーズ（希臘名、オディシユウス）は、希臘イサカの大名で、トロイ戰爭に參加して、歸路地中海の諸所方々を漂流した。その物語の叙事詩が、ホーマーの『オデッセイ』である。ペネロピーは、ユリッシーズの妻で、主人が出征したトロイの役十年間と、歸路遍歷の十年間、空閨貞操

を守ること前後二十年に及んだ。後の十年間、主人は歸らないからと、言ひ寄る求婚者に彼女は惱まされた。あまりに人々の執拗さに、この機を織り了はるまではと、口實を設け、晝は織つて夜は解きつゝ遷延してゐる中、トロイの勇士、漂流の冒險者なる主人は無事に凱旋した。

イーニーアスは、トロイ國の皇子。ヴアージル（紀元前七〇―一九）は羅馬の大詩人で、その叙事詩『イーニイド』に、イーニーアスの話を書いてゐる。

デーイフオバスは、トロイの戰士。

〔譯者註二　セーンツベリー（一八四五――）は、エヂンバラー大學の英文學教授、學者、評論家、隨筆家で、諸種文學史の著述がある。

〔譯者註三　カンビシースは、波斯王で、埃及を征服した。

〔譯者註四　ミズレーイムは、ノアの孫に當る。フェアローは、古代埃及の王。是等古代諸王の木乃伊が、靈藥となつてゐることを云つたのである。

〔譯者註五　エラズマス・ダーキン（一七三一――一八〇二年）は、進化論の發見者チャールズ・ダーキンの祖父に當る。田舍醫者、自然科學者、且つ詩人で、その說には進化論の先驅をなした處がある。

〔譯者註六　アンディーン（獨逸名、アンディーネ）は、獨逸のフリードリッヒ・ハインリヒ・カール・フオーケ（一七七七―一八四三年）の作。

〔譯者註七　シャール・ペロウ（一六二八―一七〇三年）は、佛蘭の童話作者。

〔譯者註八　ヘンドリック・コンシエンス（一八一二――一八八三年）は、白耳義生れの小說家。その『フラ

ンダースの獅子』は一時歐洲に流行した。

譯者註九　大アレクサンドル・デュマ（一八〇六―一八七六年）は、佛國の戯曲家且つ稗史小說家。その『モント・クリスト―』は『巖窟王』と題して、故黒岩淚香の日本譯がある。

譯者註十　ペトラールカ（一三〇四―一三七四年）は、中世紀伊太利抒情詩人。アリオスト―（一四七四―一五三三年）は、伊太利の詩人。カルデロン（一六〇〇―一六八一年）は、西班牙の戯曲家。カモーニンス（一五二四―一五八〇年）は、葡萄牙の詩人。

譯者註十一　ファーダウジー（或はフェルドウジー）は、紀元十世紀頃の波斯の詩人。アブル・カシム・マンスルの雅號。

サアディー（一一八四―一二九一年）は、波斯の教訓的詩人。初め諸方へ旅行し、後隱遁した。回教信者であつた爲め、十五回もメッカへ巡禮したと云はる。その著『ゴリスタン』は、薔薇園の意。散文に詩を點綴せる八章の訓話。

ハフキツ（一三二〇―一三九一年）は、セムス・エディン・モハメッドの雅號。波斯の抒情詩人。題材は官能的。『ディヴァン』は詩集の意。

譯者註十二　パーマー（一八四〇―一八八二年）波斯、亞剌比亞、埃及の諸語に通曉し、波斯辭書、亞剌比亞文典、『コーラン』經典　飜譯、その他探檢事業及び劍橋大學教授として、東方研究に大貢獻をした。埃及探檢の際、土民に殺された。

譯者註十三　フキツゼラルド（一八〇九―一八八三年）は、英國の詩人。十一世紀の波斯詩人オマー・カ

イヤムの英譯によつて有名。

譯者註十四　ケエア教授は、英文學、主として中世紀に關する大家。倫敦大學、牛津大學の教授をして、昨年歿した。

譯者註十五　シヤール・ボードレール（一八二一—一八六七年）は、佛國頽唐派の詩人。

譯者註十六　エドガー・アラン・ポー（一八〇九—一八四九年）は、米國の詩人、且つ短篇小説家。奇才薄倖、バルチモーア市の街頭、行路病死人の末路を遂げた。

譯者註十七　キングレーク（一八〇九—一八九一年）は、初め法律を修め、辯護士として收入多き地位を擲つて、歴史家となつた。『イーオーセン』は東歐、小亞細亞、埃及方面の旅行記。

譯者註十八　ロテイー（一八五〇—一九二三年）は、佛國海軍々人デュリアン・ヴィオーの雅號。異國の風物を描寫した著書が多い。『お菊さん』（一八八七年作）は、長崎に於ける彼の生活を描いて、明治二十年頃の開港場情調を偲ばしめるものがある。

譯者註十九　キプリングが登臨した綠丘と高臺は、愛宕山と上野公園であるといふことは、讀者の想像し得る處だらう。

小説に於ける超自然的要素の價値

此講義の問題は、諸君が一見して題目から想像するよりも、更に一層重大である。諸君のやうな年頃の青年は、妖怪を信じさうにもないし、また妖怪問題を注意の價値あるものと考へる方でもない。劈頭第一に理會せねばならぬ事は、この問題の哲學的並に文學的關係である。超自然の話は、立派な文學に於ては、既に時代が過ぎ去つたのだと想像するのは、間違つて居るだらうと、私は諸君に告げたい。さうでは無くて、苟も詩にまれ、散文にまれ、立派な文學が出來てゐる場合には、超自然的要素が頗る活躍して居ることを見るでせう。科學的知識が餘程扱ひ方を變化させたであらうが、人間のこの方面の想像に對する愉快を毫も減じてはゐない。マーテルリンクの如き現代作家の成功は、妖怪のものと、超自然の恐怖に關せる題材との扱ひ方が巧妙だといふ點で、主として說明が出來る。が、他の現代作家を擧げなくても、古今を問はず、歐洲文學に於て、苟も眞正の大家であつて、

超自然を扱つて手腕を發揮しない人は、殆ど無いと、私は申したいのである。英文學に於て——アングロ・サクソン詩人の時代から沙翁まで、それから沙翁から現代まで——例外は無いと信ずる。そしてこれは吾々を導いて、ある普遍的で且つ顯著な事實の考究に到らしめる。私はその事實を如何なる書物にも見た覺は無いが、非常に哲學的重要なものである。それはすべて偉大なる藝術には、文學、音樂、彫刻、建築、いづれにしても、一種の幽靈的なものが存してゐるといふことである。

が、今私はこの『幽靈的（ゴーストリー）』といふ語に就いて、諸君に語りたい。これは恐らくは諸君の中の或る人々が想像するよりも、更に重大な語である。古代の英人は、『靈的』又は『超自然』に對して、それ以外の語を有しなかつた——此兩語は、諸君の御存じ通り、英語でなくて拉丁語である。今日宗教で、神々しいとか、神聖とか、靈妙とか稱することは、古代のアングロ・サクソン人に對しては、一切幽靈的といふ語で十分に說明された。人の精神とか、魂とか稱しないで、人の幽靈と稱した。そして宗教的知識に關した一切のことを、幽靈的と呼んだ。約二千年間、殆ど渝はらずに居る天主教懺悔文の現今方式では、僧侶は常に『靈父』と呼ばれてゐるのを、諸君は見るでせう——それは僧侶の任務は、父のやうに人々の靈又は魂の世話をするのであるといふ意味である。僧侶に向つて話掛けるとき、

懺悔者は實際『我が靈の父』と呼ぶ。だから、この『幽靈的』といふ形容詞には、實際頗る廣い意味が附隨してゐることが、諸君にわかるでせう。これは超自然に關した一切のことを意味する。これは基督教徒に對しては、神自身をさへ意味する。生命の賦與者なる神は、英語で常に聖靈と呼ばれてゐるから。

西洋國民が現今有つてゐる神といふ觀念は、實は幽靈の原始的信仰から發達したものに外ならぬと敎へる進化哲學を承認すれば、幽靈といふ語を神に關して用ひるのは、確かに非難することは出來まい。却てこの語を用ひると、不思議さがあつて、大いに神の森嚴を加へる。が、宗教的信條について、吾々がどんな信仰を持たうが、持つまいが、近代科學が吾々に貢獻した一事は、丁度幽靈がさうである通り、何でも吾々が物質的な固形と考へ慣れてゐたものが、本質は靈的であるといふ明白な證明である。たとへ吾々が幽靈についての、古風な話や說を信じないにしても、それでも吾々は吾々自身の幽靈で——而して全然不可解で——あるといふことを、今日では是認せねばならない。吾々の知識が擴大するにつれて、宇宙の神秘は今や吾々を壓し、ますます重く、いよいよ畏るべきものとなりつつある。而してそれは特に幽靈的な神祕である。一切の偉大なる藝術は、幾分かこの宇宙的の謎を吾々に髣髴させる。これ卽ち私が、すべての大藝術は、そのうちに一種の幽靈的

なものを有してゐると云ふ所以である。それが吾々の裏にある、無限と連つた或るものに觸れる。諸君が非常な大思想を讀み、驚嘆すべき繪畫、彫像、建築を見、または或る種の音樂を聽く場合、人々が幽靈または神を見たと思つた時に、いつでも感じたやうな竦動を諸君の心裡に感ずる。ただ現代の竦動は、比較し得ざる程に大きく、長く、深いのである。それだから、さまざまの知識が有つても、世人が矢張り超自然の文學に愉快を感じ、また今後數百年間も、續いてそれに愉快を感ずることになる譯である。幽靈的のものは、いつも眞理の片影を現はしてゐる。だから、いくら所謂幽靈に對する疑惑があつても、その眞理に關する事に對して、人間の興味を減殺する譯に行かない。

だから諸君は、この問題が全然些々たるもので無いといふことが、わかるでせう。確かにこれは、大文學とは非常に重要な關係がある。時々讀者に少し許り、幽靈的な愉快を與へることの出來ない詩人や、小說家は、決して眞の大作家でも、大思想家でもない。私は英文學全體に於て、この例に洩れるのを知らないと既に述べた。例へば、現世紀に於ける最も實地的で、冷靜な、論理的な作家で、迷信の最少痕跡ほども、有りさうに思はれない、マコーレーを取つてみよう。諸君が唯だ彼の論文を少々讀んだならば、彼が超自然の琴線に觸れ得るとは、殆ど考へないでせう。然し『古代羅馬の歌』の數簡所に於て、彼は立派

にそれを成し遂げてゐる――例へばレギラス[譯者註一]湖畔の戰鬪に於て、雙子の兄弟の亡靈が出現することや、タークキン[譯者註二]が彼の犧牲となつた、ルークレシャ[譯者註三]の幻影に惱まされることを述べた場合である。この兩節とも、强く幽靈的衝動を與へる。それから同種の弱い衝動が、『カピスの豫言』の數ヶ所を讀むと、感ぜられる。マコーレーは、差控へては發揮したもの〻、この力を有して居たから、その作が左程偉大なのである。若し私が云つた是等の詩の箇所が書けなかつたら、彼の英國史を實際あれほどの、活歷史とすることは、出來なかつたらう。幽靈的感情を有たない人は、唯だ一頁の歷史や、一頁の演說も愚か、どんなものをも生氣躍如たらしめることは出來ない。人の精神に觸れるためには、諸君はその精神が、言葉によつて感ぜしめられる一切のものを知らねばならない。そして、それを知るためには、同樣に感ぜしめられる『幽靈』が、諸君自からの內に、なくてはならない。

さて、この問題の理論的方面を離れ、實際的方面に移つて、幽靈と夢の關係といふ問題に轉じよう。

立派な作家――大作家――は、超自然の研究をするのに、他の作家が以前に、成し遂げたことを、決して踏襲しない。此問題は書籍から、眞の援助を得ることのできない事柄の一つである。如何にして、讀者に幽靈的衝動を與ふべきかを學び得るのは、書籍からでも、

傳說からでも、古話からでもなく、またすべてそんな種類のものからではない。私が云はんと欲するのは、單に表現の方法、文學的制作の效果に關するだけならば、この問題について、書かれてあることを讀むのは益がないと、云ふのではない。それどころか、この問題に關して、文學上立派なものを、出來る限り讀むのは、甚だ必要である。言葉の珍奇なる價値、文章の緊密と力、信仰の特性と、かやうな信仰に關する恐怖の特性に就いて、大いに得る處があるでせう。然し超自然的效果を作るために、他人の思想又は感情を、書籍から取つて用ひようとしてはならぬ。さうすれば、その作品は決して誠實なものでなく、また決して感動を與へないであらう。どんな場合でも、諸君自身の思想感情をのみ、用ひねばならない。そして、若し諸君が幽靈を信じないならば、何處から、その思想感情を得べきであるか。それは諸君の夢から得べきである。諸君が幽靈を信じようと、信じまいと、幽靈的文學のあらゆる藝術的要素は、諸君の夢のうちに存してゐて、これを利用する道を知つてゐる人に取つては、眞に文學的材料の寶庫となつてゐる。

詩人や、小說家、加之、宗教の教師が、超自然の恐怖又は神祕を扱つて得た、あらゆる偉大なる效果は、直接又は間接に、夢によつて得たのである。何れの文學の、何れの大怪談を研究しても、いくら事件が、驚愕すべく、または異常であつても、少々辛抱して探究

すると、その何れもが、いろいろの場合に、種々の結合をなして、諸君自身の夢に現はれたものだといふ事が、わかるでせう。それが諸君に衝動を與へる。それは何うしたものか。その譯は、諸君が忘れてゐた、想像的又は感情的の經驗を、諸君に想起させるからである。この規則に例外はない――絶對にない。過日私は英語で書かれた最上の怪談として、ブルワー・リットンの短篇に就いて諸君に語つて居た。何故それがこの種類の傑作であるかと申せば、單にそれが惡夢の經驗を、驚くばかり忠實に寫してゐるからである。すべて超自然の優れた作の怖ろしさは、實際醒めた意識に惡夢を投射して見せた怖ろしさである。そして、他の怪談又はお伽噺、或はまた有名で面白い宗教物語の美しさ又は優しさは、樂しい夢、愛情、希望、又は無念さのために惹起された夢の優しさ又は美しさである。が、すべて文學上、超自然が旨く扱つてある場合には、夢の經驗が扱ひ方の根原をなしてゐる。私は實際極東の文學を悉皆知らない。しかも、それを知つてゐる聽衆に向つて、私は今語つてゐるのだと、承知してゐるが、極東の文學に於てさへ、これらの規則に例外はないと、私は信ずる。支那や日本の文學に、夢の經驗から出てゐない怪談は、多くあるまいといふ意味ではなくて、若しそんなのがあるとすれば、それは讀む價値がなく、また文學の立派な種類に屬することが出來ないと、私は云はうと思ふ。私は佛譯の支那怪談數種を讀んだ。

またハーバート・チャイルズの驚嘆すべき英譯二卷の凄い支那物語、『支那畫室よりの奇談』と題したのをも讀んだ。優れた學者が譯した是等の話は、頗る驚くべきものである。然し超自然的事象を旨く扱つてある度毎に、話中の出來事が、いつも必らず夢の現象と一致してゐるのに、私は氣付いた。だから、この問題についての私の判斷は、誤つてゐないと考へる。日本の話で、私が譯文を手にすることの出來た分は、同一の規則に隨つたものであつた。過日[譯者註四]初めて讀んだ話で、日本の作者が超自然思想を扱つたのと、英國の最上の作者が夢の研究を扱つたのとの間に、全然類似を發見して、私は非常に興味を感じた。その話は、屏風の面に、河と風景を寫した畫についてであつた。その日本の話では、（恐らくは支那に濫觴した話である）畫家が屏風に向つて合圖をする。すると、小舟が帆をかけて河を下り始める。畫から拔けて室へ出てくる。室は水が一杯になる。そして、畫家か、それとも魔法師か、或は何者にせよ、その人は小舟に乘り込んで、また畫の中へ帆を上げて去つて行く。そして、永久に見えなくなつて了ふ。これは、逐一全然夢の話であつて、その絶妙な點は、夢の經驗の眞相を穿つた處に存する。これと同一の現象を、別の形式のもとに、ルーキス・カロル[譯者註五]の著書『不思議の國に於けるアリス』と、『鏡を通して』に於て、諸君は見出すであらう。

が、もとの話に立返へることにする。私は幽靈的、又は不可能なことを、旨く扱ふには、出來るだけ夢の經驗の眞相と一致せしめねばならぬといふこと、それからブルワー・リットンの怪物屋敷の話は、その法則を證するといふことを述べてゐたのであつた。今度は特に夢魔の文學的價値を研究したい。夢の極めて怖ろしい形式なる夢魔は、また極めて特殊な一つである。眞の大文學に見出さるべき、重要なる宗敎的及び超自然的恐怖は、恐らくは一切、夢魔から提供されたものである。その本體既に神祕であるし、且つ科學的心理學も、未だ幾多それに關せる事實を說明し得ない。我々は夢魔の現象を個々別々に取上げて、諸種の迷信的恐怖と超自然信仰に對する、珍らしい關係を示すことが出來る。

夢魔に於ける第一の顯著なる事實は、その端緖の點である。通例それは一種の疑念で始まる。何となく恐ろしく感ずる。それから、遠方から或るものが、自分に働きかけて居るといふ印象がある――何だか魅惑のやうであるが、全然さうでもない。それは、顯然たる魅惑者が無いやうだからである。然し不安な感じがして、自分を怖れさせてゐる勢力から遁れたくなる。すると、遁れるのが容易でないと氣が付く。辛つとのことに動ける。やがて、困難が增してくる――もはや動けなくなる。絕叫しようと思つても、出來ない。聲が出なくなつてゐる。實際昏睡狀態だ――見たり、聽いたり、感じたりしても、動くことや、

話すことが出來ない。これが端緒であつて、人が惱む最も恐ろしい感情の一つを成してゐる。若しこれが一定時間以上に續けば、その恐怖だけでも、人を殺すかも知れない。他の諸原因でひどく健康を害してゐる場合には、實際往々夢魔は人を殺すことがある。

勿論日常の醒めて居る生活には、かゝる經驗――意志を奪はれて、見えない力で遠方から緊握されてゐる感じ――は、毫も無い。これは實際磁力、催眠力の經驗である。そして、魔力に關する中世紀の或る恐ろしい信仰は、これから起つたのである。もつと適當な語が無いから、假りにこれを超自然的催眠術と命名しよう。これは眞の催眠術ではない。眞の催眠狀態では、患者は精神的に自分の人格に由つて、感じたり、考へたり、行動したりしないで、他人の意志に由つて行動するからである。夢魔に於ては、意志が停止するだけで、人格的意識が殘つてゐる。だから、それが恐ろしい。それで、その初期を超自然的催眠術と呼ばう。但し上述の制限を附して置く。さて、ブルワー・リットンが、この經驗を何んな鹽梅に、彼の小說に使つてゐるかを見よう。

ある人が椅子に坐し、洋燈を置いた卓子を傍にして、マコーレーの論文を讀んでゐると、忽然不安な氣がする。ある陰影が紙上に落ちる。彼は立ち上つて、呼ばうとするが、囁き以上には聲が出ない。動かうとするが、手も足も動かせない。魔力が最早彼に掛つてゐる。

これが夢魔の發端である。

夢魔の現象の第二期は、往々第一期と混ずるのであるが、怖ろしい且つ不自然な光景を經驗する。必らず目に見えてゐるものが、暗くなつてくる。時としては、光が消えたり、又は朦朧となつたりする。ブルワー。リットンの小説に於ては、室内に火が燃えて居り、また非常に輝いた洋燈がある。次第に洋燈も火も薄暗くなつて、遂にすべての光は全滅して、室は眞に暗黑となる。但し幽靈のやうな、不自然の明るさが、現はれ始める。これも亦夢の經驗を頗るよく研究したものである。第三期は最後の苦鬪であつて、不可能な出來事が、主要なる特徴をなしてゐる。これが夢みる者に、自己の無力を感得させ乍ら、凶相猛形を見せる。例へば、人が拳銃を放ち、又は鋼鐵の武器を揮はうと試みる。拳銃ならば、彈丸が銃口から數吋以上は發射しないだらう。それで弱く墜ちる。而して音がしない、刀か、短刀ならば、刀身が綿か、紙の如く柔かになる。奇怪な、或は不自然な形の、怖ろしい姿のものが、觸れようとして、手を伸ばす。もし人間の姿ならば、天井へまでも大きくなつて、異樣に身を曲げて、近寄つてくるだらう。更に今一つの時期がある。これへは餘り達しない――恐怖の絶頂だ。それは捉へられたり、又は觸れられた場合である。夢魔中の接觸は、極めて特有の感覺で、殆ど電氣の激動のやうであるが、不自然に長引く。苦痛

ではなく、もつと何だか惡いもので、醒めてゐる場合には、決して感じない經驗である。

第三期と第四期を、ブルワー・リットンは、藝術的に混ぜ合せて居る。妖怪がぼんやりと、威嚇的に、床から天井へ聳える。人が武器を揮はうと試みる。すると、同時に觸感又は激動を受けて、全然力が無くなる。リットンは、この感情が或る幽靈的電氣の感覺に似てゐると述べて居る。この研究は全く夢の經驗通りである。茲にはこれ以上、この話を陳べるに及ばない。これから先きへは、澤山他の要素が話の中へ入つて、それが全然我々の問題に沒交渉でないにしても、ポーの或る話ほど、旨く該問題を說明しないからである。

ポーは恐ろしい音など、夢魔經驗の他の特點のことを書いて居る。かゝる夢では、跫音がやつて來るやうな、恐ろしい蔽ふた音が、屢ゝ聞える。これが『アシャー家の沒落』と題する話に、非常によく研究してあるのを、諸君は見るでせう。また是等の夢では、無生物が活きてくるか、或はその動作に由つて、背後に怖ろしい生物が隱れて居ることを暗示する――例へば幕、半開のまゝの戶、不完全に閉ぢた凹間。ポーは『エリヲノーラ』や、他の小品で、是等のことを研究して居る。

　怖ろしいものの夢は、宗敎的及び迷信的の兩文學の感化力には、確かに餘程與つて力がある。死人の甦り、天使又は惡鬼の幻影――是等のものが、よく描いてある場合には、大

槪常に夢の經驗の精確なる複寫である。然し時としては、醒めて居る場合の恐怖の要素が、これに混じてゐることがある——例へば、世界最古の怪談の一つなる、約伯記の中の話に於て、さうである。詩人は非常な寒さを感ずることと、恐怖のため頭髮逆立を覺えることを述べて居る。是等の經驗は、全く眞實で、且つ醒めた生活に存するものである。寒さの感、恐怖の感は夢の感覺ではない。是等は我々が醒めてゐる間、實生活に於て感じた異常な恐怖から來るのである。馬、犬、又は猫に於ても、眞にこれと同樣の恐怖の徵候を、諸君は認めるでせう——そして、是等の動物の場合にも、超自然の恐怖が往々原因であると、想像すべき理由がある。私は或る犬——而かも勇敢な犬——が、輕い氣流の爲め、紙の積んだのが動くを見て、甚だこはがつて居るのを見た。この微風は、犬が臥してゐる所へは、達しなかつた。だから、犬は紙の動くのを、風の運動と聯想する譯に行かなかつた。何が紙を動かして居るか、合點が出來なかつた。不思議さが彼を驚愕させ、背中の毛が恐怖で立ち上がつた。然し小說や詩で、かゝる覺めて居る時の恐怖の感覺と、夢裡の恐怖の感覺との混じ方は、他のどんな方法でも得られない眞實、實際といふ風趣を、その話に與へるやうに、極めて有効に取扱ふことが出來る。英國の古いお伽俗謠や、怪談には、兩つの經驗を混ぜて、極めて立派な結果を得て居るのが澤山ある。獨逸の立派な話の『アンディー

ン』は、この種の好例と云はねばならぬ。河水の中に顔が見えること、瀑布や奔流が幽靈の人物に變はること、塞いだ井から、アンディーン自身の姿が出てくること、彼女の背後へ水が滿まること、それから彼女が情人のために歎いて、死に至る有様——總べてこれは眞の夢である。そして、大概の人は、夢でこんな空想の經驗を有つて居るから、これが眞實と思はれる。が、話の他の部分、人間の感情、恐怖、熱情を扱つた所——は、これは醒めた生活の事柄である。そして、その混じ方が、極めて藝術的に仕上げてある。アンディーンの序でに、中世紀に於ける、その先代——中世紀の妖靈の、夢婬女精と睡魔、空中の妖精と火中の魔神など、水中、氣中、林間、火中の一切の魔族——に就いて語らねばならぬ。是等に關する、總て面白い話は、實際夢の研究なのである。それから、下つて現代の最も浪曼的文學に來ても、ゴーチェー(譯者註六)の『死んだ情人』、『アリア・マーセラ』、『木乃伊の足』などの奇異て、且つ面白い話に於ても、矢張り同樣である。最も目立つたのは、多分『死んだ情人』であるが、これには二重人格が寫してあるので、あまり込み入り過ぎて、こゝの説明の目的に副はない。だから、その代りに、『アリア・マーセラ』の話をしよう。數名の青年學生が、ポンペーの町に遊ぶ。廢墟を見學し、また近くのネープルズの博物館に保存してある珍品を研究するためである。彼等は皆、古典の文學歷史に通曉してゐる。

加之、事物を見て、その美を鑑賞し得る美術家である。約二千年前に起つた爆裂の際、灰の雨で息が詰つて、澤山の人が死んだ。然し死體は堆積物の中に包まれて、形狀は鑄型に入れた如く、完全に保存された。上記の博物館に、かゝる型が幾つか示してある。そして、一つは若い美人の身體の型である。三人の學生の中で、若い方のが、この型を見て、この幾世紀も前に死んだ當人に出逢つて見て、且つ愛して見たいといふ浪曼的な願望を起す。その夜、友達の眠つてゐる際、自分獨りぽつちで考へる樂を求めようと、室を出て、廢都の中へ逍遙する。が、やがて、或る町角を曲がると、市が晝とは打つて變つた風に見える。家屋は高くなつたやうに思はれる。新しく、輝いて、淸潔に見える。こんな風に彷徨して居ると、忽然太陽が上つて、市街は盛んな人出だ――現代の人民ではなく、二千年前の人民が、皆な古代希臘羅馬の服裝をしてゐる。暫くして、希臘の一靑年が、學生へ近寄つてきて、拉丁語で話しかける。答をするに足りるだけの拉丁語は、充分大學で學んでゐるから、會話が始まる。とゞの詰りは、學生がポンペーの劇場へ招待を受けて、格鬪士や、その他當時の慰み物を見物する事になる。劇場に居る際、學生は不意に、彼が見たいと思つて居た婦人、ネープルズ博物館にその姿が保存してある婦人を見る。劇が終つて、該婦人の家へ招かれる。そして、萬事悉く愉快を極めてゐると、忽然その女の父が、そこへ現は

れてくる。老人は基督教信者で、娘の幽靈がこんな風にして、青年を惑はすのを大いに立腹する。彼が指で十字を切ると、無慙や、アリアは忽然、微塵に粉砕して、青年はポンペーの廢墟累々たる間に、孤影悄然と立つてゐるのみだ。非常に美しい話であるが、その一一の細目、皆な夢を研究したものである。私が此話に餘程澤山の記述を與へたのは、ただこれが夢の經驗を藝術的に利用した、最も立派な佛國の實例と思はれるからである。然し他に幾多の物語が、これと同一の種類に屬するだらうか。私はその中で唯だアーヴィングの『ゼ。アダランタド。ヲブ。ザ。セヴン。シティーズ』を擧げればよろしい。これは純粹の夢であつて、非常に寫實的に述べてあるから、讀者に睡つて居る感じを與へる。尤もこれに反して、『睡れる七人』、『リップ。ヴァン。キンクル』及び『浦島』のやうな物語は、純粹の夢ではないが、それでも、その妙味は丁度、夢の經驗を使つた部分に存してゐる。是等の話に於ける眞の奇想は、老人が若返つた夢を見て、眼が醒めると、冷い、眞面目な現實に戻るといふ點に存する。序でに云へば、マリー[譯者註七]。ド。フランスの作つた、佛國の古歌に、日本のと殆どそつくり似た話がある――少くとも、龜の話を除けば、全部似てゐる。東洋と西洋の物語作者が、どちらもお互から藉りたらうといふことは、全然不可能である。それよりも多分、孰れの話も自發的に生じたのだ。が、この傳説が實質的に、他

の文學――印度、亞剌比亞、瓜哇の――に於ても、同樣であるのは珍らしい。孰れの分の話でも、唯一の浪漫的眞理は、いつも同一である――夢の眞實を傳へてゐるといふこと。

さて、恐怖と奇想の藝術的要素の外に、夢は確かに、文學に含まれる內で、最も身に沁むやうな、美はしい性質の幽靈的優しさを供給する。何となれば、吾々が愛してゐた死人が、すべて夢の中へ折々歸つてきて、實際生きて居るやうに見えたり、話をしたりして、吾々に取つて、一から十まで願ひ通りのものになつて吳れる。夢の中で死人との會合に於ては、一切のものが、いかにも柔和で、美はしく、しかもまた、如何にも現實で、眞正に見えることを諸君は認めたに相違ない。最古の時代から、かかる死人の夢は、無我的愛情の最も人を感動させるやうな、且つ最も優れた章句を文學に提供してゐる。この經驗が、歐洲の殆どすべての古代俗謠文學に現はれてゐる。世界のすべての敍事詩に見えてゐる。あらゆる種類の優れた詩に存してゐる。そして、近代文學は、年の立つにつれて、益〻この源頭に汲んでゐる。フィンランド人の『カレヴァラ』のやうな奇異な作品、全く世界未曾有の敍事詩に於てさへ、感情的意義に於て、眞に唯一の美しい章句は、亡き母が邪惡な子を慰めんとて、歸つてくる處であつて、それは夢の研究なのだ。尤も詩では、さう現はしてない。

もう一つ述べたいことがある。文學に於て、天國に關する我々の空想も、實はただ比較的美はしい種類の夢を、我々の心で再現したものに外ならぬではないか。眠りの世界では、我々が愛してゐた死人が、皆我々と再會する。父は永く葬られた子を取返へし、夫は亡妻を取返へし、別離させられた戀人同志は、現世で叶はなかつた緣を結び、夙く失せてしまつた人々——死んだ姉妹、兄弟、朋友——は、すべて我々の處へ歸つてくる。丁度有りし昔の如くてあつて、その通り愛らしく、また若く、そして恐らくは、實際あつたであらうよりか、更に美しくもなつて居る。眠りの世界には、老いるといふ事がない。不死がある。永遠の若かさがある。それからまた、一切のものが、いかにも柔和で、いかにも幸福だ。現實の世界で我々に對して、不親切な人さへも、夢では我々に對して情深くなる。だから、天國は全くこれに外ならないではないか。宗教が善人のために、完全の幸福を描く場合には、唯だ我々の夢の生活の極致境を寫すに過ぎない。それはまた、我々が醒めてゐる生活の極致境てある。そして、宗教がこれらの描寫に於て、夢の經驗に近寄るやうにすればするほど、その結果が旨いのを、諸君は見出すだらうと、私は考へる。多分諸君は、宗教が極めて特殊の、超自然的な力の出現を教へることを、私は忘れて居るのだと言ふてせう。が、諸君はこれらの力に對する暗示も亦、夢の生活に於て見出すだらうと、私は考へる

我々は夢で空中を通つたり、固形體を通り抜けたり、あらゆる種類の奇蹟を演じ、あらゆる種類の不可能な事柄を成遂げないか。我々はかかることをすると、私は思ふ。結局私は確信するが、諸君が文士として、或る種の超自然題材——怖ろしい、優しい、哀れな、壯大な、いづれにせよ——を取扱はねばならぬ時に、諸君が立派な想像力を有するならば、諸君の感興を求めんがために、書籍にたよらない方がよからう。諸君自身の夢の生活にたよりなさい。それを注意して研究し、そして、そこから、感興を引き出しなさい。日常經驗の彼岸に存するものを扱ふ文學に於ては、夢[譯者注八]は殆どあらゆる美しいものの第一源泉であるから。

譯者註一　レギラス湖畔は、紀元前四九六年、古代羅馬人が拉丁人と戰つて大勝を得た場所。

譯者註二　タークキンは古代羅馬の王（紀元前五三四—五一〇年）。その子、セクスタスがルークレシヤを犯した爲め、反亂起り、王位を失つた。

譯者註三　ルークレシヤは、羅馬最初の執政官コラチナスの妻。セクスタスの暴行を蒙つてから、夫と友人達を呼寄せて、タークキン家を追拂ふ誓をさせ、咽喉を刺して勇婦の最期を遂げた。

譯者註四　本講義に引照されたる、屏風の畫から山水が抜け出で、畫家は小舟に乘り込んで、また畫中へ帆を上げて去つて行く話は、本全集第六卷『日本雜錄』に『果心居士の話』と題して、『夜窓奇談』から採つて譯してある。

譯者註五　牛津大學の數學教授であつたチャールズ・ドズスンの雅號。

譯者註六　ゴーチエーの短篇數種は、ヘルン先生によつて夙に『クレオパトラの一夜及びその他の架空譚』と題して英譯されてゐる。玆に說話してあるアリアの一篇『アリア・マーセラア――ポンペーの形見』も、その中に收めてある。

譯者註七　マリー・ド・フランスは、佛王ヘンリー三世頃十六世紀の女詩人且つ寓話作者。

譯者註八　自然そのまゝを寫した文學でなく、ローマンスの世界、或は更に進んで、神秘の世界を扱つた文學に於ては、夢の研究に感興を求むべきことを說いたのが、本篇の結論である。ヘルン先生は、夢といふものを精神現象として、否、人生に取つて、頗る重要視し、その家庭に於て、お子供さん達に（Good-night, Papa. といふ代りに、A good dream to you, Papa. と云はせて、The same to you. と應答し、また夫人とは前夜の夢を互に語り合ふのを常とせられた。

生活及び性格の文學に對する關係

一

過日、ブロンティー女史のことを講ずる際、私は小說創作の或る性質に關する、一つの講義を約束して置いた。私が今、述べようとするのが、その講義である。然しこの問題は、手法の外に、他の幾多の事柄を廣く考慮せねばならぬ問題である。この問題が實際に包含してゐることは、本講義の標題に示されてあるので、諸君はわかるでせう。

私が文學について諸君に語つて居る場合、私は決して歷史とか、科學とか、哲學とかを意味して居るのではない。私はただ感情と感情生活の表現なる、文學といふ藝術の大部門を意味して居る。このことを念頭に置いて、我々は論旨を進めることが出來る。

文學の三大部門は、詩、劇、及び小說である。私はこれらの創作に從事する人の生活方面から、これらのものを論じたい。それがこの論題の意味である。これはあらゆる文學研

究者の、考慮すべき甚だ重要な問題である。苟も私が擧げた文學の三部門の或る一つに於て、作家たらうと願ふものは、自身に向つて、正直に數個の問を發してみて、肯定的にそれに答が出來なければならない。若し肯定的にそれに答が出來なければ、彼は文學に手を出さない方がよからう――少くとも暫くの間は、

第一問は、『僕は創作力を有するか』。即ち僕は詩にまれ、小說にまれ、劇にまれ、僕自身の經驗により、僕自身の精神的作用からで、他人の思想に隨つたり、又は意識的にも、或は無意識的にも、唯だ他人の說に左右されたりしないで、作ることが出來るか、といふのである。若し諸君がこの問に對し、正直に『出來る』といふ返答が出來なければ、諸君は唯だ模倣者となり得るだけだ。

が、假令諸君が、この第一問を肯定的に答へ得るとしても、もう一つ殆ど同樣に重要な質問が殘つて居る。それは斯うだ。『僕は一生涯――或は少くとも、餘暇の大部分を――文學的事業に捧げうるか』。若し諸君が多くの時間を割愛し得る、確かな見込がなければ、少くとも生涯毎日短時間を、或る繼續的目的に供し得る、確かな見込がなくてはならぬ。若し乾度さうし得る見込が無ければ、文學の行路難を見出すでせう。

が、まだ第三に發すべき質問がある。たとへ諸君が創作力を有し、時間を有するにして

も、つぎのことを決定するのが肝要である。『僕は社交界に混じ、日常生活に加はらねばならぬか、それとも、閑居孤獨を求むべきか』。この第三問は、唯だ諸君獨特の文學的才能の性質に隨つて、解答が出來る。或る種の文學は、孤獨が必要である——孤獨でなくては、出來ない。他の種類の文學では、作家は自分が欲すると、欲せざるとに關らず、多く人と交はり、その行動を觀察し、あらゆる活社會の經驗を積まねばならぬ。

これで議論の範圍に、ひと通り見當が附いたと思ふ。これから講義の第二の段落に取掛かることが出來る。

二

上掲の連續せる質問に於て、私が暗示したことを、今度は詳述せねばならない。先づ詩を生活行爲と聯關して考究して見よう。

詩は作家が、大いに活社會と交はる事を、要求する種類の文學の一つではない。これに反して、詩は特に孤獨の藝術である。詩は澤山の時間、澤山の思考、澤山の沈默の勞作と、それから性格上、出來うる限りの誠實を必要とする。眞正の詩人は、社交生活に入ること

少ければ、少いほど、その藝術のためによろしい。これは凡ての國で、よくわかつた事實だ。若し青年詩人が、富豪や勢力家に機嫌を取られ、寵愛され、珍重せられるがまゝになると、破滅に陷るだらうと、普通に云はれて居るのは、周知の事實である。人は自己に對して全く誠實であつて、而かも流行界で注意を惹く標的となることは出來ない。それは全然不可能だ。詩といふ藝術は、詩人が僧侶のやうに、自分の家に孤獨なることを要する。私の趣意は、禁慾主義者又はそんな種類のものでなくてはならぬとか、或は詩人に家族の係累があつてはいけないとか、申すのではない。立派な詩人となるには、家庭を有し、そして一切家庭の消息を解するのは、甚だ必要である。然し一般に所謂、社交的快樂なるものは、斷然棄てねばならぬ。これが出來ないと同じ程度に、大抵乾度、詩も出來ない。

ここで詩人の生活に關する、二三の特異な事實を考へて見よう。無論諸君は御存じであるが、いくら正確な詩句だらうと、單に詩句を書くのみが、詩の能事ではない。詩は詩句によつて、人の情と心を感動させる力を意味する。さて、波斯の一詩人が、惡人は恐らくは詩人に成れまい、と嘗て云つた事がある。ある明白な例外があるにしても、この說には多大の眞理がある。諸君は歐洲の詩人に、惡人も澤山あつたことを、乾度讀んで居る。然しそんな記事は、餘程控へ目に、斟酌をして受取らねばならない。例へば、諸君は直ぐに

バイロンのことを考へるでせうが、バイロンは公正に判斷されなかつた。且つ諸君は詩人の人物に關する、單に宗教的或は社交的の宣告を、妄りに受容れてはいけない。實はバイロンは不正な待遇を受けて、激昂憤怒、不品行に陷つたのだ。加之、バイロンの心底は、本來寬大で、同情的であつた。だから、彼がその胸奧の感動に從つた場合には、彼が有するものゝ精粹を與へてくれてゐる。他の詩人に就いても語らうと思へば、澤山の例がある。いくら表面上、その缺點が大きく見えたにしても、その人と爲りには、何か一種の善良且つ寬大な處のあつたことを、諸君は常に見出すでせう。實際、私は惡人は詩人に成れないといふ、この波斯の說には、唯だ一二の例外を知つて居るのみで、而かも、思はしく無い例外である。伊太利の文藝復興期に、二三の極惡人で、詩人として評判を博したものがある。例として、マラテスタの名を擧げたらよからう。が、この殘酷獰惡な人の文學的作品を檢討してみると、その唯一の價値は、詩句の完全なる正確さであることがわかる。その當時は、完全に正確な詩句が、非常に貴ばれたのであるが、今日我々は、もつとよく物事が分つて居る。我々は今、單に正確さが、詩句に與ふるに眞の詩といふ資格を以てしないことを知つて居る。だから、波斯の詩人は、姦惡なマラテスタの戀愛の詩句の中に、何等かの詩を見出したらうとは思はれない。

無論、波斯の詩人が、惡人といふことを云つたのは、人間の經驗が一致する處に隨つて、惡いのを云つたのである。私は人がたまたま、特殊の慣習に違背したばかりに、それを惡人とは呼ばない。ただその人の他人に對する關係によつて、殘酷、無情、利己的、且つ恩知らずであるとわかつた限り、惡人と呼ぶ考へである。そんな人は、誰でも詩は書けない。

だから、この問題全體の根本眞理は、單に詩人は詩人として生まれねばならないといふ事である――英國の格言にも、『詩人は生まれる。作られるのでない』と云つて居る通りである。いくら敎育を受けたからといつて、それて詩人にはなれない。英國で毎年、二大學から、秩序立つた敎育が授ける一切のものを詰込んだ約四千名の立派な人を出だす。獨逸の大學は、もつと良い成績を擧げ得る。佛國の大學も、全然同樣な成績を擧げる。然し是等の數千名といふ中から、幾名が詩人になり得るでせうか。歐洲の諸國を合せて、六名もないだらう。敎育は詩人を助けたり、國語の能力を非常に豐富にしたり、耳を音樂的な音の妙味に馴らしたり、また形式の均整及び風致に關する、あらゆる法則を認識するやうに、智力を練つたりするでせうが、詩人を作ることは出來ない。今日英國だけにでも、少くとも、三萬人は殆どすべての形式の正確な詩句を書く手腕を持つたものがあると私は思ふ。それでも多分、その中詩人は二名もあるまい。詩は人格氣稟の問題だからである。文

學によつて、人の感情を動かし得るためには、美を愛好する心、多大の同情力、一種の優しい氣立を持つて生まれねばならぬ。詩人たる性質は、人生の軟性方面に屬するものである——だから、詩人は半ば婦人の性質を持つた男である、といふ諺がある。諸君はすべて氣が付いて居るでせうが、天晴れ立派な智力があつても、冷靜な方の人は、殆ど文學に於て、氣分に觸れることが出來ない。概して——例外はあるが——數學家は詩人になれない。偉大なるゲーテは、建設的想像力のために、あれ程科學に長けて居ても、妙に數學の才能に缺けて居た。或る種の智力は、他の才能を犧牲にせねば、發達させることが出來ないもののらしい。どこでも詩人は、活社會で多少迂遠なものと認められてゐる。滅多に立派な實業家になれない。他人の感情に對して、無頓着であらねばならぬ種類の事柄を決して成し得ない。本質が同情的だので、何事につけても、行動が冷かな理性よりも、寧ろ感情に由つて支配される。是れ卽ち屢〻、非常に不幸な失敗を演ずる所以である。然し人間に於ける感情的方面を、最高の程度に示すものとして考へられねばならない。もし世の中すべてが、動かすべからざる規則で支配されるならば、人性の比較的寬大な衝動を活かすのに、手傳つて居る詩人の御蔭を受けた現在の世の中よりも、更に一層住み難いものとなるだらう。だから詩人は、僧侶と呼ばれて居る譯である。

日本で、持續せる感情的努力の、最も困難な形式が、西洋に於ける詩の藝術に比すべきものであるとは思はれない。實際日本と西洋の業績を比べるのは、甚だ難かしいことで、若し私が詩句に現はるゝ詩のみに就いて云つて居るならば、諸君は私の說は全然無鐵砲だと思ふでせう。然し詩は詩句の形式のみとは限らない。美しい散文の詩も有り得る。英文學の傑作の中には詩句の通りの感情的效果を生ずるが爲め、性質上散文詩と稱すべき價値のものがある。さて、如何なる形式の文學でも、眞にかかる效果を生ずるものは、その作家が割愛しうる全時間と全能力を要する。そして、この理由で、その作家の生活は、孤獨――藝術に對する獻身の生活――であらねばならない。

三

今度は小說――散文詩とでも名づくべき種類は除いて――に移らう。現今では、小說は『人生の鏡』でなくてはならぬ。この方面に時間と生活を捧げんと欲する人は、何をなすべきであるか。我々は論步を停めて、制限を附せねばならぬ。

歐洲小說には名義上、幾多の分派あれども――古典派、浪曼派、寫實派、自然派、心理

派、問題派など――我々はこの區別に拘泥するに及ばない。單に兩派――主觀的と客觀的――に分ければよろしい。小說は、一つは想像した事物の畫であり、今一つは實際に見た事物の畫である。我々は孰れが可なりといふ選擇が出來るか。藝術的見地からは、出來るとは私は信じない。何となれば、俗惡な世間の考と反對に、小說と劇の最大傑作は、實際主觀的であつて、客觀的ではないからである。申すまでもなく、沙翁はその驚くべき脚本の出來事を、見たり、經驗したりしなかつた。また希臘の偉大なる戲曲家は、彼等が舞臺に載せた、あの强烈に我々の心を動かす悲劇の事實を、目擊したのでないことは、申すまでもない。眼よりは、心の方がもつと明かに認知するといふことは、驚くべき事實である――但しそれは天才の心に限る。が、藝術的の立脚地からは、單に最大傑作が、偶〻その方法で出來て居るからと云つて、文學上甲の方法が、乙の方法よりは是非とも優れて居ると、斷言出來ない。將來或は客觀的方法が、同樣に立派なものと成ることがあるかも知れない。そして、個人的見地から、靑年作家の見地からは、選擇が絕對的に必要である。自分の文學的能力が、如何なる方向に成長しつゝあるかを發見するのは、極めて肝要である。若し觀察よりは、想像に由る方、一層よく制作が出來ると感ずる場合は、是非とも浪曼的制作を練るがよい。然し若し官能を使用した方が――觀察したり、比較したりして――途

かによく制作が出來ると、確かに感ずる場合は、自分へ對する義務として、寫實的方法を採用せねばならない。それて、文學に關聯しての彼の生活行爲は、彼が孰れの方針を取ることにするかに由つて、定まつて來るのである。

既に述べた通り、小說と劇の最高の種類は、直感と想像の作である。例へばサッカレーも、沙翁と同様に、小說に書いたことを實際見たり、經驗したりしなかつた。然し其小說は、ブロンティー女史のに勝さる事非常である。女史は唯だ自から聞いたり、見たり、感じたりしたことを書いただけだ。諸君が若し事件の眞相を知らなかつたならば、サッカレーの方が、ブロンティー女史より、もつと寫實的であつたと思ふでせう。偉大なる想像的作品は、眞實そのものよりも、もつと寫實的で、客觀的研究の結果より、もつと一見客觀的の趣を呈するものである。が、諸君に注意した通り、直感に由つて、この種の寫實に到達し得るのは、唯だ天才ばかりである。然し程度の低い天才がある。諸君は諸君の中にも、そんな人が幾人か居るのに、氣が付いたに相違ない。どんな學生の集まりに於ても、急變が起る度毎に、他の學生が欣んで信賴するやうな、偉い人物が二三人は屹度ある。例へば千人の學生が、或る困難な立場にあるか、又は何事かを心配して居ると、やがて、その千人の中から、指揮者、案内者、又は忠告者が出てくるだらう、彼等が特に强い、又は怖ろ

しい人物でなくてはならぬことは毫もない。困惑や危險の時機に必要なことは、强い腕でなく、確りした頭腦である。諸君の中で最も優秀の頭腦を有つてゐる者は、必らずしも最も優秀の學者に限らぬ事を、諸君は本能的に知つて居ると、私は察する。難局に際して必要なのは、學問でなく、所謂『生得の機智』、强い常識である。英國で普通に『確りした頭腦』と云ふのは、これである。こんな人物は、餘り失敗をすることがない。彼等が見知らぬ人に接する場合、どんな行動をするか、注意して御覽なさい――全然氣樂にして居て、困つた風はなく、異常な人物や、事件に出逢つても、すること、云ふことを心得て居る。さて、この才能、この『生得の機智』は何であるか。それは一種の强い直觀である。それは人間が持つて生まれる中で、最上の智慧である。若し人がこの賦能を多量に有し、而かも同時に、文學の愛好心を有すれば、大戲曲家又は大小說家になることが出來る。ここに眞の主觀的作家があるのだ。彼は何等の困難もなく、想像の人物を作り、それに役割を演じさせる。彼は大概の男女は、ある事情のもとには、どんなことをするかといふ知識を持つて生まれてゐる。然し高級の天才が、あまりこの方面に存しない。要するに、私が諸君に、判然留意して貰ひたいのは、主觀的制作、想像的制作のためには、諸君自身に幾分かこの直感があるのを知らねばならぬといふ事である。諸君がこれを持たない以上は、他の

方面に努力するのがよいだらう。

私が述べて居る、この眞の創造的能力なる、戯曲的才能は、最高級のものに於ては、いつも稀である。現今それが苟も存する場合には、唯だ低級のものばかりである。多分この才能は、全くそれを錬磨しない——少くとも、文學的方面に向つて、それを錬磨しない——人々の心の中に、種々の程度に於て、存して居るだらう。何故となれば、現今この能力を有する人々は、文學よりは、もつと更に物質的成功の確實なる方面に、その建設的想像力を利用し易いからである。彼等は外交家、大實業家、銀行家、或は政界の領袖となるかも知れない。彼等の人情についての知識、及び人間の動機についての直觀は、文學よりも幾多他方面に於て、文學に於けると均しく彼等の役に立ち、而かも大抵、文學に於けるよりは、遙かに一層役に立つ。これは感情的詩人の性格とは、頗る異つた種類の性格である。もつと複雑で、且つもつと強い。こんな人々の場合に、文學生活の行爲に關する法則を云云するのは、無用である。何の勸告も要らない。爲ることが、非常に自分勝手で、そして、障害のために意氣を沮喪しない。然し注意すべきことには、彼等は概して、社交界に活躍する。彼等に取つては、社交界が劇よりも、もつと面白い。それが絶えず感興の動機を供給するし、また彼等に取つては、そこに何等の恐ろしいものも存して居ない。彼等は激浪

に馴れた、强い泳手のやうである。大概誰でも、多少は游泳の心得があつても、激浪の間を泳ぐ者は、左程普通には無いといふことを、諸君は知つて居るでせう。米國や、他の國國で、上手に激浪の場所を泳ぐ者は、政府の救難所に勤務して、高い給料を受ける。これは子供の頃から、馴れて居るのみならず、生來非常な力と器用がなくてはならぬ。さて、社交の大海で、下手な人々は譯もなく溺れるが、私の述べて居る性質の人は、激浪間の强い泳手のやうなものだ。何も碎波に恐れることは無い。それからまた、この種の人々は、英文學史で特にわかる如く、いつも、どんな時にでも、彼等が爲さうと思ふことを、することが出來るし、且つ社交界の義務の爲めに、餘り氣を揉むといふこともない。例へば、ヴィクトリヤ朝の文學史を見ると、その四大詩人中、唯だロバート・ブラウニング一人が、優れた戯曲的才能を有して居た。テニスン、ロゼッティー、及びスキンバーンは、孤獨瞑想の生涯を送つたが、これに反して、ブラウニングは、絕えず社交界に居つて、社交の經驗から快樂を得、且つ人情をも學んだ。更にまた散文作家の例を取ると、浪曼的の大小說家は、すべて孤獨的な人であつて、戯曲的の大小說家は、本來社交的な人であつた。例へば、サッカレーは特に交際界の人であつた。それから、もつと後の例を擧げると、英國の心理小說家中での泰斗、メレディスは、無論社交界の人物である。彼がその異常な小說の

材料を得たのは、上流社會に於てであつた。あまり時間を要するから、訓を加へるまでもなく、一般の法則として、創造的天才の人々に取つては、孤獨は何もならないと云ふことが出來るだらう。

四

文學の二大部分――主として詩によつて、代表さるゝ感情的のものと、主として戲曲又は戲曲的小說によつて代表さるゝ創造的のもの――は、全く性格、稟性によるといふことを、私は諸君に示し、又は暗示したと思ふ。教育は助けにはなるが、教育で以て大詩人や、大戲曲家は出來ない。それから、浪曼的文學の方と寫實的文學の方と、二種それぞれの性格は、殆ど互に正反對であることを諸君は知つた。二種共に稀である。今となつて、孰れかの種類に屬して居ると思はれさうなものが、我々の中に澤山はない。我々が一方又は他方に屬してゐることは、概して夙にわかるものである。何時でもといふ譯ではないが、異常なる才能は、大抵靑年時代に發露する。極めて稀には、或る偉大なる才能が、中年頃に發展することも、あるにはある――これは主もに、散文作家の場合に起る。が、自分は文

學上、優れた事業を成すために生まれたのだと、信ずべき最も有力な理由がない以上は、或る特別の使命を有して居るものと、想像しない方が餘程よろしい。大概の文學々生は、上述の兩種の孰れかよりは、寧ろ第三の種類に屬し勝である。それで、幾分か有益なことを述べ得るのは、この第三種に關してである。

尋常の種類の文學者は、主として觀察と不斷の練習に賴らねばならない。突然の感興や、異常な直覺を期待することは出來ない。苦心探求して、眞と美を見出さねばならぬ。且つ多年の研究勤勉に由つてのみ、見たり感じたりしたことを表現する方法が、わかつてくる。教育は是等の人々に取つては、絶對でないにしても、殆ど缺ぐべからざるものである。私が『絶對でなく』と云ふのは、獨習で時としては、全然尋常の教育が與へ得る程、または以上を足して行かれるからである。が、殆ど例外のない原則として、尋常の學生は學校教育に賴らねばならぬ。それが無いと、制作に於て常に依然として、文學上所謂『田舍風（プロヴィンシャリズム）』となり易い。文學上の稱呼として、田舍風といふのは、田舍の調子、考へ方や話し方の野暮な不器用を意味しない。非常に平凡に流るゝ傾向、一般にわかつた事を、新發見でもあるかのやうに、縷説する性癖をいふ。それから、また妄りに甲の書物、乃至乙の書物、或はある一種の思想に、過度にかぶれる習慣をいふ。それでも苟も立派な教育ある讀者は、

發表してある一切の思想の出所を、すぐに見拔いて了ふ。これが田舍風である。獨學の大危險は、たまたま當人が異常の機會、異常の趣味を有し、且つ機會を求めたり、趣味を養成したりする時間が澤山ない以上は、終生田舍風の程度になつて了ふことである。

大學教育を受けた文學々生に取つて、文學的生涯の發端に於てすべき最も剴切なことは、出來るだけ早く、自己の智的長所は主として、何れの方面に存するかを見付けることである。これを見付けるのに、數年かかることもあらうが、それが見付かるまでは、何も偉いことは、殆ど出來さうにもない。眞の天才を有しない場合には、文學上たつた一つの方向を目掛けて、最上の能力を發達させるに限る。いろんな方面に向つて、仕事を企てるのは、いつも危險で、滅多に效果を奏しない。あらゆる文學者は、この斷案に到達せねばならぬ。尤も外國文學に於て、眞の天才でなくて、詩と散文、或は散文小說と戲曲の兩者に於て——卽ち、一見兩方面に向つて——立派にやつてのけた人々の例はある。ヴィクトル・ユーゴーは、その例に取らない。彼は純粹の天才の例なのだ。が、私の言はんと欲することの、更によい例として、英國に於けるメレディス、又は諸威に於けるビョルンソンを擧げよう。こんな場合に於ては、制作さるゝ兩種の文學が、實際甚だ相似寄つてゐて、一方は必らず他方から生じてくるほどであることを、諸君は記憶せねばならぬ。例へば、諸威のこの大

戯曲家は、悉皆極めて戯曲的形式の物語や小說の作家として始めたのであつた。戯曲的小說から戯曲へ移るのは、僅かに一歩に過ぎない。また英國のこの小說家兼詩人の場合でも、詩と散文の兩者に於て、實際同一の才能が現はれてゐる。その小說は心理小說の性質を有し、詩も性質上、心理的の詩である。またブラウニングの戯曲は、その戯曲的な詩に見出さるゝ思想を、戯曲的形式に發展させたものに過ぎない。またキングズリー——本來浪曼的で、第一流の浪曼的作家——の例を取つて見る。詩に於ても、散文に於ても、倖くあつたが、彼の場合では、詩と散文の間に非常な類似がある。且つ彼はその長所の存する處を知つて居たから、賢くも極僅かの詩を書いた。若し諸君が自身で調べて、判斷しようと思はば、キングズリーの『鵠の頸をしたイーディス』といふ詩の詩句を注意し、それから稗史『ヒーレワァード』を一二頁讀んで御覽なさい。私はこの種の例を、英文學で五十も示し得るだらう。兩方面に成功したのは、一方が自然に他方へ導き到る場合のみであつた。然し今日敎育ある幾百の英國文士が演じつゝある失策——二つの全く異つて、且つ相反する方面、例へば、浪曼的な詩と寫實的な散文を書かうとする大失策を、學生は演じてはならぬ。諸君の趣味は、何れの方面に養成さるべきか、何れの方面に諸君は最も優れて居るか。それを知るのが、頗る必要である。平凡はそれを知らない必然の結果だ。といふのは、

畢竟この最後の種類の文學では、矢張りすべて他の種類のやうに、成功は性格如何に由つて定まる――天禀の諸狀態、卽ち遺傳せる趣味、感情、傾向に由る。一たび是等のものを知れば、行路は滑かでなくとも、平坦になつてくる。それからは、一切精勵不休に由る。

この尋常な種類の文學的目的を追求するには、孤獨を求むべきか、避くべきか。これも亦性格如何に由る。劈頭先づ諸君の長所を知り、取るべき方向を決するのが緊要である。それを確定した上で、觀察と共に感情及び想像に賴らねばならぬか、または唯だ觀察にのみ賴るべきかを知らねばならない。その場合、諸君の生來の性癖が敎へて吳れるでせう。若し諸君が孤獨の境涯で、一番よく仕事が出來るといふことを見出すならば、良い作品の制作を妨害するやうな社交用務を近づけないのが、諸君自身並に文學に對する義務である。

以上のことからして、新日本文學の前途にある、非常なる困難といふ問題に移つて來るのである。この困難に關して、私は最初から諸君に話さうと思つて居たのであつた。何れの國で、どんな藝術でも――卽ち、ある國民的藝術を――作るには、閑暇が必要だといふことを、諸君は知つてゐるでせう。私は今こゝでは、何んな境遇の下に在つても、絕品を作りうる人々が示すやうな、特別例外のことを話してゐるのではない。かやうな格別の人人は、國民的藝術を作らないで、二三の眞似の出來ない、天才的作品を作る。藝術といふ

ものは、幾千の人々の、悠々迫らざる氣長な骨折と思考と感情から出來てくる。その意味に於て、閑暇は藝術に取つて絶對的に必要である。あらゆる日本の藝術は、代々の閑暇生活の結果なることを、私が諸君に注意するまでもあるまい。今日有名な日本の藝術――製陶術、繪畫、金屬細工並に文學――を作つた人々は、早忙の間に制作をしたのでは無かつた。誰も昔は、せかせかして居なかつた。今日茶の湯と稱せらるゝ、念の入つた儀式は、非常に悠長で、美的な時代の生活を示してゐる。これは澤山の中の一例として擧げたのだ。今日、日本の藝術は、昔通り盛んであると、主張したがる人々があるにせよ、具眼の士は、昔の藝術は滅されつゝあると明言してゐる。それを滅しつゝあるものは、唯だ單に俗惡な趣味となつて現はれた外國の感化力ばかりでなく、閑暇の缺乏である。以前何かの娯樂に與へられた時間が、年々益々切り詰められる。此處に聽講の諸君中、世間の人々が今日よりは、もつと時間に餘裕を有つてゐた時代を記憶しないものは一人もない。そして、諸君の中で誰も、時間の缺乏が今日に於けるよりは、もつと苦しく、もつと怖ろしくなる時代に遭遇しないものは無からう。何となれば　日本の文明は、徐々ではあるが、間違ひなく工業的性質を帶びつゝある。そして　殆ど純然工業的になつた曉には、實際極めて僅かな閑暇しか無い事になるからである。多分諸君は、英國、獨逸、佛國は――假令、澤山藝術

を產しうるにしても——主として工業國であると、思つて居るでせう。が、狀態が同一でない。他國の工業主義は、富んで、時間に餘裕のある階級が出來る事を、不可能ならしめなかつた。そんな閑暇のある階級が今猶ほ存在して居て、特に英國では、大文學の制作を可能ならしめて居る。日本がこれと類似の狀態を呈しうるのは、まことに前途遼遠である。

時間の缺乏を諸君は年々一層に感ずるでせう。そして、まだもつと重大な困難に就いて諸君が考へねばならぬものがある。歐洲の大學で、海外の教育を受けた——彼地では非常に賞讚を博し、且つ實に有望なる——日本の學者が、數年每に日本へ歸つてくる、歸朝後、何といふ重い負擔が、彼等の肩に投ぜられることでせう。彼等は先づ以て、家族の世話を引受けねばならぬ、官吏となつて、外國の同じ地位の人々に要求せらるゝよりは、遙かに長時間の官務を遂行せねばならぬ。そして、どんな場合にも、外國の教授や、官吏に許してあるやうに、自分の時間を處理する權利を期待する譯に行かない。否、彼等は直ちに幾百の任務が附纏つた、且つ一年中多くは、日出より夜遲くまで、用務に鞅掌せしめ勝な、難局に就かねばならない。愉快な仕事と考へられ、また實際さうであつたことも、面白く無くなつて、娯樂の方の時間は缺げて、ただ疲勞と苦痛が殘つてくる。苟も官吏たる者は、幾何の祭禮、宴席、公私の祝會に出でねばならぬかを、私が詳しく云ふに及ばぬ、今の處、

これは致方がない。これは舊い狀態と新しい狀態の爭鬪であつて、整理が附くまでには、多年を要するでせう。が、是等の學者が、文學上偉いものを出さないのは、何も不思議でない。外人が日本の優秀な學者は、歸朝してからは、何もしないらしいと、云ふのが普通である。その實は、あまり働き過ぎるので、而かも永遠的作品を殘すやうな仕事をしないのである。

大抵諸君は、富有にせよ、然らざるにせよ、大學を出てから、餘りに澤山のことを、させられるでせう。少くとも三人前の仕事をせねばならぬと思ふ。教師でも、官吏でも、すべて修業を積んだ各種の人々が、未だ稀で足りない。仕事は多過ぎて、人があまりに乏しい。こんな爭ふべからざる事實を向うへ廻はして、どうして文學を作り出す望があらうか。實に張合の無い有樣だ。これほど張合のないのはあるまい。

この場合に、當て嵌まるやうな英國の古い諺がある。

浮世の惱みには、一々治療の方法がある。
それとも、全く無いこともある。
有れば、探してみよ。無ければ、氣にかけるな。

今のところ、救治策は思ひも寄らぬといふことは、諸君も同意と思ふ。それて、我々の

義務は、諺の通り『氣にかけるな』である。文學に取つて、前途はいかにも悲觀的に見えるけれども、確固たる人物は、それが爲めに嚇かさるべきではなく、近代英文學が、この點に關して、何か指導的模範を提供して呉れないかと、探してみるべきだと、私は考へる。英文學は確かに提供して呉れる。私が指示した第三種に屬する、立派な英文學が、澤山丁度同樣な、意氣を沮喪させる境遇の下で作り出されたのであつた。偉大な詩は、そんな事情の下では、書かれなかつた——それは孤獨が要る。大戲曲、大戲曲的小說は、そんな情態に在つては、決して出來なかつたが、頗る重要な隨筆の文學、短篇小說の大文學、それから多くの秩序的な種類の、思考を費した著述、例へば歷史的、社會的、批評的研究——すべてこれが、晝間自分の時間と稱すべきものを有たなかつた人々によつて、甚だ立派に成遂げられて居る。觀察と經驗の文學、それから辛抱强い研鑽の文學は、澤山晝間の思考と閑暇を要しない。多年英國で、かゝる著作は大概一時に少々づつ、每度就寢前に、出來たものである。例へば、諸君は疑も無く、その名を耳にしてゐるでせうが、モーレーといふ卓拔な英國の文士がある——澤山の著述があつて、文學上一大勢力を有し、而かもまた、最も多忙なる英國の法律家且つ政治家の一人である。四十年乃至五十年に亙つて、この人は晝間は、一時間の閑暇も有しなかつた。彼の著書は悉く、一時に一頁乃至二頁づつ、夜

更けて家族が眠つてから、書いたのである。この種類の文學に取つては、實際それは時間の問題よりも、寧ろ完全に規則正しい習慣の問題である。一日に二十分間或は一夜に二十分間でも、二ヶ年間には、餘程のものとなる。而して、大成績を擧げるやうに、利用することが出來る。唯だ要件は、この短時間を、時計が打つ如く規則的に利用することである——病氣などの、止むを得ざる事情でなくては、決して中絶してはならぬ。無用な骨折のため、身體を疲らしたり、視力を害するのは、全く罪惡であるが、健康良ければ、どんな場合にも、さうはならない。また丁度出來上つただけ、悉く申分のない、完成した原稿とするために、時間と努力を浪費するにも及ばぬ。決してその必要はない。文學の勞作は、考へたり感じたりするのが、主もでなくてはならぬ。最も力を籠めねばならぬ狙ひ處は、思考と感情の一々の經驗を記錄するといふことである。鉛筆でも、速記法でも、小さな畫の形でもよろしい。書きとめて置きなさい——再びその記錄に對する時、記憶を新たにするに足りさへすれば、どんな風にでもかまはぬ。文學を愛し、通例の良好な健康を享有する人は、若し規律的勞作を續けて行けば、いくら他方面に繁忙であらうとも、一兩年たたぬ内に、一卷の好著を作り得ると、私は確信する。

どんな種類の仕事から、始めたらよからうと、諸君は問ふてせう。私は飜譯と答へるに

躊躇しない。飜譯は創作に對する、有らん限り最上の準備である。且つ飜譯は日本て、大いに必要である。西洋文學の如何なる知識も、單に大學や學校に由つて、眞に日本に傳播する譯にゆかない。飜譯に由つてのみ、傳播されてくる。佛獨西伊露諸文學の英文學に及ぼした影響は、大部分は飜譯の御蔭である。學問だけでは、新しい國民文學を作る助けにならぬ。實際、學者は職業の性質上、あまりに非創作的である。少々この種の仕事をしてから、創作を試むべきである。知らず識らずに、日本の學者で丁度それをやつて居るのが、少々ある。彼等は着實に飜譯をやつて居る。然しそれ限りて、大概が止つて了つて居る。だが、實際は、飜譯は文學の階梯の唯だ第一階でなくてはならぬ。

　創作については、私は世間に對してでなく、作者自身に關する文學の眞の任務について、幾分諸君に語らうと久しく望んでゐた。その任務は、精神的でなくてはならぬ。文學は特に精神的練習たるべきである。私が精神的といふ語を使ふ場合、どうか宗敎的、または不道德の正反對のものを意味すると、思はないで下さい。私はここで單に、自身の修養――我々の心中に、智情の最善最强なる性質を發達させること――の意義に使つて居る。文學はその作者に取つては、人生の主もなる快樂と不斷の慰藉てなくてはならぬ。さて、日本の昔の習慣では、幾分この事實を認めてゐた。苦しみの時、悲しみの時、すべて心勞の場

介に、精神的練習として詩を賦し歌を詠ずる習慣を、私は指すのである。この獨特な形式から申せば、この習慣は特に日本的である。それとも、その起源から申せば、多分支那風であつて、西洋風ではない。然し私は諸君に斷言する。西洋の文士間でも、單に詩についてばかりでなく、散文についても、數百年間精神的觀念が伴つて來たのである。これは西洋の作家に由つては、同じほど痛切に理解されなかつた。行爲の法則として、教へられなかつた。最も立派な人々、即ち選良の士を除いては、わかつてゐなかつた。が、最も立派な人々は、このことを悟つて居た。そして、あらゆる人生の苦惱に對する精神的慰藉として、いつも文學にふり向いたのである。諸君は大ゲーテが、自分の子供の死を聞いた時、「死人を越えて、前方へ」と叫んで、仕事を續けて行つた話を記憶するか。ゲーテが述作に心を向けて、悲しみに克つたのは、それが初めてではなかつた。大概苟も經驗ある作家は、何かこんなことをするやうになる。テニスンは單にその深愁から遁れんがために、「紀念の歌」を書いた。今年私が講じた詩人中、その作品に同じやうな經歷のないものは、殆ど無い。文學を愛する者は、悲しみを癒すのに、どんな醫者も與へ得ないやうな藥を有して居る。彼はいつも、自分の苦痛を一種貴重にして、永遠的なものに形を變へることが出來る。世の中の人は誰でも、非常な幸福を望む譯に行かない。大抵の人生に於て、幸福

が不幸に對する割合は、凡そ三分の一以下の計算になつて居る。いくら諸君が健康、强壯、或は幸運であらうとも、諸君は銘々、餘程の苦痛に遭ふ覺悟をせねばならぬ。そして、その苦痛を利用することが出來ないかを、諸君自から問うて見る價値がある。何となれば、苦痛はその利用法を知る人には、非常な價値があるからである。否、百尺竿頭一歩を進めて、もつと云ふべきことがある、苦痛を知らない人によつて、未だ嘗て偉大なものが書かれたこともなく、また將來書かれることもないだらう。一切の大文學は、悲哀の沃土にその根を有つて居る。そして、それがゲーテの名句の眞意である。

嘗て悲哀の裡に、パンを食べたこともなく、
淋しい眞夜中を、寢床の上で泣き明かしたこともない人は、
神が悟れない。

エマースンは、愛した女の死による非常な哀愁が、確固たる人物に及ぼす精神的結果を書いた名句に、殆ど同じ思想を現はしてゐる。

自分のやうにも思ひ、もつと淸らかな身の自分と思つて、
彼女を愛するとも、

彼女失せては　生あるもの一切、美を奪はれて、
日が、暗くなるとも、
半神去ってこそ、眞神顯はると、悟入せよ。

卽ち、縱令その女を自身にも增して愛し、彼女を人間以上のものと考へ、彼女の死と共に世界中が暗くなり、萬物は色が消え、生物すべてその美を失ふやうに思はれても、その悲しみは自身の爲めになるだらう。半神が去つた時にのみ、始めて我々は眞神を解し、また見ることが出來てくる。何となれば、すべての苦痛は、その當時、いくら我々がそれを嫌惡しても、我々を賢くするやう助けてくれる。勿論、夜半寢床の上に坐して泣くのは、靑年ばかりである。ただ經驗が無いから、弱いのである。圓熟した人は泣かないで、心を鎭めるため、文學に向ふでせう。そして、すべて讀者の心を裨益して、一層やさしくし、眞實ならしめるやうな、美しい歌や思想として、彼の苦痛を現はすでせう。

覺えて居て下さい。私の趣意は、文學者は唯だ苦惱を忘れんが爲めに書くべきであるといふのでは無い。端緒として、靑年らしい勞作としては、それでも甚だ結構でせうが、確固たる成年の人は、そんな風にして、忘れようとしてはならぬ。これに反して、彼は其悲哀について大いに考へ、世界の大苦海に於ける一小滴を代表するものと考へ、それについ

ては勇猛な氣象を以て考へ、そして、それに關する彼の感想を美しい、沒我的形式に表現するやうにせねばならぬ。誰人も獨自の悲哀、私的の損喪、個人的苦痛が、眞に人生の大苦痛を現はす以外に於ては、文學上何等かの價値を有しうるものと、決して妄りに思ふべきではない。

何はさて置き、文學者はその著作に於て、利己的であつてはならぬ。利己的感想は、少しも價値を有しさうにもない。だから、誰でも眞に利己的な人は、決して一詩人にも、大戲曲家にもなれない譯である。苦しみに逢ひ、それに打克つこと、殊にその打克つといふことで、力が附いてくる。相撲を取るのは、力が強くなる爲めである。それで、精神力のためには、あらゆる困苦と苦鬪するやうにせねばならぬ。文學上この眞理を現はす一切の比喩——岩から金を分析する火、溪流の中で相擊つて琢磨さるゝ石塊、皮相的なものを猛烈に分けたり、破壞したりするさまを現はす自然的變化の數々——を考へて御覽なさい。

方法とか、手本についての、どんな勸告よりもよいのは、つぎの簡單なる助言だと思ふ。いつでも諸君が困つた場合、全くどうしてよいか、途方に暮れた時、着座して何かを書きなさい。

まだ今一つ云はねばならぬことが殘つてゐる。そして、それは不必要ではない。卽ち斯

うだ。一度書いたまゝでは、文學にならぬ。文學と、すべて新聞文學(ジャーナリズム)の名に含まるゝものとの大差異は、この事實に存する。誰人も一回で書き上げて、眞の文學は出來ない。有名な人々が一氣呵成て、驚くべき著作を書き始め、而かも草稿を後で訂正もしないといふ話が、澤山あるのを私は知つてゐる。然し文學上の經驗では、大抵こんな話は眞赤な嘘だ、といふことに一致してゐると、私は諸君に告げざるを得ない。立派な文學の唯だ一つの文を書くにも、少くとも三度原文を書き變へねばならぬ。が、初心の者に取つては、三度を三たびするも、多きに過ぎないだらう。そして、私は詩のことは毫も申して居ない――それは適當な妙趣に到達するまでには、五十回も書き直さねばなるまい。諸君は多分これは感想を鉛筆にてでも、小さい控へにして、書いて置くのは、非常に價値があると、私が云つたのに矛盾すると思ふでせう。然し矛盾は唯だ外面のみで、實は毫もさうでない。最初の手控への價値は非常なもので――中途の如何なる形式よりも貴いが、そんな手控へは、文學的建築が、徐々と骨折つて建てられる土臺の外形、地面の測量、開拓を示すに過ぎないことを、作家は記憶せねばならぬ。いくら努めて注意して書いても、最初の手控へは、眞の考へや、眞の感じを表はさない。唯だ記憶に資するだけの記號、表意文字である。そして、諸君は眞意を忠實に言葉で寫すには、餘程の時間が要ることがわかるでせう。私は

確言するが、諸君の中て、最初こんな風に仕事をしようとする人は、あまり無いてせう。初め色んな他の方法をやつて見て、多くの失敗をするてせう。唯だ苦しい經驗のみが、この方法の必要を、諸君に確信させ得る。他の如何なる藝術以上に、文學に取つて最も肝要なことは、忍耐てある。これが特に私が文學志望者に對して、表現の方法として――少くとも定職として――新聞文學を薦め得ない理由てある。それは、新聞文學は、待つ餘裕が無いし、而かも最上の文學は、待たねばならないからてある。

私は以上の諸注意が、何等直接の價値を有しうるとは信ぜぬ。唯だ諸君がそれを覺えて居るやうにして貰ひたい。然しその一つの價値を試して見るため、誰か一小話又は物語詩を書いて、抽斗に入れて置いて、また書き直して、それからまた數ケ月も藏めて置くといふ實驗を一年間試みる人のあることを、私は非常に希望する。その仕事は初めに書いてから、毎日數分間位しか要らない。一年の終りに、最後に書き上げてから、讀み返へしてみると、最初の形と最後の形の差は、全く一哩先きの樹木を、初めは肉限て見て、それから後に極めて强度の望遠鏡て見るやうてあることが、わかるてせう。

譯者註　ヘルン先生は、文學を定職として立つことを、餘り後進に奬勵されなかつた。自身の少壯時代の艱苦に顧みて、他人に物質的難澁の道を辿らせるのを忍び得なかつたらしい。

○散文小品に就いて（一二・一一・一三・夜）

所謂「小說の跋扈」にも關らず、小說が徐々と衰へて、形態を變じつゝあることは、疑を容れない。確かに或る新樣式の小說が發展して來るだらう。が、それは約百年間、文學の上に威張つてゐた小說とは、全然異つたものに相違ない。それから、詩も變化しつゝあるが、詩の場合では、小說に於けるよりも、比較的沈默時代といふ特徵が尙一層現はれて居る。

今回の硏究は、主もに散文であるが、私の陳べることは幾分、詩にも適用するだらう。文學の一部門が滅亡するのは、ただその題材が盡きて剩す所なきに至つた後である――少くとも、自然の狀態に在つては、これが一般である。英文學上、最早これ以上に進んで取扱ふことが、不可能となり、又は一寸見た所で不可能となつた程、盡きて了つた題材は何だらうか。これは興味ある問題で、注意に値するだらう。

劈頭第一に、我々は文學には、他の一切のものと同じく、流行の型があることを記憶せ

ねばならぬ。或る流行は丁度、衣裳に於ける特殊の時好の如く、唯だ一季節の間、その生命がある。然し頗る長期間續く他の流行や習慣がある――丁度服裝の恰好如何を問はず、絹や羊毛を着る習慣が、數百年又はもつと長くも續き得るやうなものである。我々は兎角、或る文學的習慣が繼續して居る時期の長いために、その習慣を實際以上、遙かに自然的て、且つ無くてはならぬものと想像し勝てある。今日英文學の上に起りさうな變化は、衣服の恰好よりは、寧ろ衣服を作る材料に於ける變化てある。が、この材料は非常に長い間使用されてゐるので、多くの人々は、物質が卽ち文學て、且つ文學の創作に必要缺ぐべからざるものと考へ慣れてゐる。

私の言つてゐる意味を、もつとよく說明する爲め、一般西洋文學と日本文學間の大差異として、最も强く諸君に印象を與へるものに就いて、暫く諸君に考へてもらひたい。諸君は直ちに、私が形式のことを言つてゐるのでは無いと悟るてせう。英佛獨の詩や小說、また戲曲を擧げてもよからうが、諸君がそれを讀むとき受くる印象には、一種の奇異、特に外國的な一種の趣がある。そして、常に或は殆ど常に、この趣は大概同樣てある。諸君が外國文學から受ける、この奇異の感は、男女關係の題材を、すべての西洋文學て扱つてゐる方法に特に基くのだといふ私の暗示は、妥當を得て居るてはないか。數百年間、西洋文

學を通じて、戀愛が主題となつてゐる。そして、是れ即ち諸君が、西洋文學を特に諸君自身の思想感情の習慣に異るものと感ずる所以である。

が、諸君がこの差異をかやうに感ずるといふ事實は、結局西洋の詩のこの情熱的要素には、不自然、人爲的な點が存してゐるに相違ないといふことを、是非とも諸君に暗示したてあらう。人間の性質感情は、世界の相反する兩側に於て、本質的には異らない。社會の根本的情操は、到る處大概殆ど同一てある。何となれば、それは大抵殆ど同種の道德的、社交的經驗に基いたものだからである。若し甲の文明の繼承者が、乙の文明の繼承者の思想行爲の上に、一種極度に異つた點を見出す場合には、その相違は眞に習慣の相違であると想像して宜しい。そして、習慣は恰も流行の如く變化するに定まつてゐる。

五十年前に——否、二十五年前てさへ——歐洲文明に於ける戀愛の題材は、唯だ一時的のもの、一つの流行、屹度或る他種の材料に代はる運命を有する習慣だと云々すれば、殆ど途方も無いことと思はれたてあらう。學者や社會學者が驚愕絶叫して、反證として、希臘羅馬の文學のことを喋々したてあらう。今日てさへ、戀愛は永遠に文學の題目てあるに相違ないと思ふ人が澤山ある。然し比較的優れた學者、今日具眼の士は、それは過ぎ去りつつあるのだと、公言して憚らない。それは唯だ極めて古い流行であつたのだ。

實際、若し諸君が現今所謂英文學史――卽ち一般歐洲文學史――に就いて考へるならば、戀愛の題材が決して、いつも主調でなかつたことを發見するでせう。最も初期の文學は、殆どその問題に沒交渉であつた。例へば古のアングロ・サクスン時代の詩と散文は、主もに武勇と宗教の題目を取扱つた。アングロ・ノルマン文學は（譯者註一）、極めて控へ目に戀愛問題に觸れた。それで、佛國勇士のことを書いた大叙事詩、ローランドの歌は（譯者註二）、その中に女性に關して僅々五行しか無いといふ事實で著はれて居る。然し優しい性質の事件が一つ書いてある――勇士ローランドの最期を聞いて、許嫁の姫が死する事である。戀愛の題目が、歐洲文學に花咲き、生長し始めたのは、中世紀物語の頃から後てある――だから結局、この風習は唯だ數百年にしかならない。イリーザベス女皇の詩歌大流行期につれて、戀愛文學がいよいよ本氣に始つた際には、主もに拉丁希臘の詩人から感激を仰いだので、毫も近代民族からでは無くて、過去から復活して來たのであつた。所謂文藝復興期の感情なるものが、イリーザベス時代と古典時代の間に於ける戀愛文學の餘程の原因となつた。古典時代、卽ち十八世紀の『オーガスタイン期』（譯者註三）には、抑制の必要といふ新しい考へのために、この題目の扱ひ方が、隨分冷かになつた。然しこの抑制の傾向は、やがて新たに發明された小說の魔力に對して降參したので、リチャードスンの時代から、英文學の主題は、また戀愛

となつた。過去を通じて始終、必らずしもそれが主調で無かつたことがわかる。それは一つの流行であつたのだ――そして、その流行は今や過ぎ去りつゝある。

實際は、歐洲中でこの問題の種が、全く盡きたのである。英國では民族の特性のため、窮め盡くす譯に行かなかつたやうな、戀愛文學の或る部門も、佛國、伊太利、其他の國では全く餘蘊無くなつてゐる。世間は戀愛物語と戀愛詩に飽きてきた。將來の物語作者と詩人は、更に高尚な他の題材を發見せねばならなくなるだらう。

が、如何なる題材であるか。大抵あらゆる題材も、小說では盡きてゐる。どんな人間も今、新脚色を發明し、卽ち未だ曾て語られたことのない話をすることは出來まい。每年數百の小說が出版されるのではあるが、悉く以前に話されたことの繰返へしに過ぎない。作者が今なし得る唯一の事は、古い材料を復た結合することである。而かも、かゝる結合の望も、今は殆ど盡きてゐる。

預言をするに最も適當な人々が、どんなことが起らうとしてゐるかを預言しようと欲してゐないやうである。セーンツベリー教授は、知らぬと明言してゐるが、英國の民族と國語の心髓には、何か新しいものを生ずる力があると信じてゐる。ダウドン教授も亦知らぬと云つて居るが、新文學が起るだらうし、それには哲學が大いに關係を有つだらうと考へ

てゐる。ゴッス教授のみ、大膽に公言してゐる。彼は一卷の中に、工業、技藝、商業の或る全部門を描出して能事とする、ゾラの方法でなくては、小說は書けなくなるだらうと考へて居るが、ゾラの方法は、天才に兼ねて非常な勤勉力ある人に由てのみ採用し得られるだらう。且つゾラの方法で扱つてゐるやうな題材でも、結局盡き果てるに相違ない。心理小說もあるが、ヂョージ・メレディスの例で、最早流行する機會の無いことが、わかつてゐる。古い意義に於ける小說は、恐らくは運命は盡きて了つてゐる。それとも、短篇小說に限ることとなるだらう。詩の方では、戀愛の題材を殆ど構はないで、主として一層高尙な感情生活に力を籠めることになるだらう。換言せば、新しい心理的詩が出來ることになる。ゴッス氏以上の意見は、頗る面白いが、私はそれに贊成して云々する時間が無い。私は唯だ、こんな見込に就いての大評論家の意見を、諸君が認めることを熱望するだけである――第一には、戀愛が將來の散文又は詩の主題ではあるまいといふこと。第二には、一層高尙なる感情生活が、以前情慾生活に與へられた地位に代はるのは、殆ど確かだらうといふこと。

まだ想像的なことを、斯く喋々するは、多言を浪費するやうに見えるだらうが、若し諸君の中誰ても、文學を職業としようと望むならば、時代の傾向に隨ふ準備をするのは、何

よりも必要である。變化の自然的潮流に反抗して努力する文士は、誰でも大抵それが爲めに失敗するに定まつてゐる。いくら立派に書かれた著作でも、その思想感情上、亡んだ流派の著作と伍するものは、やがて忘れられて了うだらう。加之、諸君一個人の讀書に於ても、現代方面の讀書をするのが、極めて肝要である。實際、今日幾多の教育者間で、專ら過去の世紀の文學に非常な注意が與へられてゐるのは、惜しいことである。何となれば、その文學は表現の美があつても、感情想像に於ては、現代と緣故が無いからである。

將來の散文では、二つの方面が——隨筆(エッセイ)の方面と、小品文(スケッチ)の方面——大いに開拓されるに定まつてゐる。諸君の知る通り、英國では十九世紀の間、隨筆と小品文は、佛國に於けるよりは、餘程發達が少かつた。そして、それは、隨筆と小品文の作者は、小說の作者とよく競爭が出來なかつたからである。小說が實際隨筆を壓服して了つた。恰も岩石の大塊が、草地の上へ投ぜられたやうであつた。草や花がまた榮えるには、壓迫が取除けられねばならなかつた。そして、それが取除けられるのは、極めて間もないらしい。小說が早く衰頹すれば、する程、隨筆と小品文は、また花が咲いて、歡迎せられるだらう。かやうな文學は、淺見者流には些々たるものと思はれやうが、實は大抵の場合、小說よりは遙かに永續的で、且つ一層の價値がある。一つの立派な隨筆は、幾千年間も生きることがある—

―シセロの小さい諸隨筆を御覽なさい。今は各國語に譯されて、表現と思想の美のため、到る處で研究されてゐる。

小品文については、私は非常に大なる將來があると思ふ。今日でも、それは小說に稍〻對抗することが出來る。小品文といふ言葉は、散文で簡單に寫したものといふ意味であつて、眼で見、また心で感じた生活の實景である。この言葉の嚴密な意味は、手輕に敏速に描いた繪といふのであることは、諸君が御存じである。若し小品文が事實と誠實な感情の範圍を脫しなければ、小さい話の場合もある。若し書いてある會話が、一つの纏つた劇的印象を我々に作る場合には、小品文は二人間の對話文の形式を取ることもある。田舍や都會の經驗に感興を得た散文獨語の場合もあらう。何か見たものの記錄に過ぎなくても、見方が非常にうまいから、記錄にした場合、水彩畫のやうなこともあらう。要するに、小品文には、百も千も形式があるだらう。そして、あらゆる文學的能力の發表に對して、有らん限りの廣い範圍を提供する。諸君は小品文の圈內で、感想に、描寫に、或は感情的發露に、最上の力量を發揮し得るのである。勿論小品文は簡單でなくてはならぬ。然しこの形式の妙味は、幾ら短いといふ法則が無いことである。僅々五十行の小品文を作つてもよければ、十頁又は十二頁の長さのを作ることも出來る。純文學的小品文は、印刷にして十頁

乃至十六頁以上になるべきものと、私は考へないが、何等定則は無いのである。

文學のこの部門を研究し、その創作に從事することの價値について、今少し云ふべきことがある。我々は非常に多忙な時代に住んでゐるので、悠々たる文學的制作の機會は、唯だ少數者にのみ來るといふことを記憶なさい。いくら富有な人でも、社交生活の新しい要求に迫まられて、過去の氣長な、夢のやうな生活を享有することが、出來なくなるだらう。五十年程前に、三人でせねばならなかつたことより、もつと澤山を銘々一人でせねばならぬやうな、躁急極まる世紀に於ては、長いものよりも、短い形式の文學を試みる方が、遙かに容易且つ有利である。それからまた、將來の作家は、文學的藝術品の短いのと、長いのとの競爭を恐るべき理由を有しないだらう。何となれば、文學者間は固より、一般公衆も屹度長篇に飽きてくるだらう。折々の閑暇に讀み得る小規模の著作の方を好むだらう。

私が小品文について、斯く多言したのは、二つの理由があるからである。一つの理由は、隨筆と異つて、その價値が必らずしも博學又は哲學的才能に由らないことで、今一つの理由は、それがたまたま、文學上日本が西洋諸國と比肩し得る少種類中の一つだといふことてある。近頃の飜譯に由つて判斷すると、私の所謂、日本の昔の小品文は、英佛に於ける同種類の作に甚だよく匹敵し、比較上遜色無いらしい。而かも日本の文語は、表現の方法

として、當時では遙かに西洋語に劣つてゐたのであつた。實は小品文學の價値は、大部分華麗の文體とは沒交涉なものに基いて居る。それは面白い考へ方と純眞な感情に基く。日本の戲曲も小說も、西洋の戲曲小說とは較べものにならぬと批評家が云つて居る。その是非如何は、諸君の判斷に任せるが、若し日本の小品文が、同類外國文學とは比肩し得ないといふ批評家があれば、彼は自身の無能を表はすこととなるだらう。この種の文學は、日本の國民性の心髓と、また國語の精神とに全然適合してゐるやうに思はれる。そして、小品文が歐洲文學に於て、再び偉い地位を占めさうな時代に在つては、日本文學に於けるその發達に對して、宜しく有らん限りの注意を拂ふべきであらう。

必らず一種の繪畫でなくてはならぬ小品文と、精確なる學問を要し、且つ主もに幾分議論又は解說である隨筆との差を、私は無論この上に云ひ張るに及ばない。然し小品文は、往々物語風のこともあるから、諸君が小品文と、物語風な逸話とを區別し得ることは、甚だ必要である。本當の逸話は、單に事件の記錄であつて、何等感情的または藝術的の細叙が無い。この種の作は特に諧謔に適する。だから英文學に於て所謂逸話の大部分は、諧謔的種類のものである。短い可笑しい話を書くには、何等心理的技巧又は描寫的手腕を要しない。かやうな話は、通常小品文ではない。然し諧謔的の話が、心理的見地から書かれて、

讀者をしてその經驗のあらゆる感情を味はしめるやうな、僅少の場合に於ては、事件の物語でも小品文の品位に達し得るのである。一つの立派な模範文を、近年物故した英國詩人、フレデリック・ロッカーが示してゐる。彼の散文は彼の詩に殆ど劣らず纖巧で、風趣亦甚だ同一である。彼は自分の一小經驗を語つて居るが、それは遙かに一個の逸話以上であるから、小品文と呼ばねばならない。或る貴族の友人の邸で、華麗な絨氈の上へインキを覆した彼の失策談に過ぎない。事件そのものは、何でも無いのであるが、その話し方、作者の感情を讀者に移す手際が見事である。私はそれを全部引用し得ないし、また英國の習慣を諳示した處は、諸君も容易に呑み込めないだらう。然し少許の拔萃で、私の趣意がわかるだらう。先づ友人の家で、下婢に迎へられることが述べてある。家人が不在であつたからである。彼は我々をその下婢へ紹介する。

『この綺麗な下婢は、浮氣な若さは過ぎてゐるが、まだ中年にも達してゐなかつた。彼女を可愛らしいと云ふ者もあらうし、人を惹きつけるやうだといふ者もあるだらう。私には彼女が慇懃とは、どうしても思へなかつた——事實、彼女は少々無愛想で、私に逢ふのが左程嬉しくも無く、復たの逢瀨がなくても、斷腸の思をするといふのでも無ささうであつた。が、私は內へ入つて、應接間へ導かれた』

これは唯だ輕い冗談であるが、それでこの女の稍々きつい性質と、客の不快な心持がよく分かる。作者は進んで、二三の氣の利いた文句で、室のことを書いてゐるが、一句一句が諷刺畫である。それから客は詩を書き作ら、待つ間を過ごさうと思つて、インキ壺を捜す。遂にそれを見付ける――大きなガラス製のインキ壺――作者は讀者のために、その恰好を描いて呉れて居る。蓋を持つてインキ壺を擡げようとすると、上部と下部が離れて、華麗な絨氈の上へインキを浴びせかけた。さうなると、此大失策を仕出かした客は、初め彼が頗る見下げたことを書いてゐる、この下婢に對して、非常に畏まらざるを得なくなる。

『讀者に私の感情が想像出來ようか。私は苦悶して室をぐるぐる廻つた。甲の呼鈴、乙の呼鈴、それから兩方とも、ひつたくつた――それから書齋へ飛込んで、そこの呼鈴を鳴らし、そしてまた、應接間へ戻つた。私を通して呉れた下婢は、丁度直ぐにやつて來たが、出來る限り落着き拂つた樣子であつた。そして、失策を見るや否や、彼女はこの大事に臨んで應變の才があるやうに思はれた。一言も云はないで――狼狽した風さへ無く、私の狂亂的歎願に對して、微笑を洩らして、去つて行つた。が、忽ち湯、石鹼、海綿などを持つて、戻つてきて、やがてしめしたネルで夥しい汚點を拭いてゐた。跪いてゐる、その樣子は美しかつた。

この一句が甚だ面白い。漢文の、所謂、この一句を挿入して甚だ雅致ありとか評するのに似てゐる。

『そこで私は興奮のため、それから心の苦悶のためにも弱り果てて、椅子に身を投じた。そして、心の中で叫んだ。「おやおや、この有難い女が、實際この怖ろしい危機に私を救つて與れるならば、一磅をやらう。一磅では安いものだらう。さうだ、二十志を是非やらう」』

すべてこれが——客の唯一の救ひ手なる、この幾分か苛酷な女に對して、屈辱の際、客が感ずる不意の尊敬が——實に旨く書いてある。そして、彼が有する最初の衝動は、無論その女に手厚い謝禮をすることである。一磅即ち十圓は、下婢に對して巨額の贈物である。が、これはこの話の心理的部分の發端に過ぎない。女が海綿で拭ふにつれて、次第に絨氈の上の汚點が消える。二十分間の骨折であつたが、成功した。遂に汚點が全然無くなつて、詩人の話によれば、彼の『守護神』は立上つて、極めて當然であるかのやうに、靜かに笑を浮かべて、『御茶を御一杯召上りませんか』と尋ねた。そこで、苦悶は了つたが、感謝は今や最初ほど强くない。今度は是非十五志を與へねばならぬと考へる。

その内に家人が歸つてきた。そして、無論絨氈に就いては、非常に八釜しく注意して居るといふことを、家人が彼に語る。そして、家人の話によつて彼の心に生ずる一切の胸騷ぎが、立派な諧謔で寫してある。然し話の結末は、かうである——

『私は云ふことを忘れてゐたが、私の「守護神」には五志の金額を遣つた。そして、これが本當の話の結末である』

茲に人情の旨い小さな描寫がある。そして、この描寫が、物語を逸話以上に昇格させて居る。寫してある感情の眞に迫つてゐる點は、完璧である。多分誰人もこれと同一の、物惜しみせぬ衝動の一張一弛を感じたことがあるだらう――感謝心に强ひられて、最初は親切過ぎるのが、後には、理性と私欲が合して、心に誓つた恩返しを節減することになる。

これは諸君の參考のための、一つの諧謔小品である。無論些々たる事である。何となれば、事物の諧謔的方面は、いつも些々たる事に定まつてゐるから。然し些々たる題材は、必らずしもつまらない小品文といふ譯ではない。哲學者が繁の柄の事を書いてもよい。また眞に藝術的な小品作家は、殆ど如何なる題材でも扱ひ得る　近代小品作家中、最大の大家でなくても、その一人は佛國の大小說家アルフォンス・ドーデーであつた。ドーデーは主もにその小說で知られて居るが、それは彼の面白い小品を味ふには、通俗的趣味以上のものが要るからである。さて、日常茶飯の些々たる題材について云々した序でに、食事を題材とするのは、どんなものでせうか。固よりそれは眞に些事である。然しドーデーの小品は、數章悉く食事に關して、外國で食べたその國特有の料理について、一つづつ思ひ出

を書いて、聯絡した一篇をなして居る。私は試みに『ラ・ブィヤベス』と題する小品をざつと譯して、全篇の性質を示してもよろしい。これは有名な料理の名で、英國詩人サッカレーが、それに就いて美しい沈思的の詩（原注四）を書いて居る。藝術的の心を持つた二名の偉い人が、性質は餘程異つてゐても、共に小さい平凡な事柄の中に、感興を見出し得ることが、こゝに示されて居る。

『我々はサーヂニャ島の沿海を航してゐた。朝早い頃であつた。船頭が頗る徐々と漕いてゐた。それで、私は舟緣の上に屈んで、海を覗き込むと、海水澄徹、山間の泉の如く、眞底までも日光に照されてゐた。水母や海盤車が、下の海藻の間に見えた。巨大の鰕が長い觸角を細砂の上に載せて、眠るが如く靜止してゐた。そして、すべてこれが十八尺乃至二十尺の深さの處で、奇異な人工的な樣に見えるので、人をして水晶の大水族館を覗き込むの思ひあらしめた。船首で長い裂けた葦を手に持つて、眞直ぐに立つてゐた漁夫が、急に船頭に向つて徐々に漕げと合圖をすると、忽ちその魚杈の尖端の間へ美しい鰕を吊るして見せた。鰕は倉皇恐怖、鋏を擴げて、まだ判然目が醒めないことがわかる。私の側に居る今一人の漁夫は、舟跡の水面へ釣絲を始終投げてゐて、續けざまに珍稀な小魚を釣上げた。魚は死ぬる際に、色が變つて行つて、千態萬狀を呈した。苦悶を三稜鏡に透して、眺

めるやうてあつた。

『漁を了へて、我々は濱へ上つて、大きな高い灰色の岩の間へ登つた。早速火を焚いた――強い日光の中で、火の色は薄く見えた――パンを大切れに切つて、赤い土器の小皿に積み上げた。それから我々は煮鍋を圍んで、坐つて席に就いて、料理の出來る香を樂しく吸ひ乍ら、銘々皿を持つて待つてゐた。……そして風景か、土地か、空と海の廣大なる眼界か、何のためか知らないが、私はこれまでに、その鰕のブィャベス料理ほど、食べて旨かつたものは無い。それから後で、砂の上で如何にも心地よい晝寢をした。眠の中に、まだ海で搖られる感覺が滿ちて、水中幾萬の小さい魚鱗の閃光が、我々の眼前にまだ鼓動するやうに見えた』

これだけであるが、それで愉快なる一日の一切の感情、事件、見聞、嗅いだものなどを語つて居る。これが小品文といふ語の最上の意義に於ける小品文である。如何にも簡單で、而かも實に氣が利いてゐる。そして、ドーデーの書いた小品文は澤山ある。多分諸君は、その一つ、卽ち或る一ト續きの小品數章では、日本の題材が扱つてあることを知らないでせう。ドーデーは巴里で、日本の科學的探檢者として有名な、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルドと知合ひになつた。當時シーボルドは、日本と通商のために、歐洲の一

大貿易會社を組織する企を、三世那翁に遊説しようとしてゐた。ドーデーはシーボルドによつて、彼が作らうとして居る貿易會社については無く、當時殆ど何事も知られて居なかつた日本の文學と美術について、非常に興味を有たせられた。シーボルドは特に日本の芝居の話をして、ドーデーを喜ばせた。僕は『「盲目の皇帝」と題する、立派な日本の悲劇を君に語らう。二人で共にそれを譯さう。そして君がそれを佛語で出版すると、誰も彼も好くだらう』と彼はドーデーに云つた。ドーデーは非常にさうしたかつたが、その時シーボルドは七十二歳で、記憶稍ゝ弱く、元氣もズンズン衰へつゝあつたので、約束の履行を延ばしたまゝ、遂に永久に巴里を去ることとなつた。そして、ドーデーはその日本の悲劇を手に入れるため、實際シーボルドを慕つて獨逸へ行つた。シーボルドに逢つた。すると、シーボルドは、悲劇は渡せるやうに、出來てゐると云つた——が、僅かにその翌夜死んだ。それで、悲劇は手に入らなかつた。そんな名の悲劇があるか、どうか私は知らないが、私が云はうと欲したのは、ドーデーはシーボルドに關する思ひ出を、一篇數章の絶美なる小品で語つてゐることであつた。その小品の價値は、悲劇の存在には全く由つてゐない。多分諸君は、その人を感動させるやうな散文の自由譯に對して、興味が無いことはあるまい。ドーデーはシーボルドの死んだ朝のその家の光景を寫してゐる。

『非常に悲しげな樣子で、人々が出たり入つたりしてゐた。その小さな家に何事か起つたのが、餘りに多大の災難だから、そんな小家屋に容れきれないで、悲哀の泉のやうに、そこから發し出て、溢れてゐるやうに思はれた。着いて見れば、內には歔欷の聲が聞えた。それは小さい廊下の突當りで、彼が橫はつて居る處であつた——大きな室で、教場のやうに窮屈で、低い窓から光線を取つてあつた。私はそこに白木造の長い卓子——山積した書籍原稿——採集品を容れた玻璃箱——刺繡を施した絹で表裝せる繪本などを見た。そしてこの旅行と研究のものの亂雜裡に、大佐は寢臺に橫はつて、白い長髯は衣服の上に垂れ、哀れなる姪は一隅に跪いて泣いてゐた。シーボルドは夜間急に死んだのであつた。

『私は單に文學上物好きな考へを滿足させんがために、その悲歎の央へ邪魔する勇氣は無かつたから、その晚ミユーニッヒを立つた。さういふ譯で、私はその珍稀な日本の悲劇については、「盲目の皇帝」(譯者註五)といふ題目の外、何も知るを得なかつた。然しその後、我々はその題目を附しても眞によいやうな、別の悲劇が演ぜられるのを見ねばならなかつた。血と淚に滿ちた怖ろしい悲劇で、而かもそれは決して日本の悲劇では無かつた』

彼は普佛戰爭と、それを惹起した那翁三世のことを指したので、那翁三世こそ、實に盲目の皇帝であつたのだ。

畢竟文學の獨特な部門として、小品文は最も佛國的なものと云へるだらう。そしてまた是非とも、特に日本的なものにならねばならぬと私は思ふ。何となれば民族の天才が、小品文の方面に向つてゐるからである。然し現今學ぶべき最良の模範は、殆どすべて佛國のもので、ドーデーは唯だ澤山の中の一つに過ぎない。モーパッサンも今一人の小品作者で、もつと偉い――彼の驚くべき所謂小説は、多くは小説でなくて、實は小品である。例へば、彼の書いた三篇には、汽車旅行中、偶然彼が見た三つの異つた事柄を寫したのがある。人生の出來事をそんな風に見て、それを力强く寫したのは、通例の小説よりも一層多大の感情的興味を有することがある。けれども、それを小説と名づくべきではない。今日佛國の恐らくは最大の作家アナトール・フランスと、佛國現在の最大評論家チュール・ルメートルは、二人ともに小説家であつて、また天晴れ立派な小品作者である。この方面へ偉い寫實的の先鞭を着けたのは、プロスパー・メリメーであつて、フローベルが頗るその手法を完成した。メリメーの小品の最適例は、强襲隊の一人であつた兵士が述べた要塞襲擊談である。小品として、これに勝さつたものは無い。然し今日佛國で、毎月數百の小品が發表されるが、立派なのが、隨分澤山ある。英國では、小説の流行が盛んで、同一の發達をさせなかつたが、それでも立派な小品作者がある。そして、特に旅行記に於て、そんな作者

が見受けられる。例へば、歴史家キングレークの著、『イーオーセン』のやうなもので、全く絶妙な描寫から成つた一小卷で、キングレークの歴史の著述が、全然世に忘れられた後まで傳はるに相違ない。

無論この書は唯だ旅行の小品を代表した一種獨特のものである。さて、小品について、佛國人に比べてみると、英人の文學的感情の保守的な點に、一つ注意すべきことがある。英國では、一卷の小品文集が人氣に投ずるのは、唯だ小品が繼續的で、卽ち一つの連鎖的事件となつて現はれるか、又は或る他の相互連結の形式を有する場合にのみ限る。だから、キングレークの小さい旅行記や、ステーヴンスンの旅行小品の好評は、すべての描寫が同類の題材に關し、且つ續いた話で繫がれてゐることに、大いに原因してゐる。これは英國のもつと古い小品文、――サッカレーのものや、少女の思想感情について、面白い書を著はした、エディンバラーの有名な醫師ブラウンのものや、アヂソン及びスチールの流派の十八世紀の小品作者のもの――に於ても、同樣であつた。然し佛國の作品は、全然さうでは無い。佛國今日の文藝家は、互に毫も關係を有しないやうな小品文を書くことが出來る。而かもその書は、それが爲めに是非を云々されない。强く要求さるゝ點は、全然作の性質如何であつて、各ゝの小品文は、その一つが纏つた藝術品でなくてはならない。さういふ

譯だから、小品が相互に關聯する、しないのは、展覽會の繪畫が偶々悉く同題材であらうと、あるまいが、重要問題でないやうなものである。今後の作家は、この自由を享有するに相違ない——それが傾向である。然しまだ澤山愚劣な保守主義があつて、小品文を著書の資料にしようと試むるキップリングの如き作家も、若し小品に連絡がない以上は、文學上の規範を破つたものと判斷される。

前に申した通り、小品文の種々の性質は、實例數章を以てせねば、適當に暗示することが出來ない。だから私は、更に一二の例を引用せねばならぬ。諧謔的小品、事件の小描寫、交友や旅行の思ひ出の記——我々は既にそんな例を見た。諸君はそれぞれに就いて、容易に澤山の種類を想像することが出來る。が、今流行して來さうな別種の小品——心理的印象の小品——に就いて、私はまだ何も云つてゐない。それは科學的性質を有するにしても、興味を有するに相違ない。そして、それは兩性質を具有してゐるだらう。傑作は常にさうだ。米國の文學が、この特殊の方面で——即ち本當の英文學に於て——最初に確りした作品の模範を示したのであるが、その率先者なる醫師ホームズは、長く佛國に學んで、且つ模倣者でなくても、佛國小品作物の長所から、確かに大影響を受けて居るのは、意味あることである。それからまた、彼が科學を修業したことが——初めは開業醫として、後には

この一句、われが心にひびく。

醫學校に於ける解剖學の教授として——自然と彼をして全く陳腐な見地外に立つて、事物を考へさせるやうにした。かやうな人から見ると、極めて些々たる出來事が、尋常の人の思ひ及ばぬ價値を有してくる。それで、現今苟も英語の話される所、どこでも知れ渡つてゐる彼の大著述『朝餐の食卓王』は、全く頗る有りふれた事柄を——例へば、人の聲音に存してゐる不思議な魔力の如き——極めて奇拔に見立てた小品で出來てゐる。彼は子供とか、女の話聲を聞いて、何故その美音が、左程に心地よいのかと考へてみる——そして、同時にその聲が、彼の心中に喚び起す思ひ出を語つて居る。我々は誰も皆、こんな事柄について、漠とした考へを有つて居ても、滅多にそれを明確にしようとしない。實際それを明確にして、文學上の用に供するには、餘程の才能が要る。が、この話をお聞きなさい。

『世間には、誰も皆知つてゐる如く、美はしい聲音があつて、初めて聽く人に取つては、多分音樂的でなくても、我々が樂しまうと望んで居る、永遠に幸福な諧調の序曲に於て、天使が囀るのに耳を傾けるまでは、どんな聲よりも優れて美はしいのがある。然し私は實際虛僞を云ふ積りではないが、これまでに美音の爲め私をびつくりさせた聲を聞いたのは、二つだけである。實際私を喫驚させたのである。若し女が聲を發すると、男は一切を棄て、地獄の孔口へでも隨いて行く位、女の聲の絃線が、ぴつたり男の心中の絃線に合ふやうな

女が、丁度出來てゐるやうに、私に思はれた。

『左程私を魅惑した二つの聲は、誰の聲であつたか。二つともに獨逸婦人のものであつた。一人は寢室附の女中であつて、別に人を恍惚たらしむる程でも無かつた。或る大旅館で、私の室の鍵が見えなかつたので、この獨逸生れの女中を呼んで、尋ねることになつた。このうぶな女は、母國から來てまだ久しくならないらしく、可愛らしい、あやふやな國訛りで、ものを言つた。然しまるで子供が母を離れて迷子となつたかのやうに、失くなつた鍵の運命に對して、彼女が眞面目な、優しい心の滿ちた音調で、柔かい流暢な抑揚と、低い悲しげな小聲を以て、驚いたり、悲しんだり、參考になることを云つたりするのを聞くと、若し彼女の容貌と恰好が、その語調の如く絶美であつたならば――例へば、クリテ・ーの大理石像のやうであつたら――實際私は身投げをして死んだであらう』

何故彼は入水したであらうか。その譯は、彼の云ふのには、その場合、彼はその女と結婚を欲するだらうし、若しまた結婚すれば、彼の屬する社會の習慣上、それは不釣合の結婚となつたであらう――そして、それは兩人に取つても、子供等の爲めにも、非常な不幸となつたであらうからである。だから自分の爲めにも、子孫のためにも、彼が入水した方が得策であつたであらう。が、今度は彼が他の一獨逸婦人の聲を寫したのを聞いて見よう。

『その聲には、女らしい性質――女性的並に一人前の婦人的――が非常に含まれてゐた。自由選擧制度が、一言一行に加へる自我主張は毫も無い。かのタシタスの著書にある、巨大な手足を有つた獨逸人に淵源せる寛大强壯な性質ではあるが、五十餘代の敬虔なる訓練に馴致され、溫情ある敎養に由つて調和を得て居る』そして、彼は更に進んで云ふには、何んな米國婦人も多分かゝる美聲を有たないだらう。何故となれば、どんな米國婦人も、敎養ある祖先の影響が結合して、その聲の美を成すやうなことが無いからである。斯く云つて居るのは、米國人であることを記憶なさい――だが、それは本當を云つてゐる。彼の考へでは、この婦人の聲は、その中に美と力が兼備してゐたので、妻らしくもあり、同時に女らしくもある一切のもの――獨逸の美はしい『母魂』といふ文句に含まれた一切のものと、數世紀間の絶えざる從順、優雅、及び人を欣ばさうと欲する念が含まれて居るといふ印象を與へたのである。

彼は一小兒の聲について、今一つ思ひ出を書いてゐる。それは痛ましい經驗なのである。こんな記憶を、かくまで立派な感情で現はし得る醫者は滅多にない。

『佛國の病院で逢つて、聲を聞いたことのある、あの可愛い小さな子供を、忘れてはならない。年齡は二つから三つまで位。椅子から落ちて、兩方の上腿骨がぽきつと折れたの

てあつた。寢臺に臥して、辛抱强く、おとなしくしてゐる。周圍には荒つぽい學生が、白い前掛を着けたのもあつて、恐ろしく實務的な風をしてゐるが、少女は落着いて、全く凝つとしてゐる。私が話しかけると、その尊い子供が答へた聲は、それから幾星霜を經て、今私が筆を執つて居るこの瞬間にも、猶ほ聞えるやうな、天國の美はしさと、夕暮に囀る鶫の聲に聞かれる鋭い竦動を帶びてゐた。「まるでカナリヤのやうだ」と、私の側の佛國學生が云つた」

　彼は進んで述べてゐるのには、大概の人間は惡魔であつて、執行猶豫のために、男女の狀態となつて、この世に生まれたのだといふ昔話がある。人性の邪惡な方面を考へて見ると、その話は眞實とも思はれるが、或る美はしい聲を聞いたことのある人々は、人間は悉く惡魔では無かつたといふことと、それから、偶發の出來事のやうに、天使の如き人も交つて生まれてゐるに相違ないといふことを確信するに定まつてゐる。これは感覺の小描寫の立派な一例である。その書は全部、この種の優美な感想追憶から成つて、議論、會話、註釋の斷片が點綴してあるが、全部極めて細い、一本の話の筋で結合してゐることが、その書をして保守的英國で大成功を博せしめることを助けたに相違ない。

　更に別種の小品は、夜の空の瞥見、又は或る地方全部の地勢圖の如く、極めて大きいも

のの光景を、極めて小さい範圍の內に提供して呉れるものである。これは寄木細工や、巧妙な繪畫や、彩色寫眞でも出來る通りに、大丈夫確かに出來る。例へば、ラスキンは約半頁て以て、伊太利全體を寫してゐる。勿論こんなことをするには、主題について、巨細の知識を先づ有せねばならぬ。然る後始めて、光景の大圖線を全く精確にし、釣合の宜しきを得た感じを與ふべき方法がわかる。ラスキンのやり方を御覽なさい。我々は皆伊太利については、一つの漠然たる光景又は觀念を心に有つてゐる。それが光景を纏めたり、明白にしたりする手傳をする。元來小品として書いたのでは無いが、これは全然その本文から獨立した小品で、且つ何處までも纏つた一篇（著者註七）を成してゐる。

『我々は伊太利南部は、美麗な國だと噂に聞き馴れてゐる。山の恰好は他に勝さつて優美で、灣の形も色も絶佳である。然しそれは外觀の美しさに過ぎない。細部を熟視すると、荒涼陰鬱である。森は葉が薄暗く、幹が縺れてゐる。カラッブ、橄欖、桂樹、落霜紅などの枝は、どれもこれも異樣を呈し、熱に浮されたやうに挘けて、半ば人間が苦しんで痙攣したやうである。地獄林の樹枝は、割目から叫聲の洩れる怖はさに、誰も折るものが無い。樹陰の岩は灰や、三たびも溶けた燒石や、細孔毎に火の滿ちてゐる鐵滓である。震害を受けて、商賣もなく、工業もなく、知識もなく、希望もない、淋しい村落が、山腹から山腹

へと、白い廢墟をなして光つてゐる。永く廢れた都會の塵埃のぐるりには、昔の戰爭の破損物が、蜿蜒として連つてゐる。雜草で靑い斷礎の冷たい弓形門をくぐつて、溪流が呻吟したり、頽れた塔の堆積に激しては狂ふ。天空遙かに、靑い、いなづまの鋸齒狀になつて、怒れるアペナイン山脈の連綿たる稜角が聳え、波の如くうねつた火山の雲が懸つて、影を差してゐる」

こゝには單に遠くから見た美と、近寄つて見た物凄さの暗示があるのみでなく、古代の神話、伊太利海岸に於ける古代希臘最初の植民地、昔の大異變、昔の富や商業の衰頽など、要するに該地方現狀の特徴を示す一切のものに就いての暗示がある。この種の作品を書くには、想像力は助けにならぬことを知らねばならぬ。何といふ句が、逐次に直接親炙した經驗を現はしてゐる。私が諸君に示した最初の例から、最後の例に至るまで、可能の範圍は非常なものである。こゝでは最も簡易な力も最も偉大な力と對立が出來る。我々が諸謔的なもので始めて、莊嚴なもので終つたのは、よかつたと私は思ふ。すべて是等のものが、小品の範圍内に於て可能なのである。

さて、私は小品文學に於ける現代の傾向について、簡單な暗示を述べて終らう。それは私自身考へた暗示でなくて、現存最大の小品作家——譯者注八過般の戰爭後、北京途上の所見を書

いた、あの驚くべき佛國作家――の作に於て過日見出したのである。餘り怖ろしくて、講義に述べることさへ出來ないやうな澤山の事柄と、幾多の哀れな事や、奇異な事を、彼は寫してゐる。そしてその書が讀者の心に留める大體の印象は、支那に對する非常なる愛惜同情の感である。天候や、戰慄すべきことや、幾多の困難を犯して、彼は孔子の大廟を訪ね、その各部に亙つて驚くべき描寫を我々に示すことが出來た。さて、最も感動すべきことは、その一室の扁額に、極めて昔から刻してある一句であつた。そして、それはつぎの文字であると云つて、彼に譯示された。『將來の文學は、仁道（ピティー）の文學だらう』多分この古い預言を讀むに際しては、作者が先きに滿目、慘狀と死で、哀憐の影も無く、野良犬が死體を啖つて居る殺風景の土地を脫れて、この扁額の懸けてある靜肅境へ移つたといふ經驗が、大いに感銘を深からしめたのであらう。私は學者がこの譯を如何はしく思ふか、どうか、知らないが、若し文字の譯が正しいとすれば、文學の未來に關するその支那の古い預言は、その眞理が人を驚かすのである。これが西洋文學界の最も優れた思想感情の傾向である。將來の文學は、情け（ピティー）の文學であるだらう――古の羅馬希臘の意義に於ける情けであつて、輕蔑に哀憐を混ぜたのでなく、一切人間の惱みに對する、純なる同情である。私の考へては、現代の『人道（ヒューマニテー）』といふ語が、希臘人の所謂情けといふ意味を最もよく現はす

だらう。さて、この講義の主題であつた種類の作品は、特に情けの文學に適當して居る。生活、思想、感情、悲喜哀樂の小描寫を世間に發表するのが、尋常一般の人心を覺醒して現代の最も深刻に要求する無我的同情の念に徹底させる最良の方法である。それでは、玆て、小品文に關する講義を了はることにしよう。

譯者註一　アングロ・ノルマン時代とは、ヰリヤム・ザ・コンクエラーによつて西暦一〇六六年に征服されてから、英國が佛國の影響を大いに蒙つた十一、十二世紀。

譯者註二　ローランドは、シャーレマン大王の十二勇士の一人で、文學上、中世紀武士の花と謳はれた人物。

譯者註三　『オーガスタイン期』とは文學の黃金時代の意。

譯者註四　サツカレーの詩も、題はこれと同樣で、彼が美術研究のため巴里に放浪してゐた若い頃に、每度この料理を食べに行つたことのある巴里の馴染の旗亭の一隅で、回顧沈思、白髮衰顏の今と對照して、淡い哀愁に耽つた處を寫した社會詩である。

譯者註五　ドーデーがシーボールドから聞く筈であつた日本の悲劇、『盲目の皇帝』は、『妹背山』を指す。シーボルドはこの芝居を文政九年丙戌六月十二日（西暦一八二六年）大阪で見物した。

譯者註六　クリティーはアポロに戀された仙女。後棄てられてヘリオトロープ草に化したと、希臘神話に傳へらる。

譯者註七　この一節は『近世畫家』五卷第九篇第四章十二節から引用したもの。

譯者註八　過般の戰爭とは、一九〇〇年團匪の亂、即ち北淸事件を指す。

『サートル・レザルタス』の哲學に就いて

カーライルは或る點に於て十九世紀文學中の最も重大な人物である。斯く言ふ時に私は科學、或は科學的哲學、或はあらゆる種類の科學的文章とは相違せるものとして文學を說いて居る事を記憶されたい。カーライルは決して最大な英國哲學者ではない。然し彼は現代の――十九世紀をいふのであるが――最大なる文學上の哲學者である。文學者としての哲學者、詩人哲學者、或は詩人論文家は英文學に於て寧ろ稀なる人物である。英國には澤山の哲學者がある。獨逸及び佛蘭西は其の事實を認めるのを拒むだらうが、私は思ふに英國哲學は今日天下第一である。然しカーライルを除けば偉大なる哲學的勢力と云はれ得べき文學者は今日まで英國に殆ど無い。カーライルは、恐らく小規模に於てではあらうが、ゲーテが獨逸文學に於て代表する所を英文學に於て代表する。或は亦、ミシエレーが佛蘭西文學に於て代表する樣なものを英文學に於て代表するとも云ひ得よう。單一の偉大なる

固執的觀念の下に作られる一大情感的勢力がそれてある。エマスンも此の種類の人物でアメリカの產出せる唯一の者てある。さて、此の文學上の哲學者は正しく新哲學を造りはせぬ。彼等は論理的思想家よりは寧ろ情感的思想家てある。彼等は吾人に對して新眞理を發見すると云ふよりも、寧ろ舊眞理の新應用を爲す者てある。而して若し、時として一の新眞理を發見するとするなら、それは推理によるよりも感情によるのてある。然しながら一層容易く了解せられ、一層廣く讀まれるから、彼等は一層大なる思想家——純正の哲學者——よりも一層大なる力を揮ふのてある。高尙なる哲學を一般人民に解釋し、或は少くも彼等が受けんと欲する其の一部分を解釋する事に仍て彼等は多少其の進步を助成する。カーライルは特に此の種類の敎師てある。最大なる近代思想家等の最上の思想の多くを彼は驚くべき情感的言語て表はして居る。そして若し彼が一方に偏するとしても、彼の使命の形と力に對しては感謝せねばならぬ。此の使命は特に彼の『サートル・レザルタス』に於て與へられてゐる。而して此の書はゲーテの『フアウスト』と同樣に英國の讀者に知らるべき書てある。そして實際然かなるらしい。每年新版が發行される。そして近頃八十個ばかりの插畫のある版が發行された。其の文章が多少曖昧てあるから、又此の書が遲々たる困難な思索を要するから、大學生の讀書課程中に數年前は無視されたかもしれぬ。然し此

の事は今後有り得ぬ。本書は非常に重大な勢力となつた。そして吾人は努めて之を了解する勢に服さねばならぬ。

思ふに他の助なくして本書を了解するや否やは頗る讀者の年齢と經驗とによる。私自らの經驗は左の通りであつた。二十歳以下の青年時代に私は幾度も本書を讀まうと試みたが無効であつた。私は一頁も了解し得なかつた。いかにも我が想像力を魅惑し、眩惑した文章はあつたが、その意味が何であるかが解らなかつた。約二十五歳の頃に、又本書を讀まうと試みたが結果は同様であつた。狹い意味に於て宗教的と見え、隨つて私が嫌惡したものを除けば何も解らなかつた。當時はあらゆる宗教的の事を非常に嫌つたからである。中年になり多くの讀書をなし、近世哲學に關して眞面目な研究をなし得る時に至つて、私は本書をまた開いた。するとその毎頁は光明のみならず電光に滿ちた。其の後屢〻私は之を讀み返した。すると其が毎度前よりも更に大に、更に廣く、更に驚くべきものと見えた。

私は今、之に關して大體の講義をなさう。然し私が特に述べようとする點は東洋哲學、及び十九世紀の科學に調和する點である。兩者の一致する所に諸子は思想家としてのカーライルの實力を見出すだらう。――そこに彼は永遠不朽の眞理に觸れてゐる。

本書の配列が奇態であり、文章も奇態である。梗概を述べる前に次の事實を明らかに記

憶されたい。卽ち本書は三篇に分かれる。そして其の中篇は自傳であるが、其の前後の二篇から全く獨立してゐる。之を記憶しなければ諸子の講義・筆記は多少混亂するかもしれぬ。さり乍らこの講義の仕組をよく考へた後、自傳を哲學と區別するのは宜しくあるまいし、又著者の配列と異つた配列を採用するのも宜しくあるまいと決定した。

本書の名目は『仕立直しの仕立屋』といふ意味で法外の表題であるが、然し法外の題目卽ち衣裳哲學に調和せぬものではない。そして表題の意味はあまり長く讀み進まぬうちに明瞭になる。『大工を大工直しする』或は『仕立屋を仕立直しする』とは初め爲した仕事をよくやり直すといふに過ぎぬ。彼は以前に善く爲されなかつた或る物をやり直さうとしてゐる、その或る物が『衣裳哲學』である、カーライルは我々に之を了解せしめ樣としてゐることが分る。此處で私は斯く言ひ度い。私の見る所、本書の全思想は徹頭徹尾大詩人ゲーテの一詩節に鼓吹されたものである。

生命の流のうちに、行爲の嵐のうちに、
我は上下に歩み、
あなたこなたに往き復る、

誕生及び墳墓、
一の永遠の海、
一の變遷の動作、
一の赫灼の生命、
斯く我は時劫の騷がしき機上に働き、
神明の生ける衣を造る。

是は『ファウスト』中の地靈の歌で、只、潜勢的の形に於てゞはあるが、實際『サートル・レザルタス』中のあらゆる哲學の芽を含む。勿論その意味は現象の宇宙は無象的無限者の有形的衣服にすぎぬといふのである。全く佛教的思想である。そして又、物質の神祕を思へば一の科學的事實として全く眞である。斯くして世界の殆どあらゆる思想は調和する。私が相違を見得るのは、唯、小なる觀念に於てのみである。

私の理論が正しくとも、過つても、とにかく『衣裳哲學』は本書の劈頭第一章に表はれてゐる。併しカーライル自らの發明としては述べられてゐない。『トイフェルス・ドレック』といふ法外な名を有し、世間に知られぬ哲學者が著はした珍らしき獨逸書の飜譯であ

ると著者は稱してゐる。そして其の文體を正しく獨逸文の直譯體に似させ、その奇異な美の爲めに、リヒテルの技巧を多く採用してゐる。『サートル・レザルタス』の文體が一見頗る奇妙なのはかゝる理由による。

序說として彼は斯く言ふ。『羅紗、絹及び他のあらゆる織物に關して無數の書が著はされたが、あらゆる織物の中で最も大切なるものについては一つも著はされてゐない。卽ち人間の靈魂が外部の被服、掩包として着ける唯一の眞衣服についてである。』之は魂の衣としての身體を謂ふのであるか、或る程度迄はさうである。然し、さうならば、肉體に關して幾百千の書物があるのに、何故著者は此の題目が科學に依つて看過されたといふか。カーライルの思想は左の通りである。いかにも形態として、或は他の見地からして肉體に就いて多くの著書があつた。然し魂の衣服としての肉體に就いては無い。無限なる神祕の記號としての肉體に就いては無い。此の題目に關する今迄の著作が甚だしく不滿足なのは此の理由に因るのである。人間の最も驚くべき關係、卽ち、宇宙に對し、宇宙を造つた未知の力に關して有する關係は、然かあるべき通り、之迄研究された事はない。然し考ふる人にとつては、之に關してあらゆる神祕がある。『全市街を占有するあらゆる種類、あらゆる年齡の生ける潮流――君はそれが何處から來、何處に行くかを知るか』普通の人は答

へるだらう。『あの人々は家に歸る、或は商賣に出かける』然し思想家の問題はもつと深遠な答を要する。眞の答はかうである。『彼等は世界そのものと同樣に、絶對の神祕から、永遠から、出て來る。そして只、自分の家にのみ歸る樣に見えるだらうが、其の實、彼等は皆その出て來たつた無限の神祕に歸るのである。そして彼等は何者か。誰が答へ得るか。彼等はその着ける肉の衣によつて眼に見える靈である。これが我々の知る全體である。内なる力、我々の個々のうちに動き、考ふる力、——その何物なるかを告ぐる一人の哲學者もない。此の力は只その衣類によりてのみ感覺に表はされる。之は普遍なる力、普遍なる神祕の一部分であると想像すべき理由がある。只それだけである。斯く單に街上を歩む一人の姿は眞に此の世界に於ける最も法外な、最も神祕な、最も說明すべからざる光景の一つである。然し此の事を考へる人は極めて少い。之は考へる價がないか。カーライルは有るといふ。——そこで彼は此の本を書いた。衣服として、服裝として見られた宇宙の神祕についての本である。人はその有する肉體に因てのみ我が眼に觸れる通り、唯一の實體、萬物の魂はその着ける衣、卽ち物質的宇宙によつて我々に表はされた。

　衣服、衣裳、肉體に對する各種の被服、——如何なる觀念を之が直接に諸子に暗示するか。衣服は屢〻變へらるべき物、速に着古され投げ棄てらるべき物であるから、此の比喩

は一見滿足には見えぬと口には出さずとも諸子は心に思ふだらう。然し、時劫は唯關係的であると暫しなりとも思ふなら、諸子は此の比喩の完全な事を認めるだらう。人の身體は衣服の如く速に着古され、而して同樣に棄てられねばならぬ。死は我々の衣服の着換へてある。全く之に過ぎぬ。然しそれだけてはない。此の比喩は百萬の太陽、遊星、月球を有する全宇宙に應用せらるゝ時も絶妙である。衣服の古びる如く彼等一切は皆古びる。全宇宙は衰へて消え、而して他の新たなる宇宙、卽ち無限靈に對する他の燦爛たる衣服に代はられねばならぬ。ゲーテは多少新たに之を述べたが、此の比喩は新しいものではない、非常に古い。バイブルに斯く云ふてゐる。

『諸天は爾の御手の業である。――彼等は滅びるだらう。然し爾は續くであらう。然り、彼等の總ては衣服の如く古びるだらう。而して衣裳の如く爾は彼を變へるだらう。彼等は變へられるだらう』

勿論此の壯麗なる詩を書いたヘブライの詩人は、今日我等の知る如くには宇宙を知らなかつた。彼は天を固體の天井と想像し、天の諸々の光を大なるランプに似たものと想像した。然し彼が述べたものの雄麗は、時と共に增すべく續くのみである。彼の知識は制限さ

れたが、朧げながら彼はすばらしき永遠の眞理――あらゆる形態の無常を認めた。

以上は本書の、或は寧ろ本書の精神の、序說である。そこで初めの偉大なる宣言がある。あらゆる有形の事物は無象者の衣服、或は形現にすぎぬ。人體そのものも永久の實體ではない。只、此無象者の標象、或は被服に過ぎぬ。更に、馬、牛、魚、木の形態についても同一の事がいはれる。之等も亦皆、一の永遠なる實體の非實なる標象に過ぎぬ。人と他の動物、他の生命の形との一大相違は人に二重の衣服ある事である。內なる實體の被服、卽ち肉體以外に、人は第二の被服を有する。勿論、之は誰しもの知る事實である。然し之をよく考へ、その眞正の意味を認める者が果して幾何あらうか。

其意味を了解するためには、先づ衣服なしの全人類を想像するべく努めねばならぬ。何人も何等の着物を着ない文明世界を想像する事は不可能である。すさまじき諸謔を以て著者は、赤裸の大臣が赤裸の議會に演說するのを、或は人々悉く赤裸な宮廷の謁見を想像せよといふ。勿論かう考へたばかりでも馬鹿々々しい。然し何故に馬鹿々々しいか。直ちに之に答へる事はむづかしい。正當の答は多量の思考を要するであらう。而して本書の主なる部分をなすものは、そして同樣に深遠、奇異なる種類の他の問題を考へさせるのは、此の問題に對する思考である。

衣裳、或は着裝をわが哲學者は社會の根柢とよぶ。勿論、之は衣裳がなければ高等の文明があり得ぬといふ意味である。彼は我々に問ふ、若し人が衣服、衣裳を持たぬなら、如何にして金錢を携へて行けるか。此所に彼の意見は、尠くも彼の例證は、少しく極端であるとも私は考へたい。實際上、之まで赤裸の世界が存在した。而してそのうちに或る單純な道德及び宗教の法度が充分發展した。例をあぐれば、ポリネシアの社會、又、或るアフリカの社會である。彼等は甚だ野蠻な、單純な種類の社會ではあつたが、とにかく確に行爲の法則に支配せらるゝ社會であつた。又、衣裳なく、金錢なき……云々の問題に關しては、之等の社會には――少くもその或るものには――金錢を代表するものが、首のまはりに紐を以てさげられ、或は其の他の方法で身體につけられた。然し我々は總說として著者の意見を認め得る、卽ち、衣裳は少くも眞文明の根柢である、而して現在の複雜な社會の種類は、衣裳がなければ――人類の體質が、よくあらゆる種類の寒暑を凌ぐと假定しても――よく存在し得ずと言ふ著者の意見を認める。

カーライルは或る程度迄、衣裳の進化的哲學を認める。衣裳は裝飾に對する人の願と共に始まつた。衣服を着けない野蠻の社會に於ては、少くも何等の種類に於てか身體を飾るのが習慣であつた。例をあぐれば、ポリネシア人は入墨をした。他の人民は種々の色に體

を染めた。遂に織物、縫針の極めて簡單なる工業の發展と共に、入墨、或は色塗りよりもよく裝飾の目的に適ふやう或る種の衣服が發見された。然し獵師の社會に於ける如く、或る場合には野獸の皮が初めの衣服であつたらう。又、熱帯地方の國々に於ては、初めの衣服は或る木から取られた木の葉であつたと見える。今でも、唯、此の種類の衣服のみを用ゐる人種がある。衣服の使用の以前には殆ど何等の階級の差別もあり得なかつた。眞の貴族制度。華族制度があり得なかつた。裸の一般狀態は一般の平等をあまりに強く宣告したであらう。然し、カーライルが何等の區別もなかつたと暗示するのは餘りに甚だしいと思ふ。其時、猶、力、活動、經驗、策略の區別があつたらう。之等は他に服從せられ、危難の時に信頼せらるゝ支配者、或は指揮者の階級を造るに充分であつたらう。衣服の發明が突然の事であり、そして人間の性格に、遽かの變化を來たしたと思ふのは全くの誤であらう。あらゆる變化は漸次であつた。あらゆる進化は頗る遲かつた。こゝにカーライルに暗示される一大眞理がある。即ち、衣服の發展と社會的差別の發展との間に重大な關係がある。之等は相互に強き影響を及ぼしたに違ひない。

次にスペンサーがカーライルに贊成しないだらうと思はれる點は、羞恥は衣服の使用に依つて發展されたといふ說である。此の說はむしろ十把一紮げてある。裸に馴れた社會の

間に、頗る熱い風土に住む人民の間に、羞恥は頗るよく發展された。その證據は充分にある。殆ど衣服なき種族の間に、最も文明なる人種に於けるよりも、男女の關係上更に一層立派な種族がある。カーライルの或る極端な說によつて欺かれぬのが大切であるから、私は此の事實を云ふ。羞恥は衣服の進化よりも寧ろ智に隨つて發展した。然し、衣服は理想と微妙の德との發展を頗る助けたであらう。之は殆ど近世の思想家が曰ひ得る限界の極度である。さて、尠くも西洋の國民にとつては衣服は羞恥の習慣と大なる關係がある。然し衣服を多く着ればとて、其の心がそれだけ清いとは思はれぬ。事實は屢〻その反對である。少くも衣服は人の被包となつたばかりではない。その不德の假面となつた。

私は『假面』といふ語を用ゐた。此の問題は後直ちに來るであらう、本論の第三の重大な點に我々を導くであらう。

第二の點は社會及文明の發展と衣服との關係である。卽ち社會上の區別はあらゆる國に於て衣服に依りて作られずとも之によつて表はされる。之が考ふべき甚だ重大な點である。何故に之が考ふべき重大な點であるか。何故なら社會階級の區別は第一に自重心を養ひ、正直なる自尊を養ひ、一般社會に關して人の價の正直なる知識を養ふからである。而して之が又努力、知的競爭、あらゆる種類の競爭の發展を意味する。人は之に依て低きより高

きにのぼる。又同胞を利するあらゆる種類の努力を意味する。此の意味に於てカーライルが衣服を社會の根柢といふのは最も正しい。然し諸子は彼の言葉をあまり文字通りにとつてはならぬ。衣服とはこゝに階級差別、及び社會的相違及びその含有する一切である。

今本論の第三點、假面に對する點を說かう。あらゆる衣服は少くも身體にとりて假面假裝である。假面假裝として考へられる衣服は屢〻人を助けてその不德、その缺點、そのあらゆる缺陷を隱させる。と先に云つた。言を換へれば衣服を一種の重大なる虛僞、一種の僞善と曰ひ得る。然し此の點に於て諸子は止まつて左の問題を問ふべきである。「裸の眞理はいつも貴いか。いつも、どの點から見ても善良であるか。時としては甚だ惡い事がないか。次に虛僞はいつも惡いか。時には全く恕すべきではないか。時には善良でないか。時には單に善良なるのみならず頗る善良ではないか。頗る善良のみならず神聖ですらあるではないか。」

此等の問に對する答は大に諸子の思考力に――特に虛僞の意味に付いての思考力に因らねばならぬ。虛僞は幾千の事物を意味するだらう。眞理も幾百千の事物を意味するだらう。しかし私はカーライルからでは無い簡單の一例を擧げやう。或る人が故意で無く諸子に大なる禍を起したとする、誤つて爲したと了解するから、恰も何事もなかつた如く諸子は其

害を氣に掛けぬふりをする。此件に於て諸子は全く眞實には行動して居らぬ、諸子は實際感じ得ぬ處を感じたふりをする、卽ち虛僞に擧動し、一個の虛僞を實行してゐる。しかしあらゆる宗教の道德的見地から見れば、諸子は高尙に、親切に、寛大に行動しつゝある。日常生活に於て、諸子自らの生活に於て、諸子の最愛の人々の生活に於て、眞ならぬ事物、眞ならぬ行爲が最善の理由のため、最幸の結果を以て不斷に曰はれ行はれる幾千の例を諸子の中の誰しもが思ひ付くであらう。しかし諸子は又自己の生活に於ても、友人の生活に於ても、眞實を述べたため、憎惡嫉妬の感情を眞實に述べたために起つた幾千の不快な經驗を思ひ出すだらう。私の曰ふ處は次のことである。卽ち眞は屢〻惡であり、僞は屢〻純な愛であり善であるといふ偉大なる事實の幾千の例を諸子が實驗したに違ひない。

眞の價値は絕對で少しも疑ふべからずと淺薄な思想家は想像し易い。しかし實際上眞に因つては人間社會に生存が出來ぬ——我々は自分の感情と意見とに從つて生存し行動し得ぬといふ意味である。各人は他人のために時々共感情を棄てねばならぬ。而して實際自分がさうでないのにさうであると少しく僞らなければ以上を爲すことが出來ぬ、普通の人生義務を果すことが出來ぬ。あらゆる邦にあらゆる人生は屢〻苦しく、煩さく、外見上不正な、確に服從することのむづかしい諸法則に支配される。しかし外觀の上からは頗る愉快

に之に服從せねばならぬ。各人は少し役者となり、そして世界を一大劇場と認めねばならぬ、こゝに各人はすべて世界の安寧のため、人類の幸福のため其役割を演ぜねばならぬ、俳優の假面を着けねばならぬ。

比較的に曰へば幻影ほど、美しく虛僞なものほど、人に必要なものは無い。人間の理想、人間の憧憬は皆多少不可能なもの、僞のものに基した。しかし斯くして何等多大の幸福が成し遂げられたことか。

今諸子は本論の第三點、隱蔽の手段としての衣服の重要を認めるだらう。衣服は階級或は位置より以上のものの表象である、特に因習の表象である。因習が虛僞であるのは單に一方面のみでは無い。しかるに社會は因習を基とし、因習に整理せられ、因習に警視され、因習に保護せられ、因習に發展せしめられる。此世にあつて善なるを第一とし、さて之に次ぐ第二の善は善なる振りをすること、人をしてわれを善と考へさせるやうに勉めることである、何故か、實際よりも少しく善く見えやうと試みる習慣が遂には實際よりも善く成ることを眞に助けるからである。さてあらゆる社會の因習は一種の普遍的規律を代表する、此規律に因つてあらゆる男女は實際よりも少しく優るやうに行動する事を强ひられる。ある理想が一の敎として面前に据ゑられる、彼等は之を學び共訓に從ふことを勉めねばなら

ぬ。而して其教を學び終れば新たの更に難き教が與へられる。他の進歩と比べれば道德の進歩は甚だ遲かつた、しかし實際我々の成し得た進歩は因習といふ衣服を着くるに因つて遂げられた。

著者が如何なる多樣の題目に觸れがちてあるか、上述の點より諸子は既に想像し得よう――人心に對する一種の衣服としての宗教が其てある、忠誠犧牲は他の種てある、軍隊の法度活動は又他の種てある。而して著者の奇異ではあるが變幻極りなき筆端に寫されて此等の乾燥な題目は燦爛として花の如くに咲き匂ふ。

本書の第一篇に關して私は既に十分述べたと思ふ、今第二篇の自傳部を說き初めよう。此第二卷は前後の衣服論の間を遮斷するやうてある、しかし最も興味が饒てある。著者が如何して人生の神祕、萬物の神祕に關する此等の信念に到達したか、讀者が之を了解せんために此自傳が書かれた。智慧は重に苦痛から來る、大なる悲哀によりて賢く成れるを著者は今我々に告げんとする。

此傳記の哲學的價値は深く考へ得る聰明な寬厚な多くの人々の經驗を代表する點にある。カーライルが自己の傳を書くからでは無い、むしろ其傳が多人數の傳であるからである。しかし其純乎たる個人的部分の或るものは其獨特の興味を有する。自傳者は彼の兩親及び

其貧困、農民の子としての彼の生活、故郷の村に過されし時代の苦樂を述べる。彼は性格中の長所を主として幼時に於ける母――單純な農婦、しかし善良で信仰深き母の敎に歸する。後に彼は左の如く曰ふ、種々の學校に於ける敎師から、又大學に於ける敎授から學び得たことは殆んど少い、彼等は乾燥無味の事實のみを敎へ得た、しかし彼の靈魂に對しては、彼の本性の善き部分に對しては何事をもしなかつた。彼に對して之を爲した唯一の人は母であつた。しかし母の敎がいつも優しかつたとは見えぬ。彼は多方面に於て嚴に拘束された、而して若い時からかの眞理を――それを晩年に學ばねばならぬなら不幸である――敎へられた。第二篇の第二章中の一文章で著者は此眞理を甚だ獨特に總說してる。『此世に於ては Would(したい) は Should(すべし) に比すれば單に零であり、又 Shall(だらう) に對しても大概極小分數である、此眞理を學ぶのが早過ぎるといふことは決してない、あまり學び過ぎるといふ事は決して無い』この Should に代ゆるに Ought to(せねばならぬ) を以てし、Shall を以て未來の計畫希望を表はし、又 Would を以て意思を表はすとせよ――此所說の優れた事が分るであらう。或は Shall を Must の意味に取るとも猶ほ其意味は著しい。我々の爲さねばならぬ事も我々の爲すべき筈のものに比すれば殆んど無と等しいからである。我々の爲したい事に就いて曰へば、此世に於て此を爲す機會を與へられる事は極めて稀である。傳記の全部は

この後此等の格言に關して多くを說き、力を込めて——盛に之を例證する。自傳者の次の著しい發見は餘程後の生涯、恐らくは大學に於てであるが——嘘も大なる價値があると曰ふ發見である。彼曰く『恐らく詐欺は衛生的鎭痛的の性を帶びる、而して人の被瞞性は小ならぬ恩惠である』後に彼は一層委しく之を說明する。宗教的の人々により敬虔の欺、敬虔の詐、敬虔の技巧と曰はれるもの——佛教の所謂方便は此事實を例證する、而してカーライルの書中衣裳哲學の全部は之に基く。宗教に於ても、政治に於ても、教育に於ても實際には眞ではないが、しかし必要な性質の或る技巧が大に其進步を助けると認められた。勿論かゝる哲學上の立場は正當の斟酌を加へねばならぬ、大なる道德上の細心を以て處さねばならぬ。されど其事實は頗る重大である、若い時に之を學び得ぬ人は後に至つて處世上大なる過失に陷り易い。例へば、眞面目で、正直で、誠實で、しかも人生の廣大なる關係を認めない者は、自分が僞と認める社會狀態の若干を怒つて排斥する傾向が大にある、其怒るのは單に彼等が僞であるといふ理由で、僞が一時は眞の或る價値を有せざるや否やを考へないからである。而して宗教は眞ならずといふ根柢から宗教を攻擊した最大の人々に世人が聽かなかつた理由は何か。あらゆる議論に關らず、人間は宗教的譬喩も其價ありと感ずる、宗教が道德上或は知力上の發展の障碍となること明らかとなる前に之を攻擊し、

嘲弄するは惡いと感じる。我々は此問題を後にまた說くであらう、本書の第三篇に頗る面白く之を論じてゐる。

しかし此二事を學んで靑年は多くを悟つたが、高尙の眞理を學ぶ前に多くの辛き試煉を經るべき運命であつた。彼は猶ほ實に人生の敎、世間の意味を了解せねばならぬ。彼は主として最初の戀愛事件の始終に因つて之を學んだ。戀はあらゆる感情中の最も激しいものであるから、人は之に因つて最大の精神的苦痛を受ける。若い大學卒業生、貧しくて前途有望ならぬ者が富豪の娘を戀する。娘は其愛を報い、彼と婚すると信ぜしめる。しかし思ひもかけぬ時、彼は明らかに悟らせられる、かゝる事を思ふさへ愚である、彼は身分が劣る、彼は貧しい、隨つて娘の家族達から輕蔑される、彼は今後其家を訪問してはならぬと。勿論是は彼の愛にとり、誇にとりて激しい打擊である、しかし剛健の人は怯まず、かゝる打擊に耐へねばならぬ。しかし此場合に辛いのは之に伴ふ背信の行爲である。實際上全體の難儀に對して責任ある者、眞に殘酷の罪ある者、而して娘を得て是と婚する者は偶然にも犧牲者の親友であり、大學に於ける友であり、富裕の學生であり、富と身分の特長を有する者である。かくて棄てられた情人は愛と誇と友情の考とに於て等しく惱む。彼の硏究は宗敎的問題に於て更に彼を懷疑的にした、此等の不幸に際してあらゆるものは同時に其

周圍に崩壞したやうに見える——愛、功名、宗教、友情、すべてが棄てられて信を失うた。苦に滿ちて一切の信念を缺いた心を抱いて、彼は多年世界を遍歷した後、若干の智慧を回復し得た。遂に其智慧が來たのは苦痛に關する爾來の經驗、一般人類の惱に對する新なる同情の念によつてである。苦痛は他人の苦痛に同情すべきを敎へるからである。是が寛厚な人々の經驗である、人類の苦痛の何たるかを眞に始めて學ぶのは自己の惱に因つてであり、而してそこで彼等は人生の謎を解くべき妙法を考へるのである。あらゆる宗敎は其謎を解かんと試みた、多くの宗敎は種々の點に於て互に矛盾するやうに見えるが、すべては一大眞理、義務としての苦痛の眞理に於ては一致する。あらゆる宗敎は惱を敎へる——世界は快樂の場でなく苦痛の場であると敎へる、人は單に苦痛を忍ぶことを學ぶのみでなく、或方法にて苦痛を招き之を歡迎すべしと敎へる。かくして諸宗敎中の根本宗敎は苦痛の宗敎である。人が此大眞理を發見する時、敎理敎義を信ずるとも信ぜずとも、宗敎のあらゆる偉大なる種類を崇敬することを學ぶ。其すべての中に此眞理があるからである。其眞理は世界と等しく古く、確に永遠である。

永遠である、——此眞理を學び了つた後、之を說明する他の眞理があるからである。卽ち惡がなければ善が無い。惡に對する爭鬪の結果としてのみ善は存する。一方が他方に對

して必要なるは風景の眺望に於て影の光に於ける如きである。

そして更に自傳者が信仰する第三の眞理がある、他の眞理を悟りつつある時に彼は之を悟つた。幸福は人間に不可能である、一の形態として、個人として人はあらゆる能力が有限であり、しかも其中に湧き出づる神秘の生命は無限者の一部であるからである。其肉體に因つて最狹の制限内に囚はれ乍ら彼は心に因ては依然として無限である。故に何物も恐らく彼を滿足せしめぬ。玩具として彼に世界を與へよ、彼に百の世界を與へよ、之等を所持し、之等に關して多少の知解を得るに及べば、彼は猶ほ厭かずに一層多くを求めるであらう。彼は全宇宙を求めるであらう、そして其でも猶ほ滿足せぬであらう。この不滿を如何に處すべきか、これが宗教哲學の教へる處である。我が知る處、佛教哲學は一切の有限物を求めず、只無限物を求むるが我々の義務と說く。或る基督教哲學は同樣の說を含む――思ふに前者ほど深遠では無いが宗教の目的に對しては同樣に有效である――一の個性として、神としての最後の絕對者を望む願の唯一の目的とするのである。深遠の思想家に對しては此願望は滿足でない、基督教は其教義の一部として死後永久に個性の繼續を主張するからである。東洋哲學は一層合理的に絕對者中に於ける一切個性の沒入融合を說くのである。『サートル・レザルタス』に於けるカーライルの位置は頗る東洋哲學に近い、そし

て其流に於て頗る美てある。

自傳の物語はいかにも美しいが其だけに就て是以上話す必要が無いと思ふ。以上いふ處は其中の重なる興味の個處である。本書の第三部に移る前に又之等を總括しよう。

母たる者の教の後、靑年が學ぶ初の智慧は一般に苦痛に因つてである。しかも大苦痛の初の結果は一種の我儘な失望を起すこと、性格を和げ弘めることなく之を冷酷ならしめることである。つぎに恐らく懷疑時代が來る、其間靑年は何物をも——愛も友情も宗教も正直も眞理も信じない。此境遇に於ける者にとつて一層多くの苦痛が必要である、若し彼が優しい心なら其が確に來るだらう。しかし新たの苦痛、恐るべき苦痛は他人の苦痛に對する同情を最後に强いるだらう、而して苦痛に關する一切人間の經驗を考ふるべく人に迫るてあらう。斯る種類の經驗は重に宗教の記錄する處であるから、斯る思考が人に迫りて認めしむる事は——あらゆる宗教は、よしや細事に於て僞てあつても、頗る重大なる或る事物に於ては皆眞といふ事てある、然らば彼は宗教を尊ぶことを知得したのてある。同樣に彼はあらゆる過失と缺點とに關らず、人類を尊ぶことを知得する、なぜなら彼は今人生の辛さを了解し、人類が勇ましくあらゆる時に其重荷を負ひ、而して生存狀態の低級より高級へと努力し成功した事を了解するからてある。つぎに人間は只一方向に於てのみ有限て

虚弱であることを彼は思索に因つて知得するやうになる。人間內の生命は確に普遍なる生命の一部である、彼はあらゆる過去に亘つて來た、彼は間接ながらあらゆる現在に關聯する、彼は何等の疑もなくあらゆる未來に關聯するだらう。かくして其失へる宗教の代に彼は一層廣大の信念を獲得する。其失へる友情の代に、彼は一切人類に對する友愛の新感情を得る。其失へる快樂の代に、彼は苦痛を忍ぶべき新たの力を得る、而して苦痛に因つてのみ高き智慧の得らるべきを了解する。而して苦痛と禍害との必要を發見した通り、嘗ては虛僞缺失痴愚と見えたものは無限の價値があり、而して實に不可見な眞理の外皮或は假面或は有形衣服を爲すことを彼は最後に發見する。以上は本書の傳記部の重なる教である。しかし書中には余が斯く諸子に示し得た處よりも遙かに多くがある。其毎行は反覆誦讀の價がある。そして今我々は本書の第三節最後の篇に再說される衣裳哲學に立ち返らう。

第三篇の第一章は此講義に關係の要は無い、單に序說であり多少脫線的のものである。しかし教會衣服を論ずる第二章はカーライルの最も興味ある理論の一に我々を導く。教會衣服とは單に僧尼の着服などを曰ふものと諸子はカーライルを考ふべきでは無い。彼は並に宗教のあらゆる外的表象――その建築、肖像、繪畫、またその儀式、その祈禱その音樂、その香煙、また其傳說、教儀、獨斷、法典、教說の一切を意味する。以上の全部を――個

個にも總體にもカーライルは宗教そのものとは思はぬ。宗教そのものを彼は寧ろ人の心にありと思ふ。（心（ハート）とはこゝに心意（マインド）のことである）而して斯る宗教に對して充分に廣大な殿堂は此世に無い、天空も足らぬ、虛空の全宇宙も足らぬ。しかし世人が一般に宗教と曰ふものを哲學者はこゝに只宗教の外的記號及び表象と呼ぶ、只その衣服外裝と呼ぶ。あらゆる衣服は着古され、投棄てられて新衣服に替へられざるを得ぬ。同じく宗教のあらゆる形式と教理とも、時代と明文とに應じて變化し、而して新の形式と教理とに替へられざるを得ぬ。衣裳が新しく善く體裁の整ふ間は我々は之を尊ばねばならぬ、其着古されて無用に歸すること無き中は之を無視し蔑視してはならぬ。あらゆる外的宗教も亦同様である。人の外的衣服が眞に身體の一部では無い通り、宗教の外的部分そのものは必然に眞では無い。しかし眞を表し且つ眞を包む。宗教の外的形態が或る內的眞理と照應する時は毎に宗教は繼續する。しかし眞理が去るときは衣服は何等の用を爲さぬ。彼等の棄てられねばならぬ時である。さり乍ら外見の中には毎に危險がある、卽ち之を眞理と誤解し、或は少くも其蔭に眞理ありと想像する危險がある、我々は決して絕對の眞理を見ることが出來ぬ、只之を包む外見によりて其在所を見得るばかりである。

武力の服裝も亦同様である。宗教の如く軍備社會は其壯麗な色彩の粧飾、其階級の表象、

其兵備の機關を有する。しかし國防を托せられる者が此外見を實體と誤解するなら恐るべき禍が來る。體が亡びた時、靈が失せた時も形は殘る、その時國民は俄に他國民の命を聽かねばならぬことがあらう。例へば正しく對獨大戰の前、佛國は世界最大の軍國と見えた、武力の外見服裝は皆存した、しかし觸れると幻影は碎け倒れた。『赤き死の假面』と題するエドガ・ポウの作がある、內に何人も居らぬ一揃の衣服と假面とが嚴かに舞踏室の中を步む話である。精神がなく規律が無く或は眞の豫備力の無い軍隊は斯る物である。其武力的幻影が日本に粉碎さるゝ前の支那は斯る物であつた。カーライルが特に歷史家であり、彼の大歷史、就中『佛國革命史』が皆この衣裳哲學の見地から書かれたことをこゝに記憶するのが興味豊である。革命が可能なる前、佛蘭西王國の狀態に關するテインヌ及び其他の人々の證明を讀めばカーライルが極めて痛切に眞相に觸れることが了解されよう。軍隊はあつた、政府のあらゆる形式はあつた、しかし其すべては虛僞であり假面であつた。

政治、國內の政事は同一の關係て本書の他數章の題目となる。此等は特に外邦の事情に關し、英國とアイルランドとの貧富狀態に關するのであるから、諸子は恐らく之に多くの興味を感ぜぬだらう。私は只衣裳哲學が等しく經濟機關に、國內政事の外的事實に適用せらるゝ事だけを曰つて置かう。最後に社交上の虛僞——服裝上の法外、放縱の法外、あら

ゆる種類の奢侈の法外――之等の慣習に關する數章がある。しかし此等の幾章は亦特に英國社會の痛切な弊を說くので委しくこゝに曰ふ迄も無い。本書全體の大價値は普遍の事を說くにある、そして一般の眞理は第三篇の各頁に散在するけれど諸子に對して他の二篇よりは有用でない、價も少い。之は特に英國の思想家に訴ふるために書かれたのである、本書の最上の部分は私が梗概を述べたものである。

さて二三の一般的考察を述べよう。以上の梗概よりして諸子は『サートル・レザルタス』の效績は重に暗示にありと觀察したらうと思ふ。人に思考を敎へるよりも導ろ人をして思考せしむるための書である、其題目はあらゆる題目中の最も重大なるもの――人生及び人生の行爲である。本書はまた大なる問題、大なる謎、就中社會の謎に對する見地の修正を目的とする書である。さて善人の幾百千は善惡義務に關する單純なる少數の觀念のみを以て頗る善く一生を經過する、事物の道理に關して彼等は思考の勞を取らぬ。取らざるは誠に宜しい、取れば不幸を招くのみである。しかし敎育された人々の日々增し行く階級は斯る無垢の方法にて人生を經過することが出來ぬ、義務により或は他の事情により、宇宙の神祕に關して早晩深刻に考へざるを得ない。本書の有用なるは斯る人々に對してである。本書は多くの問題の硏究さるべき最上の方向に思想を進める。人民の安寧を委託せられる

政治家、人類の悲哀を和げ、人類の努力を指導すべき業を委託せられる教育家或は宗教家、美なるものを敎へ、高き情感と豊かな觀念とを治める天職の詩人或は文學者――此等は古の單純なる流儀を以て思考することが出來ぬ、一層博大なる流儀、現時に於ける知識の擴張に應ずる流儀に於て思考せねばならぬ。而して此等の人々を造り出すは世界諸方の學問の中心である、こゝでも未來の政治家、敎師、文學者は大學より來ねばならぬ。其誦讀を能くすと感じる各大學生たるものが繰返して『サートル・レザルタス』を讀むは殆んど其義務と私は考へざるを得ない。其中には彼の好まぬ事があるかも知れぬ、其中には或實際哲學者が讀んで微笑する法外の點がある。しかし本書誦讀の價値は讀後の效果である、それは大なる思想を起さしめる、平常事物の新面目の承認を迫る。純粹なる哲學、科學的哲學を讀むのが優るては無いかと諸子は私に問ふかも知れぬ。其は大に學生の心意如何によると私は答へよう。百中の九十九まで實際科學は諸子が此科學（譯者注）的な書に見出すべき一要素――情感的要素を與へ得ないであらう。もし非常に強き想像力、並びに非常に博大な同感力を有するなら、科學の研究のみで人は其要するものを悉く得るだらう。乾燥な事實の如何なる沙漠よりも情感の泉を汲み取るであらう。しかし斯る人は極めて稀である、通例科學的能力は非情感的な心意中に發達する、隨て科學的能力は一般に多少冷酷な性格に伴ふ

ものである。此冷酷は遂には情感の經驗によりて多少は修正せらるるが殆んど常に如上の局處にある。思ふに文學を志す者は豊な能力を濫に保ち得べきだけの情感的讀書なしには科學を修めぬが宜しからう。

本書の中に衣裳哲學そのものよりも一層諸子に興味を與へる一部があると私は思ふ――著者の初の苦しい人生經驗を說く處が其である。私は諸子に先に此部分の大意を告げた。しかし此講義を終るに際して特に諸子の注意を呼びたい一段がある。人生の成功に對する實際の障碍を說く一段である。

カーライルの說は其内容左の通である。『忍耐して堅實に勉め、萬事に正直に働き、何事にも極力を盡し、義務の命ずる時に每に之に隨へば、材能あり精力あるものは人生に成功するとは多數の考である。この意味は深い――殆んど人生の完全なる行爲を意味する。しかし是だけで十分と思ふ人は重大にして頗る悲むべき誤に陷る。不幸にも容易ならぬ人生の障碍は精力にも、事業にも、正直にも、乃至義務、誠實等純良の事物にも負けるものでは無い。此等の障碍は他人の邪惡、愚昧、無知、嫉妬、惡意であるからだ』是がカーライルの敎の實質である、而して此言說の蔭にある眞理が廣大で恐るべきものであると悟るには諸子は若過ぎると私は信ずる。善良の心を有し、善良なる兩親の敎の下に、又其後善

良なる敎師の敎の下に善良なる家庭に養はれた人は、高き義務の感念と同僚の善良に對する無垢の信念とを以て社會に入りがちである。勿論彼の學校生活は性格の相違の大なること、あらゆる人々が同等に善くは無いことを敎ゆる。しかし善惡共に人間性の全き深みを現はすやうな種類の競爭はまだ學校には無い。之が初めて十分に學ばれるのは人生の爭に於てである、而して其結果は甚だ惱ましき驚である。人は只其義務を行ふべしと考へる代りに、如何して其義務を行ひ得べきかを靑年は考へざるを得ぬことになる。恰もあらゆる社會は彼に反對の同盟を結び、其義務を行ふことを邪魔するよう直ちに彼に見えるであらう。善良たることは頗る六ヶしい、善良たる事に關して心内に困難を感ずるからでは無く、他人が彼に對して困難を致すから頗る六ヶしいと彼は悟るのである。殆んど毎日彼は利害と道德との間を擇ばねばならぬ、殆んど毎日彼は善惡孰れを爲すべきかを決せねばならぬ。而して是が年々歲々打續いて心中の道德力の纖維は極端まで試される。實際の社會が德敎に動かされるのは極めて不完全て、あらゆる事は利害損得に因つて支配さるる事を彼は悟らねばならぬ。若し彼が頗る怜悧て達眼があるなら、直に彼は事物をありのままに受ける事を悟るだらう、事物は何故に然かあるべきかを問ひ過すことなく、又之に關して怒を起すことがないてあらう。しかし如何に怜悧ても、怜悧以上、精力以上、道德以上のことが

必要と彼は發見するだらう。彼は困難を避けんと試みてはならぬ、彼は戰士たらねばならぬ――言を換へれば彼はよく敵對せねばならぬ、勝たねばならぬ、已むを得ぬ時は結果を顧みないで他に苦痛を與へ得ねばならぬ。善だけでは足らぬ――成功に關してなら、强が遙に大切である。しかし最上の人は善且つ强であり、時としては冷酷嚴肅であり得る人である。一切の人は皆斯くはあり得ぬ、極めて少數の善人のみが斯くあり得るのである。しかし成功は大に之に賴る、人の運命の作られる社會が高いほど、其世界が知的なるほど面すべき反對は愈辛く愈惡い。此國(日本)に於てはまだ社會の狀態は歐洲に於ける程の極端に達せぬ、彼所では人生成功の困難は全く物凄い、そして每年增し行くばかりである、しかし思ふに此所でも早晩諸子は善良と勤勉とが世を渡るに十分でない、優れた聰明と確な力を以て道德上の障碍に向ひ得る人が最上の戰勝を得ると認めるだらう。自重――惡の蔭にある力が如何に大なりとも、惡と信ずるものに屈せぬやう人を强いる自重心――之が最も重大の寶である。しかし此は必らずしも其酬を得ない、酬を得るは攻擊的自重心でなければならぬ。此種の自重が全く成功しなかつたアメリカの一例を私は記憶してゐる。其人は巨大な鐵道會社に安い俸給を受ける技師であつた。彼の前途は有望であつた、重役は彼を愛した、彼の幸運は殆んど目前にあつた。然るに一日社長が或る地面に鐵道工事の設計

を命じた。彼は之を研究しに現場に行き、歸つて社長に曰うた。『御冀望の通にあの地所を用ゐることが叶ひませせん――幅二尺長三百尺ばかりの土地が他人のものです。』社長が答へた。『もし急速に工事をやるなら氣が付かれまい、氣が付かれる頃はもう大丈夫、法律は我々にとりて都合がよからう。』技師が曰ふ『しかしそれは盜みです、私にはやれません。』かくして彼は免職された。而して此鐵道會社は頗る有力だから殆んど他の十二會社を動して彼を排斥させた、かくて略十年以上彼は合衆國に於ても鐵道技師としての職を得なかつた。しかし遂に長らく待ち且忍んだ後、かゝる性格が直に事業上有用なるをよく了解した人々に此事情が開かれた。而して其技倆に價する位置に彼は上げられた。

さり乍ら彼は富者とはなるまい。數億弗の金が『然り』と曰へと彼に求めた時『否』と曰はなかつたら彼は富者と成り得たらう。私は信ずるが諸子は皆生涯に一度のみならず、『否』と曰ふべしと思ふ時『然り』と曰へと要求せらるることがあらう。『サートル・レザルタス』の如きを讀むことは斯るとき恐らく『否』を以て諸子に重大の助を與へるだらう。物質上並に精神上、人間進步の最高性を造るものは畢竟此『否』の一語である。

譯者註　科學的とあるは非科學的の誤刷か。

英吉利文學に於ける聖書

英語の聖書がシェークスピヤーに次いで英吉利文學上に於ける最大作品であり、且つそれが英國民族の文字乃至口語の上に及ぼす影響が、シェークスピヤーをも凌駕するものがあるであらうといふても、決して誇張的では無い。この理由の下で、苟も英吉利文學を研究するに當つて、英吉利文學と聖書の關係について何等かの一般的知識を有たぬならば、その研究は私達の文學上に於ての教育を甚だしく不完全たらしむるであらう。但し聖書を考察するに當つて宗教的見地に立つことは全然不必要である。實にかくの如き見地に立つて聖書を觀察するならば、聖書の文學的長所を了解することに對して寧ろ支障となるものである。故に或る人々は、英吉利人が聖書の美點を發見するに至つたのは、彼等が聖書其物を信仰することを止めた時以來のことに屬すとさへ極言してをる。この事柄は全部眞理では無いが、然かも部分的には眞相を穿つてをる。蓋し書物の中の一切の用語を上帝又は

鬼神の語として觀察することは一つの見方であるが、亦、之を私達と同樣の人間共者の造り出した物としてのみ考へるのも一つの見方であつて、兩者の間には相違がある。私達は神聖な者の造り出した作物に接するや、之をそれ自身に於て完全な物であると想像し、且つ實際的に存在してをらぬ所に、その美と眞の存在を想像するのが、私達の當然爲すべき職責であると考へるのが自然の數である。英語の聖書の驚嘆すべき所以を最も能く了知し得る人物は下の如き人達である。卽ちこの聖書は第十九世紀の學者よりは、敎育の程度も文化の程度も遙かに劣つてゐた人々の手によつて造り出されたものであるが、然かも、さういつた敎育の低い人達が、現代の如何なる人物といへども、恐らく達成し得なかつた仕事を、文學上に於て成功し得たといふことを認知する人物なのである。

勿論、私達は飜譯者の仕事を考察するに當つて、その原本の壯麗であつたことを忘れてはならぬのである。私はこの聖書は一切の宗敎的聖典の中で最大の物であるとは言ひ度く無い。この書は道德的には今日私達の是認することの出來ぬ多くの事柄を包含してをる。亦その善なる內容といへども、他國の經典中に見出し得べき物のみである。且つその倫理的敎訓も、徹頭徹尾、獨創的であるとさへ主張することが出來ぬ。古代埃及の經典は、その道德を高唱する美點に於ては、舊約書の中に書いてある如何なる物にも優越してをる。

況や他の東洋諸邦の經典、特に印度の聖典に至つては、その想像力の雄大なことゝ、その思想の幽玄なることゝに於て、希伯來の經典を凌駕するものがある。歐洲人が、かのサンスクリット語やパーリー語の學者達の努力の恩澤に浴して、印度の學者達が希伯來聖典よりも、もつともつと浩瀚な經典の中に、驚くべき思想・感情の美を祭りこんでをることを知るに至つたのはつい近年のことであつた。故にこの事實から推斷するならば、この遠い印度國の文學が他日猶太聖典と全く同樣に、歐洲人の思想に感化を與へることは必ずしも不可能では無い。今日、歐米到所に於て佛教及びサンスクリット文學が研究されてをるが、その態度は徒に熱心であるばかりでは無く殆んど熱狂的である。否、時としては不思議なほどに極端な熱狂的態度を表してをる。私はこゝてその一例として最近印度よりの歸途日本を訪れた一人の金滿家の場合を紹介してみる。彼はニュー・ジーランドで大きな財産を持つてゐた。彼は教養の高い、然かも亦社會的にも大きな勢力を持つてゐた人物である。或る日のこと、彼は會ゝ『バガヴァッド・ギータ』の英語譯を讀んだ。彼はこの書を讀むと殆んど同時に、印度の山間の一修道院に蟄居して佛教を研究し、其所で彼の餘生を送らうと決心した。そして彼はその異國の地に於て、佛教の眞諦を窮める爲めに、彼の財産も、社會も、否、西洋文明が彼に提供する一切の物をも悉く放擲して仕舞つたのである。これ

はこの種の事柄の唯一の實例で無いことは固よりである。故に苟もこの種の實例が社會に起り得る限りは、私達は宗教的文學の感化力といふものは、來たるべき幾世紀の間、決して滅却する譯は無からうと信ずる者である。

しかし、一切の大經典が……假令、それが希伯來語・印度語・波斯語・乃至支那語で書いてある經典であるにしても……その宗教的價値から離れて、それ自身の何等かの貴い、且つ特殊的な美點を有してをるものである。特に聖書の原本はこの點に於て崇高な詩の、又、洗練された散文としての、一つの記念塔として高く聳え立つてをる。若し之を文學的作品として見たならば、聖典の最大な物としての價値は無くなるにしても、ともかく最大な物の中の一つであることは明らかである。そしてその證據は、幾百千億の人の魂が……旣に死んで仕舞つた者の、或はなほ生存してをる者のその魂が、この聖書の言葉に依つて吹きこまれた靈感其者の中に之を見出すことが出來る。セミティック人は詩、特に想像力の最も多く漲つてをるところの詩を大いに好愛してゐた。そしてこの關係に於て聖書は實にセミティック人の詩的精神の記念塔である。この所謂詩の精神なるものゝ中に於て、或る種類の峻嚴な且つ敬神的な氣分が、これと同種類の性格の持主であるところの西洋人に特殊的に感銘するところがあつた。聖書が初めて西洋人に識られた當時にありては、彼等

の精神はなほ陶冶されてをらなかつたから、一旦この書を繙くや、彼等の思つた事も、感じた事も、殆んど全部が、彼等の到底發表し得ざる巧妙な方法を以て述べてあることを知つたのである。故に歐洲の北方民族は聖書の中に彼の靈感を見出した。そして聖書に對する熱狂的態度は今日に至るも全く滅びないのである。

しかし、こゝで注意すべき事柄は、如上の聖書の原本その者の價値が、英語の聖書ほどの價値を有してをらぬといふ事實である。言ふ迄も無くこの聖書の原本なるものは、靈感作用を促すところの一つの力であつた。しかし、たゞそれだけであつたのだ。然るに英語の聖書は之を全體的に觀察すれば、希伯來語の聖書よりも美文學としての直打が大きい樣である。卽ち之は或る特別の理由が然らしめたものであつて、その理由こそは之を研究する者の是非とも承知して置かなくてはならぬものなのである。英語の聖書は文學的進化の一産物である。

諸君はいろいろの作家に對するいろいろの英國評論家の批評を研究するに當つて、諸君に說くところの是等の批評家なる者に對して、諸君は時々耐へきれぬ不快の念を抱いたに相違なからう。卽ちテニスンが部分的にはワーヅワースから、或はキーツから、或はコルリッジから影響を受けたとか、或はコルリッジが部分的にブレークからの感化を受けたと

か、そしてその又ブレークがエリザベス朝の文學者達から影響を受けたとかいつた風の批評は實に枚擧に遑が無い位多い。諸君はこの如き場合に臨んだ時、丁度私が幾度も幾度も私自身で言ひ慣れてをるが如く、『この詩人が己が思想を何所から齎して來てもいゝでは無いか。私はこの詩人の作中に流れてをるところの長所をのみ學ばうとする者であつて、この人物の文學的教育の歷史を知らうとするのでは無い』と言はうと試みたことがあつたと思ふ。しかし、今日此種の研究的價値は全く一つの新しい方法に於て表現されて來た。進化の哲理は他の凡ゆる物に適用されてをるが如く、文學上にも適用されてをるが、今その學說の教へてをる所を聽くに、人類はかの無より有を生ずる力の持主たる神では無い。故に天才の造り出す一切の事業は、その天才自身の力共者に依つて出來る場合が少くして、却つて彼の先人てあつたところの他の天才の努力の結果に繫依する場合が多いのである。何れの大文豪といへども、彼の思想や知識を部分的に他の先輩の文豪から仰がざるを得ぬ。そして、その先輩の文豪も亦彼等の先輩から恩惠を受けてをる。かくの如くにして先輩又先輩と溯つてゆくと、終に、私達は非常に古い時代に到達するのである。そしてその古い時代に溯つて見ると、其所には文字で書かれた文學も無く、たゞ一つの部族卽ち或る限定された場所の人達のみが、或る詩句を暗誦し、記憶し、且つ之を彼等の子供や彼等の孫に

口傳してをるといふ時代があつた。智惠の神が一人の神の頭から完全に武裝して飛出して來るのは希臘神話に於てのみ見らるゝ事實である。實在の世界にありては藝術的作品が美しければ美しいほど、之をかくあらしめる爲めにより永き時間を必要としたのは明らかである。亦かくの如き美術の發達に參與したところのいろいろの人達が、其の數に於てより多かつたことも明らかである。

英語の聖書に於ても亦かくの如し。何人といへども一六一一年の譯本を大成し得なかつたでは無いか。一時代を費してもこの大事業を成就し得なかつたでは無いか。この事たるやたゞ一つの世紀だけの勞役では達せられなかつたのである。これこそは實に幾百年に亘つて努力されたところの幾百人の飜譯家の勞力の結晶であつたのだ。時代又時代と、前者の後を嗣いで少しづつ改善に改善を加へ、終に第十七世紀に至つて英吉利人の頭で、又英吉利語の力で、最善を竭くして出來上つた聖書譯なのである。文體乃至表現の上に於けるこの驚異に直打する長所は、到底他の方法では寫し出すことが出來ぬ。ジェームズ王の英語譯聖書は如何なる人物といへども後世之に改訂の筆を加へることが出來ぬ。第十七世紀以後、この權威ある聖書に對して試みられたいろいろの企ては、詮ずるにこの書の力と美を汚損した以外に何物をも成し得なかつたのである。

諸君は今この英語の聖書が純文學の立場から考へて、何故に研究上至大價値あるかを了解するでせう。私達は暫時目を放つてこの進化の歷史の上に現出し來たる主なる出來事を觀察してみませう。

聖書を初めて西洋の國語に飜譯したのは第四世紀のジェローム（一般にジェローム尊者の名を以て呼ばる）であつた。彼は希伯來語及び亞剌比亞語から直接にこれを拉典語に譯したのである。拉典語は當時羅馬帝國の國語であつた。この拉典譯はヴァルゲートといふ名で呼ばれてゐた。言葉の意味は普く知らしめるものといふことである。ヴァルゲートは今もなほ羅馬敎で用ひられてをる。そしてこの拉典譯の聖書ヴァルゲートをもととして出來たのは、今日私達に傳へられてをるところの英語の最初の聖書譯である。故に英譯聖書は原始的國語の物を採用したのでは無い。

何よりも先きに、ジョーン・ウィックリッフの聖書は第十七世紀聖典の基礎と呼ぶことが出來るでせう。ウィックリッフの譯は多くの他の人々の補助を得て一三八〇年と一三八八年の間に上梓された。故に英語の聖書の基はジェロームの拉典譯が公になつてから一千年後、即ち第十四世紀に出來たものだと稱し得るのである。しかし、ウィックリッフの譯本は、假令それが優れたものであつたにせよ、永續的では無かつた。その理由は英國の國

語が餘りに急激に變化しかけてをつたからである。隨つてヘンリー第八世の朝にティンドルとカヴァデールは、他の多くの人達と共に一つの新しい譯本を公にした。しかしこれは拉典譯のヴァルゲートをもととしたのでは無くて、かの大學者イラズマスの希臘本をもととしたのである。これはその當時に於ける最も重大な文學上の事件であつた。蓋しこのことたるやゴッス教授の言を借用していふならば次の時代の英國散文の全色彩を支配したからである。即ち一五三五年頃に完結されたところのティンドルの聖書は、その散文體に於て、ヘンリー第八世以後の英國の一切の散文に、直接又は間接に、大なる影響を及ぼしたからである。これと殆んど時を同じくして英吉利の僧侶達は大僧正クランマーの監督の下に、この英譯聖書に殆んど匹敵すべき一つの文學上の寶物を英國の國語に提供した。そして、この寶物は經典からの驚くべき譯文を包含したものであつた。即ち祈禱文がこゝに含れてゐた如何なる英語といへどもこの書の英語に優るものは無い。故に之は今日に至るも教會に於て用ひられてをる。否、それのみならず、多くの飜譯家は爾來この譯書の中から新しい靈感を見出してをる。

この有名な聖書の改訂版が一五六五年に『僧正用聖書』の銘をうつて世に公にされた。固よりその改訂の動機は主として教養上からのものであつた。故に私達はこの譯本に關し

てはたゞつぎの如く述べて置く以外に何等私達の手を下すべき必要を見ないのである。曰く、新教は新しい國教に適合する爲めに經典を改造したのであると。蓋しこの改訂本は羅馬舊教徒の決心……彼等獨自の英語の聖書を作らうとするその決心に對して、何等かの刺戟を與へることとなつたかも知れぬ。その證據として一五八二年にジェズイット教徒はリームズで聖書譯の仕事に着手した。そして一六一〇年迄にかのドゥエー譯本……佛蘭西のドゥエー舊教學校で主として造られたからこの名あり……は完成された。この譯書には多くの長所がある。卽ちこれはかのジェームズ王の驚嘆すべき譯本に次いで明らかに詩的氣分に富んでをる。又これには、前に新教によつて公定譯本の中から破棄されて仕舞つたが、然かも羅馬教會からはその建設の當初以來用ひられてをつたところの、多くの篇を藏めてをるといふ長所が在る。しかし、私はこの譯本を一つの文學的英語の作品としてのみ論じてをるのである。この書は原本の資料を藉りて編まれた物では無い。その長所は拉典聖書をもととして、之を流達に譯出したといふことにのみ存する。

最後に一六一一年に至つて有名なジェームズ王の譯本が、王自身の保護の下に作られた。この譯書は實に英國語の文學的大記念塔である。多くの學者はこの仕事に參與した。しかし、主としてこの事業に努力し且つこれを監修した者はウィンチェスターの僧正ランスラ

ット・アンドリューズであつた。彼は恐らく英國第一流の雄辯な說敎家であつた。彼は先天的に辯舌が巧みで、且つ言葉の抑揚とか調子とかいふことに對して驚くべき鋭感な耳を持つてゐた。蓋し彼のこの本然的能力が原因となつて、彼の用ひた聖書の英語は實に音樂的魅力を有するに至つたのであらう。しかし彼がこの譯本の全部を彼一人で書いたものとは想像することが出來ぬ。否、その小部分より以上の物をすら彼一人で達成したとは想像することが出來ぬ。彼の遂行したのはこの譯書に調子を賦けた點である。彼は彼に委ねられた聖書の全體に亘つて之を監督し且つ訂正した。そして最も美しき形式のみを保存することを許したのである。しかし、それにしても彼は如何なる莊嚴な材料によつて之を撰擇すべきであつたか。彼の時代以前に編まれたところの聖書譯の全部は、一つ一つ彼によつて丹念に研究された。そして彼は是等の譯書の中から音と形との兩方面から見て最善の物と思はるゝ如き名句を保存することに恩を致した。私達はこの結果をたゞに文學それ自身の研究としてのみでは無く、雄辯術そのものの一つの研究として考へなくてはならぬ。何故ならば、彼は聖書を公衆の面前で雄辯に暗誦することによつて生ずる結果其物に對して、凡ゆる注意を捧げたからである。

この事は聖書の文學的進化の結果を指示してをる。卽ちその時以後行はれて來た一切の

事業は、徒に退歩の方向、換言すれば聖典に害を加へたといふ以外に何物も無かつたのである。今日私達はジェームズ王の譯本以上に學究的な……正確な學者的氣分といふことが關係してをる範圍に於ては……譯書が後年非常に多く生れ出たことを知つてをるが、然かもその何れを見ても、文學的價値を要望するだけの資格のある物は一つも見當らぬ。嚴密な智識を持つてをる學者は不幸にして文學的能力に缺如してをる場合が非常に多い。この二つの能力に結合することが頗る稀である。かのオックスフォード聖書として知られ且つ今日英吉利國教會に於て用ひられてをるところの一八七〇年の聖書は、眞の文學者、及びかの古い譯本を有效的に研究することによつて靈感を享けてをつたところの詩人乃至批評家から、甚だしき反對論を買つた。この新しい譯本は十四ヶ年間の勞力の結晶であつて、然かもそれは英語を用ひてをる世界各國の最大碩學の協力的勞作の結果であつた。そして、それは正確といふ點に於ては古今無比の譯本である。然るにこの譯書は餘りに文學的性質を毀損されて仕舞つた爲めに、苟も詩的研究を志す者であるならば、何人といへどもこの新譯本を顧みる者は無い。教會内に於てすら古い聖書をかくの如く學究的に取扱つた事に對して斷乎たる反對論を唱へてゐたほどである。加之、多くの教會はこの新譯本の採用を拒んだ。この場合に於て保守的精神が文學界に一つの奉仕を爲してをる。そしてそ

の尚古的精神がジェームズ王の古い譯本を流行せしめ、且つそれを日曜學校に於て特に用ひることを主張してをるのである。

私達は今や改訂譯本とジェームズ王の聖書との差異に關して、二三の實例を示すことが出來る。セーンツベリー教授は數年前に公にした英吉利散文についての一つの論文の中で、英國の國語で書かれた散文の最も完全な物は、『詩篇』第八章の第六、第七の詩句中に包含されてをると述べてをる。曰く、

『爾の心臟の上に、又、爾の腕の上に、封印の如く我れを用ひよ。愛慾は死の如く强く、嫉妬は墓の如く苛刻に、その炭は最も烈しき火焰をあぐる熱火の炭なればなり。

『水は如何に多くとも、愛慾を消すこと能はず。洪水を以てするも之を滅却する力なし。若し愛慾の爲めに、己が住家の一切の財產を失はんとする者あらば、そは許し難き罪として嚴しく罰せらるべし』

私はセーンツベリー教授が、この句を指して、英語で書かれた散文の中で最も美しい物だと呼んでをるのは、明らかに當を得てをることとは斷じ難い。しかし、彼は實に當代一流の大批評家であるが故に、その所說は之を尊重し、之を輕々に看過すべきものでは無い。

況やこの句が明らかに非常に美しい句であるのだから、しかし、改訂譯本に於て、この同一の句が、學究的譯者達の筆によつて全く殺されて仕舞つた。例へば彼等は次の如く譯してをる。曰く、

『愛慾の閃火（ひらめき）は熱火の如し、上帝の焰其の物なり』

文學的手腕といふことを先づ度外視して、たゞに嫉妬を描寫したものとして考へた場合に、以上二種の中で何れが優れてをるだらうか。先づ私達の問ひ度いことは、嫉妬を呼ぶに上帝の焰を以てし、熱火の炭の代りに閃火を以てした理由である。私達はこの譯語の入換によつて何を利益したてあらうか。この種類の事柄はこの新譯本の到所に見出すことが出來る。例へば同じ『詩篇』の中に兩眼を美しく形容した句があるが、それにはかう書いてある。水の流るゝ川岸で、乳で洗はれ、うるはしく置かれたる鳩の如くと。そしてこの句に於て水の流るゝ川の代りに簡單に川と改めた爲めに、意味は正確になつて、その點では得る所があつたと思ふが、詩的氣分に於て將た音律に於て非常な損失を招いてをる。ドウェー譯本に於てこの句はこれよりは遙に詩的に譯されてをる。卽ちかう書いてある。曰く、彼の眼は水の流るゝ小川の鳩の如し、乳で洗はれ、美しき流れの傍に置かれて云々。

古い方の飜譯者が誤譯したのが却つて原本よりも遙かに美しいものとなつた場合が屢ゝある。これは如何なる疑問も無しに言ひうる事實である。例へば『ジョブ』の第二十六章、第十三に次の如き素晴らしい句がある。

『彼は己が靈氣によつて天を飾つた。彼の手は歪める大蛇を造つた』

歪める蛇とは龍といふ名の大きな星座を表したものであると想像されてをつた。形容は崇高である。しかし、この句はドゥエー譯本に於てはもつと崇高になつてをる。一切を生み出す彼の手は渦卷く大蛇を齎しぬとある。これは明らかに雄大な想像である。上帝の御手が恰も産婆の手の如く、永劫の闇黑の底から星座を齎してをるでは無いか。然るに改訂譯本に依れば、譯し方は正確になつてはをるが、たゞ彼の手は迅速な蛇を刺しぬと書いてをるだけである。一切の詩的氣分は死んでゐる。

如何なる書物でも之を文學的に研究するには二つの方法がある。第一はその思想と感情を研究するもの、第二はたゞにその手際を研究する方法である。文學を學ぶ者はこの二つの觀察點から聖書の或る部分を研究すべきものである。第一の研究法を用ひんとすれば多くの批評的著述を愼重に考察することが利益である。しかし、文學として聖書を研究する

者にとりては、その爲すべき仕事は頗る明々白々たるものがある。卽ちそれが爲めにはジエームズ王の譯本を精讀して研究の基礎を造ることとである。ジェームズ王の譯本はこの意味に於て唯一無二の物である。但しこの場合にドゥエー譯本を折にふれて讀む必要がある。亦參考書としてクルーデンの『要語索引』の如き物を手許に置く必要がある。クルーデンのこの書は或る特殊の題目、例へば海・風・天・人生・夜陰といつた風の事柄について、聖書中の在り場所を數瞬間の中に探り出して類例を集めることが出來るから大いに便利である。私は聖書研究を日本の非常に年の若い學生諸君に奬勵する者では無い。それは英語の聖書の文體が變調であるが故である。英語の形式を充分理解してをらぬ内に、このやうな古い型を學ぶと、學生諸君の發表形式が禍される虞がある。だが、程度の高い文學研究者にとつては、聖書中の最も美しき篇を多少なりとも理解して置くといふことは、必要缺く可からざることたるや固よりである。但しその讀むべき必要な篇は澤山は無い。しかし、少くとも『創世記』、『出埃及記』、『ルース』、『エスター』、『詩篇』、『箴言』だけは讀まなくてはならぬ。就中、『ジョブ』は必要である。『ジョブ』は聖書中の最も雄大な篇であることは明らかである。但し私がこゝて掲げた篇は、悉く英文學の各方面に於ける、詩人乃至作家の精神を非常に鼓吹した物のみである。故に諸君は苟も是等の文豪の傑作を繙くな

らば、意識的に或は無意識に、その作品が何等かの關係を是等の名篇に對して有してをることを知るであらう。つぎに哲學的に考へて重要な篇は『傳道書』である。『傳道書』は箴言に富んだ多くの智識を含んでをる以外に、驚くべき世界詩を包含してをる。世界詩……凡ての時、凡ての時代にありて、人生其者に對する普遍的眞理を包攝してをるところの詩……これが『傳道書』の中に見出される。しかし、私は聖書の中で歴史と法律に關する篇は大いに讀む必要があるとは考へてをらぬ。その理由はこの種の篇には文學的要素が誇張されてをらぬからだ。『預言書』の諸篇は之とは異つてをる。だが、ほんの僅かばかりの佳言名句を獲得する爲めに價値の少い部分を可なり多く讀まなくてはならぬといふ無駄がある。つぎに新約書に關して言はんに文學的價値は舊約書のそれに匹敵すべき物が極めて少い。たゞ新約書に於て諸君に紹介すべきは、その終りの篇、卽ち『默示篇(レヴェレーション)』一名『天啓錄(アポカリプス)』である。天啓錄(アポカリプス)といふ語から文學的な形容詞天啓的(アポカリプテイク)が生れて來た。この形容詞は非常に驚くべき事柄で、同時に非常に大きな事柄を表はす時に用ひられてをる。この神祕的な『天啓錄』の眞意を理解するか否かといふことは讀者にとりて重要な問題とはならぬ。その行文の響きと美、そしてそれがその幻想の畏るべき特性と結びついた時に、讀者の心耳を强烈に動かし、かくの如くにして、文學的趣味をそゝらざるを得ないのである。少く

上も第十九世紀の散文界の二大人物カーライルとラスキンは、この『天啓錄』に依つて明らかに影響を受けてゐる、英文學上の何れの時期を見ても、聖書研究の感化は何所かに現れてゐる。そして、それは既に古代アングロ・サクソン時代からさへもあつたのである。現代にありては聖書研究の熱は決して衰ふること無く、その文學的要素を論じた新著述の報告書は不斷に私達の目前に表れてゐる。恐らくそれ等の中で最善なる物の一はモールトン教授の『近世讀本聖書』である。この書に於て題目の文學的方面に亘れる事柄は、かの一般的に用ひる爲めに公にされたところの同種類の他の著述に於けるよりは、大いに重きを置かれてゐる。

若しこの短い講演によつてジェームズ王の譯本の英吉利文學上に於ける眞の立場が明らかになり、且つ、何が故にこの譯本が、その宗教的思想を離れて見ても、かくの如く重大な價値を有してゐるかといふことが、諸君に多少なりとも知つて貰ふことが出來たならば、私は自ら思ふことを十二分に言ひつくしたことになる。他に利用し得べき時間を割いて、それをこの聖書の美點を指示することに費やすのは無益のことである。如何なる美點がこの譯本に存在してゐるかと問ふのは、全く說明を要しないほど簡單な事柄である。讀書の價値が諸君にとりて最も大なるものとなる所以は、英語の組立てを見て、其の中に節度と

釣合と交響との法則が流れてをることを知るにある。しかし、これは一通りのことでは無い。その最も能き實例は既に掲げたところの說明によつて竭くされてをる。換言すれば第十六世紀以來、英語を用ひて書かれた一切の書は、悉くこの聖書によつて色づけられてをるのである。

バークリー

第十八世紀の大思想家ジョージ・バークリーに關して、假令それが貧弱な知識であつても、何物かを知つてをるならば、英吉利文學を研究する者にとつて何等かの利益を齎す譯である。何故といへば英吉利文學を學ぶ者は同時に又英吉利人の思想を學ばなくてはならぬ筈だから。バークリーはその文學的性質に於て、將た、その哲學的力量に於て、彼と同代の人々の間で第一位に置かるべき人物である。そしてこの事實は彼をして一つの獨立した講演題目たらしむるに充分な理由を與へしむる所以である。加之、現代の物質主義の鋒鋩は、多數の無思慮な人達に依つて、日本の青年諸君に對して愚かにも向けられてをり、且つ時代の趨勢が一切の宗教を破滅させなくては止まないといふ有様であるが故に、學生諸君はこの際皆、バークリーとバークリーの決して讀まなかつたところの東洋の大哲人達との關係を知ることが、特に緊要缺く可からざることである。無知な者が了解するには餘

りに深遠であるところの他の思想家だちに對して、爾來向けられてゐたあの攻擊の鋒鋩と全く同一の攻擊が、この大人物バークリーの觀察に對しても向けられてをつた。人類と宇宙の本質についての平凡な考へ方に對して贊意を表はさぬ人物は、何人といへども無宗教徒又は異端者として世間から考へられ勝ちである。バークリーもこの種の攻擊を受けなくてはならなかつた。そして彼は永遠に思想家達の尊敬を支配し、然かも必然的に無知の徒の嘲笑を喚び起こすやうな仕方でこの反對を受けたのであつた。バイロンは他の事柄に對しては開放的であつたが、バークリーの偉大なことを承認するには餘りにその心の淺薄であつたことを證據だててをる。卽ち彼はつぎの如き諧謔的な句に於てこの事實を表はしてをる。曰く、

物言へばつまらぬこと、バークリー僧正、
言ふことは皆かひなきことよ、

だがこの句とは反對に、バークリーの言ふたことは西洋思想にとりて非常に重大な意味を持つことに成つた。バークリーは英吉利哲學の發達史上に於ける最も價値ある一つの要素として考へられねばならぬ。

先づ第一にバークリーの傳について少しく述べてみる。彼は個人として見た時は非常に優しい人物であつた。彼は決して敵を作らなかつた。又彼はたゞに友人を失はなかつたのみならず、人々の崇敬は同時代の最も嫉妬心深き者をも、亦最も怒り易き者をも不安に陷らしめることは無かつた。友人といふものの殆んど無かつたところのポープですら、バークリーは地上の凡ての德を有すと言うてをる。あのひどいスウィフトですらバークリーを崇拜した。アディスンとスティールは彼を目して凡ての感嘆に直打する人物だと考へてゐた。彼はこんな譯でたゞに彼の本國に於てのみならず、彼が旅行した大陸に於てすら、いろいろの人々から好愛されたのである。

バークリーは一六八五年にアイルランドで生れ、其所の最良の學校で教育された。そしてダブリンの有名なトリニティー大學で學校生活を終つて、その學校からマスター・オブ・アーツの肩書を貰つた。其後母校の助教となり、特待校友となり、希臘語科の教授となり、之に加ふるに同大學の仕事に關與して重要な職務をとつてゐた。彼の思想は是所で造り上げられた。卽ち初はロックを研究することによつて、後にはプレトーを研究することによつて人物が出來たのである。彼の最初の著述は大學で書かれた。彼は大學の職を辭してロンドンに赴くや、忽にして上流社會から普く寵遇を受くるに至つた。それは彼の性

質が他人から好愛される樣に出來てをつたことと、彼の極めて博學多識であつたこととに原因してをるが、しかし、最後に……最後の原因ではあるが決して小さい原因では無い……彼の風采の美が大いに彼に利益を與へてゐた。彼は當時の最も美しい男の一人であつた。つぎに彼は歐洲の旅行に一段落をつけた後にケリイの牧師といふ非常に有利な職に任命されたと傳云。その後英國議會に於て彼は西印度諸島に、或は少くともバーミューダ諸島に、理想的な大學を建設することの利益を雄辯に論じた爲めに、議會はその常識的判斷を忘れて、彼の爲めに貳萬磅を可決してこの夢の如き大學設立を許した。しかし、賢明にもこの計畫は其後放棄された。若しこれが放棄されなかつたならばテニスンの『王女』の中に出てくる大學の如く、單なる美しき夢となつたであらう。だがこの事柄は如何にバークリーといふ人物が、その禮節と、その眞摯な態度とを以て、人心を動かし得たかを證明する爲めにのみ、こゝに紹介する直打がある。バークリー自身に關して言ふならば、彼は如何なる事情があつても　アメリカへ赴かうと堅く決心するところがあつた。これは恐らく研究上たゞ一人で閑居したかつたからであらうと思はれる。そして、それが爲めにはアメリカが最も好都合の國だと感じたのである。彼は英吉利乃至アイルランドに在つては、その國の社會は彼を飽く迄も愛撫し、彼に富を與へ、彼に名譽ある大きな地位を授け、そ

して彼の爲めに思索と著述の機會を與へることを許さうとしなかつたのである。故に彼は一七二九年にアメリカに赴き、ロード・アイランドの近くに移り、其所で三年間滯留した。そして其所でも彼は教育に興味を寄せた。彼は今日有名になつてをるところのエール大學の、その繁榮の爲めに初めて助力した第一人者であつた。彼は英吉利に戻つてから、彼の必要とするところの閑居生活を得ることを熱望した。そして或る閑寂の地に退隱したいといふ希望を述べた。ジョージ二世は彼を愛し、彼に命を傳へて是非とも僧正の職に就かなくてはならぬ、しかし、若しそれを欲せぬならば己が好む地に住んで差支へ無しといふ事であつた。一七五三年彼は所謂『無苦の死（ユウサネジア）』と稱する無苦な美しい大往生を遂げた。彼の全生涯は何等非議すべき點が無かつた。彼ほどその死を普く惜しまれた者は少い。

今私達はこの人物の哲學を論ずることになつた。彼の偉業は唯物論の破壞であつた。バークリー生存の時以來眞の意味に於ける唯物論は思想家の間に全く滅びて仕舞つた。これはバークリーが唯物論の存在を不可能たらしめたからである。彼は疑ひも無く誤解してゐたこともあるが、しかし、大きな發見もやつてをる。但し是等の發見は既に幾千年の昔、印度に於て先鞭をつけられてをつた事であるから、諸君の目には必ずしも新發見とは映じないかも知れぬが、それにしてもバークリーが是等の發見を大成した時代に於ては、英吉

利人にとりて非常に斬新な事であつたのである。

然らばバークリーは如何なる唯物論を辯破したのであるか。先づ唯物論の意義を考察してみませう。第一に私達はこの世界をたゞに物としてのみ認識し、私達の見たり、聽いたり、觸れたり、或は味つたりする一切の物は皆悉く物質であると思つてをることは明らかに論證しうるのである。そしてこの事實は假りにそのやうに認めておくことが出來る。つぎに私達は心に關してはたゞ之を物質に關係づけた場合に於てのみ認識してをつて、心それ自身に就いては何等の知識も有してをらぬ。故に私達は非物質的の心卽ち靈魂の存在といふことに對しては何等の實證も有してをらぬ。凡ゆる現象は物質的事實に依つて說明し得ると考へてをる。そして是等の事實は第一の場合に於けるが如く明らかに論證し得るものであるが故に、之も亦前者と同樣に假りに承認して置かう。そこで、私達が若し假りに己れといふもの以外に、物質外の一切の物を知らぬとしたならば、信仰問題は殆んど必要が無くなる譯である。英佛に於て敎養のある人達は長期に亘つてこの狀態をもつて滿足してゐた。彼等は彼等のこの問題に關する討究過程に於て、自から急に進行を中止してをるのだといふことをすら心づかなかつたのである。第十八世紀の懷疑主義は萬有は物質に依つて、又、物質に附著してをるところの力其物に依つて、說明されるべきものであるとい

ふ假定に立論したものである。然れどもこの懷疑論は『物質とは何物であるか、物質に關して認識する所如何』と問はるゝや、俄に周章したては無いか。

バークリーは大學の學生であつた間にすら、物質的論證は之をその究極の結論迄延長したならば、唯物論其れ自身が消えて仕舞ふに相違無いといふことを認めてをつたのである。そもそも唯物論の非常に强みとしてをつた所は那邊にあつたかと問はんに、それは人類が信仰の實證に對しては己が直覺の證憑に繋依すべきものであるといふ所にその生命があつた。しかし、その當時ロック以外に何人といへども直覺の證憑的價値に關して眞劍に質問を發した者は無かつた、ロックのことに關しては私達は時を移さずもつと委しい事を知るであらう。バークリーは、ロックが直覺の證憑の一部分をのみ否定したのに反して、その全部を思切つて否定した最初の人であつた。故にバークリーの立場は、大局から見て、現代科學に依つて非常に力强く支持されてをるのである。ハックスリーの語を引用して言ふならば、バークリーの大發見は『私達が私達を唯物論に誘つてゆくところの論證其者に對して、眞面目に且つ嚴密に之を辿つてゆくと、必らずや私達はそれを通り過ぎて仕舞ふ』といふことにある。約言すればバークリーは、かのショーペンハウアーが常に言うてをつた如く、凡ゆる形而下の事相の裏面には、或る形而上の事相が存在してをるものだといふ

ことを、世人に證據だてたものである。

ロックはバークリーに先んじて感覺說を吟味し、且つ第十八世紀の人々にとつては明らかに目に立つ樣な方法でこれを取扱つてをつた。彼の言うたことを簡單に引用すれば私の思つてをることが明らかになると思ふ。卽ち曰く、

「火は熱くて光つてをるもの、雪は白くて冷たいもの、マナは白くて甘いものだと命名されてをるのは、それは是等の物が私達の心に喚起する觀念によつてである。是等の性質は其等の形體に於て同一の物であると普通に考へられてをる。其等の觀念は私達の心の中に在つて、然かも一は他に比して、恰も彼等が鏡に映つた如く相類似してをるものである。故に若し何人でもこれと異つた判斷を下すならば、多くの人達はこれを聽いて非常に無法な說であると言ふであらう。尙又、或る距離に於て暖いといふ感覺を私達に生ずるその同一の火が、さらにより近くそれに接した場合に、前者とは非常に異つたところの苦痛の感覺を私達に與へるものであると考へる人は、火が彼れに與へたこの暖さの觀念が、實際的には火其物に在るが、彼の苦痛の觀念は火其物に無いと斷ずる爲めには、如何なる理由を彼自身が握つてをるかといふことに對して、自ら心づかなくてはならぬ譯だ。雪が私達に白といふ觀念と、寒さといふ觀念を與へるのに、何故苦痛の觀念を與へないのであるか。

何故に白と寒さの觀念のみが雪其物の中に在るのであるか。又雪がその固形的部分の容積と形象と數と運動に依つての外、何故に白と寒さの觀念を私達に與へることが出來ぬのであるか』

ロックは感覺機能によつて取入れた感銘は、その感銘を惹起する物と、殆んど或は全く、類似したもので無いといふ信念を頗る明らかに表示してをる。近世科學は私達に同樣のことを敎へてをる。否、ロック以上に積極的にこれを說いてをる。私はハックスリーの言をこゝに引用する。曰く、『感覺の原因と感覺其者との間には如何なる類似點も存在してをらぬ。否、かゝることを夢想することすら出來ぬ』と、然れども諸君はロックが一つの區別をそこに造つてをることを見るであらう。卽ち彼は、かの苦痛、色其他の物が心の中にのみ存在してをるが、容積・形象・運動は實在であると論じてをる。ロックは近世科學と殆んど同じ距離迄行かなかつたことは事實である。彼は僅かに半途迄進んだに過ぎなかつた。彼は物質の第一性質と第二性質と呼ぶ物の間に區別を認めたのである。ロックの考へに從へば、第二性質に入るべき物は色・音・香・味・暖・寒其外であつたと思ふ。彼の言によれば是等の第二次的性質の物は心以外に何等の存在をも持たぬのである。之に反して第一性質は心の外に存在してをるといふことだ。そしてこの第一次的性質に入るべき物は

長さ・形・堅さ・運動・靜止及び數である。こゝに至つて私達は彼とバークリーとの間に大きな相違點を見出すのである。バークリーは是等の第一性質ですら心以外に存在を持たぬと言つてをる。彼の考へてをる意味に於て、彼は明らかに正しいのである。但しそれは同時代の科學が權威を持つてをるといふ範圍に於てである。私達は少くともこの事實をハックスリーと同樣に積極的の意味に於て考へなくてはならぬ。卽ちロックの所謂第一性質と呼んでをる物の存在は、思索的精神の缺乏した場合に於ては到底思考し得べからざることである。しかし、私達が究極の實在といふことに對して如何なることをも認識することが出來ぬと言ふのが、一つの見方であると共に、物質の究極實在が到底在り得べからざることだと考へるのも他の見方であつて、この二樣の觀察は全く別種の物である。然るにバークリーは如上のことを說いたのである。卽ち彼は何物も心以外に存在するものに非ずといふことを斷々乎として主張したのである。科學はこの點で彼を部分的には援助してをるが、しかし、彼が欲したと思はるゝ樣な仕方で注文通りに彼を救つてはくれなかつた。心と物とはたゞ一つの實在が二つの異なれる相を現じた結果に過ぎぬと考へたのはスペンサーである。スペンサーはバークリーと同樣に、しかし、バークリーとは異なつたところの他の前提に立脚して、頗る大膽にこれを說いたのである。スペンサーは物質は實在を持た

ぬといふ様なことを諸君に説かぬ。彼はたゞ物質は現象としてのみ私達に知られてをると説いてゐる。そして、彼は物質はその究極的性質に關しては、私達の感覺機能に依りて實際認識され得べきもので無いのは自然の數であると斷じてをるに過ぎぬ。しかし、スペンサーはバークリーが一切の實在を否定しただけでは、首尾よく避けんとして避け得なかつた大きな難問に對して、超越實在の眞理と呼べるものを提出して之に處せんとしてをる。スペンサーの超越實在とは、私達が理解することが出來ずしてたゞその儘の姿で信じなくてはならぬところの現象の實在である。だが、この點に於ても、バークリーとスペンサーは非常に強い反對的立場に在る。何故ならばスペンサーは實在の證左は不易不撓に在りと述べてをるからである。宇宙に於ける如何なる現象的の物といへどもそれが永久的に不易不撓で無いから、つまり萬有は非永續的といふ意味に於て非實在的である。雲は實在的であるが、しかし、一時的である。故に雲の實在は一つの現象的實在に過ぎぬ。約言すれば私達はスペンサーの論旨は、この宇宙なる物は現象としての外は非實在的であると論じてをるに外ならぬものと解釋すべきてある。私達は力の遊戯的結果としてのみこの宇宙を知るのである。

バークリーは『幻影新論の爲めに』と題した論文に於てその所信を初めて披瀝した。こ

の小論文集は視覺の非實在的なる所以を證明し、私達が私達の心の外に存在してをると想像した事柄が、心の中に於てのみ見らるゝものであることを教へてをる。故にこの論文は『視覺の錯誤』と題してもよかつたのだ。彼は之について『人智原理に關する論文』と題した書を公にした。そしてその中で彼はこの錯誤說を他の感覺……聽覺・觸覺・味覺・嗅覺等に迄延長してをる。つぎに、彼は、第三の、然かも、彼の最大著述たる『ハイラスとフィロナスの對話』に於て、彼の論旨の全部、卽ち心以外に何物も存在せずといふことを宣言した。私達が感覺に依つて知覺したと想像してをる一切の事柄は、事實上、私達はただ頭の中で是等を認知してをるに過ぎぬのである。私達は物質的の意味に於て、私達自身の外に、如何なる實在をも見出すべき證據を持つてをらぬ。私達の所謂宇宙なる物も、同樣に、上帝の心意の中にのみ存在を見出すのである。故に私達が知つたり感じたりする事は、上帝の私達に及ぼすところの力共物の影響に過ぎぬのである。

バークリーは基督敎信者であつたから、これ以上に一歩たりとも進み出ることが出來なかつた。否、之ですら既に行き過ぎてをつたのだ。何故といへば若し諸君がバークリーの議論をその終點迄追うてゆくならば、その結果は汎神論となるが故である。又、この同一の議論が心の非實在を證するに效果があつたといふ樣なことは、バークリー自身にも、將

た、バークリーが議論を戰はしたところの人達にも、決して起こらなかつたのである。バークリーは唯物論者達につぎの如く言うた。曰く『諸君は物質と運動以外には何物も存在してをらぬと公言してをるが、私は今諸君に對して、諸君が物質と運動とに關して何物をも知つてをらぬといふことと、又、諸君が物質と運動が存在してをるといふ如何なる證據をも私に提供することが出來ぬ事實を指示してみませう』と。しかし、若し是所に他面に於てバークリーと同一力量を持つた推論家がをつたならば、その人は必ずやつぎの如くバークリーに答へたであらう。曰く、『よし、よし。だが、若し一切の事物が上帝の心の中にのみ存在するものとすれば、私達自身も亦その神意の中に宿る影に過ぎぬでは無いか、卽ち私達は眞の實在を持たぬこととなる』と。

私達はバークリーがかくの如き論旨を支持することを敢てし得なかつたことを直に見るのである。彼は既に不可分にして然かも不滅性を有する靈魂の存在を宣言して仕舞つた。そして、この宣言こそは信仰の宣言に外ならぬものであつた。夫は哲學では無かつた。それは彼が他の所で發表してをる觀察とは甚だしく矛盾してをるものであつた。しかし、何人でも己が自身の武器を用ひて我と我身を攻撃しようとするやうなことはつい新しい時代迄は決して無かつたことである。今日私達と同じ時代にあつて、スペンサーは己が議論の

或る部分を引裂いて仕舞つた。そして之に對して他の科學者達はその誤謬を指摘した。それにも拘らずスペンサーの哲學の半分は牢乎として殘つてをる。否、不斷に安全の境地に殘されることとであらう。

他の半分を見出す爲めには私達は東洋に赴かなくてはならぬ。バークリーに先だつたこと數百年、一人の印度の大思想家はバークリーの思索した一切の事柄を既に考へてをつた。然かもその人物はバークリーよりはもつと多く思索したのであつた。彼は靈魂の問題に足たとゞめて仕舞ふ樣なことは無かつた。彼は物質を非實在と說き、宇宙を一つの夢だと公言した。しかし、バークリーよりはもつと終始一貫した態度を支持して、夢を認める物象は等しくこれ非實在なりと宣言したのである。

ハックスリーは叫んで曰く、『ゴータマが近世理想論者の最大人物よりもさらに深く觀察してをつたといふことは實に不思議である』と。亦彼はつぎの如きことを言うたことゝ思ふ。曰く、『彼が近世科學に關する何等の知識も無くして、然かも、第十九世紀の心理學の泰斗と全く同一の深みを以て觀察するところがあつたのは不思議である』と。

バークリーと佛教の開祖との間の相違は、バークリーが宗教的教育によつて課せられた相違のみに過ぎなかつた。故に若し私等がこの二人の偉人が相會して對談したことを想像

し得るならば、必ずや印度の大師匠は英吉利の僧正につぎの如きことを言うたことと思はれる。曰く、『貴僧は眞理に對して大きな考へを抱いてござる。しかし、貴僧の眞理はただ一面のみを見た眞理でござる。貴僧は未だ至大明智に達してをらぬ仁だ。成程、物質は實在を持つてをらぬ。しかし、貴僧が心だと想像してをられる物も亦實在を持つてをらぬ。貴僧が靈魂と呼んでをるところの心其物は、物質と全く同樣に非實在的の物でござる。心は感覺・意志・觀念の累積に過ぎぬ。卽ち言はゞ曉の草に宿つた露の如き果敢なき物でござる。貴僧が靈魂と呼んでをる一切の事物は不滅の物では無い。貴僧が知識と呼んでをる物は或る種類の觸の感じから生ずるものである。しかし、その觸覺なるものは旣に一つの妄想である。假空である。是等の一切の物の裏面にはたゞ一つの實在がある。しかし、この實在を貴僧が認めるのは容易で無い。それは貴僧が所謂不可分で不滅的と考へてをるその靈魂なるものが、實は存在してをるものでも無く、且つ恐らく存在し得るもので無いといふことを悟る迄は駄目な話でござる。だから、先づ私の弟子と成つて御修業なさい』

佛教文學の最も驚嘆すべき典籍の一つは、一切の智識が觸から源を發してをると公言してをる書である。そして此の思想を表現した典籍の眞價は、私達のこの世紀内に於て西洋科學に依つて初めて充分に確認されたのである。私はこの事をこゝで言ふのは、つまり私

達の感覺……視・聽・味・嗅の感覺が悉く皮膚から發達して來たものであることを、實際的に發見したその事實を指定したものに外ならぬ。目・耳・舌……否、頭腦ですら肉體の掩ひを開くことによつて、生成し進化するものであるといふことが證明されたのである。かくの如くにして、一切の感覺が、隨つて又智識が、本然的に實に觸覺から生れ出たものである。そこで、若し私達が觸覺其物がバークリーの意味に於て幻想であるといふその說明を認承するならば……認承すべき筈のものであるが……私達はこの東洋の大先達が第十八世紀の理想論者に比して、比較が出來ぬほど强い立場に立つてをることを見るのである。しかし、一つの點、但しそれは倫理的には非常に重要なものであるが、その一つの點に立つて考へると、この二者は一つである。其所には凡ての人智を超越した唯一つの實在がある。そして人間生活と人間活動は、私達がこのたゞ一つの眞にして永劫的な法則に關して獲得し得る知覺を以つて、一つの法則で、調節されなくてはならぬものである。この二つの距離は事實的には僅かに小さな事柄の中にのみ見出さるゝのである。思想の奥に入つてみればこの二者は全く調和してをる。たゞこゝで再び指摘して置かなくてはならぬのは、深慮な思想は歐羅巴の思想で無かつたといふ一事である。

人智といふ問題に關する近世科學の最近の立場は如何？私達は實際的にはかのバークリ

ーやデカート等によつて取られた立場よりは、少しも進んだ立場に立つてをらぬ。デカートは私達は物質よりも心に關して知るところが可成り多いと言ふた。又ハックスリーは物の本質に關する近世人の論證的事實を悉く綜合して下の如く公言してをる。曰く、『基本的により深く感覺を研究してみるとデカートの論旨は正しいものとなる。即ち私達は肉體よりも心に關してより多く知つてをる。又、非物質的世界は物質的世界に比してより確乎たる實在である』と。しかし、この同じ學者はつぎの如きことを宣言せざるを得なかつた。曰く。『それは比較的に無智の問題に過ぎぬ。何故といへば私達は究極の問題に到達すると、心の實質に關しても、或は物の實質に關しても、思考することが出來ぬからである。物と呼び心と呼んでをる現象は本然的には永續するものでは無い』と。究極實在の問題に適用された人智は悉く積つて全然無に歸してをる。

バークリーの智能が偉大であつた事實は、彼が未だ大學の一學生に過ぎなかつた時に、然かも又、科學がなほその進歩の初期に在つた時代に、如上の事柄の一切を推理した事に徴して明らかである。假令、私達は彼の頭腦が、彼に先だつこと數千年の昔、彼よりももつと遠く、もつと深い所を觀察したところの、かの印度の偉大な人物の頭腦に匹敵すべきものがあつたと認めることが出來ぬにしたところで、少くとも、彼を指さして、歐洲の最

大偉人の一人として認めぬ譯にはゆかぬ。彼は未來の時代のより大きな思想の爲めに途を開くことに大いに努力し且つ成功した。ヒームはバークリーの最も長所とする思想を取入れて之を發達させ、且つ凡ての時に役立つ樣に固定的のものとした。つぎに大きな革新派が現れて新しい哲學を作り出した。そしてヒームが完成しない後へ殘して行つた物を驚くべき完全な科學に發達させたのみならず、さらにバークリーに溯つてその理論を考察し、人智の最も大なる偉業の中に之を見出すことに貢献するところがあつた。又、バークリーは單なる倫理的方途に於て大なる奉仕をなした。彼は基督教的信仰を援助したと同樣に、自由思想の淺薄化することを防止した。實に彼はその方面に對しては前者の場合よりはもつと努力する所があつたのだ。隨つて彼はかの宗教的大進展に必要缺く可らざる自由思想に對して攻擊を試みようとしたのは自然の歸結であつた。しかし、彼は事實上それに對して貢献するところがあつた。彼以後如何なる大思想家といへども、彼以前にあつた樣な意味に於て、唯物論に影響を與へ得た者は一人も無かつた。私達は今なほこの唯物論といふ言葉が、教育の無い人達から、かの正教派の獨斷的教義の信仰と相容れない說に對して、漠然とした意味に於て適用されてをることを知つてゐる。しかし、第十七世紀の唯物論は……物質を實在として考へてをるところの一つの信仰が卽ちこの眞の唯物論であるが……

バークリーの開いた新時代を一機軸としてその姿を縮め、終に滅亡して仕舞つた。しかし、これは惜しまなくてはならぬほどの信仰ては無かつた。何故といへばこの思想が存續したならば人心を非常に狹苦しい領域に閉ぢ籠めて仕舞つたに相違無いから。それは多少冬の氷が流水を閉ぢてその流れを塞ぎると同樣である。バークリーの事業は恰も大きな雪解けの如くてあつた。歐洲の智能は之が爲めに古い桎梏から解放されて、現代のさらに大きな思想に向つてその進みを速めたのてある。

バークリーの文學上に於ける功績は主として麗しき趣味の開發に貢獻したことてあつた。彼は非常に簡素明快な英文を書いた。そしてこの事實は彼が出來る限りプレトーの美しき力と透徹した筆致を學ばんとしたその大望心に基くことを示すものてある。かくの如くして彼は、この希臘哲人の美點に著しく類似した或る物を英語の中に齎した。

ヰクトリア朝の哲學

大思索家――新知識の爲めに近代思想全くその姿を改む

あらゆる文學は波動によつて――着實な流れによつてでは無く、連鎖を爲した行動と反動とによつて――進歩を爲すものである。そしてその歴史のうち中々に興味のある局面は、刺戟が盡きたことの見える局面である。それが盡きるのは、殆んど何れの場合に於ても、種々樣々な原因に基いて居る。が、主たる原因は、才能が、或る一つの題目について、その成し得る總てを成し遂げ終つたといふにあることが最も多い。すると其後に沈滯の時代が來て、その間批評家どもは天才の缺乏について盛んに理窟をこねる。今日がその時代である。沈默を破る聲はやつと二た聲か三聲で、それもその聲たるや小さなものである。ゴッス氏は、文學の森に、遠くへ響き渡る鳥の聲が寂として聞えぬことに就いて、頗る興味ある說を立てて居る。その或る詩に於て氏は、この沈默を博學過ぎることに歸しさへして

居る。

In these restrained and painful times
Our knowledge petrifies our rhymes.

* * * *

If we could dare to write as ill
As some whose voices haunt us still,
Even we, perchance, might call owr own
Their deep enchanting undertone.

We are too diffident and nice,
Too learned and too over-wise,
Too much afraid of faults to be
The flutes of bold sincerity.

かく抑制されたる苦しき時代には

我等の知識は我等の詩を石化す。

＊　＊　＊

その當今なほ我等の耳を惱ます者共の如くに
拙きものを我等敢へて物し得んには、
我等とても、或は、呼び得ん我等の詩をば
彼等の深き魅惑的なる低音調なりと。

我等はあまりに內氣にまた感情こまやかに、
あまりに學問ありあまりに賢きに過ぎ、
あまりに過失を恐るゝこととて、吹き得ざるなり
ありのまゝなる臆面も無き笛をば。

現今の狀態についてのこの意見には固よりのこと幾分の眞理はある。我國の大詩人のうちに、いな、如何なる國の大詩人のうちに、大學者であつたものは甚だ少い。それでそれまでに物された最善な物でも、それを充分に知り得るといふと、學者をしてその爲し得ることすら爲すを憚からしめるやうにする傾向がある。が然し、前揭の詩句を物した作者も、

これが現今の沈滯の――極めて小さな程度に於てはさうであるが――原因だと、眞面目に我々に證言せんと欲するものとは自分は考へぬ。說明は頗る簡單である。より高等な文學といふものは、その題目は何んであらうとも、常に人生の反映である、――その或る一時代の情的知的感情思想の反映である。それは、より高等な文學は、直接に又は間接に、或る一つの哲學を言ひ現はして居る、といふことになる。どんな文學でも、或る種の哲學に依つてか、又は或る時代に於て哲學の代りをして居るもの――即ち宗教――に依つてか支へられて居ない文學で、立派な性質を有つて居るものはありやうが無い。諸君は、文學進化の一般歷史に於て、著作の杜絕は或る信仰の破滅或は變化と時を同じうして居ることが甚だ多いことを見出さるゝことと思ふ。ところでギクトリア朝末期のより高等な文學の狀態の意味するところはそれである。西洋の人間が人生について全然新規な思想を抱き、またそのより古い宗教の多くと其哲學の全部とを捨てざるを得なくなつたが爲めに、人生をもはや昔風に反映することが出來ないのである。西洋で起つた知的變化で、過去五十年間に起つた變化ほど絕大なそして徹底的なものはこれ迄に無いのである。

ほん最近のことである、さうでは無いか。人間一生の歲月に足りぬ時間のうちに、我々の思想全部が變つたのである。諸君は、極東の諸君は、西洋の最善の知識を、丁度一番好

い時に受入れたので、この知識は諸君に取つて新らしいものであると同時に、西洋に取つても新らしいものであるといふことを、諸君は屢々反省することをしないのである。千八百五十年から、當世紀の眞ん中から、出立すると、我々は出立が早過ぎる。千八百五十年には、新知識の種子は熟しつゝあつた。が、それが花咲くことは考へもされてゐなかつた。――芽がやつと地面の上へ出たばかりであつた。自分が述べようとして居る大變化は、千八百六十年と千八百七十年の間に――我々に餘りに近いので、殆んど昨日のやうに思はれる十年間に――主として起つたのである。その時以前に大詩人の大著作は出來てしまつたのであつた。――テニスンとブラウニングとロウゼッチとスキンバーンとの成功は全く遂げ終へられてあつた。ヸクトリア朝は文學に於てその最善を盡くし終つて――カアライル、ラスキン、フルウド――あらゆる大論文家と大散文家とはその名聲を博し終へてゐた。ところが最後の四半世紀は、より高等な文學に就いて言へば、殆んど無言である。そしてこの沈默の主要な意味は、萬人の信仰が西洋の人心がそれまでに受けたうちでの一番偉大な衝動の爲めに多いか少いか悉くその影響を蒙つたといふことである。詩人は歌へないのである。思索家は感情的生活に關して言ふべき何物をも有たぬのである。――その生活は今なほ新知識の大震動に戰きつゝあるのである。ジョージ・メレディスを除いては、この詩

人に就いては自分は前の講義で諸君に語つたが、あれを除いては、當代の人心を最も深く動搖させて居る問題に對して、その唇を開いた詩人は他には一人も無いやうである。

恐らくは諸君のうちには、今自分が述べた年月の近いのに驚かるゝ人があるかも知れぬ。といふのは、諸君のうちには確に知つて居らるゝ人がある、ダーキンは千八百九年に生れ、スペンサーは千八百二十年に生れ、そしてハクスレは千八百二十五年に生れたことを、―即ち、何れも一寸見ては當世紀の最初の四分の一の年代の人であることを。然しこの人達の作品で現世紀の央ば迄に世に現はれたものは一つも無い。その大部分はそれよりずつと後に出た。初に口をきいたのはスペンサーであつた。が、主として科學的評論に依つてであつた。氏の『第一原理』が完成したのはやつと千八百六十二年であつた。ダーキンの『種の起原』は千八百五十八年に印刷された。ハクスレの有力な書『自然に於る人間の地位』は千八百六十三年に現はれた。だからいづれも頗る新らしいものといふことは分るであらう。ところで千八百六十年と千八百七十年の間に、スペンサーの哲學の最も重要な部分が――即ち、第一原理と心理學と生物學とが――出版された。ダーキンの著作とハクスレの著作のうち最善なものが多くの國語に飜譯されたのであつた。ワレスは種の地理的分布についての著作を出版した。ベーツは保護的模擬に關してのその貴重な論文總てを出版

した。ゴルトンは遺傳に關してのその論文を公表した。ラボックとタイロアとは人類學にその貢獻を爲した。新地質學、新古生物學、新植物學及び新化學が建設された。若し自分がこの十年間の題目に諸君を稍〻長く引留めて居るやうに思へるならば、或る一國に起つたただの知的運動を諸君に想ひ出させて居るのでは無くて、自分はその十年の間に津浪の如く全歐羅巴を掃蕩した知的運動を諸君に想ひ出させて居るのだ、といふことを記憶してゐて貰ひたい。特に、その絶大な學問機械を有ちその自由精神を有つて居る獨逸は、この新思想を受納して、その新觀念をば、英國の多數の科學者のそれに優ろほどの、緻密なる理解と精確なる詳細とを以てして、發達させた。例を擧ぐれば、ヘッケルの大著作を見て見給へ。佛蘭西がそれに續いた。獨逸よりも遠慮勝ではあつたが、異常な結果を――嘗にその教育系統のみならず、その無比な文學のあらゆる部門に影響を與へた結果を――齎した。そして伊太利は、他の如何なる國も之に匹敵の出來ない進化的心理學に於る諸研究に於て、この心意の新進行にその位置を顯著ならしめたのであつた。この新觀念の刺戟の下に亞米利加に於て爲された偉大な科學的進歩に就いては自分は何も言ふの要は無い。西洋世界全體が千八百六十年このかた、その知的中心地に於て、この新哲學を實地に採用し來つて居ること、從つて餘程の程度まで教育の建て直しを爲したこと、また、或る哲學の

教授が、疑ふべくも無く眞實に、進化的哲學ならぬ他の見地からして書いた歴史或は科學の著作はどんなものも、——それを書く人の才能は如何に大なるものがあらうと——數年ならずして忘れられるに決つて居る、と最近公言したことを、諸君に述べれば充分であらう。

さて自分は、最善な部類の未來の文學に就いても、同じ評言が、幾分それを加減して、適用出來はせぬか知らと思ふ。これが文學を襲うて居る靜寂の理由なのである。大なる心意の人は誰しも、生きて行かんにはその作品はこの新時代の思想を現はさなければならぬ、と悟つて居る。が然し、その思想に通曉するには、確に時間がかゝることであらう。その上また、情緒的混亂の時代はまだ終つてはゐないのである。今生長しつゝある青年の方だけが、この世紀の著作が與へる充分の知的利益を得ることが望めるのである。さうなるまでに、堆積されて居る事實の素敵な嵩を消化しまた同化する手段を發見しなければならぬのである。文學に於ける最後の結果は、詩に於ても散文に於ても、全然新らしい奇異な或る物であるに相違無い。多分諸君には存生中にそれが見られるであらう。この新思想のうち、より單純な原理と、文學に關係してのその意義と、を簡單に述べて諸君の一興を催すことにして見よう。恐らくは『進化』といふ語ほど諸君の耳に聞き慣れた語は他にはある

まい。が、その現今の意味での此の語は、ハーバート・スペンサーが初めて使用したのだといふことを知つて居る諸君は多いかどうか自分は疑ふ。そしてこの新哲學の原理をば、學問的にか或は通俗的にか、說明するに今多忙を極めて居る幾百の敎授と幾萬の著作家との間で、その英國の開祖だけがこの系統をその全體に於て我々に示して居るのである――だからして、近代の人間思想の變化を充分に眺めるには、この人を見るが一番よからうと思ふ。

進化哲學の大創設者達についての奇妙な事實は、その中の唯の一人も、初めそれに志した職業を追うて行つたものは無い、といふことである。スペンサーは、どんな學校にも入れられずに、主として家庭で敎育を受けたのであつたが、土木工學を硏究して、實際二十五の年齡までその業務を續けてゐた。尤も、驚くべき數學的併びに論理的能力を氏が示した經濟學及び他の事柄に就いて、批評雜誌へ論文を時折寄稿することはした。到頭氏の自然的傾向が、土木工學を棄てなければならぬやうにしたので、氏は雜誌「エコノミスト」の寄稿家、いな寧ろ一記者、となつて、その最上の才能を働かす好機會を得た。世界にとつて幸運なことに、その衣食住を頗る簡單にして居れば、獨立して暮して行かれる程の、僅かながら財産を氏は有つてゐた。その經濟學の硏究と、社會學の硏究とをやつて行つて

居る間に、哲學の新系統の思想が初めて氏の念頭に浮んで、それまでは顧みられなかつた或はただ少ししか開拓されてゐなかつた方面へその心を向けさせた。東洋哲學では遠き昔に認められて居つたが、西洋の科學には何等明確な形に於て知られて居なかつた所の宇宙の事實を――即ち、この宇宙は交互に出現しては消滅し、消滅しては出現するといふ事實を――氏が始めて知つたのは高等數學の研究に依つてであつた。ラプラースの星霧假說を科學的知識の牢乎たる根柢の上に置いて、それを學說では無く、幾分の必要な變更を加へて公認の一事實たらしむるに至つたのは氏が始めてであつた。軈て氏の心に、幾多の太陽と幾多の世界との一宇宙を造り出す法則は――生命と思想とを造り出す法則、及び他のあらゆる法則は――その一般的關係に於て、事物を産み出す原因として統一されなければならぬものであるといふ確信が發展して來た。そしてこれが、一切の法則は哲學的に一つの法式に――スペンサーの言葉遣ひでは、全宇宙の來歷が二三行の文句の中に含まれる彼の進化の法式に――縮めることが出來るといふ、更に偉大な悟りの端緒であつた。氏は之に――自己の健康と能力次第で、それを完成するまで生きて居ることが出來ようと見積して――その一生の殘部を哲學の一新系統の完成に捧げようと決心した。これは最上無上の克己心の頗る稀な且つ美くしい實例であるから、此事實を自分は諸君に述べようと思ふので

ある。氏は、自己の意見は必らずや多大の反對に遭ふ事であらうから、生存中にはその意見を公平に聽いて貰ふ事すら望むことは出來なからう、と知つて居たに相違無い。そこで、いやしくもこの大事業に從事するからには、非常に質素な生活をしなければならぬ、結婚は一生せずに居なければならぬ、社會から隱遁しなければならぬ、そしてその時間と健康と體力との總てを自己の系統の作成に與へなければならぬ、と思つた。その上、その系統といふのは、積極的人智總てを同格に置くことに――人間が知つて居る一切の事を秩序正しく分類して綜合することに――外ならぬのであつた。固よりの事、これはどんな人間もが唯の一生涯のうちに成遂げ得るよりももつと多くの讀書を意味することであつた。――だからして多大の助力が、しかも高級な科學の費用のかゝる助力が必要になつて來るのであつた。が、彼は決して困難に――腦病に罹つた時にすら――その僅少な資本が危うくなり、假令それを首尾能く書いても著書の出版が出來ない惧があつた時にすら――畏縮はしなかつた。十年或は十五年の間といふもの、氏の著書の一冊も、その出版費を取戾したものは無かつた。が、氏の勇氣と忍耐とは竟にその報酬を得た。そして後年には、既刊の主要な書卷からして、可なりな收入を得始めた。いつか、氏の苦心を寫した物語を出版したなら、驚嘆すべきロオマンスを讀むやうであらうと思ふ。今のところ、三十六年の後、不

健康にも拘らず、またありとあらゆる障碍にも拘らず、その偉大なる事業が全く完成されて、その著書と共にこの哲學者の名聲が、歐羅巴諸國に萬世に樹立した、と言ふだけで充分であらう。

窮極の問題に――何が故に、何處へ、そして何處からの問題に――關しては、ダーキン後の時代はダーキン前の時代より少しも賢明になつて居らぬ、と世人は云ふ。それは眞實である。然し、スペンサー及び氏を助けた多くの科學者がその仕事を始めてからこのかた、西洋は宇宙に就いてまた人生に就いて全然新らしい觀念を抱かざるを得なくなつたことが分つて居る。宇宙に關する一切の知識を綜合して、スペンサーは次記の事實を十九世紀へ提供した、――

原子よりして宇宙に至るまで、あらゆる形態は、一箇の大なる法則に――進化の法則に――據つて展開しまた消滅するものである事。

一切の生物の物質は、或は少くとも一切の生物の基礎は、動物であらうが植物であらうが、一つである事。

動物と植物との限界線は、存在するものと久しく想はれてゐたが、確定することは出來ぬものである事。有生物と無生物との限界線は明白には定められぬ事。――といふのは、

我々が生きて居る物と、生きて居ない物と呼ぶ物との相違は、決して質の相違では無くて、程度の相違に過ぎぬからである。

人間或は如何なる動物でも、その心は肉體がさうのやうに一つの進化であつて、それは確に全く神經系の發達如何に賴るものである事。その證據には、人間のどんな思想でも、どんなに高尚であらうとまたどんなに複雜であらうと、それを心理解剖に依つて還元して單純な感覺と爲し得るからである。

が然し、感覺そのものは、依然として全然不可解であり、また常に不可解であらねばならぬ事。

物質、運動、空間及び時間はこれまた全然不可解なものである事。

最後に、現今の知識が我々に判斷させて呉れるだけの處では、物質と力、實體と心は、永久不變な一つの實在の、種々異つた樣式或は表現に他ならぬ事。實在は永遠といふことで計られるものである。ところがこの計り方によると、宇宙に存する如何なるものも、宇宙そのものすらも、永遠では無いことが分る。斯くして現象には相對的な實在性はあるけれども、一切の形態は、人間が人間の狀態である間はそれに就いて何物をも理解することが出來ない或る力の、過ぎ行く一時の表現と思考しなければならぬのである。

自分は、こんな確信が古い形式の教義を、宗教的教義を、信ずるに慣れてゐた人々の心に、起こさゞるを得ぬ變化はどんな偉大なものであるか、ただそれを諸君に示さんが爲めに、數多の眞理のうちからただ一般的な眞理の二三を此處に諸君に述べたのである。如上の科學的意見は一種の一元論である——萬有は一であるといふ學說である——といふことを諸君は認めたに相違無い。この一元論と他の一元論との差違は、一つは、これは全然科學的事實に根柢を有つて居ること、また一つは、純然たる宗教哲學に於て神祕と呼んで居るものは、これでは科學的過程及び法則が大なる程度にまで取つて代つて居ることである。自分がそれへ到達したいと思うて居る點へ行けば、スペンサーがその叢書の第一卷で爲して居るその哲學の解說は、多分スペンサーはその書卷を書いて居る時分には研究して居なかつたらうと思へる東洋の甚深な哲學に、著しく類似して居る、といふことである。一元論は、その或る形式では、西洋の最善の宗教的思索家に不賛成の眼を以て見られて居はしないのである。それで此綜合哲學は最初は修養ある信仰家にすら能く受入れられたのであつた。その時このかたこの哲學の原理は、スペンサーの第一卷にそれを我々が殆んど見出すやうな原理は、歐羅巴の如何なる部分に於ても、教育ある階級の人達の確信の一部となり來つて居る。ところが其の後に現はれた書卷に於て、氏の系統は多大の憤怒と反抗とを

惹起した。醫學に革命を起した生物學の一卷は、これは世間は心よく受入れたが、氏の全著作中の最大なるものたる心理學は、知的社會に於て今なほ劇しい論諍の題目となつて居る。その議論が始つて居る點は二つあつた。個々の靈なるものの存在を全く否定したのが——自分は『全く否定』といふ、氏の系統は絶對に靈魂説に何等の餘地を與へぬからである。——その否定が第一の點であつたことは自分は殆んど言ふを要せぬ。然し、第一原理の一元論に見出さるゝどんなものよりかなほ一層東洋的な學説を見ては、この新説を喜んで受入れようとする心理學者すら、反抗した。スペンサーは、感覺と思想との謎の多くは、その感覺なりその思想なりを經驗して居る人間の現在の生活とは何等の關係があるものでは無い、——この謎はただ遺傳といふ光に照らして讀むべきものである、と大膽に述べた。本能と直覺とは、その個人のものでは無くして、過去幾生涯の相傳である。本能は實際過去の生涯の記憶である——複合的記憶である、即ちスペンサーがもつと科學的にそれを呼んで居る言葉でいへば『有機的記憶』である。この説は、スペンサーの學説總てのうちで最も興味あるもので、且つゴルトン併びに他の人々の研究に依つて見事に支持されて居るものであつて、この綜合哲學の系統をば、殆んどあらゆる重要な點に於て、東洋哲學と並行せしむるものである。がこの系統は、自分は殆んど言ふ要もないが、全く獨立の研究に

依つて、また、全く科學的事實に基いた確信に依つて、到達したのであつた。現在までは、スペンサーの心理學の學説は有力なる後援を――ただ一部分のことも屢〻あるが、然しベーン、サリ、ゴルトン及び他の二三の英國の科學者の如き知名な士からしていつも同情的な後援を――受け來つて居る。が然し之に反抗して居る權威のある力がある。佛蘭西では、氏の最善の説明者はリボーである。然し氏の辯護者のうち最も熱烈なのは獨逸のシュナイデルである。自分は、心理學の一部分と、社會學のうち宗教問題を取扱つて居る彼の部分とを除いて、スペンサーの哲學は窮極な哲學として一般に受納されて居る、と斯う最後に言うてよからう。

固よりのこと、諸君に哲學の講義をするのは自分の領分では無い。自分は文學の講義だけすべきである。だから、文學に於るその關係を示すに役立つやうな評言だけを、この新哲學に就いて自分はする事にしよう。既に諸君は了解されて居るであらうが、この新哲學は、西洋の社會へ人生に就いての――人生が文學の本來の題目なのだから――全く新らしい思想を齎らしたが爲めに、非常に有力な衝動をあらゆる創造的文學に與へたに相違無い。だが、この哲學が文學に影響を與へたと同時に此哲學者がまた影響を與へた。と言うても、自分は、スペンサーが文體の何か新らしい形式を始めた、といふつもりでは無い。尤も氏

の文體は、嚴正な英語が達し得る限りの完全なもので――批評社會の如何なる人と雖も、その缺點を發見することは出來ずに居る。それは全然何等の裝飾も無い、力強い簡明な文體で、偶〻その心理學の第一卷の結末に見るやうな、修辭的佳句の水平に昇ることに滅多に無い。その上に、素敵に壓縮されて居る。スペンサーの一頁には、ハルトマンやショーペンハウエルの二十五頁にあるよりも多くの思想がある。が、これがスペンサーを極めて難讀なものたらしめる。氏の文體に小言を言ふ者は、氏の思想に隨いて行けない人達だけである。文體は頗る平易である。が、思想は非常に難解で、あれほど徐々と讀むことを要求する著作者は一人も無い。だからして、スペンサーの著作が英文學に影響を與へたのは、何等個人的文體の然らしむる所では無い。氏は全く別な方面にそれに影響を與へたのである。氏は幾千の語に新らしい意味と新らしい價値とを與へたのである。それは多分、氏が初めてそれに與へた特別な意義に於てのみ今後引續き使用せらるゝことであらう。十八世紀の思想を以てスペンサーを讀む者は、長い準備無しには、全く氏を理解することは出來ない。科學知識の擴張は、非常に多數な新語を我々に與へるよりも、もつと多くの結果を齎らした。多數の古い語の意味を變更したのである。スペンサーの書卷のやつと一冊に通曉するだけに氏を研究しても、その人は必らずその後その研究の爲めに影響を受けるに相

違無い。――その人がその後書く眞面目な文は、一頁々々無意識にその影響を示すことであらう。英國の新聞は、またそれよりも多分餘計なぐらゐに米國の新聞は、スペンサー文學の爲めに大變な影響を蒙つて居る。實際、亞米利加には眞摯に氏を研究して居るものが少々居る。が、經濟學若しくは社會學的な事柄に就いて文を草し得る、教育ある青年は殆んど悉く、自己の語彙を强めんが爲めに、その問題を論じて居るところだけのスペンサーを讀む。そしてその結果は新聞や雜誌を讀んで見ると、認められる。

ハクスレの影響も亦著しいものであるが――全く別方面に於てである。氏は、スペンサーに次いで、三偉人中最も興味ある人物である。スペンサー同樣、氏はそれをさせようと思はれて居ない職業を執つた。氏は、僅かながらも收入があるといふ、その年長者が有つて居た便益は有つてゐなかつた。氏は全く無一文で生涯を始めた。氏自らの傾向が、スペンサーが實際成つたものにならざるを得ざらしめたのであつた、――卽ち、土木工學者に。――これは、この兩人に同一樣の能力が殊に發達してゐたことを示すから、誠に興味のある事實である。が彼はその資力ではその職業をやつて行くことは出來ぬことを知つた。そこで氏はそれを廢めて醫學を研究し、所謂『高等教育』なるものは少しも受けずに、餘程年齡若く業を了へた。免狀を得て醫者になるのも一事であるが、實習と好機會とで醫者に

なるのは全く別事である。若年の醫者で非常な天稟を有つたものでも、傳手があるか金があるかしなければ、倫敦では直ぐ餓死しなければならぬ。ハクスレは醫局に坐り込んで居て、患者の遣つて來るのを待つことは到底も出來まいと思つた。そんな餘裕は無かつたのである。田舎の町へ行つたところが、同樣な困難に氏は遭遇しなければならなかつたであらう。醫者の數が多過ぎてゐたのである。そこで氏は上分別にも海軍省へ行つて、政府の艦船の何かに醫師として採用されんことを乞うた。幸にもその地位を得ることが出來た。そして後年科學的探檢に出て行く一船に乘つて海外へ出た。言ひ換へれば、氏はダーキンが獲たと同じ好機會を享有したのである。航海中氏は勉强した、そして博物學上夥多の異常な觀察と研究とを爲し、時折種々な科學雜誌へ論文を書いて送つた。三年間不在の後歸つて見ると、その著作の或物は印刷されて居り、しかも科學者の興を大いに惹いて居つた。それから氏は、海軍を辭して倫敦で職業を求めるといふ非常に大膽な行動を取つた。そして殆んど氏自らの期待にすら反して、氏は成功したが、自分が或は可能だらうと想像してゐた方面とは全く別な方面に於てであつた。氏は古生物學の――それへ氏は特別な注意を拂つたことの無い、そしてそれを教へる柄では無いと自分でも思つた題目の――大學教授の地位を提供された。彼の有つてゐた古生物學の知識は、身躬ら觀察した知識だけであつ

て　觀察があらゆる教師のうちの最善なものであることは其時氏は知つてゐなかつたのである　が氏には躊躇する暇は無かつた。こんな好機會はまたと氏に出て來ぬかも知れぬ。氏はその椅子を受け、異常な成功を以てそれを占め、斯くして十九世紀の否、前の如何なる世紀の如何なる英人にも見ぬ花々しい科學的生涯を始めたのであつた。といふのは、それは殆ど純粹に實地的な科學の徑路であつたといふことを記憶して居なければならぬ。この青年醫師は、その當時の恐らくは最大なる古生物學者となり、博物學と比較解剖學との全體の礎に最大の權威となり、その上に多くの六つかしい分科を有つた地文學と物理學との一權威となり、夥多の大學の講師となり、どの大學の卒業生でも無かつたのに多くの大學々位の受領者となり、英國科學協會の會頭となり、榮譽と共に社交的に無限の勢力ある人となる、運命を有つてゐたのである。恐らくは、科學者のうちで、氏に優る成功の一生を送つたものは一人もあるまい。氏は、金をつくる時間が無い、また金をつくらうと試みもせぬ、と毎度言つたが、それでも九萬五千磅がものを――殆んど何の努力もせずにその手に入つた金を――殘して死んだ。氏の努力は、氏の眞の努力は、全く、科學と、教育と、政治及び社會の改革の、方向に於てであつた。氏は神學に反對し、且つ耶蘇教の迷信を非難するに、その一生の多年を費しはしたが、それでもあらゆる名譽を以てしてエスト

ミンスター・アベに葬られた。僧籍にある氏の敵すら、氏の誠實を賞讃し、その偉大を認めたからであつた。そして氏は文學者ともまた批評家とも決して公言はしなかつたけれども、氏がさうしようと思つた時は、その當時生きてゐた批評家で、文學批評に氏に勝して偉大な影響を與へたものは一人も居なかつた。多分氏は、採つたなら、どんな職業にも偉大になり得たのであらう。十五年前には誰しもこの恐ろしく實際的な科學者が、詩人にならうなど想像し得なかつたであらう。――が、テニスンが死んだ時、記念の詩起草の依頼を受けたのはハクスレであつた。そして彼は莊嚴な詩を作つた。氏自らの碑銘は頗る興味あるものである。――といふのは、ハクスレの墓の上にでも、斯んな碑銘を置くを許すやうに、如何に洪大な變化が宗教思想の上へ來たものか、それが分るからである。――

And if there be no meeting after death,

* * * *

If all is silence, darkness,

Yet't is rest;――

Be not afraid, ye loving hearts

that weep, ——
For still He giveth his beloved sleep,
And if eternal sleep He wills, ——
So best!

「死後また會ふことあらずとも

* * *

ただ靜寂と暗黑となりとも、
なほ休息にあり。——
恐るゝこと勿れ、泣き悲しめる
いとしき者共よ。
その愛する眠になほ彼が與へ給ふことなれば、
また彼、永久の眠を欲し給はゞ、——
さらば最も可なり！」

ハクスレはダーキンよりも偉大であつた——知識に於て、知力の力と迅さに於て、そし

てただスペンサーのそれにつぐ綜合の偉大な能力に於て、より偉大であつた。身を亡ぼすとの友人達の警戒にも拘らず、あらゆる反對を突き切つてダーキン說を一般に承認させたのは、氏であつた。氏ほど輿論を恐れぬ人はこれまで一人も無かつた。そしてその勇氣の結果はいつも成功であつた。疑も無く、意志の力が氏よりも弱い人であつたなら、身を破滅の境に陷れたであらう。然しハクスレには、氏が輕蔑して居た僧正大僧正達すらをも魅惑して、議論後に彼と握手せざるを得ざらしめる或る物があつた。民衆の運動に――これは修養ある人だけが抱いて居る意見に反對するよりも、反對していつも危險の甚だ多いものであるが、それに――反對した時すら、ハクスレは決して身を害ねはしなかつた。例を擧ぐれば、救世軍と稱する彼の熱狂的な運動が英國でその頂點に達して居た時、ハクスレは、殆んど自分獨り、タイムス新聞幾欄に亘つて、雄々しくもその計畫全體を非難して、その集團の金櫃へ頗る多額の寄附金を入らせない結果を來らしめた。その死ぬる時分すら彼は論諍に從事して居たのである。

當然この論諍はハクスレの事業のうちで永久的興味を有ちさうな部分では無い。それは主として、氏が完全に論理を驅使し得たこと、氏が廣汎な知識を有つて居たこと、を示すものとして研究の價値があるのである。氏はただ昔の古典的な哲學者だけで無く、教會の

神父達のものを、原文で讀んで、何處から何處までもそれを會得してゐて、後者をばその神學上の論敵の最善なものよりも、遙かに能く知つて居ることを時々示した。が然し我々は氏の科學上の論文に、また――宗教學說のあらゆる重要なものを、科學的知識に於るその關係に於て、論述して要を得て居る彼の驚嘆すべき『進化と倫理』といふやうな――論爭の爲めに書いたのでは無い哲學的論文に、より多くの興味を有つのである。哲學者として氏は絕大な勢力を有つてゐた。氏はヒュームとバークレが宣言した眞理を堅固な科學的根柢の上に置き、兩者の誤見を削除して、この二大思索家の研究を復活した。佛教哲學が或は有つて居ると思はるゝ價値に、科學的に、初めて注意を拂つたのはこれまたハクスレであつた。そして一般に言つて、哲學研究の手段と價値について、學生に對して氏ほど賞讃に値する助言を與へたものは他に一人も無い。これは、氏が教育の問題についての幾多の講義中、青年思想家に與へた最大な利益の一つであつた。

氏自らの哲學に就いては、一つの系統の創立者卽ち開祖としてよりは、寧ろ大なる教師兼解釋者として考へなければならぬと思ふ。が、その哲學上の位置に就いて少しく語ることが出來よう。アグノスティックといふ語に、現今あれほど名高いものに氏が爲したあの意味を――尤も、それには所謂『イズム』が餘りに多く附いて來て居るから、もう直ぐに

流行らなくなりさうに思へる語ではあるが――あの意味を與へたのは氏であつた。ハクスレが初めてこの語を用ひた時は、それは新らしかつた、そしてその當時は役に立つた。ハクスレは疑惑といふことを一種の宗教へ實際に高めたのであつた。一體、殆んどあらゆる宗教は信仰を敎へるものである――證明無しに信じなければならぬと敎へるものである。ハクスレの敎は正しくその逆であつた。證明の出來ないものは悉くそれを疑ふのが、あらゆる正直な人の最高の義務であると氏は公言した。氏は、その面白い自傳に、トマスといふ自分の名に就いて、その兩親がどうして『自分がいつも至上の同情を感じてゐた』あの特別な使徒の名を特に選んで自分に附けたものか、了解が出來ぬというて居る。かの使徒セント・トマスは、『疑の使徒』と何時も云はれて居るほどに、疑ふことで非常に有名であつたことを諸君は知つて居る。が然しハクスレの疑惑は、甚深な宗教的なものであつた。科學が氏をして敎義に信仰を失はざるを得ざらしめたのではあつたが、それは氏の宗教的觀念を滅じはせずして、むしろそれを深め且つ擴めた。敎義は、それが眞理で無いから、そして宇宙の神祕の眞實さは敎義がそれまで夢想してゐたどんなものよりか、無限に多く崇敬に値してゐたからこそ、氏には價値の無いものに思へるのである。淺薄な懷疑に對して――己が不信仰の理由を提供が出來ぬやうなそんな無智な、あの一種の不信仰に對して

――氏ほど苛刻な人は一人も無かつた。そして氏よりもより少く唯物論者であつた人は一人も無かつた。といふのは、スペンサーすら、ハクスレが爲したほど驚く可き有力な方法て、物質の不可解を示しはしなかつたからである。知識無くして肯定することを拒みまた否定することを拒んで――唯心論者でも無ければ唯物論者でも無くてゐながら、ハクスレは然かもなほ、『永遠といふ深淵の前にその死者と二人きり立つて居るものは一誰も窮極の事柄に關して單に消極的な評言は發し得られまい、と氏が言うて居る彼の有名な文句に、氏は我々を考へさせる或る物を殘して居るのである。

　ハクスレの文學的感化力は全く獨特なものであつた。第一に、氏の文體は驚く可きものである――非常に深奥なそして非常に科學的な題目を取扱つて居る時でも、他に比類の無い程、簡明で力强い文體なのである。それは長く英國著作家の賞讃を博し來つて居る。でもハクスレは實際決してそれを修錬したのでは無かつた。氏には文章を書きなほしたり、訂正したり、彫琢したりする時間が無かつた。――氏は生の儘うちやつた。だが、生ではあるが、驚く可きものである。氏の經歴を――その文學修養の缺乏を、その恐ろしく多忙な生活を――知つて居るから、友人達が驚嘆して『何處で君はその文體を得たか』と尋ねたのも無理は無い。氏は率直に『あのえらぶつ、ホッブスから』と答へた。ところで、實

際、ハクスレの文體には、十七世紀のこの大哲學者のあの立派な文體と共通な點が多く在る。固よりのこと、ホッブスはハクスレの思想を、文藝復興期の言葉で言ひ現はすことは出來なかつたらう。が、ただの論理の事柄には、ハクスレの相手と呼ばれ得る英國の著作家はただホッブスだけである。他の點に於ては、ホッブスはハクスレに比べて、遙かに小さな心意の人であつたことを記憶してゐなければならぬ。——ホッブスは全然何等の數學的能力を有つてゐなかつた、數學に嘴を容れようとした時は途徹も無い過失を遣つた、そして決して非常に偉大な科學者にはなり得なかつた人である。が然し彼は、その當時には、非常に有力な思索家であり、しかも無比の著作家であつた。そしてハクスレは、ホッブスに存する文學的價値を認めて、優れた文學的判斷を我々に示した。

第二に、最も困難な最も複雜な題目を敎へるのに、簡易な日常の物の言ひ方が、どんなに價値のあるものかをハクスレは世界に示した。氏は學術的な文體は、專門家に向つて述べる時か、純科學的出版物に或る專攻事實に就いて書く時か、だけ使用した。が、氏は——講演者として或は隨筆家として——その學生に向ひ或はその公衆に向つて語る時は、その用語を出來る限り平易にした。氏は屢〻讀者に對して、諸君が氣安く對談して居る間に爲すと同じやうに、打とけて談話をする。そして氏の文體の妙趣の大部分は、讀者を元氣

づけるこの親しみが與へて居るのである。氏はその聽衆を呼吸もつけぬほど興味を感ぜしめることが出來た。が、氏は氏の子供等に話をしてきかせるやうに、平易に話すのであつた。大科學者で前に之を首尾能くやつたものは無かつた。然しハクスレはその有名な學生用敎本を書く時すら之をやつた。氏の生理學敎本、氏の地文學敎本ほど平易に書いてある書物は他には無い。――御伽話だつてその文體に於て、この二書の或る最善な頁ほどやさしい言葉で書いてありはせぬ――でもこの二書は今なほその用語に於てその種類のうちで最善なものである。『感覺の純正哲學』とか『感覺と感覺を生ぜしむる機官』とかいふやうな、もつと深奧な論文を見ても――その文體は、文を書いて居る人の文體では無く、諸君に談話をして居る人の文體では無いかと諸君に思はせる。

だからしてハクスレは、啻にその文體に依つてでは無く、なほその上にその方法に依つても、ギクトリア文學に頗る重要な關係を有つて居る、と言ひたい。今後の科學者は氏の模範に學ぶ所あつて、その敎へんとするものを出來得る限り平易な言葉で傳へるやうにしなければならぬ。學生用の書物を、讀者は二三分置きに字書を見なければならぬやうに學術的に書くといふ、舊式な方法は實際今は無くなつて居る。そしてそれを無くしたのはハクスレであつた。

まだダーキンに就いては語つて居らぬ。自分は氏をこの三幅對の最後に置いた、それは單に、この講義は文學に就いてであり、ダーキンの文學に於る影響は全く間接なものであるからである。氏は近代思想に多く影響する所があつた。然し、スペンサーやハクスレと違つて、我々は氏を非常に偉大な作家と呼ぶことは出來なからう。非常に偉大では無くとも、それでも氏は甚だ立派な作家であつた。――氏の『博物學者の航海』は、ただ一つフムボルトの旅行記を除いて、これまで書かれた一冊本の旅行記の最善なものである。がそれにも拘らず、氏は文學的な文章に、何か頗る特別なものを、或は高貴なものでも、發展させたとは云ふことは出來ぬ。我々が氏を考へなければならぬのは他の關係に於てである。スペンサーの如くにまたハクスレの如くに、氏はその家族の希望にも自己の期待にも反して著名な科學者とならざるを得なかつたのであつた。氏の父は初め氏を小學校へ送つたが、其處で何も覺えなかつたと氏は自白して居る。昆虫を――甲虫や、地虫や、教師の胸を惡るくさせる他の地を這ふもの――を蒐めてそれを箱の中へ入れて置くといふ汚ならしいことをする癖のある、愚鈍な子供だと考へられてゐた。その學校の校長は――愚鈍な男であつたらう――この子の遊び方に就いて頗る不快な事をダーキンの父へ書き送つた。そこで氏の父は其校長の言ふことを信ずる氣になつた。ダーキンは出來得る限り早く、醫學を研

究するやう、そして蜘蛛や甲虫なんかを蒐めることを止めるやう、嚴しい命令を受けてエヂンバラ大學へ送られた。氏は勉めてその命令に從はうとしたが、血を見ると胸がむかついて、解剖教室に居るに堪へなかつた。そこで到頭父へ手紙を送つて、醫者になることは自分にはどうしても不可能であると知らせた。そこで父は僧侶になれと命じた。この計畫は全く意想外の障害に遭遇した。この青年は心立が優しいと共にまた嘘がつけぬ人間であつた。それで、教義その他のものを調べて見ると自分は良心に恥づること無く本氣に僧侶になる氣にはなれぬ、と報道せざるを得ぬ心になつた。そこで氏の父は、此青年が本來遊戯が好きで、酒飲仲間と往來して居るので心配をしてゐたから、暫くの間失望した。父は僧侶生活の有利なことを引續き息子に說いた、そして到頭チャールスがそれに從ふ氣合を示すまでに勸誘に成功した。氏は其後ケムブリッヂへ送られた。そして氏の父は氏が教會に入ることを當てにして居つた。が然しダーキンの未來はその大學での友人交際が決定した。科學の課程を履んで居る學生のうちに、ダーキンが生來博物學が好きなのに大いに同情し、その誠實な友人となり、その勉强に感化を與へたものが數人居つた。が然し氏の勉强といふは、書物に依るのでは無くして、寧ろ觀察によるものであつた。氏は大學の構內に於ても、いつも珍らしい昆虫を探し廻つて居つた。その方面に、氏には珍談がある。或

る日、或る老木に、いづれもそれ迄に見た事の無い甲虫が三匹居るのを見た。氏は左手で一匹捕へ、右手で一匹捕へ、――斯くして兩手が塞がつしてまつた。ところが今一匹は非常に速く走つて逃げようとして居つた。早くそれを捕へようと思つて、その手が明くやう、氏は右手に摑んで居る甲虫を口の中へ入れた。ところがその甲虫が口の中へ何んだか苦い分泌物を出して、非道く舌を燒いたので、その虫を吐き出さざるを得なかつた。斯くしてその二匹の虫は逃げてしまつた。これは熱心の來たす向う見ずを示す頗る好い實例である。氏はケムブリッヂを尋常に――制規の課程には何等大して顯著な成績は現はさなかつたが、友人には可愛がられて、そしていつも博物學のその研究を續けて――通過して行つた。氏の同級生の一人が、氏を有名ならしめることになる好機會を氏の爲めに得てやつたのは此時であつた。英國政府が南米へ探檢としてビーグル號を派遣しようとして居つて、それに隨行する博物學者を一人求めて居つた。ダーキンはその大學々生友達の推擧を受けて、やや躊躇した後その機會を得た。その躊躇の原因は頗る妙なものであつた。その船の指揮者は、ラヴターの指南に從つて、昔の虛妄な骨相學を研究して居つて、ダーキンの鼻は小さくて扁たい事を認めた。小さな扁つたい鼻をした者は、ビーグル號の探檢が要する仕事をするほどの精力と決心とが無いもの、とその人は考へたのである。どんなに思ひ誤つて居

たことか、世界は今それを知つて居る。十九世紀の科學的事業家總てのうちで、チャールス・ダーキンほど間斷無く勞働し、また氏よりも多量の事業を成遂げたものは、確に一人も無いのである。その航海の出來事は、英語での未曾有の極めて面白い旅行記に語られて居る。が、此處に特に記載の要があるのは、ダーキンの經驗の唯一つの事實である、ダーキンの發見に就いて聞いて居る人は幾千人もあるが、その發見がどうして爲さるゝに至つたかは知つて居らぬ。それは人口に關するマルサスのあの有名な書物を讀んで爲したのである、いな寧ろ、感づいたのである。マルサスは、ダーキンよりずつと前に、或る一定の限度以上にこの地球に人を住まはせなくする、種の間に存する彼の生存競爭の法則が存在することを公言したのであつた。ダーキンは、南米及びその他で爲した或る種の觀察を憶ひ出して、世に存在すると知られて居る動植物の、何千萬と異つた種の存在するのは、マルサスが發表したその競爭に於て、最も適した標型のものが生き残るといふことで說明が出來はせぬか、と不圖考へた。これが彼の大著作の起原となつたのである。が然し、非常な實地的な知識ある人にして始めて、マルサスを讀んで斯く裨益を得るやう、進んで行くことが出來たのであることを、記憶しなければならぬ。ダーキンの一生のそのつぎの出來事――氏のつぎの著作『人間の素性』が惹起した大嵐だとか――その後幾年の久しき氏の

名をとりまいて起つた爭鬪だとか――に就いては自分は詳しく語るの要は無い。ダーキン自らはこの戰には少しも與らなかつた。ハクスレと他の人々が氏の代りに戰つた。そして氏自らは、研究に沒頭して、自分が起こした暴風に殆んど心を留めなかつた。それは心の弱い人であつたなら、恐怖の餘り死ぬほどのものであつたであらう。氏の書物を讀んだことの無い、その學說を少しも知つて居ない、幾百萬の人が、分らぬながら、氏の名を輕蔑と非難とを以て呼んだ。自分は子供の時分に、ダーキンといふ心の惡るい男が人間は猿から出たものだと言ひ、聖書は眞理では無いと言つたが、そんな男は牢へ入れるか瘋狂院へ入れるかすべきである、と話されたことを覺えて居る。然るに千八百八十二年、ダーキン死するや、氏はヱストミンスター・アベて、サー・アイザック・ニュートンの横に葬られ、その靈は今日あらゆる階級の英國人に崇められて居るのである。

固よりその科學的生涯の極く初期に、ダーキンは僧侶にならうといふ考へは全く棄てざるを得なかつた。氏はもはや古い宗教を信ずることが出來なかつたのである。が氏は決してその當時の宗教的僻見に、直接には戰ふことを試みなかつた。氏は哲學的な問題は全く放つて置かうとした。氏の心はハクスレの心とは全く類を異にして居つた。ハクスレは幼年時代から、生得眞理の穿鑿が好きであり、生得それに向つて戰ふに攻勢的であつた。ハ

クスレは七歳の時、こんなどえらい質問をして人々を驚かせた。卽ち、『物はその性質を失ふと、どうなるでせうか？』と。例へば、石を考へて見る。石からして、その色、堅さ、脆さ、重さ、抵抗力、その他を取つてしまふ、――そしたら石はどうなるか？固よりのこと、石なるものは存在しなくなる。我々は物をばその性質を通してのみ――その性質が我我の感覺に來たす結果を通して初めて――知るのである。七歳の子供で、斯んな質問が出來るなら、その子供が長じて世界に名を成すことは分りきつて居る。ダーキンはこの種の花々しい心は有つて居なかつた。――彼の偉大は、實驗に疲れることの無い、事實を綜合する能力のある、無類の事業家の偉大さであつた。氏がどんなに働いたか、これは考へて見て不思議な事で――時には、不思議なといふに劣らず面白い事で――ある。例へば氏は蚯蚓に就いて記錄をして居る時、その感覺の能力を發見せんが爲め、毎日その蚯蚓に實驗をやつた。――蚯蚓が入つて居る壺の上で音樂をやり、きこえるかどうかを見出す爲めに、その上でトロムボーンを吹いたりした。氏に初めて子が生れた時、氏はその赤ん坊の能力の發達に關して倦かず實驗をした。そしてそれをば、尋常人であつたなら滑稽に思つたてあらうが、ダーキンは如何にも眞面目に、また如何にも見事な效果を擧げて、そして如何にも立派な目的に、爲したから、それを讀むのは、どんな科學的文書を閱讀しても、とて

も得られぬ非常な愉快てある。ダーキンが得た結果は、深遠であるに劣らずまた種々様々であるといふことが我々を驚かせる――といふのは、その研究は、地質學、古生物學、植物學、骨相學、氏以前誰もが企てなかつたやうな特殊の研究のほかに、博物學の殆んどあらゆる分科を含んで居るからである。假令や氏が天下に與へた最後の一卷のほか何も書かなかつたとしても、なほ且つ氏は科學界に於て頗る高い地位に値することであらう。といふのは、その一卷は、土壤の構成について、それまでに書かれたどんな一冊本よりももつと多くのことを我々に敎へるからである。

ダーキンが文學に與へた影響は、自分が前に述べたやうに、主として氏が現世紀の思想に起こした結果に因るのである。諸君が他人に、新らしい方法で物事を考へねばならぬやうにする時には、間接に、新語を使用せざるを得ぬやうにするものである。それを彼はやつたのである。そしてこの外に、必要の上からして、今や日常使用せられるやうになつてゐて、そしてその多くは今あまりに慣れつこになつてゐて誰が初めてそれを發明したか憶ひ出さずに口にして居る、隨分澤山の科學的な文句を氏は發明した。『適者生存』、『性の選擇』、『種の變じ易さ』、等等、今や誰も彼もの口に上ぼつて居る。――科學的な文句として、それが有つて居る意味をそれへ初めて與へたのは彼であつたのである。

この三大偉人のほかに、十九世紀の後半を目立たせて居る、科學と哲學との變革の大事業を助成した思索家は頗る多かつた。自分はそれを詳しく述べることは出來ぬ――餘りに數が多いからである。が、これから述べるやうな光つた名がその中にあることを記憶しなければならぬ。卽ち、『ニュートンの天才は太陽の火のうちに潜在して居つた』と宣べて、無機有機の古い區別を初めて大膽に否定したティンダル。――實驗心理學――生理學的心理學――の部門に於て英國思索家の最大なるもので、醫學をばスペンサーがその爲め準備して置いた根柢の上に置いたモーズレ。――物質的並びに精神的遺傳の大問題について、天才の本質と傳來とについて、人種交叉の結果について、そして指紋といふ珍らしいが然し驚く可き問題についてのその異常な研究の爲め、幾つもの新らしい科學を創設したといつても宜いゴルトン。――ダーヰンと殆んど時を同じくして種（しゆ）の起原の法則を發見した、そして地質學的地理學と呼んでも宜いものに關し且つ種の地理學的分布に關してまた近代知識に革命を與へたワレス（偉大な研究家思索家ではあつたが、不幸にもそのより大なる偉業よりか心の強さが足りなかつた。老年に及んでから、心靈說（スピリチュアリズム）といふ迷信に身を瀆はせたからである）――昆虫並びに獸類の所謂『保護的模擬』と稱するものの題目に極めて異常な且つ極めて價値ある示現を我々に與へたベーツ。――此等は一群のうちから取出し

た三四の名に過ぎぬ。いづれも皆近代思想の全性質を變化するに與つて力あるものであつた。が、最初に擧げた三つの名が、言ふ迄も無く、巨匠である。

さて諸君は、この三人はいづれも昔風な思想に從つて育て上げられ、爲らせようと思はれてゐたとは異つた道を境遇の爲めに執らざるを得なくなり、そして極めて異常な困難と反對とを冒して初めて成功した人であつた。三人が三人とも元は本能的に宗教的な人であつたが、新知識と眞理を愛する念と自己犧牲の精神とが然かせざるを得ざらしめたので已む無く教義を棄てた人であつた。實際に於てこの三人は、昔の基督教信仰に死の鐘を打ち鳴らしたのである。それにも拘らず、耶蘇教々會すらもその偉大とその目的の眞摯とを認めた。そのうち二人はヱストミンスター・アベに葬られて居る。三番目の人はまだ生きてゐて書いて居る。が、ハーバート・スペンサーが死ねば、多分英國がこれまで產んだ最大の天才としてその偉大を認めた碑銘を以て、ヱストミンスター・アベにその名譽の龕を有つことは殆んど疑を容れぬところである。

ところでその事は頗る重大な意義を有つて居るのである。教會側でさへ、人間の思想が、少くとも歐羅巴では、全然變つて來て居る事、また、心的開化が續く限り今後時代の經過と共に倍々その變化を繼續するに相違無い事を、認めたのだといふことを意味する。教義

信仰が打立てた古い障壁は悉く倒されたのである。將來は思想の新時代であり、哲學の新時代である。尤も、窮極の問題は——無上に遠き未來に、我々が新らしい五感を發展し來たることが出來なければ——これまでと同じく依然として我々には暗黑でなければならぬ。が、近い將來に於て、西洋と東洋との思想が反對で無いやうになるであらうといふ事、東洋哲學と西洋科學との根本眞理の間に或る結合が起こりさうである事、はいろいろ見えて居る。これが出來すれば、一つの新らしい普遍的な宗教というてもよいものが——コムトの意味では無くて（あれは實現不可能な夢である）、人間の知識と經驗との最善なもの總てを統一したものになるさういふ倫理的意味での、人類の宗教が創立さるゝことを期待することが出來よう。何が起らうと、文學の學生に充分に明白な事は一つはあるに定つて居る——それは、最高の文學が人間の思想の表現として全然變らうとして居る、といふ事である。新らしい詩と新らしい小說が現はれる時は、——二十世紀の智慧と感情とを反映する詩と小說とが現はれる時は——それは西洋の文學的藝術の過去のどんなものとも全然異つたものであらう、と斯う我々は確信して宜からう。

新倫理

最近の此の知的變化といふ問題を後(あと)にするに先だつて、それに包含されて居る倫理問題に關して一言述べなければならぬ。固よりのこと、或る宗教信念がその基礎までも動かされた時には、道徳も同時に影響を蒙つたに相違無い、と想像するのは當然である。道徳の文學に於る關係は頗る密接である。だから、倫理の方面に何等か思想の變化があれば、その變化は自(おの)づと文學に現はれる、と斯う我々は期待しなければならぬ。戲曲、詩歌、傳奇(ロマンス)、小說、此等總ては殊に道徳感情の反映であり、正と邪とに關する一時の感念の反映であると共に、善と眞との永久の爭の反映である。それで過渡の時代にはどの時代も、必らず崩壞への或る傾向の伴ふ所となつて居るものである。西洋の現代文學は倫理的變化の或る徵候を示して居る。その徵候が、多くの思想家をして、文學に於る將來の道徳頽敗時期を豫言せしむるに至つた。だがその驚懼は實は全然不必要なものであつた。文學のそんな猖狂は

――例へば、結婚關係の道德に疑を容れて居る書物のやうなものは――全くより古い粹狂を反復して居るのであつて、あらゆる問題に對しての一時の思想動搖に他ならぬのである。いろいろな事があるに拘らず、西洋の社會史に於て、道德感情が現在よりも高かつたことはいつ如何なる時にも無かつた、といふのが眞の事實である。思想の變動は實際頗る大きなものではあつたが、人類の道德經驗なるものは、嘗てそれが價値あるものであつたと同じく、依然として價値あるものであり、またその價値をば我々はこの新哲學によりて新たに認めるやうにされて居るのである。

人類は道德に於てよりも他のあらゆる方面に於て餘計に速かに進歩發達して居る、と近代思想家の最も偉大なるものが正しく述べて居る。道德の進歩が速かでないのは、單に道德の理想は、人力の及ばぬ少々前の方へいつも置いてあるからである。幾千年前、道德の原理は今日我々の生活を支配して居る原理と全く同一なものであつた。我々はそれを改善することが出來ないのである。我々はそれを言ひ現はした言語を改善することさへ出來ないのである。我が詩人達のうち最も學問のある者も、全歐羅巴がまだ野蠻人の土地であつた時代に埃及の母がその子供達に敎へた祈禱より、なほ美くしい祈禱を作ることは出來なからう。十九世紀の道德哲學の最善なるものも、古代の印度或は支那の道德哲學に殆んど

何等の改善を加へては居らぬ。何か改善があるとするなら、それはただ因果の知識の方面だけである。そしてこれが、あらゆる國に於て、道德觀念に手出しをしようとする企をば人類の常識が一般にそれを非難する所以である。道德觀念なるものは、幾千幾萬年間の人間の社會的經驗に成つて居るものである。だから或る一個人の智慧がその改善を試みようなどとは出來さうにも無いことである。假令ば改善が出來るとしても、それは學說では出來はせぬ。その改善は將來の普遍的な經驗に依つて行はれなければならぬのである。科學の分科はどの分科も、藝術の分科はどの分科も、人間の頭と手との仕事に關した他の物はどんなものも、我々は之を改善することが出來よう。然し我々は道德を發明や假說で改善することは出來ぬ。道德は造られるものでは無くて、生長して來るものなのである。

でも、自分が言うたやうに、倫理の新主義と呼んでも宜いものはある。だがこの倫理の新主義なるものは、倫理の舊主義の、新らしい理解の仕方(しかた)に他ならぬのである。進化の科學を道德の研究に適用して、我々は道德觀念の全歷史をその發端まで遡ることが、——その觀念の理由を理解し、また何等超自然的な說の助を藉らずしてそれを說明することが——出來るやうにされた。そしてその結果は、我々の祖先の智慧に對する我々の尊敬の念を減ずるどころか、その尊敬の念を絕大に增したのである。發達の程度が進んで居る、異つ

た文明と異つた宗教とに共通な道德的な教訓で、我々がそれを永久の眞理だと思はない教訓は唯の一つも無い。斯ういふ見解を、二三の例を藉りて、研究して見ることにしよう。

古代に於ては、固よりのこと、人間は宗教的動機に依つて道德的教訓に從つたのであつた。これこれの行爲をするのは惡るい、これこれの行爲をするのは正しい、とどうして考へるのかと尋ねられれば、それは祖先來の習慣であるから、また神がさう欲せられるから、とただ彼等は返事し得たのであつた。我々は社會の進化を支配する法則を理解し得るまでは、我々は多くの倫理的規則の理由を理解することが出來なかつたのである。だが今は我我は、我々の祖先がそれを呼んだ所の神の意志がといふのは、實際それは神聖な法則であるといふことを頗る明白に了解出來るのである。といふのは、倫理的進化の法則は、確かに萬物を形成する——幾多の太陽を、幾多の世界を、また幾多の人間社會を形成する——我々には分らぬ不可思議な法則であるからである。そんな普遍的な法則の運用に反對するものは總て、我々が惡とこれまで呼び來つて居るものであり、その法則の運用を助けるものはいづれも、我々が善だとこれまで考へ來つて居るものである。あらゆる宗教が非難する共通の罪惡は、例へば竊盜とか、殺人とか、姦淫とか、僞證とか、不忠とかといふことは、これ等は皆な進化の自然的過程を直接妨げる行爲である。そして人間は、何故といふ

理由は知らずに、眞文明の最初の時代からして、それを抑制するにその全力を結合したのである。この簡單な事實は長く述べる要は無いと、自分は思ふ。諸君が知る必要のあることは總てこれが直ぐと諸君に思はせることとであらう。例證として、あまり人の知つて居ない題目一つだけ、禁慾的理想といふ題目だけ、自分は擇ばう。

知識が今より乏しかつた時代に、我々が迷信的だとか或は無用だとか想つてゐたもので、今日檢べて見ると、人類に對して無限の價値を有つてゐたものが甚だ多い。恐らくは、何等かの社會的價値を有つてゐなかつた迷信はこれまで一つも無かつたと思ふ。そして、見た處非常に忌な或は殘酷なものが、それが時々極めて貴重なものであつたことが知れて來る。例證にそんなものの一つを選ばうとするなら、或る特殊な文明なり宗教なりに限られて居ないもので、人間生活の或る時期にあらゆる人間社會に共通なものを採らなければならぬ。ところでこの禁慾的理想が我々の目的には一番適ふ。極くの太古から、如何なる文明よりもずつと前の時代からしても、或る種の快樂を身から奪ひ、或る種の苦痛を身に蒙らせると、神聖な力を有つた者の御意に叶ふことであり從つてまたそれに依つて力を得る、といふ思想の下に人間が行動して居るのを我々は見る。恐らくはこの世界に於て、いつか或る時代に、この信仰が非常に大なる勢力を有つてゐなかつた國民は一つも無いであらう。

後になつて、文明の初期に、この觀念は、前よりも大なる力を得、そして國民生活に段々廣くその影響を與へたやうに見えるのである。偉大な宗教が勢を得て居る時代には、この觀念はその頂點に達する、——近代人の想像力には兇暴である悲慘であると思はせる程の犧牲や、非常に苦しい突飛な行動にしばしば現はれて居る、頂點に達する。歐羅巴では禁慾主義は諸君の知らるゝ通り中世時代にその極端に達して、自然的な性關係に對して殊に、反對の態度を執つた。獨身生活が最も道德的な境遇であると考へられ、結婚は愚と言つてもよいと思はれ、歐羅巴全土が幾千の修道院に蔽はれ、死後或は來らん報酬の爲めに愉快な事悉くを犧牲にするのが最高の義務である、とその時代の最上の智者が考へてゐた世紀を今日振返つて眺めると、我々は宗教的狂氣の一時期を眺めて居るのであるとしか認める事が出來ぬ。その時代の建築にすら、ラスキンがそれを賞讃するのにその素晴らしい才能を捧げたあの建築にすら、見るものに狂氣といふことを思はせる、凄いやうな怖ろしいやうな或る物が在る。また、その時代の殘酷な所業は狂氣じみた性質を有つて居る。その時代の信仰を信ずることを拒んだり或は信ずることが出來なかつたりした幾百萬の人間を生きながら火炙りにしたこと、——無智無辜な者から懺悔自白を強請するに用ひた拷問とか、——妖術者である魔法使であるといふ罪を負はせて幾千の人を殺害したこと、——殘忍な

十字軍で以つて佛蘭西の南部その他に在つた文明の小中心地を絶滅したこと、——此等總てを思ひ見ると、ただ單に狂氣を目にして居るのでは無い、猛烈な狂氣を目にして居るのであるといふ氣がする。やはりその時代にあつた、あの十字軍のことを諸君に話す要は無い。その前の羅馬及び希臘の文明と比べると、何んたる凄まじい歐羅巴であつたことか！しかも思想家は、それはそれ獨特の力を有つてゐたことを、その前の文明の力よりも大きな種類の力を有つてゐたことを、承認しなければならぬのである。この殘忍と迷信と學問輕侮とが、それがすべて人類の進歩に絶對に必要なものであつた、と主張するのは言語道斷と思へるかも知れぬ。が然し、それを近代知識の光に照して見ると、さうと受取らねばならぬのである。數百年の間知的發達が抑制されてゐたといふ事は確かに我々を驚愕せしめる事實である。が然し、眞の問題は、そんな抑制が必要となつたのでは無かつたかといふことである。智の力といふものは、道德の力に依つて支へられなければ、國民を破滅の道に導くものである。中世時代の人間に比べると、希臘人と羅馬人とは知的には比較を絶して優つて居つた。道德的に比べて見ては非常に劣つて居つた。彼等は世界を征服した、そしてあらゆる藝術を發達せしめた、この希臘人と羅馬人とは、彼等はその後人類が決して成遂げることが出來ぬやうな事を成遂げた。そしてそれからその道德的理想を失ひ、そ

の質朴性を失ひ、その信仰を失つて、克己の精神が非常に發達してゐた劣等民族の爲めに彼等は全く粉碎されてしまつた。だから、希臘及び羅馬文明の藝術と文學と科學とに對する教會の昔からの本能的な嫌惡は、我々が往々にして想像するほどそれほど甚なものでは無かつたのである。より古い文明の復活に類したことはどんな事でも、道德の破滅を意味する、と斯う僧侶共は漠と認めてゐたのである。文藝復興はそんな僧侶共が過つてゐなかつたことを證明して居る。かの復興運動が若しそれよりも數百年前に起つたなら、その結果は多分世界全般の墮落であつたであらう。自分は、教會がいつ如何なる時にも、己が爲しつゝあることを精確に意識してゐた、と言ふつもりでは無い。教會は本能的恐怖心に驅られて盲目的に行動したのであつた。が然しその爲した總ての結果は不幸なものでは無かつた。羅馬と希臘との文明が道德の力に於て失つたものを、中世時代の恐つそろしい訓練が世界へ戻して呉れたのである。幾代も幾代もの間、禁慾思想が勝を制してゐた。そしてその思想が無くともやつて行けるほどに人間が強くなつただけそれが弱くなつて來たばかりであつた。殊にそれは、初めには其敵だと思はれてゐたものを、——家族關係を——改造したのであつた。家庭の道德が社會に取つて重要なものであるといふ新らしい處念の下に造られた、社會の新らしい基礎を創造したのである。この思想が、この道德法が、迷信

を通して來たからといつて、それてその價値が減るといふことは少しも無いのである。迷信といふものは往々にして永遠の眞理の正確な推測である。今日我々は、社會の進歩は、國民の力は、肉體的と共に知的な國民の元氣は、本質的に全く家庭に賴るものである、一家の道德に賴るものである、兩親と子供との關係に賴るものである、といふことを知つて居る。この事實を希臘人と羅馬人とは忘れてゐたのであつた、そして忘れてゐたから亡びたのであつた。中世時代の迷信的壓制が再び西洋に敎へねばならなかつた事は、しかも永久に忘れられさうにもないやうな風に敎へねばならなかつた事は、この事實であつたのである。この問題の心的歷史についてはこれだけにして置かう。つぎにその肉體的方面について一言述べよう。

無論諸君は、身體を瘠せさす、一切の慰樂を奪ふ、或は進んで滋養になる食物を攝らぬ、といふやうな結果は、何等知的な精力或は道德的な力を增すものでは無い、といふことを書物で讀んで居る。ところが或る意味に於てこれは眞實である。己が身を苦しめて一生を過ごすその一個人はそんな遣り方をして改善發展が出來さうには無い。その理由に因つて東洋の宗敎の最大なものを創立した人は、或る一定の範圍內では宜いと許して、その信者が禁慾生活をするのを非難したのであつた。が然し或る一つの普遍的な思想が起こす變

化の歴史は、その一個人に於ける變化の歴史では無くして、幾代の間に幾百萬といふ個人個人が引續きもたらした變化の歴史である。克己が將來する道德力の度合は我々は之を人間一代の間には認めることは出來ぬ。が、幾百年といふ時間のうちに將來された結果は、我我を驚かすに足るほど大きなものである、ことを我々は見る。知らず識らずの裡に得られたこの結果は、道德の力は係つてそれに頼るところの彼の神經の力の偉大なる増加を意味するのである。それはあらゆる種類の力が増加したことを意味するのである。そしてこの増加はまた我々が經濟と言つてもよいものになるのである。社會經濟といふ科學があるやうに、倫理經濟といふ科學がある。我々は自己抑制を教へるあらゆる宗教の力をこの科學に關係を有たせて合理的に考へなければならぬのである。斯くして研究するといふと、自己抑制は何等の力を滅亡せしむるものでは無くて、全くその人種の利益の爲めに、その力を經濟的に貯蓄して居ることになる、といふことが分る。一つの結果として、より高等な文明を有つた人間は、道德上の行爲であれ肉體上の行爲であれ緊張した行爲は、野蠻人よりも、比較にならぬほどそれに能く堪へられるのである。あらゆる境遇の下に自己を制することが、よりよく出來るのであるから、野蠻人に對して、偉大な利益を得て居る譯である。

倫理のこの新らしい教へて行はれて居る事は、實際は、合理的道德を感情的道德に代はらせただけである。が、これは、道德に於る感情的要素の價値が認められて居らぬ、といふ事では無い。認められて居る計りでは無い、大きくされて、――しかし合理的に大きくされて――居るのである。例として、忠君といふ非常に情緒的な德を執つて考へて見よう。忠君は、合理的形式では、無教育な國民間には存在し得なかつた。ただ感情(フイーリング)として、情操(センチメント)として存在し得たのであつた。原始的社會狀態にあつてはこの情操は一箇の宗教の力と深みとを有つて居る。そして神聖なものと考へられて居る支配者は、實際その國民に對しては神が有つて居る威力を有つて居る。一旦その國民が近代の意味で教育されるといふと、その支配者に關しての思想や、その支配者に對しての義務の思想が必然的に變化を蒙る。が然し、その情操が有教育階級には弱められる、といふことを意味するであらうか。自分は、それは餘程その個人の性質如何に依ると言ひたい。能力の小さな、より高等な思想を受入れることの出來ない、心には、多分その情操は弱くなつて、殆んど全く滅してしまふであらう。然し、本當の思想家の、眞に修養(カルチユア)のある人の、心には、忠君の念は、變つては居るが、同時に非常に擴大されて居るのである。その著しい一例を擧げんが爲めには、君主國からの例で無く、民主國からの例を自分は取らねばなるまい。例へば、亞米利加合衆

國の大統領は、最も高い修養のある亞米利加人には何んと見えて居るか？彼は彼には二つの全く異つた資格に見えて居る。第一に、大統領は彼にはただ一箇の人間として、他の尋常人同様に缺點もあり弱點もある尋常人として見えて居る。その私生活はやゝもすれば新聞紙上て論ぜられる。ワシントンて彼が出會ふどんな人にも誰にも、握手をするものと期待されて居る。そして彼は職を去れば、もはや他の亞米利加人と何等特別な差別は無い。が然し、合衆國の大統領として、彼は一箇の人間以上てある。彼は一億の人民を代表して居る。彼は亞米利加の憲法を代表して居る。彼はその憲法が定めて居る人間の自由の大主義を代表して居る。彼はまた亞米利加の思想を、亞米利加に關した一切を、その國民の希望と利害と光榮との總てを、代表して居る。公には、彼は全く神と同様に神聖なものてある。幾百萬のものが一令の下にその生命を捧げんとするのてある。人間としての彼について下等な戲談を言ひ得る幾千の者が、亞米利加の代表者としての大統領について無禮な口をきけば、どんな一寸した事にも熱烈に憤慨するのてある。他の西洋諸國にあつても、時にその支配者の生命を窺ふものがあるといふ事實があるにも拘らず、全然同じ事實が存在して居る。英吉利が著しい例てある。女王は實際、殆んど何等の權力を有つては居らぬ。その支配は殆んど有名無實てある。英國人はすべて、英國はただ名前の上て君主國てある、

と知つて居る。が然し女王は、あらゆる英國人に、一箇の婦人以上のものに、一箇の女王以上のものに見えて居るのである。彼女は英國を、英國の人種感情を、英國人の愛國心を、英國の力を、英國の威嚴を代表して居る。彼女は一箇の徽號である、そして徽號として神聖なのである。兵隊は戯談に彼女を「後家さん」と言ふ。彼女のことについて唄を作る。それは甚だ以て結構である。が然し、四五年前彼女を呪つた一兵士は、即座に二十年間の入牢になつた。一婦人としての君主について面白可笑しい唄をうたふのは、英國の自由が要求する一つの權利である。が、英吉利としての、政府としての、女王について不敬な語を弄する者は、至當にそれを罪惡と考へて居る。それは、そんなことの出來る人間は、英國人として、市民として、兵士としてのその總ての義務に冷淡な人間だといふことを證明して居るからである。忠君の精神は西洋諸國で失はれて居るどころでは無いのである。性質が變つただけであつて、年月の經つに從つて愈〻力を增しさうに思はれるのである。

　信仰の事に非常に寛容になつたといふ事が必然的に新倫理の一部分である。人類の現今の狀態では、萬人が萬人すべて立派な教育を受けるといふ事、或は、一國民の大多數が高等な修養を積むといふ事は、全く不可能である。無教育な者には、合理的な倫理法は今後も長く論外なものでなければならぬ。そして彼等はその昔の感情的な道德の教へ方に縋り

ついて居るのが至當なのである。己が不信仰に對して理由を擧げることの出來ぬ不信仰者は悉く、公に恥掻かせられるのを見たい、と言つたハックスレの言葉は、堅實な常識が發した言葉であつた。自己の處世法は其根柢を哲學的道德に有つて居ると安全に主張し得る人は、その知識が物事を大衆の見地とは異つた見地で見ざるを得ぬやうにして居る人達だけである。哲學的道德の價値は、それが一般の道德が――卽ち、要する處、最も安全な指導者たる一般の道德が――敎へる眞理を認め且つそれを支持するさういふ方面にのみ在るものである。だからして哲學的道德家は、人間の行爲に善良な感化を與へると知つて居る或る信仰を、決して嘲りもせず、またそれに反對もしない。多くの迷信の價値を、非常に大なるものとして、認めさへするのである。そして如何なる倫理的方面に於ても、人の信仰を突然に變じようとする企は、如何なる企も有害なものに相違無いと知つて居る。彼が望んで居るやうな變化は來はするであらう。然しその變化は、その國民の心意の展開し行く能力に正しく比例して、次第々々にまた穩やかに來させねばならぬのである。これが如何にも左うでありさうなのを見て、多くの西洋諸國では、殊に亞米利加では、全く新らしい倫理の敎へ方を――最も廣い意味のもので、そしてこの新哲學に調和するやうな倫理の敎へを――敎育へ取入れることを企て來つて居る。が、其處でのまた他の處でのその結果

は、この講義の最初に自分が言つたこと――卽ち、古い道德思想が廣くなつて行く事、そして人生とのあらゆる關係に於てその古い道德思想の價値がより深く理解されて來る事、ただそれだけである。

超人

刻下西洋の哲學者並びに科學者の注意を惹いて居る何か著しい思想があれば、それに就いて諸君に語るのは講師たる義務のやうに自分には思はれる、——それは一つには、そんな新思想はどんなものでも早晩文學に反映せらるゝに極つて居るからであり、また一つには、そんな思想を知らずに居ては、哲學上少しでも重要な性質を有つた言説に關して、過つた思想を諸君が抱くかも知れぬからである。自分は、その講義の表題はその著書の一つから採りはしたが、ニーチエに就いて論じようとして居るのでは無い。自分が諸君に語らうとして居る思想は、諸君は之を彼の著書のうちに見出すことは出來なからう。自分の考へるところでは、この思想が一度も彼の腦裡に浮ばなかつたといふは、極めて不思議である。といふのは、彼は、その氣狂じみたものらしいあの書物を書かないうちは、優れた科學者であつたからである。自分は彼の思想の多くに對して殆んど些の同情をも有たぬ。彼

の思想は自分には進化論の教へを誤り解して居るもののやうに思はれる。そして誤り解して居るので無いなら、全く開展をしないまた釣合が取れて居ない考へ方である。だがその書物のうちの一つの表題と、彼がそれを説明しようと試みていつも不成功に終る思想とは――人類以上の或る境涯についての、彼の所謂『超人』な道徳的狀態についての思想は――これに就いて語る價値がある。決して譫語(ナンセンス)では無く、全くの事實で、自分はそれに就いての眞實を正しく諸君に理解させることが出來ると思つて居る。て、ニーチェは全く放つて置いて、道徳以上の人間生活の狀態を――言ひ換へれば、人間の頭腦が考へ得る最上の道徳理想よりももつと道徳的な狀態を――想像することが出來るかどうかを質(たゞ)して見よう。我々は答へることが出來る、それは全く可能であると、そして可能だといふだけでは無い、ハーバート・スペンサーもその中に含まれて居るが、多くの大思想家に依つて實際豫言されてあつた、と。

我々は、徳よりも、義務よりも、善良な宗教の教訓に嚴正に從ふよりも、善いことは何もある譯が無い、と考へるやうに育てられ來つて居る。が然し、善といふまた徳といふ我我の觀念は、必然的にその反對の性質のものの存在を暗に示して居るのである。それをするのが義務だから善いことするといふことは、餘程の分量の決心を、困難に對しての奮鬪

を暗に示して居る。正直といふ徳は、完全に正直であることの困難を暗に示して居る語である。何か道徳的な或は大きな事業を考へる時に、我々はその事業を爲すに當つて遭遇せざるを得ぬ苦痛と障害とを考へずには居れぬ。我々の能動的な道徳はすべて不道徳に反對しての奮闘である。で、自分は、あらゆる宗教が教へるやうに、人間はどんな人間も完全に道徳的な本性は有つて居ないものと、許容しなければならぬと思ふ。

其處の全住民の本性が非常に道徳的で、不道徳とはどういふものか、その思想さへ存在し得ないやうな世界が、果して存在し得るであらうか。この自分の質問を今少し詳しく說明しよう。どんな人間も不正直にはなれないから、それで不正直といふ思想が存在しないといふ社會を、――どんな人間もどうしても不貞操にはなれないから、それで不貞操といふ思想が存在し得ないといふ社會を、――嫉妬とか野心とか忿怒とかいふ感情は存在し得ないから、それでどんな人もそんな感情について何等の思想をも有ち得ないといふ世界を、――孝行をせぬこと、子を愛しないこと、我々人間が今義務と呼んで居るもの悉くをしない事は不可能であるから、それで子が親に對してのまた親が子に對しての義務といふ思想が無いといふ世界を、想像して見給へ。そんな世界では、義務のいろんな思想は全く無用なのであらう。といふのは、生存のあらゆる行動が、我々が義務と名づけて居る事を絕え

間無く且つ缺點無く履行して居る、といふ事になつて居るからである。その上に、そんな行爲を行ふに、何んの困難も、何んの苦痛も、無いであらう。それが人生の永遠なそして確實な、快樂であらう。不幸にも、我々にとつては、惡るい事が屢々我々に快樂を與へる。そして爲すに善な事は大抵は苦痛を生ずる。が、諸君に想像し給へと自分が乞うて居る世界では、どんな惡も存在し得ぬであらう。また惡を行ふ快感も少しも存在し得ぬであらう。あらゆる愉快は正しきを行ふにあるであらう。極く單純な例を擧げるなら――青年に見る最も普通な最も許容すべき缺點の一つは、あまりに多く食ふこと、飮むこと、眠ることである。が、我々の想像の世界では、必要以上極く僅かな程度でも、食ひすぎる或は飮みすぎる或は眠りすぎるといふことは仕ようにもすることが出來ぬであらう。その人種の體質がそれを容さぬのである。もう一つ例を擧げる。我々の子供は、正邪といふことに關して、氣を付けて教育を施さなければならぬ。自分がその話をして居る世界では、そんな教育に一刻も時間を無駄に費しはせぬ。それはその子供は悉く、生れながらに何が正か何が邪か充分に知つて居るからである。卽ち之を心理學の言葉で述べれば――哲學的心理學では無い、科學的心理學といふつもりであるが――道德といふものが變じて遺傳された本能となつて居る世界があるといふことになる。そこで再び自分に質問をさせて貰はう、我々はそ

んな世界を想像が出來るかどうか？恐らく諸君は答へるであらう、出來る、天界で、——他では何處にも出來ぬ、と。が、そんな世界が實地に存在して居る、また、科學的敎養のある人には、東洋或は歐羅巴の殆んどどんな處でもその硏究が出來る、と自分は諸君に答へる。昆蟲の世界が實地にそんな道德的變形の實例を提供して居るのである。サー・ジョン・ラボックとかハーバート・スペンサーとかいふやうな著作家が、或る種の社會的昆蟲は、社會の進步に於てまた倫理の進步に於て、無限に人間に優つて居る、と言ふに躊躇しなかつたのは、その爲めである。

だが此處で言ふ必要のあることはそれだけでは無い。諸君は自分がただ一種の譬話を繰返して居るのであると思ふかも知れぬ。人類は最後に、幾百萬年經つてから、蟻が有つて居る倫理狀態に達するであらうといふ科學者の意見、それが大切なのである。蟻の倫理狀態の幾部分が科學的證明に依つて確實になつたのはつい五六年前のことであるから、自分はそれに就いて語りたい。それは重要な倫理問題に直接の關係があるもので、そして全道德界を驚愕せしめたものであり、全く新らしい方向に人の思想を向はしめたものである。

社會的昆蟲の硏究が近年の道德家をして、どう新らしい方向に思想を向はしめたかを說明する爲めには、斯んな短い講義では餘程概括して話す必要がある。此新思想を鼓吹した

のは殊に蟻の社會的狀態である。が、蟻のうちのどんな一種(スピシーズ)でもがその事實全部を我々に提供すると、諸君は考へてはならぬ。その事實は、幾百と異つた科學者が、幾百と異つた種類の蟻を研究して、初めて得たもので、これから諸君にその概要を述べようと自分が試みる倫理的な畫を我々が得るのは、全く科學者の證明の一致に依つてである。蟻には全體で異つた種類が多分五千種(スピシーズ)はあつて、そしてその異つた種類は、極めて原始的な野蠻な程度から極めて進んだ文明及び道理程度に至る、社會進化の異つた多くの時代を見せて居るのである。つぎに示す畫の細々した點は、ただ多くの最高等な種(しゆ)だけが提供するものである。この事を諸君は忘れてはならぬ。それからまた、蟻の道德は、事情の必要上、その種(しゆ)だけの範圍を越えて他に及ぶといふことは無い、といふ事に自分は諸君の記憶を促さなければならぬ。その社會の內部では一點の非難無しに倫理的であるが、自己の境域外では蟻は戰爭をする。この事さへ無ければ、蟻を道德的に完全な生物と呼ぶことが出來よう。

蟻の心は人間の心と同じものでは決してありやうが無いけれども、非常に怜悧な生物であるから、人間生活と譬喩的に比較して、心が在ると述べても差支は無いのである。それから、晝も夜も――建築したり、トンネルを穿つたり、橋を架けたり、――また農業に、園藝に、幾種もの家畜の世話に從事したりして――働いて居る、女だけ居る世界を想像し

て見給へ。（蟻は五百八十四種を下らぬ異つた動物を飼養して居ることを述べてもよからう）この女の世界は入念に清潔にされて居る。彼等は多忙ではあるが、何れも皆身のまはりに櫛と刷毛とを携へてゐて、一日に幾度も身仕舞をする。この絶え間なしの仕事の上に、その女共は幾百萬の子供の――天候の極めて輕微な變化の爲めにも死ぬほどか弱い體軀の子供の――世話をしなければならぬ。それでその子供を暖かくして置く爲めに、始終甲の場處から乙の場處へと運んで行つてやらなければならぬのである。

この勞働者の大群はいつも食物を集めて居るのであるが、その一匹も、必要以上には一微量も食ひも飲みもしようとしない。そしてその一匹も、必要以上には一秒も眠らうとはしない。さて、驚くべき事實が一つある。これに就いては後、話さなければならぬ。この女には性が無いのである。それは女である、といふのは時々、處女として、實際子供を生むからである。が、彼等は結婚は爲し得ぬのである。彼等はヹスタの神に仕へる巫女以上である。性は實際に無くされて居るのである。

この勞働者の世界は一隊の兵士に守護されて居る。その兵士の體軀は非常に大きく、非常に強く、また勞働をする女達とは餘程變つた恰好をして居るから、初には同じ種族のものとは思へぬほどである。彼等は、或る細かな仕事には――彼等は餘りに無骨でまた強く

て――手助することは出來ぬが、仕事の手傳をする。さて、第二の驚くべき事實が出て來る。その兵士はいづれも女なのである、――アマゾン女武者、と言つても宜い。が、彼等は性の無い女てある。このものもまた性を無くされて居るのである。

諸君は質問する、子供は誰が產むのかと。その子供の十の九は、特別な母から――子孫を造る目的で選拔されて、他の事は何もすることを許されぬ雌から――生れるのである。彼等は、始終食物を宛がはれそして供奉されそして世話され、そして出來得る限り立派な處に住まはされて、殆んど女王のやうな待遇を受ける。此等のものだけがいつ何ん時でも食つたり飮んだりが出來る――その後裔の爲めにさうしなければならぬのである。有力な供奉が無ければ外出をさせられず、危險或は危害は如何なるものも冒すことを許されぬ。全種族の生活が彼等とその子供を取卷いて居るのである。が、その數は非常に少い。

一番最後が雄、卽ち男である。男の方がならずに、どうして女の方が分化して兵士になつたのだらう、斯う當然誰しも尋ねる。女の方が餘計に力を蓄積して居て、子を產むのに利用し得る力全體を、攻擊力の作用に轉用されたものらしく考へられる。眞の男性は非常に小さくてまた弱い。これは冷淡に輕蔑的に待遇されて居るやうである。彼等はただ一夜の花婿たることを容されるので、その後直ぐと死んでしまふ。それと對照して、他の者ど

もの壽命は非常に長い。蟻は少くとも十四年は生きて居る、が、雄はその唯一の職掌を果たすに足るだけしか生きて居らぬ。

前述の奇妙な事實のうち、諸君に最も深い印象を與へた一事は、性を無くして居るといふことに違ひ無い。が、今度は全體のうちでの最後のそして最も驚くべき事實が遣つて來る。この性を無くするといふことは自然的では無くて、人爲的である――自分の言ふことゝろは、自ら進んで行ふ行爲である、といふ事實である。蟻は系統的な或る攝食法を用ゐて、欲するまゝに性を抑制したり發達さしたり出來る、といふことが發見されて居る。この種族は、性なるものはそれがその種族の存在に絕對的に必要なだけの範圍に於て許すべきで、それ以外には許すべきで無い、と決定して居るのである。性のある個體はただ必要な惡い物として我慢されて居るのである。あらゆる欲情のうちで最も有力な欲情が、洽く一般社會の利益の爲めに、故意に無くされて居る一つの實例を、我々は蟻に見出すのである。不必要な時にはいつでも消える。戰爭後とか何かの災害後とかで必要な時には、またそれを存在せしめる。かゝる事實が道德家を思慮せしめたのは洵に怪しむに足らぬ。固よりのこと、若し人間社會が、同じ目的を遂行する祕密な或る方法を發見することが出來、そしてそれを行ふ勇氣が、否寧ろ、それを行ふ無利己心が、有てたなら、その結果は全く、性

的不道徳は如何なる種類のものも實際に於て不可能なものになる、といふことであらう。そんな不道德の觀念すら存在しなくなるであらう。

が然しこれは自己抑制のたつた一つの事實で、蟻社會は幾百とそれを提供する。全體のことを出來るだけ簡明に述べるなら、この種族は我々が利己的衝動と呼んで居るもの總てを全然無くして居る、と言つてよからう。飢渴すら利己的滿足を許さぬ。この社會の全生活は共同の善に、そして相互の救助に、そして若い者の世話に捧げられて居る。蟻に我々のやうな義務感念が――言ひ得べくんば宗教が――あると想像することは不可能であるとスペンサーは言ふ。だが蟻には義務感念の要は無いのである、宗教の要は無いのである。その生活は實際の意味に於て宗教なのである。恐らくは幾百萬年の古昔には、蟻の感情はそれが今有つて居るものよりも、もつと我々人間のに似て居るものであつたらう。その時代には、利他的行爲を行ふ事は蟻には苦痛であつたかも知れぬ。今はそれを行ふことがその生涯の唯一の快樂になつて居る。子供を養育しまた國家に一層有效に仕へん爲めに、この昆蟲はその性と、我々が動物的欲情と呼ぶ一切の欲求とを犧牲に供して居る。その上に、我等は完全無缺な一社會を、財産をば誰も國家のものとして、公のものとして、羅馬人の所謂レス・プブリカ、としてのほか考へ得ない一社會を有つて居る。そんな風な組織にな

つて居る人間社會では、野心といふものが、如何なる嫉妬もが、如何なる種類の如何なる利己的行動もが――全然何等の我欲もが――存在し得る譯が無い。個體はその種族の爲めに實際に犧牲にされて居ると言つてよい。が、そんな假定は最も程度の高い道德的利他主義を意味して居る。だから思想家は、『人間はいつか蟻の狀態に類した狀態に進むことがあらうか』と尋ねざるを得ぬ。

ハーバート・スペンサーは、確にその傾向がある、と言うて居る。蟻に見る性の禁止に、或は婦人を人間界の主要な地位に就かしめて男性を劣等な地位に置くといふに、相當するやうな、そんな生理的分化が未來の人類にあるであらう、とは彼は言ひはせぬ、またそんなことはありさうにも思はれぬ。そんな事は、今此處で話すには餘りに長い時間を要する幾多の理由があつて、永久出來しさうには思はれぬことである。だが、人間のあらゆる欲情のうちで一番利己的な欲情がしまひには制御を蒙るであらう、――人間の殆んど總ての苦痛の現在の原因は、人口の壓迫は、實際に取除かれるであらうやうな制御を蒙るであらう――といふ證跡はある。それから、不親切な行爲といふ意味での惡を行ふ事は、殆んど不可能になるであらう、そして最上の快樂は利己の裡にで無く非利己の裡に見出さるゝであらう、といふやうな變化を人間の心が受けるであらうといふ生理學的證據がある。言ふ

までも無く、蟻生活のこの發見が我々に暗示する、我々が就いて考ふべき事は幾千となくある。自分は他に比して一層重要な事だけ話して居るのである。自分が諸君に話したことは、我々の今日の道德狀態よりも遙かに高等な道德狀態といふ考は全く可能なものである、――それは一笑に附すべき考では無い、といふことは少くとも思はせるに相違無い。だがこの可能を考へたのはニーチエでは無かつた。彼の『超人』と、我々がそれを希望する、そして本當の、『超人』とは、絕對的に相反して居る思想である。かの古昔のヘブライの作家が、幾千年の昔、『惰る者よ、蟻にゆき其爲すところを觀よ』と言つた時は、その助言が二十世紀の科學の光に照してどんなに立派な忠言となることか、想像もし得なかつたことであらう。

創作の方法について

一

毎學期少くとも一回、文學及び文學研究の實際的方面に關する短い講義をしようと思ふ。これは作者の特色に關する講義などより遙かに澤山の價値がある、或はある筈である。私はただ實際の文人として、文學と云ふ困難な商賣に年期奉公をした者として、諸君に話したい。さう云つても、私はただ大工が『私は大工です』と云つたり、鍛冶屋が『私は鍛冶屋です』と云つたりするやうな意味で、私はただ『私は職人です』と云つて居ると解して貰ひたい。これには少しも私はよい職人だと云ふ意味はない。私は餘程下手な職人かも知れない、しかしそれでも職人と云ふ資格はある。大工が『私は大工です』と云つたら諸君はそれを信ずるが、本人自らよい大工だと信じて居ると云ふ意味にはならない。その仕事

については、それに對して仕拂をする折が來たら判斷ができる。しかし、その男が下手な怠惰な職人であつても、或はその町第一等の大工であつても、とにかく諸君の知らない事を何か諸君に語る事ができる事は諸君の知る通りである。道具の取扱方、或種類の物を造るのに一番適當した木材の選び方をその男は心得て居る。その男は詐欺師かも知れない、やる事について甚だ無頓着かも知れない、しかしその男は年期奉公をして、始終眼と手を働かせて居るから、大工の仕事はどうしてやるべきかを心得て居るので、諸君はその男から何か知識を得る事のできる事だけは全くたしかである。

この事に關する私の資格の言分はそれだけにして置く。さて講義を始めるに當つて、文學上の作文に關する二三ありふれた誤解を諸君から取り除きたい。諸君は悉くこの誤解を抱いて居るとは云はないが、抱いてゐさうだと私は思ふ。諸君に警告したい第一の誤解は文學——即ち書物や詩歌を作る事——は教育によつて、讀書によつて、理論を習得する事によつて、できると云ふ甚だ廣く傳はつて居る誤解である。私は教育の力で詩人や小説家になれない事、丁度大工や鍛冶屋になれないと同じだと云つて、思ひ切つて打明けて云ふが、しかしこれは餘程異端のやうに見えるであらう。圖書館へ行けば材木の色々の種類、道具の色々の種類、木材器具の工業に關する書物や論文が得られる。これを皆讀んで

それにある重要な事實を悉く暗記する事もできるが、さてそれてよい食卓やよい椅子が造られるわけはない。それと同じく著作に關する讀書をしても著作する事は分らない。文學は丁度この意味に於てはただ練習によつてのみ覺えられる商賣のやうである。こんな事を云へば私などが到底得られさうに無い程の學問のある人は驚くてあらう。しかし私の信ずる處てはこれは全く教育的偏見とも云ふべき物から生じて居る。實際の技術としての文學が、ただ書物の研究と何か關係のあるやうに說く先生は、世界の大文學の多數は、書籍のない時分にできた物である事、ホーマーの詩は文法の學校のなかつた頃にできた事、殆んど凡ての大文明の聖い書物は文法やその他の規則なしに書かれた物であるが――しかしこれ等の著作は始終私共の感嘆する處となつて居る事を忘れて居るやうてある。

もう一つ考ふべき誤解は、日本語の構造は特別の物であるから西洋の文學上の技術の法則は應用できないと云ふ事である。しかしこんな意見に何か眞理があるとすれば、その眞理は最も不必要な種類の眞理である。さきに私は文法的、詩形論的の文學上の專門用語を知つて居る事が、書く事の助けにはならないと云つたから、諸君は私が所謂文章法なる物が諸君にどれ程不必要と考へて居るかはすでに察せられたてあらう。これ等の外國の規則は實際日本語には適用できない。しかし私の云ふ意味てこれ等は何の價値もない、しばら

く私共はこんな規則を皆捨て去つて、そんな物を念頭にも置かない事にしよう。それて場所を綺麗に片づけて、或は少くとも以前よりも綺麗に片づけて、さて云はせて貰ひたい、即ち文學の高尚な規則は世界的であるから、その國語の構造はどんなでも地球上の悉くの國語に適用できる。この世界的の規則はただ眞理をのみ相手にする、そして眞理はどんな言語で云はれても、どこででも眞理である。間もなく私はこの世界的眞理の題目に戻つて來よう——實はそれがこの講義の最も大事な部分になるのである。

　諸君に警戒したい第三の誤解は大傑作或は價値のある著作は骨を折らずに——非常な骨折をしないで——できると云ふ愚かな信仰である。若い文學の學生にとつては、大作者が甚だ短日月で傑作を書いたと云ふ話或は傳說よりも、もつと害になる物はない。その話や傳說は、百萬の場合に不可能な事を普通な可能事としてしまうのである。諸君はヂョンスンが數週間で『ラセラス』[譯者注一]を書いたとか、或はベックフォード[譯者注二]が同じやうな事をしたとか、その外色々の名高い人々が決して草稿を直した事がないとか云ふ話を聞く——それで非常な自信のある青年は自分も同じ事をして、文學を作れると想像する。私はそんな話は信じない。そんな話は事實でないと云ふのでない、私はただそれを信じない、それから今あるそれ等の書物はたしかに數週間以上、或は數ヶ月以上の著作である事を示して居る、と云

ふだけである。それよりはグレイはただ一篇（譯註二）の詩を添削推敲するために十四年を費した事、それから今日殘つて居る詩でも傑作と云はれる程の物は、今日殘つて居る文句と、始めて出た時の文句と同じ物はないと云ふ事を覺えて置く方がかへつてよい。たとへば、私共の讀んで居る詩人について考へて見よう。ロセッティの『ブレセッド・ダモゼル』は十九の歳に書かれたと普通云はれて居る。これは事實である、私共はロセッティが十九の歳に書いた詩の文句をもつて居るが、今日ある詩とは似てゐない、卽ちそれは數十度變へられて、直されて、又直されて、今日の完全な狀態になつたのであつた。テニスンの作つた物は殆んど大槪度々變つて殆んど版每に文句が變つた程であつた。何よりも想像してならない事は傑作は大きな努力なしにできると云ふ事である。ドクトル・マックス・ミュラ（譯註四）ーが歷史家のフルード（譯註三）に向つて自分の書いた物は添削しない話をした時に、フルードは答へて「君は度々添削しないと、決して良い英語を書く事ができない」と云つた。ところで良い英語にも段々ある、私はフルードの云つた事は正しいと信ずる。正確な書方をする長い習慣の力で正しい英語を書く事はできる。商業用の手紙、公文書、及びそのやうな種類の色々の文章は正しい英語でなければならない、それは全く定まつた形式と規則によつて書かれる事は、丁度言葉が一つ間違つても非常な損害を起す事にもなる法律上の書類のや

うてある。しかしこれは文學とは關係がない。もしよい英語、よいフランス語、或はよい日本語を書く技能が文學なら、法律字や銀行の書記はそれぞれその國の最高の文學を代表する事になる。しかし、フルードの意味が文學的英語であつたのなら、それは全然正しい。澤山の添削をしないでは、どんな文學もできない。私は諸君に、原始的文學は書籍や文法の時代以前にできた物だが、過去現在に於て比類のない文學であり、將來も續いてさうであらうと云つた。しかし諸君はそれは決して度々くりかへし直されたり變へられたり作り直されたりした事はないと考へるか。確かに、それは直された、それも一人によつて直されたばかりでなくそれを暗記した數千、又、數千の人々によつて直されたのである、時代毎に少しづつそれを改良して、最後に書き下される事になつて、數百年の勞力によつて磨かれて完全になつたのである。

今私は想像するが、諸君は皆、一時如何にして英語を書くべきかに關する書物を得ようと思つて、それを發見したが、その結果は皆失望した事であらう。如何にしてフランス語を書くべきかについて、フランスの書物をさがし、如何にドイツ語を書くべきかについてドイツの書物をさがして、その失望は同じであつたらう。諸君に文學上の著作について敎ゆる書物、作文の本當の祕訣を敎ゆる書物は未だ存在しない。いつかはこんな書物ができ

ると私は信ずる、しかし現在では一冊もない、その理由は簡單である、卽ち、そんな書物を正に書ける人はそんな書く暇のない人々であるからである。しかしこれだけの事を云つて置いて、日本の作文の問題に歸らう。多少の實際的法則を諸君に與へる前に、一つ諸君に篤と云つて置く事がある、卽ち、諸君の外國語の勉强は諸君自らの言語に關係してでなければ、諸君に何等文學上の用にはならない。諸君は多年の外國語の練習と外國への旅行とによつて相當に正しい英語佛語獨語を書く事はできても——たとへば商業文書を書いたり單に事實を取扱ふ簡單なる論文を書いたりする事ができても、——英文學佛文學獨文學を書く事はできない、決してできるやうにならない。何人も自分自身の國語以外の國語で流暢になれたり、自分自身の國語でない國語で文章を書いて人心を動かしたりする事は望まれない。英文學には甚だ僅少なる例、——二つの國語、たとへば非常に相似て居る英語と佛語で同じやうによく書いた人の例(譯者註六)はある。母語として東洋語をもつて居る人に取つては、外國語で文學を創造する事のできる唯一の望みは全然自分の國語を忘れる事である。しかしその結果はその犧牲をしただけの價値はなからう。

多數の諸君は或は偶然に或は好んで、著作者になる事と私は想像する。それでもし諸君が散文なり韻文なりの文學を作る場合には、大學教育が諸君に無數に注入した新思想をそ

の著作のうちに取り入れて、諸君の國の將來の文學に影響を與へられる事を望む次第である。しかしこの新思想、大きい知識を分けると云ふ事だけでは文學ではない。文學は學問ではない、學問も中に入つては居るが。文學は前に云つた通り、高尙なる情緒、高尙なる情操に言語がこの上もない高い感動を與へる事である。それは學問ではない、學問の法則によつてなされる物ではない。

それで今度はこの題の實際の方面に向ふ事ができる。

私は先づ諸君に最高級の文學作品の原則は日本でもフランスでも英國でも、その外どこの國でも全く同じ筈である事を記憶して貰ひたい。この原則は二種類で、削除と添加——換言すれば、不必要な物は削除して、必要な物は間斷なく强くする事である。この外には作文の意味は餘りない。勿論必要な事の第一は口語としての自分の國語を完全に知る事である、私は文語とは云はない、何故なれば文語としての國語を完全に知る事はただ學者であつて始めてできる事で、文學には少しも肝要ではない。しかし、高い低い、普通の、異常の、凡ての形の生きた言葉を知る事は甚だ望ましい。もし人は凡ての口語を知る事が望めない時には、一部分だけ、その人に取つて最も自然である部分だけを研究する事に力を注ぐ事を忠告する。ただこの部分的の知識をもつてしても立派な文學ができる。しかし充

分なる知識は技倆のすぐれた人の場合にはもつと大きな結果になつて現れる。

譯者註一　Samuel Johnson（1709—1784）は名高い英國の文人であるが、その小說 Rasselas は一七五九年に母の死に際し、葬式の費用を得んがために、一週間で書かれたと傳へられて居る。

譯者註二　William Beckford（1759—1844）英國の文人で Vathek と云ふロマンスの作者である。

譯者註三　Elpegy written in a Country Church Yard と云ふ詩。

譯者註四　MaxMüller（1823—1900）ドイツ系英人の名高いサンスクリット學者。

譯者註五　Jarmes A. Froude（1818—1894）名高い英國の歴史家。

譯者註六　アイルランドの文人オスカー・ワイルドなどはその一例。彼の名高い作の『ザロメ』は女優サラ・ベルナールのため　佛文で書かれた。

二

この講義のうちで、諸君は私が文學を情緒表現の技術として定義を下した事を忘れてはならない。それで第一に考ふべき事は情緒それ自身、その價値、その逃げやすい靈妙性、及びそれを『捉へる事』の非常に困難な事である。

諸君は感覺よりも情緒をさきに置いた理由を問ふであらう。勿論感覺はいつでも情緒に先き立つ。感覺とは感官から受けた第一印象、或はそんな印象を記憶で想ひ出す事である。情緒は感覺或は印象に續く甚だ複雜な感情である。この區別を忘れてはならない、實はそれが甚だ肝要である。

さて、私がこの感覺について餘り云はうと思はない理由は、もし感覺が言葉で正確に說明されたら、その結果は寫眞のやうな物、ただそれだけの物になるからである。或は色彩のある寫眞と云つてよからう、（必ずいつか發見されると思ふが）もし色彩のある寫眞を取る技術が發見されたら、こんな色彩のある寫眞が實際殆んど正しく眼の印象を表はす物であらう。しかしこれは藝術ではない。寫眞は藝術でない、繪畫がその正確の度に於て寫眞に類似すればする程、美術的見地からは、その價値が少くなりさうである。感覺を記述する事は文學でない事、なほ寫眞が高い意味で美術と云はれないと同じである。それで私は大膽に、文學は感覺の繪でなく、情緒の繪であると云ふ見解を取る。

これは甚だ充分に說明する必要が必ずある。私が『情緒』と云へば、諸君は恐らく淚、悲哀、後悔の事を考へる。しかしこれは間違であらう。私共は始めに甚だ簡單なる種類の情緒——一本の木の情緒を考へて見よう。

諸君が木を見れば、二つの事が起る。第一に、眼によつて頭腦に映された木の影像——即ち木の小さい寫眞ができる。しかし諸君がこの影像を言葉で描寫しようとしても、できないだらう。それから、たとへできてもその結果は云ふだけの價値がないだらう。しかし殆んど同じやうに早く、諸君は第一のと餘程違つた第二の印象を受ける。諸君はその木が諸君に或種類の特別の感情を與へる事に氣がつく。その木には一種の性格がある、それでその木の性格を知覺する事はその木の感情もしくは情緒である。それが藝術家のさがす物である。それが詩人のさがす物である。

しかし、もう少しこれを說明せねばならない。生物でも無生物でも、凡て物はそれを見る人の心に一種の感情を起させる。凡ての物に顏がある。諸君が始めて人に遇ふて、その人の顏を見る時、或印象を受けて、直ちにそのあとへ一種の感情が續いて來る。その顏を諸君が好くか、嫌ふか、或は比較的無頓着の狀態に諸君を置くかである。顏に關して私共はこの事を知つて居るが、美術家や詩人だけは物に對してもこの事を知つて居る。それで大美術家大詩人と外の人々との區別は、美術家や詩人は所謂物の相、——物の顏、即ちその性格を知覺する事である。木でも、山でも、家でも、石でさへも、藝術家の眼には顏があり性格がある。それで私共は適當なる方法によつて、その性格を見るやうに訓練をうけ

る事ができる。

さて私が凡ての諸君に大學の庭にある或木を私に說明するやうにと注文したと假定する。諸君のうちの大多數は殆んど同じ事を書くだらうと私は期待する。しかしこれはその木が凡ての諸君に同種類の感情を與へた證據であらうか。否、そんな意味は少しもない。それはただ諸君の大多數が考方、書方の習慣を習得して居ると云ふ事を意味するのであるが、これは藝術の原理に反して居る。諸君の大多數は殆んど同じやうな木の叙述をする、その理由は長年の勉强のうちに、諸君の頭腦は、木の記事にはいつもきまつて居る形式の言葉で充たされて居るからである。諸君は誰か名高い詩人か小說家の言葉を想ひ出し、自分自らの感情を發表するためにそれを使用するのである。しかしそれは諸君自らの感情を發表する事にならない事は全く確かである。私共自身の感情を述べるのに外の人の思想や言語を使用する事は、いつも教育は教へるのであるが、この習慣は正に藝術のどの原理にも反して居る。

ところで諸君のうちに詩的藝術的の著しく强い伎倆をもつた人があると假定する。その人が書いた木の記事は外の人々のと驚くべく違ふ、それは諸君を悉く驚かして、その記事が事實であるかどうかを見るために、その木をもう一度見直すやうになる。それから諸君

は外の物よりも、その方がもつともつと本當である事を見てさらに一層驚くであらう、それで諸君はその人がその木を新しい風に諸君に理解させる事ができたばかりでなく、またその上に外の諸君はただその木をよく見なかつた事と、諸君の記事が皆誤つて居る事を發見するであらう。その人はその木の記事を書くのに外の人の言葉を使ふ事はしないで、自分の言葉だけを使用したのであらう。それからその言葉は子供の言葉のやうに、甚だ簡單な言葉であらう。

一體、子供は物の性格を見る事にかけては、普通の人よりは比べやうがない程すぐれて居る。そして藝術家は子供のやうな物の見方をする。もし私が二十人ばかりの子供――たとへば六七歳の――に私共が今云つてゐた同じ木を見て、その子供等にそれを何と思ふか云ふやうに尋ねて見たら、必ずそのうちの多くの者が驚くべき事を云ふであらう。それが普通の大學生よりもはるかに眞に迫るであらう、そしてこれは全く子供が絶對に無邪氣であるからである。子供の想像から見れば一切の物は――石、木、草、室内器物までも――生きて居る。子供にとつては一切の物に魂がある。子供は大人と全然違つた物の見方をする。これが子供の觀察力のすぐれて居る唯一の理由ではない。子供の本能的知識、過去の數百萬の生命から遺傳した知識は未だ鮮かで、教育や個人の經驗の無數の印象の重さで鈍

くされてゐない。たとへば、子供に或知らない人について何と考へるかを尋ねて見る。子供はその人を見て「好き」とか「嫌ひ」とか云ふであらう。諸君が「何故その人が嫌ひか」と尋ねて見ると、その子供は少し困つたあとで、その人の顔に何か嫌ひな物があると云ふであらう。もつとその子供を促して説明させると、長い間待つたあとで、子供は突然驚くべく眞に迫つた比喩によつて、諸君が認めなかつた物を何か子供が認めた事を示して、諸君を驚かすであらう。丁度この本能の力は藝術家の力で、單なる文章と、文學とを區別する力である。今諸君は私が云つた事、即ち教育は人に詩を作る事を教へない事は、丁度讀書によつて食卓や椅子を造る事は習はれないと同じと云つた事の意味を、もつとよく理解するであらう。藝術的の見方の能力は教育と關係がないから、教育と離れて養成されねばならない。教育は大文豪を造つてゐない。それに反して、それ等の人々は教育を受けたにも拘らず、大文豪になつたのである。何故なれば、教育の效果は必ず高い形の情緒的藝術がたよらうとする原始的本能的感情を殺し鈍くするからである。知識は或甚だ貴重な天賦の才能を犠牲にして始めて大概は得られる。凡ての知識を取り入れたが、それにも拘らずその心と情に於て小児の新鮮なところを保つて居る事のできる人、そんな人は文學に於て大作のできさうな人である

これで私共が文學の技術家が捉へて發表する事を努めねばならない感情或は情緒の何てあるかを明瞭に定めた。私共はこの上もなく簡單な例、一本の木を取つた。しかし文學で取扱はれるどんな事物でも、どんな想像でも、どんな人でも、全く同じ風に考へられねばならない。凡ての場合に、作者の目的はその物の性格を捉へて逃がさないやうにする事である。その物が彼の心に起させた通りの感情を表現して、始めてこれができる。これが文學の重なる仕事である、甚だむつかしい。しかし何故それがむつかしいか、私共は未だ考へてゐない。

感情が起つたらどうなる。諸君は喜びか苦しみか恐れか驚きの一時的の動悸を感ずる。しかしこの動悸は不意に來ると同じく又不意に去る。それが消え去るや否や、それを書き留めて置く事はできない。その時諸君の心に殘つて居る物はその物の感覺或は第一印象とその感情の記憶だけに過ぎない。人の性質が違へば、感情も違ふ、それで或性質の人には他の性質の人よりもその感情はやや長く殘る、しかしとにかく凡て煙のやうに、或は風に吹かれる香料のやうに早く過ぎ去る。もし諸君は誰でも、この感情が起るとすぐに、起つた通りにそれを紙に書ける物と思つたら、それは甚だ間違つて居る。これは熱心なる骨折によつて始めてできる。その骨折とはその感情を再起させる事である。

始めのうちは諸君は丁度起きてから夢を思ひ出さうとして居る人のやうであらう。夢を思ひ出さうとする事の如何にむつかしいかは私共皆知つて居る。しかし眠つて居る間に受けた感覺の助けによつて、この感情は再生するのである。私はこんな場合には大急ぎでできるだけ充分に、その情緒の境遇及び原因を書き留めて、できるだけ詳しくその感情を書いて置くやうにする事を勸告する。諸君はそれを正しい文法で書かうが、一節毎に終りのある文章で書かうが、或は後から書かうが前から書かうが少しも差支はない。最も大切な事はその經驗のノートを取つて置く事である。このノートはそれから植物が生長して花が咲くやうになる種子になるのである。

この大急ぎのノートをよく讀んで見ると、諸君は感情が、そのノートで、殊にそのノートの或部分でかすかに再生する事をさとるであらう。しかし勿論、諸君に取つては別だが、そのノートは何の價値もない。そのつぎの仕事はそのノートを開展して、自然の順序に配列して、正しい文法で文章の一節一節を組み立てる事である。こんな事をして居ると、ノートを作つて居る間に忘れてゐた色々の事が諸君の心に歸つて來る事が分る。ノートの開展は、大概もとの四五倍程になるが、或は十倍にもなる事があらう。しかし今新しく書いた物を讀むと、感情は歸つてゐない事を見出す。感情は全然消失して居る。そして諸君の

書いた物は、頗る平凡に見えがちである。三度目に書き直すと言語と思想はよくなつたが、やはり感情が復歸してゐない。四度目五度目に書き直して居るうちに、驚くべく澤山の變化ができる。卽ち、こんな退屈な仕事をやつて居るうちに、諸君は必ずこれまで書いてゐた事の多くは不必要である事、それから又最も必要な事は未だ少しも適當に開展されてゐない事を見出すであらう。くりかへしてその仕事をして居るうちに、新しい思想が出て來る。もつと引きしまつて、もつと强く簡單になつて來る。そして最後に、喜ぶべき事には、その感情が歸つて來る、――否、新しい心理學上の關係で豐富にされて、最初よりは一層强くなつて再生するのである。諸君の書いた物の美はしさに驚くであらう、しかし諸君はその時の感情を信じてはいけない。直ちにそれを印刷にする事を止めて、引出しに入れて、少くとも一ヶ月はそれを見ないで、そのままにして置く事を勸告する。それだけ經過してから讀み直して見ると、諸君は必ず未だもつとそれを完全にする事ができる事を發見するであらう。一二それ以上直したあとで、恐らくそれは諸君の全力をこめた最上の物となるであらう。そして諸君がその事實なりその物なりを始めて知覺した時に、諸君自らが感じたと同じ情緖を、他人に感じさせるであらう。その徑路は餘程望遠鏡の焦點を定める徑路のやうである。諸君は遠くにある物を最もはつきり見ようとする前に、幾度もその管を少

し引き出したり引き込めたり、引いたり押したりせねばならない。さて見物をする人が望遠鏡に對してする事を、文學の技術家は言語文學に對してせねばならない。そしてこれが如何なる種類の文學上の作品に對しても、第一に肝要なる事である、それは骨の折れる仕事であるが、仕方がない。テニスンでも、ロセッティでも、英文學の大家の誰でも、今日それをやらずにすんだ人はない。長くやつて居るから、この仕事が輕くなると云ふ事はない。その方法にもつと非常に熟練して來るかも知れない、しかし仕事の實際の分量はいつでも殆んど同じである。

私は諸君のうちでから聞かれる人がある事を想像する、『先生が説明された方法以外に情緒なり情操なりを表現する方法はないでせうか。先生は最高の文學は情緒の表現であると云はれたが、先生が示された仕事は最もむつかしい物です、外に方法はありませんか』ある、もう一つ方法はある。そしてその方法は私の時々想像するところでは、日本人の天才の性質と、それから恐らく日本語の性質と、一層よく一致して居る。しかしむつかしい事は同じである。その上それは非常に大きな經驗と、甚だ特別の技倆とを要するので、さらに都合が惡い。それは所謂非人稱的方法であるが、私はこれはよい名稱と思はない。この方法に成功する事のできた大文人は甚だ少數であるが、その少數は大概フランス人で

あつたと思ふ。そしてそれは散文にのみ適當した方法である。

情緒は或は表現され、或は暗示される。表現する事がむつかしければ、少くとも同じやうに暗示する事もむつかしい、しかしもし諸君が暗示する事ができたら、その暗示は表現よりも一層有力でありがちである。何故なればその方は想像に任せる事が多いから。勿論諸君は凡て文學上の技術は幾分暗示的でなければならない事を忘れてはならない――この點をよく記憶すべきである。しかし所謂非人稱的方法によればそれは全部暗示的になる。作者卽ち話す人の情緒の表現は少しもない。それにも拘らずその情緒は讀者の方に起る、しかも非常な力で起る。現代に於てこの方法で完全に成功した唯一人の甚だ偉大な作者がある――それはギ・ド・マウパッサンであつた。

いくつかの事實を、極めてあつさりと、平々淡々に、しかも甚だ大きな感情を引き起すやうに、述べる事もできよう、或は會話を書く場合に、讀者の心に、話す人の感情を丁度傳へるやうに、そして少しも說明を加へないで顏つきや動作までを暗示するやうに書けよう。しかし諸君はここでは、言葉の價値の選擇(それもやはり必要ではあるが)よりも事實の選擇の方がむつかしい事を直ちにさとるであらう。諸君は最も簡單なる事實その物の文學的價値――卽ち情緒的價値を完全に判斷しなければならない。こんな判斷のできる人

は人生の大きな經驗を積んだ人でなければならない。その人は非常に發達した戯曲的才能をもつて居らねばならない。その人は凡ての階級の言語の會話的特色を知らねばならない。その人は男や女を型によつて分類する事ができなければならない。それで私は若い時にこんな事のできる人があるかどうかを甚だ疑ふ。大概の場合には、それのできる才能伎倆は中年になつて始めて發達するのである。その理由は、その頃になつて始めて人が相當な經驗を得られるからである。それ故私は文學上の仕事の始めにこの方法を取る事を勸められない、しかしこの方法のできるやうな力をできるだけ色々養成する事を非常に勸めたい。經驗に加ふるに、畫家のやうな明瞭な知覺の自然の能力が必要である事を忘れてはならない。この種類の作に關する名を、私はただ一つしかあげなかつたが、私はさらにプロスペ(譯註)ル・メリメの『カルメン』『マテオ・ファルコネ』のやうな話に諸君の注意を促がしたい。時として諸君はダウデーの話、殊に今云つた方法を示すやうな佛獨戰爭に關する短篇小說を見出すであらう。しかしこれ等の短篇小說は文體がいつも少し固定してゐて、個人的感情を表はすやうな說明が多少加はつて居る。マウパッサンやメリメの最上の作になると個人的要素は全然見えない。說明は少しもない、ただ外の人の口で云はせてある何か會話の節々にあるだけである、事實があるだけ、しかもその事實は所謂直ちに諸君の『咽喉をし

めつける』種類の物である。

諸君は未だこの二つの創作の方法の定義、もしくは定義らしい物で充分滿足してゐないと私は信ずる。私は想像するに諸君のうちには數週間で、或は數日で小說を書き上げて、日本の雜誌に發表されると數千の讀者を感動させて、或は多くの人を泣かせる事のできるやうなよい作者もあるだらう。私は諸君に多くの人を喜ばせ、彼等の情緖を刺激し、彼等の最上の情操を强くする力のある事を疑はない、そしてかうする事が文學の任務である事を私は云つた。しかしもし諸君が、こんな作品を文學と呼ぶかどうかと聞かれたら、私は『否、それは新聞物である。早く、隨つて不完全にできた作品である。それは文學の鑛石である、本當の意味で文學でない』と答へよう。しかし諸君は云ふだらう『公衆はそれを文學と云つて、文學としてそれを受取り、文學として報酬を拂つてくれる――それ以上何を要求する事があらう』

私は例證をあげて說明する方が一番よからう。ギリシヤ人について、アラビヤ人は恐らく言葉で美を說明する事にかけては、詩人と美術家のうちで最も熟練した者であつた。身體のどの部分にも特殊の美をもつてゐて、それにはそれぞれ特別の名がある。その上凡ての美には種類と階級があつた。もし或婦人が第一等の美の階級に屬する場合には、その婦

人は特別の名で呼ばれる。その名の意味は人がその婦人を見るとびつくりする、それから後、見る度毎に、その婦人は益〻綺麗になつて、遂に見る人が自分で自分の感覺を疑ふやうになる。美の第二の階級に屬する婦人は、始めて見た人は第一階級の婦人を見た時と同じ程度で魅せられるが、あとで次第に第一回に考へた程綺麗でなくなつて來る。第三、第四、第五、第六、第七階級の美を有した婦人についても同じ規則が應用されるとだけ云つて置く事が必要である。そして階級が下るに隨つて、缺點が慣れるに從つて餘計に現れて來る。さて新聞物の安價な情緒的文學と本當の文學との相違は丁度同じ程度である。安價な文學は當分暫らくは割がよい、それから本當の文學は少しも割に合はない。しかし大作家の書いた立派な小說は、諸君がそれをくりかへして讀む度每に益〻美はしく見える、そして何代後までもそれを讀む人々に益〻美はしく見える。しかし安價な文學は始めて讀む時だけ面白いが、二回目に缺點が見え、三回目にもつと見え、四回目にさらにもつと餘計見える。そして缺點が見えて讀者の興味がそがれるから、遂にいやになつて本を投げ出す事になる。長い間には一般公衆がさうするのである。今日彼等に興味のある物を彼等は明日投げすてる。そして投げすてるのが正當である、何故なればそれは用意周到の作ではないから。

もう一つ一般的の注意をしよう、凡て一般的説明には除外例がある事を諸君は記憶せねばならないが。しかしこの事を覺えて置いて、つぎのやうに云ふ事は過言ではない、――どの國語に於ても、所謂大傑作(クラシック)とは完全なる細工を表はした物で、大傑作でない書物はいつも不完全な細工を表はした物である。

譯者註　プロスペル・メリメその他に關しては、別に『フランス浪漫派の人々』と題する講義がある。

三

つぎに考ふべき問題は構造――即ち文章の建築、物をまとめる第一の規則である。文藝作品の最も普通の困難はどうして始めるかと云ふ事である。世界中誰でも丁度この點で困つて居る。諸君が題を與へてそれについて何か書くやうにと或子供に云へば、その子供は困る。何から書き出したらよいか。大詩人、大論文家、大戯作者でもこの弱點に對して全く超越する事はできない。その人々も皆時々同じ質問を自ら問はねばならない。始めやうがむつかしい。しかし經驗のある人はそれを避ける方法を心得て居る。私は信ずる

に多數の經驗家は甚だ簡單なる方法でこの始めやうの困難を避ける。

それはどうしてか。

始めると云ふ事を全然しないで。

これは少し說明を要する。昔は凡てに對して規則があつたやうに、始めやうにも規則があつた。文藝作品も外の作文と同じく、修辭學の規則に隨つた物である。文體の事に關して述べる時に、もつとこの事について云ふ事にする。歷史、批評論文、殊に哲學に於ては始まりは甚だ肝要である。範圍と案は、豫め定められねばならない。諸君の云はうとする事、どんな風に云はうとするかその方法、それを云ふのにどれ程の場所が要るかその長さは諸君に分つてゐなければならない。純粹に智力的な種類の眞面目な充實した著作は、きまつたそして理論的な方法でなさるべきである。私はその理由を說明する必要はないと信ずる。しかし、詩歌その他の形の情緒的想像的文學に關しては全く違ふ。詩人や小說家は靈感（インスピレイション）を全部一時に得る事はない、その作品を完全にして居る間に、次第に來るだけである。最初の靈感はただ情緒の不意のひらめき、もしくは新しい觀念の突然の襲來である。それが直ちに外の相互に關係せる情緒や觀念の多くの複雜なる群（むれ）を眼ざめさせて動かすのである。それ故第一の靈感は物の始まりを表はさないで、ただその中央、或は終りを表は

すかも知れない。

私は數年前、京都で日本の畫家が馬を描くのを見てゐて驚いた事がある。その人は甚だ巧みに馬を描いたが、いつでも尾から始めた。ところで西洋では馬は頭から描くのがきまりであるから、私は驚いたのである。しかし考へて見れば、畫工が馬の頭から始めようが、尾から、腹から或は脚から始めようが、本當によい馬さへ描き上げたら何ともないわけである。それで自分の仕事を本當によく心得て居る大美術家なら外の人の規則には隨はない。その人々は勝手に自分で規則を作るのである。銘々は銘々自分の都合のよい風に自分の作品を作る、そして都合のよいと云ふのは、そんな風に仕事をするのが最も容易であると云ふ意味である。文學に於ても全く同一である。それで『どんな風に始めよう』と云ふ事は、尾なりその他、別のところから始めないで頭から始めたいと云ふ事である。卽ち、諸君自らの力をたよりにするだけ未だ經驗を積んでゐないと云ふ事である。もつと經驗を積んでゐたら決してこんな問を發しない、そして尾から始める――卽ち話の始めを少しも考へないうちに終りの方を書くだらうと思ふ。

著作の法則はかうである。第二の情緒について考へる前に諸君に起つた第一の觀念なり情緒なりを開展させよ。諸君が第一の分をやつて居るうちに第二の物はあり餘る程現れて

來る。もし同時に三四の價値ある情緒が諸君に起つて來れば、そのうちの一番强い物、或は最も諸君がやり出して見たい物を取るがよい、それが偶然最もむつかしい物でなければ。多數の若い作者のために私は云ひたいが、最も抵抗の少いところ、最もやり易いところから始めるがよい。小說なり詩なりの中央であらうが終りであらうが始めであらうが構はない。お互に分れて居る話や詩の部分を開展して居ると、諸君は驚くべき事實、卽ちそれ等は自然に一緖になる傾向があつて、始めに考へてゐた物と違つた、しかし遙かによい物となる傾向がある事を發見するであらう。これは構造としての形に關する靈感である。しかしもし諸君がいつでも始めのところから始めようとすると、とかくこの靈感を失ひがちである。文學上の法則は、詩や小說に自然に形成させる事である。未だ大方できないうちにそれを作り上げようとしてはならない。最も驚くべき作と云ふのは、作者が形を作つたり計畫したりする作ではない、それは自然にできる作、それが大方できかかつて居る時始めから終りまで作者に、それを變へさせて、始めに作者が想像もしなかつた構造をそれに與へないわけに行かないやうになつた作の事である。

諸君はこれ等の規則は實際上の經驗の結果で、歐洲のどの國の文人にも充分によく知られた物であるが、學校や大學で敎へられる規則の正反對である事を見るであらう。學生は

いつでも始めはかうと教へられるが、いつも始めに困るのである。しかし文學を作る人々、最上級の詩人や大小說家、――それ等の人々は決して始めないのである。とにかく規則通り始めのところから始めない、彼等は馬を描くのに頭から始めないで、むしろ蹄から或は尾から始める事が多い。

私の構造について云ふべき事はこれで全部である。諸君はこれは甚だ少いと考へるかも知れない。私はこれで全く充分と答へる。あとは本能と習慣で分る、その方が文法學者や修辭學者よりもよく敎へてくれる。人が文學的本能で分らない時、文學的習慣で習得できない物は、規則や書物では決して得られない。これ等の規則のうち甚だ異端的に見える物があるかも知れないが、これから文體に關する私の考を諸君に紹介したら、さらに一層異端者のやうに見えるかも知れない。私の考では――實際私の信ずる處では――文體と云ふ問題についてこれまで書かれてある事は一切全然無意義である、何故なればそれは結果を原因とまちがへて居るからである。こんな事を書いて世界の到るところで文學の學生に非常な損害を與へて居ると思ふ、それで私は諸君に文體などと云ふ物はない事を證明する事を提言する。

四

諸君は私に尋ねるだらうと想像する、『何故先生は文體と云ふ物がないと信じてゐながら、マカウレイやバークやラスキンの文體の事をお話しなさるのですか』私は答へる、私は講義のうちに何故色々違つた作者が、それぞれ評價されるかその理由をできるだけ充分に說明するのが私の義務である。それでさうするために私は『文體』と云ふ言葉を使用するのは一つは習慣であるから、又一つはそれは何物かを表はして居るからである。しかしその何物かに附隨して居る一般の概念は誤つて居る。所謂『文體』なる物はもはや存在しない。所謂『文體』は何か外の物――私なら『性格』と云ひたいが――に代へられねばならない。

諸君が辭書を見れば『文體』と言ふ言葉に色々の定義のある事を見るであらう、しかしこれは皆二つにまとめる事ができる。第一の或は一般の文體は單に修辭學的である。卽ち文章の各部分の形と釣合を支配する完全に揃つた規則に隨つて文章を構成する事を意味する。昔はこれが文體であつた。誰でも同じ規則に隨つて、そして全く同じ方法で書くと想

像された時代があつた。違つた人々がこんな規則によつて書いた物は、餘程似て居ると想像する事ができる、そして實際文章の古典的法則が强いられた時分の佛英の作者の文體は餘程似てゐた。古典的と云ふのはギリシャ、ローマの作者を研究して得た規則である事を諸君は知つて居る事と想像する。十七世紀末から十八世紀の始めにかけて西洋の文人が努力した事は古典のまねをする事であつた。それで彼等は何物にでも、文章のどの部分にでも、どの言葉の位置にでも、規則や標準を置いた。そのわけで文體は非常に相似寄つて居る。フランスでは私の云ふその相似が英國よりも大きかつたのはフランス語の方が英語よりもつと完全な國語で、英語より遙かにラテン語に近いからである。例へばディデローの書いた小説の文體とヴォルティアの書いた小説の文體とを區別する事は甚だ困難である。所謂『百科全書の人々』(譯者註一)は餘程同じやうな書方をして居る。しかしそれでも、よい批評家は差別を發見する事ができた。どれ程規則は正確でも、それに隨ふ方法は性格、精神的品格の相違によつて違ふからである、全く同じやうに考へ感ずる者は二人とない事は云ふまでもない。個人的思想感情のこの相違は、極めて嚴重な古典的文體の時代に於ても、銘々の作者の作品に極めて少しの違つた調子を當然與へる。それで古典的規則が止められたあとて、今日私共が文體と云ふのはこの調子の違つた點の事である。しかし個人的文體の問

題について未だ一般的な誤解がある。人は未だ十八世紀の考をすてない。古典的文體の法則があるから個人の文體にも法則があると考へて居る。私共がマカウレイやフルード、アーノルドやデクインセイの文體の事を云ふと、それは一人の文學的方法が他の人の方法と區別ができる文章の或規則の事を意味すると考へる。こんな規則を作らうと企てる人があり得るだらうか。作者その人達でもそんな規則をきめる事ができない。そんな規則は存在しない。これは全然誤解――しかも甚だ重大なる誤解である。その相違は少しも定義を下す事のできるやうな規則によるのではなく、全然個性の相違によるのである。それで、私は文體と云ふのは近代の言葉の意味では性格であると云ふ。

これを證明せねばならない。今日どんな作者でもその作者の文體と云ふのは何の意味であるかを考へて見よう。その意味は文章を組立てるその人の方法が外の人の組立て方と明白に違ふと云ふ事である。ところでどうしてその相違が分るか。重に三つの方法で分る。

一、作者特有の、文章の或韻律的形式（メトリカルフォーム）によつて。

二、文章のうちの、單に節奏（メジュア）によるばかりでなく言語の音樂的價値の感じから來る音の或性質――好音調（ソノリティー）によつて。

三、強さ、或は色の特別の印象を與へる言葉を選ぶ事によつて。

さて私共は作者のこの三つの特色を説明したり定義を下したりする事がどうしてできよう。それはできないと私は云ふ。セインツベリイ氏[譯者註二]のやうに聖書から、或は豐富な散文の或巻から、或文句を取つて、詩のアクセントや音調が示されると同じ方法によつて、その音調やアクセントが分るやうにならべる事はできるだらう。しかしかうしても抑揚は分らない。抑揚の分るためにシドニー・レイニア[譯者註三]と呼ぶ甚だ怜悧なアメリカ人の思ひつきを採用して、文章を音樂にする——卽ちどの言葉の上にもアクセントや韻脚(フツト)の使用に加へて樂譜をつけて書く事にしなければならない。それだけの事はできるだらう。しかし言葉の價値に關する作者の概念をきめると云ふ、不可能な仕事が未だ殘つて居るわけである。言葉は蜥蜴(とかげ)に餘程似て居る、位地によつて色が變ずる。同じ思想を表はすために同じ言葉を使ふ二人の違つた作者は、その言葉に二つの全然違つた特性を與へる事ができる、卽ち文章のうちのその言葉の場所、或はもつと簡單に云へば、その言葉が屬する結合が非常に重大であるから。そしてこんな事は凡て作者の方では多少無意識でやつて居る。作者は規則によつて選んで居るのではなく、ただ感情で、所謂文學的本能で選んで居るのである。違つた作者の文體に現れたこの種類の相違を、銘々の使つた動詞、形容詞、及び副詞を數へたり分類したりして定めようと計畫された事があつた。この計畫は結局無效に終つた。詩に

關しても同じ事が試みられた。テニスンが『赤い』と云ふ形容詞を何度、スウィンバーンが『赤い』と云ふ形容詞を何度使つたかを知る事は興味があるだらう、しかし何故テニスンが使つた同じ形容詞の價値が、スウィンバーンに使はれた價値と全く違つて居るかの理由を理解する事が、少しも私共の助けにならないだらう。凡てこんな差違は心理上の差違に基づく筈である、それだから再び私は文體は性格であると云ふ。

それからここで現代の英國作者について『文體』を研究しようと試みる事の無用な事について警告の言葉を發して置きたい。私は學生から文體の研究として誰を讀むべきかと云ふ質問――それからそんな種類の外の質問をよく尋ねられたが、それは學生達が文體とは事實どんな物か知らない事を示して居る。日本學生で、餘程長く外國に行つてゐた人でないと外國人の文體の差違を實際理解する事ができないと、私は敢て云はねばならない。理由は明白である筈である。外國の作家の文體の差違をよく理解するためには、その外國語の絶對に完全な知識をもたねばならない、韻律(リズム)、アクセント、音調、色の能力を悉く知らねばならない。諸君は十萬の言葉の比較的の價値を知らねばならない――それが諸君に取つて不可能である。それ故外國文學の方面では、古い形式の修辭學によらない文體について理解しようと努める事は止めるがよい。それから十八世紀の文章の構造に關する大小の

規則を理解するために古い規則を學ぶにしても、ギリシャ語ラテン語の練習が不足であるから、それだけの知識は諸君に殆んど無用になるだらう。文體は諸君にとつてはただ甚だ漠然たる方法でのみ學ぶ事ができる。しかし私はその方法は最も肝要だと思ふ、何故なれば文體は性格であるから。私が今云つた事は勿論脇道である。その理由は、私が今話さうとして居るのは英文でなく、日本文についてであるから。

ここで諸君は、私の日本語を全く知らない事が残念にも妨げになつて居る事を認めなければならない。色々云ひたい事はあるが、この理由で私の力に餘つて云はれない事がある。しかし言語の差別と離れて、一般の事實がある、その事實によつて、話したら全然無用にもなるまい。日本語でも或はその他の國語でも、全くあり來りの文體でなく、苟くも文體と名のつく物がありとすれば、その作者の文體は性格を代表すべき筈である、そこで私の云ひたい事はかうである。もし作者がその作品を完全にしようとして最善をつくせば、その努力の結果が、本當の意味の文體となるのである。即ちこの人の作品は、それと同じ題の外の作品と區別をつける個性、性格ができる。丁度その人の顔やその人の話しくせが、その人の物で他人の物でないやうに、明らかにそれはその人の物である。しかし努力の程度が少いと、性格の現れやうも少い、隨つて文體も小さい。多くの拙い人々の作品は皆一

熱心と勞力が大きいだけ、その文體ははつきりして來る。それて、私の意味が分るだらう——即ち文體は勞作の間に發達して來た性格の結果である。文體とはどこの國に於てもこれに外ならぬ物てある。

ここでもう一つの事實を注意したい。一般文學の歷史に於て、私共が文體に變化がなく一樣てある事を見る場合には、進步も見なければ、甚だ大きな文學上の功績も見ない。英國の十八世紀の古典時代が一例てある。しかし類型的文體がなくなつて個人的文體が發達する時は、その反對てある。それは高尙なる發達、新機軸、新思想、その外何ても文學上の進步を意味する物てある。十九世紀末の英文學即ち現在の英文學に一つ惡い徵候がある、それは文體が殆んどなくなつた事てある。十八世紀の始めのやうに、再び類型的文體がある。今月出版になつた百部ばかりの英小說のうちて、一人の作者と他の作者との書方に差別を見出す事は殆んどてきない。ラスキンを除いて、大文體をもつた人々は死んだ、そのラスキンも書かなくなつた。小說界は、再び誰ても附隨する色々な規則に支配されて居る。そして小說を書く事は（まれに例外はあるが）藝術てなくて、商賣になつて居る。それだから何等偉大な物が現れない、そして反動が來るまでは偉大な物が現れさうにない。勿論

キップリングの非常の天才がある。彼はあらゆるしきたりを離れて、純文學の殆んどあらゆる方面に彼獨得の新しい文體を作つて居る。しかし彼の側に置くべき人は外にない、そして彼の天分の發達は、多分彼の本當に驚くべき才能と彼が印度に生れたと云ふ事實によるのであらう。

それで、この講義の最後の章——言語の問題——に私は來た。キップリングの著作にある一つの事實、そして著しく驚くべき事實は、彼は民衆の言葉を驚くべき風に使用した事である。或場合それがよいと思へば、眞面目ないかめしい文體を完全に使ふが、又それが自分の目的に都合がよいと思へば、往來に行はれる言葉を使ふ事を少しも躊躇しない。ところで、エマスンがかつて云つた言葉を忘れてはならない『街頭の言葉は學士院の言葉よりも、比べられない程遙かに、力が強い』

譯者註一　Diderot〔1713—1784〕D'Alembert〔1717—1783〕その他の人々が約十五年を費して編纂した百科全書の事、この人々は團體としては十八世紀の懷疑派を代表する。

譯者註二　Prof. G. E. B. Saintsbury〔1845—〕英國の文藝批評家・歷史家。

譯者註三　Sidney Lanier〔1842—1881〕アメリカの詩人・學者、批評家。

五

私はこれから、慣習（しきたり）に反對の事を云ひたいから、諸君にもう少し辛抱して貰ひたい。私の信ずるところでは、日本文學は未だ大部分古典の域を脫しない、前世紀のしきたりから離れない、それからその國語の充分なる能力は最近の作品に現れてゐない。私の信ずるところでは俗語で、普通の會話、民衆の日常の言葉で書く事は野卑だと思はれて居る。それで私は諸君に結局こんな信念に對して勇敢に戰つて貰ひたいと敢て云ふ。これは絕對的に必要であると私は思ふ。日本に本當の民衆の言葉で書く事を恐れない作者の出ないうちは新しい日本文學が出現して生命、思想及び國民性に影響を與へ、日本が甚だ必要とする文學的同情を日本のために作り出すと云ふ事にはならない。そんな變化は必ず來ると云ふ一事だけはたしかである。それが來るやうに助力する人は、日本に非常な奉仕をする事になる。何故なれば文學が、教育ある人々と云ふ特別な階級が理解するやうにのみ作られて居る間は、それは國民全體を影響する事は少しもできない。どの國でも教育のある階級と云ふのは全體の極めて小さい部分をしか代表してゐない。そんな作者は教師である筈だが、

學士會院の言葉で教へる事はできない。丁度昔、ウィックリフやチャウサーやその他の英國の文豪が新しい輿論を作るためにさうする事を必要と思つたやうに、民衆の言葉で教へなければならない。日本も必ず新しい通俗文學を必要とするだらう、そして諸君は或種類の通俗文學は或種類の作者によつて作られると云ふかも知れないが、私は偉大なる通俗文學は無教育の人々、或は廣い範圍の知識のない人々によつて作られるわけはないと答へたい、それは學者によつて、或は少くとも、一般民衆にその母語によつて話さうと思ふ人々、そして數百萬の人々の心を動かさうと望んで居る人々によつて作られねばならない。どの國でも、これは本當の文學の目的である。そして文學上の發表に勢力がある限り、その勢力が、百年以前英文學が押込めてあつたやうに、押込めて置いたらどれ程損失を受けるか考へて見るがよい。教養のある一萬か二萬の讀者を喜ばせるが、大きな國民全體から見てはただの名にすぎない人が一方にある。又他方に事務室に居る國務大臣にも、稲田の中に居る農夫にも同じやうに分るやうに、一時に四千萬の人に話しかける事のできる人がある。どちらが大勢力であらう。國家の前途に對してどちらが多くの仕事をする事ができよう。最大勢力を代表するのはどちらだらう。たしかにただ二萬人の讀者をもつて居る人でない。それは、既に話した若い英詩人（譯者註）のやうに、同時に全世界の彼の凡ての同國人に話せる、し

かも誰でも感じ、かつ、理解するやうな力を以て話せる人物である。この頃ロシヤ皇帝が歐洲各强國の武裝解除を發起した時、この若い詩人はロンドンタイムスに熊――信用のできない熊の小詩を送つた。英語國でその詩の讀まれないところはなかつた、そして私の信ずるところではその方がロシヤ皇帝の敎書よりも、英國の輿論に遙かに大きな效果があつた。それが勢力である。一億の人に話しかける事のできる人は、帝王よりも强い。しかしその人は學士院の言葉で話してはならない。

譯者註　ささに出て居る Rudyard Kipling (1865—) の事。

文學に關する讀書について（二二・一一・一七・夜）

書籍や典據を離れて文學的生活及び著作に關する連續的の講義をして、できるだけ遂つた國々に於ける文學の製作者の間の、實際上の經驗の結果を示す事に關する、私の約束を果したい。題は讀書である――見たところ或は甚だ簡單な題目だが、實はそれ程簡單でない、諸君の考へられるよりも、もつと遙かに重大である。私は讀書を心得て居る人は極めて僅少であると云つてこの講義を始める。趣味と判斷が得られるまでには、文學に關する澤山の經驗が必要である、そしてそれがなければ、讀書法を會得する事は殆んど不可能である。私は殆んど不可能と云ふ、その理由は、元來生得の趣味を以て、遺傳の文學的本能によつて、二十五歳にも達しないうちに非常によく讀む事のできる珍らしい人が時にあるからである。しかしこれは例外である、それで私は普通の人に話す。

書物の文字、文句を讀む事は本當の意味の讀書にはならない。機械的に言葉や文字を讀

んでゐて、甚だしきは全く正しく音讀しながら、心は全く違つた題目に奪はれて居る事のあるのに諸君はよく氣がつくであらう。この單に機械的な讀書は、若い時に全く無意識的になる、そして注意力と無關係に行はれ得る。それから自分の興味のために、言ひ換へれば『話のため』にのみ本を讀む事、卽ち書物からその話の部分だけを引き拔く事を讀書と云ふ事はできない。しかし世界でなされる讀書の大部分は正しくこんな風に行はれるのである。幾千また幾千と云ふ書物は毎年、毎月、いや毎日とも云はれやう、少しも讀書しない人々に買はれる。その人々はただ讀んだつもりで居る。彼等は面白いために、彼等の所謂『時間つぶし』に書物を買ふ、一二時間のうちに、彼等の眼はページをずつと通つて、彼等の頭に、見てゐた事に關する一二のぼんやりした考が殘る、これを彼等は讀書と信じて居る。『君は何々の書物を讀んだ事があるか』と問はれる事や『私は何々の書物を讀んだ事がある』と云ふ事程ありふれた事はない。しかし是等の人々は眞面目に云つて居るのではない。『私はこれを讀んだ』或は『私はあれを讀んだ』と云ふ千人のうちで、その讀んだ物について、聽くだけの直打のある說を吐く事のできる人は恐らく一人もあるまい。度々私は學生が或書物を讀んだと云ふのを聞く、しかし若し私がその書物について何か質問をしたら彼等は何の答もできない、或は精々の處で、彼等が讀んだつもりで居る物につ

いて誰か外の人が云つた事をくりかへすだけである事を見出す。しかしこれは學生にのみ限つたわけではない、凡ての國に於て大多數の人々が書物を丸呑みにする方法である。それでこの講義の總論的部分を結ぶために、私は大批評家と普通の人との區別は重に、大批評家は讀書法を知つて、普通の人は知らないと云ふ事を云ひたい。或書籍の內容に關して創造的意見を發表する事のできない人は、實は書物を讀む事のできない人である。

　疑もなく諸君はこれは讀書と研究を混合して居ると考へるだらう。『私共が歷史や哲學や科學を讀む場合には、それこそ甚だ丁寧に、本文の意味なり關係なりを充分に研究して徐ろに、考へながら讀む。これは勉强です。しかし敎室の時間以外に小說や詩を讀む場合は、それは娯樂のために讀むのです。娯樂と研究は全く違つた物です』と諸君は云ふだらう。諸君は皆から考へるかどうか知らないが、靑年は大概そんな風に考へる。事實は、讀む價値のある書物なら、丁度科學の書物が讀まれると同じ方法で――單に娯樂のためでなく――讀まるべき物である、それから讀む價値のある書物は、悉く科學の書物にあると同じ分量の價値があるわけである、ただその價値は全然違つた種類の物かも知れないが。そのわけは、要するに、小說傳奇詩歌のよい書物は科學的著述である、それはいくつかの科學の最高の原理、殊に人間の性質の知識と云ふ、人生の大きな科學の原理に隨つて作られ

た物であるから。

外國の書籍に關しては、これは殊に本當である、しかし私共自身の國語でないもので讀む場合には、與へられた助言に隨ふ事は一層困難であらう。しかし、どれ程の英人は英語のよい書物を實際讀むと諸君は想像するだらうか。どれ程の佛人が佛語のよい書物を讀むだらうか。多分讀んで居るつもりの二千人のうち一人より多くはなからう。さらに、今日ロンドンで毎年六千冊以上の書物が出版されるが、今日程一般公衆がぞんざいな讀方をした事はなかつた。書物は一種の流行のやうに、——むしろ或流行に隨つて書かれる、賣られる、讀まれる。外の物にも流行がある通り、文學にも流行がある、それで公衆が特種の娯樂を要求すると、その要求に應ずるために特種の讀書が與へられる。この公衆には眞の文學にある藝術も優美も、大傑作にあるべき大思想も全く無用になつたので、學者は本當の文學を作り出す事は殆んどなくなつた。文體も美もない書物、ただ面白い話を書いて大きな金儲けができる、同時に、實際よい書物を製作するのに、三年五年十年もかかつてては或は餓死すると云ふ事が分つて居る以上、彼の天職の高い方の義務に不忠實になるのは止むを得ないだらう。金錢の事に關して幸福な地位に置かれて居る人々は、時々何か偉大な物を或は企てる事もできよう、しかし耳を傾けてくれる人は誰もないかも知れない。

最近數年の間に趣味は非常に墮落したので、私が以前に云つたやうに、文體は事實消滅した——そして文體は思考（スインキング）である。そして英國に於けるこの事情は惡い習慣の讀書——讀書法を知らない事から重に起る。

學者が心にかけて置くべき事の第一は、書物は單に娯樂として讀むべき物でないと云ふ事である。餘り教育のない人は娯樂のために讀書しても、それに對して非難さるべきでない、その人々は實際の大文學にある深い方の性質を評價する事はできない。しかし大學教育を受けた青年は、單に娯樂のために讀書しないやうに、早くから自分で訓練しなければならない。一たびその訓練の習慣ができると、單に娯樂のために讀書する事ができなくなつて來る。さうなると、智力の糧（かて）を得る事のできない書物、高尚な情緒とその人の智力に何等訴へる事のない書物は、たまりかねて投げ出すであらう。これに反して、娯樂のために讀書する習慣は、數千の人々にとつて酒を飲む事、阿片を吸ふ事の習慣と全く同じ種類の習慣になる、それは一種の催眠劑、時間を空費させる物、永久の夢の狀態を續けさせる物、結局思想の能力を凡て破壞して、心の表面の部分をのみ活動させて、感情の深い泉や知覺の高尚な能力を使用せずに置くと云ふ結果になるやうな物である。

私共は單にこの種類の讀書について如何なる事實があるかを述べて見よう。例へば一人

の事務家が毎日事務所へ通勤の往復の途中、時間潰しに本を讀む、何を讀むのであらう。勿論、小説、非常に樂な讀み物だから暫らく彼の苦痛を忘れさせる、毎日のおきまりの小さい色々の苦勞に對して彼の心を鈍くさせる。一兩日でその小説を讀み了る、それから別のを取る。この節は讀む事は早い。一年經つたら、彼は百五十册から二百册までの小説を讀んでゐた、どんなに貧しくてもこの贅澤は彼にはできる、巡回文庫の制度があるから。數年の後には彼は何千と云ふ小説を讀んだ事になる。彼はその小説を好むのであらうか。否、彼は諸君に、その小説は皆殆んど皆同じやうであるが、ひま潰しにはなる、今では必要物となつて居るから、もしこの種類の讀書を續けないと甚だつまらなくなると云ふであらう。その結果は能力をしびれさせる事にしかならない。彼はその數千册のうち二三十册の名も覺えてゐない、まして內容など覺えて居るわけはない。この讀書の結果はただ精神が朦朧となる事をしか意味しない。それが直接の結果である。間接の結果は精神の發達が妨げられる事である。凡ての發達は當然多少の苦痛を意味する、そして私が云ふやうな讀書は無意識にその苦痛を避ける手段として使用される、それでその結果は萎縮である。

勿論これは極端な例である、しかし娛樂のために讀書をして、それが習慣となつて、その習慣に陷る方法が手近にあると云ふ場合は、これは究極の結果である。現在日本にはこ

んな種類の危險は殆んどない、しかし倫理上の警告として私はこんな例證をあげる。

これはよい文學の種類にも避くべき物があると云ふ意味ではない。よい小說は最大の哲學者でも實際讀みたいと思ふ程によい讀物である。要するに讀まれる物の性質よりもさらに、讀方が大事である。よくこれまで云はれたやうに、どんな書物でも何かよいところがそのうちにあると云ふのは極端かも知れない、ただから云ふ方がもつとよからう、卽ち、書物からよい影響を受けるのは、その著者がどんなにゑらくとも、著者の藝術によるよりは、讀者の習慣による方遙かに多い。

以前の講義に於て、私は子供の觀察法は大人の觀察法よりもすぐれて居る事に、諸君の注意を促さうとした、同じ事實が子供の讀書法についても注意される。たしかに子供はただ極めて簡單な物をしか讀めない、しかし子供は極めて完全に讀む、それから讀む物について倦く事もなく、くりかへしくりかへし考へる、一つの小さいお伽噺は、讀んでから一月の間も彼の心を占有する。彼の小さい想像の氣力は悉くその物語の上に消費される、それでもし賢明な兩親なら、第一の物語の面白さ、及びその想像上の結果が消え始めないうちは第二の物語を讀む事は許さない。それから後の習慣、私が敢て惡いと云ふ習慣はすぐに子供の本當に注意深い讀書力を破壞してしまう。今度は職業的讀者、科學的讀者の場合

を考へて見よう、そこで私共は同じ力が、勿論非常に發達して居る事に氣がつくであらう。この原稿私がいつも訪問した大きな出版書肆では、毎年一萬六千の原稿が集まつて來た。この原稿は皆一通り見て判斷を下さねばならない、ところでそんな仕事をする人は所謂職業的讀者（プロフエツシヨナル）である。この職業的讀者は學者で、又異常の才能の人でなけれならない。一千の原稿のうち、恐らく彼は一つ以上は讀まないだらう、二千のうち事によれば三つ讀むだらう。その外は彼はただ數秒だけしか見ない――その原稿は讀む價値があるかどうかを定めるのは一瞥で足りる。ただ一節の文章の形からも、文學上の見地からそれが分る。名前だけででも、澤山の場合には、內容を判斷するのに充分である。或原稿は彼の注意を一分或は五分惹く、極めて少數のものだけ、もつと長く考慮される。一萬六千のうち、十六だけが最後の判斷を受けるために選ばれる。それだけは初めから終りまで讀む。讀んでから八つだけはさらに考へる事にきめる。その八つを再び、もつとずつと丁寧に讀む。第二回の試驗の終りにその數は多分七つになる。この七つは第三回目の檢査を受ける事になる、しかしこの專門家はよく物が分つて居るから直ちに讀むやうな事をしない。彼は引出しの中に入れて鍵をかけて置く、そして全一週間見ないで置く。その週の終りにその七つの原稿とその性質をそれぞれはつきり想ひ出せるかどうかを見ようとする。極めてはつきり三つは想ひ出せる、

あとの四つはすぐには想ひ出せない。もう少し努力してもう二つは想ひ出せるが、二つは全く忘れてしまつた。これは一大缺點である、二回も讀んで何等の印象を殘さないやうな著述は、本當の價値がない。彼はそこで引出しから原稿を取り出して、二つ——想ひ出せない二つを沒書とする、それからあとの五つを再讀する。三度目に一切判定される——題、仕上げ、想、文學上の品位など。三つは第一流ときまる、二つはただ第二流として書肆で受取られる。それでこの事が終る。

こんな事が凡て大出版書肆で行はれる、しかし不幸にして悉くの文學上の著作はこれと同じ嚴重な方法では判斷されない。今日はむしろ公衆の好みで判ぜられるが、公衆は最上の物を好まない。しかしケムブリッヂ大學やオックスフォード大學の出版部のやうなところでは、原稿の檢定は實際非常に嚴しいのである、再びどこでもこれ程までには讀まれないと思ふ程、充分によく讀まれるのである。さてこの專門の讀書家はそんなに知識や學問や經驗はありながら、子供がお伽噺を讀むと餘程同じやうにして書物を讀むのである。彼はその精神の全力を注いで、書物のうちにある一切の物を、その凡ての關係から、その無數の方面から詳細綿密に考へる事は子供の頭腦が考へる事と同じである。子供は惡い讀者であるとは僞りである、惡い讀書の習慣はずつと後になつてできるので、不自然である。

自然の、そして又學者風の讀書法は子供の方法である。しかしそれには私共が年と共に失ひ易い物、即ち忍耐と云ふ貴い天賦の物が要る、そしてこの忍耐がなければ、何事も、讀書でも、よくはできない。

それで注意深い讀書法は大事であるから、それを濫用してはならない事を諸君は容易にさとる事ができる。「よく訓練された高い教育を受けた精神の力は普通の書物の上に浪費されてはならない。普通と云ふのは安つぽいつまらない文學の事である」自己修養に取つて書籍の適當な選擇程大事な事はなく、又それ程輕んぜられて居る事もない。有能の人は何を讀むべきかを『見つける』のに時を空費する事も正しくない。その人は造作なくあらゆる方面の文學のうちの最良の物の範圍を正しく知つてゐて、その最良の物を尊重する事ができる。勿論特殊の研究家、批評家、專門の讀者になるためには、よい物も惡い物も皆讀まねばならない、そして經驗でできた非常に速い判斷力を働かせて、多くの苦痛を逃れる事ができる。例へは、セインツベリ教授のやうな批評家によつてなされたに相違ない、そして充分になされたに相違ない讀書を想像して見るがよい。彼の大學教育、それから、先づ中々の讀書を要するギリシヤ、ラテンの古典に通達した點を離して見ても、凡ての世紀の英語で五千冊位は讀んだに相違ない——それだけの書物にある一切の物、それぞれの歴

史、それからできるだけその著者の歴史を充分に學んだに相違ない。彼はこの文學と云ふ大きな一團に關する社會上及び政治上の歴史を充分に學んだに相違ない。それでもこれは彼の仕事の半分にも足りない。二つの文學の權威であるので、彼のフランス語の研究、新舊フランス語の研究は、英語の研究よりもさらに一層博かつたに相違ない。凡てこれ等に關する著作の研究は熟練なる讀書による外はなかつた、全體に於て始めから終りまで娯樂らしい處は少しもない。ただ娯樂らしい處は結果にあるだけ、しかしその結果は非常に大きい。「何がこの世でむづかしいと云つても書物を讀んでそれからその書物の文學的價値を丁度數行で明瞭に、そして正しく云ふ事程むづかしい事はない。」これができる人は全世界に二十人以上はゐない、それには絶大なる經驗と才能を要するからである。普通の人で、一生學問勉強しても、三流四流の批評家になれる見込のある人も中々ない。しかし私共は讀書法を學ぶ事はできる、それが決して小さい事ではない。大批評家は彼等の判斷によつて、これをなす方法を私共に教へる事ができる。

　しかし要するに、最大の批評家は公衆である——一日や一代の公衆でなく、數百年の公衆、時と云ふ恐るべき試驗で、試された書物に關する國民的意見及び人類の意見の合同一致である。評判は批評家によつて作られるのでなく、數百年の間の人間の意見が集合して

作られる。それから人間の意見は、學問のある批評家の意見のやうに判然ときまるのではない、私共はその性質を適切に說明する事のできない何か大きな情緒のやうにぼんやりして居る、それは思考でなくて感情である、ただ『それが好き』と云ふだけである。それてもこの種類の判斷程たしかな判斷はない、卽ちそれは絕大の經驗の結果であるからである。よい書物の試驗は數代の間に渡つて働く人類の意見によつて行はれる物である。そしてこれは甚だ簡單である。

偉大なる書籍の試驗は、私共がそれをただ一度か或はそれ以上くりかへして讀みたいかどうかによつてきまる。

實際眞に偉大なる書物なら、私共は始めてそれを讀まうと思つた時よりも、さらに一層二度目にそれを讀む事を欲するのである、そして私共がそれを讀む度每に、その中に新しい意味と美を見出すのである。教育のあるよい趣味の人が、一度以上は讀みたくないと云ふ書物は大概餘り價値はない。以前あの偉大なる小說家ゾラの伎倆について甚だ巧妙な議論が行はれた、或人はゾラは大天才を有して居ると主張し、或人はゾラはただ著しい種類の才能を有して居るだけだと主張した。その烈しい議論で大分突飛な意見も出て來た。しかし突然甚だ偉大な批評家が單にこんな問題を出した、『ゾラの書物のどれかを二度讀ん

だ人、或は二度讀みたいと思ふ人はあるか—誰も返事をする者はなかつた、それでこの問題は解決した。多分ゾラの書物を二度讀まうと思ふ者はない、そこでこれが卽ちそのうちに偉大なる天才はない、最高の種類の感情が立派に出てゐないと云ふ充分な證據である。十萬の讀者に買はれても、決して二度讀まれない書物はどんな書物でも、淺薄か虛僞である。しかし私共はただ一人の判斷を誤りのない物と考へる事はできない。一冊の書物を偉大であると認むる意見は多數の人の意見でなければならない。卽ちたとへ大批評家でも、分らない事鈍感な事がどうかすると有り勝ちである。たとへばカーライルはブラウニングを好まなかつた、バイロンは英國の大詩人のうちで幾人かを嫌つた。多くの書物に對して信ずるに足る批評をする人は、多方面でなければならない。私共は時々ただ一人の批評家の判斷なら疑ふ事があるかも知れない。しかし數代に渡つた人々の判斷を疑ふ事はできない。たとへ私共は數百年間感嘆賞讃された書物のうちに、何等よいところを認める事ができないでも、それを丁寧に調査研究して見ると、最後にこの感嘆と賞讃の理由をさとる事ができるやうにならう。貧しい人に取つてあらゆる書庫のうちの最上の物は、こんな大著述卽ち時の試驗に合格した書物で全部成立して居る書庫であらう。

　それて讀書の選擇に關して、私共に取つて最も大事な案內はかうてあらう。「私共は二度

以上讀まうと思ふ書物だけを讀むべきである」それから何か特別に投資する理由でもなければ、それ以外の書物を買ふてはならない。第二に注意を要する事は、凡てこんな偉大なる書物のうちに潜んで居る價値の一般の性質である。これ等の書物は決して古くならない、永久に若い。偉大なる書物は若い人によつて、一讀だけでは理解されさうにはない、理解されてもただ外面だけに過ぎない。多くの場合に於て、そんな書物のうちにある物を發見するために人類が數百年を要した事を思はねばならない。しかし人が人生の經驗を積むに隨つて、その書物は新しい意味を生ずる。十八で面白かつた書物はもしよい書物なら、二十五では一層面白からう、そして三十になつたら新しい書物のやうな興味を感じよう。四十になつて讀み直して、何故この美しさが前に分らなかつたらうと不思議に思ふだらう。五十六十になつても同じ事がくりかへされよう。偉大なる書物は讀者の頭の生長の割合に應じて生長する。シエーキスピヤやダンテやゲーテの著作を偉大にしたのは、これまでの數代の人々によつて、この異常な事實が發見されたからである。恐らくゲーテがこの場合一番よい例にならう。ゲーテは散文の小話をいくつか書いた、それは子供に取つてお伽噺の面白さがあつたので子供は好んだ。しかしゲーテはお伽噺のつもりではゐなかつた、經驗のある人々に對して書いたのであつた。青年はそのうちに眞面目な物を發見する、老人

はそのうちに全世界の哲學、人生の凡ての智慧を發見する。鈍い人なら餘り發見するところはなからう、しかし人生に關するその人の知識の割合に應じて、それ等の話を考へ出した頭の偉大なる事を發見するであらう。

かう云つても、それはこれ等の書物の著者が、自分でその著書の中に入れた事の全體の廣さと深さを豫想してゐたと云ふ意味ではない。大藝術はそれが偉大である事を少しも知らないで無意識にできる、それで作者の天才が大きければ大きい程、自分に天才があると云ふ事を知る機會は益〻少い、それで、本人が死んでから餘程にならないでは公衆に發見されさうにはない。文學に於てなされた大事業は普通は自分で偉大と考へて居る人々によつてなされてゐない。數千年前アラビヤの或一漂泊者が夜の星を眺めて、世界を造つた見えない力と人間との關係について考へて、心を悉く一種の詩で吐いたのが、今日私共に殘つて居る「ヨブ記」である。ヨブに取つては蒼穹は形のある丸天井であつた、その向うに何があるか、それはヨブは夢にも考へなかつた。ヨブの時代より私共の天文學の知識はどれ程大きく發達したらう。私共は私共の天文學の器械で見えるところでは今三千萬の太陽があつて多分それぞれ行星を伴うて居るだらうから、多分總數三億の世界のある事を知つて居る。多分このうちの多數には聰明な生物も住んで居るだらう、數年のうちには火星に

私共の文明よりももつと古い文明のある事の確證が得られよう。宇宙に關する私共の概念とヨブの概念との間には、どんなに大きい相違があらう。しかしその實直なアラビヤ人かユダヤ人の詩は、この相違があるからと云つてその美しさと貴さの一小部分をも失つてゐない。全く反對である。新しい天文學の發見と共に、ヨブの言葉は――彼は眞に大詩人であつて、數千年前、彼の心にある眞のみを語つたから――私共に取つて一層偉大な意味をなすのである。又餘程昔、ギリシャの或小說家が「ダフニスとクロヰ』[原著註一]と云ふ田舍の少年少女について小さい話を書いた。それはこの上もなく簡素な言葉で、その少年少女が何故か分らずに愛し合つた事、お互に云つた無邪氣な事、それから大人達がやさしく彼等の事を笑つて、それから人生の最も簡單な法則を教へた事を物語つてある小さい話である。つまらない題目と思ふ人もあらう。しかしその話は世界のどの國語にも飜譯されて、今もなほ私共に取つて新しい話のやうに讀まれる、そして私共がそれを讀み直す毎に、それが一層美しく思はれる、それは無邪氣と少年の感情に關する本當のやさしい事をいくつか教へるからである。それにある少年少女と同じく、その小說は決して老ゆる事はない。或はずつと後になつて、三百年程前にフランスの或僧が或學生の話を書かうと思ひついた、その學生は或浮氣女に迷はされ、その女のために恥辱と苦痛のいくつかの場面へ引出された。

『マノン・レスコー』（譯者註二）と云ふこの小さい書物は私共のために昔の時代、人は劍を帶びて髮に粉をふりかけてゐた時代、一切の物は今日の世の中と思ひ切つて違つて居る時代を表はして居る。しかし話は文明のどの時代にもつて行つても、私共の時代にもつて來ると同じやうに眞である、その話にある苦惱と悲哀は丁度私共自身の物のやうに私共を感動させる、それから、心からの惡者ではなく、ただ弱くて我儘なその女も、その悲劇の結末まで丁度その　の犧牲となつた青年を魅したやうに讀者を魅するのである。ここに又世界の不朽の偉大な書物の一つがある。或は、百程のうちからもう一つ例を引いて、ハンス・アンデルゼンの話を考へて見よう。アンデルゼンは道德上の眞理や社會哲學は、他のどの方法によるよりも、小さいお伽噺や子供の話で教へる方がよいと云ふ考を抱いた、それで數百の古風な話を藉りて、アンデルゼンは新しい幾組かの不思議な話を作つたが、それがどこの文庫圖書館にもなくてはならぬ物となつて、どこの國々でも子供よりもかへつて大人に讀まれて居る。この驚くべき話の集まりのうちに、人魚の話がある、それは諸君は皆讀んだ事があると私は思ふ。勿論人魚と云ふやうな物はない、見方によつてはこの話は全く不合理である。しかしその話の表はす無私と愛と眞實の情緒は不朽である、そしてそんなに美しいので、私共はその外形のうそらしい事は全く忘れて、ただその寓話のうしろにある永久

の眞理をのみ見るのである。

今諸君は偉大なる書物と云ふ意味を正しく理解したであらう。書物の選擇についてはどうであらう。數年前サー・ヂョン・ラボック[譯者註三]と云ふ科學者が世界最良の書物と彼が云つた物――或は、少くとも最良の書物百種の目錄を書いた事を諸君は覺えて居るだらう。サー・ヂョンの例にならつて、外の文學者も亦自分等が最良と考へた物の目錄を銘々作つた、それでこんな經驗の價値を私共に示すべき時が充分經過した。出版書肆に對する外には、これは全く價値のない物ときまつた。その百部の書物を買ふ人は多いだらうが、讀む人は極めて少數である。これはサー・ヂョン・ラボックの考が惡いわけではない、多數の色々違つてできて居る頭腦に對して、讀書の一定した進路を定める事は誰にもできないからである。サー・ヂョンは自分に最も氣に入つた物について自分の意見を發表しただけである、外の人なら違つた目錄を作つたであらう、多分二人の學者で全く同じ目錄を作る事はできなかつたらう。偉大なる書籍の選擇は、如何なる事情があつても、銘々個人的でなければならない。つまり諸君は諸君のうちにある光明によつて、銘々に選ばねばならない。文學の色色違つた種類に最良の注意を進んで與へられるやうな、それ程多方面な人は極めて少い。平均して人は一種類の小題目――自分の天賦の才能嗜好に最も一致する題目、自分の氣に

入つた題目に自分を制限して置く方がよい。そして何人も私共の個人的性格氣質を充分に知らないで、又それに同情しないで、どこに私共の能力があるかを私共のためにきめる事はできない。しかし一つの事はできる――即ち、第一に、文學のどんな題目が諸君にこれまで興味を與へて來たかをきめる事、第二に、その問題について書かれた最良の物は何であるかをきめて、それからそれと同じ問題に關係あるやうでも、實は未だ大批評家もしくは大輿論の賞讃を得てゐないやうな、はかないつまらぬ書物は除外して、その最良の物だけを研究する事である。

そんな兩方の賞讃を得た書物は諸君の想像する程澤山はない。銘々の大文明はギリシャ人の文明だけを除いて第一流の書物は二三冊づつしか出してゐない。凡て大きな宗教の教を含んで居る聖い書籍は文學としても當然第一流である、その理由は、それが書かれた國語で、できるだけ最上の文學的完全に達するまで幾度となくみがかれて來たからである。民族の理想を表はす偉大なる叙事詩も亦第一流に置く價値がある。第三に人生を反映せる戯曲の傑作も最上の文學に屬する物と考へられねばならない。しかしどれ程の書物がこのやうに代表されるであらう。澤山はない。最もよい物はダイヤモンドのやうに大量には決して發見されない。

私はこの通り敢て云ふて見た一般的注意の外に、二三の精選した書物――學生がそのよい版を買ふて一生讀んでよい書物に關して少し云つてもよからう。澤山はない。歐洲の學生に取つてギリシャの作者の多くを擧げる事が必要であらう。しかし古語の研究をしないでは、こんな作者はこの國の學生にそれ程必要はなからう、その上ギリシャ生活とギリシャ文明の著しき知識はそれ等の正しい理解を起さしむるに必要である。かう云ふ知識は、彫刻、繪畫、貨幣、彫像によつて――存在した物を、想像力によつて見られるやうにする藝術品によつて最もよく得られるのであるが、今のところ、古典研究の美術方面は繪畫その他の材料がないので日本では殆んど不可能である。それで私はこの範圍に屬する傑作については殆んど云はない。ただ歐洲文學の全體の基礎は古典研究にあるから、學生はギリシャ神話、及びギリシャ文學及び戲曲の最上の物を鼓吹した傳說の概要を充分に理解する事をたしかに努めねばならない。諸君は文學の高い階級に屬する英書を開いてギリシャ信仰、ギリシャ物語、或はギリシャ戲曲に關係のない物は殆んどない事を見るであらう。神話は諸君に殆んど必要である、しかしその題目の範圍が餘りに廣いので、大概の人はそれを充分に研究しようとする氣がなくなる。しかし充分の研究は必要でない。必要なのはただ概要である、そして諸君にはつきりした面白い書方で、その概要を與へる事のできるよ

い書物は非常に役に立つ。フランス語やドイツ語にそんな書物は澤山ある、英語では私はただ一冊、ボーン文庫にあるカイトレイ（譯者註四）の『古代ギリシャ伊太利の神話』を知つて居る、それは哲學的精神で教へると云ふ珍らしい長所をもつて居る。名高いギリシャの書籍について云へば、諸君にとつてそれらの大概の價値は餘りないに相違ない、適當な飜譯の數が少いからである。私は先づ韻文譯は凡て無用であると云ひたい。ギリシャ語の韻文譯ではギリシャの詩を飜譯する事はできない――テニスンの飜譯したホーマーが二三十行程ある、それから同じ程有能の人が飜譯した他のギリシャ詩人の數行がある、それ等は皆宜しい。しかしギリシャ或はラテンの作者を研究したければ、どうしても散文譯を取る方がよい。勿論私共は第一にホーマーを考へねばならない。英語に二つの散文譯がある、一つは『イリアッド』ので一つは『オディッセー』のである。この二つの大敘事詩のうちで、あとの方が殊に大事である。それに關する引照は文學の凡ての部門に無數にある、そしてこの引照はいつもその題の詩に關係がある、即ち『オディッセー』は『イリアッド』よりももつと傳奇的であるからである。ラング（譯者註五）とブッチャーの散文譯の長所は、散文ではあるが、ギリシャの詩の流暢な句調と音樂を幾分保存して居る點にある。その書物は諸君が絶えず持つて居る價値はたしかにあると私は思ふ、その効用は後になつて現れて來るであらう。ギ

リシャの大悲劇は悉く飜譯になつて居るが、これ等の飜譯を私は甚だ熱心には勸めたくない。大概の場合に外の方面から、その戯曲の話を知る方がよからう、そしてそんな物は數百ある。諸君は少くともソフォクリーズ、ヱスキラス、それから殊にユウリピ[二六]ディスの大戯曲の題目を知らねばならない。ギリシャの戯曲は、正しく理解するには餘程の研究を必要とするやうな方法で組立ててある、諸君は考古學者のやうにこれ等の事を理解する事は必要ではない、しかしこれ等の戯曲の話の幾分を知つて居る事は必要である。喜劇に關しては、アリストファニーズの著作はその價値と興味に於て全く無類である。説明を要する處はない、數千年前アゼンス人を笑はせたと同じやうに今日私共を笑はせる、それてその著作は不朽の文學である。抒情詩人のうちでは、近世の物だが英語の古典となりさうな飜譯が一つある、それはセオクリタスのラングの飜譯で小さい本だが、その種類のうちで甚だ貴い物である。諸君は私が極めて少數だけを云つて居る事が分るだらう、しかしこれ等少數の物は、もし諸君が適當に使用すれば、諸君に取つて大きな意味になるだらう。後のギリシャの作、古い文明の衰頽期にできた作のうちで、世界の人が決して飽く事のない一傑作がある――それは前に云つた『ダフニスとクロヰ』の物語である。これはどこの國語にも譯されて居るが、殘念ながら最良の飜譯は英語でなく、フランス語――アミヨーの飜

譯である。しかし澤山英語の飜譯はある。これは諸君は必ず讀まねばならない。ラテンの作者についてここに澤山云ふ必要はない。ヴァーヂルとホレイス（譯者注七）の甚だ良い散文譯はあるが、これ等の作の價値は、ラテン語の知識がなければ諸君に取つて大した物ではない。しかしながら『エニード』の話は知る必要がある、それでこれはコニングトンの飜譯で讀んだ方が最もよからう。諸君の一般教育の進行中、重なるラテンの作者や思想家に關して幾分知らないわけには行かない、しかし諸君が餘り名を見た事のない一つの不朽の作がある、そしてそれは誰でも讀むべき書物である――それはアピュレイウスの『黄金の驢馬』（譯者注八）の事である。よい英語の譯がある。それはただ魔術の本であるが、最も不思議な物語で、一時の文學でなく世界の文學に屬する物である。

しかしギリシャの神話は、美はしい點に於て永久に不滅であるが、私共の言語の形、曜（譯者注九）日の名までにずつと反響を殘した古い英國の宗教、北歐民族の宗教よりも、もつと密接に英文學に關係があるとは云はれない。英文學の學生は北歐神話について幾分知るべきである。それにはやはり美はしいところ、別の變つた種類の美はしさが澤山ある、そしてそれはこれまで存在せる最も高尚なる戰士の信仰の一つ、力と勇氣の宗教を表はして居る。諸君は今圖書館に北歐詩歌の完全なる集をもつて居る、それは二卷の『コルプス・ポエティ

クム・ボレアリ』〔北歐詩集〕の事である。不幸にして諸君は未だ『サガ』や『ヱッダ』のよい叢書をもたない。しかしギリシャ神話のもつと大きな題の場合に於ける如く、英語に小さい書物があつて、北歐民族の宗教と文學の兩方に關する大事な事――卽ち諸君に取つて必要な事――の概要を悉く書いた物がある、それはマレットの『北歐の古事』である。サー・ウォルター・スコットはこの小さい書物に、色々の飜譯の最も價値ある部分を寄稿して居る、それでこれ等の飜譯は時の試驗に著しくよく堪へて來た。ビショップ・パーシーの序論は古めかしいが、しかしそのためにこの書物の生々した價値を少しも下げる事はない。私は悉くの學生が心がけて持つべき書物の一つと考へる。

外國語から英語に飜譯された近代の大傑作に關しては、私はできるだけ原語で讀む方がよいとしか云へない。ドイツ語でゲーテの『ファウスト』を讀む事ができたら、英語で讀んではならない、ハイネをドイツ語で讀めるなら、ハイネが監修したフランス語の散文譯も、英語の韻文譯（それは澤山ある）も諸君には無用である。しかしもしドイツ語がむづかし過ぎるやうなら、ヘイワードの散文譯でブッハイムの校閲した『ファウスト』を讀む方がよい。それは圖書館にあつて、現在ある種類のうちで最良の物である。『ファウスト』は人が買うて、座右に置いて、一生の間度々讀むべき書物である。ハイネについて云へば、

彼は世界的詩人である、しかし飜譯では著しく見劣りがする、それで私はフランスの散文譯だけを勸める、ブラウニングとシゼイラスの他の英語譯は少し力が弱い。數年前にハイネのすぐれた飜譯が連續して『ブラックウッド雜誌』に現れたが、私の信ずる處では、未だ書物にはなつてゐない。

ダンテについて云へば、私は伊太利語以外のどの國語に於ても、諸君に强く訴ふる事ができるかどうかを知らない、それからダンテの偉大な事を理解するためには中世紀を充分に理解せねばならない。私は外の伊太利の偉大なる詩人達について同じ事を云ふ事ができる。フランスの戲曲家のうち、諸君はモリエールを研究せねばならない、モリエールは重要な點ではシエーキスピヤにつぐだけてある。しかしモリエールは飜譯で讀んではならない。そこで私はフランス語を讀めない人はモリエールはそのままにして置く方がよいと斷然云ふ、英語では纎細な機智や諷刺は譯出する事はできない。

近世の英文學について云へば、私は私の講義中に、世界文學のうちに位置を取る程の價値のある少數の書籍をあげる事を心がけて來た、それでそれをここにくりかへす必要はない。しかし、少しふりかへつて、私は再び諸君にマロリーの書『アーサーの死』の非常な價値を思ひ出して貰ひたい、そしてそれは諸君は買うて側に置いて屢〻讀むべき極めて少

數のうちの一つてある事を云ひたい。西洋武士道の精神は全部その書物のうちにある、そして私はその武士道の精神と凡て近代の英文學との關係の如何に深いかは諸君に語る必要は殆んどない。言語の或特別の研究をする考でなければミルトンを讀む事を勸めない、ミルトンの語學的價値はギリシャとラテン文學に基づいて居る。ミルトンの抒情詩に關しては――それは別問題である。それは研究すべきてある。暗示的に云ふ事の外、もう云ふ事がないから、私は諸君は悉く、シエーキスピヤのよい版の一部をもつて毎年一度讀む方がよいと思ふ、最初は文句はすつかり分つても分らなくても頓着せずに讀む方がよい、それはあとで分つて來るから。諸君がもしこの助言に隨へば、シエーキスピヤは諸君が讀む度毎に、大きくなつて、そして最後に諸君の考方と感じ方に甚だ强い、甚だ健全な影響を與へるやうになる事を私は信ずる。シエーキスピヤを讀むには大學者になる必要はない。それからシエーキスピヤを讀む事について本當である事は、凡ての世界の大傑作について、程度は小さいが、同じく本當である。ゲーテの『ファウスト』についても本當である。ホーマーの詩の最もよい章についても同じく本當である事が分る。モリエールの最上の脚本についても本當である。ダンテについても、昨年講義をした英語のバイブル中のあの篇についても本當である。それだから、若い讀者に與へられた古いが、しかし甚だすぐれた助

言を一つくりかへしてこの講義を終るのが一番よいと私は思ふ『誰でも新しい書物が出版されたと聞いたら、古い書物を讀め』 *どの様な「古い書物」か？*

譯者註一 "Daphnis and Chloe" 作者は五世紀のギリシヤの小說家で學者であつた Longus である。ダフニスと云ふ少年と、クロヰと云ふ少女の物語であるが、凡ての歐州各國語に飜譯され、又、模倣されて居る。タツソー（伊）の『アミンタ』モントメイア（西）の『ダイアナ』ウルフイ（佛）の『シレイヌ』サン・ピイエル（佛）の『パウルとヴアヂニア』及びアラン・ラムゼー（英）の『溫和なる牧人』等は皆これに基づいて居る。

譯者註二 "Manon Lescaut" はフランスの小說家で僧侶であつた A. F. Prevost (1677—753) の作。

譯者註三 Sir John Lubbock (1834—1913) 英國の政治家銀行家で、科學者考古學者著述家であつた。後男爵になつてエイベリ卿と呼ばれた。

譯者註四 Thomas Keightley (1789—1872) はアイルランドの著作家でこの名著の外に "Fairy Mythology" その他の著作がある。

譯者註五 Andrew Lang は英國の批評家詩人歷史家飜譯家論文家で著述頗る多い。S. H. Butcher はエデインバラ大學のギリシヤ語敎授で、ギリシヤに關する著作がいくつもある。『イリヤッド』はトロイ戰爭に關する二十四篇の古い敍事詩、『オデイッセイ』はその戰爭後、オデイッセイ（又の名ユーリセス）が歸國する途中の冒險談。

譯者註六　Sophocles〔495—406 B. C.〕Æschylus〔525—456 B C.〕Euripides〔480—406 B. C.〕何れもギリシヤの悲劇詩人。少し後に出て居る Aristophanes は紀元前五世紀から四世紀の間のギリシヤの喜劇作者及び詩人。Theocritus は紀元前三世紀のギリシヤの田園詩人。

譯者註七　Virgil も Horace も共に紀元前一世紀のローマの詩人。ヴアーヂルの『エニード』は十二篇からなる叙事詩。トロイ陷落の後エニードがローマに移住してローマの祖先の一人となつたと云ふ傳說によつて作つた物語。

譯者註八　Apuleius は紀元前三世紀のローマのプラトー派の哲學者で、名高い『黃金の驢馬の變狀』の著者。『ドンキホーテ』や『ヂル・ブラス』の冒險談の或物はここから出て居る、それから、ボッカチヨもそのうちの滑稽な挿話を多く使用して居る。

譯者註九　英語では、土曜日を除いてあとは全部北歐の神々の名から來た言葉を使つて居る。

譯者註十　『サガ』は北歐スカンディナヴィヤの神話や歷史に關する傳說集。『エッダ』は北歐或はアイスランド文學に關する集。

「ハヴァマル」古代北歐の人生倫理

その時彼の口から音樂となつて出たのは
古いオウディンのハヴァマルのをしへ、
遠い岸もつ大波の
叫びのやうな神祕の音(ね)

恐らくこのロングフェローの『オラフ王の古史』と題する詩のうちのこの一節を讀んだ諸君の多數は、そのオウディンの神の靈が、王に歌つたこの不思議な歌は何であるか知りたいだらう。諸君はこの『ハヴァマル』を見て、或點から失望するだらうと私は恐れる。實際そのうちには魔法的の歌がある、そしてロングフェローが云つて居るのはこの魔法的の歌、魔術の歌である。しかし『ハヴァマル』の多數は倫理的教訓の集合である。そのう

ちに保存された物はヴイグファッスンとパウエルによつて飜譯され出版されたのであつた。それは甚だ古い――恐らく私共のもつて居る最古の北歐文學である。私はそれについて短い講義をやつて見よう、その理由はそれは北歐民族の性格の問題に甚だ密接な關係があるから、恐らく外の何物よりもよく英人の祖先がクリスト敎徒となる前にどんな風に考へ、又、感じたかを理解する助けになるからである。それだけではない。私は敢て云ふが、現代英人の性格はやはり、クリスト敎に含蓄された性質よりも『ハヴアマル』に示された性質を遙かに多くもつて居る。古代の北方の神々は死んではゐない、その神々は今日世界の甚だ大きな部分を支配して居る。

或民族の俚言的哲學は、外の種類の文學よりも、その民族をもつとよく理解する助けとなる。そしてこの種類の文學はたしかに最古の物に數へられる。それは社會に於ける人間の經驗の結果と、人々が互に相接して得た智慧と、正邪と親しんだ結果だけを表はして居る。民族の諺を研究すれば、諸君はいつでも、その民族の間に氣樂に暮らせるかどうかを甚だよく察する事ができる。

フルードはノルウエー旅行記の一つに、もし私共が不意に恐るべき海王の時代に戻る事ができるとしても、もし私共は古代の北歐海賊の家庭を再び訪れて、正しく千年乃至千五

百年以前そのままの彼等を見る事ができたとしても、私共は彼等が大きな、飾り氣のない人々で質朴の外貌の下に澤山の拔目のない怜悧さを隱して居る現代英人と甚だよく似て居る事を發見するだらうと云ふ甚だすぐれた觀察を下して居る。『ハヴアマル』の教訓はこの想像に餘程力を與へて居る。この書物は或形で初期の英人に――或は少くともそれを構成して居る詩句（それは全く詩句でできて居る）は知られてゐたに相違ない、そして私がすでに云つたやうに、古代の英人の道德も性格ももつと遙か北方の人種と殆んど違つてゐなかつた、デンマーク人が英國を征服して、一時英國とスウヱデンとは一王國になつてゐた時分の前後、英人はそれ等の人種と自由に混交し雜婚したのであつた。

勿論諸君は北歐の社會は或點では甚だ恐るべき物であつた事を思はねばならない。どの人でも自分の生命は自分で守つてゐた、どの農夫でも、自分の畠に居る時でも劍と槍はわきにもつてゐた、そしてどの人でも戰つて死ぬ事にきまつてゐた。實際もつと野蠻な北歐の人々、――殊にノルウヱーの人々――の間では、病氣で死ぬ事、床の上で死ぬ事は一大恥辱と考へられてゐた。それは男らしい死に方ではない。男は老年や病氣が近づく事を感ずると、出かけて行つて殺される事になつてゐた。しかしこれ等の事實があつても、又他の事實、卽ちそんな社會にても、道德の健全なる主義と道德的結合性の大勢力があつたと

云ふ今一つの事實を無視してはならない。そんな物がなかつたら、その社會は存在しなかつたであらう、ましてその下に生存してゐた人々が今日のやうに世界の大部分の主人になる事などはなほさらできなかつたらう。そんな獰惡な性質があつたにも拘らず、彼等の間には多くの親切と厚意があつた、何人も非難する事のできない行爲の法式――今もなほ幾分英人の社會を支配して居る法式があつた。それから社會的娯樂、社會的歡樂の充分の機會があつた、それから高尙なる生活によつて公衆の尊敬を受けると云ふ事もあつた。

しかし『ハヴアマル』にも、人は時々北歐の生活、絕えざる復讐の生活の暗黑面を示すやうな敎訓があるので驚かされる。古代日本に於けるやうに、何人も自分の兄弟や父の殺害者と倶に天を戴く事はできなかつた、友人の場合に於ても復讐は義務であつた。敵に關する問題について、『ハヴアマル』は少なからず奇妙な忠告を與へて居る、

> 人は一歩たりとも自分の武器を離れてはならない、何故なれば人が一歩戶外に踏み出せば、どこで自分の槍の必要が起るか分らないから。
>
> 人は他人の家に入る前によく注意して戶口を悉く見て置かねばならない（いざと言へばすぐ出られるやうに）、何故なれば他人の家のどこに敵が隱れてゐないとも限らないから。

これは日本の諺の誰でも男子は家を出づれば七人の敵があると云ふのを思ひ出させるてはないか。しかし『ハヴアマル』の教訓の意味は遙かにもつと陰險てある。それで人は家に入つても、未だ極端に深く警戒して——不意うちに遇はぬやうに眼と耳を開いて油斷するなと云はれて居る、

用心深い客は聲薇の沈默を守る、彼は耳をそばだてて聽き、眼を見廻してのぞく、この遣り賢い人は自分の周圍を見る。

こんな境遇にあつて安樂に暮らせる人は甚だ强い神經をもつてゐなければならないと思はれるだらうが、その詩人は私共に、何も歡樂のできない人は臆病者て、かつ、馬鹿者てあるに相違ないと告げる。人は自分の生命を保護するために警戒してゐなければならないけれども、それは自分の生命を失ふ事を恐るべきてあると云ふ理由にはならない。人は特に恐れねばならない事は三つしかない。第一は酒——何故なれば酒は人に自分の性癖の取締ができないやうにさせる事がよくあるから、第二は他人の妻——くりかへし讀者は他人の妻に愛を注いではならないと警告されて居る、第三は盜賊——殺して盜まうと云ふ目的て友情を裝ふ者てある。自分自身及び自分の周圍に對して絕えず警戒して居る人は、勿論、

最も長命をしさうであつた。

さて凡ての國々に言語に關する澤山の道德訓がある、そしてこれまでいつもあつた。この問題に關して『ハヴァマル』には、教訓が充ちて居る——沈默の必要、節制のない言語の危險と愚に對して。諸君は『口は禍の門』と言ふ日本の諺を知つて居る。この北方の詩人は同じ眞理を一層物すごい形で表はして居る、『舌は頭の死となる』この題目に關する數多の諺がある、

決して沈默しない人は多くの愚を語る、滑らな舌は、抑制しないと人を困難に陷らせる。

惡い人に怒りの言葉を三つ云つてはならない、何故なれば善い人が惡い人の劍で倒れる事がよくあるから。

信じない人の面前で徵矢せよ、そして心と反對な事を云へ。

これは勿論狡猾を教へた物である、しかし、如何に不道德でも、それは今日英國の社會を支配して居る教訓である。しかし古代の北歐人種には、できるだけ爭鬪を避ける理由は澤山あつた——封建時代の日本にも又その理由は存在してゐたに相違ない。人は自分だけの生命を失ふ事は無頓着であつても、百年間も續くやうな長い反目不和を起すやうな事は

注意して避けねばならなかつた。澤山の殺戮があつたが、殺戮はいつでも重大事であつた、卽ちどの殺戮にも復讐が必ず伴ふからであつた。もし他人を殺した者が、一種の血の價を拂へば法律はその人を赦してくれた事は事實である、殺人は法律上赦すべからざる罪とは考へられてゐなかつた。しかし死んだ者の家族はその金では滿足しなかつた、彼等は血に對する血を要求した。それで人は個人的には如何に勇敢であつても、喧嘩には甚だ用心深くならざるを得なかつた。

しかし沈默に關し、及び用心深い事に關しての警戒は、話す事が必要な場合に、人は要領を得るやうに話してはならないと云ふ意味ではない。『ハヴアマル』の云ふところでは『賢い人は問ふ事と答へる事と兩方ともできる』諸君の知つて居る諺に、人の口には戶は立てられぬと云ふのがある。北歐民族の詩人は同じ事を云ふ『人の子は人の間に起る事は何事についても沈默を守られない、それ故人は用心深くそして強く銘々自分の事をなすべきである』『ハヴアマル』は云ふ、『馬鹿者は自分の一隅に居心よく坐つて何でも知つて居るつもりで居る、しかし人が彼に質問したら途方にくれてしまふ』別の處でかう云つてある、『犬の鈍物とは何事も云へない者の事である、それが馬鹿者の證據だから』それで凡て舌に關するこの教訓の總計は、人は相當の理由がなければ口を開いてはならない、それ

から門を開けば強く賢く要領を得るやうに云ふべきであると云ふ事になる。

馬鹿者の題目については、『ハヴアマル』に澤山ある、しかし諸君は、いつでも馬鹿者と云ふ言葉は、北歐の意味では、困難の時にどう處置してよいか分らない弱い性格の人の事であるのを忘れてはならない。そんな人はそれ等北歐人の間では馬鹿であり、しかも、危險な馬鹿者であつた、何故なればこんな社會狀態では言語行爲の失錯は恐るべき結果を來さないとは限らないから。馬鹿者に關するこれ等の小さい訓戒を見よう，

こせこせしない、大膽な心の人は世の中を最も幸福に渡る、彼等は決して屈託しない、しかし馬鹿者は何事にでもくよくよする。そんなけちん坊は貰ひ物などを待ちこがれて居る。

馬鹿者は何事にでもくよくよして終夜眠らない、朝になると疲れはてる、そして彼の氣苦勞は全く前と同一である。

馬鹿者は自分を見て微笑して居る人は皆味方だと思つて居る、實はそこでその男のためにならない陰謀をたくらんで居る賢い人達と一緒に居る事に氣がつかない。

馬鹿者が酒を飮めば、彼の心は直ちにすつかり現れてしまう。

しかし酒は危險な物だが酒を飮まない事は人にとつて正しいとは考へられなかつた。そ

れに反して飲まない事は臆病と自制力缺乏のしるしと考へられた。必要ならば醉うてもよい、しかもどれ程飲んでも否と性癖は抑へて置く事になつてゐた。强い性格の人は酒を飲めば飲む程益々用心深く益々沈默になるばかりであらうが、弱い人は直ちにその弱點を示すにきまつて居る。私は奇妙な事實を聞いて居る、現在の英國陸軍では、將校は古代北歐詩人の教訓そのままにするやうに期待されて居る、卽ち人は場合によつては葡萄酒や强い酒を非常に澤山飲んでも、その結果を行爲や言語で表はさない事が期待される。『飲むべき酒は飲むがよい、賢い事を云ふか、或は始めからしやべらぬがよい』――これが昔の文句であるが、しかも甚だその方ではよく分つた文句である。

相當に理由のない笑もやはり非難を受けて居る。『心の歪んだ氣の毒な人は何事をも笑ふ、その男は自分の最も知つて居るべき筈の事、卽ち自分こそ缺點だらけであると云ふ事を知らない』私は諸君に告げる必要はない程諸君はよく知つて居る、卽ち英人は今でも甚だ眞面目な人種で、もつと同情のあるラテン人種の人々のやうに容易に笑はない。諸君はチエスタフイルド卿[番七三]が大人(おとな)になつてから誰も自分の笑ふのを見た事がないと云つた事を記憶して居るだらう。私は二十年前に或英人が『笑の哲學』と云ふ甚だ博學な、甚だ面白い小さい書物を出版した事を覺えて居る、そのうちには凡ての笑は愚であるとしかつめらし

く斷言してあつた。しかし、私はこの書物程私を笑はせた書物はかつてなかつた事を認めざるを得ない。

『ハヴアマル』によれば北歐の人々の最大美德は、あらゆる人種のうちで、實際英國人種に、今日の偉大なる地位を與へた美德――あらゆる美德のうちで最も簡單なる物――卽ち常識であつた。しかし常識と云ふ言葉は、日本の學生に、或は英語の慣用語に慣れてゐない人に、この文字が傳へるよりも遙かに意味が多いのである。常識、或は生れながらの智慧は、養成された或は教育によつてできた聰明の反對、或はそれと無關係の、生來の聰明の意味である。それは遺傳した知識である、遺傳した知識は天才の形になる事さへもある。それは先見の明を意味する。それは他人の性格を直覺的に知る事を意味する。それは博く物を會得する事と、ならびに狡猾を意味する。それて現代の英人は、いつても、どこてでも、特にこの才能にたよるのであるが、この才能は英人の屬して居る人種には、甚だ大きく發達したのである。英人は書物學問から出た事は信じない。哲學的或はその他の理論には疑念を抱く。凡て新しい物に疑念を抱く、周圍の事情に迫られて、古い物よりはこの新しい物に長所がある事を認めなければならなくなるまでは、それを嫌ふ。印度にあつても、埃及にあつても濠洲にあつても　できさへすれば必ずたよる物はこの人種經驗てあ

る。英國の政治家がどう處置すべきかを決するためには、歴史上の先例を調べる事はしない、彼等は先づ事實をありのままに調べる、それから彼等の大學教育や哲學的理論にたよらないで彼等自身の常識にたよる。英國民の場合に於て、この本能的方法は非常に成功して居る事を認めねばならない。『ハヴァマル』が智慧と云へば、生來の智慧の事で、外に何の意味もない、實際その時代には云ふ程の讀み書きはなかつた、

何人も智慧よりもよい荷物を、道中荷ふ事はできない。
大きな常識よりもよい友人はない。

しかし賢い人は妄りに自分の賢い事を示してはならない。人間の大多數は賢くない、それて賢い人は彼等より賢い事を不必要に見せないやうに注意せねばならない。それから自分程賢くない人々を賤しめてはならない、

どんなによい人でも缺點はある、どんなに惡い人でもどこかに取りどころはある。
何人も中位に賢明である方がよい、餘り賢明すぎてはよくない。澤山の事を知つて居る人で甚だ幸福な一生を送つた人は少い。
何人も中位に賢明である方がよい。餘り賢明すぎてはよくない。何人も豫じめ自分の運命が分

つてはよくない、それで苦勞せずに暮らせる。

何人も中位に賢明である方がよい、餘り賢明すぎてはよくない。賢明なる人の心は餘り喜ばない、たとへその心の所有者が本當の聖人でも。

これは又昔のソロモンの智慧である、『智慧を增す者は悲哀をも增す』しかしこれ等の小さい北歐の文句は世間的智慧としては如何に眞に迫つて居る事だらう。多くの事を少しづつ知つてゐて、完全に知つてゐる物が一つもない人は最も幸福な人であると云ふ事——これはたしかに一千年以前よりも、今日の方が一層本當である。スペンサーは巧みに云つた通り、その時代を動かす人は、その時代より非常に進步した人ではない、ただほんの少しだけその時代より進んだ人である。非常に進んだ人は無視されるか、嫌はれ勝ちである。平凡な人は優秀な人を嫌はずには居られない、それでこの北歐の聖人が云つた、『一般の人はただ中位である』中位と言ふのは必ずしも平凡と云ふ事でなく、又平凡以下の事をも意味する。私共が今日英國に於て、マッシュ。アーノルドが所謂教養のない俗人の分子と呼んで居る物が、私共の時代に於て、殆んど悉くの優秀なる人に、餘り聰明である事の危險な事を引續き證明して居る。

友情に關する古い諺は別方面で興味がある、そして全くもつと愉快である、『よく心にかくべき事は、信ずる友があれば度々行つて訪問する事である、まれにしか踏まれない道は茨や高草で蔽はれてしまう』

自分から進んで友と絶交してはならない。自分の心を打明ける友人がないと、悲しさが心に喰ひ込む。

僞りは何よりも惡い、未だ氣に入るやうな事ばかり云ふ人は友人ではない。

その意味は、勿論眞實な友人は自分の友人のやり方に對して非難する事を遠慮しないと云ふ事である、實際それは彼の嚴肅なる義務である。しかしこれ等の友情に關する敎訓には澤山の用心が伴うて居る、卽ち人は友人を選ぶ事に非常に注意せねばならない。昔のギリシャ人は恐ろしい諺をもつてゐた、『汝の友人を遇する時は、いつかその人が汝の敵となるかも知れないと思へ、汝の敵を遇する時は、いつか汝の友人となるかも知れないと思へ』この諺は人間の性質に、多少の疑を抱いて居る事を表はして居るやうである。北歐の敎訓にはこんな疑がない、しかし甚だ優れた忠告がある。第一に記憶すべきは、友情は神聖である事である、『自分の心を他人に打明けるのはその人と血を混ずるのである』それ

敵人は友情を結ぶ事もどちらも非常に注意深くしなければならない。

人はその友人の友人の友人にならねばならない。しかも誰も友人の敵の友人になつたり、敵の友人の友人になつたりしてならない。

人は友人と友達同志になつて、贈物は贈物でかへさねばならない、敵に對しては嘲笑は嘲笑でかへし、僞りは僞りでかへさねばならない。

贈つたり、贈りかへしたりして居る事は最も長い友人を作る事になる。一時に餘り多くを贈る事はよくない。贈物はいつでもかへしを求むる物である。

この詩人はいかに僅かの贈物でも、もし贈り方が氣が利いてゐたら、友達を作つて、長くその友情を保つ事ができる事を告げる。貴い贈物ではかへつて賄賂のやうに見える、小さい贈物はただ親切を表はした物である。それからただ正義の問題として見れば、高價な贈物は友人の方でそれをかへすだけ富んでゐない時には、一種の負擔を感じさせるから、かへつて不親切になる事もある。くりかへして私共は又、友情からは餘り多くを望んではならないと云はれる。友人の價値はその情誼、同情にあるのである、しかし迷惑のかかつた恩義はいつでもかへさねばならない。

私はどんなに親切な、そしてよく御馳走をしてくれる人に逢つても、その恩恵は、實はその人に對する物である事を發見しない事はない、それからどんなに大様な人でも、折があればそのかへしを望んでゐない人はない。

エマスンは友情に關する論文に殆んど全く同一の事を云つて居るが——人間の智慧はこの何世紀かの間に殆んど變つてゐない事が分る。ここに訪問に關する別のよい助言が少しある、

たとへ通り路に住んでゐても、惡友の家は遠い、しかし遠くに住んでゐてもよい友人の家には近路がある。

いつでも同じ家の客になつてばかりゐてはよくない。餘り長く、人の食卓について居ると、歡迎さるべき人がうるさい人になる。

これは私共が友人を困らしてならない事を意味する、しかし友人の家で飲食する問題については、さらに警告がある。友人の家に行く時には、できるなら、空腹で出かけてはならない。

人は隣人の家に行く前に、早目に食事をすべきである――さうでないと席につくと餓死しかかつて居る人のやうに、空腹に見えよう、そして談話の元氣もない人のやうに見えよう。

他人の家で食事する時に記憶すべき要點は、自分だけの樂みにそこに行くのではなく、外の人々を喜ばせるためと云ふ事である。客は談話をする事を期待されて居る、しかし餘り空腹であると談話ができない。丁度今日、紳士たる者は同じ事をするのが法則である。それ故私共は、それ等の北歐の荒々しい人々も餘程上品な社交――着物や言語でなく、上品な感情――をもつてゐたと考へる。この詩人は云ふ、それでも人は自分の家庭が最もよい、たとへそれがほんの小屋であつても。『人は自分の家で、人である』

今度は用心に關する教訓、それは或點から注目すべきいくつかの教訓のところへ來た。

秘密は一人だけにもらしても、二人にはもらしてはならない。三人知つてゐたら、世界中の人が皆知つて居る。

決して惡人に自分の失策を自狀してはならない、惡人からは決して自分の正直に對して報いを得る事はない。

私はやがて悪人に關する助言について、いくつかの現代の例をひく事にしよう。用心すべきもう一つの事は賞賛てある。非難について注意すべきであれば、賞賛についてもやはり餘程警戒すべきてある。

その日をほめるのは日の暮れた時、女は葬むる時、劍はためして見てから、乙女は結婚してから、氷はそれを渡つてから、酒は飮んでから。

今日英國人の性格に何か注目すべき物があるとすれば、それは丁度この種類の教訓を例にしたやうな點てある。あらゆる賞賛の價値ある物に對しても、中々賞賛しさうにないのは英國人てある。新しい友情、新しい理想、改良、高尙な行爲、驚くべき詩人、美妙な繪——これ等のどの物でも歐洲の各國民によつて賞賛感嘆されてから餘程たつて始めて英國人がほめる。それまで英國人は研究して、思案して、缺點を見出さうとして居る。何故缺點を見出さうとするか。それは後になつて誤りをしないためてある。英國人は誤りに關する祖先の恐るべき用心深さを遺傳して居る。この用心があつたので、外の國民がやつた甚だ重大な誤りを澤山やらないですんだのてあつた。この現代英國人は、反對の方面に、相應に節制を行ふ事も亦認めねばならない、英國人は祖先が敎へた別種類の用心を知つて居

る。『ハヴァマル』は云ふ、『威力は節制をもつて使はるべき物である、誰でも剛勇な人人の間に入つて見ると、何人でも相手がないと云へる人はゐない事は分る』それでこれは強い人が心得て置くべき甚だ大切な事である——即ち如何に強くても、その人は最も強いと云ふわけには行かない、その相手になる程の人は場合によつては見出される。スカンディネヴィヤの主權者ばかりでなく、英國の主權者も度々苦しい目を見てこの事實を發見したのであつた。甚だ心にかくべきもう一つの事は輿論である。

財産も亡びる、親戚もなくなる、自分も死ぬ、しかし決して死なない物を知つて居る——それは善惡に拘らず、人の名である。

これは宗教的な物を意味して居ると考へてはならない。それはただ人の評判はその人の子孫の善い或は惡い運に影響を與へる事を意味する。善い人の子である事は誇るべき事である、——世間で成功する助けになる。それに反して、惡い評判の父をもつ事は、遺傳の勢力の強く認められる國では、どんな種類の成功を得ようとするにも、甚だ重大な故障になる。

私はこの北歐の智慧の例を、諸君のために殆んど選びつくした、しかしまだ考ふべき題

が二つ殘つて居る。一つは不幸に關する行爲の規則、今一つは婦人に關する行爲の規則である。人は如何なる境遇にあつても、勇敢なる心をもつ事を期待された。これ等古代の北歐人は滅多に自殺しなかつた、それで私はクリスト教が或程度まで、自殺の習慣を止めたと云ふ話は、全部事實として公平に受け入れてはならないと諸君に云ふ。現代英國では今日一年殆んど平均三千の自殺者がある、しかし異常な事情を酌量して、北歐人種はラテン人種と全く違つた風に自殺を考へる事はたしかに事實である。北歐人の間には殆んど自殺はなかつた、そのわけは、どの人も自殺でなく、殺されるのが義務だと考へたからであつた、自殺は臆病である、人に殺される事を恐れる意味が含まれるからであつた。現代の倫理上の教では、宗教的考慮から全く離れて、自殺は恥辱の場合、或は印度反亂の歷史に起つたやうな、そんな例外な事情の下にのみ、容赦されると人は教へられるのである。とにかく私共は、英國では自殺は男らしくないと言ふ感情が未だ强く現れて居るのを見る　これはたしかに、クリスト教の教理によるよりは、むしろ異教の時代に溯つた祖先の考方によるのである。私が云つたやうに、異教徒の英人は單に苦痛を避けるために自殺は行はなかつた。しかし北歐の人々は恥辱を脫れるために死ぬ方法を知つてゐた。ローマの歷史に、征服されたドイツ種族の妻や娘が數千人、彼等の貞操を尊敬する事を約束してくれる事を

申し込んで、ローマの將軍がその要求を拒絕した時、一同自殺した恐ろしい話が殘つて居る。その當時こんな事で、南歐の人々はそんな英雄的行動を示す事はなかつたらう。しかし、貞操は別として、この古い書物は人は決して絕望してはならない事を告げて居る。

燈、太陽の見える事、よい健康、それから非難なき生涯、――これがこの世で最もよい物である。

しかし、健康は惡くとも、或は不具であつても、全く不幸ともきまらない。

びつこも馬には乘れる、手のない者も家畜を追ふ事はできる、聾でも立派に戰爭できる。盲目でも亡者よりはよい。死骸は何にもならぬ。

婦人の問題については、惡い女に關して普通の警告があるだけて、それ以上その本には甚だ澤山はない、しかしこんな教訓がある、

見て人間の弱點である事に對して、女ばかりを非難するな。美しい、人好きのする色彩は智慧のある人を動かして、鈍い人を動かさない事がある。大きな戀愛は人の子をして智慧者から愚物にならしむる。

これは拔目のない教訓である、そして鈍な人が決して理解できない美の或種類を見るには聰明な人でなければならないと云ふ美學上の眞理を含んで居る。それから、戀愛の問題を別にして、一般普通の缺點と考へられる物に對して、或人だけを決して笑ふなと云ふのは、なんとよい助言であらう。同じやうに、聰明な人は聰明でない人に對して辛抱强くなるやうに努めねばならない事を、同じ詩が外で主張して居る。

さてこの小さい研究の大體の結果、人の心に殘る大體の印象は何であらう。たしかに私共はこれ等の文句に現れた世の中は、用心が何よりも必要である――人の全一生の間、夜晝となく、決して止まない用心、思想言語行爲に於ける用心が必要であると云ふ世の中であつた事を感ずる。用心は節制を含む。節制は必ず公正の或習慣を發達させる――民族以外には擴がらない公正ではあるが、同じ血の人と人との間に行はれる公正である。英人の性格、英國の歷史の甚だ多くは、『ハヴァマル』にうつしてある人生によつて說明される。善い物の甚だ多く、それから惡い物の甚だ多く――人種の將來の關係する範圍では、或意味からは惡くはないが――社會的にはたしかに善くない物――が說明されるのである。凡て外の歐洲人から英國人を判斷すれば、英國人は凡て西洋人のうちで、最も疑ひ深く、最も遠慮勝ちで、最も感受性が乏しくて、最も不親切で、最も冷淡で、そして最も威張ると

云ふ事である。フランス人、イタリヤ人、ドイツ人、スペイン人、それからアメリカ人にでも、英人についてどう思ふかと尋ねて見ると、彼等のどの人も皆全く同一の事を云ふであらう。これは正しく北歐の社會のやうな環境で數千年間住んでゐた結果として、人の性格がさうなるのである。しかし他方に於て、殆んど凡ての國民が、英人の或他の性質——氣力、勇氣、品位、正義（彼等の間だけ）については賞賛するであらう。彼等は、英人と友人になる程困難な事はないが、一旦結んだ英人との友情は何よりも強く又眞實であると云ふだらう。それから生存競爭が未だ續くが、將來數千年續くに相違ないが、英人の性格はその競爭に特によく適して居る事を認めねばならない。その冷靜、その用心、その疑惑、その猜疑、その殘忍——これ等は過去に於て英人のために最もよい社會的戰爭の鎧具足となつたのであるが、現在もさうなつて居る。愛すべき性格でも人好きのする性格でもない、親切な性格でもない。最もよい型（タイプ）の英人は親切である方でなく、それよりも正しい方に遙かに餘計傾いて居る、その理由は、親切と云ふ事は情緒的衝動である、それで英人はどの種類の情緒的衝動をも警戒して居るからである。しかし凡てこんな事があつても、英人の性格は偉大なる物である、それが成功して居るのは、その價値の最もよい證據になる。

さて諸君はこの古代の社會道德の法典を讀んで、その教訓は少しも宗教的でないと同時

に、或者はどの宗教的見地から見ても全然不道徳である事に注目したてあらう。如何なる大宗教も、事實でない事を云つたり、友人であるやうな風を裝うて敵の面前で微笑したりする事を許さない。如何なる宗教も『僞りは僞りでかへさねばならない』と敎へない。それからどんな宗教も私共がなしたどの親切に對しても報酬を期待すべき事を敎へない、友情は利己的動機から起る物として考へる事、それから賞賛の價のある物を決して賞賛してはならない事を敎へない。實際サー・ウォルター・スコットは餘程以前『ハヴァマル』を一部飜譯した時、彼は餘りに不道德と思はれたいくつかの文章を省いて、いくつかに對して辯解をせねばならないと思つた。彼はそれは英國の讀者をして餘りに嫌惡の念を起させると考へたのであつた。

私共は今日それ程びくびくはしない、それて今日私共の時代の思想家は、英國の社會は現在、サー・ウォルター・スコットがそれ程惡いと考へたと同じ種類の規則によつて甚だ博く支配されて居る事を殆んど否定しないのである。しかしここで私共は特に英國の社會を非難するに及ばない。凡て歐洲の社會は數百年の間、同じ主義によつて行動して來た事が甚だ多いのである、卽ち人間の社會的經驗は、凡ての西洋諸國では同一であつたからである。英國の社會と外の社會との唯一の差違は、性格の冷酷な程度が餘程大きい事であると

私は云ひたい。歐洲の最もクリスト教的國家の、最もクリスト教的な時代の西洋の社會へてもかへつて見よう、そして社交上の法典は、その時そこで古代の『ハヴアマル』の社交上の法典とそれ程大して違つてゐたかどうかを見よう。スペンサー氏はその『倫理學』に云つて居る、即ち、生活上の行爲に關しては、宗教は殆んど無力で、實踐が全能である。私共は十七世紀にスペインで『オラキユロ・マニユアル』と言ふ題で書かれた社交上の教訓の甚だ著しい書物で、この事が例證されて居る事を見る。それは一六〇一年に生れて、一六五八年に死んだバルタザー・グラシアンと呼ぶスペインの僧侶が書いた物で、殆んど凡ての國語に飜譯されて居る。最良の英譯はマツクミランで出版されて『世渡りの術』と呼ばれて居る。この書物は十七世紀に於けるよりも今日に於て一層感嘆されて居る、そして世渡りの行爲に關して教へて居る事が二百年以前の社會に對して役に立つたと同じく現代の社會に對して役に立つ。これまで公にされた書物のうちで最も不愉快なる、しかも最も興味のある書の一つである――それに度々現れて居る惡意ある狡猾のために不愉快ではあるが――著者の恐るべき活眼のために興味がある。その書物を書いた人は人間の心、殊に暗い方面をよく理解した。彼は僧侶になる前は高い地位の紳士であつた、そして彼の本能的の鋭敏は遺傳的であつたに相違ない。宗教は最上の道徳を教へる、しかし世の中は宗

敎ばかりては支配されてゐない、それてそれと混交して、私共はその書物の敎訓に從つて行動せねばならない、とこの人なら云つたであらう。

これ等の敎訓は種々の點で『ハヴアマル』の用心や猾猾を想ひ出させる。北歐の記者とスペインの著者の兩方によつて人に訓戒された第一の事は沈默術である。多分これは凡ての國に於ける社會經驗の結果であつた。『用心深い沈默は世渡り術の神聖なる物のうちの最も神聖なる物である』とグラシアンは云ふ。それから彼はこの說に對して多くの念入りの理由を與へて居る、そのうちの少し重な物は次ぎのやうである、『もし諸君がすぐに自分を表はしてしまはなければ、諸君は期待を起させる、殊に諸君の地位が重大である場合には、諸君は一般注目の的となる。何事にでも少しづつ神祕を加へよ、さうすればその神祕が尊敬を起させる』少し進んで、彼は『ハヴアマル』の記者が敵に對して腹藏なく打ちとけてはならない事を云つたと全く同一の忠告を與へて居る。彼は云ふ、『君の負傷した指を見せてはならない、見せたら何でもそれにぶつかつて來る、或は又その事について不平を云つてはならない、そのわけは害を加へ易い弱點を見つけようと、いつも惡意が狙つて居るから。……決して感情を害した事や、喜んだ事の源を知らせてはならない、もし君が前者を止めさせたいと思ひ後者を續けたいと思へば』祕密についてはこのスペイン人は

北歐人のやうに用心深い。彼は云ふ、『友人に打明けた祕密は特に危險である。自分の祕密を他人に傳へた者は自分をその人の奴隷にする者である』沈默と祕密に關してこんな澤山の警戒のあとて、彼は又私共に、どうして世の中と戰つて行くべきかを學ばねばならない事を敎へる。諸君はこの問題に關する『ハヴアマル』の忠告、非難に答へる事のできない人を愚人として非難して居る事を覺えて居るてあらう。しかし、スペイン人の敎訓はもつと遙かに意地が惡い。彼は私共に『誰でも人の拇指ねぢを知るやうに心がけ』ねばならない事を云ふ。諸君は拇指ねぢは罪人から白狀させるために昔、使用された拷問器てある事を知つて居ると私は想像する。この忠告はどうして外の人の感情を害する事ができるか、或は外の人の弱點に媚びる事ができるかを心得る事に外ならない。『先づ、各人の心の重なる激情を推察して、言葉でそれに訴へて、誘惑してそれを煽動したら、君はまちがひなく、彼の自由意志を王手詰めにする事ができる』『王手詰め』と言ふのは將棊から來た言葉て、ここでは打勝つ、征服する意味として理解されねばならない。それに類する忠告は『諷刺を澤山藏つて置いて、どうしてそれを使用するかを知れ』である。實際彼はこれが人間交際に於ける最大の氣轉の點だと云ふ。『この種類の最もつまらない言葉に打たれて、多くの人は長上と或は目下との最も親しい間柄からも離れて行く、しかるにその間

柄は普通の忍び込みや内密の惡意の大きな陰謀によつては、少しもびくともしない物であつた』換言すれば、諸君は諷刺の一言で破壊する事はどれ程澤山の陰謀によるよりももつと速かであると云ふのである。これはよほど、只惡逆の言のやうに讀めはしないか。たしかにさうである、しかし著者は諸君に、惡人と戰ふには惡人の劍を取つてせねばならないと云つたであらう。『ハヴアマル』にはそれ程思ひ切つて惡逆な物はない、しかし私共は北歐人は、言葉には出さなかつたらうが、その祕訣を知つてゐたらうと想像する。その社交の教訓については、諸君はそれが甚だ巧妙に現代チヨーヂ。メレディスの小説に書かれて居る事を見出すであらう、ついでに云ふがメレディスは諷刺と嘲弄を賞賛した詩を書いて居る。しかし今度はこのスペインの著者が友情と無私について何を語つて居るかを見よう。

拔目のない人は外の人が自分に遇ひに來るのは、『自分』に遇ひに來るのでなく、ただ『自分のもつて居る、それから自分によつて得られる利益』を求めに來るのである事を知つて居る。つまり、聰明な人は無私の友情と云ふ物を信じない。これは『ハヴアマル』にある何物よりもひどい。そしてそれが惡魔的に念を入れてある。つぎのやうな教訓に對しては、私共は何と云つたらよいだらう、『賢い人は人々から禮を云はれるより、必要視さ

れるやうに氣をつくべきである。人々を希望の敷居に置く事は外交的である、彼等の感謝をあてにする事は田舍じみて居るが、感謝の記憶力は惡い』この種類の物はもつと澤山ある、しかし感謝を信ずる者は田舍者（即ち、無學な下等な人）だけだと云つたあとで、人性に關する著者の意見はもうそれ以上說明の必要はない。あの昔の北歐人もこんな說に對しては嫌惡の念を起したてあらう。しかしつぎのやうなのは贊成したてあらう、『何かよい事を聞いたら、君の輕信の性質の手綱をしめよ、もし惡い事なら、それに拍車を與へよ』即ち、君が外の人について何かよい事を聞いたら急いでそれを信ずるな、しかし何か惡い事を聞いたら、できるだけ多くそれを信ぜよと云ふ事てある。

用心に關して北歐の教訓とスペインの教訓との類似の點を外に澤山見る。『ハヴアマル』は君自身より惡い人と喧嘩をするなと云つて居る、『何故なれば、よい人が自分より惡い者の劒で倒れる事がよくあるから』スペインの僧はもつと拔目のない理由で同じ方針を授けて居る。『無一物の人と係つてはいけない、何故なれば君は對等でない喧嘩をする事になる。相手は心配なしに喧嘩ができる、一切の物、恥辱までもなくして居るから、もうこれ以上なくする事を恐れる物はない』これは用心深い教訓だが不道德な教訓だと思ふ、し

かし、失ふ程の名聲もたないやうな人と爭はないやうにする事が現代の社會の主義となつて居る事は云ふまでもない。不道徳と云つたのは、全く利己主義だからである、又人は敵を作る事を恐れて不正を攻撃する事を止むべきではないからである。しかし『ハヴアマル』とこの僧侶の一致するもう一つの點は、もつと推薦の價値もあり又興味もある。『決して我々に逆らはない人は取るに足らない人である、それは彼が私共を愛するしるしではなく、むしろ彼自身を愛するしるしてある。斬新奇拔な風變りな意見はすぐれた才能の證據である』

しかし私が引用して來た書物全體が引用文のやうな性質の物ばかりと想像しない事を諸君に願ふ。その中には立派な忠告がある、それから博愛的行爲の問題について多くの親切な敎訓がある。よくもあり惡くもある書物だが、つまらない書物ではない。友情は中々無私な物ではないと云つた同じ人が、友人がなかつたら人生は沙漠であらうとか、或は善い事――即ち善い行のやうな魔術はないなどと又公言して居る。彼は如何にして人の感情を害するかを學べと忠告して居るが、又正直な手段によつて好意を得る事の必要を敎へて居る。

私はこの書物を讀んて利益を得ない人はない事を信ずる。それで私はそれから、文學の

學生に與ふる事のできる最もよい忠告になるつぎの一節を引用して、その書物からの引用の結末にしよう、

おそく、そしてたしかであれ。大急ぎでできた物は又大急ぎで破壞される。永久に續くには、永久の準備が要る。優秀である事だけが大事である。深い聰明は不朽の唯一の基礎である。價値が多いければ價も高い。貴い金屬は最も重い。

しかし人間行爲の問題の關するところでは、グラシアンの書物は、異教の北歐の『ハヴアマル』と同じく宗教の書物ではない。今日こんな書物が聰明な著者によつて出版されて、現在の人々に示されたとしたら、諸君は西洋の道徳は社會の法則と云ふ範圍ではクリスト教ができてからも、少しも進歩してゐない事を發見するであらう。社會は永久の戰爭狀態であるから、宗教的ではない、又宗教的になれない。そこに居る者は皆戰はねばならない、そしてその鬪爭は劍で戰はれないが、殘酷でない事はない。實際社會のどの人も劍を帶びた時代も今日と同じく親切で、その時代の方が今日よりも人が皆遙かに正直であつたと私は考へる。この小さい講義の目的は、諸君に古代北歐の主義は、全く今日英國の社會を支配する主義である事を示すためであつた、しかし私は諸君がそれからもつと大きな意味を

見出す事ができるだらうと思ふ。人間と人間との鬪爭を表はす物はただ一つの形の社會でなく、凡ての形の社會である。それが凡ての時代に於ける思想家、詩人、哲學者が、鬪爭を避けるために孤獨を求めて、美と眞との研究のみに身を委ねる事を努めた理由である。しかし思想の得物は孤獨のうちにのみ見出されようが、人生の得物はそこでは得られない。つまり社會の殘酷奸計について私共が何と考へるとしても、終りにそれが大きな事をする。それが判斷力を進め、叡智を深くし、自制力を養成するやうに強いて、精神的道德的の强い種々の形を作らせるが、これは時として人類には非常に肝要であるに相違ない。しかし諸君が私にそれが人類の幸福を增すかどうかと尋ねたら、私はたしかに『否』と答へる。『ハヴアマル』も同じ事を云つた、――眞に聰明な人は幸福にはなれない。

譯者註一　『ハヴアマル』は神の敎或は歌と云ふ意味、オウデイン（北歐の神々のうちの重なる神・智慧敎養の神）の神自ら、人類にこの敎訓を與へた事にしてなつて居る。

譯者註二　Vigfusson は十九世紀のデンマークの言語學者。

譯者註三　Lord Chesterfield は十八世紀の英國の政治家、演說家、著述家。ヂョンソンの辭書が完成してから、ヂョンソンに公開狀をつきつけられて少し器量を下げた事がある。重なる著書は『彼の子供に與ふる手紙』である。

フランス浪漫派の人々

この學期の末に浪漫派（非擬古主義）の運動の英佛間の關係について講義をしようと思つてゐたが、この問題をできるだけ簡單に取扱ふより外に時間はない。しかし、これから少し云ふ事が諸君のために多少の參考にはならう。勿論、どの學生も現代文學に於ける大運動は決して一國にのみ限られたのではない事を承知して居る。英文學に關して、私共が取扱つてゐた浪漫派の運動は、實際歐洲全部に擴がつてゐた。それはただ英文學に於ける變化を表はすばかりでなく、歐洲文學に於ける變化を表はすのである。どの國も他の外國に影響を與へ、そして銘々が凡てから影響を受けた。フランスが受けたこの變化の利益は速かに英國とドイツに及んだ、そしてその代り英國は自分の文學上の改良の利益をドイツ文學とフランス文學とに與へた。浪漫派の運動全部のうちで最も目に立つのはたしかにフランスのであつた、それて英國はどこよりもフランスの影響に負ふところが多い。いつて

もさうであつた。十八世紀の英國の古典文學はフランスの古典文學を基礎として作られたのであつた。十六七世紀の英國の傳奇はフランスにそれと同じ物があつた、それからフランスの傳奇が英語に飜譯されてから、やうやく英國の著作がそれ自身の創造的性格を發揮するやうになつたのである。さらにもつと溯つて中世紀の本體にかへつて見ると、少くともそれと同樣に英文學が佛文學に負うて居る事を見出すであらう。それから最後に十一世紀にはフランス語が英國の國語になつて、その後長くさうなつてゐた事を諸君は覺えて居る筈である。元來は妙に違つた根本から生じて居るが、英語と佛語は相互に影響したので英佛文學は歐洲のどの二つの文學よりももつと密接な關係がある。

英國の浪漫派運動のやうに、佛國のも徐々たる發達であつた、私はその跡を尋ねて十八世紀に溯る事ができる、そしてもし時があればさうするのである。この運動の開花は、英國の浪漫派が勝利を得た頃、丁度テニスンが認められかけた頃に始まつた事だけを、今云つて置く事にする。その以前に、浪漫派の歷史に於てワーヅワース、コールリッヂ、スコットのやうな英國初期の浪漫派の人々と餘程相當するやうな創造的な美はしい才能の佛詩人があつた。しかし本當の勝利は十九世紀の早い三十年代――先づ一八三〇年と一八三四年の間に始まつた――ヴィクトル・ユーゴーの『オリアンタル』が早く一八二九年に現れ

たけれども。しかし、もう一つ注目すべき事がある、それはデューマの唯一つの除外例があるだけで、偉大なる浪漫派の人々の殆んど凡ては丁度十九世紀の始めに、一八〇二年、一八〇四年から一八一一年まで生れて居る事である。デューマでもやはり十九世紀の眞際に生れて居る、それは一八九九年だから。

佛國の浪漫派の運動は、詩でも散文でも英國のより餘程優つて居るとは思はれない、實際は議論の餘地が隨分ある、それでもし佛國の方が優つて居るとすれば、それは思想や感情の性質がすぐれて居るのでなくして、彼等の國語のすぐれた性質に、むしろよるのである。その上この國の學生にとつて、詩の方面のこの運動は少しも興味があるらしくない。佛國の浪漫派の詩人を讀む方が、偉大なる英國の浪漫派の詩人を讀むよりも、諸君にもつとためにならうとは思はれない。英國の詩人の方がフランスの詩人と同じやうに多くの思想や情操を諸君に傳へるだらう。しかしフランスの詩は全く違つた種類の物で――英國の浪漫派の普通の詩よりはもつと熱情的な、暖かい、音樂的な、そして派手な色彩の物であつた。それから形式はもつと完全であつた、英語では、テオフィル・ガウティエの『エモー・エ・カメー』のやうなそんな珠玉のやうに華麗な詩を作る事はできない。この理由で、或は、フランスの詩に諸君の第一の注意を與へる事がむしろ諸君の興味をひくかも知れな

い。しかし、私はこの講義で重に、フランスの浪漫派の人々のうちの小說家及び文體の達人としての彼等の特色について述べる事にしよう。

云ふべき名は澤山あるが、その多數は二大別できる。私共の英國ヴィクトリア朝時代及びヴィクトリア朝以前の時代には、二つの著しく違つた文體があつて、この二種の文體は續いて行はれて居る事を諸君は覺えて居るであらう。一つは華麗な、或は非常に浪漫的な文體で、一つは引締つた文體で、古典文學の何物とも比べられるやうな或はもつとさらに簡單な、――何等の飾りもない、しかも情緒を感動せしむる非常な力のある文體である。フランス文學に於ても私共は全く同じ物を發見する。しかしフランスではこの文體の差別を記すに奇態な術語を發明して居る、それが餘り奇異で、又覺え易いから、私はこの講義にそれを使用しよう。非常に華麗な散文の記者、ガウティエやユーゴーの如きは、近視眼的文體の人と呼ばれた、――どの小さい細目までも書く事ができるやうに非常に綿密に、詳細な點まで物を見るので、丁度甚だ近視眼的であるかのやうな書方をしたからである。しかし今一方の文體の記者は、メリメのやうに遠視眼的の文體の記者と呼ばれた――それは丁度遙かの距離で明瞭に見るが、すぐそばの小さい物は辨別しないやうな書方をしたからである。

勿論この始めの方の一群のうちの偉大なる名前は、ヴィクトル・ユーゴー、アルフレッド・ド・ミュッセー、サンブーヴ、テオフイル・ガウテイエ、アレキサンドル・デュマ、オノレ・ド・バルザック、プロスペル・メリメ及び「ヂョーヂ・サンド」(アルマンディン・ルシール・デュドヴアン)である。未曾有の最大批評家であつたサン・ブーヴ及び彼の英國の批評に及ぼした影響については、私はすでに話した、ここではただ正しい案内者としてのみ述べて置くだけの事が必要である。この人の作を讀まないでは、何人もフランス文學に關して、正しい趣味をもつ事は望めまい。

ヴィクトル・ユーゴーの名と著作とは非常によく知られて居るので、私共は甚だ簡略に論及して置けば宜しい。それからアレキサンドル・デュマについても同じ事である、デュマは私共英國のサー・ウォルター・スコットに最もよく似て居る、空想的な想像では遙かにスコットを凌いで居るが。バルザックについて云へば、彼は特に文體をもつて居る程ではなかつた、ただ彼はフランス全體の生活、及び社會各方面の狀態を、大規模の連續的小說で描寫すると云ふ大事業を企てて成功した、その小說の殆んど全部が連結されて居るから一つの小說の人物が外の小說にも再現して來る、——全體が約五十二册になつて居る。

凡ての點で英國のヂョーヂ・エリオットに似て居る「ヂョーヂ・サンド」は特に熱烈な

戀愛小說の作者である、彼女の書物は樂んで二度讀まれると云ふ試驗にたへないから文體を有せる人とは云はれない。樂んで二度讀めない書物には文體がない。しかし文體は有しないでも、そして今日讀んでやや退屈するが、この婦人は、今日まで續いて居る浪漫派小說の書方の大きな一派を創めた。この人々の文體はテオフィル・ガウティエとプロスペル・メリメの二人によつて最もよく代表されて居る、——前者は凡てのフランスの文體家のうちで最も華麗で、後者は最も華麗でなく、最も飾りのない方である。ヴィクトル・ユーゴーに關しては、既に述べたやうな理由で、餘り云はないつもりである、ユーゴーはユーゴー風に誰と比べても劣らないやうに華麗であるが、それはただ一面である。彼の文體はカーライルの文體よりも、比較にならぬ程不規則である、それはユーゴーの文體と云ふよりはむしろユーゴー特別の表現法である。これ等の作者を研究するやうに諸君を誘ふために、私は始めにこれ等の人々の長篇よりはむしろ短篇を推薦したい、そして特にこれ等について話す事にしよう。しかしアルフレッド・ド・ミュッセーやバルザックも短篇小說を書いた、そのうちの或物はさきに云つた第二類の大文體の代表として述べた方が好都合であらう。第一の方を總括すれば、ヴィクトル・ユーゴーはこの運動のゴート式の精神を代表して居るが、それは『ノートル・ダム』の中世紀時代の話で、最もよい例を示して居る。ド・ミ

エッセーは多少の古典的傾向をもつて、彼の散文の小說て、私共に殆んど十九世紀にも同じく十八世紀にも屬する輕い優美と雅致を與へて居る。この運動の第二の最も偉大なる勢力であつた、ガウティエ――ヴィクトル・ユーゴーよりもさらにもつと完全な詩を作る事のできた彼は、同じく華やかな文體の凡てのフランスの文人のうちの最大なる者である、彼は浪漫的運動の歷史家である事を私は諸君に注意せねばならない、その事を彼は『浪漫派の歷史』と名づけた愉快な研究叢書にして書いて居る。アレキサンドル・デュマは重大なる事件の出て來る小說を代表して居る。バルザックは、その新機軸が全然創造の物であるので、別に一家をなして居る。メリメは歷史家であり、又、小說家であるが、私共英國のフルードに種々の點で似て居る。それから、ヂョーヂ・サンは熱情――正當な熱情よりはむしろ正當でない熱情の小說を無數に書いた人だが、今もなほその小說は巴里の出版界から、流れ出るのが止まない。

第一にガウティエについて話さう。彼は人好きのする人で、そして大學者であつた、それで彼の性格の或物とならびに彼の學問の或者とが、彼の著作の非常な美しさを說明して居る。彼はまちがつて居ると思つた黨派や主義は攻擊したが、個人について一言の惡口を云はなかつた極めて稀れに見る新聞雜誌記者の一人であつた。彼は藝術のための藝術主義

――美を藝術の最高の目的として創造する事或は寫す事――を宣言した。彼のギリシャ思想及び感情の知識は、殊に彼の藝術論に影響を與へた、題目が美でなければ、彼はそれには觸れなかつた。この點では彼は恐ろしい物や奇々怪々な物を喜んだユーゴーと違つてゐた。彼の奇癖の一つは述べる價値がある、彼の重なる娯樂は辭書を讀む事であつた、それで文學上の名譽にあこがれて來る青年に『君は辭書を讀む事が好きか』と問ふのが彼の習慣であつた。もしその青年が『然り』と云へば、友人になつたが『否』と答へたら、ガウティエはその青年は決して藝術の誠實なる愛好者にはなれさうにはないと考へた。たしかにガウティエが文體の眞の魔術師になつたのはこの辭書の研究によるのであつた、しかし同じ法則が凡ての場合に成功するとはきまらない。ガウティエは天才であつたのみならず、さらに彼は最もよい古典の素養を有つてゐて、それを最も浪漫風に使用したから成功したのであつた。英語にはガウティエの書物のやうな物は少しもない、――彼に比すべき者は一人もない。諸君は彼について二つの事を覺えて置くやうにしなければならない――卽ち彼は美或は壯と考へた題目をしか選ばなかつた事、それからそれを非常に美妙な風に取扱つた事。しかし彼の美學は狹くはなかつた、如何なる種類の美も彼を捉へた、如何なる時代、世界の如何なる地方の物であらうが。諸君はデ・クィンセーが書いたスペインの尼の

話を覺えて居るか。この題は變つた物で——氣力と勇氣と美とですぐれて、兵士になつたり、劍士になつたりした女で、——甚だ傳奇的題目であつた。このスペインの話の外にフランスの歷史に、ド・マウパンと云ふ名の婦人で、實際劍で決鬪した話がある。男裝した女の話はどんなにでも面白く作られるが、シエーキスピヤもいくつか立派な手本を示して居る、たとへば『十二夜』それから『御意のまま』を諸君は覺えてゐよう。これ等の三つの要素からガウティエは名高い『マダマゼル・ド・マウパン』を作つた、それは男裝した女があらゆる種類の戀愛の冒險をする話である。恐らくそれにはボッカチォのやうな古い伊太利の作者から得た物もあらう。たしかにこの書物は不道德であるが、又非常に美はしい、そして特に習俗（しきたり）に對する反抗として書かれたのであつた。ガウティエ自身はこの上もなく品行方正の人であつたが、宗教も習俗もどちらも文學に對して拘束を加へる事に反抗して戰つた。そして成功してその拘束を破つたのであつた。しかし彼の最も偉大なところは恐らく彼の短篇小說に現れてゐた。これが何册もある。最もよい二つは、單に『傳奇と話（ロマンス・コント）』及び『小說（ヌーヴェル）』と題した物であつた。フランス文學に於ける凡ての傳奇的短篇小說のうちで最も偉大な物は多分『死せる愛人（ラ・モルト・アムルーズ）』であらう、それがこの二册のうちにある　それは吸血鬼の話　——男を魔法の錯覺に入れて置いてその男の血を吸ひに、夜になつて來る死んだ女

の話である。こんな題は甚だ物すごくなる物だが、ガウティエはそれを非常にこれを美しくした。同じやうに顯著なのは、私は思ふに、『アリヤ・マーセラ』[譯者註一]の話である、それは數千年間葬られてゐた女が、熱情の力で、幽界から歸つて來る話である。この話の美は、殊にポムペイの生活を藝術的に復活させて居るところにある、それでこれを書くためには餘程多くの考古學の知識が必要である。もう一つ偉大なる小話は「みいらの足」と呼ばれて、古代エヂプトの生活を取扱つて居る。或人が骨董として女の足のみいらを買つて、この足をもつてゐた人をまのあたり見たいと思ふ、そこで女は五千年の夜から歸つて來て、男を地下へ連れて、彼女の祖先の集まつて居るところ、死んだ無數の王や王族のところへ行く。第四の話は日本の傳説によく知られて居る題を取扱つて居る、卽ちよい繪の生きて出る話だが、この場合では繪は描いたのでなく刺繡であつた。しかし私はもうガウティエの小説についてこの短い講義では話されない、もし諸君が單にこの二册をもつて銘々で選んで見たら、如何に不思議な作者、小説家であるか分るだらう。ただ一つ障礙がある――この人は異常な言葉を好んだ、それでこの人の藝術的の小説を讀むために、側に辭書をもたねばならない。

　プロスペル・メリメは甚だ違つて居る。ガウティエは長い流暢な文句や、長い柔らかな

韻律を好んだ、彼は時として、丁度ラスキンのやうに、一ページ半に渡る長い一文（センテンス）を書いた事が度々ある。しかしメリメの文は皆短くて、明瞭で、力があつて、韻律もなければ、異常な文字もない、そしてできるだけ形容詞を使つてない。古代北歐の作者を除いて、それ程飾りのないそれ程簡素な文體はない。

彼の文體の最もよく現れたところはどこの方面であるか――歷史か、小說か、或は手紙か――云ふ事がむづかしい。「昔のコサック」のやうな歷史は、甚だよい傳奇のやうに讀まれる、しかし何人も彼を歷史家として少しでも缺點があるとか、不正確だと主張する者はない。この偉大なるコサックに關する書物は、私の知つて居る最良の物である――事によれば、諸君に簡單にロシヤとその韃靼の征服者との長い鬪爭、ならびにそのコサックと云ふ驚くべき義勇兵に關する明瞭な概念を與ふる唯一の書物である。騎兵の戰爭の記述は殆んど讀者を跳り上らせる程活氣がある。彼の書物で珍らしい物にロシヤの王位の正當相續人と僞つて實際殆んど皇帝になつて成功しかけた名高い詐欺師の事を書いた物がある。これは「僞りのデメトリアスの人々」（この詐欺師は二人あつたから）である、そして外の書物では見られないやうな昔のロシアの生活の繪を與へて居る。メリメは又、中世紀を好んだ、それで私共にフランスの歷史に關する或驚くべき論文を與へて居る。ついてだが、

彼のシーザーの名高い歷史を書くために助けてくれたのは、ナポレオン三世であつた事を覺えて置くべきである。しかし大多數の讀者には、メリメは彼の不思議な小說——「カルメン」「コロンバ」「タマンゴ」「マテオ。ファルコネ」「ヴィナス・ディル」等で一層よく知られて居る。そのうち、第一に述べた「カルメン」はヂプシーの女に魅せられたスペインの兵士が、その女のために人殺しや盜賊になる話である。最後に牢屋で自分の死刑の前の晩に、女を殺す。これよりもつと恐ろしい話、しかももつと哀れな話は決してこれまでなかつた。その上この書物はスペインのヂプシーの或特色を寫した物である。諸君はそれがオペラになつて居る事を知つて居るであらう。その音樂の譜は音樂方面で浪漫派の運動を代表した大音樂家ビゼーが作つたのであつた。このオペラに入れてあるスペインとハヴアナの節を聽いた人は容易にそれを忘れる事ができない。「コロムバ」はコルシカの復讐談である。それは獰惡性も多いが又詩情に富んだコルシカの風俗習慣の比類のない繪である。「マテオ・ファルコネ」もコルシカの物語である、匪徒の一人だが、一家の名譽を裏切つたために自分の小さい男兒を殺す父の話を書いた短いそして恐ろしい物である。「タマンゴ」は奴隸船の話で事實に基づいて居る。奴隸は謀叛して、船長と乘組員を殺して船を奪つたが、船の操縦を知らない、それであてもなく漂流して最後に船中の者が殆んど死ぬ。

『ヴィナス・デイル』はその所有者に物すごいそして不幸な魅力を及ぼす古代彫刻の話てある。私は多くのうち少數の名だけを選んだのであつた、そしてメリメの書物に散在して居る伊太利、スペイン、ドイツ、及びロシヤ研究のその巽趣多樣を述べる事は或は無用であらう。何故なればこの人の妙味は餘りに大きいので、もし諸君がその小說の一二を讀み出したら、全部讀み終るまでは休まれなくなるだらうから。それからメリメについて注目すべき事實がある、それも彼の趣味の傾向を示すのである、卽ちロシア小說の驚くべき價値について歐洲の讀者に紹介したのはメリメが最初の人てあつた事である。彼は始めてゴ（譯者註二）ゴルとプッシュキンの飜譯をした、そのプッシュキンの飜譯のうちの最も奇異な物は『スペートの女王』と云ふ賭博師の物語て、或不幸な札が悲劇的な役を演ずると云ふ事になつて居る。メリメの作のうちで小說とは云はれない物もある、——むしろ寫實主義の研究とも云ふべき物、マウパッサンの、先鞭をつけた物がある、たとへば、砲臺襲擊に參加した兵士の物語『角面堡の占領』と題する物の如きそれてある。彼は兵士の簡素な言葉でただ感じた物、見た物だけを述べて居るが、その說話は讀者をして正しく戰の中に居るやうな感覺を起させる。

ガウティエは、英國の文人に文體に關して餘程敎ゆるところがあつたに違ひない、メリ

メはただ感嘆されるだけであらう。文體でメリメに接近して居る者はフルード[譯註三]である。メリメの方が遙かにもつと偉大な藝術家である、遙かにもつと完全な國語で書いて居る、それで私は英人でそれと同一の結果を生ずる事に成功する人があるだらうかを疑ふ。フランスではメリメは、マウパッサン以前に模倣者をもたなかつた、それで、マウパッサンでもメリメを凌駕する事はできなかつた。メリメの魅力は幾分その奇異な異國情調的特色のある題目にもよるが、その題目を離れても、その方法はいつでもこの上もない物である　私共は彼の文體は最も寫實的で、讀者に及ぼした結果は最も傳奇的であつたと云ふ事ができる。

外の作者のうち、少し論及して置く程の必要のある人はただ少數に過ぎない。ド・ミユッセーの散文、伊太利及び巴里生活に關する美しい小話は、感情は傳奇的だが、やはり甚だ飾りのない文體で書いてある、その文體はメリメに近いとは云へるが比べ物ではない。彼の文體のよい例は、彼の熱情的な自傳『時代の子の懺悔錄』の中にある。それには、彼が愛着を感じてゐた婦人に裏切られた青年の絶望と嫉妬の告白がある、主人公は勿論外の名を使つてあるが著者自身である。物語の中の女の一人は名高いヂョーヂ・サンであると想像されて居る。ド・ミユッセーは一時彼女の愛人であつたが、彼自身の告白するところ

では、彼は如何なる婦人とも同棲する事の甚だむづかしい人であつた。とにかくこの話の正邪は別として、この書物の熱烈な哀愁と美については疑を容れない。第一期に大影響を與へた人々はガウティエとメリメであつた。

勿論、文學に影響を與へるのは、その不朽の價値が單に文體による小説でなく、想像と暗示による小説である事もある。さてバルザックはかうした人の一人である。彼の巨大な連續的小説は散文としてフランス文學に影響を與へたのではなかつた、それは小説の新しい一派を設立する事になつただけである。この長い鎖の相連續した小説では、文體家としてのバルザックの最もよい方面が現れてゐない、しかし彼が短篇小説を書く時は全く別であつた、そして彼の短篇小説の或物は永久に生きるに相違ない。

そのうち最も名高いのは『バウ・ド・シャグラン』である。諸君は『シャグラン』は悲哀の意味である事を知つて居る、しかし又革を特別に仕立てる方法の意味にもなる、それに英語では『シャグリーン』と云ふ言葉を使つて居る。この題目の二重の意味が話の意味と共に最もよく分つて來る。或古物商の店で一青年が不可思議な文字の一面にある妙な革、或は羊皮の賣物に出て居るのを發見する。彼はそれを買ひたいと云ふ、主人はそれを買へば彼はそのために命を取られると警戒する。それは魔法の革である、そしてそれをもつて

居る人は誰でも、自分の願を滿足させる事ができると云ふ不可思議な力をもつて居る。しかしその願が充たされると、二つの事が起る――革が縮んで小さくなる、それから願つた人の生命がそれに隨つて短くなる。諸君の想像する如く、青年は革を買つて、色々の願を充たし始める。彼は富を得たいと願ふ、そして富を得る、權力を得たいと願つて權力を得る、世界第一の美人を得たいと願ふ、そこでその美人が彼の妻になる。大分滿足して來た頃には革は恐ろしく小さくなつて、彼の命が終りに近づいた事が一見して分つた。そこで彼はもう少し生き長らへるためには、全然何事も願つてはならない事を發見する。彼の醫者は彼に女の事、彼自身の妻の事さへも考へてはならないと警告する。諸君はこの話の結末を充分想像する事ができる。一つ肉慾的の願が起る、革は消える、それでその男の命がなくなる。これはそのうちにある大敎訓のために甚だ偉大である小說である。どこにも引用されて居るから、學生はせめてその題を覺えて置かねばならない。

それからバルザックは『コント・ドロラティク』と題する二冊の話を書いて居る、英語では飜譯して『ツーレーヌの寺院からの道化ばなし』と云ふ題になつて居る。(譯者註四)ドーレの挿繪が四百二十五ある英譯は中々立派である、しかしそれは十六世紀の古めかしいフランス語で書かれた原文の驚くべき藝術が殆んど分らない。これ等の話は、その多くが妙に不道

德な特質をもつて居るに拘らず、たしかに不朽に殘る性質の物である。それには恐怖と迷信はあるが、又柔和と詩趣のある中世紀の世の中を反映して居る。甚だ異常の話がある。先づ笑はせる、少し進むと、極めて下等な意味で甚だ肉慾的になる、それから突然涙を催ふさせる程非常に人情味のある哀れの深い物になる。さて世界の文學に――奇怪て、猥褻て、滑稽て、人情味があつて、悲哀を催ふすと云ふやうなそんな種類の文學は甚だ少い。しかしそこに叙述してある時代の世の中は全くそんな世の中てあつた、道德は今のやうてはなかつた、多くの習慣は殘忍てあつた、都市の政治は殘酷は除外例でなくて通例であつた、それでも戀愛、勇壯の情緒と凡ての柔らかな感情は今日存在すると殆んど同樣に存在したのであつた。さう感じて私共はこの話の猥褻な部分を非難する事を止める。これ等の話は過ぎ去つた人生の形について事實を語つて居るだけである。この大學の圖書館に英語の飜譯のその書物がある、それでフランス語を試みる前に先づ英語の飜譯を讀む方がよからう、それはフランス語は十六世紀の物で、習熟するには少し忍耐を要するからである。

同じく散文學を、それから韻文學をさらに多く影響した別の一群の浪漫派の人々がおくれて現れた。正確に云へば實際は三つの群があつた、フランスの浪漫派の運動は三つの大きな波となつて居る、しかし、今時間がないために、詩の方は考へてゐないから、ここて

はその區別をするに及ばない。この第二の一群で殊に考慮のうちに入れて置くべき名はヂエラード・ド・ネルヴァル、ルイ・バートランド、シャル・バウドレール、グスターヴ・フラウベルである。ヂルヴァルはガウティエの友人で、成功せる作者としては、ガウティエよりも遙かに後れて現れた。彼の小説は甚だ尋常でない。疑もなく、彼は少し氣が狂つてゐた、そして戀愛事件のために狂氣になつたらしい。しかし最も驚くべき書物を書く事ができない程狂氣ではなかつた。ほんの少年時代に、ゲーテの『ファウスト』の佛譯をしたが、それをゲーテ自身が當時最良の飜譯であると斷言した。一時エヂプトに行き、マホメツト教信者だと公言して、その國の習慣を採用して奴隷市場へ行つて妻を買つて來た。彼女は餘程思ひ切つた性格のトルコ女であつたらしい、それで狂人に買はれた事が分るや否や、彼女は法律も習慣も遠慮會釋なく、その所謂夫を捨てて、ダマスカスへ逃げ去つた——とにかくさう云ふ話である。しかしこんな失望をしたにも拘らずヂルヴァルは東洋に於ける經驗から澤山の靈感を得たのであつた。彼はエルサレムまで旅行して、フランスへ歸つて彼の驚くべき『東洋生活のいくつかの場面』二冊を書いたが、旅行記としては未曾有の美はしい、そして未曾有の珍奇な書物であつた。傳奇としては恐らく彼の傑作であるソロモン王とシーバの女王バルキスとの歷史がその中にある。この物語はアラビヤ夜物語に

あるどの話にも劣らない立派な物である。大音樂家アイエルビーアがそれをオペラにして劇場に出すために樂譜を作つたが、あとで氣がついて見ると、こんな脚本を演ずる程大きな舞臺は建築する事ができないのであつた。この作者の想像は廣大であつた、彼の描寫した物は最も高い山の頂上からのみ實際見られるやうな廣大な場面を表はしてゐた。多くの人はこの書物は偶然旅行記であるので、この驚くべき物語に興味を見出したかどうか私は知らない。しかしヂルヴァルの外の書物は甚だよく知られて居る。最もよく知られて居るのは『火の娘達』であるが、諸君は恐ろしい人物と想像するだらうが實は甚だ物靜かな少女達である。それぞれ女の名のついた話が四つある、そして銘々或婦人の性格の特種の美を述べて居る。勿論その話は大概甚だ妙な、超自然的な物だが、第一のは驚くべく人間的である。それは中世紀の少女の物語にしてある、その少女は父の城から一人の冒險者に連れられてそつと逃げ出す、そして自分の輕卒な行の苦い結果をなめるのである。それは殆んどバルザックの中世紀の諸作のやうに甚だ感動を與へる、しかし甚だ純潔で、文體は驚くべく飾りのない物である。ヂルヴァルはフランス中を巡歴して、農夫の歌を農夫から聞いた、丁度『ミンストレルシー・オヴ・ゼ・スコッティシユ・ボーダー』の準備にサー・ウォルター・スコットが巡歴したと同じであつた。この巡歴の結果は『ラ・ボエーム・ギヤラン

ト』と云ふ未曾有の面白い民謠の書物であつた。民謠に關する章はその書物のただ一部分であるが、フランス文學の顯著なる書物の一つである、そのために詩人の注意を、一般の流行歌の價値に向けさせる大效果があつた。彼の死後、雜著雜文が集められて書物になつた、それで諸君はその集中に面白い物を發見するであらう。最もよい物は『ラ・マン・アンシヤンテ』である、もとは『ラ・マン・ド・グロアル』と云つた、惡魔と特別の契約をして彼の劍の手に絕對に負けない力を授かる人の話である。その想像が怪奇でもその話に對して偏見を抱いてはいけない、何故なれば、その話の價値は全く題を離れて存するからである。中世紀の繪としてはその話は非常に偉大である。多數のこれ等フランス浪漫派の人々は小說の題材を中世紀にもとめた、丁度英國ラファエル前派の人々が求めたやうに。

ド・ネルヴァルは浪漫派の人だが、文體でガウティエよりもメリメに近いのであつた、彼の方法は甚だ飾りがなくて、甚だ純潔であつた。しかし、新しい種類の散文は正に現れかかつてゐた。この新しい種類の散文は英國では少しはブレークによつて、少しはコールリッヂによつて試みられたが、ただフランスに於て完全になつた。私は言葉の意味通りの散文詩の事を意味するのである。

ルイ・バートランドは重要な名であるが、彼の唯一の名高い『ガスパード・ド・ラ・スイ』

は今絶版で、中々得られない。彼は甚だ若いうちに死んだので、外に重要な物を殘してゐない。しかしこの小さい書物はフランス文學に甚だ大きな影響を與へた。それは散文詩の一冊であるが、或は最も浪漫的種類の散文隨筆の一冊とも云へる、それにはどの文にも韻律と詩の性質があつて、文句は全部聖書の節のやうに節に分けてある。バートランドは十八世紀の後半に英國でマックファースンがオッシアンでなしたと同じ役をフランス文學で演じて居る。バートランドがどれ程、その當時フランスに非常に流行してゐたオッシアンに影響をうけて居るか、たしかに證據はないが、それによつて多少鼓吹された事はあるらしい。バートランドの書物は一般公衆から大した注意をひかなかつたが、學者はその價値を認めた、それで詩人バウドレールは、それが新しい種類の散文を創造する事の建議を暗示して居る點を捉へた。バートランドの價値は全く彼がバウドレールに衝動を與へた事であつた。

變り者で恐らく少し狂氣した文人、シャル・バウドレールの事を諸君は詩人として或は聞いて居るだらう。彼は『邪の花』と題する極めて珍らしい詩集を書いたが、その書物は多少その題名の表はし居る通りである。詩としては、形式について云へばこれに優つた物を如何なる浪漫派の人も書いてゐない、しかし題目は最も恐るべき物で、犯罪、悔恨、絕

望、その外不健全な情緒を取扱つて居る。それから又その書物のうちに妙な肉感論、全く何だか異國情調的な新しい物がある。しかし今私共は重に散文家としてのバウドレールを取扱つて居る、そして諸君は彼が韻文に於けると同じく、散文でもそれ程偉大であつた事を知らねばならない。彼は又偉大なる飜譯家であつた——デ・クインセーやポーの最もよい物をフランス語に譯した。彼自身もポー程の想像を甚だ充分にもつてゐたが、不可思議な物語の形にはならなかつた。物語を書かないで彼は甚だ短い風變りな隨筆を書いた、それがそれぞれ何か特別の氣分や經驗や悲哀を表はして居る。そしてこれを『小さい散文の詩』と題して一冊に集めたが、バートランドの影響を表はして居る。しかしバウドレールはバートランドよりは遙かに偉大であつた。彼はこれまで示されなかつたフランス語の異常な財源を詩の形の散文で示した。一年前に、私は月に關する小さい作文を諸君のために飜譯したが、諸君は如何に變つた物であるか覺えて居るだらう。新しい散文詩はこの書物の出版によつて立派に創定されたのであつた。しかしこんな散文は、小説や長い物語を書く事には適當しなかつた。それは高い情緒的性質の極めて短い隨筆にしか使用されなかつた。フランスの文人はそれ以來、そんな目的にしか、この文體を使つてゐない、そしてこの方面のバウドレールの恐らく最も著しい相續者は歴史家で學者のエドガー・キテーてあ

つた、その人の寺院に關する散文詩の驚くべき一例『ラ・カテドラル』を諸君はセインツベリー教授の『フランス文學の見本』のうちに見る事ができる。

しかし又別の種類の散文を試みたのは、第二の浪漫派の人々のうちの最大なる者、グスターヴ・フラウベルであつた。彼はガウティェとバウドレールの二人に甚だ多く感化された、そして兩方の長所——卽ちガウティェの修飾した散文とバウドレールの音樂的散文——を結合するやうな文體を發明しようと試みた。それで彼は特別に言葉それ自身の研究を試みた、色彩、調子、剛柔の性質に隨つて言葉を分類した、そして彼は新しい種類の音樂的モザイク（寄木細工）に言葉を結合しようと試みた。この點に於て彼はただ一部分成功した。こんな文體を創造しようとする事に二つの誤りがある。第一は、その最高の修飾の結果は、少數の學者的文人によつてのみ理解される事である、その長所は決して一般公衆には認められない。第二の誤りは、同じ言葉が凡ての敎養ある人に同じ效果を必ず及ぼす物と想像する事から來る誤りである。さて、事實、これは今もなほデカダンと呼ばれる現代の小さな風變りのフランスの詩人の一派によつて抱かれる誤解である。同じ言葉は異なつた敎養を受けた人の心に、同じ效果を及ぼす物ではない。これに反して、同じ言葉は千人のうち九百人に判然と違つた印象を殘し勝ちてある、何故なれば、殘された印象は讀者

のどの二人も決して同一ではない心的經驗によるからである。ガウティエのよく知つてゐた通り、多くの階級の人に非常な效果を及ぼす言葉がある、しかしそれは健全なる想像力の人の大多數に共通な、或根本的感情に訴へるからである。フラウベルの主義はまちがつてゐたが、彼は大天才であつたので全然まちがひとはならないで、色々の新しい思ひつきと、ガウティエと殆んど同樣だが、新しい種類の或不規則な美點のある散文とを世界に殘した。彼はカーライルが英國でなしたやうに、それ程大膽に形式の因襲的慣習を破つた。しかし彼は聰明であるから、同じ種類の散文は凡ての種類の文學的作品には適しない事を認めてゐた、それで彼は三つの異なつた文體で書いて、そして飾りのない、或は詩的の、或は修飾的の散文がそれぞれ異なつた題目に適する事を示して、文學に大きな奉仕をした。彼は飾りのない散文が寫實の小說に特に適して居ると考へた、それでこの文體で、彼の大寫實小說『ボヴァリー夫人』を書いた。彼は不規則な、空想的な高い色彩の散文が異國趣味を帶びた傳奇に最もよく適して居る事を考へたので、この文體で、古代カルタゴの話である『サラムボー』と、又文學として異常の長所をもつた三つの短篇小說である彼の驚くべき『三つの話』を書いた。最後に彼は夢、幻想、空想、超自然界に關する感想は、詩的散文で書いた方が最もよいと思ひついた、それで彼は『聖アントニーの誘惑』(譯者註五)をバウドレ

ールの散文詩の文體で書いた。これは驚くべき書物で、戯曲の形になつて居る、これまでこの世に現れた凡ての神々、凡ての宗教、凡ての哲學が、それぞれ音樂の旋律のやうに、數行の文句で敍述されてその中に現れて來る。これ等の書物の外に、フラウベルは、それ程よくない小說を何冊か書いた。彼の大小說『レデユカシヨン・サンチマンタル』は讀めない、それは退屈な失敗の作である。しかしヂョナサン・スウィフト以來書かれた事のない人間の愚に對する最も恐ろしい諷刺である彼の『ブーヴァルとペキユシエ』は讀む價値がある、そして讀んだら決して忘れられない。ブーヴァルとペキユシエは財產ある獨身者である、この人々は何か科學を充分に勉强して人間をできるだけ幸福にしようと努力しながら一生を送らうと決心した。醫學、法律、植物學、それから外の科學を代る代る學んではやめた、その理由はその科學の根柢となつて居るもつと深い問題は、その科學の敎師達によつて決して適當に取扱はれてゐないから、それと、それに關係して僞善と虛僞があるからである。人間を幸福にする事については、彼等が子供を養つて見た事や、その他異性とのいくつかの冒險からの經驗では、人間性の善良と云ふ事には信仰がもてなくなつた。これより面白い書物はないが、讀者にこれ程悲しい印象を殘す書物も、曾て書かれた事はない。

空想的な文體を試みた方面のフラウベルの最大の相續者はゴンクール兄弟として知られて居る風變りの小說家であつた。この人々は重に美術家の生活を取扱つた、そしてその方面で彼等の『惱まされたる文體』は題材と少し調和するやうに見える。しかし、彼等はそれを極端な程度にまで進めて、時々不可解になる事があつた。あの大小說家、アルフォンス・ダウデー――時々英國のヂッケンスと比べられるが、サッカレーと比べた方がもつと正しいやうだ――彼も亦非常にフラウベルに感化を蒙つた。この頃は小說家は群がつて出て居る、私はただ運動の歷史をたどつて居るだけだから、餘計の名を云ふに及ばない。しかし第三、卽ち最後のフランス十九世紀文學に近づく時に、私は諸君の注意を顯著なる事實にひきたい、卽ちこの偉大なる浪漫派のフラウベルは未曾有の最大寫實家、メリメよりもさらに偉大なる――ギ・ド・マウパッサン[譯者註六]の文藝上の父であつた事である。これは教師としてフラウベルの價値のよい證據である。彼はどの方面にこの青年の力があるかを理解して、それを修養させた。きまつて、年々、マウパッサンはフラウベルに批評して貰ふために作品をもつて行く例であつた、そして又いつもきまつて、フラウベルはその作品を火中に投ずべき事を主張した。人は先生の忍耐强い苛酷と弟子の英雄的服從とのどちらを餘計に感心すべきかを知らない。

さてその結果について話す間に、寫實主義の方面の別の運動について一言する。その重なる高僧はそれを『自然主義(ナチユラリズム)』と云つた。それは實際外の父、及び、外の實際の偉大なる代表者をもたない。ゾラの理論は、人生は實際そのまま、自然の眞理ばかりでなく、又科學上の眞理を以て寫さるべき物である、それから普通に書いてはまちがひと云はれて居る事は凡て皆恥ぢないで書かるべきであると云ふのであつた。彼はコムトの科學的方法に隨つて書くと稱してゐたが、その方法は眞の科學的方法ではない、しかし彼が使つてもつと成功したのは性格遺傳の科學的敎訓であつた。バルザックのやうに彼は大きな連續的小說を考へ出した、その銘々の小說がルーゴン・マクアルと云ふ質素な一家族の一章になるのである、そして彼は祖先の一生にあつた何か或惡德の結果が數代の生涯に道德上肉體上の不幸を傳へた事を示した。批評家がゾラの不道德、猥褻、無恥について何と云つても——それが正しくとも——彼の天才については疑がない。彼は甚だ偉大なる藝術家である。しかし彼は寫實家であるから、或は彼がさう云はれる事を好んだやうに自然主義者であるから、偉大なる藝術家であるのではない、彼が偉大なる藝術家である理由は、彼の理論にも拘らず、彼は本當の浪漫派の人てあるから——想像力は絕大で、物すごく、人類の凡て恐ろしい方面を誇張した形て知覺するからてある。彼は文明の生む惡德、不潔、利己主義、

凡ての殘忍なる激情、及び獸的劣情の傳奇作者である。彼の寫實主義は、ただ以前に少しも行はれなかつた備忘錄を使用すると云ふ事實でのみ生きて居る。例へば、或小說で彼は何でも鐵道生活に關する一切の事、機關に關する一切の事、石炭供給に關する、使用の汽罐の性質に關する、一切の事を語る、又別の小說で彼は大きな雜貨店に働いて居る少年少女、男女の生活に關して一切を語つて、商業の無數の詳細な點を悉く說明する。そこまでは彼は寫實主義を敎へた、或は少くとも寫實の方法で敎へた、チャールス・リードが英國でなしたよりもさらによく敎へた。しかし彼は純粹に寫實風に彼の事實を用ふる事はできなかつた、彼の巨大なる想像力はそれを歪めて誇張した。それが彼の弟子達――彼は一時弟子達を大勢もつてゐた――が一人一人彼から離れて行つたわけである。自然派は亡びた、ただゾラだけが生きて居る、彼の生きて居るわけは少しも自然主義的ではない個人的天才があるからである。一時、マウパッサンはゾラの指導に隨つて、二三の驚嘆すべき小說を書いて世界を驚かした。誰でも、マウパッサンはゾラより偉大である事を見た、そして誰でも云つた『これは自然主義ではない、これは寫實主義である、これはプロスペル・メリメの時代に私共をかへらせる』すぐに、マウパッサンはゾラの影を離れて、自分で働いた、そして歐洲がこれまで見なかつたやうな最大の小說家となつた。

私は以前に、マウパッサンの事を話した、諸君は彼が最も純粹なる寫實主義と最も飾りのない文體を代表して居る事を知つて居る。諸君はフランスに於ける散文の運動は英國に於ける運動と餘程よく似てゐる事を見た。もし私共はフランスの散文の極端なる形式――バウドレールの散文詩とゾラの所謂自然主義を除けば、その運動は甚だよく似て居る。兩方の國で飾りのある種類と飾りのない種類の二種類の散文が優勝を競ふてゐた。兩方の國で、偉大なる文人は飾りのない文體で、飾りのある文體の效果を表はす事ができる事を證明した。兩方の國で、傾向は眞面目な文體の方へ向つて居るやうである。しかしフランス人はもつと保守的な英人よりも少し進んで居る、彼等はフラウベルの教訓を學んで居る。その教訓を、最も簡單な形にすればからである、『題と共に文體を變へよ』疑もなくこの忠告は究極の眞理を表はして居る、それをあとで英人は受け入れねばならない。同じ種類の文體はありとあらゆる種類の題には適しない。どの文體でもそれぞれ特別の相對的價値をもつて居る。そして色々違つた流派の努力、その愚なところや、法外なところでも、文學的知識の進化に永久の奉仕をなして來て居る。

譯者註一　ヘルンは『アリヤ・マーセラ』その外合せて六つのガウテイエの短篇小說を譯して『クレオパ

トラの一夜その外』と題して一八八二年に出版して居る。

譯者註二　Gogol（1809—1852）はロシヤの小說家脚本家。Pushkin（1799—1837）はロシヤの詩人なれども、小說の作も少しある。決鬪で殺された。母は黑人との雜種であつた。

譯者註三　I. A. Froude（1818—1894）英國の歷史家。ヘルンはこの人の文を非常に賞贊して居る。

譯者註四　P. G. Doré（1883—1883）フランスの名高い畫家。『バイブル』『失樂園』『神曲』『ドンキホーテ』ペルラウの『お伽噺』ラ・フォンテンの『寓話』等の挿畫をかいた人。

譯者註五　ヘルンは壯年の頃これを飜譯して、草稿のままになつてゐたのがその歿後一九一〇年に出版された。

譯者註六　マウパッサンの短篇のうち、ヘルンがアメリカの新聞記者時代に飜譯した物を集めて一九二四年出版になつた。

アメリカ文學について

アメリカ文學の問題について諸君に話す時には、私は諸君の知つて居る方が文學的價値があると私に思はれる作者だけについて特に論及する事にしたい。所謂アメリカ文學の大部分は諸君に餘り稗益するところあるわけはない。それから、私は智力よりはむしろ想像力に訴ふる作品について述べる事にしたい、その理由は、日本に於ける文學研究で輕視されて居るのは(外國研究の方面では)文學の想像的方面であると私は信ずる、そして文學の想像的方面は必要であるのみならず、又それが諸君にとつて本當の稗益のあり得る外國文學の唯一の方面であると私は考へる。文體、法式、構造の研究——これ等は殆んど大して役には立たない、實際諸君が諸君の國語以外の外國語で價値のある物を書かうと望むのでなければ。凡て西洋諸國では——私の想像するところでは東洋諸國でも同じく——文學研究の自然の進路は小兒の想像を教養して行く事から始まる。小兒は話、お伽噺、何でも

その種類の物を讀む、それて最も同情的なるが故に凡ての教育のうちて最もよい家庭教育て、彼の空想はいたはり養はれる。不幸にしてそれはただ暫らくしか續かない、――それからさき少年は實際勉强の學校世界にとび込んで、空想は止める。しかし西洋の學校では、いつでも想像上の作品に多少の注意は與へられ、小說と詩の個人研究は熱心に勸められ奬勵されるのである。日本の研究の場合にはこの規則は適用されるが、西洋の小說や西洋の凡ての種類の想像上の文學の場合には適用されないと私は推定する。一つの理由は、私は信ずるに、外國の書物の不足である、しかし私はこの不足は日本全國の學生が一般に、外國の想像上の作品を無頓着視する事の說明にはならないと思ふ。時々私は一種の自負心、智力的自負心が、邪魔をするのかとも疑つて見た。私は優良な學生によく眞面目な物――歷史、傳記、科學等を讀みたいと云はれた事がある。彼等は明白に想像上の文學は價値がないと思ふ事をほのめかしたのであつた。これは重大なる誤解であると思ふので、それについて少し云つて置く方がよいと思ふ。私は、學生が讀みたいと云ふ眞面目な著作の文學的價値は、學生が讀みたがらない種類の文學と關係して居るところに正しく存して居ると始めに云ふ。殆んど除外例なしに、最良の歷史は想像力によつて居る物、最良の傳記は小說の興味を有する物である。それから科學の最良の著書は直ちに想像力に訴ふるのみなら

ず、なほかつその想像力を擴げる書物である。私は考ふるに、西洋の小說界のどの一人の名でも、幼年時代から想像の文學に極力注意した人の名である。フランス、ドイツ、英國及び伊太利の戲曲家、詩人、隨筆家は皆小說の耽讀者で、彼等の技術を小說から學んだ事が多いのである。しかし例として誰か眞面目な名を考へて見よう。マカウレー卿はたしかに眞面目な人であつた――多分、彼の時代で最もしつかりした實行的の英人で、文學方面で偉大な影響を與へた人であつた。何人もこの恐ろしく眞面目なマカウレー卿よりも、もつと度々有效にアラビヤ夜話を讀んだ人はなかつた、そして例證や象徵のためにこの東洋の話が非常に價値のある事を英人に始めて敎へたのはこの人であつた。彼は又あらゆる種類の小說の變らない讀者であつた。ラスキンは一生小說や物語の讀者であつた、それで彼の文體はその美はしさを、こんな硏究で彼の想像を敎養した事に負うて居る。あのしかつめらしいカーライルもこんな書物を澤山讀んだ人であつた。ヴイクトリア朝時代の著しい作者で――詩人テニスンでさへも――色々の國語で書かれた小說を絕えず讀まなかつた人はない。暗示の意味でこれだけの事を云つたあとで、――私に云はせて貰ひたい、卽ち、私はただ眞面目な方の文學だけを讀んで外國文學を適當に硏究する事は不可能であると信ずる。そんな企ては丁度文法で外國語を學ばうとするやうである。文法だけで外國語を學ぶ

事ができた人が二三人あつた事を私は拒まない、——全然辭書で外國語を學んだ或天才の伊太利人の話がある。しかしこれは非常に珍らしい天才の例であるが、こんな人々は創造の才能はなかつた。創造する力は特別の力であるから、それを文學の研究で開拓して行かねばならない、そして創造の才能は詩歌小說を愛好せずには發達する物でない。勿論こんな注意をしながら、私はここに含まれて居る眞理は日本文學の研究には認められて居ると想像する。しかし外國文學の研究にも亦、認められる事が非常に必要である。世界のどこの文學も外部の影響を受けて發達して居る。その國の文學だけにして置けば、食物缺乏のために死ぬやうになる。英文學は、それが到達し得た世界の色々の文學から得た靈感によつてのみ生きて來たのである。それでももし創作に關する大運動が日本に起れば、どこか外部の源泉からその靈感を得なければならない。これ等の源泉は非常に豐富である、しかし私は餘りその方面に注意されなかつたと信ずる。外國文學の眞面目な方面は實際熱心に研究されてゐた、しかし私はこの方面は心臟のない身體と同じくそれだけでは何の役にも立たないと思ふ。凡ての文學の心臟はその想像力である。さてこの學期も短いから、私はつぎの題目を述べるに當つて、その心臟だけ、——即ち詩歌小說を論ずる事にする。

＊　＊　＊　＊

アメリカ文學は實際分量は甚だ少い。アメリカ人が文學と呼んでゐた大部分の印刷物は今ではアメリカ人自身でもさうは云はないだらう。二十五か三十程の名前を書けば本當に重要な作者が皆含まれよう、そしてその中から私共は有效な講義をするために注意して選ばねばならない。現代英國の最も偉大なる批評家の一人は、アメリカ文學は存在しない、――それは二三人の名で代表されると公言して居る。しかし、この人はアメリカ文學を測定するのに甚だ高い標準を取つたのである、もし私共がアメリカ文學を二三流の物として考へたら、その範圍は二三人よりも遙かに出るであらう。それに反して、もし私共が英文學の最も偉大なる物と比べられるやうな大傑作をアメリカ文學で求めたら、私共は殆んど何物をも見出さない事は本當である。詩で一つ試驗しよう、――私共は文學の力と價値を詩で最もよく測定する事ができる――何故なれば詩は文學的表現の最高の形であるから。ところがアメリカには――もし特に美しい少數の抒情詩を除けば、第三流以上の物は極めて僅かしかない、第一流の物は何物もない。敍事詩らしい物も、アメリカ文學には何物もない、ただ一つ例外は、遙かに偉大なフィンランドの敍事詩の『カレヴアラ』から模倣した韻律で書かれたロングフエローの『ハイアワサ』である。『ヱヴァンヂヱリン』は、敍事詩の種類でない、全く非常に美しい詩であるが、その詩の韻律の不完全なる性質のため

に、高い標準に達する事ができない。このやうに、疑もなくアメリカ最大の詩人ロングフェローは、その最上の物でも、英國の批評家が所謂三流より上にやつと達して居るかゐない程である。十八世紀文學の青白い影であるブライアントは『サナトプシス』と云ふ詩及びその他の詩で、殆んど完全な詩を數行残してくれた、しかし彼のよい作品は分量餘りに少いので、或傳說を維持しようと試みる以上の事は何事もしてゐない。最高の賞贊の價値のある何物かを見出すのは、抒情詩人を數へて見てからである、ところがそのアメリカの抒情詩も、奇態に輕くて瘦せて居る。ホイッティアはここで甚だ高い地位を取るべき人であらうが、彼はただ非常に簡素な形の詩――『マウド・ミュラー』のやうな二行の詩や、彼の情緒的短詩の澤山を書いた四行の詩――をしか作る事ができなかつた。換言すれば彼はただ非常に容易な物語歌にのみすぐれて居る、そしてその作品の美は文學的熟練によるよりは、むしろ簡素なる感情によつて居るのである。ゴッス敎授が云つたやうに、眞に顯著なる詩の熟練を示すただ一人のアメリカ詩人がある、その詩人はエドガー・ポーである。しかしポーは少ししか書かなかつた。ポーの詩を一冊の書物にするには、相當な大きさにするために甚だ厚い紙に甚だ大きな活字で印刷する事が必要である。しかしこの小さな詩集の力は、殆んど十九世紀後半のどの英米詩人でもそれに動かされない者はない程大きいか

つた事は認められねばならない。テニスンもその感化を示して居る、それから外のヴィクトリア朝の大詩人達も同じである。ポーを別にして、第一流のアメリカの詩は殆んど存在して居るとは云はれない。存在して居る物は澤山の第二流三流の美はしい抒情詩である。それが非常に方々に散在してゐて、色々眞價の異なつた大勢の詩人の作品である。こんな詩集のどれを一册とつても、大體第二流の標準を示す事にはならない、しかしところどころ澤山の作品から、私共は一つ二つの珠玉を發見する事ができる。今アメリカの詩の粹を集めた物を出さうと云ふ計畫があつて、編者はステッドマンである。この集が出たら、その結果は驚くべく興味があるだらう。數百の源泉から、數百の小さい名は現れるが、名高い名の殆んど見當らない詩選集ができる事になる。アメリカでは、一種の詩の孵化とも云ふべき事が行はれて居るが、前途は有望である、しかし未だ今後二代の間は殆んど偉大な物は出ないであらう。輕い優美な詩は缺乏してゐない、そして英國の詩と區別のできる特別に優婉な性質がある。この性質の定義を下す事は甚だむつかしい、それは感得すべき物で說明のできない物である、私はただ、それが哲學的暗示と美妙な言葉の選擇によつて現れる特別な考方によるやうに思はれると云ふ事ができる。一つの特色のある詩『アタランタの競走』は前の講義で諸君に引用して置いた。それは甚だ美しい。今度は現代の輕い詩

の一二の例を引用しよう。先日私の學生の一人が蛙に關する日本の歌の小冊子を私にくれた。同じ題を最近のアメリカの作者が取扱つて居るところが諸君に興味があらう。

To A Toad

Blue dusk, that brings the dewy hours,
Brings thee, of graceless form in sooth!
Dark stumbler at the roots of flowers, —
Flacid, inert, uncouth

Right ill can human wonder guess
Thy meaning or thy mission here, —
Grey lumps of mottled clamminess,
With that preposterous leer.

But when I see thy dull bulk where
Luxurious roses bend and turn,
Or some slim lily lifts to air

蟇によせる歌

露ばんだ時刻をもつて來る、青いたそがれは、
お前をもつて來る、まことに氣味の惡いかたちの。
花の根に居る、うす黒い邪魔物だ、お前は、——
皺のよつた、不精な、見苦しいかたちの。

人間の驚異の念では、正しく測り知られぬ、
ここでのお前の意味、お前のつとめを、——
その笑ふべき橫目をしたる、
斑の、しつとりねばつた、灰色の瘤多き物。

しかし私が、はでなばらの花が、うつ伏したり、見かへつたり、
或は細つそりした百合の花が、そらに、
そのもろい、香り高いかんばせを上げたり、

He frail and fragrant urn.
して居るところに、お前の鈍いからだを見る時に。

Of these, among the garden ways,
その花園の間にある、その花の
So grim a watcher dost thou seem,
物すごい番人に、お前は見える、
That I, with meditative gaze
そこで私は眺めながら靜かに物思ふ、
Look down on thee, and dream.
そしてうつむいて、お前を見て、夢を見る。

Of thick-lipped slaves, with ebon skin
黒檀のはだなせる厚唇の奴隷の事を、
That squat in hideous dumb repose,
物云はず、ただ物すごく、靜かに坐せる、
And guard the drowsy ladies in
その靜かなる後宮の奥、
Their still seraglios!
まどろめる美しき人々をまもれる。

Edgar Fawcett
エドワード・フォーセット

蟇蛙及び時として大きな種類の蛙は花から蟲を除けるために庭園に飼はれる事がある、それで蟇蛙の醜と、花の美との對照はこの詩人に、黒い宦官がペルシャやトルコの後宮の婦人の番をして居る想像を暗示した。しかしこの詩の長所は、殆んど最もよいフランスの詩人の熟練にも比すべき熟練をもつて選ばれた形容詞の使用法の美しいところに全然存す

るのである。今度は同じ種類の熟練を示して居るもう一つの小詩を見よう——シエーキスピヤの脚本『あらし』中の怪物カリバンに比べた海の詩である。短いが、これはこの作者の書いた最もよい物と私は思ふ、しかし甚だ輕い詩である。

The Marsh Song

Over the monstrous shambling sea,
　Over the Caliban Sea
Bright Ariel-cloud, thou lingerest:
Oh wait, oh wait! — in the warm red West,—
　Thy Prospero I'll be!

Over the humped and fishy sea,
　Over the Caliban Sea,
Oh Cloud in the West, like a thought in the heart
Of pardon, loose thy wing and start,
　And do a grace for me.

沼の歌

不恰好なみにくい海の上に、
カリバンのやうな海の上に、
お前は浮かんで居る、美しいエリエルの雲よ、
暖い赤い西の方で、——待てよ、待てよ、——
お前のプロスペルに私はなりたい。

うるさい、魚くさい、海の上を、
カリバンのやうな海の上を、
心の中の赦しの思ひのやうに、
西の雲よ、お前の翼をひろげて飛び、
そして私のためにおなさけをして貰ひたい。

Over the huge and huddling sea,
　Over the Caliban Sea,
Bring hither my brother Antonio — Man —
My injurer: night breaks the ban:
　Brother, I pardon thee!

Sidney Lanier

あの大きな不細工な海をこえて、
カリバンのやうな海をこえて、
私の弟、私の敵、アントニオを、——よいか早く——
ここへつれて來い、夜になつたから呪ひは止める。
弟よ、私はお前を赦す。

ここでは詩の幾分はたしかに不完全だが、形容詞の選び方は殆んど魔法のやうである、そしてこの作の美は三節に渡つて居る第一行の怪奇なる技術である。その三行は、もし作者が病氣と失望の三年の後、あんなに若く死ぬやうな事がなかつたら、最もよい詩人の一人になれたらうと云ふ事を證明して居る。彼は學生への詩作教授の新方法の著者であつた、——彼は古いごたごたした韻律學の代りに、樂譜で韻律を教へようと建議した。そして彼の『英詩の科學』は甚だ珍らしい、そして價値のある著述である。

さて、この種類の詩はアメリカに澤山ある、アメリカには數へきれない小さい聲がある、いつても聞かれるこほろぎのすだくやうてある、そして時々私共は不思議に快い音樂を聞くのてある。それだから私はアメリカ文學を大に賞讃する事はできないが、調べる價値も

ないとは考へたくない。それに反して、よい詩集は學生に非常に價値があるだらう、何故なれば、それにある輕い、優美な美しい澤山の想像と、十九世紀の哲學にのみ屬する思想について多くの美しい暗示とを諸君に與へるからである。しかしこんな詩集が出版されるまでは、諸君はアメリカの詩を一つ別種の藝術として研究する事を充分によく企てる事はできない、何故なれば諸君は二三の美しい詩を發見するために數百の書籍をさがさねばならないだらうから。

アメリカの散文はさうでない。アメリカの散文は注意を誘引するばかりでなく、注意を命ずるのである。米國の散文は英國の散文に影響を與へてゐた、そして作者は少いがその勢力は大きかつたと云はねばならない。たとへばアーヴィングは英文學で最も高い階級の地位に居る、實際或英國の批評家は彼を英國の作者として要求する事をさへ主張して居る。それから彼の著書の過半は始めはロンドンで出版になつた。彼を英國の大書肆マーレイに紹介したのは、サー・ウォルター・スコットであつたのだが、そして、マーレイは彼に今日の作者が中々得られさうにないやうな金を彼の著作に對して拂つた。『スケッチ・ブック』に對して四千圓、『ブレイスブリッヂ・ハウル』に對して一萬五百圓、『旅客物語』に對して一萬五千圓、『コロムバス傳』に對して三萬千五百圓、それから『グラナダ征服』

に對して二萬圓拂つた。私はアーヴィングに對して多く語る必要はない、諸君は皆少くとも彼の筆になつた『リップ・ヴァン・ウインクル』の話とその外の物を知つて居る。しかし私はアーヴィングの散文について日本學生がなした選擇は最良の物であつたかどうかを疑ふ。誰でも『スケッチ・ブック』は讀んで居る、しかし私は、多くの人は『旅客物語』或は『ウォルフアートッ・ルースト』或は『アルハムブラ物語』と題する不思議な物語の驚異に値する集まりで、本當のスペインとムールの傳說に基づいては居るがアラビャ夜話のやうな魅力をもつた物を讀んで居るかを疑ふ。アーヴィングに關する考をこれ以上述べる事は止めて、諸君の注意を特に一つの話に向けたい。恐らく諸君は『リップ・ヴァン・ウインクル』はアーヴィングが書いたこの種類の最も驚くべき物でない事を承知してゐないだらう。『リップ・ヴァン・ウインクル』よりも浦島の話にもつとよく似た物がある、そして凡ての批評家、及び一般の判斷の如何に拘らず、私はそれをアーヴィングの短篇小說中の最良の物であると思ふ。それはポルトガルの傳說に基づいてゐて、『アデランタドウ・オヴ・ゼ・セヴン・シティズ』或は『幽靈島』と名がつけてある。諸君がもし未だ知らないのなら、それを讀んだら浦島の話に非常に似て居る事に同意するであらう。私はアーヴィングの歷史については何事も云はない、——その歷史の過半は今日ではもつとよい物が出

て居る、たとへば、『スペイン征服』は、ドウズイとエンゲルマンの立派な著作によつて、『マホメットの歴史』は、サー・ウイリアム・ミユアのもつと立派な『マホメット傳』によつて、『コロムバス傳』はフィスクとウィンゾアの諸作によつて取つて代られて居る。英文學の學生にとつてアーヴィングの重なる價値は全くその短篇小説にあるのである。アーヴィングは既に大文學となつて是非讀まねばならぬ物となつて居る、そして今後長く、アーヴィングの著書を讀む事は文學教育の必要なる部分と考へられるにきまつて居る。それで英語界の文學に一つこのアメリカの名前の肝要な事については疑問はない。アーヴィングについて、同じ程肝要でなくとも、肝要なのはポーである。ポーは文學に於ては全然比類のない人物て、特別に丁寧な注意を要する。

十九世紀の始めバウルティモアに法律勉强の青年學生がゐた。その名はデヴィッド・ポーてあつた。彼は劇が好きてあつた。或晩劇場の舞臺で、英國から來たばかりのエリザベス・アーノルドと云ふ甚だ美しい若い女優を見た。學生は直ちに、彼女への紹介を求めて接近する事を得た、二人は烈しく相愛した。彼等は結婚した。しかしデヴィッド・ポーは妻に養はれて暮らして行く事のてきない程、名譽を重んずる人てあつた、しかし彼は彼女を養ひながら法律の勉强を續ける事はてきなかつた。それて彼は法律を止めて役者になら

うと決心した。彼は舞臺に立つて、妻と共に演じた。彼等は二人とも容貌は非常に立派ですぐれた役者であつた。彼等は一つの町から他の町へと地方を巡業した。そして、ヴァーヂニヤ州リッチモンドで初めの子供――エドガー・アラン・ポーが生れた。それから間もなく、兩親とも前後して數週間のうちに死んだ事は甚だ不思議である。アランと云ふリッチモンドの親切なる商人はその孤兒を養つて、英國へ送つて教育を受けさせ、それからあとでヴァヂニアの大學へやつた。ポーは大學では最もよくできる學生である事を證明したが彼は又最も行儀の惡い學生であつたので、最後に放校になつた。それから彼の友人は、ウエスト・ポイントにあるアメリカ最大の陸軍の兵學校に入れる事にした、しかしポーはしばらくウエスト・ポイントにゐたあとで、學校の當局者をして放逐せざるを得なくした。ウエスト・ポイントの規律は嚴重である、ところがポーはどんな種類の規律にも服從する事はできない。彼のそのつぎの不幸は彼の養父との爭であつた。それでそれからさき、彼の一生は不幸の連續であつた。彼は結婚して、第一の妻を失つた、色々の新聞雜誌の編輯人となつたが、いつてもそれ等の定期刊行物の持主と早晩喧嘩をした、そして三十九の歳に、丁度結婚の前夜に暴飮の結果で死んだ。ポーは今日でも敵と味方とをもつて居る。彼の傳記家の或者は彼を惡者てはない、不幸な人であつたと云つて、この人は最良の心をも

つてゐたと主張する。これは恐らく過大であらう、しかし今日一般に認められて居るところでは、ポーは以前の傳記家が彼を道德上の怪物としようとしたやうな人ではなかつた。彼は單に、世の中て成功するに必要な自制力を働かせる事のできない不幸な神經質な人の一人であつた。この頃文學に於てポーの影響に反對する多少の反動があつた、しかしポーの影響の勢力の證據は、その反動は又ポーのために反動の反動となつて現れて、彼の著述の新版が、アメリカのみならず――ポーは澤山の國語に飜譯されたから――外の國々にも出版されたと云ふ事實に存するのである、ポーの事績の小さい點に關しては未だ議論中であるから、私共はそれを議して多くの時間を費す事はできない。もはや議論の餘地のないところは、ポーはアメリカ文學に於て最も創造的な、最も有力な感化となつて居る事である、それで彼の異常の著作の意味と性質について研究せねばならない。

今は彼の詩について多くは云はない、――しかし後になつて、私はその不思議な美の或物について、諸君の注意を促す機會があらう。彼の著作の量のうち、詩は甚だ少い。彼が世界に遺した大部分は短篇小說、短い論文、及び輕い、そして時々殘酷な、しかし大體立派な批評である。批評はその後すぐにもつと良い外の人の物が出た、論文も時代後れにな りさうである、――何故なれば、それは哲學の諸問題を取扱つて居るが、それは全然その

後の科學から新しい光明を得たからである。しかし小說は、他の如何なる文學に於ける小說にも似ないで、時の經過によつて何物をも失はない。彼等は文體と想像と兩方の傑作である、彼等は今も猶青年をも老人をも樂しませる、これあるがために、ポーは如何なる他の歐洲の或はアメリカの作者と離れた地位を有して居るのである。

　しかしながら、これ等の小說の――英國のみならず、凡ての國々に於て――人氣のある理由を諸君に說明する事は私にとつて容易ではない。ハウソーンの書いた多くの小說は、そのうちにある敎訓のために生きて居る、それから世界の大小說の不滅であるのも同じ事實によるのである。たとへば、ヴォルテイアの小說は或哲學的、倫理的、或は人道的眞理を敎へて居るから今も誰にでも讀まれる。ゲーテの短篇小說は今も智力的贅澤品である、何故なればそれは讀者の智力的才能に應じて擴まる深遠なる意味をもつて居るからである。プレヴォーの『マノン・レスカウ』、ラ・モット・フーケーの『アンディン』、シェンイ夫人の『フランケンスタイン』のやうな小說は巧妙に敎訓的だから、不滅である。お伽噺でも――大多數は――深い意味がある、アンデルゼンのお伽噺はそのうちにある人道的道德的意味があるので、大人(おとな)にも面白いのである。ポーの凡ての小說にはこんな物は少しもない。敎訓的な物も少しもない、人情に訴へるところもない、道德的な點もない――實際

不道徳な物は一つもないが、全部は無道徳である、――道徳的感情は少しも現れてゐない。それならどうしてこの小説の異常な魅力を説明すべきであらうか。小説はそのうちに含んで居る或眞理、或はその小説から暗示された眞理に關係ある物、そんな物のために始めて偉大になり得るのである。アラビヤ夜話は類似の問題を提供する。アラビヤ夜話は何人をも面白がらせる、しかし、私共が普通求めるやうな理由のためではない。私共はアラビヤ夜話を考察せねばならぬと同じ意味で、ポーの小説を考察せねばならない。

アラビヤ夜話の魅力は少くとも一部は、その不思議な話のうちに、凡て人間の願望が想像的に實現されて居るところに存する。私共のもつ事のできない物を私共はもつて居ると想像したい、それ故好もしい不可能な物が好もしい可能な物となつて居る話はあきらかに讀者を心醉させる。私共は自分の願望が外の人の夢の中にでも想像され滿足されて居るのを見て、一種の慰安を感ずる。子供は殊にこの種類の喜びに感じ易い。それだから、子供はお伽噺や怪談が好きてある、それは彼等に光と愛と安全の眞中に恐怖の感じを與へるからである。子供にこの樂みを與へる事は殆んど技術は要らない、何故なれば子供の想像は鮮かで鋭敏であるので、甚だ簡單な事實から非常に澤山の不思議な空想を描く事ができるからである。大人(おとな)に取つてこの感情を刺激する事は甚だむつかしい、何故なれば、世界は

子供に取つて神祕であるが、大人には神祕でなくなつて居るからである。しかし大人にも子供にも共通の恐怖の經驗がある、それを藝術家が利用するのである。死の恐怖、夢の恐怖がそれである。夢の恐怖は最も聰明な人でも全然脫する事のできない恐怖である、そしてその神祕は心理學者によつて決して滿足な說明は與へられてゐない。ポーの話と外の作者との特に違つた點は、この夢の恐れの分子――暗黑の恐怖、暗黑に動く物の恐怖――起きて居る時には私共は知らないが、眠つて居る間に時々來る、特に病氣や疲勞が影響して居るやうな眠りの間に來る恐怖である。これは多分世界で最も古い種類の恐怖であらう、しかしそれは又最も強い恐怖の一つである、そして文學に於けるその價値は今後數百年の間認められさうである。今日に於て作者マーテルリンクの大成功は――その脚本は歐洲のどの國語にも譯されようとして居る――多分恐怖の喜びに基づいて居る。

しかし、ポーの物語全部は私の所謂夢の恐怖と云ふ性質の物ではない。そのうちの或物は――最もよくできて居る或物でも――誰か外の人が書いたかと思はれるやうに讀まれる。彼の始めのうちの作はアメリカでつくられたその種類の最上等の物として直ちに認められた、それから直ちにフランスで飜譯された。しかしこの作は想像的と云ふよりはむしろ奇拔な着想の物であつた、――批評家の所謂『解析的』であつた。この解析的物語はポーの

第一期を表はして居る。あとでこの物語が次第に解析的でなくなつて、段々恐ろしくなつて來た。もつとあとで、それが全然恐ろしく怪奇な物となつて來る。最後に純粹の魘される物になる。この魘されの時期はポーの死に先だつ時期である。彼の作に於けるこの異常の變化は、老巧な批評家達が指摘した通り、フランシス・ゲリー・フヱアフィルドに約二十年前に『狂氣の文人』と題した論文に述べた不思議な理論を思ひつかせたのである。フヱアフィルドは醫學上の見地から批評的解析を試みたのであつた。彼はポーの作を病理學研究の態度で研究した、丁度醫者が色々の種類の心理的發表によつて狂氣を研究するやうに。彼はポーの文筆生活の大半は狂氣であつたと考へた。文筆生活の始めのうちは狂氣ではなかつた、――その頃ポーは奇拔な着想の物語、たとへば、『黄金蟲』、『ぬすまれた手紙』『モルグ街の殺人』等色々の物を書いた。その後奇拔な變化が彼の方法に現れる。始めのうちは、彼は三人稱で書いたが、今では一人稱で書き出した。一人稱で書かれた物語はその他の物より一層物すごく奇異である。一時は物語は物すごいながらに、奇拔である、それから人物も大勢出て來る。ところが最後に、これ等の主人役でない人物に本當らしいところがなくなつてしまう、ただの影、ただの夢になる、しかし第一人稱の『私』が益々はげしく、益々激し易く、そして益々恐ろしくなる。最後にその人が全然狂氣になる、―

ーその時彼はただ『赤い死の假面』『影』『沈默』、——或は、全然魘されの物語——完全なる恐怖である——『アシャー家の沒落』のやうな物ばかりを書く。

たしかに、フェアフィルドの說には多少の眞理がある、しかし丁寧にポーの物語の歷史を年代的に研究したら、この說の全部を確證する事はできない。とにかく、ポーの後年になつて、ポーの頭腦は次第に衰へて來た事は全く事實らしい、それで彼の最も恐るべき物語は神經衰弱の時代を代表して居る事はたしかである。

私共は彼の傑作を大ざつぱに分類して見よう。先づ、自然に集まる物を一まとめにして見よう。

『モルグ街の殺人』　　重に
『マリイ・ロージェの神秘』
『ぬすまれた手紙』　　奇拔な思ひつきの物
『黃金蟲』　　或は解析的な物
『大旋渦の中に入る』
『壜の中に見出された文書』

以上はただ最後の物だけを除いて大概健全な物だが、——後年になつて現れて來た病的

恐怖の暗示は發見される。何れも非凡な種類の智力を示して居る。解析的な工夫の點から云へば、その中に數字の念入りの發明と解釋のある『黄金蟲』は最上の傑作である。最も恐ろしいのは以上の表の最後の物でなくて最初の物である、しかもこの場合に於ける恐怖は病的ではない、ただ全く自然の境遇から起る暗示の恐怖である。卽ち殺された人は、指紋から見ると明らかに人間の形の物だが、人間よりはもつと強い、もつと活潑な、そしてどうしても人間よりは手の長い物に絞め殺されたらしいと云ふ事實を探偵が發見したのであつた。これが非常に巧みに一種の超自然的恐怖を起させる、——最後に殺害者は大きな猿であつたと云ふ事實に達する。それでもこれ等の物語のうちに、異常なそして病的な人格を暗示するやうな物は澤山はない。全部の物語は巧みにできて居るが、私共は甚だ巧みな、しかし非常に創造的ではない頭腦の作者の作とも感ずる事ができる。

こんな風にならべる事のできる第二の分類はやや違つた風に私共に興味を與へる、私共はそれを讀んで居るうちに、その作者の人格に何か餘程異常な物——何か又、病的な物のある事を感附いて來る、

『汝はその人なり』

『楕圓形の肖像畫』

『ヴァルドマール氏の病症に於ける事實』
『地下室と振子』
『片意地の小鬼』
『ウィリアム・ウィルソン』

以上の物は悉く、妙に變つたところ以外に、超自然的恐怖の多少の暗示をもつて居る。第二の物は多少美しいが、その美しさは氣味の惡い物である。それは愛人の肖像畫を描いて居る或畫家の話である、描いて居るうちに女の魂も生命も次第に繪に一緒となつて衰へて行つて、肖像畫ができ上ると女が死ぬ。彼女の生命が繪の中へ肉體から離れて入つてしまつたから、その結果誰でもその繪を見ると、何故とも分らずに、恐ろしくもなり、又魅せられもするのであつた。この話で私共は、これから研究しようとする第二の分類に於て、充分に大成する新しい神祕の感じの最初のひらめきを捉へたのである。『片意地の小鬼』は全く病的である、そして狂者を注意する醫者によく知れて居る現象を表はして居る。これは最も恐ろしい物ではないが、六つのうちで最も不健全な物である。最も恐ろしい物はむしろ『ヴァルドマール氏の病症に於ける事實』である――これは肉體が死んで居るばかりでなく、腐敗しかかつて居るのに、催眠術で生かされて居る人の話である、この死ん

てゐても生きて居ると云ふ恐ろしい空想は、ポーの外の物語のうちに度々現れて來る。宗教裁判の牢獄の話の『地下室と振子』は驚くべく巧みにできて居る、それでもし周圍の甚だ恐るべき裝飾がなかつたら第一分類の方へ入れるのであつた。このために解析的な物語のもつと健全な分類の中には置かれない。最後の話は恐らくポーの創造の産物であらうがその思ひつきはポーの餘程以前に存在してゐた――卽ち二重人格の思想で、全く自分と同じ容貌の敵に苦しめられる人の話である。最後にその敵は癇癪まぎれに殺されたが、その時殺した人が實は自分を殺した事を發見するのである。近代文學に於けるこの種類の話のもつとよい例はテオフィル・ガウティエが、スカンディナヴィヤ文學からその空想を借りて來て作つた短篇小說である。北歐の話では、戰士は彼自身と戰つてゐて、彼が敵に與へる打擊の苦痛を一々自分に感ずるやうに表はしてある。北歐の話には美しい敎訓がある、卽ちそれは何人も自分と戰はねばならない正邪の戰――よい主義と惡い主義との苦闘――を象徵的に表はして居る。フランスの作者は充分にこれを理解したが、ポーはしなかつた。或はポーからは、私共はただ陰氣な神祕及び宿命と云ふ暗示以上の深い暗示は得られない。或は私共は『ウィリヤム・ウイルソン』の話は、自分で制御する事ができなかつた衝動のために自ら倒れたポー彼自身の話を或程度まで表はして居ると云ふ事ができる。とにかく、

この第二の分類の最後の物であるこの話は、當然恐ろしい第三の分類の方へ私共を導く、それが皆——一つだけを除いて——第一人稱で書いてある。

『赤い死の假面』

『約束』

『黒猫』

『アモンテイラドーの樽』

『おしやべり』

『ベレニース』

『リヂエイア』

『エリノラ』

『ノレラ』

『影』

『沈默』

『アシアー家の沒落』

以上十二の物語は正にポーの天才の最高の表現であるが、同時に又、甚だ病的精神狀態

を表はして居る。しかし私共はそのために、それを輕んずるやうな誤りをなしてはならない。多分ポーの精神は充分健全で幸福であつたら、こんな物語ができなかつたらう、しかしその場合には、私共は凡て現代文學のうちで最も立派な作、――數百の作者に新しい藝術の效果と可能性とを暗示した作、――それから又言葉の新しい價値と英語の新しい能力とを私共に敎へた作――の或物を失つたであらう。

この分類の始めの二つの物語は、前の表にあつた物と全く違つた想像的性質の暗示を私共に與へる。この性質は贅澤榮華を陰氣ではあるが、華麗に描寫して居るところに現れて居る。二つとも事件は宮殿に行はれる、そしてこの宮殿の敍述は外の文學にあるどんな物とも比べられない物である。裝飾藝術家としてはポーはたしかに偉大である、しかし彼の敍述には何だか惡魔的なところ――彼の超人的な魔鬼論を暗示するやうなところがある。これ等の宮殿、赤いガラスで照らされた廣大な部屋部屋をさまようてあるくと恐ろしくなる、それからその恐怖は奇異の感じの恐怖である、或はむしろ奇異の感を起す何だか神祕な物の恐怖である。『赤い死の假面』ではその神祕が殆んど現れて、殆んど觸れられるやうになる、そしてその恐怖は魘される時幽靈が私共に觸れる時のやうに、頂點に達する。『約束』では神祕は現れない、――死がその代りになる。これ等の不思議な章は兩方とも

古代伊太利及びヴェニスの美術及び歴史がポーの頭に殘した印象を反映して居る。外の人なら明るく凡ての物を見るところを、彼はうす暗く、恐ろしく一切の物を見た。この點に於て彼の藝術はフランスの偉大なる美術家ドーレの藝術に似て居る。

そのつぎの二つの話は醜い——甚だ醜い、何故なればそれは二つの種類の惡德——卽ち野獸のやうな憤怒と念入りの復讐を私共のために描寫して居るからである。『黑猫』の話よりもつと殘忍に醜い物は書かれた事はない。それは藝術が、藝術より以下の物にならないて存在する事のできる極端の境のところに達して居る、それが野卑な物にならなかつたのは、ただそのうちに恐怖の力があるからである。『アモンティラドーの樽』は全く別の風に恐ろしい、そして——もし私共が文藝復興期に居ると想像したら——それは極めて自然である。しかし『おしやべり心』は癲狂院で書かれたやうな物、——實際それは發狂者の話のつもりにしてある——卽ち發狂者で殺人者の告白てある。話の終りは讀む者に全く魔された感じを與へる、——諸君は、病的な狀態でできる夢や歪んだ想像としては、それは全く眞に迫つて居る事を感ずる。殺人者が——殺された人の心臟の鼓動を聞かないで——多分彼自身の心臟の鼓動だけを聞くと云ふ事實は、少しもその事の恐ろしさを、少くはしない。

分類のうち、一段低くした女の名前の四つ出て居る物は全く無類である。皆魘される物である、——尤も、夢の中に神祕的戀愛と美のひらめきは認められるけれども。そのうち三つはアメリカや歐洲よりは日本でもつとよく知られて居る空想を取扱つて居る、しかしポーはこれ等の空想を東洋から得たのではない。『リヂェイア』では、第二の妻が第一の妻の亡靈のためにとりつかれて殺される、しかしこんな不思議な追加的作用をして居る、——即ち第一の妻の幽靈が第二の妻の肉體に入つて、全然その肉體を變化變形させる、それ故彼女は元の形になつてゐたのであつた。その根本の想像は一人の魂或は幽靈の意志の力は他人のよりもつと強くなれると云ふのである。『エリノラ』では、死んだ妻が彼女の夫と再び一緒になるために若い女の體に生れかはつて來ると云ふ暗示になつて居る。『ノレラ』では、娘の體へ入るのは母の幽靈である。この話の朦朧たる神祕は私共の所謂神祕的恐怖——外の物語と多少違つた恐怖を起させる。『ベレニース』には幽靈的な物は少しもない、ただいやな夢と同じ效果のある殘忍な種類の恐怖がある。

つぎに分類のうちに別に又分類した二つの小話がある、——私の考ではこれはポーの短篇中の珠玉とも云ふべき物、殊にそのうちの一つは古代現代のどの文學の中でも、最も完全な物である。それは所謂『斷片』の『沈默』である。これはアラビヤの話の文體で書い

て、わざと未完にしてある、或失はれた文書の一ペーヂで鬼魔及び鬼魔の仕業の驚くべき世界をちらと見せて居る。その話は鬼魔が人に話した事にしてある。この驚くべき物に似た物は『カインのさまよひ』と題したコルリッヂのあの物すごい散文の斷片を除いて外には少しもない。たしかにコルリッヂの斷片は驚くべきではあるが、藝術的に美妙な點ではポーの斷片には比べる事はできない。『沈默』の散文程音樂的で、詩的な物はない、それを讀んで居る間に私共は殆んど歌ひ出したくなる、そして心に打消されない印象が殘る。多くの人はそれを暗誦して居る、そして私は、文體を研究する學生にとつては、この二つの異常な散文を暗記するよりもつとよい事はないと思ふ。この點ではフランス語も——バウドレールでも——ポーに及ばない、このバウドレールは散文を詩よりももつと完全であると夢想して、多分ポーの文體をまねて、散文詩の一冊を書いた人である。しかし彼は散文では同じ程の效果を與へる事はできなかつた。この種類の彼の最もよい文章は『月のおかげ』であつた、それは甚だ不思議なそして甚だ美しい物であるが、ポーの『沈默』のうちにある好い調子、よい音調、物さびしい美は、全然フランス語にないところである、——それでバウドレールはポーの效果をまねる事はできなかつた。『影』の方は同等とまで行かないでも殆んどそれに近い程驚嘆すべき物である。そしてそれは複雜なる幽靈、——

死んだ數百萬の人々が一つの影となつて一つの聲を發するやうに結合した幽靈の珍らしい空想である。

十二のうちの最後の話は、前に云つたやうに、全然魘され文學である、――凡てのポーの魘され文學のうち最も恐ろしい、そして最も完全な物である。あらゆる種類の超自然の恐怖はその話のうちに結合して居る、――第一に本當の魘されの前に來る名状のできない恐怖、次ぎに意志の痲痺、手足のしびれ、動く事の無力、それから遠くから來る足音の感じ、それから恐れられた物の入場、それから歩みる者の捉へられる事。甚だ若い人にはこんな話を讀む事はよくない、それは想像力を餘りに強く刺激する。しかし、恐らく丁度その理由でそれを讀む事を好むのは、そして又その文體でそれからあと一生影響を受けるのは、特に若い人々である。文體はそれ等の話の大きな價値である、こんな文體は外にない、それでこの文體を多少知つて居る事の必要はいくら云つても誇張にはならない。

未だ第四の分類がある、大分數が多い、それを私共は怪奇的と云つてもよからう。私はラスキンに關する講義のうちに云つたやうに、凡て怪奇的藝術はおかしい物と恐ろしい物とを巧みに混合した物である事を記憶する事が必要である、そしてこれは彫刻に於ても、文藝作品についても同じである。ポーの怪奇的な物はつぎのやうである、

『ボンボン』
『オムレット公』
『ペスト王』
『一本足の蛙とび』
『一つになつた四つの動物』
『エルサレムの話』
『ハンス・パールの不思議な冒險』

これは澤山のうちからただ僅かを選んだのであるが、ポーは最高の怪奇藝術に觸れた事はただ少數の例に過ぎないと云つてもよい。ポーのただおかしくしようとするつもりが、いつでも本當におかしくはならなかつた事は珍らしい事實であつた、それ程純粹な滑稽感がポーに缺けてゐたのであつた。それだから、彼が本當の滑稽を狙つても、本當におかしくはならないで多少怪奇的な處へ落ちてしまつた。輕い調子で書かうと努めた物の多くは讀む價値がない。しかし前にかかげた分類の物は、甚だ面白い、その上ポーの非常に大きな多方面の才能を表はして居る。『ボン・ボン』と云ふ第一の話は、或純正哲學者が醉つて、悪魔に魂を賣らうとする、悪魔は所謂紳士的態度をもつてゐたので、醉つて居るのを

利用して魂を買ふ事はできないと云ふ。人をどつと笑はせる質の話ではない、ただ讀者を始終微笑させて、愉快な興奮の感じを與へるのである。その次ぎの話はやはり私共を地獄へ、少くとも地獄の次の間までつれて行く、そこでは聰明なフランスの貴族が惡魔にカルタ遊びを挑戰して助かる。この場面の叙述は、半ば滑稽に半ば恐ろしいその挿話の全體の調子と感心によく調和するやうに、物すごく華麗に書いてある。ポーはテインが『アレシアン・レヂーム』の中に書いた昔のフランスの貴族のやうな人物の研究によつて鼓吹されたと人は想像するだらう。『ペスト王』も同じやうに、デ・フォーの『ロンドン疫病の歴史』を讀んで幾分思ひついたのであらう。ここの幽靈や知事は餘程物質的であるが、その描寫はホガースの繪にある酒宴の場面のやうに妙に鮮明な感じを與へる。『一本足の蛙とび』は殆んど怪奇以上である、卽ちここでは重に恐ろしさばかりである、その上この話は歴史にある實際の事件に基いた物である。そこに書いてあるやうな惡戲をやつて殆んど自分の生命を失はうとしたフランスの王があつた。『一つになつた四つの動物』は私共をローマの圓戲場の時代に戻らせる。『ヱルサレムの物語』はテイタスによつてその市が圍まれた時の一事件になつて居る、このスケッチには中々の力がある。最後の話は月世界へ私共をつれて行く　私はあの偉大なるフランスの小說家ヂユール・ヴヱルヌが同じ題のもつ

と遙かに不思議な物語は、この話から何か鼓吹されたのではないだらうかとよく疑ふ。勿論ヂュール・ヴェルヌの藝術は怪奇ではない、その最も眞面目な章に於ても、少し滑稽で愉快に面白いのである。しかしポーによつて使はれた少數の科學的暗示は、ポーよりも遙かに多くの本當の科學を知つて居たフランス人によつて、その後開展された事は如何にも當然らしく思はれる。

私はポーの傑作であると信ずる物だけに、諸君の注意を引いた事を記憶して貰ひたい。私が一言もしなかつた彼の話が澤山ある。彼は彼の出版書肆の不注意から苦しんだ。彼が雜誌や新聞に書いた物は何でも一切悉く彼の死後、集められた、そして甚だ愚かにも彼の實際比類のない著作と一緒に出版された。彼の形而上學に關する、その外雜多の論文と斷片は時間つぶしになるから諸君に勸めない。彼の話は多分不朽であらう、あとは少數の詩を除けば、今日殆んど讀まれない。

終りに、私は諸君のうちの幾人かの頭にできて居るに相違ない質問に答へたい、――その質問は、『嚇される話のやうな恐ろしい事、不可能の事の話は何になる』と云ふのである。その文體の價値を離れて、恐怖の情緒に强く訴へる事のできる話は、繪畫に於て黑色が有すると殆んど同じ價値を文學に於て、それだけでもつて居るのである。恐怖の性質は、

その他の本當の性質と同じく勢力を表はして居る、そして凡ての種類の勢力は、丁度凡ての種類の色が、畫家にとつて價値があるやうに、創造的藝術家にとつて價値がある。話の題材だけではその事と關係はない。怪談に於ける恐怖の表現から得た知識を巧みに利用して、偉大なる作者はこれまでよりも一層力強く一層美はしく、一つの宗教的眞理をさへも表はす方法を見出す事ができる。恐怖の分子が少しづつ、どんな偉大な高尙な情緒にも、そして殊に高尙な種類の美感に入つて居る事を文學の學生は決して忘れてはならない。壯大の感は美感以上である、何故なれば壯大の感は感嘆と畏怖とを起させる事のできる美感であるからである、そして最も感覺的な種類の高い藝術に於ても、完全なるギリシヤ彫刻に於ても、――いつでもそれが私共に起させる感情に交つて居る感嘆以上の物、――恐怖の分子と餘程近い物がある。

もしポーが出版書肆のために惱んだとすれば、アメリカの小說家の間で、すぐ彼の下に位するハウソーンは一層多く惱んだのであつた。ハウソーンの著作の確定的の版で公にされた材料の澤山は殆んど駄作と云つてよい。恐らく私共はその半分は出版されない方がよかつたと云ふ事ができる。駄作の傑作に對する割合はポーの場合よりはハウソーンの場合

の方遥かに大きい。私共は彼の雑記、彼の手紙、彼の半ば完成した研究の書冊にも、——或は又、子供のため、或は地方新聞のため、註文に應じて書いた小さい話の澤山ある書冊にも、論及する必要はない。しかし彼の傑作によつてのみ、彼の名聲はアメリカのみならず歐洲にも擴がつて居る。

ポーとハウソーンの人物程もつと異なつた人物はこれまでなかつた。著しくポーに缺乏してゐた物は道德感であつた、ハウソーンには道德感があり過ぎた——それで彼の作が多少皆陰氣になつて、最も愉快なページにでもうす暗い氣分が漂うて居る。正しく清教徒ではなかつたが、たしかに彼は清教徒の祖先から、彼の著作と彼の一生にしみ込んで居る峻嚴なる道德感と道德的敏感を遺傳した。同じ遺傳は、凡ての虚飾を排した彼の特別に飾りのない嚴肅な方法の說明になるだらう。彼はポーのやうに言葉の戯れにできなかつた——好きなやうに言葉をひらめかしたり、色を變へたり、光らせたりはできなかつた、或は彼の文章のうちに、ポーの眞面目な文體のうちにも殆んどない事のない音樂を入れる事はできなかつた。或偉大なるフランスの批評家は、言葉のうちには燐のやうなのがある、摩擦すれば輝くと云つた。ポーはこれを知つてゐたが、ハウソーンは知らなかつた。ハウソーンの藝術はたしかに想像の藝術である、しかしポーの想像は全部彼自身の物で——無類の

そして眞似のできない物だが――ハウソーンのは明らかに清教徒の新英國(ニユイングランド)の想像である。この新英國の感情は伊大利にあつても、歐洲の最も明るい、日光のよく當るところでも、最も美妙な美術の作品の前でも、彼を去らなかつた。彼の一生は亦いつでも、貧困の間にも、規則正しく變らない事で一貫してゐた。たとへば彼は浪漫的自由の感をもつてゐたにしても、創造の藝術家にとつてその價値のある事を知つてゐたとしても、彼はたしかに、彼の著書にも亦彼の行爲にも、決してそれを表はさなかつた。

　彼は、一八〇四年、古い清教徒の感情の中心地であるマサチユセッツ州の小さい町セイレムに、船持ちの子供として生れた。諸君は覺えて居るだらうが、セイレムはアメリカの殖民の早い時代に魔法使ひの女が幾人か所刑せられたところであつた、それで、ハウソーンの少年時代にも、古い宗教的熱狂者の陰氣な影がその場所に未だ殘つてゐたに違ひない。多分セイレムとその聯想が彼の全生涯に影響を與へたらう、しかし彼は教育の點に於ては彼の祖先が受けた物よりもすぐれた物を受けた。彼はロングフェローと一緒に大學を卒業した、そして文學を愛好したので、生活のために筆をとると云ふ危險なる經驗を試みる事を決心した。長い間成功しなかつた、そしてこの苦闘した若い時代に書いた小說は彼の最もよい物ではない、それは『トワイス・トールド・テールズ』と呼ばれた。その後彼は官

吏となつて税關に地位を得た、それで非常に助かつた、しかし彼は急に政治が變つたために長くその地位をもつて居る事ができなかつた。しかし彼の忍耐強い勉强は最後にその報酬を彼に與へた、彼は作者として注意を引くやうになつた。彼の生涯の後半に、彼はリヴアプールのアメリカの領事に任命せられた、――その地位は當時年五萬圓の俸給であつた。これは彼にとつては小さい財産であつた、そして彼に餘り生活の事を心配しないで文藝の事に、殘りの生涯を專心捧げさせる事ができた。彼の最も著しい著作は青年時代には書かれなかつた。

簡略に云へば、私共はハウソーンの作品を――傳奇と短篇小説の――二つに分類する事ができる。傳奇については特別の注意を引く物が三つある。『マーブル・フォーン』『ブライスデール・ロマンス』及び『スカーレット・レッター』の三つである。第四番目の『七つの破風のある家』は甚だ著しい書物だが、それについては多く云ふ必要がない、何故なれば、その價値は重に新英國生活を知つて居る人にのみ興味があるからと、又、全體として、外の傳奇の立派な價値に及ばないからである。第五番目の『セプティミアス・フェルトン』は公にせらるべきではなかつた――何故なれば、著者は彼の死ぬ時その草稿を終りもしなければ、又直しもしなかつたからである。それで私共はただ三つの傳奇について話

す事にしよう、そして私はそのうちの一つだけが私の諸君に讀む事を勸めたい物である事を始めに云ひたい――それは『マーブル・フォーン』である。

ローマで、ハウソーンは若い牧神を表はした半身像を見た。先日『リユクレシアス』を讀んで居る間に『牧神』の意味を說明する機會があつた。牧神の色々の形がギリシヤ、ローマの時代から私共に殘されて居る、そして非常に美しい物もある。ウィンケルマンの書物にその說明が色々ある。牧神は普通裸で笛を吹いて居る細つそりした青年として表はしてある。牧神の頭は普通彫刻家が神の頭にして居る物と違つて居る、目口鼻はそれ程規則正しくなくて、もつと人間的であつた、時々額に二本の角があつた、それから時々耳は獸の耳のやうに尖つてゐた。ハウソーンはこんな牧神の形を一つ見て、その美しい、面白さうな、肉感的な顏の特別な表情に、非常に興味を感じた。彼は考へた、もしこんな顏をした人間があつたら、その人間は現在の社會に棲息する事のできないやうな性格の人であらう。こんな人は甚だ親切な、甚だ愛すべき、甚だ面白い、甚だ聰明な人であらう、しかし同時に甚だ激し易くて、甚だ性急で、憤怒或はその他の激しい情緒に驅られて制御のできない、危險な人物になるだらう。かう彼は考へて、この想像を表はす傳奇を書かうと思ひついた。その傳奇では、その形は現代社會の青年――或伊太利の貴族で、ローマへ訪問に

來た幾人かのアメリカの婦人達と偶然交際するやうになる。勿論私共が牧神とその使侍と同一である事を見出すのはその話の最後になつてからである、しかしその暗示は話の全部に行き渡つて居る。その牧神は最も愛すべき人物であるが、戀愛のために、何等少しも躊躇するところなくして殺人を行ふ、そしてその傳奇の終末は全く悲慘である。ハウソーンはこの話によつて、北方の種族の冷靜な、自制心のある性格と反對したラティン人種の情緒的性質の歷史を暗示しようと企てたと云へる。しかし又ハウソーンに特有の暗い道德的調子、——十九世紀の感情の明るい空氣によつて充分明るくされてゐない淸教徒の心の特色である恐るべき責任及び良心の觀念——が全部に通じて存して居る。

『ブライスデール・ロマンス』は今諸君に讀むやうに勸める事はできない、しかしそれはアメリカの理想國の最も興味のある問題に私共を導いて居る。少しその事について諸君に話したあとで、『ブライスデール・ロマンス』は諸君に有用な讀物になるかどうかは、銘々に判斷できよう。

十九世紀の半ばより少し前に、智力的感情の異常の波がアメリカを通つた。それは色々の形に現れたが、最も顯著なる物は、純粹に物質的な文明の眞中に、理想的生活をつくる事を目的とする小さい社會を建設する事であつた。アメリカ生活はこれまで隨分殺風景で

あつた。人は考へたり、研究したり、空想したり、樂しんだりする暇がなかつた。誰でも皆必死になつて働いて居る——歐洲で人が働かねばならないよりは遙かに烈しく働いて居る。しかしこんな境遇にありながら、こんな社會狀態に反抗しようと欲して居る教養のある、高雅な感情の人々がいつでも居る。こんな人々が互に相求めて、社會上及び道德上の問題を議したり、或はもつとよいやうに生活する事を夢想したりするための會をつくる。私の話す時分には、多くの人は現在の社會の形を變へて社會を一新する事ができると信じた、フーリエ及びその他の異常の思想家達の事業によつて、深い感動を受けたのであつた。フーリエはフランス以外の外の國にも澤山弟子をもつてゐて、その人々は彼の說を說教した。彼の空想は、無法で、不可能で、或點では馬鹿らしくもあつた。しかし進化論の哲學の時代以前には、不幸な人々にとつては大きな引力をもつてゐた。今日では私共は理想の社會は不可能である事を充分に知つて居る、しかしこれは、私共が生長發達の法則を新たに知つて來たからである。何人も一八二六年頃にはそれを知らなかつた。エマスンのやうな人でさへその經驗は試みる價値があると考へたであらう——そして、見方によれば試みる價値があつた。フーリエの說は幾分面白くもあつたが、幾分は醜聞であつた。彼の共產主義には婦人の共有も含まれてゐた。つまり、彼は自由戀愛を敎へた。もはや家族はなく

なつて、凡ての人類は一つの大きな家族をつくつて、これが都市や國郡に相當する物にさらに小分類されるのである。一切の物の頭はコンスタンチノープルで、人類の頭はオムニアークと呼ばれる事になつてゐた。彼の色々の說、それによると海は人類のためのレモナードのやうな物に結局なるのだが、そんな色々の說の問題に入る事は必要でない。こんな空想は凡ての種類の人心を攪亂するが、凡ての人心を同じやうに動かす物ではない。アメリカの人心を攪亂した事は色々に違つて現れた。新宗教をつくらうとして成功した者もある。所謂自由戀愛團とも云ふべき物——そこではどの男も、或女を妻と云ふ事はできない、どの女も或男を夫と云ふ事はできない、そしてそこでは嫉妬が最大の罪である——を造つた者もある。一切の物を共有にして置くべきこれ等の異常な制度の大概は忽ちのうちに——そして大多數は嫉妬の恐るべき罪のために、——破壞してしまつた。頗る滑稽であつた。ただ一つだけの團體だけが事實成功した——それはニュ・ヨークの名高いオネイダ共產團であつた。オネイダの人々の成功したわけは、彼等は宗旨氣ちがひであつて、鐵の如き掟に默從してゐたからであつた。これが共產主義の完全な一個であつた、ただ記憶すべき事はそれは宗教上の共產主義で、そこでは姙娠も出產も嚴しく法律で規定されたのであつた。最後に各教會は團結して、金力と法律の力とで、その宗旨の制度を破つた——ただ、その

會員を結婚させて、その自由戀愛の教養を捨てさせる程度で。

外の共産團體は單に經濟上の經驗を試みた――金錢なしにやつて行かうとした、賣買の普通のやり方で商品の交換を行つた。これ等の團體では個人は何物をも私有する事は許されない、何物でもその團體がもつて居るだけであつた、誰でも皆、他人のために働くので、一人の幸福は凡ての人の幸福にたよつてゐた。これ等の共産團體のうちで、最も著しい物はカンサスにつくられた、しかし成功した物は一つもなかつた。事實宗教團體のみこの計畫通り生活して成功したのであつた。それはゼズウィットの組織を産業の方面に幾分應用した物とも云へる、そしてそれが成功しないわけはあらゆる進歩の大源泉、卽ち競爭と云ふ物をなくしてしまうからである。

未だもう一つあつた、そして計畫された共産主義のうちでもつと賢い種類の物であつた。これは教養のある人々の仕事で、ブルック・ファームと云ふ新英國の綺麗な場所で實驗されたのであつた。その目的は全然道德的智力的幸福の追求であつた。約八九十の教養ある男女がブルック・ファームで完全なる人類の社會を作らうと企てた。その社會はそれを造つて居る會員全部の共同一致の勞力の結果によつて存在して行く事を期した。農業に關する事を何か知つて居る者は土地を耕すか、或は果樹園なり蔬菜畠なりの世話をした、肉體

勞働をするだけに强壯でない者は教師になつて、近所の子供を敎へた、商賣をやる人は外の人のためにその商賣をした。その上にこの團體の人々によつて行はれる智力上の勉學の正規の課程があつた。ブルック・ファームはただ農園（ファーム）と敎育上の中心であるばかりでなく、又一種の哲學的の學園（アカデミー）であつた。妙な哲學の凡ての部門に關する講義はきまつて行はれた、それからこの智力上の集會はさらに音樂と踊りで面白くされた。全くブルック・ファームは甚だ不思議な場所になつて、顯著なる男女の中々澤山を有する事になつた。その後新英國の文學界――アメリカ文學界と云ふべきであらう――に於て名高くなつた人々の大多數はこの團體の會員であつたか、或はこの團體の親友であつた。ハウソーンは會員で、エマスンは忠實なる友人であつた。新英國學校の名簿を見るのはブルック・ファームの著名な會員の名簿を見ると殆んど同樣である。しかし勿論、ブルック農園は成功しなかつた。それは三四年經てから失敗した。その失敗したわけは、會員の或人々は死ぬ程働いたからでもない、皆金を失くしたからでもない、會の目的や望みのうちに、これと云つて惡い點があつたからでもない。その失敗したわけは、多分諸君のうち誰でも知らない人はないが、十九世紀の前半には殆んど人は知らなかつたわけによるのである。それは單にかうである、――現在の人間の社會は、今の事情では人間社會に取つてこの上もなくよくできて居る、

そして人はこれを改良する事はできない。道徳的及び智力的生活は人間の經驗でつくる事のできる限り豐富である、そして人は人間の經驗を改良する事はできない。凡ての社會、凡ての道德、凡ての敎養は自然の生長發達である、この生長發達と矛盾して、そしてそれと無關係に、生活の方面に計畫された物は何でも自然であり成功する物であるわけはない。進化の哲學はこの事を甚だ明らかに證明して居る。人間が皆完全になつたら、始めて私共は完全な社會を得られる。

ハウソーンは文藝上の靈感の源としてブルック・ファームでのこの經驗を使つた。彼の『ブィラスデール・ロマンス』で、彼は私共に彼と外の熱心家達が通つた生涯の詩的描寫を與へて居る。勿論餘程詩化してある、しかしそれは全くの事實と觀察に基づいて居る。それはエマスンやその他その團體の友人を怒らせた、しかしその理由は單にハウソーンは決して人生の事實を明るい樂觀的方面から見る事ができなかつたからである。彼が觸れたら一切の物を悲しくした、それで『ブライデール・ロマンス』も陰氣な書物である。しかし私が强くこの書物を勸めない特別の理由は、一八四〇年代に於けるアメリカ生活、殊に新英國に於けるアメリカ生活の適當なる理解は、この書物を充分に理解するために必要であるからである。

『スカーレット・レッター』に關しては、私は極めて少ししか云はない。それは或妙な理由で、極めて人氣のある書物だが、――これまでの書物のうちで最も陰氣な物である。姦通を行つた女がその罰として胸に『A』と云ふ赤い大きな字を縫つた着物を、一生着なければならなかつた清敎徒の時代の新英國の話である。この小說はこの殘酷な罰を受けたその當の女の精神的苦痛の記錄である。

ハウソーンの小說を別にして、今度は彼の短篇小說についてのみ話すつもりである。この短篇の冊數は澤山ある、そして全く比類のない價値の物である。『ワンダ・ブック』（アンデルゼンから取つた題）は重に子供のために書き直したギリシヤ神話である。この種の全くよい本はこれまでただ一冊書かれて居る、――そしてそれはチャールス・キングレイのあの立派な『英雄』である。『トワイス・トールド・テールズ』の一部分は歷史的であるが、多くは單調である。『オールド・マンスの苔』（二冊）はさうでない。このうちには色々不思議な面白い物がある、そして、私の考では、それから私は喜んで云ふが、フランスの大批評家ガウティエの判斷によれば、ハウソーンが書いた物で最も立派な物が一つある。諸君は『ラッパシニの娘』と題したこの小さい話を讀まねばならない、それは全く甚だすぐれた藝術品であるから。ハウソーンの凡ての短篇小說のやうに、これも道德的で

あるが、その教訓は、その想像が奇抜であるので殆んど氣がつかない。植物學研究に夢中になつて居る或富んだ伊太利の醫者が自分の娘を毒のある食物で育てて見ようと思ひつく。娘は非常に有毒になつて、日向（ひなた）を散歩すると、そばに飛んで來る蝶や蚊が死んで落ちる程になつた。彼女が人に觸れると赤い燒鏝のやうに皮膚を燒く程になつた。それにも拘らず彼女は非常に綺麗なので、見る程の人は直ちに彼女を愛した。困る事は彼女に夫を得る事であつた――普通の人ならキスでもすれば直ちに死なねばならないから。彼女の父は立派な青年を見出して、この青年を娘の婿にしてもよい程充分有毒にしようと決心する。丁度好都合に、隣家に居る醫學生が彼女を愛したから、彼女の父は直ちにその青年を實驗に選ぶ事になる。幾月も彼は妙な食物を與へられて、彼の全身に毒が染み込むやうになつたが――本人の彼は全くその事には氣がつかなかつた。それから老人は云ふ、『もう君は私の娘に結婚してもよい。君と娘は人間のうちで、最も力のある、最も恐ろしい人々になつて居る。その力で世界を所有する事もできる』しかし二人はこれまで自分等になされてゐた事を聞いて驚き恐れた。彼等は善良なる人々であつたので、解毒劑を飲んで、毒の效果を退治しようと試みる。しかしその結果は少女には有害であつた、――青年だけが生き殘る。諸君はこの話の不思議なそして强い教訓を自分で見出せると私は思ふ。勿論、その教訓は、

精神的の毒藥を若い人々の心に服用させて最も恐るべき結果になる事、大人になつてからその害毒を直さうとする事は直す事にならないでかへつて殺す事になる事である。とにかく、諸君はこの話を讀んだらハウソーンの最もよい物を讀んだ事になる。

ハウソーンが陰氣な點で著しければ、ドクトル・ホームズその反對と見られねばならない。この人よりも陽氣な、輕い、輝いた心の人はアメリカにはこれまで現れなかつた、そしてこの人程英國で人氣のある人はない。文學研究の學生はホームズの事を多少知らねばならない、しかし彼の著作の多くは餘りに地方的であり、餘りに根本からアメリカ的であるので、諸君によく味はれないだらう。私はただ彼の著作から少し拔いて、それについて簡單に述べて見よう。

ホームズは一八〇九年に生れた――それで彼は今話して居るアメリカ文豪中の最年長者の一人である。彼は醫學修行のためフランスへやられた、學生としては優秀であつた、それからハーヴアード大學で解剖學と生理學の教授となつた。彼は一八五四年までこの地位にゐて、それからそれを止めて文學と、醫者の開業とをやつた。彼の專門の研究は殆んど凡ての彼の著作に反映して居る、しかし極めて最もよい風に。醫學の高尚なる研究は恐らく外のどの科學研究よりも觀察力、比較研究力を發達させる、――恐らくこの理由で醫者

の手になつた文學的著作には殆んどいつまでも甚だしつかりした性質がある。ドクトル・ホームズの場合には、私共は科學的の細い事て讀者を惱まさないで、その專門の知識の最もよい結果を與へてくれる醫者の文人を有すると云ふ事になる。人は或は、醫者の知識は人の情緒感を鈍くし、同情心を冷くする傾きがあると云ふかも知れない。しかしホームズの作はそれと反對の愉快な例を私共に示して居る。優い同情とこまかい情緒がいつでもそこにある、しかし科學的研究によつてのみ得られるやうな知覺と會得とて調節してある。私共は聲帶の構造を承知してゐても美しい聲によつて感に打たれる事がそのために少くはならない、觀察者が生理學的隨伴物の事に精通してゐても悲哀の感がそのために減少する事のない事をホームズは示してくれた。

ドクトル・ホームズの作は分量は甚だ多くはない、しかしそれは甚だ輕妙である。英國とアメリカて最も人氣のある書物、——彼の評判を最も高めた書物は私が選んで諸君に讀む事を勸める書物てはない。それは根本からアメリカ的である、そしてアメリカ生活の完全なる知識がなければ、諸君にはその面白味の大部分が分らない。しかし先づそれについて語らねばならない。それは三册になつてそれぞれ

『朝の食卓に於ける獨裁者』

『朝の食卓に於ける教授』
『朝の食卓に於ける詩人』

と名がついて居る。第一のが最も名高い。ドクトル・ホームズは彼の物語の場面をボストンの普通の下宿屋にとつた、そしてその重なる人物、その獨裁者（アウトクラット）と云ふのは下宿人の一人で、すぐれた教養と知識のために、彼の同じ下宿人に對して、一種の獨裁的の智力支配權を行つて居る。しかし、それは甚だやさしい親切な支配權である。その書物は重に毎朝、朝飯の食卓で行はれる會話の報告から成り立つて居る、しかしこの會話を皆結び合せて居る細いロマンスの絲がある。適切に云へば、それは筋のない書物である――それは餘程異常である。要するに、場面の選み方は惡くない。それは前に述べたやうに、非常に種々雜多の人物が一緒になつて、色々の問題について最も種々雜多な意見を交換する下宿屋である。そしてその書物は、平凡な、優秀な、奇抜な或は甚だすぐれた意見を集めた物で、當時の最も進歩した教養を代表して居るといつても想像された意見を持つて居る獨裁者が皆それを集めて、説明して居る。科學、藝術、宗教、社會道德、戀愛、音樂、美、――殆んど一切の物に關する意見がある、ただ政治、及びその種類の問題がないだけである、それから作者の技術の或點はこんなところに現れて居る、――卽ち人物の性格は説明してない、

その性格は會話で現れて居るだけである。獨裁者彼自身も說明してはない、しかし私共は完全によく、彼がどんな種類の人物であるかを知つて居る、見えるやうである。卽ちそれはドクトル・ホームズである。この書は直ちに成功した。その非常に成功したわけは、その議題は――アメリカ的の物と云つてはただ地方的の色と形だけで――大概凡ての人間の經驗に共通した題目であつたからであつた。それが現れるや否や、英國でもアメリカと殆んど同じく人氣があつた、そしてヴィクトリア女皇は後にドクトル・ホームズにこの『獨裁者』を贈るやうに御賴みになつた――このやうな名譽は外國の作者に與へられた事は殆んどない。この書物が成功したので、同じ文體でもう二冊書く氣になつた、――『敎授』と『詩人』が同じ朝飯の卓上に順々に出て來て――非常に輕い、そして快活な調子で科學、哲學、及び文學の諸問題を議する。この三冊のうちどれが最も傑作であるかを云ふ事はむづかしい。何れもよい、そして何れも最も飾りのない、そして最も强い風に大問題を取扱つて居る。何れも章はない。

この作の著しい特色はその調子である。それは全く樂天的で――最も自由な精神で會得されたこの上もなく陽氣な種類の書方である。ドクトル・ホームズには宗敎的譫言はない、――彼は新英國精神の偏見や僞善を憎んだ、始めからその公然の敵である事を宣言した、

（殊に教育に關しては）、それで始めは宗教家連は彼の話の樣子で多少感情を害した。その書物が樂天的で陽氣であるにも拘らず、彼等の好まない別の要素を發見した、――それは甚だ婉曲な調子の嘲笑であつた。しかしこの書物で感情を害したのは氣まぐれな人々の特別の階級ばかりでなかつた、讀んだ人は殆んど悉く少し感情を害した。ところで彼に成功させたのは彼の書物のうちにあるこの感情を害する性質である。今日でも彼を讀む人は皆自分自らの缺點や弱點や偏見や道樂の或物が、綺麗に解剖されて、穏やかに嘲弄されて居る事を發見するであらう。餘り宗教を信ずるから隨つて餘り科學を恐れる人ばかりでなく、又老人らしく思はれたい青年、若いと思はれたい老人、結婚しなかつたから老嬢と云はれて怒る老嬢、それから老嬢を嘲笑する意氣の青年、それからこれまで少し學問したので全世界に知らない事がないと考へ出した學生、それから少しも知らない題目について意見を發表する教授。殆んど凡ての型の現代人はこの通り寫されて居る、――そしてその繪のうちには少しもポンチ繪らしいところはない。しかしドクトル・ホームズは決して進み過ぎない、或は烈しく云つて讀者を本氣に怒らせるやうな事はしない。誰でも皆彼を容赦した、そして彼はただ面白半分に人を嘲弄して居るのでない、單に藥として、笑つて居る、――彼は肉體の醫者であるやうに、又魂の醫者である事を認めて來た。この書物は所謂道

徳的强壯劑で滿ちて居る――誰でもそれを讀む人の心を强く、健全にする。もし諸君が獨裁者の始めの數枚を讀んで興味があれば、全部を讀む事を勸めたい、――そして覺えて居るべき事は、これは皆どこを開いて、いつ讀んでも何か得るところのある書物の一つである事である。しかし始めの數枚を讀んで興味がなければ、暫らくその書物をわきへやつて四五年もたつてから再び試みるがよい。現在では『エルシー、ヴエンナー』と云ふ異常な小說の方が、諸君を引きつけるだらうと私は先づ想像する。

『エルシー・ヴエンナー』はドクトル・ホームズの書いた最も異常の小說であるばかりでなく、又十九世紀の最も異常な小說の一つである。それにも拘らず、それは甚だ人氣を得るやうにはならなかつた。恐らくは、それは人氣を得るには餘りに美妙であつた、そして恐らく英國の一般公衆には少し餘りアメリカ的であつた。ホームズの保證するところでは、科學的事實に基づいて居る、――とにかく、私共は科學的事實であつたので始めてそれを醫者に思ひつかせたのであらうと信じられる。この話は新英國學校を取卷いて居る、そしてその重なる人物（エルシーを除いて）は、生活のために田舍で敎へねばならなくなつた大學生の學校敎師、それから彼が戀をする若い女敎師である。學校に出て居る女學生達は殆んど成人（おとな）である、そしてそのうちの一人のエルシーは學校敎師を戀したので、この

情況を複雜な物にする。生徒のうちで、彼女は最も人好きのする——淺黑なスペイン風の美人であるが、彼女に少し普通でないところがある。彼女の運命はこの書物の悲劇になる物で、彼女の歷史は妙な物である。彼女の母が身重の時にガラガラ蛇に噛まれて、女のこどもを安產したあとで、その毒のために死んだ。エルシーは非常に綺麗に育つたが、しかし倫理的性質の點で缺陥があつた。彼女は二つの魂をもつてゐた。彼女は、母が死んだその毒と共に、蛇の魂と蛇の優美と蛇の魔力を遺傳してゐた。彼女は彼女の凝視だけで、彼女の見る殆んど凡ての人の意志に勝つ事ができる。彼女は不思議に、又、毒蛇や毒草が好きである。夏の最も熱い時に、彼女は山中の最も人跡到らない所へ行つて蛇と遊ぶ。彼女は蛇形の寶石細工を奇態に好んだ。しかし彼女は人間の魂と性格をもつてゐて、非常に親切で非常にやさしい。彼女の一生は悲劇的である、その理由は彼女の一生は彼女の內部にある二つの性質がたえず戰つてゐるからである。女の性質が勝つて居る時には、エルシーは何人も感嘆せざるを得ないやうな性質の女になる。蛇の性質が勝つ時には、彼女はただ恐ろしくなるばかり、——そして彼女の父でさへ彼女を恐れる。しかしガラガラ蛇の生命は十八年程續くだけだが、人間の一生はその五倍も續く事がある。十八年目に彼女はひどく病氣になる、——こで蛇が死なねばならない時である。不幸にして、その打撃はその性格には大き過

ぎる。蛇の魂の死と共に、人間の魂も死ぬ、それでこの悲劇は終りになる。諸君はそこに甚だ强い道德の問題がこの小說によつて暗示されて居る事が分る。二重人格を遺傳して、善惡の衝動の間の恐るべき爭鬪で苦しまねばならない人が出て來るのは『エルシー・ヴエンナー』の小說ばかりではない。

しかしその小說中の一切の物は現代的である――普通の小說のやうに讀まれる。學校敎師、女敎師、學校の校主――最も下等な種類の代表的ヤンキー、――それからエルシーに戀慕してメキシコ風に學校敎師を殺さうとする若いメキシコ人、それから田舍醫者、學校で弱い者いぢめをする男、それとこの大學生が職はねばならなくなつたその男、それからこの話の場面になつて居る新英國の村の色々の人物――何れも實際の觀察から描寫してある。彼等は生きて居る、全く眞に迫つてゐて、彼等を創造した人を文豪と呼んで居るやうである。この妙な書物は始めて出版された時は『敎授の話』と云ふ名であつた。これは廣く知られてあるべき價値がある程には知られてゐない。それは『守護の天使』と題するホームズの別の小說よりも遙かにすぐれて居る、――その方は私は强く勸める事はできない。『エルシー・ヴエンナー』と朝飯會話の三册はホームズの散文の重要なる部分となつて居る。この外に何物も書かなかつたとしても、彼はやはり有名であつたらう。しかし彼は

外に澤山の書物と澤山の詩を書いた。外の書物の殆んど全部は――科學的、道徳的、及び雜種の――論文集である。老年になつてから、英國を訪れた、そこで彼は大名譽を受け、最高の人々に紹介された。彼の航海の結果を彼は『歐洲一百日間』と題した面白い無駄話の一冊にした。詩人としては長く殘るやうな詩を三つか四つしか書いてゐない、しかし彼の詩は甚だ明白である、そして彼の散文の特色である輕い機智と惡戯な滑稽と云ふ同じ性質が目立つ。勿論こんな輕い詩は偉大とは云へない、しかしドクトル・ホームズが詩間を詩だけに捧げたら、恐らく餘程顯著な物を作つたであらう。彼の小さい詩のうちの『最後の葉』――十八世紀から十九世紀まで生き長らへようとして居る老人の事を書いた物――は、まことに優美にまことに上品に滑稽にできて居るので、私共はそれをフレデリック・ロツカーか、或はアウスティン・ドブソンの社會詩とのみ比べる事ができる。

これまで述べた人々はアメリカ文學に於ける最大の人物である。ホームズの後に――實はホームズの死の餘程前に――新しい形の文學が始まつて居る。私共はそれについてそのうちに話をする、それまでに、私はアメリカ西部の開拓者の生活を書いた大小說家のクーパーの事を特に論じなかつた事を云ひたい、實はこの人はただ話の上手文人として高い地位に居るが、文體家として又その言葉の本當の意味での文人としてではない。彼の小說は

今殆んど大人(おとな)には讀まれない、ただ冒險小說として、疑もなく將來長い間、少年を喜ばせるであらう。彼の著述は——悉く一八二〇年と一八五〇年の間に書かれたから——十九世紀の前半に屬する。三十二冊は彼がアメリカ文學に與へた遺產である。彼が文筆生活に入るまでは海軍の少尉候補生であつた、それで彼の海上生活の知識は、殆んどマリヤットの經驗が彼の小說に與へるやうな多くの價値を與へるのである。クーパーの小說のうち五つは海の小說である。そのうちの最もよい物は『水先案內』である。外にアメリカの殖民者と印度人との爭鬪に關する物が五つある、これ等は『革の靴下物語』と云はれる、——その中の一つは、多くの國語に譯されて誰にでも讀まれる、それは『モヒカン族の最後』である。クーパーは歷史小說を何冊か書いた、しかしこれは甚だ駄作であるので、今では殆んど讀まれない。純文學の方面でクーパーから學ぶところはありさうにない、しかし『水先案內』とさきに述べた小說は話としては面白い。私は小さい作者の多數については何も云はない、それから一人甚だ偉大なる文人——ロウエル——は諸君には餘り興味がないだらう。實際私はロウエルの地位は甚だしく誇張されてゐた事を確信する。彼は疑もなく甚だ大きな勢力であつた——彼はたとへば、種々の雜誌の發行の如き事業によつて長い間アメリカ文學を進步させる事に甚だ熱心に活動した、そして南北戰爭中は、新英國の方言で

政治上の諷刺を一番發行したが、それはその種類の物としてはよくできて居る。新英國の方言（ヤンキー方言）で書いたこの諷刺はたしかに現在ある物の種類の最上の物である、そしてそのうちに一つ方言の詩がある、四行の詩である、The Courtin（ザ コーティン）と云ふのだが、綺麗でもあり、又機智もある。このやうな作の外に、ロウエルが重に眞面目な種類の甚だ正しい詩を作つた――彼の最も長い詩はテニスンのアーサー王物語の文體に餘程似た一篇で「サー・ラウンフォールのまぼろし」と名づけた物である。しかし、彼の作には偉大なる物はない、そしてロウエルの英國に於ける人氣は、彼の人好きのする行儀と英國の宮廷に於てアメリカ公使として成功した事によるのである。彼の眞の偉大な點はバーンスのやうに方言で機智のある作品を出したところにある、そして彼は散文は極めて少ししか書かなかつた。ロウエルを述べたから、私共は散文に於けるアメリカ文人の第一の大きな一群の名を經つたわけである。

この講義を餘程切詰める必要がある、それで私は同種類の人々をまとめて話をする事にする。そのつぎのアメリカ文學に於ける著しい人物は、ブレット・ハートだと私は思ふ。この人は本國以外に名聲を馳せた新しい小說家の一團の一人である。彼は一八三九年にニユ・ヨーク州のオルバニーと云ふ古風な町に生れた――學校教師の子であつた。極めて普

通の學校敎育しか受けなかつた――文學の敎育などはなかつた。一八五四年にカリフォルニャへ行つて、そこで色々の資格で――金鑛の鑛夫、官吏、印刷屋となつて、――働いた。當時カリフォルニャには所謂『黃金の熱病』があつた。元氣のよいそれから向ふ見ずの人間が世界中から集まつて來て、富を得るために生命をも何とも思はず、人の作つた法律だらうが、神の法律だらうが一向頓着しないと云ふ風であつた。人間の法律の方は、一八四五年以來太平洋岸の大都會以外には殆んど行はれなかつたが――黃金地方には全然行はれなかつた。人は皆武裝してゐた、そして賭博、飮酒の場合には武器は盛んに用ひられた。人は互に一言の爭で殺し合つた、そして射擊の早い人間の方が運がよいのであつた。野蠻な恐ろしい生活であつたが、それにも又英雄的行動もあれば、小說的事蹟もあつた。ブレット・ハートはそれを見て、それに惱まされて、そのうちに靈感を見出した。彼は鑛山で見た事を小さい話と詩の形に書いて、それを色々のカリフォルニャの新聞雜誌に投稿した。これが直ちにアメリカの人々を喜ばせた、直ちに書物になつて、英國で大成功を得た、そして全く新しい方面の文學を紹介した。これまで短篇は英國でもアメリカでも人氣はなかつた――尤もフランスではコント或はヌヴェルと云ふ題で、非常に人氣はあつた。私はブレット・ハートが商賣上の意味で、それを成功するやうにしたと思ふ。ボストンの書肆は

直ちに一年分の著作に對して二萬圓を彼に提供した――彼の著書の人氣のあつたよい證據である。話は皆非常によく書いてある。詩は感情の方から見てよいが、仕上げは失敗であつた。彼は散文作者としてのみ考へる價値がある、そしてこの點では偉大である。彼の話の大なる價値は今日はなくなつた野蠻な社會狀態を忠實に描寫した點に存するよりも、むしろこの最も粗野な、最も恐るべき男女の階級にもやはり高尙な性質もあれば、高尙な行爲もあり得る事を示した點に存するのである。ブレット・ハートの描いた人物の中には、賭博者もある、盜人もある、淫賣婦もある――その他の人物は文明時代のただ半野蠻の子供である。子供は文明から不自然に遠ざけられた半野蠻人と云へるが、遺傳によつて多くのよい性質をもつて居る。これ等は餘程妙な話である、そして中には感動すべき物もある。晩年になつてブレット・ハートの著作は甚だよいとは云へなかつた。彼は彼を有名にした題材を書きつくした。しかし彼の始めのうちの作には長く生きる價値がある、恐らく長く生きるであらう。その最もよい物はそれぞれ『騷がしき假舍の運』及び『スカッグ夫人の亭主達』と題する二冊のうちに見出される。粗野ではあるが非常に力がある――これはこの上もなく短い批評である。

ブレット・ハートがサン・フランシスコに住んで居る頃と殆んど同時にアメリカ大陸の

向う側に評判になりかけてゐた二人の文人があつた。オハイオ州の印刷屋、ウィリヤム・ハウエルズ、及び文人の子供ヘンリー・ヂエームスであつた。この二人は英語界では有名になつて居る、二人とも同じ文學の派に屬して居るが、二人とも別々の方面で著作をして居る。ハウエルズもヂエームスも寫實派がフランスでなしてゐたやうな事を英語でしようと試みた。彼等はありさうにない事や傳奇的な事はすてて、人生を丁度ありのままに描かうと試みた。ハウエルズは東部諸州に於けるアメリカ生活の最も普通の出來事を題材とした。彼は澤山の小說を書いたが英國とアメリカとで同じやうに評判がよい。彼は名聲と財産とを合せて得た。しかし、或すぐれた批評家の說によればハウエルズの成功はただ一時的の物である、――彼の書物の人氣のあるのは、凡庸なる民衆の心――殆んど敎養のない大多數の讀者――を感動させるところがあるからだと云ふのである。しかし、これはハウエルズの文體が平凡だと云ふ事にはならない。それは飾りのない、强い文體で、非常に推敲を加へてあつて、第一流の物である。しかし小說の人物や場面はいつでも平凡である、倦きるやうな人ばかり、事件も興味がない。完全なる寫實主義(リアリズム)がそこにある、しかし敎養のある人がそこに住まうと思ふやうな寫實主義ではない。彼の始めの大小說『サイラス・ラッパムの出世』はやはり私の考では最も傑作である。それは無學な、しかし活氣のある

アメリカの製造家の話である。これに反してチエームスは決して平凡ではない、寫實的ではあるが、いつでも異常である。私の意見では、チエームスは現存のアメリカ文人のうちでは遙かに最大である、――彼の偉大なる事は彼の人氣では測られないけれども。彼は人氣を得るには餘りに上品である。彼は英國、アメリカ、及び伊太利の最も複雜な社會をのみ描く。彼は大部分英國に住んでゐた、そしてアメリカでよりも英國で遙かに立派な物を書いて居る。實際彼は現代の――ダウデーやブルヂエのやうな――フランスの小說家を顯著にしたと同じ種類の心理學的技術を有せる英語小說の唯一人の作者である。そして彼は驚くべく變化のある作品を出す事ができる。或時は彼は『ボストニアンズ』に於けるやうにアメリカに於ける心靈說（スピリチユアリズム）の移り氣な事を書く、それから伊太利へつれて行つて、私共に美學的熱情の最も高い形を描く、それから又ロンドンへ私共を連れて、貴族社會の心理を研究する、或は私共は巴里へ連れられる、或は――時々、知られた事實の世界から、知られない心理學上の事實の世界へ――連れられる、――卽ちチエームスは、又道德的寓話の作者として甚だ偉大であるから。彼の書いた物は殆んど何でも研究の價値がある、しかし私は諸君に、彼は非常にむづかしい、恐らく日本學生にとつては、現在の小說家のうちで最もむづかしい事を警告せねばならない。

寫實派はその外アメリカで非常に大きな成功を得ては居らない。ハウエルズとヂエームスだけが、そのよい代表者である――そのうちに私共は少數の顯著なる婦人作者で、その人々の文學上の地位を決定する事が未だ困難である人々を加へて居る。場面を多く伊太利に置いて成功した小説を書いて居るマリオン・ククラウフォードは、寫實家とは充分に云はれない。詩人で面白い小説集『マーヂョリー・ダウ』を書いて居るアルドリッチ、――『昔のクレオール時代』にルイジアナに於けるクレオールの事を描いて、今居所不明のケイブル、――ケンタッキー山中の描寫をしたクラドック（ミス・マーフリー）、――アメリカ南北戰爭の物語を色々書いたミス・ウッルスン、――この人々には皆優美な傳奇的趣味がある。小説家でない文人の間に、私共は甚だ高い別種類のロマンスを見出すが、――時として哲學的研究となつて、時としては旅行記となつて、時としては特別に情緒的な種類の隨筆となつて現れて居る。澤山あるが、その最もよい物について話さう。

恐らく隨筆家の最も顯著なる者は――美文學上から見れば――ドーナルド・ミッチエルであらう、エールの以前の卒業生で『獨身者の夢想』と『夢の生活』の著者である。このうちの始めの物は單に結婚に關する思想、彼が結婚したかつたが、結婚できなかつた或老婦人に關する記憶、――色々の思想を集めた物である。ミッチエルはもう今は老人である

が、彼の書物はそれを知つて居る人々に甚だ愛せられる。それは甚だ品のよい、そして感じ易い心を表はして居る。私は全く同じ方面の作品を出した外の作者を知らない、しかし二三のアメリカの旅行記に、情緒的默想の形に、甚だ同じやうな美を見出すのがある。チヤールス・ウオーレン・ストッダードのポリネシャの隨筆「南海敍事」それからカーテイスの「シリヤに於けるホワッヂ」の如きはそれである。

私共の使用できる時間の事を考へると、アメリカの輕い方の文學階級の散文作者については充分話した事になる、しかし私はもつと眞面目な方のアメリカ文人には何等情緒的價値がないと云ふ印象を諸君に殘して置く事を好まない。これは甚だ當を得てゐない。殊に歷史家に取つて當を得てゐない。アメリカの歷史家は、その著述と離れて一種の價値がある程、文學的性質に富んで居る。プレスコットの歷史は、その後幾分もつとよい研究が出て居るが、やはりその魅力のある文體でいつでも讀者を喜ばせる、それからモットレイの文學的性質も全く異常である――スペインとオランダとの間の爭を書いた如何なる小說もモットレイの精確だが、しかし感情的な敍述に近づく物さへあるまい。第三の人はこの頃歿したフランシス・パークマンである、彼は北アメリカに於ける英佛間の爭、及び、北米印度人の助力によつてローマ舊教の勢力をつくらうと、チェズイット教徒が計畫した事の

歷史を書いた人だが、その歷史は彼の文體のみならず、彼の一生の非常に小說的である事て諸君に興味を與へるであらう。彼は印度人の中に入つて彼等の歷史の或事實――たとへばヂェズイット教徒が彼等を支配する事ができなかつた事――を說明するために、彼等の性質を充分に知らうとした。第四の現存の歷史家、ヂョン・フィスクも亦偉大なる文體家である、そして彼の哲學（彼はアメリカに於けるスペンサー哲學の大きな代表者である）は、彼の歷史と同じく立派な性質の文章で著しい。彼の著した歷史の傑作は『アメリカ發見』二冊である、――これはプレスコットの著書より遙かにすぐれて居る、それから彼の論文家としての文體の最もよい例は『神の觀念』『人の運命』とそれぞれ題のついて居る二冊の小さい書物で恐らく見出される。

私はヱマスンについて話さなかつた――しかし彼はアメリカの思想史に於て最も大きな人物の一人である。しかし諸君はこの講義の時間の制限を考へて貰ひたい。哲學的の詩の奇異なるひらめきや情緒的文體の時々の奇異なる輝きに於てヱマスンの性質は偉大なる物てはあるが、私は散文或は韻文の模範としてヱマスンを勸める事はできない。藝術的見地から見れば――兩方とも不足の感がある。ヱマスンが諸君に文學的構造に關して敎へる唯一の物は、私の考へるところでは、かうてある、――甚だ短い文章の價値と力。しかし諸

君はエマスンの文體を眞似る事はできない。何人にもそれはできないだらう。エマスンの文體は彼自身であつた、それは丁寧に研究して念入りにできた物でなくて、自然の雄辯であつた、そのうちには澤山の粗金(あらがね)が未製品のまゝで存して居る。

譯者註　アメリカの學校の名は殆んど固有名詞になつて居る、たとへばワシントン・アーヴイングをその名につけて居る學校はいくらあるか分らない、それでこの會員であつた程の人は皆著名になつて、學校の名につけられて居ると云ふ意味。

中世紀の最も美はしきロマンス（一二、一一、一八夜）

中世紀の物としては、不公平にも輕視せられてゐた傳奇文學（ロマンス）の價値は、言葉の美や事實の美に存するのではない。今日では現代文學が中世紀文學に負ふところ非常に多い事は以前よりもよく理解せられて居る、そして私共は　中世紀の無學、迷信、及び殘忍にも拘らず、その時代の想像に何を負うて居るかを一般に認めて來た。中世紀はそれ等の弊害ばかりを有してゐたとすればその時代は、それ自身に於て文學の形と關係はないが、しかも最高級の現代の詩に深く影響して居るやうな美の教訓と氣品の教訓を私共に分ち與へる事はできなかつたらう。否、中世紀には、道德上の惡も多かつたがそれと共に、道德上の善も多かつた、そしてその善は事實非常によい善であつた。普通、その時代の熱烈なる信仰が道德的の美をつくつたと云はれてゐた（私はよい批評家は今日さう云ふとは思はないが）。この言を大に修正しなければ、それをどうしても認める事はできない。實際、宗教的美、

殊に中世紀的宗教美は存在して居るが、この時代のロマンスを創造した物はそれではない。實は、その傳奇的文學は、想像が宗教的拘束を離れた反動のやうな物である。しかしもし中世紀の信仰と云ふのは歐洲の文明より遙かに古い物で、東洋の物西洋の物と云ふ區別のない物、――人間の道徳的經驗に於ける深い信仰――の事を云ふのなら、それなら私はこの言は全く正しいと思ふ。歐洲の歴史に於て、中世紀時代程人が或美徳の價値を眞面目に信じた時代はない――そしてロマンスの最もすぐれた物は、單に倫理の目的で書かれたのではないが、丁度その信仰を說明するやうなロマンスである。

　しかし私の意味を說明するには話を一つ物語るのが最もよい、その話は歐洲にも、中世紀にも、或は或特別の形の宗教的信仰にも關係はない。それはクリスト教の話ではない、それからそのうちには甚だ奇妙なところがあるから、本文に書いてある通り、話す事もできない。しかしそれは單なる想像の産物に存する價値のよい例である。

　昔、ペルシャかアラビヤに、或王がゐて、位に卽いた時、宮殿の内苑の下に驚くべき地下室のある事を發見した。その地下室の一室に少女の不思議な彫刻が六つ立つてゐて、一つは銘々唯一個の金剛石でできてゐた。その作品の價と美しさは想像ができない程であつた。しかし圓形に立つてゐた彫刻の眞中に空虚の臺があつた、その臺の上に貴重な手箱が

あつて、その中に、王の父である、亡くなつた先王からの手紙があつた。その手紙にかうあつた、

『私のむすこよ、ここにある少女の彫刻は實際賞讃しつくせない程ではあるが、これとは比べられない程もつと貴重な美はしい第七番目の彫刻がある、しかし私は死ぬ前にそれを手に入れる事ができなかつた。それでその彫刻を得て、この第七番目の臺の上に置く事は、私のむすこよ、今てはお前の義務である。それ故、未だ生きて居る私の氣に入りの奴隸に、どうしてそれを手に入れるべきか、行つて尋ねて見よ』それから若い王は大急ぎで、父の信頼を受けてゐたその老人の奴隸のところへ行つて、その手紙を見せた。そこで老人は云つた『あゝ、陛下、只今からでも、その彫刻をさがしに陛下の御供を致したいのですが、鬼神の大勢住んで居る三つの島の一つにありますので、陛下は何よりも、恐れない事、それから如何なる事にも私の教訓を守つて頂く事が大事でございます。それから又、もし陛下がその島の鬼神に約束でもなされたら、その約束を守つて頂く事を御忘れにならないで下さい』

それから彼等は、そこには『草と、おはします神の外には何物も存在しなかつた』大きな荒野を通つて旅行を續けた。私は彼等の身の上に起つた不思議な事、或は象の首をした

船頭の漕ぐ不思議な船について、今諸君に話しては居られない。たうとう鬼神の王の宮殿に到着した事を云つて、それで充分として置かう、それから王は長い白いひげをした綺麗な老人の形をして、彼等を迎ひに出た。そして若い王に云つた、『私の息よ、私があなたの父なる王を助けたやうに、喜んであなたを助けませう、そして御望みのその金剛石の第七の彫刻を上げませう。しかしその代りに、頂かねばならぬ物がある。あなたはここへ十六歳程の若い娘を私のところへ連れて来なければならない、そして彼女は非常に聰明でなければならない、それから彼女はからだばかりでなく魂も心もそれから考も皆本當の處女でなければならない』若い王はこんな事は甚だ容易な事と思つた、しかしその靈の王は彼にさうではないと云つて、さらにかう云つた、『私の息よ、如何なる人間も、自分だけの智慧で、若い乙女の心が清淨であるかどうか分る程賢い人はゐない。ただこの魔法の鏡、これを御貸しするからこれで分ります。この鏡にどんな乙女でもうつして御覽なさい、そして彼女の心が全く善良で清淨であれば、鏡はそのまま輝いてゐますが、もし彼女に何か缺點があれば、鏡に曇ります。さあ、行つて私の云つた通りになさい』

　勿論諸君はそのつぎにどんな事が起つたか、想像ができよう。王國へ歸つて、若い王は自分の前に、國内の凡ての種の最も身分の貴いそして高い人々の娘を呼び集めた。しかし

その不思議な試驗を行つて見ると鏡が曇らずにはゐなかつた。三年間王はさがしたが無駄であつた、それから絶望して、彼は始めて彼の注意を平民に向けた。そこで丁度始めての日に、粗野な、沙漠の人が王の前に來て云つた、『私は陛下がお望みになるやうな丁度そんな少女を知つてゐます』それから彼は行つて間もなく、沙漠から一人の質朴なる少女を連れて戻つた、その少女は彼女の父の世話で育つて、彼女自身の家族の人々や、宿營の駱駝や馬の外には何の伴侶もなく暮らしてゐた。そして彼女の貧しい着物のまま、王の前に立つた時、王は彼女がこれまで見たどの少女よりも遙かに綺麗である事を見た、そして彼女に質問をして見たが、彼女が甚だ聰明である事を發見するばかりであつた、そして彼女は王の前に立つ事を少しも恐れもせず、恥ぢてもゐないで、ただ、子供の眼のやうな、大きな驚いた眼をしてあたりを見廻してゐた、そして誰でもその無邪氣な眼つきに遇ふ者は、心に、何故となしに、大なる喜びを感じた。そして王が鏡をもつて來させた時、その鏡は前よりも數層倍も光つて、大きな月のやうに輝いた。

　靈の王の注文通りの乙女がここにゐた。王は兩親から容易に彼女を貰ひ受けた、しかし彼は彼女に彼女をどうするつもりかは告げなかつた。今度は彼女を靈に與へるのが彼の義務であつた、しかし果す事の甚だ困難な條件があつた。彼の約束の條件によつて、彼は彼

女にキスする事も、勢はる事も、或はその國の習慣に隨つて覆面してでなければ見る事さへも許されなかつた。ただ鏡によつて、彼女は如何に綺麗であるか、見る事ができただけであつた。そして航海は長かつた、そして途中、その少女はこの王の花嫁になる事と思つたので、子供が兄に對する態度で心から王になついて來た、彼も又心中非常に彼女になついて來た。しかし彼女を捧げるのが彼の義務であつた。たうとう彼等は靈の王の宮殿についた、そして老人の形が出て來て云つた、「私の息よ、あなたはよく約束を守りました。この乙女は私の願つた通りであつた、それで私は貰ひ受ける。ところであなたが御殿へ御歸りになると、第七番目の臺に、あなたのお父樣があなたにさがせと云はれた金剛石の彫刻を發見します」から云つて、靈の王は乙女をつれて消えたが、乙女はこの通り欺かれたので天に向つて大きなつんざくやうな叫び聲を上げた。若い王は甚だ悲んで、家への歸り路についた。道すがら彼は少女を殘念がつた、彼女及び彼女の兩親を欺いて殘酷な事をした事を殘念がつた。そして彼は獨り言を云ひ出した「靈の王の贈物などはどうにでもなれ。金剛石の女は石の女と同じく、自分には何にもならない。私が發見したやうなあんな生きた女の半分も綺麗な、半分も貴重な物が、この世界にあるか。彫刻のために、彼女を捨ててしまつた自分は何と馬鹿であつたらう」しかし彼は死んだ父の願に從つた事を想ひ出し

て、自ら慰めようとした。
やはり、慰められなかつた。宮殿に着いて、獨りで泣くために、自分の祕密の部屋に行つた、そして、大臣達が色々骨を折つて慰めようとしたが、それに拘らず夜も晝も泣いた。しかしたうとう一人の大臣が云つた、『陛下、内苑の下のあの部屋の中に、第七番目の臺の上に不思議な彫刻が現れました、陛下がそれを見に御出でになれば、或はお慰みになるかも知れません』

そこで、心は甚だ進まなかつたが、適當に身形を整へて地下室へ行つた。

なる程靈の王の贈物である彫刻があつた、そして甚だ綺麗であつた。しかし金剛石ではできてゐなかつた、そして彼が失くした少女に奇妙に似てゐた、それで王の心臓が驚きのために胸の中で躍つた。彼は手を延ばして、彫像に觸れた、そしてそれが生命と若さをもつて暖い事を見出した。そしてやさしい聲が彼に云つた、『はい、本當に私です――お忘れになつて？』

こんなにして彼女は彼に戻つた、それで靈の王は彼等の結婚式に來て、花婿にかう云つた、『あゝ、私の息、あなたの亡くなつたお父様のために、私はこんな事をした。それは、本當に清淨な完全な婦人は、この世にある如何なる金剛石よりも、如何なる寶よりも遙か

に貴重である事を、あなたに教へるつもりであつたから」

そこで諸君は直ちにこの話の美を見る事ができよう、そしてその教訓は「箴言」の名高い句にある教訓「徳高き婦人を見出し得る人は誰ぞ、彼女は紅玉よりも遙かに貴し」と全く同じである。しかしそれはただ「アラビヤ夜話」の一つの話である——諸君が普通の歐洲譯に見出せない物の一つである、何故なれば、それはバートンを除いて外の英國の譯者が深く原文通りに飜譯する事のできないやうな書方になつて居るからである。原文のところどころ猥褻である事は、話の動機の美しさとやさしさを實際少しも減少してはゐない、そして私共は所謂文體に於て、猥褻であるとか、ないとか云ふ事は、一時代や時の流行に餘程關係がある事を忘れてはならない。

さて古い英國のロマンスの最もよい物を顯著ならしめるのは、同じ種類の道德上の魅力——文體とは少しも關係なくして、その文章の感情と暗示とに非常に關係ある魅力——である。しかし或古いロマンスでは、文體も亦、今日眞似のできない古雅な、質朴な、眞面目な一大魅力をもつて居る。この點に於てはもつと古いフランスのロマンスの方が——それから英語のが飜譯されて來たのだが——遙かによい。そして最もよいのは「アミスとアミリス」と云ふのだが、英人はそれを「アミックスとアミリアス」と譯した。その話に、諸

君に興味を與へる物がある筈である。

このロマンスの全部の題目は友誼の美徳である、勿論同じ程度に顯著な、外の美徳を色色含んでは居るが、アミスとアミリス、卽ちアミクスとアミリアスは二人の武士で、彼等の經歷の始めから深く愛し合つてゐた。この自然の愛の義務で滿足しないで、彼等は武士道で友人の務めと認られて居るあらゆる義務を引受けた。このロマンスには、二人の友情を試驗するために講ぜられたあらゆる方法に、この二人は打ち勝つた事が述べてある。幾度も幾度も、女の魔術でこの二人を遠ざけようと試みたが、駄目であつた。二人ともそれぞれ結婚した、しかし結婚してからも、彼等の友情はやはり前のやうに强かつた。一方は他方のために戰はねばならない事も、そして自負心の强い、勇敢な人にとつて忍ぶ事のむつかしい事を忍ばねばならない事も、度々ある。しかし凡ての事は愉快に忍ばれる、そしてこの二人は、如何に苦しい時でも、まちがつた事は決してしない、信を破るやうな事も少しもない程正直な武士であつたが、――遂に、或不幸な日が來た。その日は、アミスは戰つて勝負を決すべき日である。しかしアミスは病氣で、戰ふ事ができない、それで彼の名譽を損はないために、友人のアミリアスはアミスの鎧甲をつけて、アミスと詐つて、約束の場所へ行つて、立派に勝を得る。しかしこれは正直な行ではない、彼は名を詐つて戰

に出た、動機はよくても、その誤りの行は悪い。そこで天は恐ろしい癩病で彼を罰する。

中世紀に於ける癩病の狀況は餘程違つてゐた。この病氣はアジアより歐洲へ――恐らく十字軍の兵士によつて――輸入された物らしい。ミシユレー（著者注）は、禁欲主義から起つた清潔の缺乏から歐洲に起つた物かも知らない――即ち昔のギリシャ、ローマの共同浴場は中世紀の教會では恐ろしい物のやうに扱はれたからと暗示して居る。しかしこれはたしかでない。とにかく十三、四、五世紀に於ては、癩病は非常に優勢であつた事はたしかである。その當時この病氣は少しも理解されなかつた、非常に傳染力がある事は想像されてゐた、それでそれにかかつた人は直ちに社會から隔離されて、外の人に近づく事のできるやうな條件では、何處にも住む事を許されなかつた。妻や子供は癩病患者と認められると云ふ恐ろしい條件でなら、同行する事を許された。癩病患者は何れも僧侶のやうな着物を着て、顔を被ひてかくしてゐた、そして彼の近づく事を知らせるために鈴をつけてゐてそれを間斷なく鳴らさねばならなかつた。特別の癩病の家がどの町の近くにも建てられてゐて、こんな不幸な人々が宿泊する事ができた。乞食する事は許してあつたが、近よる事は危險だから、大概施物や食物は手に渡さないで、投げてやる事になつてゐた。

このロマンスにある癩病の犧牲者が始めてこの病氣にかかつた時は、彼は偶然彼の親友

から遠く離れたところにゐた。そして、彼自身の家族の人で彼を助けようとする者は一人もない、彼は肉體的恐怖と迷信的恐怖をもつて見られた。彼にとつては彼の武士たるの資格と幸福と家族を捨てて、癩病人の裝ひをして、癩病人の鈴をつけて、乞食になるより外に仕方がない。そして彼はさうした、長い、長い歳月の間、彼は町から町へと乞食をして歩いた、たうとう、全く偶然に、彼は大きな城の門に通ずる道に出た、そこには今彼の親友が住んで居る——王の娘と結婚したから、今ではえらい王の婿である。そして彼は施しと食物を貰ひに城に行く。

ところで門番は、この癩病人は、主人の持物のコップと全く同じの甚だ立派なコップを持つて居る事に氣がついて、この事を城主に告げるのを自分の役目と思うた。そこで城主はずつと昔、自分と自分の友人と銘々この種類のコップをローマの僧正から頂いてもつて居る事を思ひ出す。そこで門番の話を聞いて、門に居る癩病人は『死から彼を救つて、彼のためにフランス王の娘を自分の妻にするやうにしてくれた』あの友人である事をさとつた。ここで私はこの話のフランス譯から引用した方がよいと思ふ、それには友人の名は變つて居るが、話の美それ自身は變つてゐない、

『それから直ちに彼は彼の上に倒れて、烈しく泣き出して、彼にキスした。それから彼

の妻がそれを聞いた時、彼女は髪も亂れたまゝで走つて出て、ひどく泣き悲んだ――何故なれば、あの惡いアンドレを殺したのはこの人である事を覺えてゐたからであつた。それから彼等は彼を綺麗な部屋に入れて、彼に云つた、「神樣の意志があなたになしとげられるまで、私共と一緒にゐて下さい、何でも私共の物はあなたの用に立てます」そこで彼は彼等と一緒に住んだ」

「神の意志」と云ふ意味は、中世紀では癩病は神からの罰であると本當に考へられてゐたからである事を諸君は解しなければならない――それ故癩患者を城に入れる事は、その國の法律を破つて居るのみならず、その時代の見解によれば天罰をも受けようとして居るのであつた。それだから、彼の慈善は實際本當の慈善であつた、そして彼の友誼は恐怖のない友誼であつた。しかしこの友誼はこれから更に未曾有の恐ろしい試驗にかけられようとしてゐた。どんな事が續いて起つたかを會得するためには、中世紀には恐ろしい迷信――人の血を浴びると、癩病が直ると云ふ信仰――があつた事を知らねばならない。その迷信のために、人殺しもよく行はれた。ロングフェローの「黄金の傳說」は、若い少女が彼女の血で彼女の王の癩病を直すために進んで命を捧げると云ふ中世紀の物語に基づいて居る事を諸君は覺えて居ると私は信ずる。このロマンスにはもつと大きな悲劇がある。或晩、

友人の城に眠つて居る間に、癩病人は神からの天使――ラフヱエル――によつて起された、天使は彼に云つた、

『自分は天使ラフヱエル、お前に直る方法を知らせに來た。お前は友人のアミリスに彼の二人の子供を殺して、その血でお前を洗ふやうに云はねばならない、そしたらお前の體が直る』そこでアミスは云つた、『私のために友人が人殺しの罪を犯すやうな、こんな事はあつてはなりません』しかし天使は云つた『彼がさうする都合になつて居る』さう云つて天使は去つた。

『都合になつて居る』と云ふ文句は『さう命令されて居る』と云ふ意味に解せねばならない、中世紀の諸侯は命令を出す時にこんな穩かな云ひ方をした、そして天使は封建時代の使者のやうに云つたのであつた。しかしそんな命令があつても、病人は彼の友人に、天使の訪問について云はない、しかしアミリアスはその聲を聞いたので、その夜誰と話してゐたかを白狀させる。そして彼はただつぎのやうな穩かな言葉で云つたが、この城主の心は想像される――『そこでアミリアスは云ふ、私は下男下女それから私の全財產をも君に上げたいと思つて居る――それに天使が君に私が二人の子供を殺すやうにと云ふとでたらめを云ふのだね。しかし君と僕との間にある眞實と、僕等の友誼と、一緒に受けた洗禮と

によつて、君に懇願するが、君にそんな事を云つたのは人間か天使かどちらか云つてくれ給へ」―

アミヽスはそれは全く天使であつた事を斷言する、そしてアミリアスは決して彼の友人の言を疑はうとは思はない。それからさきを私自身の言葉で語るのはつまらないから、ウオルター・ペイターの飜譯した文句から再び引用しよう。諸君がそれを綺麗な、感動させる物と思ふだらう、

「それからアミリアスは、ひそかに泣き出した、そして心に思つた、「この人が私のために死ぬつもりでゐた以上、私は彼のために子供を殺さないわけに行かない」それからアミリアスはもう躊躇しないで、妻の部屋に行つて、彼女を祕密の室にやつた。それから劍をとつて子供等の寢室に行つて見た、そして彼等の眠つて居るのを見た。それから彼は彼等の上に蔽ひかかつて、烈しく泣き出して云つた、「自分から進んで自分の子供を殺さうとする人の事を誰か聞いた事があらうか。あゝ、子供等よ。私はもうお前達の父ではない、殘酷な人殺しだ」

「彼等の上に落ちた涙で、子供等は眼をさました、そして彼等は父の顏を見て笑ひ出した。そして彼等は三つばかりの年齢であつたので、彼は云つた、「お前達の笑は涙になる、

お前達の無邪氣な血が今流されねばならないから」それから、直ちに二人の首を斬つた。それから二人を眠つて居るやうに置いて、取つた血で友人を洗つた、そして云つた、「この世に於て信仰をもつやうに人に命じ給ふた、そして一言で癩病人を直し給ふたイエス・キリストの神様、今私の友を直して下さい、その人を愛する餘り、私は子供の血を流しました」』そこで勿論癩病人は直ちに、完全に直つた。しかし母は子供を殺す事については何事をも知らなかつた、私共はこの悲劇に於て彼女がどんな役をつとめたかをこれから知るやうになる。又引用する事にする、今度は本當のそして甚だ美はしい結末を與へる――

『さて、父も母も子供等のゐたところへ未だ入らなかつた、しかし父は彼等の死のために、ひどく歎息した、母は一緒に祝するために彼等を呼びに行かうとした、しかしアミリアスは云つた、「もつと寢かして置かう」そしてもう午前九時であつた。そこで獨りで泣かうとして行つて見ると、彼は子供等が、床の中で遊んで居るのを見た、劍で斬つた頸の廻りに、何だか、赤い絲のやうな痕があるだけであつた。それから彼は二人を抱き上げて妻のところへもつて行つて云つた、「さあ、喜んでくれ。天使の命令で私が殺した子供達は生きて居る、そしてその血でアミスが直つたのだから」』

諸君はこれが如何に美はしい話であるか分るであらう、そしてその背後にある大きな道

德觀念の情緒的力を感ずるであらう。もうこれ以上云ふ事はないが、ただこんな奇妙な事實があつた、即ち、中世紀に於てこの話が全く事實と信ぜられた時分に、アミクスとアミリアス——或はアミクスとアメリアス——は教會からは聖徒(セイント)と考へられて、人々はそれに祈禱をいつもしたのであつた。誰か友人のために心配があつたり、或は友人の愛を失ふかも知れないと云ふ事を恐れたり、或は友人としての義務を行ふ力をもたない事を恐れたりした場合には、教會へ行つて、有難い聖徒アミクスとアミリアスから助けを願ふのであつた。しかし勿論これは全くまちがひであつた——このまちがひは十七世紀まで續いた。それから誰か教會に注意を與へて、アミクスとアミリアスは單に中世紀の或小說家の發明であると云ふまちがひのない事實を指摘した。そこで教會は詮議した、そして非常に驚いて、聖徒の名簿から、アミクスとアミリアスの長く愛尊された名を除く事にした——この改良は私は教會が重大なるまちがひをしたと考へざるを得ない。それ等の影のやうな形が、もとの人間の生命を表はさうが、ただ人間の空想を表はさうが、構はないではないか、それは綺麗である、そしてそれを信ずる事は人に美はしい思想を抱かせる、そしてその二人の人人から助力を得ると想像する事が數千の人の心を慰めたのであつた。そのままにして置く方がよかつた、その點に關して、現在ある聖徒のどれ程までが事實だらうか。とにかく、

教會から追放されてもこの二人は死んでゐない。彼等は未だロマンスに於て生きて居る、そしてそれを讀む人は誰でも讀んだために少しよくなつたやうな氣がする。

私が諸君に讀んだのはフランスの譯文からであつた――その方が二つのうちでもつと綺麗である。テン・ブリンク（譯者註三）の書物には英語の飜譯の拔萃が多少ある。しかしそのドイツの學者が云つたやうに、英語の話はフランスのより遙かに粗野である。たとへば、英語の話では、その武士が城から飛び出して、門に居る癩病人を打つてコップを盜んだと責める。そして烈しく打つて甚だひどい言葉で彼を罵る。實際英國の作者は、もとはフランスの話であるこの話を改めよう、或はよくしよう、として中世紀の英人氣質（かたぎ）を表はし過ぎた。フランスの話では一切は武士らしく滑らかに、飾りもなく、強く、しかも上品である。そしてこの話の材料を中世紀の想像がどこから得たのであらうか。恐らく一部分はバイブルにあるヨセフの話・一部分はアブラハムの話からであるが、聖書からの材料は甚だよく織り込んであるので、全體が極めてよく創造的に見える。精神的想像力の魔術によつて古い物を全く新しくする事――それが中世紀の大藝術である。その當時の人は夢の世界に住んでゐた。その夢の世界は今も私共を引き入れる、その單なる理由は幸福は重に夢に存するからである。疑もなく、正確なる科學は私共を非常に助ける、しかし數學は私共を一層幸福

にはしない。もし私共が夢を信ずる事ができたら、夢は私共を幸福にする。中世紀は夢を信ずる事ができた、私共は精々、それを試みる事ができるだけである。

〔譯者註一〕 Jules Michelet（1798—1874）名高いフランスの歴史家。

〔譯者註二〕 Walter Pater（1839—1894）英國の文人。その著「文藝復興」の卷頭にこの話が出て居る。

〔譯者註三〕 B. E. C. Ten Brink（1841—1892）オランダに生れ、ドイツの各大學で英語英文學を教へた言語學者。「チヤウサー」「英文學史」などの名著がある。

「シャグパットの剃髪」

私はヂョーヂ・メレディスの詩についてこれまで澤山話して居るが、私が最大の寓話（フエイブル）の一つであると信ずる物——たしかに十九世紀に於て想像された最大の寓話を書いて居る事について、未だ話す機會はなかつた。私は又この寓話は——彼の凡ての小説が忘れられた後までも——長く生きて、一大古典となる事をも想像する。何故なれば彼の小説は、傑作ではあるが、殆んど全部非常に複雜な英國と伊太利の貴族社會の現代の描寫である。彼等は一時代の精神的道德的流行を描いて居るが、凡てこんな流行は直ちに變化する。しかしその偉大なる寓話は人間の性質にあつて過去、現在、未來、變らない物を寫して居る、それは彼の詩のやうに、永久の物の鍵に觸れて居る——恐らく詩よりももつとよく觸れて居る、何故なれば彼の詩には恐ろしく不明瞭なのがあるから。私がこれから話さうとして居る寓話について、ゴッス氏は面白い論文を書いて居る、しかしゴッス氏でも誰でもそれを

說明しようとした人はない。もしこの書物が、實際の價値程に、廣く知られてゐない、廣く歡賞されてゐないとすれば、その事實は幾分批評的說明の不足のためである。ゴッス氏にさへ、この書物はただ文學的技巧の比類のない物として單に興味を與へて居る。しかし保守的の英國に於て、どれ程の人が、文學的技巧それ自身に頓着したり、或はそれを尊重したりする事ができるだらうか。かくかくの書物がただのお伽噺だと考へて居るうちは、彼等は大して、讀まうともしない。しかし、そのお伽噺は大きな道德的事實の象徵であると云へば、その時は違つて來る。アンデルゼンの不思議な物語の人氣のあるのは、子供を喜ばせると云ふ事實によると共に、又、道德上の教訓があると云ふ事實にもよるのである。

メレディスの書物は子供を喜ばすために書かれたのではなかつた、それにしては餘り戀愛が多過ぎる、それは特別の目的があつて書かれたかどうか私は知らない、私は特別の目的がなかつたらうと思ふ方である。何か目的をもつて書かれた書物は大概失敗する。大きな道德的の話は藝術のために書かれた話である。メレディスはアラビヤ夜話の物語作者の風を手本にした。彼の話の言葉、比喩、詩趣、全體の構造はアラビヤ夜話の風にできて居る。しかし、ゴッスが云ふやうに、アラビヤ夜話もこれに比べると冷たく、青ざめて見える。アラビヤ夜話のうちには「シャグパットの剃髮」の或部分に比すべき場所は一つもない事

を諸君は見出すであらう、殊に英語の書物は豊富な滑稽な調子で書いてあるので一層異常である。諸君は作者がその題材を玩んで居る事、丁度手品師が同時に半ダースの球をおもちやにして、一つも落さないやうである事を感じよう。それでも彼は彼等の題材を眞面目に使つた東洋の人々よりも遙かによく使つて居る。書目、場所と人の名前までも洒落(しやれ)てある、――何れもペルシヤやアラビヤの名に餘程似て居るが。「シャグパット」は「シャッギー・ペイト」の訛りである、『ペイト』は頭(ヘッド)の古い英語である――それでその名は甚だ毛の多い、粗野な風の頭を意味する事になる。名前にさへ、こんな種類の洒落(しやれ)のあるのを見ると、諸君はこの書物はつまらぬと考へるやうになるだらう。私も讀む前にはさう思つた、しかし少くとも六度讀んで見てから、そして今後も、もつと度々讀むと思ふが、私は諸君にそれはこれまで書かれた最も愉快な書物の一つて、必ず諸君を喜ばすに相違ない事を保證する事ができる。これだけの總論を云つて、今度私はその話自身、空想的な筋について多少の話を始めよう。

　シャグパットは何者か。シャグパットは衣類の商人て、王の氣に入りであつた。シャグパットはマホメットの國々の習慣と違つて髮を長く延ばして居る、その國々では男は頭の頂上に一房殘すだけであとは剃る、死後、その一房の毛で、眞の信者は天使達によつて引

上げられて、天國へ連れられる。支那人が辮髪を大事にするやうに、マホメット教徒はこの一房の髮を大事にする。マホメット教の町に眞の信者が、この通り髮を長くして居るのはどうした事だらう。それはかう云ふわけである、この人の頭に、或神仙の頭から取つた一本の魔法の毛が植ゑてある、それで「同一（アイデンテイカル）」と呼ばれたこの毛は、その毛のある人を、凡ての人に禮拜させる力をもつて居る。それで、王はこの衣類商を尊敬して、凡ての人々が彼の前にお辭儀するのである。それから又、その國では同じやうに髮を長くして置かねばならない、それからどこの町でも理髮師はその商賣をしてはならないと云ふ命令が與へられる。

　こんな規則を知らない或理髮師――シブリ・バガラッグと云ふ名の理髮師――は首府に來て、正しくシャグパットの髮を剃らうと云ひ出す。彼は直ちに奴隷に捕へられて、ひどく打たれて、町から放逐になつた。しかし町の外で、彼は餘り醜いので見る事が苦しくなるやうな、恐ろしい老婆に遇ふ、そして老婆は、もし自分に結婚する約束をすれば、彼のために、幸運を作る事ができると云ふ。甚だ不幸な境遇に陷つては居るが、そんなひどい女と結婚する事は考へただけでもぞつとする。それでも勇氣を起して約束する。彼女はそれから彼にキスせよと云ふ。彼は眼を瞑つてキスする、ところがそのあとで彼女は突然若

く綺麗になる。彼女は王の重なる大臣の娘である、醜いのは彼女にかかつた妖術のためてある。この妖術は彼女に結婚しようと願つて居るシャグバットの力から起つて居るのであつた。彼女自身のため、國家のため、凡ての人民のため、シャグバットの頭を剃る事が必要であると彼女は云ふ。しかしシャグバットを剃る事は非常な力――魔法のやうな力を要する。その男の魔法の髪は普通の道具では切れない。ナイフや剃刀をもつて近づくと、この髪は突然電撃のやうな非常な力を出して、近づく者を悉く投げ飛ばしてしまう。平常見たところただの毛だが、異常の場合にはそれが光りを放つて、星に達する火柱のやうに立つ。それて大臣の娘がバカラッグに告げて、もし彼に勇氣があれば、彼女は、その毛を切る――シャグバットの毛だらけの頭を剃る――助けになるやうな魔法を彼に教へる事ができると云ふ。

私は諸君にこの話の筋の大體の考を與へるために、これまて詳細に話した。この書物の大部分はシャグバットの障礙と危險を書いて居る、そして最も驚くべき風に、兩方で使用される魔術の爭を物語つて居る。シャグバットは理髮師に對抗して惡い魔術を使ふ惡魔によつて防がれて居る、バガラッグは妻と彼女の知つて居るよい魔法に助けられて居る、バガラッグに愛されて、彼女は世界第一の美人となつて居る、そして彼女は愛せられる程益

〻綺麗になつて行く。しかし彼はシャグパットと戰ふ勇氣がなくなれば、彼女を失はねばならない事を承知するやうに云はれて居る。彼の勇氣が試驗される事、その試驗に皆勝つ事を諸君に話す事は、諸君がその話を讀む時の興味をただ損ずる事にならう。ここで私はただ、この書物のうちでバガラッグの冒險を物語る部分の最も立派な章はアクリスの劍、シャグパットの頭がその劍で最後に剃られる魔法の劍に關する一章である事を云つて置く。この劍の想像はあらゆる文學のうちで、最も驚くべき物の一つである。アクリスの劍の敍述と比べては、昔の魔法の劍の敍述は皆平凡で興味はない。餘りに輝いて居るので、甚だ強い眼でなければ見えない、地から空への橋にも使用ができる、それ程長くする事もできるからそれを使ふために望遠鏡を使はねばならない、月光よりも輕くもなれば、どんな力でも上げられない程重くもなる。私は劍の敍述の文句を少し諸君のために引用したい、この敍述は非常に綺麗で、メレディスの色彩のある散文の文體のよい例を諸君に與へる。私がこれから讀むところはバガラッグが魔法の水で眼を洗つたあとで、劍が始めて見えて來る事を述べて居る、

「彼の眼は強くなつてそのすばらしい劍を見た、少し壁から離れたところにつり革にかかつて

居る。……見よ、その長さは、太陽が波を斜めに照らす時、海を横ぎる深紅の色の長さ程であつた、そしてそれは一哩程の長さに見えた、金鐵の刃は切先から柄まで電光を捉へたやうに光つて居る、その柄にはうるんだ寶玉のやうな眼をした、輝いた斑點のある皮膚をした二つの大きな生きた蛇が巻きついて居る、その巻いて居るところに火の點々がある、血に染まつた柄にちりばめた碧玉（エメラルド）、黄玉（トーパズ）、及び紅玉（ルビー）の反映がある。その時アクリスの息である七八の青年が、シビリ・バガラッグに云つた、……『劍の柄をつかめ』

今、彼は劍と、それから出て居る波狀の紫の熱い光と、二つの相纏うて居る毒蛇と、その大きさと、その重さを見た、それを上げて見ようとする事は彼にとつては狂氣じみて見えた。しかし彼はその思をかくして、……太膽にそこへ進んで、右の手を蛇の絡（から）んだ間へつきさして、寶玉の飾りのある柄（つか）をつかんだ。たしかに、劍は巨人が動かしたやうに、つり革から動いた。しかし彼を驚かした事はその不思議な刃であつた、何故なればその鋭さは何物もこれに抵抗する物はなかつた、何物をも貫いて通つた、私共が靜かな水を通りぬけるやうに――石の柱も、壁にある花崗岩も、土の壁も、彼の足もとの厚い固い地面も、貫いて通る程であつたからである。彼等は彼は命じて劍に云はせた、『眠れ』そこでそれは腰につけるナイフ程になつた。それと同様、彼等に彼に蛇の頭に向つて『シッ、起きよ』と云はせた、するとそれを眞直にもつて居ると見る見るそれが長く延びた。

實際もし所有者が願へば、數千哩離れた敵を殺すため、世界を超えてそれが延びるのである。この不思議な劍で、たうとうシャグバットが剃られるのである。しかしこの事業を助けて居る數千の善魔の力と、綺麗なスールナの善い魔術があつても、この髮剃りは中々困難であつた。それを敍述せる章は最後の審判の日の敍述のやうに立派である、そして諸君はその見事な事に驚くであらう。

これは全體何の意味だらうと諸君は當然尋ねるだらう。魔法の毛とは何だらう。劍は何だらう。このロマンスに述べてある凡ての不可能な物は何だらう。事實作者自ら私共に手がかりを與へて居る、それだから、その意味は餘程以前にはつきり認められた答である。話の終りに、つぎの言葉で書かれた手がかりがある——

アッリスの息達は何年かの時期の間劍を研ぐ事を止めて、花の咲いて居る地の美はしい表面を樂しくさまようて、そのばらの花が咲いたり、そこに居る花嫁を求めたりする事ができた、何故なればもう人類の世界では一事件の解決は或時期の間續く、それから後は又人類を愚にするやうな新しい謎達が起つて來る、そしてこの七人は又新たなる解決のために、劍の刃を鋭くしようとして殘りの何年かの時期を費さねばならないから。

しかしこれだけの解釋が話の全部を説明して居ると想像してはならない、諸君は實際の人間の性質にその非常に多くの事件を適用してある事をさとるために、度々讀んでよくよく考へねばならない。

バガラッグが始めて、知らないで、シャグバットの髭を剃らうと申込む時には、彼は自分に對してどんな力が抵抗して居るか少しも知らない。彼の望みは少しもまちがつてゐない、かへつてそれだけでは全く正しい。しかし社會狀態の一方に於て全く正しい事も、他の狀態では全くまちがつて居るやうに見える事もある。それで氣の毒にも彼は全國民が彼に反對して居る事、王が殊に彼を怒つて居る事、輿論は全部彼を非難して、その中に住む權利をさへ剝奪しようとする事を發見して驚く。バガラッグは事實、外の人々のためを熱心にはかつて居るのに、その親切なる願がかへつて政府の法律、宗教の激怒、それから輿論の凡ての偏見を挑發するやうになつた事を發見する哲學者、科學者、發見家ではないか。バガラッグは何物も改良する事を許されない改革者である――もし主張をまげないと死をもつて脅かされる。改革者は勇氣のある人でなければならない、そしてバガラッグには勇氣がある。しかし勇氣だけでは、哲學者、改革者、新しい倫理その他の眞理を人類に告げ

ようと云ふ人には、不足である。勇氣よりももつと要る物は——力である。どうして力が來るか。諸君は、バガラッグにキスを願つて、彼のキスによつて若く、そして神々しく綺麗になつた恐るべき老婆の事を記憶してゐよう。私共はヌールナは實際科學を代表して居ると想像してもよい。科學研究は始めは非常に醜に、非常に困難に、非常に不快に見える、しかし若し諸君がそれを征服する勇氣と能力があれば、バガラッグが老婆にキスしたやうにもし勇敢にキスすれば、それはこの上もなく愉快な愛人となつてくれる、それだけではない——それは諸君のために、不思議な力と強さを與へてくれる。それは諸君のためにアクリスの劍をさへ見出してくれる。

　ところで或題目は文藝の威嚴を損すると思はれて居る、この異常なる書物のうちの或題目は、天才の人が專心書く物としては餘りに些細に見えるかも知れない。理髪師を主人公とするのは少しも藝術的ではない、理髪師、漁師、水吸み、その外賤しい職業の人々を物語のうちの重なる人物とする事は、アラビヤの作者の方法と全く一致して居る。しかし話の全體の筋が一本の毛を切る事の困難と云ふ事にあつて、この一本の毛がその話でそんな大問題になつて居る事——これが諸君にとつて文藝の威嚴を損するやうに思はれるかも知れないが、それは、諸君がその書物を讀むまでの事。しかもその想像が描き出されて居

る方法は全くそんな些細であると云ふ非難を辯解して居る。毛の象徴は甚だよい。見たところ、一本の毛よりもつと無用でない物はあらうか。一本の毛程輕い、はかない、つまらない物は何だらう。ところで多くの改革者、教師にとつては彼等が退治したいと思ふ社會的道德的或は宗教的弊害は、一本の毛より價値もなく抵抗力もないやうに實際見えるのである。しかし或偉大なる科學者[譯註二]が數年前に云つた通り、何人も自分でそれを攻擊して見るまでは、まちがひの力、まちがひの强さ、偏見の力を會得する事はできない。その時突然一本の毛のやうに、弱く或はそれよりつまらなく見えた迷妄、虛僞は大地より空に達して四方八方に電氣を發散する恐ろしい物になる。歐洲近代史を讀んで、甚だ明白なる誤り、不公平、或は迷ひをさへ亡ぼすために、どれ程絕大なる努力が必要であつたかを見よ。或幾分の宗教上の自由を得んがために、幾百年の熱心なる努力を要した事を思ひ見よ。壹百年前に、魔法はあるものでない、迷であると云ふだけの勇氣のあつた人は自分の生命を危くした事を思ひ見よ。この道理の例證は幾千でも上げられる。保守的の國では、ただ發見や、ただ事實の現示や、論理や、或は又雄辯や、或は個人的勇氣によつてさへも、如何なる智力上の進歩もなしとげられない。發見は嘲けられる、事實は否定される、論理は攻擊される、雄辯は眞理でない反對側のさらに一段上の雄辯によつて答へられる、個人的勇氣

はそれに反抗するために召集された大勢の敵によつて、打破られないでも、鏖殺されるのである。教育上の、或はこの他の進歩は烈しい戰爭である、一生と云はず數代に渡つて。中世紀の教育制度は大なる效果を生ずるには不適當であると有識者に認められてから幾代經過したかを諸君はよく知つて居る。人は中世紀の迷信は少くとも十九世紀に到つてなくなつたらうと思ふかも知れない。しかし大概の英語國の大學では、今日でも、中世紀の教育機關が多く存在して今後百年以内にはそれを除き去る見込は殆んどないのは全く事實である。もし諸君がそれ等の大學の賢い人々に、教育上の進歩の邪魔になるに過ぎない或種の學問、或種類の演習を保存して置くのは何のためかと問ふたら、彼等は正直に、それは何の役にも立たないが、その改良を企てる事に伴ふ困難のある事を何か諸君に答へるであらう、そして諸君はその困難の廣さ大きさを聞いて驚くであらう。

そこで諸君に私共の研究に於けるただ一本の毛は、恐らく外のもつと重大な物よりも、よく社會的迷妄、大きな一般の誤りを實際に表はして居る事を會得するであらう。その誤りなる物は如何にも甚しく馬鹿らしい物で、苟くも正氣の人なら信ずる事のできない物と思はれるが、それでも諸君と同じく聰明な、恐らく一段と聰明な人が、それを尊敬して居るのである。彼等はそれに敬意を表して居るのは、ただ彼等はそれを亡ぼすために如何に

絕大な力が要るかを、諸君よりはよく知つて居るからである。それは諸君には一息で永久に吹き飛ばす事のできる輕い物、或は、一寸觸れたらすぐに折れたかも分らない程の物と思はれる。象が蠅の居る事を知らずに踏み潰すやうに、智慧がそれを亡ぼす事を諸君は考へる。しかしこの誤り、この迷の薄膜に對して諸君の力を出して見ると、諸君は自分の手て山を動かさうとして居るのと同じ事である事が分るであらう。諸君は助けを得なければならない、アクリスの劔を與へてくれる友人を得る必要がある。その大きな劔をもつてゐても、その毛を切る事は中々容易な事ではない。

それからあと、どうなる。前に起つた事と全く同じ事。人は世界が自分等の時代に一歩進んだから、凡ての迷妄はやがてなくなると考へる。これは人間の陷る最大の社會的誤謬の一つである。誤謬の大海は、そこからぬけ出す事のできる力のある物のあとに再び閉ぢてしまう。前と全く同じである。一つの迷妄が結局亡ぼされるが、又つぎの迷妄が直ちにそのあとにできる。智慧の世界に達するには、人類の社會も個々の人間も現在よりも遙かにもつと完全にならなければ達せられないと云ふのが本當の眞理である、そしてこんな完全な狀態は少くとももう百萬年もたたないでは中々達せられないだらう。

これがこの不思議な物語に象徵された重なる眞理である。しかし諸君が「シャグバット

の剃髭」を讀んで居る間に道德的敎訓は少しも顧慮しなくてもよい。讀んだあとで考へる方がよい。實は、私が想像するに、話が面白いので、終りまで外の事を考へて居られないだらう。そして、もう少し長ければと諸君は殘念に思ふだらう。

譯者註　Thomas Huxley（1825–1895）英國の生物學者の言。

ロセッティの散文について

今私共は外の時間でロセッティの詩を研究して居るから、彼の散文の價値について多少論議する事は諸君にとつて興味があらう——そのわけは、この散文は未だ一般民衆には殆んど知られてゐない物であるから。ロセッティの屬して居る繪畫の一派では、彼は最も偉大なる畫家であつた、ヴィクトリヤ朝の詩人のうちでは、彼は最も美妙な詩人であつた、もし本氣になつて散文の方へ向へば、彼は又その世紀の最大の散文家の一人となれたかも知れない。しかし不健康その他の事情は、彼をしてこの方面に多く力を注がせなかつた。私は彼の批評文の事を云つて居るのではない。これは大した物ではない。私はただ彼の小說の事を云つて居るのである、彼の小說は、彼の詩を著名ならしめて居るのと同じ種類の價値があるのである。彼の小說はポーの小說と比べられる、しかし又全然違つて居る、凡てラティンの小說と英國との間にある程の區別がある。しかしポーを除いては、苟くもロ

セッティと同種類に見らるべき作者は外にない。それは怪談である――一つは斷片で、一つは完全である。二つしかない――それから第三のが梗概である。斷片は斷片でも、――詩人自らの『花嫁の前奏曲(プレリュード)』或はコルリッヂの『クリスタベル』或はポーの『沈默』のやうに――やはり注目に値する物である。凡て偉大なる斷片にとつて困る事は、それからその斷片の偉大なる點は、本當の結末はどうなるのであつたらうか私共に想像ができないところにある、そしてこの謎はかへつて想像上の效果を增すのである。この二つの相續いた話のうちで價値の大きいのは斷片の方である。

『手と魂』と題する第一の話は、話としての興味の外に、別の興味がある。それには、ロセッティ派の繪畫の美學的信條全部――研究に値する美術の小哲學――がある。私が特にそれについて話したいわけはそれである。所謂英國繪畫のラファエル前派は――ロセッティはその首領と認められて居るのだが――全然ラスキンの弟子ではなかつた。彼等は、美術は大美術となるためには、宗教的衝動がなければならないとは信じなかつた、彼等は『美術のための美術』說と反對の說に贊成もしなかつた。彼等は美に對する各自の概念が絕對に眞面目である事、及び凡ての美學上の觀念を導く許容する事、が公平な眞理である、これを遠慮なく受け入れる事が必要であると考へた。彼等はどんな美術の流派をも嫌はな

かつた、彼等は事實彼等の小さい範圍から偏見を放逐した。私は附加して云ふが、ロンドンで日本美術の敵が澤山ゐた時、そしてあの偉大なるラスキンまでが、それに對する偏見を助長しようと努めた時に、彼等は日本美術に冷淡ではなかつた。丁度その時にロセッティは日本美術を集めてゐた、そしてバーン・ヂョーンズその外の人々はこの東洋の美術の助けによつて新方法を發見してゐた。

さてこの『手と魂』の話は、小規模に於て、人間の繪畫に對する經驗の歴史になつて居る。或本當の繪の歴史である事にしてある。その繪はただ、うす緑りの着物を着た非常に綺麗な女の姿である。しかし誰でもその繪を一二分間見て居ると、突然恐ろしくなる――丁度幽靈を見て居るやうに恐ろしくなる。この繪は想像から描かれたのではあるまい、その姿を誰か見たに相違はない、そしてそれは生きて居る女であるわけはない。その繪の本當の話はどう云ふのだらう。畫家は幽靈を見たのだらうか、何か超自然的の物を見たのだらうか。

この色々の質問に對する返事はつぎの話である。四百年前にこの繪を描いた美術家は非常な天才の伊太利人であつた、自分の藝術に熱中して、何の餘念もなかつた。最初はその當時の大畫家とならうとばかり考へたが、それは無造作になれた。彼は自分で美と感じた

物をだけ描いた、そして彼は往來を通つて行く美しい顔、窓から見た美しい日沒、それから心に浮んで來た美しい想像を描いた。彼の繪を好まない者はなかつた、そして王公達は彼に金を澤山與へた。

それからこの畫家は突然後悔の念に打たれた、この畫家は本來宗教心の篤い人であつた。彼は考へた、『神は私に美しい物を描く力を與へて下さつた、それに私はただ人間の感覺を喜ばせるやうな美しさの物をばかり描いてゐた。それは私のまちがひであつた。これからは永久の眞理を表はす物、天の物ばかりを描く事にする』

それ以來彼はただ宗教的神祕的の繪、それから普通の人に少しも理解のできないやうな繪ばかり描き始めた。もう人は彼の繪を眞心しに來なくなつた、王侯はもう彼に名譽を授けたり、物を與へたりしなくなつた、そして彼はこの世で忘れられたやうになつた。

その上、彼は畫家としての使價がなくなつて來た事を感じた。それから不幸の上塗りをするやうに、彼の最も名高い繪の何枚かは、寺騷動と云ふ異常な事件のために、或日破壞された、それは長い間反目してゐた伊太利の二つの大きな氏族が或寺院の玄關で偶然出遇つて、なぐり合ひから、斬り合ひになつて――大變な流血を見る事になつたために、戰つた人々の血が壁の繪にかかつたのであつた。

こんな事があつたので、畫家は絶望した。彼は世の中がいやになつた、そして自殺する事を考へた。ところが、こんな事を考へて居ると、そこへ突然彼の部屋へ、何の音を立てないで、うす緑りの着物を着た女の姿が、入つて來た、そして彼女は彼の前に立つて、彼の眼を見た。そして彼女が彼の眼を見ると、彼はこれまで覺えた事のないやうな物すごさに襲はれた、そしてその物すごさと共に悲しさの大きな感情が來た。しかし彼は叫びたいが、聲も出せない夢の中の人のやうに、物を云ふ事ができなかつた。しかし女は口を開いて彼に云つた、『私はあなたの魂です——その魂にあなたはこれまで澤山の害を加へました。それで私はこの姿で、あなたのところへ來る事を許されたわけは、あなたはただ金儲けのために繪を描くやうな人ではなかつたからです。しかし、名譽を得るためにはあなたは少しも躊躇しませんでした、それは全く惡くもないが、よくもなかつた。もつと惡い事は、あなたが私から離れて行つたあの自負心——宗教的自負心です。あなたは、神樣があなたに命じない事——あなた自身の心に反した事をして、あなたのもつてゐた美を愛する念を捨てようと思つた。私の中に、神樣は世界の愛すべき物の祝福と愛すべき物の欲求とを置いた。何故に、それなら、あなたは神樣の仕事に反對しようとするのですか。それからどんな自負心があつて、神樣が、あなたの力を藉りて善なる物を人に教へようとなさる

のだと想像するやうになつたのですか。いつ神樣はあなたに「友よ、我をして汝によらしめよ　然らざれば我は倒れん」と仰せになつたのですか。否、この美しい世界にある美しい物を見出して、それを愛するやうに人に敎へてこそ、あなたは、彼等の心をもつとよくする事ができるのです――彼等の分りもしない寓話を說敎したのでは役に立ちません、そんな事をしたので、罰が當つたのです。あなた自身の魂であるこの私に、忠實でおありなさい、さうすればあなたは驚くべき事ができます。さあ、私の繪をそのまま、お描きなさい、さうすれば美術の力があなたに歸つた事が分りませう」

そこで畫工は、うす綠りの着物を着た女の肖像で、彼自身の魂の繪を描いた、そしてその繪を見る人は皆、今日でも大きな恐怖と大きな愛着とを同時に感じて、どうして人間にこんな繪が描けたらうか理解に苦しむのである

これが『手と魂』の話である、そしてそれには澤山の永久の眞理がある。たしかに、凡ての美術上の偉大なる域に達するには誠實（シンセリティー）の道によらねばならない――何が美であるかに關する自分の本當の情緒的感じに忠實でなければならない。美術家や詩人が、富や名譽を得たさに、或は宗敎的の躊躇から、不誠實になるに應じて、丁度その割合で、彼は失敗するにきまつて居る。私は物語のほんの筋書だけを述べた、もつと詳しく云へば、それを

讀む方の興味を殺ぐ事にならう。

第二の話は第一の話程創造的に見えないかも知れないが、それでも英國人の眼には多分もつと奇異に感ぜられるだらう。それは前生(プレエキジステンス)の話である ところで甚だ不思議な事には、ロセッティが、散文にも、詩の多くの章句にも、表はして居るこの前生の觀念は、東洋の源流から來て居るのでは少しもない。彼は何等東洋文學に頓着した事はない、そして恐らく讀んだ事はなかつた。生れかはる事及び前生の記憶に關する彼の觀念は、外の物から來てゐないで、むしろ中世紀文學の或不思議に想像的な著書によつて居るのである。彼自身にもその觀念は、珍らしい——口に出して云ふ事も危險な物に見えた。諸君がこの事を理解しないと、『仲裁の聖アグチス』の中に流れて居る奇態な恐怖の動悸を説明する事ができないだらう。作者は彼自身の思想を恐れて居るかのやうな書き方をして居る。

話は少し自傳で始まつて居る、ロセッティは冬の夕、父の膝の上で遊んだ時の、子供としての感想を語る。勿論この記憶は彼自身の物としてではなく、その話をして居る畫工の記憶として現れて居る。子供としてはこの畫工は、繪本を非常に好いてゐた。そのうちに聖徒——セント・アグチス——の繪のある繪本が一冊あつた、それが氣に入つて何時間でも喜んで、それを眺めてゐた。しかし彼は何故だか、分らなかつた。彼は生長して、教育

を受けて、大人になつて畫工になつた、そしてやはり子供の時に彼を喜ばせた繪の魅力を忘れる事ができなかつた。或日彼の妹の友人の若い英國の娘が訪問に來た。彼は彼女を見て非常に驚く、そのわけは彼女の顏は繪本にある聖徒の顏と全く同じだから。彼は彼女を愛する、それから二人は結婚する事にきまる。しかしその前に彼は彼女の肖像畫を描く、そしてその肖像畫が彼のこれまでの作のうちで最もよい作であつたので、彼はそれを展覽會に出すためにロイヤル・アカデミーへ送る。批評家は非常にそれを賞讃する、しかしそのうちの一人は伊太利のボロニヤに、それと非常によく似たセント・アグネスの繪があると云ひ出す。そこで彼はその繪を見に伊太利へ行つて、非常に困難したあとでそれを發見する。それは四百年程以前にゐたアンヂオリエリと云ふ人の作であると云はれる。その顏の詳細なところまで、彼がロンドンで描いたその生きた顏と全く少しのちがひもない事が分る。この發見で非常に驚いて、彼は人目で買つた繪のカタログを見てアンヂオリエリがセント・アグネスを描いたそのモデルについて何か云つてないか見ようとする。モデルについては何等知るべき手がかりはなかつたが、その建物の別のところにアンヂオリエリの自畫像のある事を發見する。諸君は、有名なる畫家は全く自畫像を描いて居る事を知つて居るだらう。非常に興味を感じて、彼はその繪のかかつて居るところへ急ぐ、そして驚い

る事を發見する。それでは、四百年前に、彼自らがアンヂオリエリで、そしてセント・アグ子スのその繪を描いたと云ふ事はあり得べき事であつたらうか。

伊太利に餘りありふれた熱病の一つに彼はかかる。未だその熱のとれないうちに彼は夢を見る。彼は或繪畫館に居る、壁にアンヂオリエリの繪のかかつて居るのを見る、そして大勢がそれを見て居る。その群集のうちに、彼は彼の約束の女が外の人の腕によりかかつて居るのを見る。その時彼は怒つて嫉妬を感じて、その知らない人の肩をたたいて云ふ、『君、その婦人は私の許嫁になつて居るのだ』さうするとその人はふり向く、ふり向くと、その顏はアンヂオリエリの顏で、彼の着物は四百年前の着物である、そして、彼は云ふ、『君、この婦人は私の物ではないが――君の物でもない』さう云ふと共に、彼の顏は、死人の顏のやうに落ち込んで、髑髏の顏になる。この夢から私共はその著者が考へた結末を推量する事ができる。

英國に歸つて、畫工が自分の見たり聞いたりした事を話さうとすると、彼の家族は彼を狂人と考へて、もうその問題について語る事を禁じた。それから又その事を約束の女に話したら、この緣談が破れると警められた。それで、彼はその警めに從つて居るが、彼は甚

だ不幸な地位に置かれて居る、彼の周圍に、二つの生命のもつれ合の秘密が壓迫を加へて居る、そして彼はそれを解く事を試みる事さへできない――最も直接に關係して居る人にさへ、その事について話すわけに行かない。……そしてこの斷片がここできれて居る。

たとへこの賞嘆すべき話が完全に終りまであつたとしても、この突然の中止よりも、一層讀者に深い印象を與へるやうにできたとは思はれない。ロセッティはその許嫁の女をも不可思議な運命の犧牲にしようと考へた、しかし彼はその理由を詳しく明示しようとは考へなかつたらしい事が分る。實際それはこの話の朦朧たる美點を打毀したであらう。物の原因がぼんやり神祕的になつて居る間は、不可思議と云ふ愉快な恐怖心が讀者に殘る。しかし話者が一切の物を說明すると、そのまぼろしが直ちに消散して、美感が亡んでしまう。この未完の物語で、ロセッティは古いロマンスが今でも何の役に立つかと云ふ點に關して甚だよい暗示を與へて居ると私は思ふ。彼が詩と散文の兩方で不眞實のうちの眞實と云ふ美妙なる長所をつくり出す事のできたのは古いロマンスの研究と、藝術に關する彼の大きな知識と相待つたからであつた。彼の散文を讀んでも詩を讀んでも、諸君はこれは全然不可能な事だと承知してゐながら、實際それを見たり、觸れたり、感知したりして居るやうな思ひをする。どんなロマンスの技術もこれより高くはなれない。それから前の話にあつ

た肖像畫の靈魂の女の話から、ティンの『悟性について』と云ふ名高い書物に丁度適切な例のあるのを私は想ひ出す。事實或フランスの美術家がつぎのやうな珍らしい幻覺をもつた事が記錄してある、

彼は、多分過勞から病氣になつた、そして不安な眠りのあとで眼を開けると、寢臺の脇に蒲團に手をかけて立つて居る綺麗な婦人を見た、そこで彼はひとり言を云つた、『これはたしかに自分の神經から起つた錯覺だ。しかしなんと美しい錯覺だらう。それからなんと不思議に輝いたそして優しい手だらう、もし自分が手をやつて見たら、どうなるだらう。多分皆一時に消散してしまうだらう、そして喜んで見て居る事もできなくなるだらう』

不意にこの考の返事のやうに、鳥の聲程すみ渡つた聲が彼に云つた、『私は影ぢやありません、もしお望みなら手を取つてキスなさつても宜しい』彼はその婦人の手を取つて、それを唇のところまであげて、それに觸れた、それから彼女と話をした。その話は病人の世話をして居る醫師が入つて來て妨げられるまで續いた。これは二重の意識の珍らしい例の記錄である——錯覺と理性は調和して働いて居るので兩方ともお互に少しの邪魔もしてゐないのであつた。ロセッティの人物も中世時代のも現代のも、二重の意識の結果のやうにやはり見える。彼等は幽靈ではあるが、私共は彼等に觸れ彼等を感知する事ができる。

前に云つた通り、もし健康であつて、その方へ注意を向けたら、最大の浪漫的小說家の一人となつたかも知れない。その最もよい證據は、彼がそれを結局暇がなくて開展するに到らなかつたいくつかの小說の筋書が印刷されて居る事である。彼は重に古いフランス及び古い伊太利の詩人の研究から、材料を集めた、しかしその材料が彼の想像の坩堝に投ぜられると、全然新しい不思議な形になつた。私は終りに臨んで、一つの話の筋を諸君に話す、それは美しい思ひつきだが、作者の生前にでき上らなかつた事は甚だ殘念である。

或日、或王と彼の氣に入りの侍が、森の中で狩りをして居る間に、非常に渴いたので、若い木こりか、何かそんな種類の人の家を訪れて、水を貰つた。水を汲んでくれたのは、若い女であつたが、王も侍も非常に驚いた程、非常に綺麗であつた。侍はその乙女が好きになつて、あとで彼女に求婚する事の許可を王から得ようとする。ところで彼が彼女に求婚しようとすると、彼はその乙女が、王とは知らないで、王を戀して居る事を發見する。彼女はその人に結婚ができなければ何人の妻にもならないと云ふ。王は云ふ、「私は結婚はできない、もう結婚して居るから。しかしあなたを非常に愛して居るこの私の友人は未だ獨り者である、それでもしあなたがこの人と結婚すれば、私は彼を男爵にして、澤山の城を與へる」

若い女は王の氣に入るやうに、侍と結婚する事を承諾する、王の宮殿で立派な結婚式が行はれる、それから侍は大きな貴族となつて、澤山の富んだ領地を與へられる。それから王は花嫁とこんな約束をする、『私はあなたを訪ひもしない、又あなたが私を訪ねに來る事も許さない、そのわけは私達はお互に餘り愛し合つて居るから。しかし毎年一度づつ、私があなたの夫と森の中へ狩りに行く時、丁度始めて私達があなたに遇つた時と同じやうに、水を一杯私にもつて來て下さい』

それからさき、王は彼女に三度遇つた、――卽ち三年續いて彼女は、王が狩りに出かけた時、水のコップをもつて王に挨拶したのであつた。四年目に小さい娘をあとに殘して、彼女は死んだ。

悲嘆にくれた夫は大事に小さい娘を育てた――或は、少くとも大事にして彼女を育てさせた、しかし彼は決して彼女を王に紹介もしなければ、彼女の事を王に云つた事もなかつた、その理由は、その母の死が二人のどちらにとつても、餘りに痛ましい事で口には出せないからであつた。

しかし少女が十六歲になつた時、彼女は餘りに母にそつくりなので、父はその似やうに驚いた程であつた。そして彼は考へた、『明日彼女を王に紹介する事にしよう』それから

娘に向つて、彼は云つた、「明日私は王と狩りに出かける。歸り道に、森の中の小さい小屋――あのお前の母樣が昔し住んでお出でになつたあの小さい小屋――で少し停ります。お前はその小屋に待つてゐて、王樣がお出でになつたら、丁度お前の母樣がなさつたやうに、水を一杯持つてお出でなさい」

そこで翌日、王と男爵が狩りのあとで小屋に近づいた、そして王は水のコップをさし出す少女の出現のために驚き、又感動した――それ程不思議に、殆んど二十年前に、同じ場所で見た少女に彼女は似てゐた。それから彼が彼女の手からコップを取る時に、彼の心は彼女の方へ行つた、それで彼の伴に尋ねた、「これは全く彼女の靈だらうか、――それとも又別の愛すべき幻だらうか」しかしその伴が返事をしないうちに――見よ、別の影が王と少女の間に立つた、そしてどちらがどちらだと云ふ事は誰にもできなかつた、それ程銘々の美しい顔が互によく似てゐた――ただ第二の幻は農婦の着物を着てゐた。それから農婦の着物を着てゐた彼女は、王が馬に跨つた時、彼にキスして、見えなくなつた。そして王は、そのキスを受けて返す時、前に倒れて死んだ。

これは誰か取つて開展するには、全く漠とした、面白いロマンスである。勿論農婦の着物の姿は、その少女の母の幽靈である。古い日本の話の本に、多少これに類する美しい話

が澤山あるが、全く同じではない、私はかう云ふ物の文學的價値の分る人に、ロセッティの筋書きから日本語に直した物を作つて見る事を勸めて見たい、勿論變へねばならないところはある、しかし少〻變へても全體としての話の美は少しも影響を受けない。

最後に私は云ふが、この小さい講義の目的は、ロセッティの散文に對して諸君の興味を惹かうとしたばかりでなく、又ロマンスと云ふ問題全體に對して諸君の興味を喚起しようとするのであつた、世の中が如何に博學になり又科學的になつても、ロマンスは決して死なぬ事を覺えてゐて貰ひたい。日本文學にある浪漫的要素を輕んずる程、日本學生に取つて大きな誤りはない。古い世紀のロマンスの改造復活によつて、後の文學の發達に資する事の非常に多い事を私はこの頃殆んどいつも考へて居る。多くの若い作者は、全然新しい物を書く事の可能なる事を重に考へて居ると私は信ずる。これは大なる文學上の不幸である、その理由は、全然新しい物を書く事は人間には殆んど不可能だからである。西洋の最も偉大なる作者は、新しい物を書く事を試みて偉大になつたのではなく、古い物を遙かによい方法で書き直して偉大になつたのである。ロセッティやテニスンや、その外多數の人人は、一千年前の文學に歸つて、それを再生させる事だけて、世の中を豐富にしたのであつた。凡て外の物と同じく、よい話でも死ぬにきまつて居る、それが又數百囘生れ變つて

この上もない美の可能性のある事を示すのである。凡ての文學史は再生の話である――死と安らかなる忘却の時期が復活と活動の時期と互に代る話である。純文學の領分では、何人も題目のない事で決して困る必要はない。長い間死んでゐた物をさがして、その體に新しい魂を與へさへすればよい。ロマンスでは、或題目が非科學的だからと云つて賤しめようとする事は愚かである。科學はロマンスや詩を豐富にするだらうが、何の關係もない。ロマンスや詩は情緒の花である、私共がそれに對してなし得る事は、丁度ばらの花や菊の花が養成されるやうに、それを植ゑかへて養成する事だけである。もとの野生の花は甚だ簡單である、しかし巧みな園藝家は、その簡單なる花を養成して、もとは一重であつた花を十重にも咲くやうな驚くべき複雑な物に仕立てる事ができる。さてこの同じ園藝上の功程は、日本のよい話や詩や脚本に對して、外の國でなされたと同じく、なし得られるのである。浪漫的な物は、純粹なる技術の方面を除けば、新しい學問からは何の得るところもない、新しい學問は言葉を豐富にし、想像を廣くして昔の美を新しいそして遙かに美しい方法で、表はす事を得させる。テニスンを例に引かう。「アーサーの死」と題する驚くべき詩の二三百行と、昔、十二三世紀の時代の同じ神秘的な事件の觀念との相違は何であらう。兩方共、事實には變りはない。しかし言語と想像は、ヴィクトリア朝詩人の場合に、

一千倍も、もつと強く、もつとはつきりして居る。實際美文に於ける進歩は、古い物をつぎの時代の想像に一致させる事で、殆んど全部、なしとげられるのである、そして詩は、人間のやうに——その人間の情緒的精神を代表するのが、詩であるが——世の中が又、變るにつれて、その着物と着物の色とを變へねばならない。

英國現代の評論界に就て、並に現代に於ける英文學對佛文學の關係に就て

文學を愛する學生にとつて、文學評論の諸大家に關して詳しく通曉するのは、極めて重要なことである。何故なら、彼等のみが彼の種々文學上の判斷に於ける指導者となり、彼に教へるのに長所を識別分類することを以てし、結局、彼をして獨自の見解を以て文學的價値を定めることを得させるからである。評論家にも色々ある。彼等のうちには、無益どころか、有害なのも夥しい。卓拔偉大な評論家のみが、知るに値する人々である。即ち我我が躊躇なくその判斷に服從しうるやうな少數の評論家である。かやうな人々を我らが擧げないでは、いかなる文學講義の課程も完全たることを得ない。だから、私は今日諸君に向つて、英國に於ける現存の最も優秀なる英文學評論家に就て語らねばならない。英文學に關する佛國の立派な評論家もあるが、それは暫く論じなくてもよろしい。注意すべき題

著な事實は、佛國に於ける佛文學の偉大なる評論家の數に比較して、實際いかにも英文學の偉大なる評論家の少數なことである。前者は幾打とかぞへることができる。文學のこの部門に於ては、佛蘭西人は最上の優秀に達し、輕快熟練の至境に到つてゐる。しかし翻つて今日英國に於ける大文學評論家を指摘する場合には、私はただ三人の名を擧げうるに過ぎない。私が語らうと思ふのは、その三人についてである。

これらの三人は、エディンバラ大學の英文學教授、ヂョージ・セーンツベリーと、劍橋大學の英文學教授、エドマンド・ゴッスと、それから、ダブリン大學の英文學教授、エドワァード・ダウドンである。これらは群を拔いた人々である。これらに加ふるに、幾分躊躇し乍ら、しかしただ第二流乃至第三流の資格に於て、ストパァド・ブルックの名を以てすることができるだらう。英文學入門並にアングロ・サクスン文學史の著者として、諸君は彼の名を知つてゐるでせう。しかし我々は今ただ他の三人の著作についてのみ論ぜねばならない。

これら三人の著作に就て觀察すべき第一の事實は、それが佛蘭西文學の研究によつて、大いに影響を蒙り、指導を受け、また色彩を與へられた點である。ここに擧げた三教授は、各自英文學と同樣、佛文學に關しても立派な權威である。して、その中二人は、佛文學の

歴史を著はしてゐる。英語で書いた最上の佛文學書は、セーンツベリーの「佛蘭西文學小史」である。それは書名が示すほど小さなものではない。それには「佛蘭西文學資料」と題する姉妹篇があつて、兩書は併せて讀むべきである。一方言へば、ダウドン教授は、近代佛蘭文學に關する一冊の好著を我々に與へてゐる。ゴッス氏について申せば、彼の最もすぐれた批評的論文は、大部分佛文學の題材を取扱つて、毎頁の上に佛文學研究の結果を見せてゐる。私の信ずる處によれば、これら三人は恐く、更に進んでまた他の外國文學の研究家である。ゴッス氏はスカンディネーヴィア學者だ。セーンツベリー氏はアングロ・サクスン語とプロヴァンス語を知つてゐる。近代文學の學者たると共に、また立派な古典學者たるゴッス氏は、詩の創作にも熱中し、且つ多くの國語に於ける詩形の研究に忙しい。またダウドン教授は詩人セレーの傳記家として有名である――彼はその詩人傳によつて、マシウ・アーノルドをして頗る有名なる一論文を書くに至らしめた。私は諸君がそのことを知つてゐると思ふ。三人の中で、評論以外に何等の創作を企てないのは、セーンツベリー氏だけである。恐らくはその理由からして、彼が最も有力な評論家であらう。彼はあらゆる材能を一方面に集中してゐるのだ。我々がこれらの人々の學識を考へて見ると、彼等の研究力に對して驚嘆せざるを得ない。ただ一つの文學を習得するさへ、尋常人に取つて、

一生涯の事業である。しかも希臘及び羅馬の古典文學に加ふるに、更に二つ乃至三つの文學を、すべて合せて、五つの文學を會得するといふことは、すばらしい功績である。それはかのギッボン（原著註一）の偉大なる讀書力と、彼の讀んだものを消化する力とを、幾分我々をして思ひださせる。しかしギッボンは富裕な人で、ただ自身を娛しませる以外、何もする事をもたなかつた。現英の三大評論家は比較的貧乏で、生活のために教授をせねばならない。

三人の中、文體の最大妙味は、ゴッス氏によつて發揮されてゐる。この講義の進行中、私は氏が如何に優美に書きうるかを諸君に知らせるため、數節を引用するかも知れない。この優美は主として佛國の名文の最も用意周到なる研究によつて學ばれたのである。ダウドン氏は、往々ゴッス氏の壘を摩する場合もある。蓋然最も慧敏な評論家たるセーンツベリー氏は、必らずしも最も優れたる文體家ではない。彼は妙筆人を驚かすことを得るが、時としては殆ど粗忽に陷る場合もある。彼はいつも思想を表現するといふことを、その表現の形式如何について注意するよりも、一層重要と考へてゐるものと、私は想像する。しかし、それにしても、英佛兩文學に於ける彼の著作の驚くべき分量――佛蘭西文學史、イリーザベス朝文學史、十九世紀英文學史、それから數卷の論文と、彼によつて刊行された幾多の古書――を考へてみるがよい。彼は五人乃至六人の仕事を成就してゐる。だから、

もし彼が文體の上に一層の注意を拂つたならば、我々は彼の豐富な知識から受くべき稗益を幾分餘計得られたに相違ない。

これら三人の評論家の説に關しては、いづれの評論家の説であらうとも、『彼等の判斷に從へ』と、私は讀者に云はざるを得ない。もし偶然或る一つの場合に於て、彼等の中或る一人が、正鵠を失してゐることがあつても、彼は恐らく他の九十九の場合に於て當を得てゐるであらう。いかなる人も文學上の判斷に於て、絶對無謬たることはできない。文學上の判斷に於て絶對無謬に最も近い到達は、これら三人の同族たる評論家の、堂々巨像の如き著述に於て見ることができる。その人こそ古來最大の評論家である。それは英人でなく、佛人であつて、聽くべしサント・ブゥヴ其人だ。私は彼が英人でないと云つたが、彼の母は英人の系統であつたと附言することを、私は忘れてはならない。彼は一八〇四年に生まれ、一八六九年に歿した。だから、彼は或る近代の人物である。實際、評論の最高藝術を創造したのは彼であつた。して、彼の影響は現世紀の後期間、評論の方法を全然變化せしめた。彼は一八二〇年から一八三〇年の間に於ける、佛國の大浪漫的運動の評論家であつた。我々が今日英國に於てセーンツベリー、ダウドン、ゴッスの如き立派な評論家を有するのは、サント・ブゥヴが彼等に教へるのに、如何にして評論家たるべきかを以てしたか

らである。私は彼等が彼を眞似たのだと、諸君に告げようと欲してゐるのではない。實際彼等の中誰も、サント・ブゥヴの評論法式が、一切の事物に亘つて悉く踏襲されねばならぬといふことに對して承諾を表はすものはないだらう。しかし彼等が英國の新しい評論法式を作つたのは、彼の法式を研究することによつてであつた。

我々は今、評論一般について——評論とは何を意味するか——數語を述べねばならぬ。できる限り最も簡單な言葉で現はせば、評論は或る書物の中に、よいものとよからぬものを發見して、それを記述する方法である。古風な評論、十八世紀及びそれより以前數世紀の評論は、評論といふ語の現代的意義に於ては、その內容甚だ貧弱なものであつた。題材は一定の方法で選擇され、一定の方法で秩序を附せられ、また一定の方法で書かれねばならぬといふのが規則であつた時代——單に文章の大體の構造に對してのみでなく、また文章の各部分の構造、及び文章中の一語一語の位置に對して、儼然犯すべからざる定則が存してゐた時代——かやうな時代に於ては、評論は非難をすることと、規矩準繩たること以外には、あまり意義を有たなかつた。もし題材が慣習的であり、用語が慣習的であり、形式が慣習的であれば、その作品はよかつた。これに反して、もし題材或は用語或は思想が、古い定則に從つてゐない場合は、その書物は賞讃に値しなかつた。十九世紀の初期に

は、一層高尚な形式の評論が現はれた。私がよほど以前、諸君に云つた如く、マコーレーは評論の一新派の建設者であつた。その評論は道徳的並に審美的思想に關して、また題材の包まれる全範圍に關して、著書の價値を分析することであつた。例へばマコーレーが伊太利の歴史を書いた一卷の書物を取上げるとする。彼は該書の内容を、伊太利歴史の全問題に關する彼自身の見解と比べて見るであらう。それから、彼は一般普通の道徳思想から見て、著者の見解を考察し、一般普通の美の標準から見て、著者の美の觀念を考察するであらう。これは從來行はれてゐたよりは、一層廣く、また一層よい評論の方法であつたが、また遠く完全の域に及ばなかつた。マコーレーは趣味と感情の上では、十八世紀の古典派に屬してゐた。彼の道徳、倫理、及び哲學的眞理の標準は、すべて舊風で、やゝ狹隘で、且つ就中、英國的であつた。さて、立派な評論といふものは、これが希臘的或はヘブライ的或はサンスクリツト式であつてはならぬと同樣に、また英國的或は佛蘭西風或は獨乙式であつてはならぬ。偉大なる評論は、すべての時代、すべての國、すべての境遇に於て、同一に眞實であらねばならない。何故となれば、最高の評論が關係するのは、ただ美と眞の問題——否、私は附加せねばならないが、永遠の美と永遠の眞——だけであるから。

こゝに詩に關する六囘講がある。我々は暫くの間、いかに極めて少數の人々が、美と

眞を他の一切のものから離して判斷し得るかを考へて見たい。狹隘な考へ方に養成された人は、全然美或は眞を認めることができないこともある。敬虔なる天主教徒は、彼の屬する宗教の中世的精神によつて書かれないものの中には、美を發見しないかも知れない。苟も中世紀の基督教の教訓に反してゐると考へらるゝものは、彼に嫌惡を滿たすであらう。また、一層狹隘な新教の信條に於ては、授けられる教育は、通常反審美的、反科學的であつて、作られる狹隘な心は、頗る頑固で、表現の獨立、或は感情に於ける獨創に對して、絶對に反抗的である。スペンサーの所謂、宗教的偏見たるものは、殆ど必然的に公平正當なる評論とは反對である。それから、また國と人種の強い偏見なる國家的感情がある。尋常の英人は、他國の住民を英人と同等のものと考へることが出來ない。して、彼に取つては、苟も外國のものの優秀を承認することが頗る困難である。さて、それは大概の國に於て同樣である。これらの偏見そのものには、功能もある。卽ちそれは健全なる民族的自尊心を維持して行く。しかし公平正當なる評論とは、全然背馳するものである。更にまた、社會的偏見がある。これは社會の上流階級に屬する人をして、下級社會に關する事物について、正當な考を有する事を得ざらしめる。猶ほまた習慣の偏見がある。して、此偏見は知識界の最上層にまでも及んでゐる。舊時代の人は、新時代の人が有する思想を受け入れ

ることを拒み、新人は老人を輕蔑する。現在生存してゐる人々の中に、新しい哲學よりも前時代の教育を受け、毫もそれについて知る處なく、それを嫌ひ、また隨つて現今の最も優秀なる文學を理解し得ないのが澤山ある。何故といふに、十八世紀の思想を有つた人は、進化哲學に基いて思索する人が書いた詩や、論文や、または思想的な物語さへも、恐らくは理解することができないからである。かやうな人々——その中には大學者も多い——は、言葉が讀めるから、理解し得たと自分では思つてゐても、言葉の背後に潜める思想については、彼等は少しもわかつてゐない。これは多くの例のただ一つに過ぎない。美と眞を判斷し得るためには、我々の心が、すべて私が述べつゝあつたやうな一切の影響から解放されねばならぬ——宗教的偏見から、無知の偏見から、國家的偏見から、人種の偏見から、社會的偏見から、階級の偏見から、哲學上の意見から、すべてこれらの偏見から脱却し得る人が、幾らあるだらうか。屹度極めて少數に相違ない。だから、また大評論家はいつも極めて少數に相違ない——特にすべての因襲慣例が、殆ど他のいかなる國に於けるよりも、一層洒濃なる生命を有してゐる英國に於ては。

さて、サント・ブゥヴの問題に戻つて行く。サント・ブゥヴは私が列擧した一切の偏見から脱却したのみでなく、また更にそれらのものを研究し、理解したことによつて、大評

論家となつたのである。彼は最も異常なる方法によつて、準備をした後に、始めて文學といふ廣大なる問題に向つた。彼は醫學を研究した。何故と云ふに、醫學は智力の啓發に對する最大科學の中では、さほど特別な材能なくても學び得らるゝ一つだからである。人間の智力と感情を理解するためには、我々は實際最初に人體に關して幾らか知らねばならない。して、この研究を選擇した上から云へば、サント・ブゥヴはやゝ進化派の心理學を豫想した譯である。該派の心理學は、神經系統の知識に根柢を置いてゐるのである。しかし彼は醫者にならうとは欲しなかつた。して、彼が自分の智力に滿足を與へ得るだけを學んでから、その修業をやめた。それから後、彼は信仰を理解するために、宗教を研究した。その次には、懐疑主義を理解するために、あらゆる形式の自由思想を研究した。問題また問題と、彼はかやうに取上げて、それが彼の目的に資する處あるまゝに、それを研鑽した。この種の一般的知識に於ける最も博學の一人となり、また恐らくは彼の時代に於ける最大博覧家となつてから、彼は評論家としての彼の進路に打つて出た——何等の僻見なく、偏執なく、狭隘なる制限なくて、あらゆる形式の美に對する寛宏博大なる愛を湛へ、また美を發見し、それを叙述する驚くべき天才を備へて。

無論、評論家となるのには、一切のものを讀み、一切のことを知つただけでは足りない。

異常な種類の直觀的及び知覺的の能力を、生れ乍ら有つてゐなければならぬ。一種の天才を有つてゐなければならぬ。丁度それは人間の性格を理會する困難のやうなものだ。諸君の中誰にも、氣がついてゐることでせうが、諸君の知人中、或る人々は、他の人々よりも遙かによく人物を理會する。彼等はその材能を有つて生まれたのだ。だから、諸君が知つてゐる他の人々は、いくら經驗があつても、同樣な判斷力を發揮することができない。さて、偉大な書物はどんなものかと考へて見なさい。私は偉大な書物の定義については、ヴヰクトル・ユーゴーの作つた定義に勝さるのは無いと考へる、――『書物は人物である』。して、諸君の中、昨年文體に關する私の講義を聽いた人達は、私がその時、文體は全く作家獨得の性格に過ぎないといつたことを記憶してゐるでせう。サント・ブゥヴは評論家としての彼の生涯に入つた時、この眞理を看破した。彼は或る書を理解するためには、卽ちその中にある善いものの理由、惡いものの理由、それが及ぼす影響の理由を理解するためには、我々はそれを書いた人を理會せねばならぬといふことを認めた。尋常の人物を理解するのは、なかなか困難である。況して非凡な人物を理解するのは更に難事である。一個の人物は、數百萬年の產物である。だから彼の深さは永遠な全部の暗い深さを帶びてゐる。心より深いものはなく、心ほど知るに難いものはない。前に述べた通り、心を研究し、眞

情を研究するには、その能力を生來有つてゐなければならぬ。しかもサント・ブッヴはこの能力を有つてゐた。

彼はその當時、誰人も未だ嘗て考へ及ばなかつた方法で、文學の研究を企てた。彼は先づ最初に著者の人物、すべてその生涯の詳細な事實、特性、習慣、經驗の研究から取掛つて行く。次に、彼はその人の屬した社會と時代に鑑みて、人物を考察する。どの位の程度まで、其人の性質はその時代の性質、その社會の感情、信仰、思想と一致してゐたかを發見しようと試みる。それから 彼は著者の感興の根源を考察する。ただ單に著者が讀んだ書籍を調べるばかりでなく、それらの書中にある思想の起原を尋ねて、十九世紀作家の思想を中世紀、或は希臘文明へ溯つたり、または東洋及び他の諸國から輸入された知的影響へと辿つて行く。すべてかやうなことを成就した後、始めて彼はその評論を書く準備ができたものと考へたのであつた。無論サント・ブッヴは彼が評論を試みた一人一人の作家の場合に於て、その人が研究した一切の書物、その人が生活した時代に關する一切の書物、その人が論じてゐる問題を取扱へる一切の書を、再び繰返へし讀み通したのだと、諸君は想像してはいけない。決してさうはしなかつた。これらの事柄を彼は既に知つてゐた。彼はそれらを讀んでしまつてゐた。して、[譯者註二]ハラム或はマコーレーの如き、すばらしい記憶力

を有つてゐたから、彼は讀んだものを悉く記憶してゐた。

彼の尨然たる著作に就て一言する。その大部分は、始め新聞紙に現はれた。英國の新聞紙面に現はれる評論は、概して多大の文學的價値を有するものではない。米國の新聞に載つてゐるものには、何等文學的價値はない。しかし佛國の新聞紙に現はれるものの大部分は、文學上最高の價値を有つてゐる。佛蘭西の新聞文學は歐洲の他のそれよりも、事件報道に重きを置くこと少く、文學に遙かに重きを置いてゐる。記者をしてその仕事をなさしめるために、澤山時間の餘裕を與へてゐる。かやうな仕事は、大抵一ヶ月の中に、二つ乃至三つの短篇を作り上げるといふ割合でなされてゐる。サント・ブゥヴはいつも毎週殆ど一回、卽ち一ヶ月四回、或る巴里の新聞へ彼の所謂『月曜講話』を寄稿した。して、この『月曜講話』は、巴里の文壇に於ける毎週の大事件となつた。しかし彼はこの外に、彼が『批評と文學的肖像畫』と呼んだ獨立的文學研究を幾つも發行した。また『現代肖像畫』叢書をも發行した。書物の體裁で發行されたこれらのものだけでも、五十乃至六十の大卷を成してゐる。しかし更に一層重要な著作は、彼の文學的且つ哲學的なる『ポート・ロワイヤルの歴史』三卷であつた。これには努力二十年の研鑽を要した。この書に於て彼の評論の精能は、最高の表現を示した。諸君の中には、恐らくは、ポート・ロワイヤルのこと

を聞いたことのない人もあるだらう。その話はこの講義に密接な關係はないが、私は數語を述べてみよう。ポート・ロワイヤルは十七世紀に於て、路易十四世の時代に、ヴェルサイユの王宮から約八哩ほど距つた處に建てられた修道院であつた。こゝに頗る特異なる僧侶及び尼僧の團體があつた。最も高尚な學藝を有する紳士淑女學者哲學者によつて組織された新しい宗教團體で、彼等は科學的知識と調和を圖つて、革新的天主教を作るといふことを夢みてゐた。ゼズイット派の勢力に對抗せんがために、ポート・ロワイヤルの連中は教育家となつた。彼等は宗教と科學を一緒に教へた。彼等は天晴れ高尚で、自由寬大な教へ方をした。して、彼等は神學よりも眞理を重んじた。偉大なるパスカルは彼等の味方の一人であつて、彼等のために闘つて、ゼズイット派論客を沈默せしめた。彼等の採つた宗教制度は、イープル市のヂャンセン監督の名に基いて、今猶ほヂャンセニズムと云はれてゐる。それから、ゼズイット派とポート・ロワイヤル派の間に激しい諍論が始まつた。ゼズイット派は羅馬に一層の勢力があつたので、初め羅馬法皇をしてポート・ロワイヤル派の教義を咎めしめた。次に彼等はその制度を破壞せんがために、政治的且つ社會的に活動を試みた。多年を經て、彼等は成功した。ポート・ロワイヤルは破產に至らせられ、加之、彼等の手に收められた。勝ち誇りつゝ殿院に入つて、彼等は敵の形見となるものは一つも

殘らず破壞した。けれども、彼等が破壞することのできなかつたものがあつた。して、それをサント・ブゥヴが我々のために保存して置いてくれたのであつた——それは滅亡した團體によつて唱道され、教へられた高尚な思想と偉大な眞理であつた。

さて、ポート・ロツイヤルにその修道院を再建し、そこに住み、そこで死んだすべての人々の形見を以て、そこを再び賑はし、我々をしてただ單に顏を見たり、言葉を聞いたりするを得しめるだけでなく、更に死んだ人々の思想感情を知るを得しめるといふことは、一つの驚くべき離業であつた。これをサント・ブゥヴは成就した。して、これ以上のことを成就した。何故といふに、ポート・ロツイヤルを理解するためには、路易十四世時代の雰圍氣と光景を復活することが必要であつた。して、また當時の宮に闘争する宗教的信に包含的の諸思想感情について、一切のことを我々に教へることが必要であつた。しかしすべて彼の評論に於て、彼はこの種の驚嘆的な仕事を成し遂げた。サント・ブゥヴが書いた評論に、模範的だ。歴史的だ。哲學的だ。藝術的だ。だから、彼の書いたものを讀むのは一個の教育である。しかしそれを讀むに當つて、何等苦しい分析が要ると思つてはいけない。マコーレーさへ、かくの如くに人を魅する文體を有たぬ。サント・ブゥヴは言葉を使つて教へる。彼は單に講釋をしない。彼は繪を書くのだ。彼は繪を描くよりも以上のことをす

る。彼は諸君の面前へ生ける人を立たせる。だから、諸君はその人物の聲を聽くことが出來る。その人の手觸を感じ、諸君自身と、その人の間に存する精神的共鳴を悟ることが出來る。諸君がサント・ブッヴを讀む時、死んだ人々が生き返つて、諸君に物語をする。して、夢に於ける如く、諸君は彼等の死人たることを忘れ、すべて語られ、なさるゝことが、眞實自然だと想像する。

この方法は、色々の名目で呼ばれてゐる。大部分は不適當を免れない。自然派方法と稱せられたが、それは浪漫的方法と呼ぶに劣ることなく不正確だ。これに附し得べき名は、唯一つある――即ち、サント・ブッヴの方法と云ふだけだ。この方法は、或る問題を評論的に研究し、取扱つて行くのに、あらゆる可能的な方法を結合したものである。して、もし或る甚だ獨得なものによつて區別し得るとせば、その獨得なものといふのは、著者の天才、無限の同情、中分のない寛容、深厚博大なる人道愛である。この博愛の情は、或る作家を研究するに當つて、作家の味方の賞讃によるよりは、寧ろ作家の敵の憎惡を通じて、研究するといふ彼の習慣によつて、特に示されてゐると私は想像する。彼はいつも事物についてこのやうな見地を取つた――獨創的天才の人は、彼の時代と完全に協調して行くことができないこと、隨つて彼が活動する社會と圓滿なる一致を得難いこと、また、隨つて、

彼は嫌惡され、實際恐らくは迫害を蒙り、誹謗されるに相違ないといふこと。偉人に向つて述べられ、或は示された輕蔑、罵詈、或は甚だしきは虚僞からして、我々が彼のことを知る方、彼を愛する人々の賞讃からよりも遙かに多いこと屢〻である。勿論、これは心理に關して非常に優れた知識が要る。しかし立派な評論家は、立派な心理學者でなくてはならない。

サント・ブウヴの弟子の中で、最も偉大なるは史家テーヌであつた。して、サント・ブウヴがテーヌに及ぼせる影響の最好例は、恐らくは、作者の性格と生活のことを書いた一卷であらう。しかしテーヌはサント・ブウヴほどに博學でもなく、また怜悧でもなく、また同情的でもなかつた。彼はその方法をやゝ一方に偏して用ひる傾向に陷つた——これは方法の缺陥で無く、寧ろその困難を證明しきるものであつた。サント・ブウヴの如く評論するためには、評論家は彼の如くに寛大で、彼の如くに聰明でなくてはならぬ。して、いかなる現存の評論家も、さうではない。しかし彼の方法は、それが進化の哲學と全然一致してゐるといふ有力な理由からして、恐らくは將來他の偉大なる頭腦を有つた人によつて一層完成されるだらう。他のいかなる評論の方法も、全然さうであるといふことが云へない。彼の若かつた時代には、進化哲學は存在してゐなかつた。しかし彼はやゝそれを豫想して

ゐたとも云ひ得るだらう。數限りないほどの評論家、即ち今日進化的方法の追隨者であつて、文學上一切のことを、すべてその經過し來たつた世紀を溯つてその發端へと辿り、いかにしてそのことが生長し、發芽し、開花したかを叙述する人々――これらの人々は、大部分ハーバート・スペンサーの學徒ではなくて、サント・ブッヴの模倣者なのである。

或る點では、サント・ブッヴの影響は少々有害であつたといふことが、セーンツベリー教授によつて、よく指摘されてゐる。馬鹿らしいほど、正確な、或る著者の傳記を書いて、かやうな傳記の詳細な個條を、その著者の作品中の章句と聯絡をつけようと試みて、それて彼を模倣し得たと考へる人が澤山あつた。現今毎年作家の私生活に關する無益な、つまらない噂に滿ちた、愚鈍極まる書物が、何百も出版される。實際サント・ブッヴは決してそのやうなことをしなかつた。彼に作家の私生活の事實が、評論上たまたま特別な價値を有することのあつた場合を除いては、決してそれを擧げなかつた。彼は決して誤謬をしなかつた。彼は決して間違つた判斷をしなかつた。彼が云つたことは、今日猶ほ依然として、彼がそれを云つた時と同じく眞實である。また將來數百年間、同じく眞實となつて殘るだらう。けれども、彼の方法に旨く追隨して行くことは、眞に優れた人々のみが出來うることである。この講義の始めに擧げた英國の三評論家は、幾分か悉くそれに隨つたのである。

その一人、ダウドン教授はサント・ブゥヴに對して、彼が負ふ處の莫大なるを承認するのみでなく、更にまた十九世紀後期のあらゆる重要なる評論は、均しく皆サント・ブゥヴに負ふ處があると斷言してゐる。これは取りも直さず現在英佛伊獨評論界のすべての流派（露國の評論界を加へてもよからう）は、サント・ブゥヴの教訓によつて作られ、或は變化されたのだといふことを意味する。マコーレーの方法は、マコーレー自身の腕によつて、發揮されて、有力なものとなつたけれども、現今我々はマコーレーの評論方法よりは遙かに進んでゐる。

我々は現在英國の三大評論家、及び彼等のサント・ブゥヴに對する關係といふ特別な問題に歸つて行かう。三人の中、セーンツベリーが文體並に方法について、最も面白味が乏しい。彼の文章は非常に壓搾され、簡潔で、煎じ詰めたもので、彼の意味を明白に表はすのに絕對的必要である以上のことを決して云はない。彼の評論は、面白いといふ言葉のいかなる意味から云つても、面白くない。諸君が愛し得る著者ではないが、諸君の尊敬を博する著者である。しかも彼がそれを博するのは、奇異な方法による。特に反對により、否定により、他の大評論家の判斷とは、全然背馳せる驚くべき判斷によるのである。加之、彼は癪に障はるほど用心深い。過去の最大作家に對してさへ、彼は決してその作家に傾倒

して、充分熱烈な氣分にならうとはしない。現存作家については、彼は避けうる限り、語らないことにしてゐる。ゴッス氏及びダウドン氏と異つて、彼は毫もかの新しい聲名を他の作家に得させるやうな文學的寛容を有たない。寧ろ彼は舊い聲名の破壞者である。私の知つてゐる如何なる評論家も、往々彼ほどに忿々しげなのはない——彼の冷淡、彼の妙な嘲弄の風、彼が立派な人々の名を默殺する冷かな侮蔑のために。すべて是等の奇癖の上から云へば、三人の中、彼が最も代表的英國風であることを、諸君は見出すでせう。彼は英人のよい特質と全然同じほどに顯著なる、英人のあらゆる不快を催さしめる特質を有つてゐると、私は云はねばならぬ。しかし私はすべての中、最も彼を信ずると云はねばならぬ。私は彼が諸君を誤つた方向へ導くことがあるとは信じない。して、彼は珍らしいほど偏見を脱してゐる。時として彼の冷笑、或は侮蔑を表はす一句が、諸君をして彼の判斷は、宗敎的或は道德的偏見の色彩を帶びてゐると信ぜしめたことがあるだらう。しかし實際はさうでなかつた判斷の例を、容易に擧げることができるだらう。例へばハックスリーや、ホッブス[譯者註一四]や、マンデヴィル[譯者註一五]や、その他强く敎會の勢力に反抗した人々を、假令控へ目てはあるが、彼が非常に正當に賞讃してゐるのを見るがよい。またこれに反して、ワイクリッフを彼が嚴しく論じてゐるのを取つて見てもよろしい。それから、諸君は彼が或る英國作家

難に於ける一種の不道徳を猛烈に非難してゐるから、彼をしかつめらしく謹愼ぶるもの――澄ましこむといふ英國のひどい僞善――と思ふかも知れない。しかし英國の詩人カルー[一五三六]のやうな人の淫蕩極まる作品に就て、彼の天晴れ立派な概説を讀むがよい。或はボードレールに關する彼の極めて美しい讃賞を讀むがよい。しかも此詩人の名は、佛國に於ても、英國に於ても、愼ましやかな連中が身慄ひするばかり憚つてゐる。また、ゴーチェー、ユーゴー、モウパッサンの如き佛國作家に關する彼の評論を讀むがよい。彼等と同じ程度までも、所謂道徳的標準に違犯した一層古い佛國作家についての評論は申すまでもない。彼はたしかに宗教と倫理に關する一切のことに對して、充分なる公平を有してゐる。

　私が云つた如く、彼は挑戰してくる。例へば、彼は我々に告げていふのには、バイロンの詩は眞の詩でない。それは僞造金だ。バイロンの詩が眞の詩に於けるは、殆ど舞臺の背景が天然の風景に於けるが如きものであると。これは諸君が彼から期待し得る言説の一例である。彼はラスキンの書いたものには、一頁と雖も、或る間違つた説、または疑はしい説を含まざるはないと、諸君に告げるだらう。スヰンバーンを除けば、ラスキンは彼が多くの注意を與へた殆ど唯一の現存作家である。彼はデ・クヰンシーは倦怠を催さしめ、無駄話が多くて、また、往々絶對に馬鹿らしいと、諸君に告げるだらう。しかし諸君がもし

是等の說に對して、彼が述べてゐる理由を調べるだけの忍耐を有するならば、その理由の頗る正しいことを發見するだらう。バイロンを細心注意して調べてみると、諸君は彼の作品全部を通じて、殆ど完全な詩句がないことを見出すだらう。ラスキンの說をよく考量してみると、もし彼の文章の燦爛たる莊麗に眼を眩ませらるゝことがなかつたら、諸君は彼の價値は直接の眞理に存しないで、ただ暗示の點に存することを見出すだらう。デ・クヰンシーの書いたものの中、激しい批評を受けてゐる個所を取つて、暫らくその批評を加へることのできない部分を忘れてみるがよい。すると、デ・クヰンシーの或る著作は、いかに退屈な、つまらないものであるかを諸君は知るでせう。また一方、諸君はセーンツベリーから、この同じ三作家――バイロン、ラスキン、デ・クヰンシー――の長所に關して、いかなる他の英國評論家が與へるよりも一層深い知識を獲るだらう。それから、また驚くべきことには、彼の佛國文學に於ける判斷は、英文學に於ける彼の判斷と全然同じく堅實で、且つ簡明である。彼は私が知つてゐる中では、英佛兩文學の最もよい指導者である。ダウドン教授にさへ優さつてゐる。して、恐らくは詩と散文の限界問題に於ける彼の頑固な立場を除けば、私は彼が其著書の全般に亙つて、何等評論すべき偏癖を示してゐるのを見ない。彼は英佛兩文學に於ける、或る立派な形式の詩的散文を賞讃し、しかも非常に賞

讃したのであるが、しかし彼は詩的散文は書くべきものでないといふ說のために奮鬪してゐる。この點に於ては、ダウドンとゴッスは、彼と意見を異にし、また佛國の最も有力な評論家達も彼と意見が一致しないのは、私の欣ぶ處である。

私は諸君が、セーンツベリーは決して一見簡單なるが如く、さほど簡單ではないといふ確信を以て、いつも彼の著書に接することを希望する。諸君は彼の著書を早く讀まうと試みてはいけない。彼が語る一々のことは、よくそれを考へる價値がある。また諸君が始めて讀む時に想像し得る以上、更に多大のものが、彼の文章に含まれてゐる。彼の著書は、たゞ一回だけでなく、幾たびも讀むため、諸君の文庫に藏して置くべき種類の著書である。何故といふに、再三再四繰返へし讀んでから、後始めて諸君は書中の偉大なる力を發見し得るからである。無論彼の文學史の場合には、論述してある文學そのものを讀んでからでなくて、文學史を讀むのは何の役にも立たぬ。しかし諸君がいつでも或る佛國作家、または英國作家を愛好するやうになつた折は、セーンツベリーの著書に轉じて、彼の評論を求め、して、その評論を幾たびでも讀むがよい。すると、諸君は彼がいかに偉大なる敎師であるかを悟るでせう。

サント・ブゥヴに影響されてゐるけれども、セーンツベリーは傳記の方面では決してサ

ント・ブゥヴの方法を實行しようと企てなかつた。彼は或る人物を、その血統、生活乃至社會的環境などの條件によつて、諸君に說明しようとは試みない。要するに、彼は避けうる限り、決して理論を說かない。何故といふに、誤つた推理に陷るのを恐れるからである。しかし彼は諸君に與ふるに傳記的事實を以てし、して、諸君をして該事實から、諸君自身の結論を作らしめるやうにして置く。多分これが最も安全な方法であらう。して、それは一つの優秀な價値を有する――それは學生をして自ら思考せしめるやうに導く。以上述べたことが、セーンツベリー教授に關して述べるのに必要なる殆ど全部である。彼の傳記は、まだ一つも出版されてゐない。

他の兩評論家の場合に於ては、全くこれと異つてゐる。我々は彼等に關して澤山の傳記的資料を有する。それは彼等が評論家及び學者の範圍を脫して、詩人や戲曲家として現はれたので、世間は彼等について一切のことを知らうと欲したといふ簡明な理由によるのである。セーンツベリー氏は詩を書かない。また彼の評論的職業の嚴格な限界を離れていかなることをも試みない。しかしダウドン教授及びゴッス教授の著作物は、非常に雜多なものである。

恐らくはゴッス教授が兩者の中では、一層非凡な人であらう。して、文體の點では、三

人の中で、たしかに最も優れた作家だと、私には思ふ。彼はまた一般公衆に最もよく知られてゐる。彼の經歷はなかなか珍らしい。彼は生物學者フィリップ・ゴッスの子で、一八四九年に生まれた。彼は大英博物館の文庫書記として、職業生活を始めた。それから商務局の飜譯官となつた。後に及んで、彼の異常な材能が、世人の矚目する處となつて、劍橋トリニティー大學の英文學講師に選ばれた。私が既に述べた諸種の文學史の外に、彼は五卷の詩及び五卷の論文、それから二卷の文學的傳記を著はしてゐる――比較的春秋まだ淺い人としては、多大の著作である。五卷の詩については、私は遺憾ながら、それは毫も重きを置くに及ばぬものと考へると、云はざるを得ない。詩句として瑕瑾はない。それは完全に正確で、頗る音樂的で、また頗る器用に作られてある。しかし眞に新しいものや、非常に強いものが、毫も含まれてゐない。轉じて、五卷の論文に於ては全く趣を異にしてゐる。これらの論文の散文中、却つて詩の中にあるよりも一層多くの詩が存してゐる。實際私はこれらの論文は、現存の英人によつて書かれた論文の中では、最上のものだといふことを躊躇しない。また十九世紀の他のいかなる作家の論文も、これを凌駕するものはないと私は考へる。恐らくは英語で書いたものの中では、未だ比肩すべきものはないだらう。その價値を一層明確にするため、私はこれらの論文は、從來英語で試みられた中で、佛國論文

の上乘なるものの、華麗、優美、驚くべき色彩を學んで、最も近くその域に迫つてゐると云はう。換言せば、ゴッス氏は佛國の最も優秀な作家が、佛語を書くのと、殆ど同じほどに美はしく英語を書くのだ。が、記憶なさい。これはゴッス氏が自家の文體を完成するといふ特別な目的を以て、佛文學を研究したのに因つてゐる。その上に、彼はサント・ブゥヴの方法を出來る限り完全に採用した。また大概の場合、その方法によつて、驚くばかりの成功を收めてゐる。彼は著者たる人物を、時代に關し、遺傳に關し、社會的環境に關し、あらゆる見地から研究する。また彼は現存作家に對しても、多大の寛容なる注意を向け、幾多の新しい好評を作つて、全歐洲の文學志望者から愛慕されてゐる。米國では彼は非常に愛されてゐる。して、彼はそこで連續講演を試み、米國は決して大詩人を產しなかつたが、恐らくは小規模ながら、よい詩人とでも呼ばれ得るやうな一人を產したのみだと、斷言したにも關らず、その講演は頗る人氣がよかつた。

　ゴッス氏の英文の壯麗さを、拔萃によつて諸君に理會させようとするのは頗る難い。何故といふに、彼の論文に於ては、一つ一つのことが、他のことと織り込まれてゐて、或る部分の妙趣は、實際全部に因つてゐる。だから、一章一節を引離す時には、それが結合されて完全な生ける組織を成してゐた場合に示せる色彩と美の多量を失つて了う。しかし私

は一つ二つ引用の效果をためしてみよう。こゝに詩人デ・タブリー卿の性格について小さな描寫がある。それは英語が巨匠の手腕によつて驅使される場合、描寫として英語が現はす偉力について或る新しいことを我々に敎へるやうに思はれる。「彼の心は數限りなき、すべて少々曇つたり、霧がかかつた小面を有てる寶石のやうであつた――或は恐らくは、彼の性格を蛋白石に譬へた方が、一層正當なる說明となるだらう。蛋白石に於ては、すべての色は、螢光的神祕の中に埋もれ、潜んでゐて、しかもそれらの色は一種特異に配列されてゐて、甲乙二人の觀察者が、同時にその上から覗いて眺めると、大體の色合は、甲の場合には、淺綠と見え、乙の場合には、燃えるやうな深紅に見える！」

私は英語に於て、これよりも立派なものを思ひ浮べることができない。無論譬喩の觀念そのものに自然の壯麗がある。苟くも蛋白石を見たことがあつて、また文章の書き方を知つてゐる人ならば、それに關して何か目覺しいことを言はざるを得ない。しかしゴッス氏が寶石に關してでなく、最も尋常鄙俗な事物について語る折にも、彼の文體は同樣に壯麗で、同樣に驚くべきものである。私は例證として八九年前、彼がホヰットマンを訪問した記事から、二つの小節を取つてみる。『ホヰットマンが粗羅紗の田舍風な服を着け、シャツは咽喉を廣く開いたまゝで、白髮と白髯が澤山垂れかかつてゐた風貌は、全く淸潔に流

ひ踊らされたもののやうに見えた。全身汚れなき白砂の白さで、恰も擦り刷毛のもとに古くなつた樅板の卓子のやうであつた』『もしすべての卓抜な人間は、動物に似てゐるといふことが、眞實であるとすれば、ウォルト・ホヰットマンは猫のやうであつた。大きな年老いた灰色のアンゴーラ種雄猫が、波打てる髮毛を戴ける下で、靜かに瞬きつゝ、眼は不可解な風に夢みてゐるやうであつた』

諸君の中には、アンゴーラ猫を見たことのない人もあるだらう。それは一對の頰鬚と顎髯の如くに見える、非常に長い絹のやうな毛を有つてゐる。これは作家がその老人を見たのと全く同じやうに明かに諸君をして彼を見せしむる一つのペン畫である。

これらの拔萃は、『評論半身像（クリティカル・キツト・カツツ）』（ゴッス氏のいふ處によれば、原名 "Critical Kit-Cats" は "Kit-Kats" と綴つてもよろしい）から取つたのである。して、彼の方法と文體が最もサント。ブゥヴのそれらに類似してゐるのは、その書に於て見受けられる。しかしそれと殆ど同じほど優秀な他の一卷は、彼の『論諍問題』"Questions at Issue" である。それから、私は彼の『十七世紀論文』"Seventeenth Century Essays" に對しては、唯だ僅かにこれより劣つた地位を與へたく思ふ。すべてこれらの著書に於て、彼は事物を活かして見せる、驚くべき力を有つてゐることを、諸君は認めるてせう。『書齋閑談』"Gossip

in a Library」は、やゝ文學的論文の一層嚴格な形式のものであつて、主として古卷珍書のことを論じてゐる。しかし諸君はそれを讀んで、得る處の實益は乏しくても、多大の愉快を感ずるであらう。文體と教訓、二つともに頗る堂々たるものは、ゴッス氏が彼のスカンディナーヴィヤ學者としての最良の結果を壓縮蒐集せる『北方研究』〈Northern Studies〉である。惜しいかな、目下この書は絶版になつてゐるが、新版が出るだらうと私は信ずる。

私はこの大評論家の詩については、諸君に向つて少しも賞讃のことを云はない。しかし彼は大詩人として自らを誇示しようといふ考で、詩を書いたのではないといふことを、私は諸君に告げねばならぬ。それは主もに或る詩形に通曉せんがために、練習として書かれたのであつた。して、彼は實際天晴れそれらの詩形に精通した。尤も世人は彼がその時間を寧ろ更に文學に關する他の論著に傾注してくれたらばと願つたであらう。彼は英語にて達せられたる完全の最高點まで、論文の形式を持上げたものと、私は考へる。

ダウドン教授は他の兩者とは大いに異つてゐるが、同樣に顯著な人物である。彼は一八四三年に生まれた。僅か二十四歲の時、ダブリンのトリニティー大學の英文學教授に任ぜられたのだから、學生として最も異常な材能を有してゐたに相違ない。彼は今猶ほその地位に居る。しかし彼はまた折々、牛津、劍橋、及びエディンバラー大學の講師を務める。

そして彼の大學並に是等の三大學から高い學位を受領してゐる。初め彼が大いに文名を揚げたのは『セレー傳』――マシウ・アーノルドによつて批評された――によつてであつた。後になつて、彼は沙翁學者として廣く世に知られてきた。彼はまた可なり優秀な一卷の詩集と頗る卓拔な文學的論文二卷を出した。彼の簡單な佛國文學史は、同じ主題に於けるセーンツベリー教授の著書と全然性質を異にしてゐるが、頗る立派な一著述である。それから、彼の近代英文學に關する著書は、簡潔を極め、且つセーンツベリーほどに多くの題目を含まないけれども、恐らくは讀んで最も興味あるものだらう。

ダウドン教授は、少くとも後になつてからの著書には、軌範と仰いだ佛國の作品から受けた影響を著しく現はしてゐる。彼もまたサント・ブゥヴの門人と云はねばならぬ。尤もサント・ブゥヴの方法を模するに當つて、ゴッス氏よりは少々拙い點もある。しかし佛國諸大家の研究は、ゴッス氏の著作に見らるゝと同じ色彩と力を彼の文體に與へる處が多かつた。彼は極めて少數の言葉を以て、多大のことを語る點にかけては、ゴッス氏ほど巧妙であると、私は考へない。彼はゴッス氏の如き集中力を有つてゐないらしい。彼の文章はゴッス氏のよりは遙かに長い。して、彼の書き振りはゴッス氏よりは甚だ冗漫である。しかし斯くいふものゝ、兩者のいづれを選擇するかといふ場合には往々困難を感ずるだらう。

ダウドン氏もゴッス氏と同じ程度に詩的氣質を有つてゐる。して、文體の點に於ても、矢張りゴッス氏と同じ種類の驚愕を我々に與へ得るのである。彼の文學的論文の下卷を開けてみると、殆どその卷頭に諸君は次の如き直喩を見出すだらう。「文學はいづれに向はんとするか——精神的氣象學は、まだそのダルトン或はフォンボルトを見出してゐない。精神潮流の法則は、まだ公式に現はされてゐない」

こんな風に書く人は、心から詩人であり、また思想家であると、我々は感ずる。だから、我々は彼が心理學の法則や、哲學的問題に觸れる場合にさへ、彼から愉快を得るものと期待してゐる。果せるかな、間もなく我々は愉快を感じてくる。少し先きの方へ行つてから、彼は外國文學が英文學に感興を與へる力のことを述べて、弱い民族や、滅亡せんとする民族に、新しい力を與へる異種の血液の注入に譬へてゐる。「奇異といふ衝動は、活氣を與へる。近代歐洲のあらゆる大なる文學的運動は、二つの民族の結婚から生まれてゐる。だから、イリーザベス朝の大文學は、英國が伊太利を戀したことから生まれた。十九世紀初期の詩は、佛國革命の前途洋々たる光景によつて、英國に惹起された情熱から生まれた」

これは讀者が興味を感ずると同時に敎訓を受け、面白がり乍ら知識を得るやうに、文學の理論を書く方法である。この小さな文章には多大の內容がある。何故といふに、それは

文學の歴史のみでなく、また生物の歴史を支配する一般的法則、個體と個體の結合のみでなく、また知的要素の結合を支配する法則を表はしてゐるからである。それはまた、天才は主もに異つた國民的要素の結合を示せる家族から生まれるといふ、サー・フランシス・ガルトンの說を我々に想起させる。して、その法則は、こゝで我々に興味を與ふべき筈である。何故とならば、もしその中に一般的眞理が含まれてゐるとすれば、新日本文學は結局西洋文學の感化力から起こらねばならないからである。丁度我々が現在歐洲に於て、東洋文學、特に印度からの影響が現はれ出して、西洋思想の上に新しい力を發揮し始めてゐるのを見ると同じことである。

ダウドン氏の論文は、このやうな文章に富んでゐる。して、諸君が前記の拔萃から推測したであらう如く、彼は現代科學を眞面目に研究してゐる。我々は彼を有力な進化論者と、呼んでもよいと私は思ふ。三大評論家の中で、彼は大膽にもハーバート・スペンサーの如き人々の影響は、將來の文學に取つて最も價値あるものだらうと公言した唯一の人である。佛國でも、英國でも、科學が詩を殺しつゝありと斷言するのが、幾分評論家の流行となつてゐる。ダウドン氏は正反對に考へてゐる。科學が今や文學へ新しい血と力を注入しつゝあつて、散文をも、詩をも、從來見なかつたほどの壯大な形式に到らせる準備をしてゐる

のだと、彼は信じてゐる。

この點や、また他の諸點に於て、ダウドン教授はゴッス氏或はセーンッベリー氏のいづれよりも、一層改革家の風格を帶び、一層濶大なる見解を有し、一層寛容だと、私は考へる。セーンッベリー氏は、たしかに進化哲學が文學に及ぼす將來の影響に就て、敢て強い意見を吐くことはしないだらう。實際彼がそれに言ひ及んだ時に、彼はいつも最も用心深い態度を取つてそれを述べ、且つまだ一切未定であると考へてゐるやうな口吻を洩らしてゐる。この點に於て、彼はよく英國の保守主義を代表してゐる。ゴッス教授は彼の一切の著作を通じて、彼はサント・ブッヴの影響の下にあると、均しくまた新哲學の感化を受けてゐることを示してゐる。しかしその幾多大學の名譽から云へば最もえらいダウドン教授は、この問題に關して深遠且つ華麗なる一論文を書いてゐるほど、新思想に對して同情を有し、またその同情を表はす勇氣を有してゐる。若し彼の時間が、講義や編輯に多く奪はれることがなかつたら、彼はまた文學に於ける新運動のために、一層盡くし得るだらう。しかしかやうな人々の場合に於ては、我々はただ我々の受けることができるだけのものに對して、感謝せねばならない。

この論文の劈頭に、私はストパァド・ブルック氏の名を擧げた。諸君は皆、彼の立派な

英文學入門の一卷によつて彼を知つてゐる。諸君の知る通り、立派な初歩の本は、大きな歴史を書くよりも遙かに困難である。ハクスリーさへ、それは如何に知的な人に取つても最難事だと斷言した。入門書に於ける要點は、簡單且つ明白といふことよりも、選擇といふことである。ただ單に非常な短縮を施さねばならぬばかりでなく、またその問題を幼稚な頭腦へ提供するのだから、問題に關する最も重要事項のみを蒐めねばならぬ。して、その小さな文學入門は、從來書かれた其種類の中で、最上のものであつた。新版の分では、更に價値が加つて、教育上の至寶となつてゐる。かやうな本を書くことのできた人は、決して尋常一様の學者ではなく、非常に傑出した學者であつた。ブルック氏はまだ文學で知られない前に、牧師として大いに知られてゐた。彼はその說教の雄辯と美妙で聲名を博した。世人は單に彼の說教を聽聞して樂しまんがために、彼の教會へ行つて、知的娛樂と思つてゐた。彼は閑暇の時間を利用して、主もにアングロ・サクスン文學を研究し、その權威となつた——だから彼は多方面の人であることがわかる。しかし彼を偉大なる評論家とも、または偉大なる文體家とも呼ぶ事ができると、私は思はない。實際彼は決して兩者のいづれかとなるために必要な、特殊の苦心を積んでゐない。彼の詩から一つの小詩を引用すれば、私の意味が證明されるだらう。それは彼の長短兩方面を示してゐる。それは『冠

毛のリクェット」"Riquet of the Tuft" と題する戯曲から取つたものである。

Young Sir Guyon proudly said,	若いサー・ガイヨンは傲然と云つた。
"Love shall never be my fate."	『戀にわが身を滅ぼさせはせじ』
"None can say so but the dead!"	『死者ならで、誰れか、さは言ひうるものぞ！』
Shrieked the witch-wife at his gate.	と、鬼婆は彼の門に叫んだ。
"Go and dare my shadowed dell,	『わが蔭暗き谷に行き玉へ。
Love will quell your happy mood!"	戀は、さる輕はずみの心を碎かん』
Guyon, laughing his farewell,	ガイヨンは笑つて『左らば』と云ひ放ち、
Rode into the fairy wood.	仙女の森へ馬を馳せた。
There he met a maiden wild;	森で彼は熱烈な少女に逢つた。
By a tree she stood alone,	女は樹のそばに獨り立つてゐた。
When she looked at him and smiled,	女が彼を眺めて、微笑を洩らすと、
At a breath his heart was gone.	彼の心は一と息で奪はれた。
In her arms she twined him fast,	兩腕で女はしつかり彼に捲きついた。

And, like wax within the flame,　　すると、炎の中の蠟の如く、
Melted memory of the past,　　過去の記憶は溶けてしまつた。
Soul and body, name and fame!　　魂も、身體も、名もほまれも！

この簡單な小物語詩（バラッド）は、こゝまでは充分完全である——理想的な凄い歌になつてゐる。しかし最後の一節が全體を損はしてゐる。

Late at night the steel came back;　　夜更けて駿馬は戻つてきた。
"Where's our good knight?" cried his men.　　『いづこに行きし、わが主人は？』と、從者共は騒いだ。
Far and wide they sought his track,　　あちこち彼等は彼の跡を探がしたが、
But Guyon no one saw again.　　ガイヨンはまたと見えなかつた。

平凡な句、惡詩、完成の無視！躁急と冷淡のために、可惜立派な小作品が、破壞されてゐる。さて、これと同じやうな躁急が、ブルック氏のすべての著作に見受けられる。ただ恐らくはかの驚くべき小入門書は例外だ。該書は實際彼が細心の注意を拂つて書いたもので、まだマシウ・アーノルド及び他のえらい人々の助力、又は注意を受けたのであつた。

諸君はブルック氏の書中、到る處に非常な材能と學識の發揮を認めるが、何等持續的な精妙と用意周到を見受けない。して、彼の好きな學説に適合するやうに、事實を曲げる傾向がある。例へばアングロ・サクスン文學に關する説でも、全く間違つてゐると證明されたのが隨分ある。して、それが間違つてゐるといふのは、私が諸君に引用した小歌に、全く適當な仕上げがかかつてゐなかつたのと正しく同一理由によるのである。それから、我々は事實を系統的に蒐集配列する能力の缺けてゐるのを見出す。古代英文學に關する大著述の初版に於ては、全體の我儘勝手な配列や、退屈な、無用の脱線や、或る問題を中途で止めて他の問題へ移り、また別の章に於て同一の問題へ戻つてきたりすることのため、學生は五里霧中に彷徨する。同書の一層短縮された第二版に於ては、出版書店の立派な判斷によつて短縮を要求されたのであるが、餘程の改良が見えてゐる。しかしケルチック文學、ブリティンの古代民族、並びにアルフレッド大王に關して、新たに加へられた諸章には、大きい方の初版全體に目立つて害をなしてゐたのと同缺陷が示されてゐる。だからブルック氏を信頼すべき評論家、或は全然評論家として、見做すことは不可能だらう。彼は詩人て、學者て、發見家て、アングロ・サクスン文學研究の鼓吹に與つて大いに力あつた人てあるが、評論家てはない。

無論英國の學者で、折々評論家となつて、しかも立派なのが、可なりある――例へば、ケェア教授の如き專門家である。しかしこれらの人々は、何よりも先づ言語學者であつて、專門の評論家ではない。だから、我々のこの考察以外に屬する。我々は佛國の誇有する十五人乃至二十人の評論界巨匠と相對して、評論家として認められたる評論專門家をただ三人有するに過ぎない。して、そもそもこの講義の發端から、私が諸君に注意して貰ひたかつたのは、これら三人の上に及ぼしたる佛國文學の感化であつた。彼等は佛國評論の研究によつて、出來上がつた人々である。彼等は佛國評論の研究によつて、全然新しい藝術を發達させた。それから、彼等は他の誰人にも優つて、或る部門の佛國文學の眞價に、英人の注意を向けしめた。彼等の成した今一つの事業で、しかも甚だ重要なことは、文學的寛容と宏量の新精神であつた。四五十年前には、英國の文士は、マコーレーの如く、一切外國のものを判斷するに、英國の見地――英人の倫理、英人の感情、英人の習慣風俗の見地――を以てすることを主張した。して、其結果は精神の狹隘と乾燥であつた。今日は甚だ趣を異にしてゐる。多くの事に保守的なセーンツベリー氏、大部分自由的なゴッス氏、それから、全部自由的なダウドン氏――これら諸氏が轡を並らべ論陣を張り、力を協はせて、我々に如何にしてすべての倫理、習慣、僻見から離れて、美を美そのものの內に見出すべ

きかを教へた。彼等がその立派な教訓を學んだのは、佛蘭西人からであつた。それはアナトール・フランスによつて最近次の小さな章句に頗るよく表現されてゐる。「眞理を文學に求むべからず。眞理はこれを科學に求むべし」"Il ne faut pas demander la vérité à la littérature ; il faut demander la vérité aux sciences." 即ち、我々は事實の精確といふ意義に於て、眞理を文學から求めてはならぬ。かかる精確を與へるのは、科學の任務だといふのである。文學の唯一の眞目的は美である。しかし美はまたそれ自身に於て、事實の眞實よりは更に博大なる種類の眞實を意味することを記憶せねばならない。それは眞情の眞實を意味する。だから、すべて私の講義に於ては、機會のある毎に、次のことを私は諸君に注意することを怠らなかつた——文學は書物を書く藝術でなく、眞情を表現する藝術であること。またその眞情は、人生に於ける一切普通なもの、並びに高尚なものを意味すること。今日では、これらの眞理は、明々白々と思はれるが、五十年前に於て、それがわかつてゐた英人は、寥々たるものであつた。彼等にそれをわからせるのが、大評論家の任務であつた。

今日までの處では、佛國の評論と他の評論との大差異は、法式の點よりも寧ろ妙味の點にあつた。立派な佛國の評論——例へば、ヂュール・ルメートルの評論の如き——は、出

來うる限り教訓を與へながら、しかも立派な物語の如くに面白い。時としては、書物の評論の方が、書物そのものよりも遙かに面白いことも少くはない。これに反して、獨乙の評論は特に科學的なので、やゝ乾燥無味に陷り易く、決して佛國の評論と同樣な、廣い範圍の人々に訴へることができない。英國の評論家達は、佛國の法式に於けるこの教育的價値を認めたのである。して、ゴッス氏の如き評論家は、獨乙學者並びにスカンディネーヴィヤ學者として名聲を博し乍らも、しかも決して獨乙流の批評的分析法の感化にかぶれないやうに務めたのは、注目に値することである。さて、現世紀後期の英國評論文學は、殆ど全然佛國の影響によつて成つたものであるが、同一の影響は、他のいかなる方面に見らるべきだらうか。

劈頭私は佛國文學と現代英文學の一般的關係を語らうとする積りだと云つた。我々は佛國の感化をまた幾分、詩と小說の方面にも蒙つてゐる。しかし想像されるほど、左ほど多くはない。詩に於て今日の佛人は英人に敎へるものをあまり有たなかつた。何となれば、英國では詩は散文よりも遙かに發達してゐるからである。しかし現代ヴィクトリア朝時代詩人の作品には佛國浪曼派大詩人達の特徴が現はれてゐる——スキンバーンには澤山、ロセッティには少々、テニスンには殆ど皆無。すべての詩人中最も多く現代英詩に影響を

及ぼした詩人が、最も佛人から學ぶことの少かつた唯一の英人であるのは、珍異なことである。英詩として可能なる形式は、殆ど盡きてしまつた。だから、佛國形式の影響は多大となり得なかつた。佛國の詩から學び得るものありとすれば、感情の點であるだらう。して、佛人から學んだ詩人は、眞の英人的感情と一致しない或る感化を、その詩に現はして敢て意としなかつた。スヰンバーンの詩に特に色彩を帶びさせたボードレール及びゴーチエーは、官能の詩人であつた——その官能は英人の感情が普通排斥する種類のものであつた。英詩に於ける佛國の詩の影響は、ヴィクトリア朝の詩に於ては、頗る僅少であつて、主として色彩の濃厚と官能的魅力の方面にあつたと、いふことができる。

小說については、佛人は我々にいかなるものをも敎へなかつたやうに思はれる。この時代の英國の大小說家で、佛國の手本に從つてうまく書かうとしたものは一人もなかつた。勿論、ゾラ及び諸人の自然派は、英國の小說家に對して、その使命を有つてゐた。して、實驗は試みられたが、しかしいづれもあまり成功しなかつた。もしこの方面に於ける佛國の感化を語りうるとせば、それはただ理論の感化——寫實主義の理論——であつたと云ふことができる。加之、現今英人によつて文學的な小說が書かれなくなつてきたのは、顯著なことである。佛國の小說を取つてみると、有名であらうと、あるまいと、それは立派に

書いてある。文體がいつも美くしい。しかし英國の出版書肆から、十二月中に――卽ち來月――千五百の新著が出ることになつてゐても、その全部の中に、一冊の美しく書かれた小說があるだらうかを私は疑ふ。小說は增加しつつあるけれども、價値が墮落しつつある。もし英國の小說作家が、佛人の制作に倣ふやうに至つたなら、實際至極結構なことであらう。困難は金錢の點である。英國で小說を作ることは、一個の金儲け商賣となつた。また公衆は文體の如何を顧みない。大小說家で文體を有つてゐたのは、スティヴンスンが最後であつた。

が、別の方面に於て、佛國小說は英國の小說に影響を及ぼしてゐる――短篇小說の方面で。諸君は奇異に考へるでせうが、極最近まで英國の讀書社會は、英國の短篇小說を好かなかつたし、また英國の出版書肆は、それを發行することを欲しなかつたのは事實である。しかもその同一の社會が、數千部の佛國短篇小說を購ひ、樂しんでそれを讀んだ。恐らくはただ佛人のみが、眞にこの種の優秀な小說を書き得るものと考へられたのであらう。その考は全く誤りであつた。多分いかなる英國の現存作家も、ラドヤード・キプリングを除いては、佛人の如く巧みに短篇を書くことはできないだらう。しかし現今では、短篇に對する要求が段々增加して、幾多の敏腕なる作家が、この方面に於て、しかも文體の點さへ、

佛人を模倣しようと試みてゐる。しかしこの變化が如何にして起つたかを觀察すると面白い。佛國文學はこの點に於て直接に英文學に感化を與へないで、米國文學に感化を與へた。米國は最初この影響を受けた。ポー、ホウソーン、それから後になつて、ブレット・ハート――これら諸作家の著書は、餘程佛國作家に影響されたので、遂に果實を結んだ。非常に夥しい短篇物が、一八六〇乃至一八七〇年後、米國で出版せられ、その內、傑作は英國で好評を博し、やがてスティヴンスンや、キプリングの短篇小說が興つた。それより以前に、ヂッケンズや、リットンの如く、英國作家にも驚くべき短篇小說を書いたものもあつたが、公衆がそれを讀んだのは、ただ既に同一作家の小說にお馴染であつたからに過ぎなかつた。私は記憶してゐるが、千八百七十年代の始め頃、ゼー・セリダン・ル・フェニュー作、「渡り鳥」"A Bird of Passage" by J Sheridan Le Fanu といふ頗る美はしい小話が英國で出版された。それは英國では閑却されたが、米國の一般社會はそれを面白がつた。さて、我々は短篇小說を排して、小說を取るといふ英國の偏見が、今や破壞されつつあつて、しかもこれがまた佛國の影響に因るのだといふことを明言し得るのである。

斯くの如く、我々は佛國の影響を評論の上に認め、また少しばかり詩にも、小說にも認める。しかし文學の他の部門に於ては、英人はまだ餘程その隣人よりも遲れてゐる。戲曲

ては、佛國は斬然卓越してゐる。實際佛國戲曲は絶えず英國劇壇のために飜譯されつつある。一方この期間、舞臺に演出し得る種類の偉大なる劇は、まだ英國に現はれてゐない。それから まだ佛人が大いに英人に教へねばならない、今一つの文學の部門がある——小品(スケツチ)、即ち觀察描寫の隨筆(エツセイ)である。この點に於て、我々はまだ遠く及ばない。

譯者註一　エドワード・ギッボン（一七三七—一七九四年）は、有名なる『羅馬興亡史』の著者。ここに『偉大なる讀書力と讀書の消化力』の實例として擧げてある通り、彼の自傳の文句によれば、十五歳で牛津大學に入つたとき、『博士をして三舍を避けしめたほどの博學』であつた。また、その浩瀚なる羅馬史が、今日の進歩せる史學も、未だ大缺點を指摘し得ないで、カーライルが嘗てエマースンに語つた如く、依然として『舊世界から新世界へ架せる壯麗なる橋』として、聳えてゐるのは、萬卷を讀破した彼の消化力のいかに强大であつたかを證明する。

譯者註二　ヘンリー・ハラム（一七七七—一八五九年）は、英國の史家、中世紀研究の權威。ここでは、『すばらしい記憶力』の實例として、マコーレーと並らべて引用してある。

譯者註三　イポリット・アドルフ・テーヌ（一八二八—一八九三年）は、佛國の評論家、史家、美學者。彼の『英文學史』は、觀察鋭利、文體優麗、また外國人の著書としては、最も同情に富んでゐる。彼はサント・ブウヴの衣鉢を繼いだのであるが、彼の評論は、環境を高調する事最も甚だしかつた。ここに『彼はその方法を稍々一方に偏して用ひる傾向に陷つた』とあるのは、それを指す。

譯者註四　トマス・ホッブス（一五八八—一六七九年）は、英國十七世紀の哲學者。國家主權說を唱道した。

譯者註五　ベルナール・ド・マンデヴヰル（一六七〇—一七三三年）は、もと和蘭生れの醫者で、倫敦に來たつて開業した。『蜂の寓話』といふ諷刺的の著述がある。彼の說は、道德を一種の利己主義に歸してゐる。

譯者註六　トマス・カルー（一五八九—一六三九年）は、英國チャールズ一世時代の宮廷詩人で、戀愛抒情詩の作家。

譯者註七　デ・タブリー卿（一八三五—一八九五年）は、人物も詩も優雅の香りが高かつた。やさしいその性行を忍び、その珠玉の如き作品數種を、更に銀盤の上に盛つたやうに擧げて、鑑賞的說明を與へたのが、「デ・タブリー卿の詩」と題する講義である。（本全集第十四卷參照）

譯者註八　ブレット・ハート（一八三九—一九〇二年）は、カリフォルニヤ新開地の自然と人物を寫せる輕妙且つ哀婉なる短篇によつて著はる。

文學的團體の功過に就て

私はいろんな場合に、文學的團體の功能について意見を陳べることを求められ、またそれに加入をも勸められたことがあるから、この問題に關する私の信念を表する短い講義をすれば、諸君の參考になるだらうと、思つてゐた。諸君が是非、私の意見に贊成せねばならぬといふことは決して無い。しかしその說は私自身の經驗よりは、もつと優れたもの―眞に賢明な人々の經驗と教訓―に基いてゐるのだから、それについて考へてみる價値があることを、乾度諸君は見出すだらうと、私は考へる。そこで先づ、私は大抵の文學團體の存在に對してひどく反對であるといふこと、またかやうな團體は靑年能材の士を大いに毒する場合があると、私は信ずるのだといふことを陳べて置く。

ハーバート・スペンサーがその『社會學』に特に主張してゐる、一つの一般的原理がある。それは經濟界或は産業界と丁度同樣に、文學界にも適用ができる。その原理は斯うだ

――苟も一個人で頗るよくできることは、社會がそれを企ててはいけない。尤も一個人が行ふよりも、社會がそれを行つた方が、仕事を大いに改善し得る場合は格別である。諸君の知つてる如く、社會學者は、私設會社と國家經營の場合に於ても、私設會社の方が、いつも立派な仕事をするといふことを懇々指摘して倦まない。無論、競爭と關聯せる一層大きな社會問題は、私の論域以外である。ただこの一般的原理は、あらゆる形式に於ける、人生の事業について詳說しようとは思はぬ。私はただ諸君の注意を促しただけで、それについて詳說しようとは思はぬ。ただこの一般的原理は、あらゆる形式に於ける、人生の事業と努力に適用ができるといふことを記憶なさい。共同事業は、個人の能力でできないことを成就し得る場合にのみ價値がある。然らざる場合には、功能があるよりは、寧ろ害になつたり、或は事業の進行を阻害するやうなことがある。これに對する一つの理由は、甚だ簡單だ――共同事業は思想或は行動の個人的自由に都合よくない。諸君が群集と共に働く時、諸君は多數の意見に從ふやう務めねばならぬ。諸君は周圍の連中と協調して行動せねばならぬ。文學的獨創に取つて、かゝる狀態は、實際どんなに不便宜なものであるかを、我々はやがて首肯し得るだらう。

しかしあらゆる種類の文學團體を一切無差別に非難すべきものでないことを私は先づ云ひたい。或る文學團體は甚だ有用である。して、一個人では恐らく出來ないことを、文學

のために盡くして、大功績を擧げたのもある。例へば、英國では貴重な古本を編輯刊行するため團體が組織されてゐる。多分二十位もあらうが、古代英書刊行會はその一例だ。この會や、パーシー古書刊行會や、或はその他諸君が疑もなく耳にしてゐるだらう十數個の團體の事業は、一個人では誰も成し得なかつたであらう。かやうな事業は富裕の人でも困難とするほどな巨額の金と、且つ多大の勞作を要するので、到底一個人の力の及ぶ處ではない。さて、このやうな場合には、數百の人が醵金して事業を援助し、それがため數十名の學者が相提携して、一方面に向つて、彼等の努力を注ぐことができる。この種の團體が、甚だ貴重なものでないといふのは、愚かである。しかしその貴重なる所以は、ただ一個人の勞力てできないことを成就するからに過ぎない。

それから、また專門學校や、大學の中に組織された團體で、文藝、討論、その他すべて文章や雄辯の偉大なる藝術の初歩に對して、奬勵を與へる目的のものは、たしかに推賞に値する。その推賞すべき所以は、初心者に鼓舞激勵を與へ、奬勵なくては試みる自信なき種々のことをさせるからである。いかに多くの學生が、屹度最初大學の會から受けた刺激によつて、雄辯や詩や或は小說の方面に、自己の材能を發見したことだらう。彼はとても演說はできないものと、自分で思つてゐたのが、或る日非常に氣は進まないけれども、同

意に強ひられて、止むなく演壇に立つた。すると、その結果は、彼が不可能と思つてゐたことを、儕輩以上立派にやつてのける資格あることを證明した。多くの方面に於ける最初の試みはかやうなものである。多數が我々を強ひて、試みさせる。して、かゝる場合、多數の勢力は個人の力を發展させることになる。しかしかやうな會の價値は、全くそこに存するので、そこに始まつて、そこに終はるものと、私は矢張り云はざるを得ない。この種の驚くべき會が、世界のすべての優れた專門學校や大學にある。して、それは材能の若々しい芽を助長し、初めての文學的及び藝術的名譽心を發展させる。しかし幾ら立派な會からでも、決して偉大なものを産しない。その會は未熟者を扱つてゐる。例へば、英國のえらい大學の學生輩が出版した最上のものでも、大抵やゝ未完成を免れない。この種の共同によつて、文學的名譽心に與ふるに、一種の健全なる刺戟を以てすることができる、といふことを承認すれば、我々は最早殆ど許容し得らるゝ限り許容した譯である。

一たび個人の知力が芽を破つて、發展すれば、その瞬間から學會や、團體の勢力は利益とはならないで、阻害となる惧れがある。最初の努力を強制し激勵した、その同一の團體的意向は、大概屹度一定の程度を越えてからは、進んで發展を遂げることに反對を表する。最初の奨勵は、次のやうな慫慂の文句で表はす事ができる。「我々と同様の巧妙振りを發

揮するやう務め玉へ』しかし後になつてから、同一の團體的意向は、必らず次の如く公言するだらう。『脫線的であつてはいけない。そんなに我々と異つた考へ方をしてはいけない。假令そんな風に考へるにしても、その說は納れられないのだから、發表しないで吳れ玉へ』勿論私は事實をやゝ極言してゐるのである。しかし上に擧げた第二の文句は、實際世間があらゆる種類の獨創的材能に向つて發する挨拶の形式である。世間は大學專門學校の文學會ほどに、そんなに自由寬大、且つ鑑賞的ではない。輿論は、獨創的材能が覗つてゐる殆ど一切の方面に關して、何はさて措き、保守的である。輿論は本能的に、一切思想行動の因襲的形式からの離背を止めようと試みる。しかも一定の大きさの、相當に發達した團體は、强度に輿論を代表するに相違ない。だから、それは發展させる勢力としてよりは、寧ろ遙かに抑壓力として働く傾向がある。だが、文學的團體に於て、文學上の個人的獨立と同人相互の奬勵の適當な狀態は、その會員の數如何によらねばならぬと、私は敢言しようと思ふ。して、私はその數を頗る少く決定せねばならない――あまりに少數なので、諸君は聊か私の說に對して喫驚することと思ふ。私が述べてゐるやうな種類の文學團體は、いつでも二人乃至三人より多數であつてはいけないと、私は考へる。三人の結合は、出來易くもあるし、また有益なことが實證せられてゐる。それ以上の數は、四人でさへも、私

は危險と思ふ。して、三人の結合は性質の類似せるものでなく、相異つたものの結合でなくてはならぬと、私は考へる。同盟の永續は、理想や意見の一致よりも、相互の尊重鑑賞如何によるであらう。だが、當然こんな疑問が起つてくる。「三人の仲間を文學團體と稱することができるか」恐らくは出來まい。しかし私は確信するが、文學上の目的に對して、それより大きな結合は、何等立派なことを成就しないだらうし、また經濟的補助を供するやうな目的を除いては、作るべきでもない。さて、私はその譯を說明してみよう。

　專門文士達の間に於ける經驗の示す處によれば、彼等が更に高尙なことを實現せんがために、眞に相互に助け得る方法、卽ち感化力は唯だ一つあるのみだ――卽ち、友情と同情である。眞正の友情は、心と心の間に完全の自由を得させる。卽ち兩者間に完全の率直、完全の理解、だから、完全の同情を成立させる。しかし人性の狀態に於て、假令性質一樣な人々の間に於ても、完全な友情は、澤山の人數へは滅多に擴がつて行かないのが常である。だから、この問題に關して、西班牙の諺がある。それは引用に値する――

一人は仲間ではない。
二人は神の仲間だ。

三人こそ仲間だ。
四人は惡魔の仲間だ。
Compania de uno, compania ninguno;
Compania de dos, compania de Dios,
Compania de tres, compania es;
Compania de cuatro, compania de Diablo.

さて、これは可笑しく思はれるだらうが、多くの西班牙の諺と同じく、實際賢しい諺である。何故といふに、これは三人以上の完全な友達仲間は、實際になかなか難いといふことを示すからである。四人が仲間となつた場合には、意見または感情の分裂が、大抵屹度生じてくる。といふのは、或る議論紛々たる問題が起ると、二人が相提携して、他の一人又は二人に向つて反抗し易いからである。諸君はこれを諸君自身の經驗に於ても、眞實と知つたに相違ないと、私は信ずる。要するに、高級な、眞に嚴肅な文學的目的の會合は、友情と同情の上に建てられてこそ始めて有益、且つ永續的であり得る。しかも理想的必要なる友情と同情は、三人以上の會合からは期待されない。

多分諸君はラファエル[譯者註]前派同人、及び他の諸結社のことを考へるでせう。しかし我々がこれら諸團體の充分詳細なことを知つてくると、彼等は事實に於てよりは寧ろ名目上、團體であつたことがわかる。ラファエル前派同人は、ただ三人づつの集團で存在してゐた。して、それらの集團が、長い時日を隔てては、折々互に接觸した。加之、三人づつを極めて細い糸で繋いでゐたのは、ただある用務上の必要であつた。諸君は英文學史に於て、殆どすべての偉大なる人は、孤獨な作家であつて、また甚だ少數の友人しか有たなかつたことを見出すだらうと、私は信ずる。たしかに、これが近代に於ける事實であつた。私の指摘したやうな方法以外に、文學的の團結が、眞面目な文士に取つて重要であり得る場合は、ありさうにも思はれない。

諸君は英米には幾千の文學團體あること、殆どあらゆる田舍の都市も、或る種の文學團體を有することを多分想起するでせう。實際横濱や神戸でも、外國商人輩は、所謂文學會を作つてゐることを、私は擧げてもよろしい。しかし是等の團體は、必らずしも文學を名乘つてゐるから、文學的なものといふ譯ではない。英國やその他に於ける文學會の評判に欺かれてはいけない。かゝる會は、普通の學者の念頭に浮ばぬやうな目的のために作られる。それは青年男女を一堂に會せしめたり、親達をしてその娘を結婚させたり、貧弱な音

業家や、小詩人や、人氣のある新聞雜誌記者に、幾らか社會的勢力を得させたりするため、全然社交的な目的で組織される。その團體がいかに大きくあらうと介意するに足らぬ。それが眞の目的なのだ。少しばかり音樂がある。少しばかり演說が行はれる。平凡な論文が讀まれる。それから、澤山の紹介が行はれる。世間の噂や、無駄話が賑ふ。これは文學といふ問題の單に平凡下劣な戲弄に過ぎぬ——それは見せかけである。しかも私は今、そんな連中よりは、もつと優れた人々、教育ある人々に向つて語つてゐるのだ。大學の人は、文學を眞面目に考へねばならないから、彼は私が述べたやうな馬鹿らしい種類のものに興味を持つことは出來ぬ。また彼に取つてそんなものは、唯だ馬鹿らしいものとして存在し得るのみだ。眞正の作家はかゝる團體に煩はされない。

さて、以上を總括して申せば、大學や、時として大學以外に、組織さるゝ眞面目な文學的團體は、こんな價値がある——人を一般の標準に上げる助けになる。さて、『一般の標準』は、普通を意味する。それ以外の何ものをも意味することはできぬ。しかし青年男女、卽ち多情多感の若い人々は、先づ普通の高さまで上つて行かねばならぬ。彼等は生長せねばならぬ。だから、かやうな團體は、青年に貴い奬勵を與へると、私はいふのである。しかし團體は、諸君が一般の標準へ達するのを助けても、それ以上へ上ることを助けるもの

ではない。だから、また何も充分な個的實力に達した人は、それから何等の利益を獲ることはできない。眞正の意義に於ける文學は、一般の標準に制定るものではない。一般の標準よりも遙か上に高く飛翔するものが、異常なるもの、並外れたもの、力強いもの、並外なものだ。隨つて、文學を專門としようとする大學卒業生が、文學團體に加盟するのは、恰も登山者が兩足の踝に巨大な石を結付けて出立するやうなものだから、彼はかゝる自縄自縛の愚を學ぶべきでないと、私は考へる。

しかし私は文學的團體の價値に異論を唱へたにも拘らず、白狀すれば私もまた一つの文學的團體に屬してゐる。が、それはこの種の中で、最も譯のわかつた、實際的な團體である。それには是非出席せねばならぬといふ會合も催されない。何等文學的製作の要求もない。他の會員を知るべき義務さへもない。我々は毎年醵金をする。しかも二十年間醵金をせねばならないが、報酬として何も受けぬ。では、そんな會の功用は何ですかと、諸君は尋ねるでせう。それは實際頗る有用である。幾千の作家がそれに加入してゐる。しかし滅多にそれを利用するものはない。その目的は、不正な出版者に對して著作家の利益を擁護せんがため、立派な辯護士を雇ふ金を備へることである。著作家は一般に甚だ貧乏で、實務の取引に於てその弱點に乘ぜられ易い。出版者に對して訴訟事件を起すといふことは、

十中の九まで、貧乏人には不可能である。しかし若し一千人の貧乏人が同盟して、各自毎年少額の出金によつて、何等それに對する直接の收益を望むことなく、權利と正義の維持を圖つて行けば、多大の効果があるだらう。實際、その團體は頗る熟練な法律家及び顧問を使用してゐる。もし一人の會員が不正の待遇を受けると、他の全會員がかくの如くにして協力擁護する。さて、かゝる目的のためにこそ實際團體は作られねばならない——個人が到底獨力で出來さうもないことを、團體がその會員銘々のために行ふといふだけで、その他の點に於ては、絕對の獨立が存してゐる。誰も會のために、自宅で時間や仕事を提供するに及ばぬ。何等文學的事業の計畫はない。すべての法律上の事務は、囑託の專門家によつて行はれる。この種の團體が、日本の著作家の利益を保護し、隨つて將來の日本文學の發達を保護するといふ一般の目的を以て組織されたなら、非常の効果があるだらうと、私は考へる。しかし左もなくば、三人以上の會員を有する、いかなる種類の文學團體も、大學卒業生に取つて價値あるものとは思はれない。

譯者註　ラファエル前派同人——ローゼッティー、ホルマン・ハント、ミレー等七人——は、一八四八年當時の英國畫壇の流風に反抗し、ラファアエル前に溯つて、一層單純にして自然的な理想に歸るといふ旗幟を飜した。

文學的天才（斷篇）

Great wits are sure to madness near allied,　非常な才子はいつも狂人に近い。
And thin partitions do their bounds divide.　才子と狂人の區別は、薄い壁に過ぎない。

天才が道德的弱點と幾分の關係を有するといふ證據は、たしかに甚だ多い。單に英文學のみでなく、すべての歐洲諸國の文學に於て、大詩人の名は概して不幸な生涯及び惡るい性行の物語と共に聯想されるのを我々は見出す。我々の近代英文學の講義に於て、コーリッヂ、バイロン、セレーの如き人々は、頗る薄弱な性格であつて、全然環境と調和を缺いだことを諸君は認めたであらう。して、これらの偉大なる三人は、同樣に非難される缺陷を有ち、しかも珍らしい文學上の技術を備へてゐた幾百の更に劣つた作家の代表的實例である。英國の戲曲史に於てさへ、優れた作家の大部分は、何うしても道德的といふ言葉を

用ひて、その人物を形容することの出來ない人々であつた――沙翁は顯著な例外である。佛國文學も、僅かに絞罪を免れたヴィヨン(譯者註一)の時代から、いくらか狂人であつたボードレールや、ド・ナーヴァル(譯者註二)の時代に至るまで、隨分これと同じ歴史を物語つてゐる。しかし恐らくは、狂人であつたり、惡人であつたりした天才の數は、想像さるゝほど多くはないだらう。我々がかやうな批評を處するに當つては、偏見をいつも考慮に入れねばならぬ。しかしカートンといふ人が、この問題に關して偏見のない批評を加へてゐるが、文學者に不利な論證が頗る有力である。

この論評は、伊太利の科學者、ミラン大學の教授、セザレ・ロンブローゾーの著書によつて起つた。彼は進化論者で、すべて彼の講義は、進化哲學に基いてゐる。その著『天才論』"The Man of Genius" に於て、彼は天才の性行について多くの事實を蒐め、これらの事實からして、天才は一種の發狂を意味し、常に肉體的並に精神的の缺陷を伴ふものだと推論した。天才はその行動の一般的性質に於ては、その時代の風習よりも進歩してゐないで、却つて昔の風習へ逆轉を示すといふことを、いかにも道理らしく、論じてゐる。社會に於ける犯罪者は、原始的野蠻人を表はし、文明時代よりも更に古い時代の本能と傾向が殘存したものに外ならないと、彼は考へてゐる。實際この問題に於て、彼の證據と議論

はなかなか有力である。しかし彼はまた、天才を道德的な型の人間よりも、幾分犯罪者に近いものと見做してゐる。彼の著書は忽ち獨逸の著者、マクス・ノルドーに刺戟を與へ、同一問題について評判嘖々たる一書を編するに至らしめた。ノルドーの目的は、大なる中流階級、即ち最も因襲的な階級の人々の氣に投じようといふのであつたらしい。この階級の人々は、天才を理解することは出來ないが、因襲に背き乍ら、えらい人から注意を惹き得るやうな人物について、非難攻撃が加へられると、大いに面白がるのが常である。我々の好かない人が、いかにも明敏であつて、多分我々には出來さうもないことを成し得る場合、我々は彼の優秀な材能は、或る悲慘な疾病の結果だと知つたり、信じたりすれば、一種の滿足を感ずる。平凡の人に取つて、自分より優れた人をけなすことが出來るほど、心地よいことはない。換言せば、ノルドーの書は、教育の足らぬ人々の、あらゆる偏見と卑劣に訴へたものである。だから、それは非常に賣れて行つた。今も猶ほ流行してゐる。社會の鈍物は、その書によつて、天才は大抵甚だ賤しむべき人物で、多分不道德な、且つ通常墮落した人物だと、充分に信ぜしめられてゐる。

ノルドーは科學者ではない。彼は單にロンブローソーの擧げた事實を惡用して金儲けをすることを知つた怜悧狡猾な雜誌記者に過ぎない。さて、事實そのものは何うだらう。ど

れだけの眞理をそれに認むべきであるか。私はスペンサーの『心理學』を參照せば、進化の件に關する限りは、全問題を解決したてあらうと思ふ。スペンサーの所謂、『天才の奇矯』は、實際二つのことを表はす。ロンブローソーの說は、主として一つに偏するがため、誤謬に陷つてゐる。天才の奇矯が表はす二つのことは、槪して高尙な方への發達と墮落——二つの正反對のもの——である。一般の天才は、往々一つの材能が他人よりも優れ、他の諸材能が劣つてゐる。その理由は、天才は、その有つてゐる身體の活力を、ひどく犧牲に供して後、始めて作られるからである。これについては、二三の理由がある。私はそれを最も簡明な方法で說いてみよう。

我々が科學上、假定を設けねばならぬ如く、劈頭先づすべての人は、一定分量の、生命力とでも稱すべきものを備へて生まれるものと假定しよう。生命力は人によつて可なり異るだらうが、一般的平均量があるに相違ない。假りにこの平均量は、普通體重百五十斤、身長五尺八寸、立派な素質と材能を有する人をして、快適なる境遇にあつて、八十歲の年齡まで生くることを得しむるものとしよう。この事實は充分理解し易いことを、諸君は認めるだらう。しかし生命力は、我々があまり知らない傾向、卽ち遺傳的傾向によつて影響される。この傾向のために、生命力が甲の方向よりは、乙の方向に一層多く活動すること

もある。活動すべき生命力には、一定の分量がある。その分量からして、澤山のものを作つたり、事物に差異を現はしたりする。

譯者註一　フランソワ・ヴィヨン（一四三一―一四八五年）は、佛國中世紀末の浮浪詩人。死刑の宣告を受け、減刑されて、幽囚四年の後、解放された。

譯者註二　ゼラール・ド・ナーヴァル（一八〇八―一八五五年）は、ゼラール・ラブルニーの假名。佛國浪曼派の作家。憂鬱の極、自殺の最期を遂げた。

トルストイの藝術論　（一二・一一・二六・夜）

昨年私は新らしい藝術論に關する簡單な講義をして、如何なる種類の藝術にしろ其の最高の形式は高尙な渴仰の念を起さしめ、自分を犧牲にしようと眞面目に願ふ氣持を起さしめる力を持つて居るものでなくてはならぬといふやうな意味の事を述べて置いた。私はかうした藝術の理想的な力を、氣高い心を持つた人が味ふ初戀の情緒的な力に比較して、氣高い熱情が及ぼす眞の影響は極めて道德的なものであり、それは自分を犧牲にしようとする慾望をつくり出すものであると言つて置いた。然しあの時私は之と全く同じ問題を取扱つたトルストイの有名な論文を未だ讀んで居なかつた。其の論文は私が他の講義で述べようと思つて居た幾多の眞理を强調して居るが、當今の著書でこれ程激しい論議をかもしたものはない。だから今日これに關する話をするのは極めて有意義な事だと思ふ。文學界にはどう言ふ事が起つて居るかを充分了解しておく事は大學生として必要な事であるが、さ

てトルストイの著書が世に現はれたのは（最初はただ雑誌の論説といふ形で發表されたのだが）文學上の大事件なのである。其の本は佛譯で「藝術とは何ぞや」と題されて居る。講義を進めるに先だつて、諸君に注意して置かねばならないが、どんな批評が加へられても其の爲めに其の論説に對して偏見を抱いてはならない。文學研究の學生が心得て置くべき事で何よりも肝腎な事は種々あるが其の一つは、自分の考へが他人の説によつて囚はれてはならないと言ふ事である。私は諸君に講義はするが諸君が今言つた法則に從つて、斯く言ふ私の説にも氣を許さないやうにして貰ひたい。單に私がさう言つたからと言つて、或る事を良いとか惡いとか考へないで、公平な氣持で讀んだり考へたりした上、私が正しいか間違つて居るかと言ふ事を諸君自身の頭で見付け出さうとしなければいけない。トルストイの場合では、非難が餘り甚だしかつたし、或る點に於ては酷評の論據が餘り堂々として居たので、私までが本を買ふのを一時躊つた程である。然し、藝術上の問題を取扱つて世の中の半數の人の怒りを買ふ事の出來るやうな本ならば乾度偉大な力を具へた本に違ひないと言ふ事を私はすぐ後で感付いた。實際、或る男を單に其の意見がどうのと言ふだけの理由で蔑したら、かへつてそれは其の男がどこかに直打があると言ふ立派な證據なのである。そして今、その本を讀んで見て、自分の考直した事が全く正しかつた事が解つた。

實に偉大な著書である。が、それには驚くべく謬見がある事に氣を付けなければならない。途方もない思ひ違ひて、苛酷な批評を當然受けるべきものがあるのだ。多くの偉大な思想家は偶々一方に長所を持つと同様に他方に於て缺點のあるものである。ラスキンは此の種の人物であつて、ギリシャ藝術がよく解らなかつたし、種々な方面でトルストイに似て居たが、ギリシャ藝術と同様日本藝術など、自分が解らない事は誹謗すといふ傾向を持つて居た。ギリシャ藝術に關する彼の見解の一つを見ると彼の才能がこれだけのものだと言ふ程度がはつきり解る。彼はヴィナス・ド・メディチが極くつまらない小ぽけな人物だと言つた。トルストイはこれ以上に極端な事を言つて居る。彼はシエーキスピヤにもダンテにも其の他何世期にも亘つて聲名を確保して居る人等に對して何等の好感も持つて居ない。彼は躊躇する事なく文學の總ての流派、繪畫の總ての流派、音樂の總ての流派を否定し去つて居る。若し彼の述べた間違つた點を其の著書から拾ひ上げて別にそれだけ全部を本に印刷したとして（かう言ふ事は既に或る批評家達がやつて居るが）其の本を讀むと、諸君はトルストイが突然氣が狂つたと思ふだらう。然し諸君はかう言ふ缺點を氣に懸けてはならない。偉大な人物と言ふものは其の過失によつて評價さるべきものではなく、只其の力量如何によるのみであつて、　隨分澤山缺點が有るにも拘らず此の本は何人にも新らしく

て高尚な方法で考へさせるやうな本である。其の上、此の本は極めて眞面目な、私心のないもので、著者は自分の作品さへも公然非難して居る。卽ちそれは彼の青年時代の驚くべき著書で、彼をして近代小說家の間に最高の地位を得さしめたものなのである。之等は藝術品でないと彼は今言つて居る。

彼のかう居ふ主張には總て或る一つの條件を具へて居る。トルストイも自分の非難する大抵の藝術は狹い意味に於ける藝術だといふ事に異議を唱へはしない。彼の言ふ所はさう言ふものが良い藝術でもなく、最上の藝術でもない、從つて讀めたものではないとする點である。此の點がはつきりして居れば、私は彼の主張を說明するのに大分說き出し易くなる。

彼が手を下した第一の論旨は大體次のやうなものである。古來大藝術と呼ばれて居るものの大部分は敎育のある人達でなければ解らないものである。諸君がギリシャの寶石や像の美しさとか、精巧な樂曲或は優秀な近代詩などを理解しようとするには、可なり高い程度まで敎育され磨き上げられなくてはいけない。近代社會が美しいと言ふ所の美が解るやうに訓練されなくてはいけない。民衆の中から一人の百姓を連れて來て、偉大な繪を見せたり、偉大な詩を聽かせたり、調子のよい音樂の大曲を聽かせたりして見なさい、そして

から言ふものに就いてどう思ふか訊いて見なさい。正直な男だつたら、村の教會堂の繪を見たり、乞食音樂師の歌を聽いたり、踊りの曲の一つも聽いた方がいいと言ふだらう。之は無論の事で、誰だつてそれは違ふとは言へない。

併しどんな國でも國民の本體、人類の大部分は、教養もなく富んでも居らず立派な者でもない。大部分は百姓や勞働者から成り立つて居て、一廉の淑女紳士ではないのである。教養ある階級は必ず僅かばかりで、國民の大多數は必ず勞働者に留まつて居る。それで藝術上の通例の約束や習慣に隨へば、藝術とは單に高等な教育を受けた者や富裕な者にばかり譯が解つて味ひ樂めるやうに出來て居るものだといふ事になる。從つて藝術とは少くとも人類の十分の九には何の役にも立たないものだと言ふ事になるてはないか。だが一體どういふ點で大部分の人類が劣等だと斷定されるのだ。彼等は實際劣等な人間だらうか、彼等は最も高尚な最も優れた情緒に動かされないだらうか。藝術家達が盛に言つて居るが一體此の最高最善の感情とは何の事か。それは忠節、愛、義務、謙讓、忍耐、勇氣等すべて民族の强さや美德を表はすものてはあるまいか。百姓は忠節も、愛も、勇氣も、忍耐も、愛國心も持たないだらうか。

言葉を換へて言へば、帝王や祖國の爲めには心から喜んで自分の生命を投げ出し、同胞

の爲めには自分を犠牲にし、危急の場合には勇敢な大働きをするし、平和な時には人の爲めに我身を捧げ、又あらゆる境遇に順つて行くといふ人間は、むしろ百姓ではないだらうか。本當に百姓こそ最も多くの人を愛するのではあるまいか。一番よい夫であり父であるのは誰だらうか。宗教を價値のあるものにした者は種々澤山あるが、その中で一番熱心な信者は誰だらうか。まことと正直な事を言へば、百姓こそ普通の貴族や富豪よりも道徳的に優れた人間である事を認めるのである。彼は感情的にも優れて居るし性格の力に於ても優れて居る。人間美と謂はれるものを吾々は何處に見つけるのか。毎日行はれてゐる種々な美徳の實例を何處に求めに行つたらよいのか。都會の金持連の周圍にか、それとも田舍の人達、つまり藝術の解らない人達の間にか。此の問題に對してたつた一つだけ解答があるが、それはラスキンがずつと以前與へたのと同じ答である。貧しい者は概して一番良い人達である。これこそ人間美だと言へるやうな聖いものを求めようと思つたら、貧しい人達の中にそれを求めなければいけない。情緒の中で凡そ高尚なものならどんなものでも其處に在るのだ。少數の者が惡い事をしたり馬鹿な事をしたりした所でどうかう言ふ程の問題ではない、大多數の人達は善良なのだから。

處が、大多數の人達は善良でありながら、藝術とは沒交涉である。然し藝術とは何であ

るか。藝術とは言葉や音調や色や形で以て情緒を傳へる力であつて、人々の感覺を通して眞理や美を感ぜしめる手段である。それだのに一般民衆には藝術が解らないと言ふ。さうなつて來ると吾々は彼等民衆が眞理や美の感覺を持つて居ないと考へざるを得ないではないか。人間の情緒の中で一番立派なものは民衆に在ると言ふ事を既に吾々は否應なしに認めて仕舞つて居るではないか。それで若しも民衆の大多數があらゆる立派な情緒を持つて居るとしたならば、又吾々の所謂藝術が彼等の感情や意志に感動を與へる事が出來ないとしたならば、何處に其の罪はあるのだらうか。それは民衆に在る筈はない。藝術の内に無ければならないのである。

かういふ議論からしてもう一つ別の問題――『吾々が今日迄大藝術と呼んで居たものは人類の最善の感情に訴へて居る』といふのは果して事實だらうかといふ問題が起つて來る。事實ではないとトルストイは大膽にも言ひ放つて居る。もしそれが事實ならば、それならば民衆は藝術に感動されるだらう。が、彼等はそれに感動されない、それを理解しない、それを好まない。之は藝術が立派な貴い情緒に訴へはしないといふあからさまな證據である。それならば何に訴へるのであるか。例の論文を見ると此の點に於けるトルストイの論評は最も手應へがあつて最も驚くべきものである、尤も時折間違ひが有るので論據が弱め

られては居るけれど。彼は言ふ、吾々が藝術と呼んで來たものは、官能主義や肉慾に訴へる所のものである。が、百姓は心が綺麗なのだ。彼は女の裸體畫にも樣々な格好をして居る露骨な影像にも氣を留めない、又情慾を唆るやうな小說や詩にも無頓着なのである。官能主義こそ誠に力弱いもので、申し分のない程强い人間は決して官能主義者ではない――彼の生活は頗る道に叶つて居り、頗る自然である。又こんな事を言つても構はなければ、彼は到底浮氣には成れない程極めて善良な動物なのである。大概の動物は純潔なものだ。所が西部歐羅巴の藝術、ギリシャ藝術、イタリア藝術、フランス藝術等は單に見る人の性的本能にばかり訴へて居て、皆其の時代々々を通じて猥りがはしいものだつたのである。勿論例外はある、が、藝術の意味を考へようとするのには大局から推して行かねばならない、私はトルストイの言つて居る事が此の點に於ては全く正しいやうに思ふ。そして誰も彼に反對する事は出來ないと思ふ。

　次に、文學に就て言はう。農民は立派な文學が解らないし、立派な文學も彼に何等訴へる所がない。彼は自分特有の頗る單純な、美に滿ちて居る文學――惻々人を動かすやうな歌や物語を持つて居るのであつて、どんな詩人でも賤しい百姓共の文學からこそ一番良い一番純眞な靈感を受ける事の出來るものだと一流の文藝批評家は認めて居る。農民には文學

的の情緒を感ずる頭がないなどとは言へやしない——それどころか、逆に、さう言ふ情緒を授けて與れる事も出來るし、教へても與れる。即ち英國にあつてはウォルター・スコット以後の凡ての英詩人に、又それ以前の多くの人々にも教へる所があつた。スコットランドの詩人中實に最も偉大な人は一介の貧しい農夫であつた。だから一百姓と雖も文學的情緒の最高の種類のものに決して門外漢ではないと言ふ事を吾々は認めなければならない。けれども立派な文學、教育ある人々の文學は少しも彼に興味を唆る事が出來ないのである。それ故、罪は百姓にあるのではなくて、藝術にあるのに違ひない。そこでかう言ふ事を考へて見よう、一流の文藝は貴い情緒を表現し教導すると考へられて居るのだが其の貴い感情の本性は何であるか。

此の點でトルストイは又々驚くべき論評を加へて居る。一流の大戯曲と言ふのは罪惡や、殺人、色慾、姦通、叛逆等、人間性にありとあらゆる恐ろしいものを主題とした劇である。所謂小說なるものは、その大部分は、讀者の劣情を微妙に昂奮させる目的で書かれた社會生活の物語である。吾々の詩も、その大方は、幾百年この方、男女間の愛とか、或る種の馬鹿げた感情を取扱つて居る。私は只トルストイの意見を極く簡單に述べて居るだけであるが、彼がかうして非難して居る中に堂々たる人の名を盛に並べ立てゝ居る事や、そんな

大それたまねをして居るのに拘はらず彼の言ふ事が如何にも正しいやうに思はれる事が解つたら諸君は嘸驚かれるだらう。それから次に彼はこんな事を言つて居る。「猥らな話や罪のからんだ話や贅澤な事を書いた話などては多くの正直な民衆に訴へようとしても迚も駄目だ、彼等の心に觸れる事は出來ない。彼等は極めて善良な人達だからそんなもの位で喜びはしないのだ」

トルストイは近代の音樂や其の他の藝術の枝葉に渉つて說いて居るが、今までの說明で充分解つて居るから私は委しく述べない積りである。彼の結論はかうだ。『若し藝術が感情を言ひ表はしたり傳へたりする手段であるとしたら、最も貴い種類の感情を言ひ表はしたり傳へたりするものこそ最も貴い藝術でなくてはならない。處で最も貴い感情と言ふのは凡ての人に分け持たれる感情であつて、本當の藝術は單に一部の階級に止まらず、凡ての人に訴へる事の出來るやうなものでなくてはならない。現代の藝術が大藝術でないと言ふ證據、それどころかむしろ悪い藝術であると言ふ證據は、一般の民衆がそれを理解出來ないと言ふ事で解る』

吾々は茲に二つの容易ならぬ反對論にぶつかる事になつた。

第一に、一般の民衆に偉大な藝術が解らないと言ふのは何もむつかしい理窟があるのお

やない、彼等が愚鈍で無智だからと言ふだけの事だ、と言つて仕舞へる。文學上の言葉が解らないのにどうして偉大な文學作品が充分解るだらうか。彼等は極く單純な物しか讀めない。だが立派な詩や小說を讀むには敎養ある者の言葉を知つて置く必要がある。敎養のない一般民衆は勿論解らう筈はないのだ。

トルストイは此の抗議に向つて頗る大膽に對抗して居る。所謂敎養ある者の言葉は偉大な藝術作品には用ゐてはならないと答へて居る。敎養のある者の言葉は、醫學の術語とか植物學の術語とか、又は種々な科學の專門語のやうに特別に造られたものであるから、偉大な作品は民衆の言葉、卽ち眞に一國の言葉であり國民の言葉である所のもので書かれなくてはならない。又、民衆に解らないやうな特別な用語で書いたりして文學を近づきにくいものにするのは自分勝手なよこしまな無法な事だと思ふと彼は言つて居る。更に、世界で最も偉大な書物は決して特別な文學語で書かれたものではなくて、一般民衆の普通の言葉が使つてあると言つて居る。之を說明する爲めに彼は偉大な宗敎書や偉大な宗敎詩、聖書や佛典など、特別な言葉を使はずに其の當時通用して居た國語で書き上げられたに違ひないものを引用して居る。大多數の人にはつきり解らないやうな文學を作るのは一體どういふ譯か、偏狹だからだと言ふより外理由が立たないではないか。同じ考を述べるのにも文

この一句、時々學者ぶる純美文學者を打つて痛烈。

學語で書き馴れた者には普通の言葉てはよく書き表はせないなどと言ふのは無意義な事てある。單なる演說位て大思想が發表出來ないと考へるならば、それは訓練が悪くて習慣が悪くて教育が間違つて居るからなのだ。今までに發表された最も偉大な思想や最も深刻な思想は宗教書の中に民衆の言葉て書かれてある。一口に言へば、トルストイの言はんとする所は文學教育のあらゆる制度が徹頭徹尾誤つて居るといふ事てある。此の中立に就いては考へて見る必要がある。

私はこゝに一文を引用して、藝術の不可解性といふ事に就いてのトルストイの意見を說明して見よう。

「ある藝術品が良い、そのくせ大多數の人々に解らない、と言ふのは、恰も茲に一種の食物があつてそれは良いには良いが、人類の大多數は食べないやうに用心しなければいけないと言ふのと同じやうなものだ。大多數の人は腐つたチーズや英國で [illegible] と謂はれて居る肉——卽ち獵で獲つた野獸の肉で少々腐つて來る迄放つて置いたもの——などを食べるのは確かに好まないだらう、その獸肉はひねくれた嗜好の人には頗る珍重がられて居るが。併しパンや果物は大多數の人々の口を喜ばせるのだからこればかりはよい食物である。さうして藝術の場合も之と全く同じ事だ。ひねくれた藝術は大多數の人間を喜ばす事は出

來ないが、良い藝術は必ず凡ての人を喜ばす事の出來るやうなものに定つたものでなくてはならない」

さて、當今大藝術と謂はれて居るものが一般民衆にとつてどの程度まで不自然に見えるかを説明した興味ある一文を引用して見よう。

『現代社會の誤つた説の爲めに未だひねくれて仕舞つては居ない人達、例へば立派な工匠や或は子供等の中には、どう言ふものを非難してよい又は讃めてよいと言ふ極くはつきりした考が、生れつき出來上つて居る。一般民衆や子供の本能を見ると、讃め稱へるものといへば正しく「偉大な肉體の力ばかりである」――例へばヘラクレスや英雄、征服者などの場合――「さうでなくば道徳の力を讃へるものだ」――例へば人を救ふために美も力も擲つたシャカ・ムニとか、吾々人類の福祉の爲めに十字架の上で死んだクリストだとか、聖人や殉教者の場合。かういふ考は一番圓滿な考である。單純で有りの儘な正直者は、肉體の力は尊敬するまいとしても無駄なものだと言ふ事を實によく知つて居る。肉體の力なるものは本來どうしても尊敬させずに置かないやうに逼るものだから。又彼等正直者は同じやうに道徳の力をも――即ち善い事をするため骨折る人間の道義心の強さを、尊敬しないで居られないのだ。彼等は道徳の力の美しさに自分の本心がすつかり惹き付けられるの

を自身感ずるのである。かういふ單純な心を持つた人達は、肉體の力や道德の力の爲めに尊敬される人達よりももつと尊敬される人が現に此の世に居る事を認めて居る――彼等はあらゆる力の強い英雄や道德の正しい英雄等よりも、もつと尊ばれ、もつと讃められ、もつと報いられる人達がある事を認めて居る。これはただ彼等が歌つたり踊つたり詩を書いたりする事を知つて居るからである。百姓には歴山大王や成吉汗(ジンギスカン)やナポレオン等が眞に大人物であつた事がよく解る。何故それが解るかと言へば、さういふ人物中の一人なら誰にしろ、百姓や大勢の仲間達を鏖殺しにしようと思へばする事も出來ると言ふ事をよく知つて居るからである。百姓は又、釋迦やソクラテスやクリストが大人物だつた事を承知してゐる。自分や他の多くの人々が彼等のやうに成らうと努めねばならないと言ふ事を感じもし知つても居るから。だが女の愛を取扱つた詩を書いた位の事でどうして其の人が偉いなどとは言はれよう。それこそ決して彼が理解する事の出來ないものなのである。

　別な所で、トルストイは尚一層面白い例を擧げて居る。彼は言ふ、一般の人達は天帝や天使や聖者や神や英雄等の彫像を見る事に慣れて居る。其の人達はかう言ふ像の造られた道理をよく辨(わきま)へて居る。然し色慾や絶望の詩を書いたバウドレイルのやうな人を表彰する爲めに像が建てられたと言ふ事を聞いたり、提琴の彈き方を心得た男を紀念するために像

が建てられたといふ噂を耳にしたならば、さうした事は彼等には全く奇怪千萬に思はれるのである。それは多分さうだらう。

私はトルストイの意見に對する第二の强硬な反對論に就いて考へて見た。それはトルストイ自身が意に留めなかつた抗議――哲學的の抗議である。當今では一般に、優れた智識は優れた神經組織と關聯したものとして考へられて居るのが常である。多くの人達は、一般民衆が高級な藝術の解らないのは彼等の神經組織が劣つて居るからだといふ事を言はうとして居る、確かにさうに違ひない。敎養のある人達や金のある人達に比べて、彼等は鈍感だ、だから美を感ずる事が出來ないのだと思はれて居る。彼等は、他所はとにかく歐羅巴では、穢くるしい嫌な匂ひのする所でみじめな狀態で暮らして居る。かう言ふ人達がどうして文明の微妙な藝術を理解する事が出來よう。多くの人々はかう言ふ風に說くだらうが頭のよい思想家は誰もさうは言ふまいと私は思ふ。實際の所、近代の歐羅巴では一流の思想家、一流の藝術家、一流の學者は實に農民階級から出て居るのである。百姓達の或る者は隨分苦しい中から自分達の子供に人並以上の敎育をさせてやつて居る。英國の堂々たる大學でもかう言ふ人達が最高の名譽のいくらかを贏ち得て居るのであるが、此の事實はスペンサーがずつと前に、健全な精神の土臺は健全な身體であると言つた言葉を證

痛快。

據立てゝゐる。神經組織の美的修養に就いてトルストイが何を言はうとしたか私は知つて居る。彼は鋭い感受性と謂はれるものは感覺過敏症――即ち、神經の病的狀態に過ぎないとあつさり言つて退けるだらう。然し此の問題はさて措いて、私は一つ眞面目な質問をして見よう。貧乏のどん底に居るそこらの百姓は、果して美に對して無感覺だらうか。或はどう言ふ種類の美を標準にしたらよいのだらうか。歐羅巴の藝術の標準は、人間の美を認める事が美に對する能力の最高の標準點だと見做して居る。平凡な人、民衆の中で一番平凡な無智な人は、人間美に對して無感覺だらうか。さうした人は、女の美しさを觀る眼が、すつかり藝術家になり切つた人より劣つて居るだらうか。さて私の述べる事を諸君はどう考へるか知らないが、私はかう言ふのを少しも憚らない。此の世で一番よく美を鑑識する者はそこらの平凡な人間であると。私はかゝる階級の人悉くが外の者より優れて居るとは言はないが、馬や牛を見て最先に判斷し最もよく判斷する人こそ實に、男なり女なりを一番早く一番よく判斷する人であると言ひたい。

　要するに、最も善く最も深いと言ふ意味で美しいとか雅かとか謂はれるものは、肉體の力を表はして居るのであるが、吾々よりも百姓の方が其の力をずつとよく知つて居るのである。百姓は人生を觀るのに慣れて居る、而も天性さうなのだ。美といふものは動物や人

間が強い力を出したり輕い動作をするのに一番都合のよいやうに仕組んだ骨組の、一定の釣合を指すのである。更に、美を取り除けた肉體を考へるとしたら、一體それは何だらう。それは力の節約だと言ふ事になる、卽ち、肉體とは出來るだけ少い物質を用ゐて出來るだけ多くの力が出せたり活動が出來たりするやうに造られたものでなくてはならない。動物を判斷するのに馴れた人が人間を判斷する事が出來ないなどと言ふのは全く馬鹿げた事である。事實かう言ふ人は、あらゆる鑑識家の中で一番優れた人であつて、滅多に間違ふやうな事はない。さて歷史を辿つて見ると此の事實を裏書きする珍らしい實例が、立派な一國の君主達の話に幾つもある。バグダッドの酋長が豪奢を極めてゐた頃、酋長は申分のない美人を探して自分の伴侶にしようと思つたが、その時彼は必ずしも地方の長官や貴族の家ばかりに出向いてさうした婦人を見付けやうとはしなかつた。彼は沙漠に住んでゐるアラビヤ人の許に出掛け、馬を飼ひ馴らして居る人達を訪ねて、若い女を探してくれるやうに賴んだ。最も名高い例はオムマヤッド家の第五世の酋長アブダル・マリックの話であるが、彼が普通の馬商人に美人の選び方を訊いた所、其の男は立ちどころに答へた。『婦人をお選びになるのなら足の格好がかういつたやうな者でなくてはいけません』——などゝ言つて身體中どこもかしこも殘らず說明し、又馬商人が馬の一番優れた點を說明するのと

すつかり同じやうに身體の中で一番優れた點を詳しく說明した。會長はこんな無骨な男が女性美に關して、自分に仕へる朝臣や藝術家などゝ較べものにならない程澤山知つて居るといふ事が解つて驚いたのである。此の事は生活――活動生活をよく知り拔いて居れば、どんな智識でも悉く其の奧義を摑む事が出來ると言ふ事なのである。私はいつぞやアメリカで今述べた生活をよく知り拔くといふ事が他の方面でも效が上げられると言ふ珍らしい一例を見た。ある會合に色々な地方から人が集まつて居たが、其處へ貧乏此の上なしといつた風の男が入つて來て、會に集つて居る人の體重を誰のでもきちんと言ひ當てて見せると言ふ。斷つて置くが誰もすつかり着込んで居るのだ。何しろ洋服を着た男の體重を言ひ當てるのは隨分むつかしい話だといふ譯で、皆は彼が手際のよい所を見せたら褒美に何かやらうといふ事を承諾した。すると、男は小さな箱を取り出して地面の上に置き、皆に出て來てそれを跨ぐやうに頼んだ。皆が跨ぐと、彼は大聲で體重を告げるのだが、その體重はいつも彼の告げる通り殆んどきちんと合つて居た。後で私はどうしてこんな世にも不思議な事をするのか彼に訊いて見た。彼は答へた、「あなた方が足をお擧げになつて箱をお跨ぎなさる時、上腿の前側の筋肉の大きさと輪郭を見る事が出來ます、それで私はどなたの目方でも解るのです」これは自然の觀察といふ事が何を意味するかといふ好い例である。

さて此の論文の本題に立ち還つて講義を終るとしよう。私は此の論文が諸君に何かしら考へさせるものがあるだらうと思ふ。そして私が度々主張した一つの事柄、卽ちやがては日本の作家が普通の人の話す言葉で文を書くやうになるだらうがさう言ふ時が來るのが早ければ早い程、日本の文學の爲めにも良いし現代の智識を一般に行き渡らせるにも好都合だと言ひ放つた事が決して間違つた考でない事を此の論文が必ず確めてくれるだらう。私は此の本が非常に偉大な立派な本だと思ふし、又始めから終りまで本來誤りのないものだと思ふ。其本には間違ひもあるにはある――例へば、トルストイがキップリングの事を民衆には解らない原來不明瞭な作家だと言つてゐる如きがそれだ。所がキップリングは端なくも民衆相手に話す人に外ならなかつたのである。彼は彼等の國の言葉を用ゐて居るのだ。かうした些細な間違は、外國人の事を充分に知らない爲めであつて、少しも此の敎訓に含まれた道德の價値に差し障るものではない。ではあるが、よく考へて見た上で改正するなどといふ事は勿論迚も不可能である。私はトルストイが全く正しいと信ずる者ではあるが、彼の說を丁寧に守つたら私は諸君に講義する事はできなくなる――私は此の大學では自分の務めを果す譯にいかなくなる。もしそんな事をしたら、英國の文學で名高い何百冊と言ふ著書は皆根本的に惡い本であつて少しも讀む必要はないと無理にでも言はなければなら

ない事になる、然るに實は私は今言つたやうな著書の文學的價値を諸君に指摘する目的で事に當つて居るのである。

○トルストイの『復活』について（一二、一一、二六、夜）

何か書物に關する講義をまた始める前に、私共はその單調を破るために、目下世界中でその噂をして居る驚くべき書物について少し話す事にしよう。個々の文人に對して特別の講義をする外に、現今の文學上の大きな事件――少くとも何か重大なる道德的或は社會的の意義をもつて居るやうに思はれる物――について折々話をする事がやはり私の義務と信ずる。諸君は大學敎育を受けて居る間に、こんな文學上の事件に注意して、それに關して相應に正しい豫測と判斷をするやうな習慣をつける方がよい、將來の見込は現在の出來事で――少くとも文學界では――なされるからである。

メレディスの書物に關する私の以前の講義で、私はあらゆる改革者――新思想をもつたあらゆる人、と附加してもよからう――が出遇はねばならない困難について、相應に詳しく述べた。新思想の人々はいつも困難に遇ふ。同時に又非常に古い思想だが、眞理であり

ながら、時代の思想或は社會の現存傾向と相容れないやうな、そんな思想へ歸らうとして困難に遇ふ事もある。トルストイ伯は後者の實例である。私は前の講義で、小說家としての彼の大きな能力に關して話した、しかし私はその時は特に彼の青年時代の作について云つてゐたのであつた。今度は彼の老年時代の作について話したい。諸君は、ツルゲニエフについいて、彼はロシヤの最高の文藝の代表者である事を覺えて置くがよい、そして或は結局彼がツルゲニエフよりも偉大であると判斷されるやうになるかも知れないと私は考へる。それからロシヤの散文學について云へば、分量は少いが、品質ではどこの國の文學にも劣つてゐない、フランス文學にも劣つてゐない。ロシヤの文人はフランスの文人のやうに形式の大家であると云ふ意味ではない、彼等はそれにはなれない。しかし人生を描いて、讀者の最良の情緖を動かす技術では、全く彼等は殆んど比類がない。

晚年になつて、諸君の知つて居る通り、伯は伯の流儀で非常に宗敎的になつた。彼は彼自身の一種のクリスト敎を作つた――クリストの敎を實際生活の行爲に適用する、詩的クリスト敎とも云ふべき物であつた。諸君は或は現在ロシヤにクリスト敎の非常に澤山の宗派があつて、政府を困らせて居る事は、前世紀に英國と米國のクェーカー派の人々がその本國政府を困らせた事以上である事を知つて居る。諸君はロシヤ政府とはどんな物かを知

つて居る、それからロシヤで、人が非軍國論者であると公言する事が、その人に取つてどんな意味になるかと云ふ事も知つて居る。それでもロシヤでは、年々政府に向つてそれをあくまで公言して、それに引續く罰を喜んで受ける數千の人がある。そして實際政府の方でも、罰する外には方法がない。數千の人が國外へ放逐されたが、宗派の數が續いて增加する。これで諸君はロシヤに存在する新しい種類のクリスト敎の事についての概念、しかしほんの極めて小さい概念を得るであらう。私が話さうと云ふ勇敢なる作者は今云つたやうな特別な宗派に同情は有して居るがそれに屬してはゐない。彼は彼自身で一つの宗派である。彼は以前父の代からの奴隷であつた農夫達を助けるために、彼の財産を全部與へてしまつた、それからこの頃になつて、その賣上高を慈善の目的に使用するために書物も書いた。餘程以前に、彼が始めて文學を棄てた時、あの偉大なツルゲニエフが、ロシヤ文學のために、小說に戻るやうに賴む手紙を送つた。そのわけは、彼はツルゲニエフよりも、近代の如何なる作者よりも、遙かに大きな程度でこの一つの能力――戲曲的能力、一冊の書物のページのうちに、數百のちがつた人物に、本當に考へさせたり、動かしたり、語らせたりする力、をもつて居るからである。しかし彼はその當時この氣高い忠告をきかなかつた。その後彼は道德上の事實を說明するつもりの短篇小說を重に書いた。しかし今彼は

たしかに小說に戻つた、そのわけは彼は何か云ひたい事があつたからであつた、そしてその結果は全く實に驚くべき物である。私はこの彼の最後の作は彼の若い時の小說よりも傑作であるとは云はないが、ただ私は、それがこれまで書かれた最も恐るべき、又最も感動すべき書物の一つである事を公言する。これに類する物は、この世紀の間に外に一冊も現れなかつた。或意味から、諸君はそれを宗教小說と云つてもよい、しかし、それは教義や教理と關係のある宗教小說では少しもない。それはただ高い觀念が何か惡い事をした人の心の上に及ぼした影響の話である。「宗教的」と云ふ言葉は、道德的感情即ち宗教と云ふ意味でのみ、それにつけられる。その書物を書いた結果、トルストイ伯は神の冒瀆者不信者として、彼の死後信者としての特權を與へられない人として、又その人の魂のために何人も祈つてはならない人として、ロシヤ正統の教會から破門される事になつた。諸君は、ロシヤに於て、少くとも、文學は風俗上の檢閱と宗教上の干渉との二つから決して自由になれない事が分る。しかし實はトルストイ伯の書物の犯罪は、それがただ偶然クリスト教よりも遙かにクリスト教的であると云ふ點にある。宗教的概念を改良しようと試みる事は、それを攻擊する事と同じく社會的には危險である。

この小說の主題は何だらう。或若いロシヤの貴族が未だ大學生の頃に、母の家で前後の

考もなく一人の女中を誘惑する。彼は彼女に子供を生ませる。あとで、彼は、自分が貴族だから、百ルーブルの金を贈れば充分の償ひになると考へる。それから何年か彼女に遇はない、その間に彼はできるだけ世の中を面白くくらす、そして世間の俗人と同じく利己主義な薄情な人になる。あとで、彼は或日刑事裁判所へ陪審官として呼び出される、盗むつもりで人を殺した、少くとも毒を與へたと云ふ嫌疑を受けた娼婦の罪の有無を決するためであつた。女は非常に綺麗である、そして彼女の顔は直ちにその青年貴族の注意を惹く。それから驚いた事には、彼はこれが母の家で何年か前に、自分が誘惑した女である事を發見する。幸福な母とならないで、今眼の前で彼が見て居る通りの者となつたのは、彼の故であつた。彼女に對して起された求刑はまちがひであつた、しかしロシャの刑事裁判の制度は未だ甚だ不完全であるので、彼はこの女の放免を得る事ができない。彼女は無罪だが、シベリアへ追放される事になつた。

それから彼がこの宣告を聞いて、彼は彼自身の道徳的不正がその少女にどんな結果を及ぼしたかと云ふ事――卽ち人の一生を全然破滅した事、肉體も精神も破壞してしまつた事が分つて來た。そして何故彼はこんな事をしたか。ただ利己主義な快樂のためであつた。彼はどうかしてその不正を償ふ事ができないだらうか。

或方法で彼は幾分彼女に對して償ひができる。今彼の道徳的義務は、彼が高い地位の貴族であり、それから彼女が殺人嫌疑の公娼であるにも拘らず——彼女と一緒にシベリアへ行つて、彼女と結婚して、彼女を善良な婦人にしようとして、一生を捧げる事であると彼は考へる。

諸君のうちでこの書物を未だ讀んでゐない人に取つては、ありさうにない分子がこんなところに現れて居るやうに見えよう。社會と云ふ方面では、十九世紀が少しも同情しない道徳の目的のために、進んで自分を賤しくする貴族を想像する事は少し馬鹿馬鹿しくはないか。この國では、或はこの話は殆んど不自然に見えよう、しかし歐洲の讀者には少しも不自然には見えない。實際、風變りの英國の貴族でこれと同程度に妙な事をやつた人々のある事は、現存者のうちに未だ覺えて居る人がある。非常に同情に富んだ高尚な性質の人で、自分の過失の結果を充分に認めたために悔恨の念に驅られて、その上最もよい意味で、宗教的である人なら、この小説家が書いて居るやうな事をたしかに企てる事ができよう。よい心の人はどんな犠牲でもできる。しかし、もし諸君がこの小説を讀めば、殊に英語より多くの點に於て遙かに優れて居るフランス語の飜譯で讀んだら、その話はいかにも本當らしいと感ずるもう一つの理由を發見するだらう。それは單に小説ではなくて、個人的經

験の記録であると云ふ事實を認める事を私は云ふのである。その書物を書いた人はその話を想像したのではない、彼は彼の語る事を悉く見たり感じたりした、彼は彼自身の過失の話とそれを償はうとする彼自身の努力の話とを私共に話して居るのである。

この書物の始めの方の章にあるよい文句のうちに、誰でも他人に損害を與へる人は、償ひをしようとして見るまではその損害の範圍が如何に廣いかどうしても分らないと云ふのがある。この小說の青年貴族は始めからこの事實に出遇ふ、そしてその强さ深さが分つて驚く。正しい事をしようと望むのは實に結構だが、さうする事は想像程容易ではない。女のところへ行つて、『惡かつた、赦してくれ、自分の妻になつてくれ、自分には富も勢力もある、お前を保護して、幸福にして上げられる』と云ふ事は極めて簡單な事のやうである。しかし彼が實際かうする時に、彼は凡ての社會、凡ての法律と戰つて居る事に氣がつく。女を誘惑した時は、彼は知らないで、强者のために弱者を押し潰す大きな社會組織の機關の一部となつて働いてゐたのであつた。凡ての誘惑者はその奸計によつて、實際社會の殘酷な野蠻的な力を助ける。彼は社會の利己主義な惡い物のために働いて居る。社會は彼を助けて不正を働かせる、それからあとで、その犧牲になつた者を、望みのない不幸の沈默と暗黑の中へ押し潰してしまう。しかしその不正の償ひをする助けはしない。決して

しない。彼がさうしようとすると、社會は道德の名に於て、常識の名に於て、彼に反抗する。さうなると、社會に取つては、彼は敵、馬鹿、普通の尊敬に値しない人間、になる。

それで、その貴族がその不幸なる地位から女を救ひ出さうとすると、世間はただ彼を嘲笑する、法律は彼に反對する、そして彼の友人は彼が屬する社會を厚顏にも侮辱せんとする人に對するやうに侮蔑をもつて彼を見る。喜んで彼を助けさうな役人までも、彼の動機を少しも理解しない。ただ彼に同情する人は、彼は肉慾に驅られたと思ふ人々である、彼に取つて、こんな色々の誤解を忍ぶ事は少なからず勇氣を要する。そして彼は最も異常な境遇の下に異常な場所で、その色々の誤解を忍ばねばならない。彼は監獄の役人のところへ行つて、殺人の嫌疑を受けた女と結婚したい事を說明せざるを得なくなる、彼は又彼等に彼の身分——彼が生れた種族の恥辱になるやうな、公爵である事を說明せねばならない。彼は監獄で囚徒や重罪犯人と一緒になつて、そこに行はれて居る恐るべき境遇に身を任せて行かねばならない、彼は色々の種類の侮辱を受けねばならない。そして、結局、彼が凡てこんな事をその女のために忍んで受けて居る肝腎のその女は、全然彼を輕蔑する——彼を罵る、彼を嘲る、彼の助けを拒絕する。彼の望みの綱は、ただ忍耐と親切で彼女の憎惡を和げる事であつた。そこで彼はシベリアへ彼女について行く。彼は實際彼女の判決を棄

却して貰ふ事ができる、そして監獄から彼女を放免する。しかしその時彼女は彼と結婚する事を拒んで、外の男と結婚する。それが全體の話の大要である。そのすぐれた技術は、その色々の人物の情緒の解析と、ただ一つの利己的な行のあり得べき結果、及びその行を訂正するに當つての非常な困難について、それが與へて居る不思議な例證である。この小說のうちに、數百の人物――本當に生きた人物――が居る、それは寫實であるに相違ない、そしてそれは如何にも眞に迫つて居るので、讀者はロシヤの話である事を忘れる程である。どこの國でも人間の性格は皆同じ種類の物である。もしトルストイが戲曲の方面に手をつけたら、どんな大戲曲家になれたらうと思はざるを得ない。

その書物の文學的事實はそれだけである。教會を怒らせた事は、その書物の技術と關係はない。怒らせた事實は、作者が本當のクリスト教の教義――昔のクリスト教徒が考へた人間の愛の教義、そして或理由でロシヤの現代の教義上及び政治上のクリスト教と反對の教義――を述べようとした事である。こんな書物の中に破門の理由を發見する事のできる檢閲官は、やはり始めからそのつもりであつたに相違ない。何故なればその破門宣告の重なる原因と云はれて居る物は、トルストイがエス・キリストを『ただの人』であるやうに云つたからである。しかしこれは教義上の理由として與へられたのではあるが、その憎惡

の原因はどこか外にあるに相違ない。そしてそのどこか外の原因は遙かにもつと重大な事であつた。それは作者が、教會の大きな機關は正義を保護すると同じやうに、度々不正を保護する事に慣れて居る事、それから教會の上流の間にも、その教會の肝腎な義務に對して政略的に無頓着なところがある事を、示したその態度に外ならなかつた。結局、作者は他の如何なる方法によるよりも、破門された方が實際最もよく彼の目的を達する事を得たのであつた。

　しかしながら、この甚だ恐るべき、そして驚くべき書物に諸君の注意を惹くに當つて、私はスペンサーの弟子として、諸君にこの社會論の書物は科學的考察には堪へない事を告げるのは、私の義務である。この點に於てはこの作は確かに不完全である。たとへば、社會の凡ての階級を通じて完全なる同胞愛を實行する事——監獄の廢止、刑法の廢止——こんな事を實行する事は、現在の人間の狀態に於て可能であると云ふ事は誤つて居る。この書物の到るところに、私共は疑はしいそして驚くべき部分的眞理を見出す——例へば、人生の不幸の最多數は、同情もなく、愛もなく、ただ利益の動機だけで人に近づく事から起ると云ふ說の如きはそれである。作者の云ふところでは、もし諸君が人を愛し、愛の精神てのみ、人に接したら、諸君は不幸にはならない、しかしもし人に交はつて、彼等を愛し

なければ、愛なくして彼等と商賣をすれば、さうすれば最も恐るべき不幸がその結果として來る。これは美はしく聞える、そしてそのうちに多くの眞理がある、しかしそれは決して全部の眞理ではない。現在の人間の性質は、宗教によつても、教育によつても、法律によつても、或は又如何なる手段によつても、こんな人生の方針を考へられるやうにする事もできない。それでこの書物はそれ程著しい又それ程迷ひのやうな言葉で滿ちて居る。しかし私が特にあげたやうな缺點はつまりこの書物の高尙な點である、それは少しもその作の疵にはならない、そしてこんな教訓を受け入れる事のできない人、それを見て微笑せざるを得ない人にも、最も注意深い考慮の價値ある事について、餘程高尙な風に考へさせる。

別れの言葉

學期も終りになつたから、この際私共がこれ迄て一緒に研究した事が、日本文學と關係して一體どれ程の價値があるか、それを考へて見る事がよからうと思ふ。その理由は、私がよく云つた通り、諸君に取つて外國文學研究の唯一の價値は（文學の意味を藝術的の意味に使つて）諸君自らの國語で文學上の作品を作る諸君自らの伎倆に、效果を與へる事の價値でなければならない。科學的論文のために書くのを例外として、フランス人が英語の書物を書いたり、ドイツ人がフランスの書物を書いたりしないと同じく、文學上の作品を作らうとする日本の學者も、自分以外の言語で、文學を作らうとして時間を浪費してはならない。それから日本語は凡ての點に於て歐洲の國語と全く違つた構造になつて居るから、フランス語、英語、ドイツ語の研究によつて、新しい形式と云ふ點で多く學ぶところがあらうと希望するわけには行かない。それで私は考へるにこれ等の外國語の研究の諸君に取

つて最も重要なる利益は、思想想像及び感情の方面でなければならない。西洋の思想想像感情から、將來の日本文學を豐富にし、强壯にする助けとなるやうな甚だ澤山の物を得る事ができよう。凡て西洋の言語が新しい生命と力を得るのは――絶えず得るのは――こんな研究によるのである。英文學は歐洲のみならず、全文明諸國に於ける殆んど凡ての他の文學に何物かを負ふて居る。フランス文學やドイツ文學についても同じ事が云へる――それよりも少い程度ではあるが、現代イタリヤ文學についても、亦同じ事が云へる。しかし元の草木は新しい肥料によつて變化されるのではなく、一層强くなつてもつと綺麗な花を咲かせるやうに、なるだけである事に注意すべきである。凡て外の文學から寶を取込んでも、英文學の本質は變らないやうに、將來の日本文學は、西洋の思想藝術からどれ程利益を受けても、純粹に日本文學として存せねばならない。

しかし、もし諸君が私に、その方での何か大變化を知つて居るかと尋ねられたら、私は『否』と云はざるを得ないだらう。私の考では、これまで外國文學から日本文學に澤山の飜譯と模倣と飜案があつたが、所謂本當の消化がなかつた。文學は創造でなければならない、生のままの材料を借用、模倣、飜案する事、これは少しも創造ではない。しかしさうあるべきは當然の事である。今は消化の時代である、後になつて外國の材料が文學の坩堝

の中で醸けて純粋に日本の材料になつた時に、よい結果が現れるだらう。しかしこれは早くはできない。

さて私はこんな變化と、新しい文學が起つて來なければならないと私が想像するそう狀態について、少し云ひたい。私は今では信じられないやうな餘程深い種類の非擬古主義の運動が起るべきだと私は信ずる。私は考へるに——最も珍らしい事から第一に云へば——創造的藝術の目的のために學者の言語は捨てられるだらう。私は考へるに、學者は今日無學な、或は下等な人々とさへ考へられて居る藝術家達と競爭するために、民衆の言葉を取つて その人の最高の、又、最有力な思想の媒介物となる事を恥ぢない時が來るに相違ない。かう云へば妙に聞えるかも知れないが、私はそれには少しも疑がないと思ふ。多分殆んど凡ての大學の學生は、意識して、或は無意識に、職業的噺家や、民衆の言葉で書く通俗脚本家の俗語文章を輕蔑する、しかし苟くも外の國々に於ける文學變遷の歴史で判斷すれば、將來の日本文學の源泉となる物は——これまでの文學よりもよい文學は——輕蔑された脚本と、輕蔑された通俗小説と、下等と云はれた民謡である。

シエークスピヤが脚本を書いた當時、シエークスピヤは甚だ野卑だと——とにかく普通の意見では——考へられた事は少しも疑を容れない。シエークスピヤの作は當時の外の脚

本よりも活氣のある事を感ずるだけに聰明な人も少しはゐた。それから諸君の知つて居る通り、英國では十八世紀に古典的精神が丁度日本でこれまでも强く、今日も强いやうに强かつた。「野卑」の非難、卽ち野卑であると云ふ非難は、誰でも今日見てもつと優れて居ると思はれる形式で書かうとする者に對して下されたのであつた。フランス、ドイツの大文學も古典的形式に對する革命を經て來なければならなかつた事はすでに諸君に話した通りであつた、その革命によつて、その兩國がこれまで出したうちの最も立派な詩及び散文の南方の作品を出したのであつた。

しかしその革命が西洋のこれ等の國々にどうしてできるやうになつたか、それを記憶せねばならない。それは民衆の賤しめられた口語文學の、注意深い、同情のある研究から始まつたのであつた。それは大學者が學問の玉座から下つて農夫や無學な人々と混交して、彼等の方言を語つて、彼等の簡素な、しかし深い本當の情緒に同情するやうになつたと云ふ事を意味する。學者が農家に住み込んだとか、或は大都會の貧しい人々の貧困と不幸を共にしたと言ふ意味ではない、ただその人が精神的に彼等のところに下つて――彼等に同情して――自分の偏見を征服して――彼等の無教育な性質のうちにある飾りのない善と飾りのない眞のために彼等を愛する事を覺えたと云ふのである。私は前に諸君に話したと考

へるが、昔のギリシャ文學の時代に於ても、ギリシャ人は殆んど同じ種類の事をせねばならなかつた。それてこの國の將來の文學は國民の大多數、普通の無學な民衆に對する同情と愛の上に多少基礎を置かねばならない事を私の眞摯なる意見として私は述べる。

そこで何故、又、どうしてこんな事が殆んど凡ての文明國に起つたか、その說明をして見よう。社會の自然の傾向は階級的差別を生ずる、それてどこでても最上流の社會の當然の傾向は保守主義——上品なる保守主義になる筈である。保守主義と排他主義にもそれ相當によい點がある、それて私はそれ等に對して少しの侮慢の意味ももたない。しかし保守主義はいつても固定、平板、硬い結晶に傾き易い。結局上品なる社會は、誰にても規則通りに行ふたり云はせたり——同一の風に思想感情を表はしたり抑へたりさせる。勿論人の心は規則て全然變へる事はてきない、ところが、こんな壓制な習慣がてきると、誰ても全く自然の方法て思想を發表し感情を吐露する事を恐れるやうになる。人生がひどく人工的になり、甚だしく慣習的になると、文學が亡びかける。その時に、西洋の經驗ては、そこに治療法が一つしかない、その亡びかけて居る生命を生かすには、慣習を脫して自然へ思ひきつて歸る事、一切の人間的の物が生じて來る土を結局代表する民衆の生命と思想へ思ひきつて歸る事の外には何物もない。國語が到底見込のないやうに規則て化石してしまつ

た時には、それを本當の源、卽ち民衆にかへして、それを風呂に入れるやうに、そこに浸して、柔らかにし、强くし、生氣を與へねばならない。どこでもこの必要が現れて來た、どこででも驕慢と偏見のあらゆる力で反抗された、しかしどこででもその結果は同一であつた。佛獨英、皆同じやうに、文學を完全にするための學問の源泉を悉く涸らしたあとで、文學が乾枯びて萎縮しかけて居るのを見た、そこで、それを學校の空氣から離して、無學な人々の文學によつてそれを復活させねばならなかつた。これがどこででも起つた事であるので、この日本でも起るにきまつて居ると、私は信ぜざるを得ない。

しかし私は正しい學問の價値を輕んずるやうなつもりは決してない。全くそれと反對。もし同情のある人であれば、俗語と無學な詩とを支配してよい結果に導く事の最もよくできるのは、正しい學問の人であると私は思ふ。たとへばケムブリッヂの教育を受けたが、テニスンは北部英國の農夫のむつかしい方言で、流行歌の調子で驚くべき流行歌や戲曲的な詩を書く事がやはりできた。實際英文學では偉大なる非擬古主義者で改良家たる人々は、全部或は殆んど全部、充分教育を受けた人々であつたが、しかし生れながらの偏見を征服するだけの藝術的精神をもつて居る人々であつた、そして彼等自分の階級の嘲笑を物ともしないで、飾りのない農民文學から、ヴイクトリヤ朝文學に、そんなに有難い性質を與へ

てくれた新しい美を引出す事に勇敢に努めた。實際、——馬で田舍を乘り廻して、最も貧しい人々の家庭に入つて、彼等と飮食を共にして、歌を歌つてくれるやう、昔の話をしてくれるやうに頼んであるいたサー・ウォルター・スコットの如きその一例だが——もつと進んだ者もあつた。その當時スコットを研究した者が澤山あつた事と私は想像する。しかしスコットが選んだそれ等の小さい農夫の歌が新しい英國の詩の先驅となつたのであつた。十八世紀文學の調子全體がそのために變化した。それ故私は、學問があつても無學な人々に同情する事を止めない日本のウォルター・スコットがそのうちに現れる事をたしかに敢て希望するのである。

この問題について、もう私は充分云ひつくした。私はただ義務の念から、敢てそれを云つたのである。私がこれから云はうとする事はただ文學上の著作に關係する事である。

私は想像するに、諸君の多數は、大學を出ると、諸君の時間の澤山を取りさうな何か職業に從事する事であらう。こんな境遇では、文學を愛好する多くの青年は、この方面の趣味を愚かにも止めてしまう、これ等の若い學者達は、もう詩や小說や脚本など作つて居る暇——自分だけて研究して見る暇などないと想像する。私はこれは甚だ大きな誤解であると考へる、それから私共に新文學——多分詩だけは例外であらう——を最もよく與へる事

のできるのは忙しい人であると考へる。偉大な詩には暇が要る、それから孤獨になつて考へるのに澤山の時間が要る。しかし外の文學の部門では、私は諸君に保證するが、西洋を通じて文人は大概、甚だ忙しい人に多かつたが、今もやはりさうである。官吏もあれば、郵便局の人もある、陸軍海軍の人もある（そして陸軍や海軍の人はどんなに忙しいか、諸君は承知である）、銀行家もある、裁判官も、領事も、知事もある、——少數だが商人もある。事實は、單によい文藝上の作品を作つて生活する事は誰にも殆んど不可能であるのと、文人は大概別に職業をもたねばならないからである。年々この事の必要は一層大きくなる。しかし文藝上の作品に關する原理は實際一時に澤山の事をしないで、規則正しい間々に少しづつする事である。私は諸君が如何に忙しいと云つても一日のうちに二十分か或は三十分だけの暇を作る事はできるだらうと思ふ。一日に十分だけ與へても一年の終りには澤山の時間になる。別の風に考へて見よう。一日に五行づつ文藝上の作品を書いて見る事はできないだらうか。もしできたら、忙しいと云ふ問題は解決してしまう。五を三百六十五倍して見る。それは十二ケ月になると中々の著作の分量である。一日に二三十行づつ書く事に決心したら、どんなにもつとよいだらう。もし諸君のうち本當に文學を愛する人があれば、私のこの僅かな言葉を忘れないで、毎日十分か十五分でも、少しづつ研究する

暇がない程忙しいと思はない事を望む。これで、さやうなら。

あとがき

小泉八雲先生が英文學の講師として東京帝國大學文學部に勤務されたのは、明治二十九年九月から明治三十六年三月までであつた。授業時間は一週十二時間、教科書を用ひたのは五時間、講義は七時間であつた。英文學全體に通ずる史傳評論とも云ふべき講義は、在職中内容は變つて居るが二回くりかへされた。その他文學に關する各種の題目についての講義は、毎週一定の時間に連續して行はれたが、それぞれ獨立した物で一回も同一の物をくりかへされた事はなかつた。先生は何等原稿らしい物を携へないで、ただ年代(デート)などを記入した粗末な小さな雜記帳をポケットから出して時々參考されるだけであつた。重い口から續いて出る絹絲のやうに、或は咳唾珠を出すやうに、先生の口から間斷なく流れ出る文章を一言も聞き洩らし書き落すまいとして、當時未だ萬年筆など云ふ物を知らなかつた私共は、インキ壺にペンを入れる暇もない程に忙しくペンを走らせたのであつた。その速力は筆記帳によつて察すると『文學と輿論』が三時間(一時間は約四十五分)かかつた程度であつた。即ち中版の洋罫紙の筆記帳にぎつしり書いた物が一時間に五ページ程づつ進ん

だのであつた。

この卷に集めた物は文學全體に關する物卽ち文學概論とも云ふべき物及び重に散文に關する物である。順序は講義がなされた順序でなく、譯者の勝手につくつた物に過ぎない。たとへば『別れの言葉』は最後の講義ではなく、明治三十三年學年末の物であるが、譯者はその名に因んで最後に置いたのである。試みにこの卷に集めた物のうちで、始めの分と後の分とを少しく云へば、『英文學に於ける聖書』『バークリー』『創作の方法について』『文學に關する讀書について』は始めのうちの物、『異常なる散文の研究』『中世紀の最も美はしいロマンス』などは終りに近い頃の物であつた。

この卷では『ヸクトリヤ朝の哲學』『新倫理』及び『アメリカ文學に就いて』の三篇の原文は未だ海外では發表されてゐない。讀者は『アメリカ文學に就いて』を讀んで、その忌憚なき批評、たとへばアメリカの詩歌に關する批評を見て、これがアメリカの讀者に逹しないやうになつて居る理由をさとる事ができよう。

大正十五年九月

田部隆次

第十卷文學論所載

講義題目

The Insuperable Difficulty.	西洋文學研究の難關
The Question of the Highest Art.	最高の藝術に就いて
On Romantic and Classic Literature in relation to Style.	文體上より見たる浪漫的及び古典的文學
Literature and Public Opinion.	文學と輿論
Studies of Extraordinary Prose.	異常なる散文の研究
The Value of the Supernatural in Fiction.	小說に於ける超自然的要素の價値
On the Relation of Life and Character to Literature.	生活及び性格の文學に對する關係
The Prose of Small Things.	散文小品について
On the philosophy of "Sartor Resartus."	「サートル・レザルタス」の哲學に就いて
The Bible in English Literature.	英吉利文學に於ける聖書
Berkley.	バークリー
Victorian Philosophy.	ギクトリヤ朝の哲學

小泉八雲全集第十巻飜譯分擔

落合貞三郎

西洋文學研究の範圍
最高の藝術に就いて
文學上より見たる浪漫的及び古典的文學
文學と輿論
異常なる散文の研究
小說に於ける超自然的要素の價値
生活及び性格の文學に對する關係
散文小品に就いて
英國現代の評論界に就いて
文學的團體の功過に就いて
文學的天才(斷篇)

土井林吉

「サートル・レザルタス」の哲學に就いて

金子健二

英吉利文學に於ける聖書
バークリー

大谷正信

ヸクトリヤ朝の哲學
新倫理
超人

稻垣巖

トルストイの藝術論

田部隆次

創作の方法に就いて
文學に關する讀書に就いて
「ハヴアマル」古代北歐の人生倫理
フランス浪漫派の人々
アメリカ文學に就いて
中世紀の最も美はしきロマンス
「シヤグパットの剃髮」
ロセッティの散文に就いて
トルストイの「復活」に就いて
別れの言葉

第十回配本

小泉八雲全集第十巻

第一回豫約菊判背革裝　大正十五年八月配本開始　昭和三年一月配本完了

第二回豫約菊判總布裝　昭和四年六月配本開始　昭和五年十一月配本完了

第三回豫約學生版　昭和五年十月配本開始　昭和七年三月配本完了

最初申込金五十錢（これは最後の會費に充當）
豫約者に限り毎月一圓五十錢

家庭版【第四回豫約】
昭和十二年九月十五日印刷
昭和十二年九月二十日發行

著作者　小泉八雲全集刊行會代表　田部隆次

刊行者　東京市麹町區三番町一　長谷川巳之吉

刊行所　東京市麹町區三番町一　第一書房
振替東京六四二二三　電話九段三三[illegible]

東京市牛込區山吹町一九八
印刷者　萩原芳雄

（家庭版）小泉八雲全集 全十二卷 内容

第一卷
異文學遺聞。
支那怪談。
チタ。ユーマ。

第二卷
佛領西印度の二年間

第三卷（上）
知られぬ日本の面影

第四卷（下）
知られぬ日本の面影

第五卷
東の國から。
心。

第六卷
佛の畠の落穂。
異國情趣と回顧。
日本お伽噺。

第七卷
靈の日本。
影。
日本雜錄。

第八卷
骨董。
怪談。
天の河緣起。

第九卷
神國日本。

第十卷
文學論。

第十一卷
きまぐれ。
クリーオール小品。
神戸クロニクル社說
隨筆八種。

別冊
小泉八雲。